

超次元に舞い降りし龍の名を持つ者

天龍神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ごく普通の高校生 鳴流神龍姫（なるかみたつき）は突然、事故に巻き込まれて、死んでしまう、神様によってゲームギョウ界に転生させられるのである

また幼馴染みたちも転生させられるのであった。

ツクヨミから次元探偵の職を与えられ、分子世界をまたにかけるのであった。

目次

プロローグ	1
始まりの時	3
出会い	5
戦いの火蓋	7
女神様との共闘	9
洞窟からの脱出	11
プラネテューヌ教会からの誘い	14
教会にて	17
いざ雪国へ	19
ルウイーにて	21
兇刃来る	23
白の大地に舞い降りし緑の女神	25
勝利の炎	27
温泉にて	29
ライブに招待されて	31
リーンボックスに這いよる魔の手	33
リーンボックス教会の掃除	35
リーンボックス教会の掃除 後編	37
プラネテューヌの秘剣!! 見参!	39
プラネテューヌの秘剣!! 見参の巻! 後編	41
龍姫の乙女心	43
ホームパーティー開催	45
戦いの予感	47

女神の危機	49
龍の敗北	51
パープルシスター 推して参る!!	53
絆の力	55
龍の女神の降臨	57
我、紫の龍の女神なり	60
霸王見参!!	62
女神たちの限界突破	64
マジエコノ又撃退	66
龍姫の真実	69
いすーんに報告するの巻	71
ネプ子!!妹になるの巻	73
もう一人の転生者	76
ラストイションに舞い降りしたもう一人の龍	78
星龍、黒の女神に会うの巻	80
黒の大地の危機の巻	83
龍の再会	85
黒龍の女神	87
紫と黒の日常	89
双子の転生龍	91
緑の大地に舞い降りし双子龍	94
緑双龍、リーンボックス教会にお泊まりの段	96
緑双龍、女神に会うの段	100
緑双龍、紫龍に再開するの巻	103
ベール!!緑双龍を妹にするの巻	106

162	ベール!!の危機の段
160	リュウオウ現る
158	プールにて
156	緑の大地の休日
153	白龍、女神の世話役になるの段
151	白い大地のキラーマシン殲滅作業の段
149	白の大地のキラーマシン
147	白龍の復活
145	白龍の危機
143	黒龍の女神ツンデレ女神の姉になるの段
141	冥王の女神参戦
138	ラストイション教会にて
135	キラーマシン死すの巻
132	天を統べる 魔王参上!!
130	黒龍の女神降臨
128	キラーマシン襲来
126	いざ、ラストイションへの巻
123	ネプテューヌのバリアジャケット
121	プラネテューヌの二人目の女神候補生
119	紫龍、実妹と再開するの段
117	舞い降りた紫龍の妹
115	白龍と紫龍の妹と黒龍の妹
113	黒龍と紫龍
111	緑双龍、決意するの段
108	緑双龍の初戦闘

黒との特訓	216
チカの覚醒	214
イエローハート登場	212
アブネス見参	210
チカの可能性の段	208
審判を超えし者	205
緑と紫の特訓	203
紫と白と緑のその日	201
白龍覚醒	198
白龍の決意	196
紫と白の夜	194
ハードブレイカー決着	191
ハードブレイカー見参	189
犯罪組織の影	187
龍姫たちの術技の段	185
ターゲット討伐の段	182
黒狼の女神	180
黒の女神のバリアジャケット	178
黒衣の断罪者	176
アイリスハート見参	174
ナス畑へ	172
天界からの報酬の段	170
ベール、謝罪するの段	168
リュウオウ死す	166
緑双龍の女神、見参	164

アノネデスの影	218
アノネデス、御用の段	220
ノワール!!の初めての料理の段	223
ガナツシユの策略の段	225
食堂にて	227
パッセの危機	229
客員剣士、聖王見参の段	231
ガナツシユ逃亡するの段	233
武装について	236
紫と白の朝食	238
白の女神の覚醒	240
白の大地で	242
白の宴	244
白と紫の特訓	246
浮遊島	249
キセイジヨ・レイ参上!!の段	251
さらば、キセイジヨ・レイ	253
夢で	255
夢の話	258
天照大御神からの報酬	260
暗黒と神癒	262
暗黒の女神と神癒の女神、戦闘するの巻	264
暗黒女神と神癒の女神 秘奥義を見るの段	267
暗黒女神と神癒の女神 術技を教わるの段	270
忘却の遺跡へ	272

暗黒女神と神癒の女神の乱舞	274
天王星の女神	276
天王星の危機	279
天王星との再会	281
天王星、保護される	283
覚醒メモリーについて	286
天王星、料理と術技	288
うずめ、秘奥義を覚えるの段	290
龍姫の術技の属性	293
うずめと鍋焼きうどん	295
うずめ、ラスティションに行く	297
天王星、黒の大地に舞い降りる	299
うずめ、食堂に行くの段	301
スライヌ大量発生	303
天津飯を作る	306
黒とうずめ	308
うずめ、白の大地に行くの段	310
白き大地の橙色	312
抜刀!! 研ぎ澄ませ!!	314
うずめ、白との特訓	316
ピコハン合戦!!	318
天王星 緑の大地	320
紫龍、ライブに出てくれの段	322
ライブ準備	324
ライブの打ち合わせ	326

ライブスタートの段

329

ライブ終焉

332

ライブの後

335

星光魔王と犬姫侍!! 見参

338

自由聖騎士の二人

342

うずめの買い物

344

乙女の時間

346

神次元編

紫龍の女神!! 神次元へ行くの段

348

神次元に上陸するの段

351

冥王星との再会

354

疑い晴らすの段

356

女神メモリー回収の巻

359

マジエコヌと双刃

362

神次元のボス戦

364

いつものマジエコヌ

366

誕生!! ブラックハート?

369

その日の夜

372

神次元のギルド

374

女神とは

377

神次元の白き女神

379

神次元ラステイションの国境にて

382

コピリーエース参上

385

コピリーエースの最後

387

天界上層部

390

統合編

突然の帰還

二人の黒の女神

二人の紫の女神

二人の緑の女神 《ベール》

二人の白の女神

再びの平穏無事

楽しいお買い物

決めろ!! 冥空斬翔剣!! &冥王麗姫!!

冥王の戦闘服

黒の双子と緑の真実の守護者

各国の事情

もう一人の黒衣の断罪者

統合されし白の大地に向かって

不適合者

魔物化

御神咲耶

炊き込みご飯

咲耶の・・・

採掘場

魔装斧 グランヴェール

新たなる転生者

二人の女神侍

翔龍との模擬戦

翔龍!! 連行されるの段

睽耶と刀夜討伐クエストを知るの段	460
睽耶と刀夜、女神について学の段	462
武士女神!! 黒の大地に	464
ジエツトセット山道	467
武士女神、シアンの実家の食堂に行くの段	469
鳳翼熾天翔と天界開通	472
天界開通編	
龍姫達の成長	475
天界の百貨店	478
天界百貨店ではじめてのお買い物	480
天界百貨店ではじめてのお買い物 後編	482
天界の市場	485
四ヶ国の室内大浴場	487
天界開通翌日	490
フエンリスヴォルフ再び	492
無想神烈閃!!	494
各国の日常の段	497
忘れていた企画書	500
閃光	502
一陣の風、天界に行くの段	504
アサシンブレード	506
魔王獄炎波!! 闇に飲まれる!! アイン・ソウ・アウル!!	508
分史世界編	
四龍の女神!! 外史世界に行くの段	511
分史世界のゲームギョウ界	513

遭遇!!ゲームキャラ	515
異変の真実	518
黒の・・・	521
灯	523
凛々の明星	527
外史世界の黒の大地	530
外史世界のクエスト	533
宝玉の有りか	537
第五回 エンシエントドラゴンの段	540
血晶を求めて	543
ネコントキャット	546
光翔戦滅陣!!	551
黒の銃姫	555
ブラックディスク	559
黒のゲームキャラの協力	563
ロム人質にされるの巻	566
分史世界の白の双子	569
分史世界のルウイー教会	572
白のゲームキャラ	575
外史世界のキラーマシン	578
ホワイトディスクの修復	581
分史世界のハードブレイカー	584
封印完了	588
紫龍と黒龍!! 定期船に乗り損ねるの段	591
飛龍!! マジエコンヌの手に墜ちるの段	593

外史世界の緑の大地	597
ケイブ参上!!	600
アンダーインヴァースに囚われし緑龍	603
グリーンディスク	606
壮麗なる!! 天使の歌声!! ホーリーソング!!	609
案の定・・・	612
漸毅狼影陣!!	615
白の大地 九割	621
ロリコン参上	625
間違った正義!!	627
決意の前夜	630
狂気のギョウカイ墓場	634
闘・魔神王剣!!	637
外史世界での再会	641
外史世界の女神の仕事	643
導く出した答え	646
分史世界の紫の女神とツクヨミ	650
大きな一歩!!	653
天羽々斬	656
分史世界の紫の女神の危機	659
転院搬送	664
天界総合病院	668
天界の最先端医療	670
紫の女神の復帰 黒の女神と黒衣の断罪者	672
外史世界の紫黒	676

神託の神子	680
神子と分史世界の緑	683
もう一人の霸王!!	685
やはり・・・	689
分史世界の緑の女神の依頼	691
イベント会場にて	693
イベント終了後の	696
とある海域の蛸退治	699
蛸退治!! 開幕!!	702
再びギョウカイ墓場へ	705
マジック・ザ・ハード!!	708
後遺症	712
それぞれの・・・	714
天狼滅牙!!	716
黒の診察	719
黒の銃姫の復活	721
四女神を持って成すの段	724
巨大ネズミ現る	729
ゲームギョウ界の定められた正しい法&陽動作戦	731
潜入!! マジコン製造工場!!	734
黒の正義!!	736
魔王灼滅刃!!	739
闇の炎	742
逆手に利用	745
敵を欺くにはまず味方から	748

分史世界の新たな紫の女神	750
マジック・ザ・ハード、再び	752
マーテル	754
天翔蒼破斬!!	758
まさかの・・・	760
仮面女神、またの名は	762
分史世界の双子の紫の女神の再会	765
二刀流	768
霸王と魔王	770
征禍星影双牙刃!!	772
強くなるために!!	777
黒の女神VS紫龍	780
緑の女神VS審判を超えし者	783
医務室にて	786
白の女神と白獅子	789
白の女神候補生VS親善大使	791
白の女神候補生VS気高き精霊の王	793
我ら、女神に裁きを与える者なり	795
決闘の日	798
分子世界の黒衣の断罪者	801
分子世界の真実の探求者	805
分子世界の寡黙な斧使い	810
天覇極光斬!!	813
真実を・・・	817
三女神のその後の経過	820

黒と緑の再生治療	823
ウラヌスと龍の女神達	826
復活!! 四天王!!	829
分子世界のスケベ大魔王	832
墜ちた正義	835
虎牙破斬・罅!!	838
天光神雷空裂衝!!	841
麟凰天翔駆!!	844
決戦前夜!!	847
閃覇瞬連刃!!	850
未来へ託す、永劫の剣!! 斬・空・天・翔・剣!!	853
次元開通編	
聖龍皇、病院に行く	860
平穩の一コマ	863
インターバル	865
浮遊大陸	867
アヴニール再戦	869
浮遊大陸のリーンボックス	872
毒殺	874
浮遊大陸のマジエコヌ	876
浮遊大陸のブラン	879
刃よ吼えろ!!	881
立ちふさがるなら容赦しない	884
密入国	886
舞い飛べ!!	888

思いの翼

891

偽女神

893

エクスパシオン!!

895

染められし刃は!!

897

炎よ!! 我が刃に宿れ!!

899

覚醒せよ!!

902

貫け!!

905

こっちでも

908

聖牙刀(笑)

910

名は江雪左文字

913

天空のマジエコンヌ

915

これから

917

プロローグ

ここは、どこだろう？ごく普通の少女、鳴流神龍姫は目を覚ますと一面真っ白な空間にいた

しばらくすると、後ろから髪の毛の長い女性が現れた

「ボクは、どうしてここにいますか？」と女性に尋ねた、すると、ある事実を告げられてしまうのである

「あなたは横断歩道を渡っている最中に交通事故に巻き込まれて死んでしまったのです」と告げられ

しばらくして、「ボク、死んじゃったんだ」と龍姫は嘆いていた

しばらく落ち込んでいると女性が話しかけてきた

「落ち込んでても仕方ないのです、あなたにはとある世界に転生していただきたいのです」

え!?!それってどういうことですか？

と龍姫は驚いたが、

「わかりました」と龍姫は答えた

それと、私の名は女神ツクヨミと申します。

それってつまり!!と龍姫は驚いた

ええ、これからあなたを異世界に転生させる者の名です。それと今から行く世界の名は、「ゲームギョウ界」と呼ばれているところです。と告げられた

「そこはどんなところなんですか？」と龍姫は聞いた

紫の大地プラネテューヌ、黒の大地ラスティション、緑の大地リンボックス、白の大地ルウィーと四つの国がありそれぞれ「女神化」と呼ばれる能力《チカラ》を持つ、四人の女神たちが統治しているのです。それとあなたには紫の大地プラネテューヌに転生してもらうことになります。

それと、あなたにはいくつかの日常生活必要なものをお渡しします。

ゲームギョウ界での通貨は「円」ではなく「クレジット」になりますので軽く50000クレジットをお渡しします。それと、これもお

渡ししますとゲーム機の電源マークの入った手のひらサイズの紫水晶を龍姫に手渡した。

これは、なんですか？と龍姫は半信半疑で尋ねた。

「その水晶の名は、女神メモリー」というものです。これはいざという時にしか使つてはいけません」とツクヨミは答えた

「そうなんだって!!どうして、ボクが女だってわかったんですか？」とツクヨミに質問した

何故ならば、今、龍姫の私服の服装はスカートやワンピースではなく、男物を好んで着ているので上はパーカジャージに下は長ズボン履いている上に胸にはサラシを巻いているのでパツと見ても165cmの女顔で長髪で黒髪のポニーテールの男の子にしか見えないのである。疑問に思っていたら、

「だって、あなた、うまく隠しているつもりだろうけど、その見事な大きな胸を見たら誰だって

女の子って気づくもの、」とツクヨミは答えた

なぜなら、なんと!!胸に巻いていたサラシが緩んでいたのである

サラシを巻き直しそして「準備はできましたか？」かとツクヨミは龍姫に尋ねた

龍姫は「準備ができた」と頷いた

ご武運をとツクヨミはいい

ゲームギョウ界に旅立った

始まりの時

ううくん… ここは

どうやら龍姫が目を開け見渡すと森の中らしい、取りあえず荷物を確認して見ることにした

所持品は

財布、女神メモリーの2つだけである

ふう〜じつとしててもはじまらないしねと、真っ直ぐに歩くことにした

しばらく歩いていると街道らしき場所に出たので龍姫は、このまま行ったら街に着くかも知れないと思い歩き出した。すると、近未来的な建造物が立ち並ぶ街見えてきた。思わず龍姫は「綺麗…」と呟いき、見とれていると、なんだろう？街の中が騒がしいので入っていくと、「女神様バンザイ」「女神様最高」などなど

聞こえてきたのである。どうやら今日は何かの式典があるらしく、街の人たちは街にそびえ立つ塔の近くに集まっていた。「なんだろう？」龍姫もその場所に向かうことにしたのだ。

「本日、結ばれる友好条約で武力によるシェアに奪い合いは禁じられます。これからは国をより良くすることで シェアエナジーを増加させ、世界全体の発展に繋げていくのです」

と紫色の三つ編みでツインテールの女性ことパープルハートがそう宣誓すると、さつき上昇していたパネルがある程度の高さで停止し中央に向かって同時に歩いていたほかの三人のパネルも同じ高さで止まりそれぞれ向かい合い手を取り合い、目を閉じて誓いの言葉を宣言する

「二〇〇私たちが過去を乗り越え、希望溢れる世界を作ることここに誓います」

今ここに、四人の女神による友好条約が結ばれた、瞬間である。

スキット：これからのこと

龍姫「綺麗だったな、その上、美人でかっこいい良くて、スタイル

を良いし、たぶんあの人がここの女神様だよ。よくしボクもがんばらないと」

まずは宿屋に行かないと

龍姫は宿屋に行くことにしたのだが、いきなり、空から光が降りてきて、それが、収まると、目の前に先ほど龍姫を転生させたツクヨミがいた。

「あの〜どうしたんですか？」と龍姫は聞いた。すると、「あなたを転生させる時、此処とは別の異世界の術技を使える能力《チカラ》を授けました。その能力《チカラ》はどう使うかは、あなた次第です。健闘を祈っています」とツクヨミは龍姫に告げて天界に帰って行ってしまった。

友好条約が結ばれ、それから一か月が過ぎようとしていた。

その頃、龍姫は依頼を受けるため、ギルドに来ていた。あの後、街の人にギルドのことを教えてもらっていたのである。

そこでまず依頼《クエスト》を電光掲示板から選び

クエストを選び終えた龍姫は武器屋に向かった

一応、ツクヨミからもらっていた所持金もあるのだが一応、最低限、生活できないと思う、ギルドでクエストを受けながらお金を稼いで宿を転々していたのである。

武器屋に行く理由は装備の新調である。

さすがに木刀ではエンシエントドラゴンなどには歯が立たないと感じたのである。

武器屋に到着した龍姫は店主らしき人に、

「すみません、ここに日本刀って置いてますか？」と聞いたのである。

出会い

「がんばってるな、日本刀なら、うちの店で扱ってるよ、好きなの見ていきな!!」

と店の店主が言ってくれたので、とりあえず「ありがとうございませす」と龍姫はお礼した、武器屋で刃渡り二尺二寸の無銘の日本刀を二振りと一尺の短刀を二振りを購入して、龍姫は店を後にした。

一応、購入資金はギルドの依頼《クエスト》で稼いでるのと転生させてもらった時に50000クレジットをもらっていたで問題ないのだが、これからのことを考えていたのである。転生する時にもらっていた「女神メモリー」はまだつかってはいない。その理由は、今から三日前に遡るのである。

ちようど、その時、依頼《クエスト》を終え、プラネテューヌのホテルの自分の部屋で休んでいた時だった、いきなり、目の前が光り出したので、しばらく様子を見てみると光の中からツクヨミが現れたのである。どうやら、慌ててたらしく、息を切らしていたのである。「どうしたんですか?とりあえず落ち着いてください」

と龍姫は言った。

しばらくして、「女神メモリーはまだ使っていませんよね?」とツクヨミに尋ねられたのである。

「まだ、使ってませんけど、それがどうしたんですか?」と龍姫はツクヨミに質問した。

「そうでしたか、それはよかった、今から言うことは重要なことなんです、聞いてくださいいね、実は女神メモリーを一度でも、使って女神化してしまうと、二度と人間には戻れなくなるんです。」とツクヨミに女神メモリーについて重大な事実を龍姫に伝えるためにわざわざ大急ぎで天界から飛んできたのである。

「そうなんだ、わかりました。自分に大切なものができてそれを守るときにこの女神メモリーをつかいます。」と龍姫はツクヨミに言ったのである。

「本当にいいんですか?私にその女神メモリーを返すなら、今しかない

いんですよ?」とツクヨミが言ってきたのである。「いいんです!! 選ぶんじゃなくもう選んだんです!!」と龍姫は言った

そして、龍姫は続けて「どうせ選ぶなら自分で選んだ方がいいって思ってるだけです。それが正しかったかどうかは 終わってみなきやわかりませんか」とツクヨミに話した。

するとツクヨミは「わかりました、私から何も言うことはありません。」と言って天界に帰って行き、今に至るのである。

そして今、龍姫は依頼《クエスト》でプラネテューヌとラスティシヨンの国境付近の洞窟内の魔物《モンスター》退治ために洞窟前に来ていた。

ふと、空を見上げると長い髪の銀髪で黒いレオタードのような服を着て背中には翼のような物をつけた女性が洞窟に入っていくのを見て「あの人って友好条約の時に見た、ラスティシヨンの女神様で確か、ブラックハート様だったよね?」としばらく様子を伺っていると、後ろの方から声が聞こえてきたのである。振り向くと薄紫色の髪にパークワンピースを着て頭にゲーム機のコントローラーの十字キーの形をした髪飾りを二つ着けた女の子がいた。

「ねえねえ、銀髪の黒い服きた女の子見なかった?」と龍姫は女の子に聞かれた。「ああその人なら洞窟の中に入って行ったよ」と龍姫は女の子に教えた。その直後だった洞窟の中から「キヤアー」と悲鳴が聞こえてきたのである。すると「まさか、ノワールの身に何かあったんだ、こうしちやいられない、教えてくれてありがとう」と言って女の子は洞窟の中に入って行ってしまった。「ノワールって誰だろう? って! そんなこと考えている場合じゃないよね! ボクも行かない」と龍姫も女の子を追いかけるように洞窟の中に入っていった。

戦いの火蓋

龍姫はさつき、出会った女の子の後を追って洞窟の中に入っていた。

「確か、この洞窟って一本道だったから、このまま行けばいいんだよね。」

龍姫は洞窟を歩いていった。

一応、戦闘に関しては、一ヶ月間の依頼《クエスト》で培ったのと転生させられた時に此処とは別の異世界の術技の能力《チカラ》を授けてもらっていたからなのか、今になつては奥義と上級魔術まで修得済みである。

まだ、秘奥義の修得まで至っていない

しばらく、進んでいると広いドーム状のところに出た。周りの様子を伺っていると、さつき出会った女の子を見つけた。その近くには黒髪の長髪でツインテールに結っていて、メイド服みたいなドレスを着ている女の子を発見した。

「あれって、依頼にあったエンシエントドラゴンだよね。」と討伐目標を発見した龍姫は近くの岩陰から様子を見て、思わず、

「助太刀した方が良さそうだね。」と龍姫は粒子化していた日本刀をベルトとホルダーごと取り出し、帯刀していつでも攻撃できるよう抜刀術の構えを取っていた。

一応、もう一振りの日本刀と二振りの短刀はちゃんと帯刀している。要するに侍や武士で言う「二本差し」の状態で短刀は背中側に帯刀している。状態で様子を窺っていると、

「ノワール、女神化つてのはこういう時に使うんだよ。括目せよ!!」と洞窟の入り口で出会った薄紫色の髪の女の子が言い出すと光に包まれ、

光が収まると、そこには紫色のレオタードの様な服を着て紫色の髪

をツインテールの三つ編みにした大人の女性の姿があった。

手には全長約二尺五寸の抜刀状態の野太刀を持っていた。

そして、「えっ!! ウソあの子パープルハート様だったの!」と龍姫は自分の目を疑ったのである。なぜなら、友好条約の日に見た、プラネテューヌの守護女神パープルハート様に瓜二つだったからである。その手に持っている野太刀を牙突の様に構えを取りそのままエンシエントドラゴンに突っ込んで行った。

「クロスコンビネーション!!」

「簡単には倒れてくれないわね」と苦戦していた。

なぜなら、先ほどノワールと呼ばれていた女の子はどうやら、腰をぬかしているのかはたまた足がすくんでいるらしく戦えそうにないらしい、それを見た龍姫は助太刀するため討伐対象のエンシエントドラゴンに向かって

「魔神剣!!」

刀を抜刀した勢いで発生した地を這う斬撃を放った。すると、見事に命中した。

「あーあなたは」

「今は一緒に戦いましょう話はあとで」

龍姫は日本刀を、パープルハートは野太刀をそれぞれに構えて、討伐対象であるエンシエントドラゴンに斬りかかった。

女神様との共闘

「クリティカルエッジ!!」

「虎牙破斬!!」

龍姫とパープルハートの二人はエンシエントドラゴンと戦闘中である。

「なかなかしぶといわね」

「え、そうですね」

と龍姫とパープルハートは苦戦していた。なぜなら、巨大魔物《ギガントモンスター》に指定されていたため、女神でも手を妬いているのである。

「グオオー」

エンシエントドラゴンが攻撃を仕掛けてきたのである。

「しまったー」

パープルハートは不意を付かれたらしく、持っていた野太刀が折られてしまった。ここぞとばかりにエンシエントドラゴンはパープルハートに攻撃を仕掛けたのである。

「させないよー蒼破刃!!」

「助かったわ ありがとう」

パープルハートにエンシエントドラゴンの攻撃が直撃する瞬間に龍姫は蒼破刃を放ち攻撃を防いだのである。

「らしくないですよ!パープルハート様これを、使ってください」

「わかったわ、ありがたく使わせてもらおうわ!!」

龍姫はもう一本の刀をパープルハートに渡した。パープルハートは渡された刀を抜刀し女神化時の形に形成した。

そして龍姫は体の中で、ある感覚を覚えたのである。

「今のボクにできるかな? ってそんな事考えている暇はないんだった! こうなったら当たって砕けろだ」

と龍姫は自分に言い聞かせ次の瞬間

「飛ばしていきますか!!」

「えっ! 何が起こったの!?!」

と龍姫は自分の闘気を放出させた。簡単に言うとおーバーリミッツである。それを見たパープルハートとノワールは鳩が豆鉄砲を食ったように目を丸くした。

そのまま龍姫はエンシエントドラゴンに攻撃を仕掛けたのである。

「散沙雨！秋沙雨！驟雨双破斬！腹括って！天狼滅牙・水蓮！」

「援護するわ！」

龍姫は目にも止まらぬ怒涛の連撃を繰り出した。パープルハートは援護に入り。そして、次の瞬間

「お終いにしてあげる！閃け！！鮮烈なる刃！！無辺の闇を鋭く切り裂き！！仇名す者を微塵に砕く！！決まった！！漸毅狼影陣！！」

「あの技、ノワールの秘奥義《エグゼドライブ》に似てるわ」

エンシエントドラゴンの周囲を出たり消えたりして物凄い速さで切り刻んでいった。とどめに背後からすれ違いざまに一閃した

龍姫は秘奥義を発動できるようになったのである。そして、エンシエントドラゴンは光の粒子になって消えていった。

「ざつとこんなもんだね！」

龍姫はエンシエントドラゴンを倒した余韻に浸っていた。すると、龍姫の目の前にパープルハートが歩み寄ってきて女神化を解いて

「ありがとう、助かったよ、これ返すよ」

パープルハートは龍姫にお礼をいい借りていた刀を龍姫に返した。

「ほら、ノワールもお礼言わないと！」

「ありがとう・・・」

「もう素直じゃないな、だからいつまでたっても〝ぼっち〝なんだから」

「だれが！！ぼっちよー！」

パープルハートとぼっちことノワールは言い争いを始めた。

「あのくとりあえずここ出た方がよろしいのではっ。」

と龍姫は提案した。すると

「それも、そうね」

とノワールが言ってきた。そして一行は出口に向かうのであった。

洞窟からの脱出

「あ！自己紹介がまだでしたね、ボクは鳴流神龍姫《なるかみたつき》っていいます、見ての通り、ギルドの依頼で来ています。」と龍姫は簡単に自己紹介をした。

「わたし、プラネテューヌの女神パールハートでもこの姿の時はネプテューヌって言うのよろしく！呼びにくかったら、ネプ子、ねぶねぶでもいいよ！」

「わたし、ノワールよラストেশションの女神ブラックハートよ」

と二人は自己紹介をした。

「えくと、ネプテューヌ様とノワール様ですね。」と龍姫が言う
「別に敬語じゃなくていいよ」

「そうね！様はいらないわ！呼び捨てで構わないから」

とネプテューヌとノワールは龍姫に言ったのである。

「わかりました、ネプテューヌとノワールだね！よろしく！」と改めて龍姫は言った。

スキット：龍姫の秘奥義《エグゼドライブ》

ネプテューヌ（以後ネプ）「ねえねえ、龍姫ってば」

龍姫「何？ネプテューヌ？」

ネプ「さっきのあれってどうやるの？」

龍姫「さっきのって？」

ネプ「えくと、閃け！なんとかやってやっ」

龍姫「ああ「漸毅狼影陣」のこと」

ネプ「うん、それぞれ「雑穀農園陣」ってやつ」

龍姫「あああれね自分でもどうやったか、わからないんだ、ごめんね、それとネプテューヌ「雑穀農園陣」じゃなく「漸毅狼影陣（ざんこうろうえいじん）」だから」

ネプ「そうなんだ、残念だね。せっかくやり方教えてもらおうと思っただのに！」

龍姫「ふう（転生した時に授けてもらった能力《チカラ》とは口が裂けてもいえない）」

スキット：ツンデレ

ノワール（以後ノワ）「さっきはありがとう、危ないところを助けてくれて」

龍姫：「いや別に当たり前のことをしたまでだよ」

ノワ「あのくよかったらあとでお礼をしたいの」

龍姫「お礼なんていいよ」

ノワ「こっちの気が済まないの！今度食事でも…」

ネプ「ノワールく」

ノワ「ああくもうあなたって子は、今いいとこだったのに!!」

ネプ「ねぷ！」

ノワ「あんな奴わたし一人でも倒せるんだからね」

龍姫「ネプテューヌまさかノワールって」

ネプ「うん、ツンデレのぼっちなんだ」

「ヴァリアブルエッジ!!」

「トルネードソード!!」

「剛・魔神剣!!」

龍姫・ネプテューヌ・ノワールは洞窟内を魔物《モンスター》を倒しながら進んでいる。

ネプテューヌは龍姫から貸してもらった日本刀でノワールはサーベルの様な騎士剣で龍姫はもう一本の日本刀で敵を殲滅しながら進んでいる

「あれ？ノワールどっか、怪我でもしてるのかな？」と龍姫はふとノワールに目を向けるとどこかしら動きにキレがないのである。

「ふう〜ここまでこれば安心だね」とネプテューヌが言ったので一息入れることにした。

「ノワール！ちよつと左腕、診せて」と龍姫は言い、ノワールの左腕を掴んだすると

「何よ！うぐつ」とノワールは痛がり出したのである。ノワールの左腕を捲ると左腕が大きく腫れていたのである。

「ごめん、痛かった？ 多分、骨折してるかもしれない」と龍姫は言う

「ごっこつ骨折!?!どうしようコンパいないし」とネプテューヌは慌て出した。

「こんな怪我、平気よ」とノワールは強がっているがどこかしら辛そうにしていた。

「気休めにしかならないけど、聖なる活力、此処へ　ファーストエイド!!　念のため応急手当するね」と龍姫はノワールに治療術を掛けて、自分のポーチから三角巾などを出し、ノワールの左腕を動かないよう固定した。

「龍姫って、回復魔法も使えるの?スゴイ!」

とネプテューヌは感心していた。

「ありがとう...」とノワールは申し訳なきさそうにお礼を言った。

「ううん、もう少し早く駆けつけてたらこんな怪我しなかったのに、ごめんね」と龍姫は言った。

「とりあえず陣形はネプテューヌが前衛でボクは後衛でノワールは間に入って」と龍姫は提案した。

ネプテューヌはわかったと答え、ノワールはわたしも戦うと聞かないので龍姫はノワールの膝裏と背中に手を回しそのまま抱き上げた。俗にいうお姫様抱っこである。

「降ろしなさい!!」

とノワールはダダを捏ねた。

「あっ!出口だ急ごう」とネプテューヌは走り出したので龍姫はノワールをお姫様抱っこをしたままネプテューヌの後を追いそのまま洞窟を出た

プラネテューヌ教会からの誘い

「ふう〜やっと出れた、やっぱり外の空気っておいしいね」

とネプテューヌが言い出した。しばらくして、ノワールをお姫様抱っこしたままの龍姫が出てきた。

「やっと、洞窟の外か」

「とりあえず、降ろして下さるかしら」

「あーごめんごめん」

と龍姫はノワールをそつと降ろしたのである。しばらくすると、

「ネプ子!!」「ねぶねぶ!!」「お姉ちゃん〜」と聞こえてきたので、ふと声のする方向を向くと

茶髪のロングヘアーで青いロングコートに携帯電話らしきもの付けていて、頭に双葉のリボンで髪を結った女の子と

ピンクのショートヘアでカチューシャを着けてセーターを着た女の子と

ネプテューヌと同じく薄紫色の髪のロングヘアーにセーラー服のような着て、頭に十字キーを一つ着けた女の子と

ノワールと同じく黒髪で肩が露出した服を着て、髪をツーサイドアップで結った女の子が駆け寄ってきた。

「もうお姉ちゃんたらー！急にいなくなるんだからー！出掛けるならちゃんと言ってよねー！」

とネプテューヌの妹らしき人物がネプテューヌを叱りつけていた。「ごめんねm()m、それはそうと、コンパ!! ノワールの腕の怪我、診てあげて」

とネプテューヌがピンク色のショートヘアでカチューシャを着けた女の子にノワールの腕を診るように言った。

「お姉ちゃん、腕怪我してるの!?!」

とノワールの妹らしい人物がノワールの心配をしていた。

「それそうと、アンタ誰？ 名前は？」

と茶髪で双葉リボンで髪を結った女の子は両袖に隠していたカートを龍姫に向けて来た。

「人に名前を聞くときはまず自分から名乗るべきだと思うけど？」

と龍姫はカタールを向けてきた女の子に言った。すると、

「あー！ごめん！あたしはプラネテューヌ諜報部所属 アイエフ」と名乗り続けて

「わたしはプラネテューヌの女神候補生でネプテューヌの妹でネプギアといいます。」

「わたしはプラネテューヌで看護師をやっています。コンパと言います」

「アタシはラストেশヨンの女神候補生でノワールの妹でユニと言います」

「ボクの名前は鳴流神龍姫だよ」と自己紹介をした。

「なぜ？アンタがここにいるの？」とアイエフが尋ねてきた。

「ギルドの依頼でたまたま此処の洞窟の魔物《モンスター》退治に来てたんだ。」と龍姫はこれまでの経緯を説明した。

「そうだったの？まあいいわ、これからどうするの？」とアイエフが龍姫に聞いてきた。

「とりあえずギルドに報告をして今回の報酬を貰いに行くかな」と龍姫はアイエフに伝えた。

「ねえ、だったら一緒に街に戻ろうノワールを病院に連れて行かないかならないし」とネプテューヌが提案して来た。

「そうだねほんじゃ一緒に行こうか！」と龍姫達一行は街に戻ることにした。

その後ノワールは病院の医師に全治二週間の左前腕骨折と診断された。ネプテューヌにギブスを落書きされたの言うまでもない。自宅療養の名目で帰宅して執務仕事をしていたらしく。ユニが止めても聞かなかつたらしい。

エンシエントドラゴンを倒してから三日後、龍姫はいつもの通りプラネテューヌのギルドに顔を出していた。

「やっと会えた！」とどこからか聞き覚えのある声したので声のする方へ向くとそこにはネプテューヌがいたのだ。

「どうしたの？」と龍姫はネプテューヌに尋ねると

「龍姫をスカウトしに来たんだ」とネプテューヌが言い、そのまま龍姫の手を強引に引っ張ってプラネテューヌの教会に連れって行った。

教会にて

「ちよつとーネプテューヌー！」

龍姫はネプテューヌに手を引かれ、プラネテューヌ教会に向かって
いる最中である。

「だって、早くしないと、ノワールたちに取りられるだもん」とネプ
テューヌが言った。

「ボクはモノじゃないよ」と龍姫はネプテューヌに言っていたら、いつ
の間にかプラネテューヌ教会の前まで来ていた。

「ほれ！入った！入った」とネプテューヌに手を引かれて入って行っ
た。

するといかにも教会という内装の室内を通り奥へ案内された。す
ると応接間の様な所に案内された。

「あのくあなたがネプテューヌさん達と一緒に魔物《モンスター》を退
治した方ですか？」と辞書を開いたところに小さな妖精みたいな人が
乗っついて、龍姫に声を掛けてきた。

「えくと、どちらさまでですか？」と龍姫は尋ねた。

「申し遅れました、私、プラネテューヌの教祖をしている、イストワー
ルと申します」と妖精らしき人物ことイストワールは自己紹介をし
た。

「どうも、鳴流神龍姫です。」と龍姫は簡単に自己紹介をした。

「来ていただいて、早々、龍姫さんにお願ひがあるんです。」とプラネ
テューヌの教祖ことイストワールは龍姫に頼み事をしてきた。

「はい、なんででしょうか？」と龍姫は返した。すると

「ネプテューヌさんの秘書兼お目付け役兼武術指南役をお願いしたい
んです。」とイストワールは龍姫に頼んだのである。

「えくとつまり女神様のお世話をしると言うことですか。」と龍姫はイ
ストワールに尋ねた。

「はい！そういうことになります。」とイストワールは龍姫に伝えた。

「(なんとなく想像できたけどこんなにも)まさか、ネプテューヌつて
実戦以外はダメなんですか？」と龍姫はイストワールに尋ねた。

「はい……」とイストワールは答えた。

はあくど龍姫は溜め息をついた。

「龍姫さんなら何とかできると思います、それにネプテューヌさんのご指名なので。」とイストワールは龍姫にいった。

「仕方ない……腹括るとしますか！」と龍姫は言ううと

「それじゃお受けになるんですね？」とイストワールは龍姫に尋ねた。

「一応、ほつとけない病ですから！」と龍姫はイストワールに言った。

「ありがとうございます！こちらにどうぞ。」とイストワールに連れられ龍姫は部屋を後にした。

「今日から此処の部屋をお使いください。準備ができましたら声を掛けてください。」とイストワールは龍姫が使う部屋へ案内していた。

「さてと、取りあえず自分の荷物でも置くとしますか？」と龍姫は自分の荷物を置き、部屋を出てイストワールに声を掛けた

「ここが女神様が仕事をする執務室です。」とイストワールに案内され龍姫は執務室に入って行った。

いざ雪国へ

龍姫がネプテューヌの専属のお目付け役になって二日後の今、プラネテューヌ近郊の高原地帯に魔物《モンスター》退治に来ていた。

「あれで、最後だよ！龍姫！あの技で決めるよ！」

「わかった！見切った」

「必殺〜」

「龍虎滅牙斬!!」

「ふう〜これで終わりかな？」

「わたしと龍姫の前に敵はない!!」

「油断大敵だよ。最後まで気を引き締めて行かないと」

なんと龍姫はネプテューヌと共鳴技ができるようになっていた。なぜ敬語ではないかと言うとネプテューヌが龍姫にやめるよう言ったのである。ネプギアも同じである。

「お姉ちゃんと龍姫さんスゴイよ！もう共鳴技ができるなんて」とネプテューヌの妹でプラネテューヌの女神候補生ネプギアは自分の得物のレーザーブレードの刀身を消して黄昏ていた。

「さて、戻って報告だよ」

「うん」

ギルド報告し報酬を貰い、イストワールにも報告したら、

「龍姫さん達のおかげでシェアが上がったので三日間の休暇を差し上げます。」とイストワールは龍姫達に言った。

「いーすん、ウソじゃないよね」とネプテューヌが聞いたら、

「ちゃんと、ノルマ分の仕事をしていたらちゃんとした休暇を差し上げますから」とイストワールはネプテューヌに伝えた。

「ねえ、ルウイーに遊びに行かない？」とネプテューヌが提案してきたのである。

「別に構わないけど？どうしてルウイーに？」と龍姫はネプテューヌに聞いた。

「ブラン達に龍姫を会わしたいから、それにゆつくり温泉に入りたいし」とネプテューヌは理由を述べた。

「そだね！ホワイトハート様に会いたいし、行こうか」と龍姫は自室に戻りルウイーに行く準備をして教会の前でネプテューヌ達と合流してルウイーに向かおうと馬車に乗り込もうとしたやさき、

「私たちも行くわ」と

ノワールと妹のユニも合流した。目的はノワールの湯治である

スキット：怪我の具合

ネプ「ユニちゃん、ノワールの怪我そんなにひどいの？」

ユニ「お医者様からは順調に回復してるって言っていました。」

ネプギア（以後ギア）「そうなんだく早く治ると良いね！そういや、ユニちゃん！一つ聞いていい？」

ユニ「何？」

ギア「お風呂って一緒に入って、洗ってあげてるの？」

ユニ「うん！だって、あの怪我だもん一人で洗えないじゃないかってそれがどうかしたの？」

ギア「いつか、お姉ちゃんが腕を骨折してもいいように参考までに聞いただけだから」

ネプ「ありがとう！ネプギア！」

龍姫「あと、何日ぐらいでギブスはずれるの？」

ユニ「うん、あと10日でギブスが取れるってお医者様いつてくれるので、しばらくお姉ちゃんには無茶はさせません」

ネプ「龍姫のおかげだね！あの時、ノワールの異変に早く気付いてくれたし」

龍姫「良かったよ、たまたま治癒術を覚えといて」

ユニ「それが良かったってお医者さまが言ってくれたので、龍姫さんには感謝してらんです。」

「もうそろそろルウイーに着くよ」とネプテューヌは言った。

そして、一行は馬車から降り、ホワイトハートことブランに会いに行くのであった

ルウイーにて

ルウイーに到着した。ネプテューヌと龍姫達は一先ず、ルウイー教会に向っている最中である。

スキット：ルウイーの女神様

龍姫「そういや、ホワイトハート様ってどんなお方なの？」

ネプ「一言で言えばキレル若者って感じかな？」

龍姫「キレル若者？」

ネプ「うん、普段は無口で物静かなんだけど」

龍姫「だけど？」

ネプ「一度どキレると止まらなくなるんだよ！その上女神化すると常時キレツぱなしになるんだよ！」

龍姫「わかった、ありがとう（そんな人が女神で大丈夫かな？）」

スキット：候補生

龍姫「候補生ってどんなお方なの？」

ギア「ルウイーの候補生は双子なんですよ」

龍姫「へえくそうなんだ」

ギア「候補生の名前はロムちゃんと言うんですよ。」

ロムちゃんがお姉ちゃんと言ったので妹なんですよ」

龍姫「なるほどくありがとうネプギア」

そんなこんなでルウイー教会に到着した。

「ブランく遊びに来たよ」とネプテューヌは一目散に教会に突撃しに行った。

「大丈夫かな」と龍姫は溜め息を着いた。

「あれってベールじゃない？」と一緒にきたノワールは教会の方を見て言った。

「ベール？」と龍姫は聞き覚えのない名前だったので頭を抱えていた。

なんだかんだで龍姫達も教会前に着いた。

「忙しいから、出て行って」と教会の中から聞こえてきたのである。どうやら、ネプテューヌ辺りが女神様の邪魔をしてるらしい。

「腹括ろう☒」と溜め息をついて教会に入った龍姫であった。

とりあえず教会に入った龍姫達一行は客間に案内された。

龍姫は着ていた上着を脱いで客間で待っていると、「何か用？」と白を基調とした服を身に纏い頭には白色の帽子を被った、女の子がやってきた。

「わたしの名前はブラン、ルウィーの女神でもう一つの名前はホワイトハートよ」と龍姫に自己紹介をした。

「ボクはパープルハート様直属のお目付け役の鳴流神龍姫（なるかみ たつき）と申します」と龍姫はホワイトハートことブランに自己紹介をした。

「お目付け役？ボク？まあいいわ、それと龍姫！わたしのことは呼び捨てで構わないから」とホワイトハートことブランは龍姫にそう言い、部屋から出て行った。しばらくして

「ネプギアちゃんくユニちゃんく」と声が聞こえてきたので龍姫達は部屋を出るとブラン似た双子の女の子がいた。

「ネプギア…この人誰？」とピンクと白を基調にした服を着ていて髪の毛の長い方の女の子が龍姫に指さしてネプギアに聞いていた。

「この人は、お姉ちゃんのお目付け役の鳴流神龍姫さんって言うの」とネプギアは聞いて来た女の子に龍姫を紹介をした。

兇刃来る

「鳴流神龍姫って言うんだよろしく」と龍姫は双子に自己紹介をした。「わたしはラムって言うのこっちがロムちゃんよ。わたし達は女神候補生よ」と双子の一人が自己紹介をした。しばらくすると、

「あら〜あなた達までこっちに來ていたのですね!」と金髪碧眼で胸元が開いた緑を基調としたスリットの入ったドレスを身に纏った女性がこっちに近づいてきた。

「それはそうと、ノワール!!その腕の怪我どうしたんですか!」と金髪碧眼の女性はノワールに腕の怪我のことを聞いた。

「ちよつとドジっただけよ!!」とノワールは金髪碧眼の女性にそう返した。

「そうそう!!ノワールってば本当に諸突猛進なんだもん!!」とネプテューヌは茶化し出した。

「なんか嫌な予感するな〜この予感が当たらなければいいけど?」と龍姫は薄々感じていたのである。

「ねえねえ〜龍姫ってばどうしたの?深刻な顔して?」とネプテューヌは龍姫に尋ねてきた。

「ああ!ちよつとね、それよりどうしたの?ネプテューヌ」と龍姫はネプテューヌに返した。

「みんなで一緒にルウイーのテーマパークに行くことになったから、龍姫も一緒に行こう」とネプテューヌは龍姫を誘いに來たのである。「わかったよ、一緒に行くよ」と龍姫は承諾した。

「ここがルウイーのテーマパークだよ!」とネプテューヌははしゃいでいた。

「もしかして龍姫さんって遊園地は初めてですか?」ネプギアは龍姫に聞いた。

「いや別に初めてじゃないよ」と龍姫は答えた。すると

「ネプギア〜ユニ〜一緒に遊ぼう」とルウイーの女神候補生の一人、ラムがネプギアとユニを誘っている。

「ネプギア行ってあげて」とネプテューヌは妹のネプギアに言った。
「ユニ、あなたも行ってあげなさい」とノワールも妹のユニにもラム達の相手をしよう言った。

「ネプギア〜ユニ〜ロムちゃん〜はやく!!はやく!!」とルウィー女神候補生のラムは姉のロム、自身と同じ候補生のネプギアとユニを急かし出した。

一方その頃

「幼女バンザイ〜幼女最高〜」と叫ぶ、巨大な黄色い人形のような生物がルウィーの近くにやってきた。

「やっちまえ!!トリック!!」とパーカを着て手には鉄パイプを持っている人物は巨大な黄色い人形のような生物ことトリックに命令して襲わせた。

「ギャア〜」と悲鳴が聞こえてきたのである!。

「まさか!!ネプギア達に何かあったんだ!!」とネプテューヌと龍姫はアイコンタクトした後、悲鳴が聞こえた方角に走り出した。

それを見たノワールと金髪碧眼の女性も後を追いかけるように走り出した。

「うう〜お姉ちゃん」とネプギアとユニが気を失っていた。傍らには破壊された

レーザーブレードの柄と銃身が折れたライフルが落ちていた。幸いにも二人とも目立った外傷も無かったため、龍姫が「命を照らす光よ、ここに來たれ、ハートレスサークル!!」と二人に治療術を掛け傷を癒した。

「とりあえず、二人を休ませないと」と龍姫達は二人を教会に運ぶことにした。

その数分後、目を覚ました二人から重大な事実を告げられた。

それは、ロムとラムがトリックという魔物《モンスター》に誘拐されたと事実であった。

白の大地に舞い降りし緑の女神

ロムとラムがトリックに誘拐された事実をルウイーの女神で二人の姉であるホワイトハートことブランに龍姫達は話した。すると、「トリックの野郎ゼツテイ許さね!!ぶつ殺してやる」とブランはトリックに対して怒り浸透である。

「ロム!!ラム!!姉ちゃんが今助けに行つてやるからな」とブランが女神化しようとしたときである。

ブランの体が傾き出したのである。とつさに龍姫は受け止めてブランの額に手をやると、

「熱っ!!すごい熱だよ」と龍姫はブランを部屋にあつた仮眠用のベットに寝かした。

「龍姫!!ブランの容態は?」とネプテューヌは龍姫に聞いた。

「多分、仕事による過労だと思う、ゆつくり休めば時機に良くなるよ。」と龍姫はネプテューヌ達に告げた。

ふと龍姫はみんなに目をやると一人この場にいないのである。そうあの金髪碧眼の女性がこの場にいないことに気が付いたのである。しばらくすると

「ブラン様!!」と一人の教会職員が龍姫達のいる部屋に血相を変えて入ってきた。

「ロム様とラム様の居場所がわかりました」と教会職員が地図を広げて誘拐犯が逃げ込んだとされる場所を教えてもらった龍姫は一目散にその場所へネプテューヌ達の目を盗んで向かった。

一方、その頃

「ロムちゃん〜ラムちゃん〜」とルウイーの女神候補生ことロムとラムは縄で手足を縛られており、身動きが取れない状況である。

「わはは!!幼女女神が二人もいるとはな」と巨大な黄色い人形のような生物ことトリックは誘拐成功の余韻に浸っていた。

「アンタなんてお姉ちゃん達にボコボコにされる運命よ」とラムがトリックに啖呵を切っていた。

「ふんあんな熟女女神にやられるトリック様ではない」とトリックは

調子に乗り出した。そんな時だった

「今すぐ、その子たちの身柄を解放しなさい!!」と闇夜を照らす月をバックに登場した。人物はルウイーの女神ブランではなく、ネプテューヌ達と一緒にいた金髪碧眼の女性だったのである。

「お前の様な熟女女神に用はない」とトリックは金髪碧眼の女性に向かって言った。すると

「わたくしも堪忍袋の緒が切れましたわ!! (; . . . ∩ . .)」と金髪碧眼の女性は粒子化していた自身の得物である一本の槍を取り出した。そのまま光に包まれたすると、

光の中から緑の髪を龍姫と同じくポニーテールし白を基調とした胸が見えそうなくらい露出度の高い服着て背中にはピンクの羽根が付いていた。

「この槍で串刺しにしてあげますわ!!」と言いトリックに目掛けて突っ込んでいった。

勝利の炎

「シレットスピアー!!」

今現在、トリックと金髪碧眼の女性は激闘を繰り広げていた

一方その頃

「ふう〜ここみたいだね」と龍姫もトリックが逃げ込んだ場所に到着したところである。

「ネプテューヌ達には悪いことしちゃったな」と黙って来てしまったことを後悔していた。

と周りを見渡すと何かしら物音が聞こえてきたのである。聞こえてきた方向へ向かうと、

「あ!!あの人って確か友好条約の日に見た人だ!!確かグリーンハート様だ!!」と龍姫は己の視覚を疑いながら突入の機会を窺っていた。

すると、

「うぐあ...ここでわたくしは果ててしまうのですか、情けないですわ」と女神グリーンハートは苦戦していた。

「うふふ・手こずらせやがって死ぬ!熟女女神!!」とトリックは止め刺そうとした瞬間、龍姫はこの時を待っていたのである。

「もらった!!シヤドウエッジ!!」

龍姫はトリックがグリーンハートに気を取られてる隙に魔術の詠唱していたのだ。そのままトリックの足元から生み出された闇の刃はトリックに命中した。

「誰だ!!」とトリックは龍姫の方向を向いた。

「あ!!あなたは確かネプテューヌ達と一緒にいた」

「今、回復します!話は後です!!」

と龍姫は日本刀をグリーンハートは槍をそれぞれ持ちトリックに戦いを挑んだ。

一方その頃

「あれ?龍姫とベールがないよ」とネプテューヌが慌て出した。

「まさか!!ロムちゃん達を助けに行っただんじや?」とネプギアは呟いた。

「こうしちゃいられない!! 変身!!」とネプテューヌはパープルハートに変身した。

「龍姫!! わたしの断りもなしに勝手に助けに行くなんて!」とネプテューヌはトリックが逃げ込んだ場所に向かった

「わたしも行く」とノワールも出陣しようと思ったがユニに止められてしまった。

一方その頃

「ダーズリンローテ!!」

「魔神連牙斬!!」

と龍姫達はトリックと戦いの真っ最中である。

「しづといですわ」

「ええ、このロリコン野郎は、ううんなんだろう?」

龍姫はあるビジョンが頭に入ってきたのである。

「あのくグリーンハート様ちよつといいですか?」

「なんですか? 今、戦闘中ですよ!」

龍姫はグリーンハートにあることを伝えた。

「ええ試す価値は十分ですわ! いつでもどうぞ」

「ただし、チャンスは一回です。」

「ごちやごちや相談してるならこっちから行くぞ」とトリックが攻撃を仕掛けたのをかわすと次の瞬間

「真紅の爆炎、わが友に宿れ!」

「これが全てを焼き尽くす、轟爆の魔槍ですわ!」

「「秘奥義!!」: インフェルノドライブ!!」

二人は炎を纏いトリックに向かって突っ込み切り抜けた。

「幼女バンザイ」と言いトリックは光となって消え去っていった。

温泉にて

「ロム様、ラム様、今助けます！」と龍姫はロムとラムの縄を帯刀していた短刀で斬った。

「やつと片付きましたわ」とグリーンハートは先ほどの戦闘のダメージでその場に蹲ってしまった。

「今、回復します！聖なる活力、此処へ！ファーストエイド!!」と龍姫はグリーンハートの傷を癒すため、治療術を掛けた。

「あなた！回復魔法も使えるのですか？」とグリーンハートは治療術を掛けてくれた龍姫に聞いた。

「ええ一応、パープルハート様に会うまで一人でギルドの依頼《クエスト》をやっていたので自然と身に付きました。」と龍姫はグリーンハートにそう答えた。

「そういえば、わたくしの自己紹介がまだでしたわ、わたくしは緑の大地リオンボックスの女神グリーンハートですわ もう一つの名はベールと言いますわ、」とグリーンハートことベールは龍姫に自己紹介をした。

「ボクは、パープルハート直属のお世話役 鳴流神龍姫です。」と龍姫はベールに自己紹介をした。

「そうでしたか？ネプテユーンの（この方を秘書兼遊び相手にしたかったですわ☒）」とベールは内心で落ち込んだ。

「龍姫お兄ちゃん（；|；）怖かった」とロムは泣きながら龍姫に抱き着いてきたのである。そして泣き疲れたのかそのまま寝てしまった。

「ロム様、仕方がない、負ぶって帰るか！」と龍姫はロムを負ぶってルウイーの教会に帰ることにした。ラムもそのあとを付いて来た。

「わたくしもリオンボックスに帰りますわ」と言いベールは女神化をして足早にリオンボックスに帰って行った。

「龍姫!!」とパープルハートに変身したネプテユーンが降りってきた。

「もう!!龍姫たら!!みんな心配してたよ!!」とところでベールは？」と女

神化を解いたネプテューヌは龍姫にベールの事を聞いた。

「それならリーンボックスに帰ったよ」と龍姫はネプテューヌにそう報告した。

「みんなのところへ帰ろ」とネプテューヌはそう言い、ルウイー教会に帰ったのである。

その日夜

「夜空を駆けるく流れ星をく今」と龍姫はルウイーの温泉に鼻歌を歌いながら入っていた。すると

「龍姫!! 一緒に入ろ」とネプテューヌは温泉に入っている龍姫に突撃した。

「ちよつと！ネプテューヌ!! どこ触ってるの!!」と龍姫にネプテューヌが抱きついてきた。

「おう！龍姫って胸大きいんだね！ベールと互角に渡り合えるよ！残念だなく龍姫が女神だったらよかったのに」とネプテューヌは龍姫の体を触りだした。

「しかし、よくこんな大きい胸隠せたね」とネプテューヌは龍姫の体を観察していた。

「二応、サラシで隠してたしボク、着痩せしやすいし」と龍姫はネプテューヌにそう答えた。

「明日、リーンボックスのライブにご招待しますわ♡」と全員のNギアにベールからのメールが届いた。

ライブに招待されて

「みんなー！応援ありがとう！」と今現在、龍姫達はリーンボックスのシンガーソングライターでアイドルの5pbのライブにベールから招待を受けていたなぜかVIP席からの観賞である。もちろんノワール達とホワイト姉妹も一緒である。

スキット：ライブ

龍姫「まさかVIP席からの観賞とは思わなかったな」

ネプ「まあ龍姫はわたし達から見えて一般人だし、仕方ないよ」

龍姫「初めてのライブ観賞だったからね」

ユニ「そうだったんですか？」

龍姫「うん、クエストに手がいっぱいだったからね」

ノワ「龍姫！あなたはネプテューヌ直属のお世話役なのよ！こういう場所には一緒に同行するのよ、そんなことで怖じ気づいちゃダメよ」

龍姫「うん、わかったよ」

ライブは無事に終了した。

スキット：ベールの秘密

龍姫「そういや、この後ってリーンボックス教会に行くんだよね？」

ネプ「そうだよ！Nギアに教会に来るようになってメールが来てたし」

龍姫「ねえネプテューヌちよつと聞いていい？」

ネプ「何？」

龍姫「ベール様ってどんな人？」

ネプ「一言で言えば腐女子だね」

龍姫「腐女子!？」

ネプ「うん、暇さえあればネトゲやってるよ」

龍姫「へえくそうなんだ（大丈夫かな？この国）」

スキット：怪我の経過

ブラン「ノワール、あなた、あの時から気になっていたのだけど、その腕、どうしたの？ギブスなんか巻いて？」

ノワ「ちよつとドジっただけよ！」

ネプ「あの時わたしと龍姫が助けなかつたら足も折られてたよ！」
ユニ「そうだったんですか？もうお姉ちゃん！今度クエスト行くな
らアタシに声掛けてよね」

ノワ「次からあなたに声掛けるわ！心配かけちゃってごめんねユ
ニ」

ロム「ノワールさん・・・大丈夫ですか？」

ノワ「ロムありがとう大丈夫よ順調に回復してるから」

ロム「ノワールさんお大事に」

スキット：龍姫の戦闘術

ネプ「しかし龍姫ってすごいよね」

龍姫「今更どうしたの？」

ネプ「だって、武术も攻撃魔法も回復魔法もできるっていいなって」
ブラン「え、そうなの？」

ネプ「うん、料理もできるし」

龍姫「褒めても何も出ないよ！」

ロム「わたしもがんばらないと」

龍姫「ライバル心燃やされても困るんだけど」

「ここがリーンボックスの教会だよ！」

とネプテューヌが言うと

「ネプテューヌ！ここが教会なのどう見てもアメリカの建造物だよ!!
(。D。)」

と龍姫は教会の外見を見て驚いていた。

それもそのはず、玄関前には大きな噴水あり、外観がどっかの国宝
の建築物にしか見えないのである。

「ベール!!遊びに来たよ!!」とネプテューヌが筆頭に全員で教会の中
に入っていた。

リーンボックスに這いよる魔の手

しかし、近くで見るとここが教会とは思えないな。」

と龍姫はリーンボックス教会の玄関前で呆然と立ち尽くしていた。すると、

「お待ちしておりました。」

と薄い緑色の髪的女性が出迎えてくれた。

「わたくしはここリーンボックス教会で教祖をしております。箱崎チカと申します」

とリーンボックス教会の教祖の箱崎チカは龍姫達に自己紹介をした。

「パープルハート専属のお世話役の鳴流神龍姫と申します。」と龍姫はチカに自己紹介をした。

「あなたはお姉・・・じゃなかったグリーンハート様をお助けになったという鳴流神龍姫さんですか？」

とチカは龍姫に尋ねた。

「はい、そうですけど？」と龍姫はチカにそう返した。

「ここで、立ち話もなんですから、どうぞ、教会の中にお上がり下さい。」と龍姫達はチカに案内されるがまま教会の中に入って行った。

スキット：リーンボックス教会の教祖

龍姫「ベール様ってチカさんに〃お姉ちゃん〃って呼ばしているの？」

ネプ「あ、それ、ベールに妹がないからチカにそう呼ばしているんだよ!!」

龍姫「そうなの！（なんかマズイこと聞いちやったな）」

「どうぞ、この部屋でお待ちになってください。」と龍姫達はとある部屋の前まで案内された。

「なんか嫌な予感がするんだけど☒腹括ろう☒」と決心する龍姫であった。

一方その頃

とある海底に大きなねずみのような生き物が何か発掘しているの

である。

「マジエコンヌ様くこのクリスタルでよろしいですかチュー？」とねずみのような生き物はとある人物に報告していた。

「ああ、そのクリスタルさえあれば憎き女神どもを葬れるのだからな！」とマジエコンヌと呼ばれたその人物は発掘させたクリスタルを手勝ち誇ったように笑っていた。

「あ、それとブラックハートは左腕を負傷したとの情報が入っていますチュー」とマジエコンヌと呼んだ人物にそう報告した。

「ワレチュー！その情報は本当か？」とマジエコンヌと呼ばれた人物はねずみのような生き物ことワレチューに確かめた。

「はいーラステイシヨンの病院でそのカルテの記録があったチュー間違いないチュー」とワレチューはマジエコンヌに報告した。

「まず、手始めに女神ブラックハートの命をもらおうとしよう、ラステイシヨンの女神候補生の悲しむ顔が目には浮かぶな！ワハハハ」とマジエコンヌはあたかも勝ったように高笑いをしていた。

この時龍姫達はこの事態を知るよしもなかったのである。

ところ変わってリーンボックス教会のとある部屋の前に龍姫達は来ていた。

リーンボックス教会の掃除

「よしー腹くくって行きますか☒」と龍姫達はチカに案内された部屋の扉を開いた。すると、

「なに・・これ」と部屋に入った龍姫・ネプテューヌ・ノワール・ブランたまたま一緒に来ていたアイエフ・コンパ・女神候補生一同も揃いも揃って石化した。

なぜなら、明らか空き巢にでも入られたような惨状になっていたからである。その上壁には乙ゲーのポスターが所狭しと額縁に入れられて飾ってあるのである。子どもが見てはいけないものまで床に落ちていた。

「はあくで肝心のボール様はどこだろう？(ボク、これでも一応16歳なんだけど☒)」と龍姫は溜め息をついた。しばらくすると、

「カチカチ」と入ってきた扉の向い側の扉からパソコンのキーボードを叩く音が聞こえてきたのである。龍姫は恐る恐る扉の鍵穴から覗くと、パソコンでネットゲに夢中になっている女神グリーンハートことボールがそこにいた。

「どうやら、本人気づいてないね☒」とネプテューヌは言い

「あいつ!!自分で招待しといてなんも用意してないってどういうことだ。(; . . . ム . .)」とブランがキレ出した。

「まったくボールたら!!仕方ないわね!!みんなこの部屋片付けるわよ!!ユニちよつと付いて来て」とノワールは妹のユニ付いてくるよう言いどこかに行ってしまった。

「ノワールどこに行っただろう?」と龍姫はネプテューヌと二人で詮索していたら、

「お待たせ!!さあ→始めるわよ」と右手に箒を持って怪我をしている左腕をいつもの特注のアームスリングではなくスリングベルトで固定されていて胸元が開いているため胸の谷間が強調されたメイド服を着たノワールがやってきたのである。わざわざこれに着替えるためにユニを連れって行っただけらしい。

スキット：ノワールの仕事根性

龍姫「ねえ、ネプテューヌ！ノワールって形から入るタイプなの？」
ネプ「うん、そうだよ!!」

龍姫「まさかノワールってコスプレが趣味だったりして」

ネプ「ノワールに限って… あり得るかも」

龍姫「わざわざ怪我してても、メイド服を着たかっただねユニに着
させてもらてるしね」

ネプ「うん」

「目のやり場に困るよ胸を強調してたら」と龍姫はノワールから目
を逸らした。すると、

「(うふふ(；^ω^)) いいこと思いついちやったと変身!!)」とネプ
テューヌはパープルハートに変身したのち、

龍姫の背後に回り込んで龍姫の後頭部に手刀を叩きこんで、

「ネプテューヌ?…」とネプテューヌは龍姫を気絶させた。

「何やってるの!!お姉ちゃん(ネプ子)!!」とネプギアとアイエフは龍
姫を気絶させたネプテューヌに突っ込んだ。

リーンボックス教会の掃除 後編

気絶させた龍姫を担いで一目散に部屋を出て行き、リーンボックス教会の教祖のチカにベールの衣装(コスプレ)部屋に案内させていた。
一方その頃

「もう(；・；・、口・) お姉ちゃんたらこういう時だけ変なこと考えているんだから!!」とネプギアは姉のネプテューヌに愚痴りながらベールの散らかした部屋を掃除していた。

「本当にあの子(ネプ子)ったら」とノワールとアイエフはここにいないネプテューヌにネプギア同様に愚痴っていた。

一方その頃

「まだまだいきますわよ!!」と今だネトゲに夢中になっているベールがそこにいた。

「まだ時間がありますわね」と再びパソコンのキーボードを叩きだしたのである。

一方その頃

龍姫を気絶させたネプテューヌはチカの案内でベールがいつも使っている、衣装(コスプレ)部屋に来ていた。

「ここが、お姉さまの衣装兼コスプレ部屋です。破壊行為はなさらないようお願いしますよ!!怒られるのはわたくしなのですから」とネプテューヌはチカに釘を刺されていた。

「大丈夫よ? 龍姫を着替え(コスプレ)させるだけだから」とネプテューヌはチカにそう答えベールの衣装(コスプレ)部屋に龍姫を担いで入って行った。

「ほんじゃー! やりますか! わたしの許可も無しに勝手に行動したのだから」とネプテューヌは龍姫が気を失ってるのをいいことに龍姫をベールがコスプレに着ている胸元が開いたメイド服に着替えさせた。「そういや! 龍姫っていつもブラじゃなくサラシを巻いているしどうしようかしら? そうだわベールのブラ借りればいいのよ! 後で洗って返せば問題ないわね!」とネプテューヌは龍姫の巻かれていたサラシを解き、ベールの付けているブラを龍姫に着け、メイド服の上着を

着せた。猫耳のカチューシャを着けた

「さすがベールと互角のスタイルだからサイズがピッタリでよかつたわ みんな驚くわねきつと」と龍姫には聞こえないように小声で呟いた。

一方その頃

「お姉ちゃん遅いなく」とネプギアは掃除をしながらネプテューヌに文句を言っていた。

「ほんとにねネプテューヌさんはどこまでいったのだろう」とユニは姉のノワールの手伝いしながらネプテューヌのことを気にしていた。

一方その頃

「ワレチューー！例の装置は完成したのか？」とマジエコンヌはワレチューーに聞いていた。

「チューー!!あと四く五時間もあれば完成するチューー!!」とワレチューーはマジエコンヌにそう答えた。

「ワハハハ!!これで女神どもを葬れるのだ!!」とマジエコンヌは時代遅れの高笑いをしていた。

プラネテューヌの秘剣!! 見参!

「ううん、ここはどこだろう? 確かネプテューヌに不意を突かれて気絶させられたまでは覚えているんだけど?」と龍姫は気が付いた
「やつと起きた!」と声のする方向を向くと女神化を解いたネプテューヌがいたのである。

「ネプテューヌ!! 一体ボクになにしたの?」と龍姫はネプテューヌを問いただした。

「起きたのならみんなの所に戻ろう!」とネプテューヌは言ってきたのである。すると、

「うーんそうだよね! みんなの所に戻らないと、ネプテューヌと一緒に戻ろう! みんな怒ってるよ!」

と龍姫はネプテューヌにそう言った。

「あ! そうだ! ねえ龍姫、刀を装備しといて」とネプテューヌは龍姫にそうするよう指示を出した。

「なんで?」とネプテューヌに聞くと

「いいから いいから」とネプテューヌはたぶらかした。で龍姫は粒子化していた刀をホルダーが着いたベルトごと取り出し帯刀した

一方その頃

「ふう、このぐらいにしますわ」とどうやらベールがネットゲを切り上げたらしい。

「そういや、今日は女神の皆様をご招待していたの忘れていましたわ!!」とどうやらネットゲに夢中になって龍姫達を招待したのを忘れていたらしい。

もう時すでに遅しにベールは知る由もなかったのである。

「ふうやつと着いた」と龍姫が部屋に入ろうとしたとき、

「わたしが先に入るから龍姫は後で入ってきて」とネプテューヌは龍姫にそうするよう指示を出した。龍姫はわかったと頷いた。そしてネプテューヌは部屋に入って行った。

「お姉ちゃん!!」「ネプテューヌ!!」「ネプ子!!」

とネプギア・ノワール・ブラン・アイエフはカンカンに怒っていた。

「ネプテューヌ!! 怪我人に大仕事させるってことはそれそのの覚悟があるのかしら?」とノワールはネプテューヌに聞いた。ただした。

「ごめん<m () m>ちよつと龍姫を着替えさせてたから遅くなっちゃった」とネプテューヌはノワールに返した。

「なんで龍姫を着替えさす必要があったのよ!!」とノワールはネプテューヌを問いただした。

「うふふそれは着替えてもらった龍姫を見てからの楽しみだよ!!」とネプテューヌはノワールにそう答えた。

「あら! みなさん来てくれたんですね!」そこにネトゲを切り上げたばかりのベールいた。続けて

「あれ! ネプテューヌ? 龍姫の姿が見えませんか?」ベールは龍姫の姿が見えないことをネプテューヌに聞いた。

「ベール(、ー、)ノどの面下げて出てきたんだ?」ブランはベールに対して怒りが爆発していた。

「もう!! そんなことより龍姫を呼ぶね!! 入って来て龍姫!!」ネプテューヌは龍姫に部屋に入るよう指示を出した。

「もう! 待ちくたびれたよ!」龍姫はネプテューヌに文句を言いながらみんなのいる部屋に入った。

「龍姫・・・」「あなた・・・」「お前って・・・」「アンタ・・・」「龍姫さんって!」

「二女(の子)(だったの)(ですの)(ですか)(かよ)!! () 。

ノワール・ブラン・ベール・ネプギア・ユニ・アイエフ・コンパは開いた口が塞がらなかつたその上鳩が豆鉄砲を食ったように目点

になった挙句立ったまま気絶した。

プラネテューヌの秘剣!! 見参の巻! 後編

「みんなどうしたの?」と龍姫は首を傾げていたら、

「龍姫ちゃんか・・・」

「龍姫が・・・」

「龍姫さんが・・・」

「龍姫の野郎が・・・」

「龍姫お兄ちゃんが・・・」

とノワール・ブラン・ベール・ネプギア・ユニ・ロム・ラム・アイエフ・コンパは驚愕の事実の余り言葉を失ないその上、体育座りの状態で揃いも揃って石化していた。

「いえーい!! 大成功(*^▽^*)」とネプテューヌはしゃいでのであった。

「ネプテューヌ?なんで?みんな石化したの?」と龍姫は近くではしゃいでいるネプテューヌを捕まえて聞いたのだした。

「!!」龍姫(さん)!!(; ㉔)。(。㉔)「!!」と先ほどまで石化していた、ノワール・ブラン・ベール・ネプギア・ユニ・アイエフの一同は部屋の中で大声で叫んでいた。

「もう!そんなに大声で叫ばなくて聞こえてるよ!!」と龍姫はパニック状態のノワール・ブラン・ベール・ネプギア・ユニ・アイエフに落ち着くように言った。すると、

「あそこの壁に姿見鏡が建て掛けてありますわ!!一度ご自身の姿を見た方がよろしくてよ!!」

とベールは震えながら龍姫に壁に建てかけてある姿見鏡の前に立って自分の姿をしてみるように言った。

「なに?これ・・・ええー(。㉔)。(。㉔)。(。㉔)。(。㉔)」と龍姫は一瞬間を置いた後、教会全体に響くように大声で絶叫して自分の服装に己の視覚を疑った。

「気に入ってくれたんだ!!うれしいな(*^▽^*)」と一人ご満悦のネプテューヌであった。

今現在の龍姫の服装の状態はと言うと

猫耳カチユーシャを頭に着け、猫の偽物の尻尾を着けていて、胸元が大きく開いたメイド服を着ていたため、ベールと同じくらいの大さの自分の胸がくつきりとわかるほどに象られていた、そして胸の谷間もくつきりと出ていた。その上さつき刀を装備するように言われていたので、とあるコミックに出てくる、猫耳の妖怪の女の子がしている、メイドさんの格好のコスプレをネプテューヌは龍姫にさせていたのである。

「二」なんて!!破壊力抜群(なの)(です)(ですわ)(よ)!!女サムライで猫耳でその上巨乳!!そしてボクっ娘って反則(です)(ですわ)(よ)。
。D。(;)。D。(三)とノワール・ブラン・ベール・ネプギア・ユニ・アイエフ偶然居合わせていたリンボックス教会の教祖チカは各々に猫耳サムライメイド姿の龍姫を見るや否や勝手に百合の花を咲かしたのち鼻血を出してしまった挙句そのままの勢いで倒れて気絶したのである。

「龍姫!!こっち向いて!!カシャ!!」

とネプテューヌは龍姫の猫耳メイドサムライ姿をカメラで撮影していた。

「はあくネプテューヌく気が済むまで写真、取り終わったら、部屋の片づけるの手伝ってよ(ω、*)」

と龍姫はネプテューヌに言ったのであった。

龍姫の乙女心

今現在の状況はというと、

龍姫はネプテューヌと二人でホームパーティーの会場の部屋の清掃活動に勤しんでいた。

ノワール・ブラン・ベール・ネプギア・ユニ・アイエフ此処リールボックス教会の教祖箱崎チカはさつき百合の花を咲かして鼻血を出して気を失っているのである。

もちろん、あの猫耳メイド侍の格好でネプテューヌと一緒にである。

「ふう〜やつと部屋が片付いたね、さてと着替えに行くか〜」

と龍姫はメイド服から自分の私服に着替えようと部屋を出ようとしたら、ネプテューヌは龍姫の前に立ちはだかったのであった。その理由は至って簡単だった。

「ホームパーティーの間その格好だよこれは女神命令だよ!!」

とネプテューヌは龍姫に対し女神命令という名の職権乱用を使ってきたのであった。

「わかったよ〜そうするよ!じつは一回、制服以外で女の子の格好してみたかったんだ!」

と龍姫はネプテューヌに笑顔でそう言っただけなのである。

「そういや、前に龍姫ったら、わたしの着てる服とネプギアのセーラワンピース見て羨ましがってたから、もしかして女の子の服って着たことあまりないんじゃないかな?と思っただけ!!」とネプテューヌは龍姫が以前、ネプテューヌたちが着ている服を見て羨ましがっていたことに気づいていたのであった。

「小さい頃から私服はいつも男物の服ばかり着てて気づいたらもう制服以外で女の子の服って着てなかったし一人称もずっと“ボク”のままだしね!!」と龍姫はネプテューヌにそう告げた。続けて

「今のボクの体のサイズの女の子の服ってかわいいのあまりないでしょう?」と龍姫はネプテューヌに言った。

「ふくん、そうだったんだ!」とネプテューヌは半信半疑で答えた。

「うん！（いつか話さないといけない時が来るんだろうか自分が一回死んでいて神様によつてこの世界に転生したことそして自分が女神メモリー適正者であることを）」と龍姫はネプテューヌに返事をしながら心の中で呟いた。

「「うくん（お姉ちゃん）龍姫さん」「とノワール・ブラン・ベル・ネプギア・ユニ・アイエフ・此処リールボックス教会の教祖 箱崎チカはどうやら目が覚めたらしい。

「みんな！起きたの！」と龍姫とネプテューヌは目が覚めたメンバーに声を掛けたのである。

「あれ？部屋の片付けが終わっているわ!!まさか!!あなた達が片付けたの?」とさつき目を覚ましたノワールが尋ねてきた。

「うん！そうだよ！ボク（わたし）が片付けたよ」とネプテューヌと龍姫はみんなにそう答えた。

ホームパーティー開催

今、龍姫はネプテューヌ達と一緒にベール？主催のホームパーティーに招かれているのであった。

「龍姫!! てめえいい武器(胸)持ってんな!! その武器(胸)わたしに寄せ!!」とブランは龍姫に笑顔でマジギレしていた。

「しかし、驚きましたわ!! まさか!! 龍姫が女の子だったなんて知りませんでしたわ。」

とベールは龍姫が女の子であるということの事実々に今だ戸惑いを隠せてないのであった。

「本当です!! まさか!! 龍姫さんが女の子だったなんて!! ってお姉ちゃん!! (。D。D) 龍姫さんが女の子だって知ってたでしょう!？」とネプギアが姉のネプテューヌが龍姫の正体を知っていたことを問いただした。

「うん!! 実は龍姫の部屋に行ったらまたま龍姫が私服に着替えてる最中とは知らずに龍姫の部屋に入ったら!! ちょうど胸にサラシを巻くところだったんだよね。それに一緒に温泉に入ったし」とネプテューヌは過去に龍姫の部屋に行つてラッキースケベをやった話と一緒に温泉入つたことをネプギアに話した。続けて

「ええ!! (。D。D) お姉ちゃん!! 龍姫さんと一緒に温泉に入ってたの!!」とネプギアは驚いていた。

「あの時は本当にびっくりしたよ! まさか!! ネプテューヌが鳩が豆鉄砲を食つたように目が丸くなった上に石化しちゃった挙句、女神化までしたんだよ!!」

と龍姫はネプテューヌがラッキースケベをやってしまった状況をみんなに話した。龍姫は続けて、

「ごめんね<m) ((m) >ボクが女だって明かさなかつたばかりにこんなことになって」と龍姫はみんなに謝罪した。

「別に気にしてないわよ」とノワールは龍姫に気にしてないことを告げた。

「うう (T) (T) / ~~~~~ 龍姫の龍姫の裏切り者!! (; . . D . .)」

とアイエフは龍姫が女の子でベール並の巨乳だったため部屋の隅っこで僻んでいた。

スキット：龍姫のコスプレ

ベール「ネプテユーン？ちよつとよろしいですか？」

ネプ「なに？」

ベール「まさかと思えますけど？わたくしの衣裳（コスプレ）部屋に入りましたの。」

ネプ「うん!!だって龍姫の女の子の服のサイズのコスプレ衣裳って売つてるところ少ないし借りちゃった!（*・▽・*）」

龍姫「ちゃんと洗って返しますから」

ベール「いいえ、別に気にしてませんから勝手に部屋に入ったことを言っているのですわ。」

スキット：龍姫と

ベール「あのく龍姫よろしいですか？」

龍姫「はい、何でしょう？ベール様」

ベール「それはそうと、わたくしのことも呼び捨てで“ベール”と呼んでください。」

龍姫「わかったよベールボクに何か用？」

ベール「そのコスプレ衣裳とブラを差し上げますわ!!」

龍姫「いいの!!?もちやあって？」

ベール「何を仰るんですか!あなたは女の子ですよ!女の子の服の一着くらい持つといていいのですのよ!それにあの夜、一緒に合体秘奥義をした仲じゃないですか!!これからも一人の友人と歓迎しますわ」

龍姫「うん!!ありがとう!これからもよろしくね!ベール」

龍姫は「猫耳メイドサムライ」・「四女神の親友」の称号を修得した。

戦いの予感

スキット合体秘奥義

ネプ「ねえ、龍姫」

龍姫「何？ネプテューヌ」

ネプ「ベールと一緒に合体秘奥義出したって言って言っことホント？」

龍姫「ホントだよ!!」

ネプ「龍姫!!わたしの専属のお目付け役なのに!!勝手にベールと合体秘奥義出してるの!!」

龍姫「あの時は緊急事態だったから」

スキット：ロムとラム

ロム「龍姫お姉ちゃんごめんなさいお兄ちゃんって呼んで」

龍姫「別に気にしてないですよ」

ラム「龍姫!!別にわたし達に気使って敬語使わなくていいのよ!」

龍姫「わかったよ!ロム、ラム」

今もホームパーティーの真っ最中である。のだが

「コンコン」と部屋の扉をノックする音が聞こえてきたのである。

ベールが部屋の扉を開けるとリーンボックス教会の職員がいた。

どうやらベールに緊急の用があるらしく慌てていた。

「ベール様!!大変です!!魔物《モンスター》の大群が暴れてるといいう連絡が来ました」

とリーンボックス教会の職員はベールに魔物《モンスター》の大群が暴れてることを報告し立ち去った。

「わかりましたわ!!わたしが出ます」とベールは部屋を出て行った。それを見た龍姫・ネプテューヌ・ブラン・ネプギア・アイエフも出陣の準備をし始めた。龍姫は自分の私服に着替えるためベールの衣裳部屋に行ってから現場に向かおうとした時

「わたしも行くわ!」と手負いのノワールも出陣しようとしたが、

「ダメだよ!そんな怪我じゃまともに戦えないよ!!ノワールは怪我を治すことに専念して!!」と龍姫はノワール戦闘に参加しないよう言った。

「そうだよ!!お姉ちゃんは怪我を治すことに専念しなきゃ!!」とユニは姉のノワールを止めた。

「わかったわよ!!(どうしてわたしって肝心な時に役立たずなの!!)」とノワールは自分が何もできないことに腹を立て悔し涙を流した。

それを見た龍姫は「ノワールにお願いがあるんだみんなと一緒にボクたちの無事を祈ってほしいんだ!!約束だよ!!」と龍姫はノワールに自分たちの無事を祈るようお願いした。

「わかったわ!!もし帰って来なかったら一生、許さないんだから!!」とノワールは候補生一同に代わって龍姫達に言った。

「約束するよ!!みんなと一緒に帰ってくるって」と言っただけで龍姫は衣裳部屋で私服に着替えた後、教会の前でメンバーと合流して現場に急行して行った。

「嫌な予感がするなこの予感が当たらなければいいのだけど!」と龍姫は心の中で思っていた。

この予感が本当であることを龍姫達は知るよしもなかったのである。

女神の危機

「どうしたの龍姫、深刻な顔して」とネプテューヌが龍姫に尋ねた。「ちよつと、一応、罨の可能性を考えていたから」と龍姫はネプテューヌにそう答えた。

「なるほど、誰かが教会職員に偽の情報を掴ませた可能性も視野に入れないと言うのですか」とネプギアは龍姫に聞いてきた。

「それは一理あるわね!!」とアイエフは龍姫の考えに賛成した。

「それが誰かがわからないとなると相手の出方次第になるけど」と龍姫は皆にそう告げた。しばらくすると、魔物《モンスター》が出たとされる現場に到着した。龍姫は何かしらの気配を感じていたのである。

「現場に着きましたわよ!にしても魔物《モンスター》の大群はどこにいるのですの?」とベールが魔物《モンスター》の大群が見当たらないと言っていた。次の瞬間、

「これは罨だ!!」と龍姫は大声でネプテューヌ達に言ったがもう時すでに遅しであることにネプテューヌ・ベール・ブランは気づいてなかったのである。

「ワハハハ!!ワレチュー!やってしまえ!」と時代遅れの笑い声が聞こえてきたのである。次の瞬間、

四つの紫色の水晶が現れたその水晶から一本の線の様なものと植物の蔓ようなものが伸びてきたのである。そのまま

「キヤーー」

「うわー」

とネプテューヌ・ベール・ブランがその伸びてきた植物の蔓のような物に捕まってしまったのである。

「ネプテューヌ!!ベール!!ブラン!!」

「お姉ちゃん!!」

「ネプ子!!」

「今助けてあげる(わ)」

と龍姫・ネプギア・アイエフは日本刀・レーザーブレード・カタ

ルと構え、ネプテューヌ達に絡まっている蔓目掛けて切りかかった。「ふん！無駄だ」とさつき時代遅れの高笑いをしていた人物が号令を掛けたのである。すると、

カキーンとはじかれてしまったのである。

「どうやら、結界が貼ってあるなんて、うかつだった」と龍姫は思い知らされたのである。もう一度結界に向かって

「襲爪雷斬!!」

と龍姫は結界に向かって雷を帯びた斬撃を放ったが全く結界が破れる気配がないのである。

「わはは!!無駄だこれは対女神用に作らした女神捕獲装置だ!!お前らの攻撃など痛くも痒くもないわ!アハハ」とさつきまで時代遅れ笑い方をしていた人物が姿を現したのである。続けて

「ん?ブラックハートの姿が見ないが怖じ気ついつて出てこれないのか!ふはは!!」とここにはいないノワールを卑怯物扱いしだした。

「ノワールはそんな人じゃない!!」と龍姫は反論した。

「いいだろう!お前のその心意気に免じて冥土の土産にわたしの名を教えてやる」と言った。

「私の名は”マジエコンヌ”女神達を殺し、このゲームギョウ界に破壊を呼ぶものなり」と時代遅れことマジエコンヌは名乗った。

龍の敗北

マジエコノヌは自らを女神を殺し、ここゲームギョウ界に絶望と破滅と終焉を司る人物だと名乗りだしたのだ。

「ゲームギョウ界に破滅と絶望を与えるですつて寝言は寝てから言うてほしいわ!!」とアイエフはマジエコノヌに挑発行為を仕掛けた。すると

「キィー!!チンチクリンの小娘の分際で」とマジエコノヌはまんまとアイエフの口車に乗せられていた。

続けて「お前なんかこうしてやる」とマジエコノヌは龍姫達に攻撃しようとする構えを取った。その時

「来たれ!!爆炎!!焼き尽くせ!! バーンストライク!!」

と龍姫はマジエコノヌがアイエフに挑発されている隙に魔術の詠唱をマジエコノヌに気づかれぬように行っていた。チャンスとばかりに龍姫はアイエフに

「このことをイストワールに伝えて」

とアイエフに女神達が捕まったとイストワールに伝えてほしいと龍姫は言った。

「わかったわ」とアイエフはイストワールに伝えるため戦線を離脱した。すると、舞い上がった煙が晴れたそこには

「小賢しい!!マネを!!生きて帰さん」とさつき龍姫に魔術を直撃させられたのが効いたのか少々暴走気味のマジエコノヌがいた。

「悪いけど!!こつから先は通さないよ!!ネプギアやるよ!!」と龍姫は瞬時にもう一本の日本刀を抜刀した。俗に言う「二刀流」である。それに合わせてネプギアも自身の得物のレーザーブレードを構えた。

一方、その頃

リンボックス教会に待機中のノワールは実妹のユニを含む候補生の面倒見ていた。

「お姉ちゃん...ネプテューヌさん達大丈夫だよね?」とユニはネプテューヌ達の帰りが遅いことを心配していた。するとノワールは

「大丈夫よ!!あの子たちは強いのだ!!」とノワールはユニを励まして

いた。続けて

「龍姫も同行してるのよ心配ないわ（こんな怪我さえなかつたら今すぐにも飛んで行けるのにわたしってどうして肝心な時に足手まといなの!!）」と候補生たちを励ましながら、ノワールは己の無力に嘆いていた。

一方その頃

「裂空斬!!」

「ミラージユダンス!!」

龍姫はネプギアと共にマジエコンヌと激闘を繰り広げていた。

「ネプギア行くよ!!」

「はい!!」

「瞬間響き合い!!心交わる!!衝破十文字!!」

龍姫はネプギアと共鳴技「衝破十文字」をマジエコンヌに放った。

「うふふ!!こんなものか!お前らの強さは!!」とマジエコンヌはまだ倒れそうにないのである。

「こつちから!!行くぞ!!」とマジエコンヌは自身の得物である。錫杖を天に掲げた。すると空から黒い雷が落ちてきたのである。そして次の瞬間

「ネプギア!!危ない!!」と龍姫はネプギアを庇った。のだが

「ドジ...ちゃった」と黒い雷は龍姫に直撃してしまった。おまけに海岸沿いの崖だったため、そのまま海に落ちってしまったのである。そして

「そんな!!龍姫が」

「龍姫の野郎が!!」

「龍姫さんが!!」

「嘘だよね!?!龍姫が」

「!!死ぬなんて!!」

とネプテユヌ・ベール・ブラン・ネプギアは信じられないのであった。なぜなら、あの自分たちより強い龍姫が海に落ちていった現実を受け止められないでいた。

パープルシスター 推して参る!!

龍姫がネプギアを庇って海に落ち行って行ったのを見届けたマジエ
コンヌは高らかと

「フハハ!! 人間風情がわたしに楯突いた罰だ!!」とマジエコンヌは龍
姫が落ちていたことをいいことに高笑いをしていた。

「そんな龍姫さんがやられるなんて!! もう許さない!!」とネプギアは
龍姫のことを愚弄したマジエコンヌに怒りが爆発していた。

「ふん!! お前の様な人間より弱い女神候補生の分際があいつが死んだ
のもお前の様な足手まといを庇ってとはなフハハ!!」

とマジエコンヌはネプギアを足手まとい扱いにした挙句、龍姫がや
られたのもネプギアの所為にし出した。

それに対してネプギアは、

「わたしのことは悪く言われてもいい!! けど!! お姉ちゃんと龍姫さん
達のことを悪く言うのは許しません!!」とネプギアはマジエコンヌに
そう言い放ったのだ。

次の瞬間、

ネプギアは自分の中にある闘気を解放しようとしたとき、ネプギア
の体が光り出したのである。

「わたし!! 堪忍袋の緒が切れてるんです!! (; . . .)」とネプ
ギアがそういうと続けて

「括目してください!! 変身!!」と言うとそのまま光に包まれた。光が
収まるとそこにいたのは

「パープルシスター見参!!」と女神化したネプギアであった。

白を基調とした武装で手にはガンブレイドが握っていた。

「ふん!! だが小娘が女神化した程度でいい気になるな!!」とマジエ
コンヌは女神化したネプギアを見下した。

「覚悟してください」

ネプギアはマジエコンヌに戦いを挑んだ。

「ううくん、ここは・・・そうかボク、ネプギアを庇って海に落ちたん
だ!!」

どうやら、龍姫はネプギアを庇って海に落ちた後そのまま潮の流れに乗ってどこかの砂浜に打ち上げられていた。

「こうしちゃいられない!! 早く助けに行かないと!!」と龍姫は立ち上がったのだが

「あれ? 体が痺れてきた」

どうやら、さっきネプギアを庇った時に喰らっていた雷で体が痺れていたのだ。

「早く!! 助けに行かないと行けないのに!! お願い!! ボクの体!! 動いて!!」

龍姫は焦っていた。

ネプギアはマジエコンヌと激しい戦いを繰り広げていた。

ネプギアは龍姫に教えてもらった戦闘術を駆使しながら戦っていた。

「飛燕連脚!! 獅子戦吼!!」

とネプギアはマジエコンヌに怒涛の連撃繰り出していた。

「甘いわ!! これでも喰らいな!!」とマジエコンヌはネプギアに攻撃を繰り出した。

ネプギアは攻撃を防ぐため防御の姿勢に入った。がネプギアのガンブレイドは壊れてしまったのである。

「まだまだこれからです!!」とガンブレイドを破壊されてもネプギアの瞳には希望の光がともっていた。

絆の力

「魔神拳!!臥龍空破!!殺劇舞荒拳!!」

とネプギアは龍姫に教わった戦闘術の一つ「体術」でマジエコンヌと戦いを繰り広げていた。

「すごい!!ネプギア!!体術だけであのおばさんと渡り合ってるよ!!さすが!!わたしの妹!!」

「なるほど、龍姫は武器がなくても戦えるよう、体術を仕込んでいたのね!!」

「さすがですわ!!もしもの時に体術に移行できるって」

「けど、あとどれくらい時間が稼げるかわからないわ!!」

「あとは龍姫が生きている可能性に掛けるしかありませんわ!」

「大丈夫!!龍姫は絶対生きてるって!!みんな信じよう!!この状況でできることってそれしかないから!!」

「それもそうね」

「それもそうですわ!!」

結界の中に閉じ込められていた、ネプテユヌ・ベール・ブランは女神化が解けてしまっていた。

結界の中ではどうしようもなく龍姫が生きている可能性とネプギアの勝利を祈る他なかったのである。

「ボクは何もできなくて終わっちゃうの!!いやだよ!!みんなと一緒に帰らなきゃ行けないのに!!動いて!!ボクの体!!」

と龍姫ははまだ黒い雷の痺れが治っていなかったのである。

「あ!!そうだ!!卑しき闇よ!!退け!!リカバー!!よし!!動ける!!みんな待ってて今行くから!!」

と龍姫は痺れをリカバーを掛けたそして痺れが取れたので女神達が捕まっている場所に大急ぎで向かったのである。

「こんな!!小娘にわたしが苦戦しているだと!!このゲームギョウ界に破壊と絶望を与えるこのマジエコンヌが!!」

とマジエコンヌはガンブレイドを破壊したにも関わらず攻撃を緩めないネプギア相手に苦戦しているのである。

「なぜだ!!おまえらは!!諦めないのだ!!なぜだ!!なぜだ!!——そうまでして立っていられるのだ!!」

とマジエコンヌはネプギアに攻撃を当ててるにも関わらず立っていることに驚きを隠せないでいるのである。

「あなたには逆立ちしても無駄ですわ!!」

「そうね!!あなたには一生考えてもわからないわ!!」

「真の“ぼっち”には無理だもんね!!」

「そうです!あなたには“仲間”がいないから“仲間”いるわたし達はこうして立っていらるんです!!」

「そうここにはノワールの強い意志もあるんだ!!ここにいないけどノワールはノワールなりに戦ってるんだ!!」

とネプテューヌ・ベール・ブラン・ネプギアは仲間の絆の強さをマジエコンヌにぶつけていた。

「ほざけーこうしてやる!!」

とマジエコンヌは結界に指示を出したのだ。

次の瞬間、

「なんだ!!うわー」

「ブラン!!」

と結界の中にいるブランの悲鳴が聞こえてきたのだ。そして“ボキツ”と言う音が結界の中から聞こえてきたのである。

そう、マジエコンヌは結界に指示を出し、ブランの右足をへし折ったのだ。ブランの右足は絶対に曲がってはいけない方向に曲げられていたのだ。

「ブランさん!!」

「心配するな!!ネプギア!!おまえは目の前の敵に集中しやがれ!!このどアホ!!」

とブランは右足をへし折られながらもネプギアにマジエコンヌに集中するように激を飛ばした。

龍の女神の降臨

「やっと!!着いた!今助けに行くよ!!」

と先ほどまで海に落ち砂浜に打ち上げられていた龍姫は戦いの場に今、到着したのである。

一方その頃

プラネテューヌ教会では

「イストワール様!!」

「どうしたんですか!!アイエフさんこんなに慌てて」

「ネプ子たちが罠にはまって結界の中に閉じ込められました!」

「なんですって!!今、救出部隊を直ちにリーンボックスに派遣します。リーンボックスにも応援を要請したほうがいいでしょう、いまの現状を教えてくださいませんか?」

「今、龍姫とネプギアが殿《しんがり》をしているところですよ!!」

「なら!急ぐ必要がありますね!!」

とアイエフはイストワールに事の重大さを伝えて救出部隊の編制を開始した。

「はああー連牙弾!!鷹爪襲撃!!連牙飛燕脚!!」

とネプギアは今だマジエコンヌと激闘を繰り広げていた。のだがネプギアの体力が限界に近づいて来たのである。

「うふふ、もう限界か女神候補生!ならこっちから行くぞ!!」とマジエコンヌは自身の得物である錫杖でネプギアを吹き飛ばしたのである。

「わたしがやらなきや誰がみんなを守るですか!!」とネプギアはマジエコンヌの前に立ちはだかったのだが、満身創痍であることに変わらなかった。

そしてネプギアは前にのめり込むように倒れそうになった。その時、ネプギアは誰かに支えられていることに気付いた。ふと目をあけるとそこには

「た・・龍姫さん!!」

そう、海に落ちつて行つた、龍姫がそこにいたのだ。

「龍姫さん!!嘘じゃないですよ!!幽霊じゃないんですね!!」

「信じていましたわ!! 龍姫が生きてわたくし達の前に現れるのを」

「龍姫!! 生きててくれたんだ!! うれしい!!」

「遅いんだよ!! 龍姫!!」

ネプテューヌ・ベール・ブラン・ネプギアは龍姫の生還を喜んだ!
そして

「わりい!! もう限界だわ!!」

とブランはマジエコンヌにへし折られた右足の激痛で気を失った。

「ごめん! <m () m >道、込んで!!」続けて

「ネプテューヌ達返してぶっ飛ばされるのとぶっ飛ばされてネプテューヌ達返すのどっちか選んで?」

と龍姫はマジエコンヌに啖呵を切った。

「どつちも嫌だと言ったら?」とマジエコンヌは龍姫にそう答えた。

「なら選んであげるよ!! 今ここでぶっ飛ばす!!」

と龍姫はポーチにてを伸ばしあるもの取り出した。そして

「ごめんね!! ネプテューヌ!! ネプギア!! みんな!!」と龍姫は言いた。

そう、ポーチから取り出したのは転生したときにもらっていた「女神メモリー」であった。そして、

「我、女神に選ばれし者成り」

「我、龍の名を持つ者成り」

「我、この地に転生し者成り」

「我が、呼び声に答えよ」

「みんなを守るんだ!!」

「セットアップ!!」

龍姫は女神メモリー使ったのである。それを見た、ネプテューヌ・ベール・ブラン・ネプギアは驚きを隠せなかった。

「龍姫さん!!」

「龍姫!!」

そして龍姫の体が光出したのだ。

「この光景はネプテューヌとノワール、そして、フェイト・T・ハラウオン?」

龍姫の頭の中にある光景が入って来て、光が収まるとそこにいたの

は、

紫色の髪に前髪が黒のメッシュが入っており、服は黒と紫と青の混合色に白のラインが入っていて某魔法少女のバリアジャケットのような形で露出が少なく、髪型はノワールと同じくツインテールで身長は175cmまで伸び、瞳は右碧左翠のオッドアイでもちろん女神特有のゲーム機の起動ボタンマークもある、胸はベールより大きくなっていった。頭には龍の頭の様なものがついていた。両腕にはオープンフィンガーグローブに武士の籠手みたいになっていた。

もちろん瑠璃色の胴丸が装着されていて、痞えないように収まっていたのであった。

我、紫の龍の女神なり

龍姫は囚われの身になった、ネプテューヌ・ベール・ブランの三人、戦うことのできないノワールに変わって女神たちを助けるために龍姫は守るべきもののために「女神メモリー」を使ってしまったのである。

「これがわたし!!なの!?・・・あれ!?なんで自分のこと〃わたし〃って呼んでるんだ?」

龍姫は自分が女神になっていることに気づいてないのである。なぜなら

女神にあるはずの「翼」がないのに関わらずなぜか空を飛んでいるのである。

「あれが龍姫さんの女神化なの!!」

「あれ?わたしたちと違って「翼」がないのに飛んでるよ!!」

「本当ですわ!!どうやって飛んでいるんですの?」

「それに瞳が右碧左翠のオツドアイだよ!!」

「髪色は一応、紫をベースになってるといえ前髪が黒のメツシユが入ってますわ!!」

「武装がわたしたちのと違ってるよ!!」

とネプテューヌ・ベール・ネプギアは龍姫の女神化に思ったことを言っただうえで戸惑いを隠せないでいたのである。

「どうとう使ってしまったのですか!」と龍姫の頭の中に女神ツクヨミが語り掛けてきたのだ。

「はい!」と龍姫は自分に語り掛けてきたツクヨミに返事を返した。

「落ち着いて聞いてほしいのです!!今、あなたは女神になっていますよ。」とツクヨミは現在、龍姫の身に起きている状態を教えた。

「なんで?ネプテューヌ達みたいに「翼」がないのに空を飛んでるんですか?」と龍姫はツクヨミに自分にネプテューヌ達のように「翼」がないのに空を飛べることについて聞いた。

「それは、あなたが「女神メモリー」を使ったとき何を思い浮かべましたか?」とツクヨミは龍姫に聞いた。

「あ!!そーういや!!フエイト・T・ハラウオンをイメージしてネプテューヌの女神化した姿をイメージしてこの「女神メモリー」を使ったんだ!!」と龍姫は自分が見んなを助けたいと思ひ自身が懂れていた人物をイメージした結果がこれである。

続けて龍姫は

「じゃなんで瞳が右碧左翠のオッドアイなんです?」と龍姫はツクヨミに瞳が右碧左翠のオッドアイであることを聞いた。

「それはあなたが大切に思っている人物の瞳の色なんですよ!」とツクヨミは龍姫にそう説明した。

「ベールの女神化する前って確か碧眼でノワールは女神化すると翠眼だったけ!」と二人の目の色を思い出していた。

「それともう一つあなたにはある能力《チカラ》が覺醒しましたのです。」とツクヨミは龍姫にある能力が覺醒したと告げたのである。

そして続けて

「その能力はプラネテューヌの女神を覺醒させる能力です」とツクヨミは龍姫にプラネテューヌの女神であるネプテューヌ・ネプギアを新たに覺醒させる能力と伝えた。

「ノワール・ブラン・ベール・ユニ・ロム・ラムは覺醒させられないんですか?」と龍姫は疑問思っていたことを聞いた。

「はい!あなたにはプラネテューヌの女神しか覺醒させる能力しかないのです。また、あなたのように転生した者たちが近い将来、ここゲイムギョウ界にやってくるでしょう、その者たちはあなたのよくご存じの人物です。」

とツクヨミは言い残し通信が途切れてしまった。

霸王見参!!

「やってみるしかないよね!!」

と龍の紫女神になった龍姫は満身創痍のネプギアのそばに近よった。

「龍姫さんなんですよね?」とネプギアは女神化した龍姫が本人かどうか聞いた。

すると、

「そうだよ!!わたしはあなたの知っている“鳴流神龍姫”だよ。だけど今は紫の龍神 パープルドラゴンハートとでも名乗っておこうかな!!」

自分が女神化した“鳴流神龍姫”であることと女神としての名を名乗った。

「いきなりで、すまないけど今からネプギアの女神の能力を覚醒させる」と龍姫はネプギアに能力を覚醒させると伝えた。

「ええ!!?それってどう言うことですか?説明してください!!」

とネプギアは龍姫に説明するよう求めた。

「ごめん!!今は時間がないの説明は後に詳しくするから!じゃあいきなりだけど始めるよ!!」と龍姫はネプギアに手のひらを向けはじめた。

「この者の眠りし力よ」

「キヤツ!!」

「ネプギア(ちゃん)!!」

「この者の新たなる可能性を!!」

「我!この者に力を与えし者なり!!」

「目覚めよ!!この者に眠りし、「世界を牽引する霸王」の力よ!!」

と龍姫はネプギアの眠っている「霸王」の力を呼び覚まそうとしていた。

次の瞬間!!

「なにこれ!!キヤアアア!!」

とネプギアの体を包み込むように紫色の炎が現れたのだ。

すると、その紫色の炎が消えるとそこにいたのは

「これが・・・わたしなの？なんか？お姉ちゃんが女神化した時みたい
に声が少し大人ぽくなくなってるし、それに身長も伸びてる、それに胸
が大きくなってる!!」とネプギアが自分の身に起きたことに驚きを隠
せないでいた。

「あれがねねネプギアなの!？」

「あれが！ネプギアちゃんの「霸王」の力なんですの!」

とネプテューヌは自分の妹の覚醒した姿に驚きを隠せないでいた。
ベールはネプギアの眠っていた「霸王」の力の凄さに驚いていた。

なぜなら、ネプギアの武装が白から黒と赤みかかった紫色に頭の髪
飾りも同じ色が変わっているうえに身長も175cmまで伸びてお
り、胸も同じく女神化している姉と同じくらい大きくなり声も少し大
人っぽくなっていた。どこかの霸王の威光を感じさせていた。

「ふん!!」一人女神が増えたところで問題などないわ!!」とマジエコン
ヌは覚醒した龍姫達に余裕をこいていた。

「ほんじゃ!!始めようか!!本気の真剣勝負を!!」

「そして、お姉ちゃんたちを返してもらおうか!!」

と龍姫は海に転落した際、誤って日本刀を二本とも海に流されてし
まったので念のために買っていた二刀の短刀を二本とも抜刀し女神
化しているので刀身が紫色に染まった短刀を逆手に持ち構えた。

ネプギアは姉と同じく野太刀を何も躊躇いもなく抜刀した。

「行くよ!!ネプギア!!」

「はい!!龍姫さん」

こうしてネプテューヌ達を救出するための戦いの火蓋が再び切つ
て落とされたのだ。

ネプギアは「世界を牽引する霸王」「釈明王」の称号を修得した

女神たちの限界突破

紫龍の女神として覚醒した龍姫と霸王の女神として覚醒したネプギアは現在マジエコンヌと戦闘中である。

「魔神剣！」

「霸道滅封!!」

龍姫は二刀小太刀を逆手に持ち、ネプギアは姉の得物である野太刀でマジエコンヌと応戦していた。

龍姫は無属性の斬撃をネプギアはエクスマルチブラスターの要領で火属性の極太のビームを繰り出していた。

「なぜ!! 貴様らは諦めようとはしないのだ!!」とマジエコンヌは龍姫とネプギアの気迫に驚きを隠せないでいたのだ。

「人は大切なものためならどこまでも強くなるんだよ!!」

「龍姫さんの言う通りだ!!」

龍姫・ネプギアはそれぞれ、思ったこと言いマジエコンヌにぶつけた

「今度はわたしたちが頑張る番だよ!!」

「そうですね!! とりあえずこの状況から抜け出せないと話になりませんわ!!」

「そうだな!!」

「ブラン!! 気が付いたの!!」

「こんなことでくたばるブラン様じゃねえーよ!! 行くぞ!!」

「龍姫に習ったあの戦闘術があつたよ!! みんな行くよ!!」

「おう!!」

「ですわ!!」

「二飛ばしていきます行くよ!! (ますわ!!) (行くぜ!)」

ネプテユーン・ベール・ブランは自分の体の中から闘気を解放した。

前に龍姫が秘奥義を出す際に行っていた。「オーババリミッツ」をネプテユーン・ベール・ブランは同時に発動した。

すると、自分たちを閉じ込めていた結界にヒビが入っていったそれを見たマジエコンヌは

「一体、何が起こったのだ!!」と驚きを隠せないでいたのである。

「おばさん!!この借り100倍に返すから!」

「ええ!!キツチリブランの分も返させて貰いますわ!!」

そして結界が完全に破壊されて出てきたのは女神化したネプテューヌとブランをお姫様抱っこしたベールであった。

「ネプテューヌ・ベール・ブラン!!」

「お姉ちゃん!!ベールさん!!ブランさん!!」

「ごめんね心配かけちゃって!!よかったわ中身は龍姫とネプギアで安心したわ」

「あのかわいいネプギアちゃんがいきなり大人ぽくなったのでびっくりしましたわ!!」

「ブラン!!その足!!マジエコンヌにやられたの?」

ネプテューヌ・ベール・ブランは龍姫達に合流したもののブランがマジエコンヌに右足をへし折られたため、戦闘には参加出来ないのである。

「第三ラウンドを始めようか!!」

ネプテューヌ・ベールは野太刀・槍を構えた。

「飛ばしていきますか!!」

龍姫・ネプギアはオーバリーリミッツ1v4を同時に行った。

「わたしたちが援護するわ」

とネプテューヌ・ベールは援護に入った。

マジエコンヌ撃退

「たかが、オーラを纏っただけではないか!!」

マジエコンヌは龍姫たちを本気にさせてしまったことに気づいてなかったのである。

「覚悟はできた?デモンズランス!!」

「紅蓮剣!!」

「弧月閃!!」

「飛燕瞬連斬!!」

龍姫は魔術で形成した槍をマジエコンヌに目掛けて分投げ、ネプテューヌは火属性の斬撃をお見舞いし、ベールは槍で月を描くように攻撃し、ネプギアはマジエコンヌ目掛けて突進し瞬時に背後に回り込んで蹴りを入れながら斬り上げた。

「うぐーこれしきのこと倒れるマジエコンヌではないぞ!!」

マジエコンヌは余裕をかましているが表情に疲れが見えてきたのだ。

「ネプギア行くよ!!」

「わかった!!龍姫さん!!」

次の瞬間、

「機は熟した!当たっても知りません!!閃劍斬雨!!」

「はあぁー」

「いい腕です!!」

「はっ!」

「「駕王閃裂交!!」」

龍姫とネプギアは劍の雨を降らしその中を龍姫は何と!!走り抜けていき!!最後は二人同時に斬りぬける合体秘奥義で決めた。

「おぼえてろよ!!」

とマジエコンヌはどこかの当たり前の悪役の捨て台詞を吐いて逃げて行った。

「逃げるな!!」

「深追いは禁物ですわ!!それよりもブランを病院に連れって行かない

とですわ!!」

「それも！そうだね!! 聖なる活力、此処へ、ファーストエイド!! これ
で、少しは増しになると思うけど」

龍姫はブランに治癒術を掛けた。ネプテューヌは龍姫に疑問に
思っていることを聞いた。

「ちよつと龍姫!! 聞きたいことがあるの!! いいかしら!」

ネプテューヌは龍姫の女神化について聞こうしていた。龍姫は女
神化を解こうとしたら、龍姫の体が傾きそのまま気を失ってしまった
のである。ネプギアも同じようにそのまま倒れてしまったのである。
「龍姫!! ネプギア!! どうしよ! ベール!!」と一人慌ててるネプテュー
ヌであった。

「ネプ子!! ベール様!! ブラン様!! 龍姫!! ネプギア!!」と応援を呼びに
行っていたアイエフが駆けつけてくれたのだ。

「アイちゃん!! ナイスタイミング!! 三人とも病院に運ばないと!!」と
アイエフにネプテューヌは救急車の手配をするようお願いした。

「わかったわ!!」

アイエフは徐に携帯電話を取り出し救急車を呼んだのだ!!

「ううくん、ここは?」

「気が付いたですか? ここはプラネテューヌの病院です!!」

「龍姫!! 起きた!!」

「えくとどれくらい寝てたの?」

「あれからひと晩よ!!」

「ううくん、あ! お姉ちゃん!!」

「うるさいわよ!! 怪我に響くから」

「ブラン!! 怪我そんなにもひどかったの?」

「全治二週間よあなたが回復魔法を掛けてくれたおかげよ!!」

「ごめんボクがもう少し早く駆けつけて女神メモリーさえ使っていれ
ば!! こんなことになんて!! ならなかったのに!!」

「めそめそすんじゃないね!! お前はゲームギョウ界の危機を救ったことに
変わりないんだ!! お前は胸張って前向きやがれ!! こんな怪我、安いも
んだ!」

ブランは龍姫に激を飛ばした！

どうやら気を失った龍姫とネプギアはコンパの勤務するプラネテューヌの病院に搬送されてひと晩中寝ていたらしいもちろん足をへし折られたブランは緊急手術したらしくその足にはギプスが痛々しく巻かれていた。

龍姫の真実

「龍姫!! 起きたの!! 別にあなたのことなんか心配してないんだからね!! たまたま怪我の治療に来ただけよ!!」

「もうノワールたら本当は心配してた癖に!!」

ノワールとネプテユヌはおなじみのやり取りが繰り返していた。

「それは兎も角!! 水を差すようで悪いんですけど龍姫!! あなたの女神化について教えてほしいのですわ!!」

とベールは先日の龍姫に女神化の事を聞いてきた。

「わたしも気になるよ!! だってネプギアがわたしの女神化した状態と同じぐらい大きくなったんだよ!!」

「ええ!! ネプギア!! 女神化できるようになったの!!」

「それとね龍姫の女神化はなぜか「翼」のプロフェツサーユニットがないのに空を飛べるんだよ!!」

と龍姫が真実を話そうとしたときだった。

「何! この光は!」

その場にいた全員が光に飲み込まれてしまったのである。

「うくんここは・・・あ!!」

「ここどこ!!」

「いったい何なのよ!!」

「お姉ちゃん・・・大丈夫?」

「ああ大丈夫だ」

しばらく様子を伺っていると

「ようこそ転生の間へ」

「ガーン!! わたしたち死んじゃったの!!」

「落ち着きなさい!! ネプ子!! まだ死んだって決まるとわ限らないんだから!!」

「そうです!! あなた達をこちらに呼んだのは真実を話すためにお呼びしたんです。」

「あなた誰よ!! 真実って何!!」

「もし遅れましたわたしの名は女神ツクヨミと申します」

とツクヨミはネプテューヌ達に自己紹介をした。

「龍姫さんをゲームギョウ界に転生させた者と言えればわかるでしょうか？」

「「「え！それって龍姫が一度死んでるってこと!!」」」

その場にいた龍姫以外が驚きを隠せないでいた。

「はいそうです!!それともう一つ龍姫に与えた能力についてです」

「ネプギアが大きくなったのと関係があるの？」

「ええ!!もちろん!!その能力を与えたのはこのわたしなのですから!!」

とネプテューヌ達にツクヨミは龍姫の能力を与えたことを明かした。

「ボクの事嫌いになったよねごめんね!!本当の事言わなくて!!」と龍姫はネプテューヌ達に謝罪した。

「龍姫を嫌いになる理由がどこにあるの!!たとえば、一度死んじゃったとはいえこうして会えたんだから!!わたしたちが知っている龍姫は困っている人を見捨てることのできない”ほつとけない病”鳴流神龍姫なんだよ!!」

ネプテューヌは龍姫に好きであることを明かした。

「本当に一緒にいて良いの？」

「うん!!だから一緒に帰ろ!プラネテューヌへ」

「わたし感謝してるんですあの時自分の中にあった本当の自分を見つけてくれたのは龍姫さんですよ!!」

ネプテューヌとネプギアは龍姫に帰ってくるようにいった。

「わかったよ!!一緒にゲームギョウ界に帰るよ!!」

「そうそう!!あなた達に伝えておきたいことがあるんです!」

「なら、ゲームギョウ界に帰えます、ご武運を」

ツクヨミは龍姫たちを元の世界に帰えした

いすーんに報告するの巻

龍姫の能力はツクヨミに転生させられた時に授けてもらったものだということを知られた一行はコンパの勤務先病院の龍姫達の病室に帰還していた。

「ねえ、龍姫聞いてもいいかしら？わたしとユニを真の姿に覚醒させるの？」

ノワールは龍姫に自分と妹のユニを覚醒させられるか聞いた。

「それは無理なんだ、ボクはプラネテューヌの女神しか覚醒させられないんだ、覚醒できるのはボクと一緒に転生者で担当の国が決まってるらしいんだ、ごめん」

龍姫はノワールを覚醒できないこと伝え謝罪した。

「それはつまりわたくしにも妹ができるのですか！早く転生者を見つけないといけませんね」

ベールは転生者を妹にする気満々であった。

「あ!!どうしよう!!龍姫も一応、女神になったんだしわたしたちとは義理の姉妹になるよね」

「なんで!!そうなるんですの!!龍姫はわたくしの妹にしますわ」

「なにいちやってるのさ!!龍姫の女神化した時の髪の色とか見たでしょう紫色になっていたからわたしの義妹なの!!」

「アンタが妹の方がしつくり来るだけ!!」

みんなそれぞれ思っていることを言い出した。

「龍姫!!明日には退院できるってネプギアもだよ!!」

ネプテューヌは龍姫とネプギアに明日、退院できることを教えた。そして次の日

「やっと帰ってきたんだね!!」とプラネテューヌ教会の自分の部屋に帰ってきたのである。

「龍姫!!いーすんに報告しよ!!」

ネプテューヌは龍姫が女神になったことを一緒に伝えに行こうと誘っててきたのである。

「そうだね!!腹括るよ!!じゃ、一緒に行こう!!」

「いーすん!!今大丈夫?」

「ネプテューヌさんに龍姫さんどうしたんですか?それと龍姫さんもうお体の方は大丈夫ですか?」

いーすんことイストワールは龍姫の具合の事を聞いた。

「大丈夫ですよ!!」

龍姫はイストワールに大丈夫と伝えた。

「それはよかったです」

「そうそう!!いーすん!!ちよつと報告したことがあるんだよ!!」

ネプテューヌはイストワールに報告したいことがあることを伝え
た。

「ネプテューヌさん、報告したいことってなんですか?」

イストワールはネプテューヌに報告内容を聞いた。

「論より証拠だよ!!龍姫!!お願い!!」

「わかったよ!!セットアップ!!」

ネプテューヌは龍姫に女神化するように頼んだ。そして、

「ただ・・・龍姫さん!!あなた!!まさか!!女神になったんですか!!」

「うん!!わたし女神になっちゃったんだ!!」

と龍姫はイストワールに自分が女神になったことを見せつけた。
しばらくイストワールは開いた口がふさがらなかったのであった。

ネプ子!!妹になるの巻

龍姫が女神になったこととネプギアが霸王の紫女神になったことをイストワールに伝えた。

「まさか!!ネプギアさんまでも女神化できるようになったんですね。龍姫さんには女神になったことによる恩恵を教えなければなりません。」

とイストワールは龍姫に女神について教えた。

「なるほど、つまり早い話が“不老長寿”ってことでいい?」

「はいそうです!龍姫さんの場合はプラネテューヌのシエアの影響は受けないのでシエアが枯渇してもだいじょうぶですよ!!」

続けてイストワールは

「それと龍姫さんのプロフェツサユニットの事なんですけど、正確にはプロフェツサーユニットと違うもの様なんです」

イストワールは龍姫の女神の戦闘服こと「プロフェツサーユニット」ではないことを伝えた。

「ええ!!それってどういうこといーすん!!」

「はい!!龍姫さんは女神化した時、翼のプロフェツサーユニットなしで空を飛べると言うことはこのことは別の世界の服がモデルで作られたものなんです」

イストワールは龍姫のプロフェツサーユニットが別の世界のものだどネプテューヌに教えた。

「あれはじつは「プロフェツサーユニット」じゃなくて「BJ《バリアジャケット》」なんだ」

龍姫はネプテューヌに自分の女神化時の武装がバリアジャケットであると教えた。

「いいな!!わたしもほしいなバリアジャケット」

ネプテューヌはバリアジャケットを欲しがっていたので、龍姫は話題を変えるため疑問に思っていたことイストワールに聞いた。

「もしも!!ネプテューヌと義姉妹になっても大丈夫なの?」

「はい!!なぜなら、龍姫さんの場合はツクヨミ様による転生及び女神

メモリー使用による女神化ですから何の問題にもならないんですよ。」

と龍姫の女神の力はプラネテューヌのシェアに関係がないと伝えた。それとイストワールは龍姫に

「龍姫さんをお願いがあるんです!!」

「はい!!なんでしょう?」

「ネプテューヌさんとネプギアさんの義理のお姉さんになってほしいんです。」

と龍姫にネプテューヌ姉妹の一番上の義姉になってほしいと頼んだのである。

「ええ!!なんで龍姫は女神になったばかりなんだよ!!どう考えても!!わたしとネプギアの義妹になるんじゃないの!!」

「わーい!!お姉ちゃんが二人になるんだ!!てことは龍姫お姉ちゃんって呼ばないと」

ネプテューヌとネプギアは思ったこと言った。ネプギアの方は龍姫が自分の義理の姉になることに喜びを隠せなかつた。

「ネプ子!!一応、この国の女神が龍姫になるわけじゃないのよ!!あくまで龍姫はアンタのお義姉ちゃんよ」

「うん!そうだよ!!この国の女神はネプテューヌだよ!!それにボクがお姉ちゃんになったらネプテューヌとネプギアに名字が付くんだよ!!」

「ということとは縁組の話をお受けになられるんですね?」

とイストワールは龍姫にネプテューヌ姉妹の義理の長女になることについて聞いた。

「どこに行っても一緒だし、ネプテューヌの義姉になるよ!!よろしくいーすん!!」

龍姫はイストワールにネプテューヌの義姉になることを伝えた。

「お姉ちゃん!!今日からわたしたちのお姉ちゃんになるんだからこの髪飾りあげるね」

「ありがとう!!ネプテューヌ、大切にするね」

ネプテューヌは自分とお揃いの十字キーの髪飾りを龍姫にあげた。

龍姫は「プラネテューヌの女神の義姉」の称号を修得した。
スキット：名字

ネプ「そうか!! 今日から“鳴流神ネプテューヌ”になるんだ!!」
龍姫「そうだね!!」

ギア「つてことはわたしは“鳴流神ネプギア”になるんだ!!」

アイエフ（以後アイ）「そうなるわね!」

ネプテューヌは「紫龍の義妹」の称号を修得した

ネプギアは「紫龍の義妹」の称号を修得した。

「そうだ!! せっかくだし表札を作ろうよ」と龍姫が言った。そして、
「これで良しと!!」龍姫は自分の部屋の扉に「鳴流神」と彫られた表札
を掛けた

もう一人の転生者

ところ変わって転生の間になんか起きたみたいである。

「ううーん、ここはどこ!! 確かボクは龍姫ちゃんのお墓参りに向かっていたはず」

とどうやら龍姫とはべつの死者が転生の間に現れたらしいのである。

その容姿は金髪で髪をツインテールに結っていて身長は龍姫と同じくらいの少女であった。

「あなた!!のお名前は?わたしは女神ツクヨミと申します」

「え!!どうも、ボクは龍姫ちゃんの幼馴染みの獅子神星龍《ししがみせいりゆう》と言います」

と星龍はツクヨミに自己紹介した。

「時間がないので単刀直入に言うとなあなたは龍姫さんの墓参りに行く途中に車の事故で死んだのよ。」

「つてことはボクって死んじゃったの!!」

「落ち着いてください!!あなたをゲームギョウ界に転生させます!!」

「ゲームギョウ界?」と星龍はツクヨミに聞いた。

「はい!!あなたの幼馴染みの龍姫さんも転生しているんですよ。」

ツクヨミは龍姫がゲームギョウ界に転生していることを教えた。

「やった!!また龍姫ちゃんに会えるんだ!!」

と星龍は心から喜んだ。

「すいませんがこれをお渡します。「女神メモリー」と言われるものです!」 続けて

「それとゲームギョウ界の通貨で50000クレジットもお渡しします。」

星龍にお金と女神メモリーを渡した。

あとあなたにはラステイションに転生してもらいます。それと龍姫さんにも説明しましたがあなたにもゲームギョウ界とは別の異世界の術技の能力を授けます。ではご武運を。

とツクヨミは星龍をノワールが女神をしているラステイションに

転生させた。

一方その頃

「はあくよく寝た！ほんじゃあの二人でも起こしに行つてやるか!!」
と龍姫は自分の妹になったネプテューヌたちを起こしにいった。

「ネプテューヌ!!ネプギア!!おはよう!!」

「おはようお姉ちゃん!!」とネプテューヌが珍しくネプギアより早く起きたのである。

「ネプギア!!朝だよ!!起きて」とネプテューヌと龍姫はネプギアの起こすため布団を捲ると

「おはよう!!お姉ちゃんどうしたの?」

「何ってネプギアの胸が大きくなってるんだよ!!」とネプテューヌがネプギアの胸を指してるのである。ふとネプギアは自分の胸を見ると

「これって本物だよね?なんで!!大きくなってるの!!(。D。)」とネプギアの胸がベール並に胸が大きくなってしまったのだ。おまけに身長も163cmぐらいに伸びていた。

「どうしよう(T|T)／＼／＼これじゃブラが入らないよう!!服も着れないよ!!」とネプギアは困っていた。

「ちよつと待つててボクのサラシもつてくるから!!」と龍姫のサラシを借りて何とか事なきをえたのであった。

ラストテイションに舞い降りしたもう一人の龍

今、もうすぐラストテイションにもう一人の転生者が舞い降りようとしていた。

「ううくん、ここどこ？」

星龍はどうやらラストテイションの街はずれの平原に飛ばされてようである。

「あれって街だよね？あそこに行けば龍姫ちゃんのことわかるかも知れない」

星龍はラストテイションの街に向かって歩いて行った。しばらく進んでいくと、工場が建ち並ぶエリアの入り口に辿り着いたのである。

「わくあ、工場がいっぱいある!!とりあえずこの街の人に龍姫ちゃんのこと聞いてみないと!!」

星龍はこの街の人に幼馴染みの龍姫のことを聞いて回ることにしたのだ。しばらく歩いていると

「ぐうくおなか減ったあれって食堂だよね？」

どうやら星龍は街を歩き回っていたため空腹に見舞われたらしくたまたま近くにあった食堂に入ることになった。

「いらっしやい初めて見る客だな!!どのメニューを頼むんだ？」

「この秋刀魚定食ください!!」

と星龍は食堂で秋刀魚定食を頼み、食堂の女将さんにこの街のことをきくことにした。

「すみません、この街ごと詳しく聞きたいんですけどいいですか？」

「だったら、この街の教会に行ってみたらどうだい？」

「教会ってあの、結婚式とか挙げる教会ですよね？」

星龍は教会について思ったことを言ってみた。

「そう!!教会といってもこの国を統治してる機関だよ。一応、プラネテューヌ・リオンボックス・ルウィーにもあるんだよ!!」

と食堂の女将さんは星龍に教会が各国にあることを教えた。続けて

「教会には女神様がいるんだ。でここラストテイションの女神様の名前

はブラックハートと言うんだよ。この街のことを聞くなり、ブラックハート様に会いなさい。出てすぐの道を右に真つ直ぐに行つたらいいわ」

女将さんは星龍にラステイションの女神に会うように言った。

「女将さん!!ありがとうございます!!」ごちそうさまだした。」

星龍は女将にお礼を言い、お代を支払って教会に向かった。

「あれが教会かな?行ってみよう、すみません」

星龍はラステイション教会に入って行った。

「ようこそ!ラステイション教会へボクはここで教祖している神宮寺ケイだ。この教会に何か用なのかい?」

教会に入って行った星龍はラステイション教会の教祖の神宮寺ケイに出会った。星龍はケイに

「あのくブラックハート様にお会いしたいと思ひまして、だめですか?」

星龍はケイにラステイションの女神ブラックハート様に会いたいと伝えた。

「なら!!待ってもらってもいいかな?ブラックハート様に面会の許可をもつてくるから」

「わかりました。ここに座って待ってます。」

ケイはブラックハートに面会の許可の申請をしに行った。その間、星龍は教会の椅子に座って待っていると伝えた。

「ノワール!!ユニ!!入るよ!!」

「!どうしたの?ケイ?」

「キミに面会したいという人が来てるよ。もしダメなら断つとくけど?」

ケイはブラックハートことノワールに面会希望者が来てることを伝えた。

「別に構わないわ!!謁見の間にお通して上げて。」

「わかったよ、伝えてくるよ。」

ノワールはケイに面会者を謁見の間に案内するよう言った。

星龍、黒の女神に会うの巻

ラストイション教会にやってきた星龍は面会の許可を待っていた。しばらくすると、

「面会の許可が下りたよ!!これから謁見の間に案内するから着いて来て!!」

ケイは星龍に面会の許可が下りたことを伝え謁見の間に案内するので着いて来てほしいと伝えた。

「わかりました。(龍姫ちゃんのご事はブラックハート様ならわかるかも知れない)」

星龍は幼馴染みである龍姫の居場所知るため、ブラックハートに会うこと決めていたのだ。

しばらく歩いていると

「ここが謁見の間だよご無礼のないよう頼むよ。」

ケイは星龍に失礼なことしないように言った。わかりました。と星龍は答えた。

「あなたがわたしに面会したいと言うのは？」

「はい!!ボクは獅子神星龍と言います。ブラックハート様に尋ねたいことがありますして」

星龍はカーテン越しの女神ブラックハートに尋ねたい事があると言った。

「その、尋ねたいことは?何?」

「それは、鳴流神龍姫をご存知でしょうか?」

星龍はあえて龍姫の幼馴染みと言うことを伏せて龍姫のことをブラックハートに尋ねた。すると、

「今、なんて言ったの?鳴流神龍姫と聞こえてきたのだけど。」

「はい!!鳴流神龍姫の居場所を知っているかもしれないと思いいここに来ました。もし知っているのであれば教えてくれませんか?お願いします!!」

星龍はブラックハートに龍姫の居場所を教えてくださいるように頼んだ。すると

「いいわ!!彼女は今、プラネテューヌの教会で働いてるわ。」

ブラックハートは星龍に龍姫はプラネテューヌ教会で働いていることを教えた。

「ありがとうございます。ブラックハート様!!」と星龍はブラックハートにお礼を述べたあと謁見の間を出ようと時だった。

「ブラックハート様!!大変です!!街はずれに魔物《モンスター》が現れました!!今、ユニ様が撃退に向かいました。」

教会職員らしき人が慌てて入ってきたのである。

「え!!ユニが!!こんな時にわかったわ!!(左腕だってまだギプス取れてないのに!!)」とブラックハートが出撃しようとした時、星龍は感じていたのだ。そして、ブラックハートに向かつて

「もしかしてですけど?お怪我をなさってるんですか?」

と星龍はブラックハートが怪我をしてるのではないかと薄々感じていたのだ。

「どうしてそのことを!!」

ブラックハートは自分が左腕を負傷していることを星龍に気づかれていた。

「はい!!なんとなくですけど!!思っただけです。失礼しました。」

と言い残し星龍は謁見の間を後にした

「まさかよね?わたしの思い違いだったらいのだけど、そんなことより魔物《モンスター》を撃退しないと!!仕方ないわよねあの子に応援を頼むしかないわね」

とブラックハートはある人物に応援の連絡をした。

ところ変わってプラネテューヌでは

「今日で三日分の書類が片付いたね」

「うん!!これも龍姫お姉ちゃんのおかげだね」

「この国の女神なのに書類関係ダメでごめんね!!お姉ちゃん!!」

二人の姉になった龍姫・ネプテューヌ・ネプギアの三人は三日掛かる書類の仕事を一日でやってしまったので三人は二日間の休暇をもらってプラネタワーの展望デッキで日向ぼっこをしているのであった。

すると龍姫はイストワールから渡されたNギアが突然、鳴りだした。

「だれだろう？あ、ノワールからメールが届いてる。なにになに？えくと・・・ええ!!」

「ねぶ!!どうしたの？お姉ちゃん!!」

ネプテューヌは龍姫が驚いてるので恐る恐る聞いたのだ。

「大変だよ!!ラステイションの街はずれに魔物《モンスター》群れが現れたってユニが一人討伐隊に加勢してるから助けてほしいってノワールからメールで応援要請がきたよ。」

「ええ!!大変だよ!!まだノワール、ギブスが取れてないよ急がないと!!変身!!行くわよお姉ちゃん!!」

「そうだね!!ネプギア!!いい子にお留守番しててね!!セットアップ!!」

龍姫はネプテューヌと二人は女神化してラステイションの魔物《モンスター》の群れがいる場所に向かった。

この時、龍姫は幼馴染みがこの世界に転生していること知らなかったのだった。

黒の大地の危機の巻

ネプギアはというと

「はあくいいなくお姉ちゃんたち戦えて」

とネプギアは姉たちの飛んで行った方角を向いて黄昏ていた。なぜなら

「ネプギア!!一回、女神化して見て」と龍姫はネプギアに女神化するように言った。

「わかったよ!!龍姫お姉ちゃん!!変身!!」

ネプギアは女神化した。するとプロフェッサーユニットにヒビが入りだしたのである。そして

「きやああ!!なんで!!プロフェッサーユニットが壊れたの?」

ネプギアのプロフェッサーユニットが粉々に砕け散ったのである。

「もしかしてなんだけど、霸王の力に耐えられないのかもしれない。」
「そんな!!ってまた胸が大きくなってる!!」

ネプギアのプロフェッサーユニットが霸王の力に耐えられないのであった。その上女神化したので胸が大きくなっていった。

「どうしよう!!せっかく女神化出来るようになったのにこれじゃ戦えないよ!!うえくん(; | ;) / ~ ~ ~」

ネプギアは泣き出してしまったのである。

「ねえ、ネプテューヌ、聞きたいことがあるんだけど?」

「何?お姉ちゃん!!」

「ゲームギョウ界って企画書を書いて、企画書に書かれた素材を集めてアイテムを作るんだよね?」

「うん!!そうだよ!!受理されたらショップに並ぶんだよ... ってまさか!!」

ネプテューヌは龍姫のやろうとしてる事がわかったらしい

「企画書の書き方教えてくれないかな?企画書でネプギアの「バリアジャケット」作れるかもしれない」

龍姫は「バリアジャケット」の企画書を作成して、ネプギアの「バリアジャケット」作ろうとしていた。

「わかったよ!! 教えてあげるよ!! これでネプギアが戦えるのなら」とさっそく「バリアジャケット」の企画書を作成した。

今に至るのである。

「早くできないかなわたしの「バリアジャケット」できたらさっそくお姉ちゃんたちの加勢に行かないと」

ネプギアは自分のバリアジャケットが早く完成してほしいと思っていた。

一方その頃

「あそこみたいだね!! あれあそこ誰か倒れてる!! 助けないと」

星龍は魔物《モンスター》の群れが出たとされる場所に来ていた。どうやら、誰か倒れていた。

「お姉ちゃん!! ごめんね!! こんな妹でもうだめみたい素直になれなくてごめんなさい」

ユニはモンスターと戦闘中に左足を骨折したらしく動ける状態ではなかったのである。その上姉同様に左腕も骨折したのである。

「大丈夫ですか? ひどい怪我!! どうしよう!! . . . この術使えるのかな! 彼の者を死の淵より呼び戻せ!! レイズデット!!」

星龍は上級回復魔術の「レイズデット」掛けたすると

「ありがとう!! 助けてくれて、アタシ行かないと、うぐっ」

ユニは戦線に復帰しようとして立ち上がろうとしたが激痛が走ったのでそのまま蹲ってしまった。

「ダメです!! 骨が折れています!! 応急手当しますね!!」

星龍はユニに応急手当を施している時であった。

「逃げて!!」ユニが言うが時すでに遅しである。その時

「魔神剣!!」

誰かが斬撃を飛ばしていたのである。

「ユニ!! どうしたの? 早く病院に連れて行ってあげて」
「わかりました。」

と星龍は助けてくれた人にお礼を言いユニを肩に担いで病院へ走ったのである。その人こそ星龍が探していた人物で幼馴染みの龍姫であった。

龍の再会

ラストイションを襲った魔物の群れは龍姫とネプテューヌの加勢によって解決した。が今ラストイションのとある病院で大怪我をしたユニの緊急手術中である。

もちろんユニの姉のノワールも駆けつけている。龍姫はあえて女神化を解除して手術室の前でネプテューヌと一緒にユニの手術の経過を待っていた。

スキット：ユニの緊急手術

ノワ「ユニ!! どうして一人で行ったの!!」

龍姫「もしかしてなんだけど? ユニはノワールのことを思っ一人で行ったじゃないのかな?」

ネプ「ノワールがそんなじやダメだよ!!」

ノワ「ありがとう!! そしてごめんね!! 連絡するの遅れて」

龍姫「別に気にしてないよ!! こつちも早く気付いていたらこんなことにならなかったのにごめん」

ノワ「気にしないでいいのよ!! 悪いのはこつちだし」

どうやら手術が終わったらしく手術中のランプ消え、中からお医者さまとストレッチャーに乗ったユニが出てきた。

「先生!! ユニの容態は」

「安心してください!! 命に別状はありませんそれに応急手当が早かったので二〜三週間で完治しますよ。後遺症の心配もありません」

ユニを手術した医師はノワールに命に別状と後遺症の心配がないことを教えた。そのまま、ノワールはユニの病室に走った。

「やっと会えた!!... 龍姫ちゃん!!」

「ええ!! 星龍!! なんでここにいるの!! まさか!!」

龍姫は幼馴染みの星龍がいることに驚きを隠せないでいた。星龍は龍姫に再開した喜びと勢いで抱きついた。

「この世界にいると言うことはボクと一緒に転生者になったの? そうだ!! 場所を移そう」

龍姫は星龍を連れて病院の外に出て病院の前のベンチに座った。

「うん!!ごめん龍姫ちゃんのお墓参りに行く途中で事故に巻き込まれて死んだってツクヨミ様が言ってた」

「ってことはユニに治療術掛けたのって星龍なの!!あと病院の前で縁起の悪いこと言わないで」

龍姫は星龍に病院の前で縁起の悪いこと言わないでと注意した

「うん!!そうだよ!!...ユニって誰?」

「ユニはブラックハートの妹だよ」

龍姫は星龍にユニがブラックハートの妹であることを教えた。

「ええ!そうなのって龍姫ちゃん女神様になんでタメ口なの?」

「なんでってボク一応、ブラックハートことノワールの友達だから」

龍姫は星龍にノワールと友達であることを教えた。

「もしかしてなんだけど?」

「それ女神メモリーだよ!!黒色なんだ!!ボクのは紫色だったよ」

「女神メモリーって何?」

星龍は龍姫に女神メモリーについて聞いた。

「適正者を女神にできるものだよ、ボクも、もらったけど、もう使っちゃったんだ」

「使っちゃったってことは龍姫ちゃんは女神なの」

「うん!!ごめんあの時言ってあげれなくて」

龍姫は星龍に自分が紫龍の女神なったことを明かした。

「じゃあ女神化してよ!!」

「わかったよ!!セツトアップ!!括目して」

「これがわたしの女神の姿だよ!!」

「龍姫ちゃんだよね?」

星龍は龍姫の女神姿に開いた口がふさがらなかつたのであった。

黒龍の女神

ノワールはモンスターとの戦いで負傷したユニの病室に来ていた。
「ううくん、お姉ちゃん」

「ユニ!!」

「ユニちゃん!!」

どうやら、ユニは目を覚ましたようで。ユニが負傷したと聞いてネプギアも飛んできたのである。

「ごめんねお姉ちゃん、アタシ一人で討伐隊に参加しておまけにお姉ちゃんの怪我が治ってないのにアタシまで大怪我しちゃた。」

「ううん、ユニはわたしのことを思ってたことだってわかっているから。それにあとで龍姫達にお礼を言いなさい、龍姫たち心配してたから。」

ノワールはユニに龍姫達にお礼を言うように言った。

「ユニ!!目が覚めたの」

と龍姫たちはユニの病室に入ってきた。

「ありがとうございます、アタシを助けてくれて」

「ボクはじゃなく星龍にお礼を言いなよ!!ユニに回復魔法掛けたの星龍だから」

龍姫は星龍にお礼を言うように言った。

「龍姫?星龍とどういった関係なの?」

ノワールは龍姫に星龍との関係を探ねた。

「星龍はボクの〃幼馴染み〃だよ!!もちろん女の子だけど」

龍姫は星龍が自分の幼馴染みであり星龍も女の子であると明かした。

「二〃ええ〜幼馴染み!!で女の子!!二〃」

とその場にいたネプテューヌ・ノワール・ネプギア・ユニは絶叫していた。

「つてことは「転生者」だよな?」

「はい!!そういうことになります。」

星龍はネプテューヌに自分が転生者であることを教えた。

「自己紹介がまだでした。ボクの名前は獅子神星龍です。」
「わたし!!ネプテューヌ!!プラネテューヌの女神パープルハートなんだ!!」

「ノワールよラステイシヨンの女神ブラックハートよ」

「プラネテューヌの女神候補生のネプギアです。」

「ラステイシヨンの女神候補生のユニです。」

とおのおの自己紹介した。

「そうそう!!あと敬語はいらないわ!!」

ノワールは星龍に敬語をやめるようにいった。

「わかりました。改めてよろしく!!」

「それに龍姫の幼馴染なんだし遠慮はなしよ。」

「それはそうとノワールこれからどうするの?二人とも骨折してるから」

ネプテューヌはノワールにこれからのどうするか聞いた。すると

星龍はノワールに向かって

「だったら、ボクがお世話役になるってのはどうかな?」

星龍はノワールに自分が日常生活のお世話役を買って出た。続け

て星龍は

「それに実はボク「黒龍の女神メモリー」の適正者だから、これが証拠だよ。」

星龍はノワールに自分が「黒龍の女神メモリー」適正者であることを明かした。するとノワールは

「ええ!!そうなの!!だったら、お願いできるかしら?」

ノワールは星龍に自分のお世話役になってほしいとおねがいをした。

「はい!!よろこんで!!お受けいたします。」

星龍はノワールの頼み受け入れた。

紫と黒の日常

星龍がノワール専属のお目付け役になって丁度一週間が過ぎた。ノワールは星龍を連れて病院へ、行く理由はというとユニが退院するのと自分の左腕の怪我の治療である。

「はい!! 終わりましたよ。ノワール様」

「ありがとうございます!! 先生」

「まだ、重たいものを持つてはだめですよ。」

「わかってます。」

ノワールは今日でギブスが取れたのである。すると

「ノワールちゃん!! おめでとうギブス取れたんだ。」

「やつと左腕が動かせるけどあまり重いものが持てないのよ。ユニの方はどうなの?」

ノワールは星龍にユニのことを聞いた。すると奥の方から看護師に車椅子を押してもらってるユニがやってきた。

「お姉ちゃん!! ギブス取れたの!!」

「そうよ、ユニ、あなたもすごい回復速度だつて先生がおしやつてたわよ。普通なら1〜2月掛かってもおかしくないつて」

ノワールはユニの治療力の速さに病院の医師と共に褒めた。

「お姉ちゃんだつて普通は一ヶ月掛かるつて言われてたじゃない。」

「そうだったわね!! 多分、龍姫と星龍の力の影響のおかげかもね。ありがとう星龍!!」

「そんな!! 大したことしてないよ。」

ノワールとユニは改めて星龍とここにはいない龍姫にお礼を言った。

「ほんじゃ!! 教会に帰りますか!!」

ノワールたちは教会に歩みを進めた。

一方その頃

龍姫は開発室にいた。そうネプギアのバリアジャケットが完成したのだ。

「よし完成だね。ネプギア女神化してみて」

「わかった、龍姫お姉ちゃん!!変身!!」

龍姫はネプギアに女神化するように指示を出した。そして

「これがわたしの「バリアジャケット」!?。」

「気に入ってくれた。ネプギア!!」

ネプギアのバリアジャケットはプラネテューヌカラーの紫を基調にしており白のラインが入っていて、ネプギアがいつも来ているセーラワンピースをモチーフにしており足首までスカート丈があり正面にスリットが入っている。両手にはオープンフィンガーグローブを装備して手の甲にはガントレットのような鉄板ついている。腰に刀を差すホルダーが付いているベルトが装着され下に来ているインナーは紫色で統一しており、両足にはレガースの着いたブーツが装備されていた。髪型はツインテールである。髪飾りは白い羽が二つ付いていた。

「ありがとう!!龍姫お姉ちゃん!!これで心置きなく戦える!」

「どういたしまして、ささとボクも日本刀を作らないと」

龍姫はネプギアのバリアジャケットを完成見届けので自身の得物であり、星龍の得物である、日本刀の企画書の作成に取り掛かった。なぜなら、自身の女神の力に普通の刀は持ちこたえられないのだった。

「確か、鉄鉱石と木材と鉄板だったよね?」

龍姫が作るとしているのは「ニバンボシ」と「三日月宗近」と「童子切安綱」と「大典太光世」と「鬼丸国綱」と「数珠丸恒次」という名の異世界の名刀及び妖刀である。

そして

「やっとできた!この刀はボクの愛刀にするかな。「童子切安綱」と「鬼丸国綱」を」

龍姫は完成した「鬼丸国綱」と「童子切安綱」を自分の得物にした。後の四振りには後に手渡しで星龍とネプテューヌとネプギアとノワールにそれぞれ渡す予定である。

双子の転生龍

今、龍姫はネプテューヌ・ネプギアと一緒に廃工場に巨大魔物《ギガントモンスター》の討伐クエストに来ている、もちろん新たな愛刀の「鬼丸国綱」と「童子切安綱」の二本の刀を差している。ネプテューヌに「三日月宗近」ネプギアに「数珠丸恒次」をそれぞれに渡ししてある。

二人とも龍姫の力に共鳴しているようで龍姫がこれまで修得した。ゲームギョウ界とは別の異世界の術技を取得している。各属性の単独秘奥義をも取得済みである。

「鳳凰天駆!!」

「魔神双破斬!!」

「破邪十字星!!」

龍姫は鳳凰の形の炎を纏い上空に飛び上り特攻しネプテューヌは斬撃を放つと同時に斬り上げ、斬り降ろした。ネプギアは突進しすれ違いざまに十文字に斬り捨てた。

「緋凰!!絶炎衝!!」

「これで決めるよ!!ネプテューンブレイク!!」

「心得てください!!我が剣は霸王の刃!!六道の悪行は許しません! 關・魔神王剣!!成敗!!」

龍姫は鳳凰天駆のように上空から特攻し地上で振り向きながら切り抜け、ネプテューヌは自身の必殺技《エグゼドライブ》でネプギアは打ち上げた敵に向かって魔法弾で捕らえ大上段から斬り捨てた。

もちろんこの時は龍姫たちは女神化を行っていないのだ。

「チヨロイゼ」

「甘いぜ」

「チヨロ甘だね」

スキット：覚醒

ネプ「いいなくネプギアは覚醒できてその上バリアジャケツトでプロフェッサーユニットより速く飛び回れるんだもん、女神化したらわたしより大きくなるし、わたしいらない子かな?」

ギア「そんなことないよ!!お姉ちゃん」

龍姫「ネプテューヌ!! そんなに落ち込まなくても! 近いうちに覚醒させてあげるよ!! 帰って一緒にプリン食べよ」

ネプ「うん!! なんか元気出てきた! 確か覚醒ってピンチになった時だよ」

龍姫「そうだとは思うけど」

龍姫たちは巨大魔物を討伐したので、ギルドに報告し行き、教会に戻った。

「うくん!! 一仕事終えたプリンは最高だね!!」

「そうだね!!」

「風呂上がりの牛乳じゃないよ!! (あの二人今頃何してるだろう?)」

龍姫たちはプリンを食べながら雑談をしていた。龍姫は幼馴染みであった双子のことをかながえていた。

ところ変わってまた転生の間に動きがあったのだ。どうやら、今度は何と双子の少女の死者であった。

「ここはどこ?」

「ボクたちは確か龍姫ちゃんと星龍ちゃんのお墓参りに行って、家に帰ってるところまでは覚えている」

双子の容姿は青髪に左右対称にサイドテールに結っており身長は龍姫より少し低く二人とも162cmぐらいだが胸は着痩せしてるのでわからない。二人とも右利きである。

「おや? 今度は双子なのですか? わたしの名は女神ツクヨミです!!」

「ボクは神楽堂輝龍《かぐらどう きりゆう》です。龍姫ちゃんと星龍ちゃんの幼馴染みです。」

「同じく神楽堂飛龍《かぐらどう ひりゆう》です」

とお互いの自己紹介が終わった。

「単刀直入に言いますとあなた達はお墓参りの帰りに雷に打たれて死んだのです。安心してください!! 今すぐにゲームギョウ界のリーンボックスに転生してもらいます。」

ツクヨミは二人に死んでしまったことを告げ女神候補生のいないリーンボックスに転生させると言った。

「お二人にこれをお渡しします。「女神メモリー」というものです。あと二人で50000クレジットです。」

「綺麗な緑色だね。」

ツクヨミは輝龍と飛龍に「緑龍の女神メモリー」を渡した。

「準備できました。」

「二人に幸あれ」

と二人はリーンボックスに旅立った。

緑の大地に舞い降りし双子龍

今、ゲームギョウ界に新たなる転生者が舞い降りてきた。

「ううくん、ここ、どこ？」

輝龍・飛龍の二人はどうやらリーンボックスの近くの草原に飛ばされたらしい。二人は辺りを見渡した。すると飛龍は

「あそこに町があるよ」

「行って観ようよ!!飛龍!!」

二人はリーンボックスの街に行くことにした。しばらく街道を歩いてみると街の入り口に到着した。

「ビルが多いね〜輝龍」

「そうだね!!飛龍、何だろう?あの建物?行ってみよう飛龍!!」

「うん!!わかったよ!!輝龍」

輝龍と飛龍の二人はリーンボックスの街並みに感想を述べた後、とある建造物に行くことにした。

「うわ〜すごいよ庭に噴水があるよ!!飛龍」

「輝龍!こつちに来て、「ここリーンボックス教会」って書いてるよ。」

「ええ〜!!ここ教会なの!!飛龍」

「うん、そうみたい」

輝龍と飛龍はリーンボックス教会の外見を見て思っていたことを述べた。ふと二人は空を見上げると

「なんか曇ってきたよ!!雨だよ」

「降って来たよ!!仕方ない教会の中入って雨宿りしよう」

輝龍と飛龍の二人はリーンボックス教会の中で雨宿りをすることにした。

「飛龍〜大丈夫?」

「うん!!大丈夫だよ輝龍!!」

「中は普通の教会みたいだね。」

「だってあそこに神父さんの教卓があるよ。」

二人は教会の内装は至って普通だと述べた。

「はあくなんか眠くなってきたちやた;つひ、」

「ボクもだよ（―・―）」

輝龍と飛龍の二人はリーンボックス教会の備え付けられている長椅子に座っていたらそのままの勢いで寝てしまったのである。すると二人は寝言で

「龍姫ちゃん〜星龍ちゃん〜」

「どうして死んじやったの〜」

龍姫と星龍の名前を寝言で言っていたのだった。すると、

「あら、まあ〜こんなところで寝てると風邪引きますわよ!! 困ったわ起きそうにないわね。」

教会の誰かが輝龍と飛龍が寝ているの見つけたが一向に起きそうにないので困っていた。すると、

「あらチカどうしたの?」

「ケイブ!! ちようどいい所に実はこの二人の女の子をどうしようかとかんがえていたところだったのよ。」

「だったら、二人を客間に運びましょう。私も手伝うわ。」

「ありがとうケイブ!!」

リーンボックス教会の教祖チカはたまたまきてくれた、リーンボックス特命科のケイブと一緒に寝てしまった二人を客間に運ぶことにした。その間も輝龍と飛龍は

「龍姫ちゃん〜」

「星龍ちゃん〜」

と寝言で龍姫と星龍の名前を言い続けていた。それに気づいたのか

「星龍は兎も角、龍姫は確かベールお姉さまのご友人だったはず、こうしちやいられない運び終わったらお姉さまに報告しなきゃ」

チカは二人が龍姫の関係者かもしれないと思えばベールに報告することにした。

緑双龍、リーンボックス教会にお泊まりの段

チカとケイブは二人を客間のソファアームまで運んで二人に毛布を掛けて、

「ケイブ、ありがとう本当に助かったわ」

「いや、別にたまたま教会に寄っただけよ」

「じゃあ、また後で、ベールお姉さまにこのことを報告しないといけな
いから。」

とチカはケイブにお礼を言い、リーンボックスの女神グリーンハートことベールに輝龍と飛龍の二人が寝言とはいえ「龍姫」の名を呼んでいたこと報告しに行った。

「ベールお姉さま!! よろしいですか?」

「チカ!! 今は大丈夫ですわ!! 入ってらっしゃい」

「では!! 失礼します!!」

チカはベールの部屋に入って行った。

「チカ、どうしたのですか?」

「お姉さまに報告に参りましたの」

「報告とは? 一体」

ベールはチカに報告内容を聞いた。すると

「はい、実は双子の女の子を保護したんですがお姉さまのご友人の「龍姫」様の名前を言っていたんです。」

チカはベールに自分の友人の「龍姫」の名前を言っていた双子の女の子を保護したとベールに報告した。

「なんですって!! (。D。) チカ!! その双子はどこにいるのですの
!?!」

「落ち着いてください!! お姉さま!!」

ベールは龍姫のことを知っているかもしれないと報告され興奮状態になってしまったのだ。

チカはベールに落ち着くように言った。

「ですが!! 二人とも寝言で龍姫様の名前を言っていたので確証はない
ですわ」

「でしたら、チカ、その二人に起きましたらここに泊まってもらって明日、龍姫に来てもらうように手配するように」

「はい、わかりました。お姉さま!!」

ベールはチカに二人に教会に泊まってもらうように言い、明日龍姫に来てほしいと伝えた。

「わたくしにも義妹ができるのですわ!!」

ベールは義妹ができるかもしれないとはしゃいでいた。

一方その頃

「お姉ちゃん!!何してるの!!」

「ただ、窓の外を見てただけよネプテューヌ」

龍姫は雨の降っている外を窓越しに黄昏ていた。すると龍姫のNギアがなったのだ

「誰からだろう?チカからだ何々?」

「チカ、なんだって?」

「えくと、あなた様の名前を知っている双子の女の子を保護したので、確認のため、明日リーンボックス教会にきてください。リーンボックス教会教祖 箱崎チカ だって」

龍姫はネプテューヌ達にわかるようにチカからのメールを読み上げた。

「龍姫お姉ちゃん!!間違いなく転生者だよ!!」

「おまけにお姉ちゃんの名前を言っていたって言うてるんでしょう。」

「そうだね!!明日、リーンボックス教会に行くけど?着いてくる?」

龍姫はネプテューヌ達にリーンボックスに着いて来るか聞いた。

「もちろん!!行くよ!!」

ネプテューヌ・ネプギアは着いてくると応えた。

「はあくよく寝た・・・どこ?飛龍!!起きて!!起きてっば」

「何?輝龍?・・・どこ?」

「あらく起きたんですの?」

「誰ですか?」

輝龍と飛龍の二人はいつの間にか寝ていた間に客間に運ばれていたことに気づいていなく入ってきたチカを見るなりパニック状態に

なっていた。

「申し遅れました。ここリーンボックス教会教祖 箱崎チカと申します。あなた達のお名前をお聞きしたいのですが、よろしいでしょうか?」

チカは二人に自己紹介をして名前を聞いた。

「ボクは神楽堂 輝龍です」

「同じく、妹の神楽堂 飛龍です」

二人はチカに自己紹介をした。

「お二人には今日、このリーンボックス教会にお泊りになってください。」

「いいんですか?泊まっても?」

「グリーンハート様がお二人に泊まってもらうよう応接かっています。なのでお泊まりになってください。」

チカは二人に教会に泊まっていくように薦めた。

「あの〜グリーンハート様って誰ですか?」

輝龍と飛龍の二人はグリーンハートが誰かわからないのでチカに聞いたのである。

「そうでしたね!ここリーンボックスを統治されておられる女神様ですよ」

チカは二人にこのリーンボックスを治めている女神だと教えた。

「ってことは・・・国のトップなんですか!!」

「はい、そうです」

輝龍と飛龍の二人はグリーンハートが国の最高責任者で女神だと聞いて驚きを隠せないでいた。しばらくして落ち着いたのでチカは二人に

「では、あなた達お泊まりになられるお部屋にご案内しますわこちらへどうぞ!!」

チカは二人を宿泊させる部屋に案内するためついてくるように言った。

「今日はこの部屋にお泊まりになられてください」

「ありがとうございます!!」

輝龍と飛龍の二人はチカにお礼を言い部屋でくつろぐことにした。しばらくして二人の頭にツクヨミから通信が来たのだ。

「輝龍さん、飛龍さん聞こえていますか？ツクヨミですけど？」

「はい、なんでしようツクヨミ様!!」

「二人にお話が会って連絡をさせていただいています。単刀直入に申しますとゲームギョウ界とは別の世界の術技の能力を授けておきました。後、女神メモリーについては龍姫さんに聞いてください、ではご武運を」

と言つてツクヨミは通信を切った。

「術技の能力ってなんだろう？」

「それよりもこの世界に龍姫ちゃんはどこかにいるんだね」

二人とも龍姫がゲームギョウ界に転生しているという事実を知つてよろこんでいた。

緑双龍、女神に会うの段

輝龍と飛龍の二人は宿泊させてもらっている部屋でくつろいでいた。すると「コンコン」と扉をノックされたので開けるとメイドさんがいた。

「お食事のご用意ができましたのでお迎えにあがりました」

「わかりました！すぐ行きますー！」

と二人はメイドさんが食事の用意ができたと言われたのでついていくことにした。しばらくすると食堂らしき部屋に案内された

「では、ここでおかけになってお待ちください」

「はい!!わかりました。」

二人はメイドさんに言われた通り椅子に座って待つことにした。その間二人は

「なんか緊張してきたよ飛龍」

「そうだね輝龍!!テーブルマナーできないよ!!お箸がないよ」

転生するまで地球の日本で生活していたので箸がないこととテーブルマナーについて無知に近かったのである。

しばらくしているとメイドさんがやってきて

「ここグリーンボックスを統治しております女神グリーンハート様でございます。ではご無礼がないようお願いします」

「言いメイドさんはどこかにいってしまったのだった。」

「どうも、ここグリーンボックスを統治しておりますグリーンハートことベールと申しますわ」

女神グリーンハートことベールは自己紹介をした。

「神楽堂 輝龍でです(´。D。´)」

「同じく妹の神楽堂 飛龍でです(´。D。´)」

輝龍と飛龍の二人は緊張の余り噛みながら自己紹介をした。するとベールは

「二人とも落ち着いてください!!」

「はい!!」

二人に落ち着くように言った。しばらくすると料理が運ばれてき

たので食事にする事とした。しばらくしてベールが

「お二人は龍姫のご友人のようですけど？本当ですか？」

「はい!!そうですけど」

「何か？」

二人が龍姫の知り合いかどうかを聞いたのだ。二人とも「はい」と応えた。

「チカ!!ちよつと来て下さる!」

「はい!!なんでしよう」

ベールは教祖のチカを呼び出し耳打ちで話出したのを見て二人は不思議そうに見ていたら

「実は確認のためあなた達のご友人の龍姫を明日、リンボックスに来てもらうよう手配させていただきましたわ。ですよね？チカ」

「はい!!そのように手筈を整えましたわ!!」

ベールは二人に自身の幼馴染みの龍姫にここリンボックスに来てもらうようにチカに手配させていたのだった。

それを聞いた輝龍と飛龍の二人は

「よかった!!龍姫ちゃんが来てくれるだ…ごめんなさい!!<m」

」m>」

「お気になさらいでくださいな!」

あろうことか女神の御前で歓喜余つてはしゃいでしまったがベールは気にしないでと言った。食事も終わり

「ではこちらへどうぞ」

「はい!!わかりました。」

二人はメイドさんに連れられて風呂場に向かい脱衣所で服を脱ぎお風呂に入って行った。

「気持ちいいね!!飛龍」

「うん!!そうだね 輝龍」

「今思ったんだけどさボクたち服ってあれ一着しかないよね!!」

「どうしよう!!（。D。）」

二人とも転生して服屋に行っていないなかったので転生の時に着ていた私服以外、服を持っていないのだ下着も同じく

仕方なく二人は風呂から上がり脱衣所に向かった。服を脱いだ籠に色違いの女物のパジャマが入っていた

「おまけにブラまであるよ!!」

「入るかな? いつも下着ってサラシだったから。これを着てください
いってメモが入ってたよ」

仕方なく二人は用意されたパジャマと下着を身につけることした。

「よかったサイズが当てて」

「なんで? わかったんだろう」

二人とも着痩せしているとはいえベールほどではないが胸が大き
くスタイルがよくベールのサイズの服がピッタリ入るのであった。

「とりあえず部屋に戻ろう」

と輝龍は飛龍にいい脱衣所を後にしてでるとメイドさんに宿泊部
屋に案内してもらい、

「明日、龍姫ちゃんに会えるんだね」

「うん!! じゃあお休み輝龍」

「お休み、飛龍」

二人は就寝したのであった。

緑双龍、紫龍に再開するの巻

チカから幼馴染みの双子の女の子を保護したと受けた翌日、龍姫はネプテューヌ・ネプギアともにプラネタワールの屋外展望台に来ている。

「いーすん!! 行ってくるね」

「行ってきます。いーすんさん」

「気を付けてください」

「じゃあ!! いこうか」

龍姫たちは女神化をしてリーンボックス教会に飛んで行った。イストワールに挨拶した。

スキット：双子の幼馴染み

ネプ「お姉ちゃんの幼馴染みに双子がいたのね」

龍姫「輝龍と飛龍って言う名前なんだ輝龍がお姉ちゃんで飛龍が妹だよ」

ギア「なんかロムちゃんとラムちゃんみたいだなどんな人なの？」

龍姫「二人とも遊びに行く時はいつも一緒にいるよそれと二人とも右利きだよ。」

ネプ「そうなのもしその二人だったらベールに妹ができるわね」

龍姫「ベール絶対に妹にするよ」

そんなこんなでリーンボックス教会に着いたのであった。三人は女神化を解いて教会に向かった。

「お待ちしておりましたわ。龍姫様、どうぞ中へ」

龍姫たちはチカに案内されるがまま中に入って行った。

一方その頃

「やつと、龍姫ちゃんに会えるんだね（＾O＾）／飛龍!!」

「うん!! 会えるの楽しみだね（ワクワク）」

「輝龍!! 飛龍!! 準備はよろしくて?」

「はい!! 大丈夫です!! 今行きます!!」

輝龍と飛龍の二人はベールの自室でルウイ一の双子のように龍姫に会うのを楽しみにしていた。チカに連れられ龍姫たちの待つ客間

に行った

そのルウィーではブランが病院から退院していて教会で療養をしていたが、

「お姉ちゃんのギブスにラグガキしようラムちゃん」

「うん!! ロムちゃん」

「お前ら!! <(´・`・´)>人のギブスに落書きすんじゃないやねえー」

「わーい逃げろ」

「こら待ちやがれ「ゴン!!」・・・痛ー痛ー痛ーああ足が」

「ぶぶブラン様しつかりしてください!! 誰か救急車を」

ロムとラムは結局、ギブスに落書きしてブランを怒らしていた。ブランは勢い余って怪我をしている右足を机にぶつけていたのであった。その後、病室に搬送され怪我が悪化したのは言うまでもない

ところ変わってリーンボックス教会に来ていた龍姫一行は客間に案内されていた。

「ふうく緊張するな」

「お姉ちゃん!! 大丈夫だよ」

「そうだよ!! 龍姫お姉ちゃんの幼馴染みなんだから」

客間で待機中の龍姫は輝龍と飛龍の二人に会うことに緊張していた。すると客間の扉が開き

「やつと会えた!!・・・龍姫ちゃんく」

「輝龍!! 飛龍!! ボクもまた会えて嬉しいよ、その服、ベールの色違いのお揃いなんだね」

「うんベール様がこの服貸してくれたんだ。けど胸が見えそうになるだよ。」

「早く!! いつものパーカとジャージが着たいな」

龍姫は輝龍と飛龍の二人の服がベールの色違いのプリンセスドレスを着ていたので目のやり場に困っていた。二人もいつも着てるパーカとジャージを着たがっていた。

「うううう・・・(T|T) / ~ ~ ~」

「もうお姉ちゃんたら」

輝龍と飛龍の二人は幼馴染みの龍姫に再開した嬉しさの余り、それ

を見たネプテユーンは感動の涙を流していた。

ベール!! 緑双龍を妹にするの巻

龍姫は輝龍と飛龍と再会していた。

「龍姫ちゃん、星龍ちゃんは？」

「ラステイションの教会で働いているよ。」

「その二人は誰なの？」

輝龍は龍姫と一緒に来ていた二人のことを聞いた。

「神楽堂 輝龍と言います。龍姫ちゃんとは保育園からの付き合いです。」

「神楽堂 飛龍と言います。一応、二人とも女です。」

「わたし!!ネプテューヌ!!プラネテューヌの女神パープルハートなんだ!!」

「わたしはプラネテューヌの女神候補生のネプギアです!!」

ネプテューヌとの自己紹介が終わった。するとベールが入ってきた。

「それと二人とも敬語はいりませんわよ」

「わたしたちもいらないから」

輝龍と飛龍の二人に敬語をやめるようにネプテューヌ・ベールは言った。

「これからよろしくね!!ネプテューヌ・ネプギア・ベール」

「うん!!よろしく」

二人はよろしくと言い、龍姫にあること聞いた。

「龍姫ちゃんってこれって持つてる」

輝龍と飛龍の二人は徐に上着のポケットから緑色の水晶を取り出し龍姫達に聞いた。

「女神メモリーと言って、女神になるためのアイテムだよ!!」

「そうなの!!ツクヨミ様にここに転生させてもらった時に渡されたんだ」

龍姫は二人に女神メモリーであることを教えた。それを聞いていたベールは

「あの〜相談があるんですけど?」

「何?ベール?」

「お二人にわたくしの妹になってほしいのです!!」

ベールは輝龍と飛龍の二人に自分の妹になってほしいと伝えた。すると

「別にいいよ」

「どうせ行く当てがないし、よろしくね!!お姉ちゃん」

輝龍と飛龍の二人はベールの頼みを聞き入れ晴れてベールに妹ができたのだ。しかも二人もそれを見ていたチカは

「うううお姉さまの裏切り者!!」

部屋の隅で拗ねていた。

「元気出してチカ姐」

輝龍がチカを慰めていたのである。

スキット：ベールの名字

ネプ「ベールにやつと妹ができたんだこれでネプギアを取られずに済むね」

龍姫「そっぴやそんなことがあったね、一旦置いといてそれはそうとベールに名字が付けれるね」

ベール「今日から」神楽堂 ベール」と名乗りますわ!!ブランには申し訳ないですけど」

輝龍「これから」

飛龍「よろしくねベールお姉ちゃん」

ベールは「緑龍の姉」の称号を修得した。

輝龍は「緑の女神の妹」の称号を修得した。

飛龍は「緑の女神の妹」の称号を修得した。

「龍姫ちゃんは女神メモリーってまさか!!使ったの?」

輝龍と飛龍は龍姫に女神メモリーを使ったのか聞いた。

「論よ証拠だよ括目せよ!!セットアップ!!これがわたしの女神の姿だよ」

「ええ〜龍姫ちゃん!!だよね?」

「うん!!龍姫だよ!!」

輝龍と飛龍の二人は鳩が豆鉄砲を食ったように目が丸くなっていた。

緑双龍の初戦闘

龍姫は女神化を解き、輝龍と飛龍に自分が女神になったことを明かした。二人は龍姫に今何をしているか聞いていた。

「今、ボクはじつはプラネテューヌの女神パープルハートことネプテューヌのお姉ちゃんになったんだ。だけど国の最高責任者はネプテューヌだよ！あくまでも補佐がボクの仕事だよ」

「ええ！龍姫ちゃん女神様のお姉ちゃんになったの！！すごい！」

二人は龍姫が女神パープルハートの姉になったことに驚きを隠せないでいた。龍姫は輝龍と飛龍に

「そういや、術技って使えるの？」と聞いてみた。すると輝龍と飛龍は「まだ使ってないよ」まだ使っていないこと教えた。するとチカの携帯電話の着信音が鳴った。

「ギルドから魔物《モンスター》の討伐の依頼が来ましたわ！」

どうやら、ギルドから魔物討伐の依頼がきたらしい。それを聞いたネプテューヌは

「ちようどわたしたちもいることだしみんなと一緒に行こうよ二人が心配ならベールもついてきたら」

「それもそうですわね！！姉として妹を守るのは姉の務めですわ」

「けどボクたち武器ないよ」

ベールは行く気満々だが輝龍と飛龍はこっちに転生したばかりなので武器を持っていないのである。

「だったら武器屋に行こう！！使いたい武器が見つかるかも」

「その前に服屋寄ってあげた方がいいよ！その格好じゃ戦いにくいよ」

と一行は服屋と武器屋に向かうことにした。武器屋に着いた輝龍と飛龍は導かれるように、お揃いの槍を手にとって購入し、服屋でも好んでいる男物の服を買い教会に戻ってそれに着替えた。

スキット：お揃い

龍姫「二人ともお揃いの槍にしたんだベールも槍を得物にしてるんだよ！！」

輝龍「え！そんなんだってことは姉妹揃って槍使いなんだ」

ベール「さすがわたくしの妹たちですわ。そうですねわたくしも男物の服を買わないと行けませんわね」

飛龍「頑張って槍使いこなさないと」

スキット：類は友呼ぶ

ネプ「お姉ちゃんの幼馴染みだね!!」

龍姫「どうしたの？ネプテューヌ？」

ネプ「だってお姉ちゃんと一緒に輝龍と飛龍の二人とも胸大きいだもん」

輝龍「恥ずかしいよ」

龍姫「絶対にブランに言ったらキレるね」

現場となる平原に到着した。しばらく歩いていると目的の魔物《モンスター》を発見したのであった。

「この魔物《モンスター》が討伐対象だね」

「気を引き締めて行くよ」

一行は各々に武器を構え、一斉に

「魔神剣・双牙!!」

「獅吼爆炎陣!!」

「爆炎剣!!」

「天月旋!!」

「瞬迅槍!!」

「月光!!」

龍姫は無属性の二連撃の斬撃を、ネプテューヌはタツクルから掌底で獅子の鬨気を叩き付けそのままの勢いで炎を纏い刀で兜割りにして爆風を熾し、ネプギアは刀を上から振り下ろし爆炎を熾し、ベールはサマーソルトで蹴り上げ、落ちてきたところを輝龍は槍で素早く突き飛ばして、最後に飛龍は敵の頭上に飛び槍を投げつけた。もちろん投げつけた槍はなぜか手元に戻り、技を出した場所に帰ってきた。

討伐対象の魔物《モンスター》は光の粒子になり消えていった。

「わたくしにも異世界の術技ができるのですね!!あの時は擬似的に龍姫に共鳴してもらってましたから」

「お姉ちゃん!!ボクたちも一緒に強くなる」

「そうだね!!もつと槍を使いこなさいと」

ベールは龍姫共に戦っていたが完全な異世界の術技の修得には至っていないが晴れて妹になった、輝龍と飛龍のおかげで完全に異世界の術技をものにしたのであった。

ただ秘奥義の修得まで至っていない。

緑双龍、決意するの段

討伐対象の魔物モンスターを倒した、龍姫達はギルドに行き報告して報酬をもらって教会に帰ってきた。

「そういや、龍姫たちはこれからどうなさるのです?」

「明日から仕事だからそれまでは、何も無いよ」

ベールが龍姫たちの今後のスケジュールを聞いて、龍姫たちは明日から仕事と応えた。

「龍姫ちゃんって女神の仕事を手伝っているっていつてたけど、具体的にどんなことするの?」

「そういや、二人とも書類上はベールの妹だったね。簡単に説明すると、さつきやつてたモンスター退治や書類関係と視察ぐらいかな、書類関係はいつも一緒にやってるよ」

龍姫は女神で妹のネプテューヌの手伝っている内容を教えた。

「なるほどつまりボクたちの立場は一応、リーンボックスの女神候補生と言うことだよな?」

「つまり、ベールお姉ちゃんの仕事を手伝って覚えていけばいいんだよな?」

「そういうことになりますわ!!二人には簡単なお仕事からお願いしますわ。お願いしてよろしいでしょうか?」

輝龍と飛龍はベールの妹になったことで、ここリーンボックスの女神候補生になったことに不安になっていた。

「大丈夫だよ!!二人が来るまでベールは一人でこの国を守り続けたんだから」

「そうだね!!今度はボクたちがベールお姉ちゃんを支えていく番だよな」

「そうだよね!!輝龍!!ベールお姉ちゃん!!」

二人はベールの仕事の手伝いすることを決意した。そして龍姫たちは

「じゃあプラネテューヌに帰るね」

「二人ともプラネテューヌに遊びにおいでよ」

「では、お二人ともお元気で」

「絶対!! プラネテューヌに遊びに行くから」

「落ち着いたら必ず行くから」

輝龍と飛龍はプラネテューヌに帰る龍姫たちを見送り

「さて頑張つて女神の仕事を覚えよう」

「うん!!」

輝龍と飛龍は女神候補生としての決意を決めたのであった。

ところ変わつてプラネテューヌでは

「いーすん!! たいいま!!」

「お帰りなさいませ!! 龍姫さん、やはり、リーンボックスで保護されていたのは」

「ボクの幼馴染みだったよ」

「そうでしたか」

「そうなるよ、あとはルウィーだけだね!!」

龍姫たちは今まで転生者があとはルウィーに降りてないのである。

「ブラン達なら何とかなるでしょ」

「そうだね!! じゃあ明日から頑張りますか」

ところ変わつてラステーションでは

「ユニ!! 入るよ」

「どうぞ!! 入ってきてください」

「ユニじゃあお風呂に行こうか」

「はい!! 星龍さん」

星龍は左半身の怪我で一人で動くことが出来ないユニを車椅子に乗せお風呂に向かった。

「いつもすいません星龍さんこんなこと頼んで」

「いいのいいのボクはノワールちゃんとユニのお世話役何だしノワールちゃんもギブスが取れたばかりだしね」

「アタシももうちよつと胸が大きかったらいいのにそれに比べてお姉ちゃんも星龍さんは大きいのに、そうだ!! 星龍さんはその女神になったらどうするんですか。」

ユニは星龍に自分が女神になったらどうするか聞いた。

黒龍と紫龍

ユニは星龍に女神メモリーで女神になったらこれらのことを聞いた。すると

「答えは一つしかないよ」

「え！その答えって」

「うん！！ノワールちゃんとユニのお姉ちゃんになって上げる」

「ええ！うぐ！！」

「大丈夫！！もう！！怪我まだ治ってないんだから」

「すいません」

星龍は女神なったらノワールとユニのお姉ちゃんになると決めていたのだ。それにユニは

「いいですか？アタシたちのお姉ちゃんになってくれるんですか？」

「うん！！」「選ぶんじゃないよ選んだよ」と星龍は龍姫譲りのセリフ言った。続けて

「どうせ選ぶなら自分で選んだ方がいいと思ってるだけだよ。それが正しかったのかどうかは終わってみなきゃわからないからね！！」つてこれ龍姫ちゃんのモットーなんだけど」

星龍はユニに応えた。ユニは

「やっぱり龍姫さんと星龍さんは強いんですね。つまり「生きる」ということは選択するということ」なんですわね。」

星龍にユニはこう述べたのであった。しばらくして星龍は

「じゃあお風呂から揚がるうかユニ？」

「そうですね！！星龍さん！！」

「(ユニを見てるとあの子が心配になるな)」

星龍はユニと実妹が重なって見えたのだ。こうしてお風呂から上がった二人であった。この話をして一週間が過ぎた。

「はい、終わりましたよ。ユニ様、もう本格的に戦闘を行ってもいいですよ。すごい回復速度ですね！普通の人のなら1〜2月掛かるのですが。さすが女神様の妹ですね。」

「はい！！ありがとうございます。先生！！」

「では!!お大事に」

病院の医師はユニのレントゲン写真を見ながら怪我の治り具合に驚きが隠せないでいた。そしてユニの怪我は完治したのであった。

「星龍さん教会に戻りましょう。書類などの整理手伝わないと」

「そうだね!!ユニ教会に帰ってノワールちゃんのお手伝いしないと」

二人は教会に帰って行った。この時、ラストেশヨンにまた危機が訪れようとは知る由もなかった。

「ただいま!お姉ちゃん!!(ノワールちゃん)」

「お帰りなさい!ユニ、星龍。ユニ!!ギブス取れたの?」

「うん!!そうだよ!!先生がクエストに行ってもいい、言ってくれたし」

「ええ!そうなの、じゃあ、書類整理するの手伝って」

「わかったよ!!」

三人はさっそく書類を整理を開始したのである。

一方その頃、プラネテューヌでは

「今日の書類はこれでお終いです。龍姫さんがネプテューヌさんのお姉さんになってくれたおかげでネプテューヌさんがサボらず仕事をやってくれるんですから」

「別に大したことないよーすん、ただボクは形だけのお姉ちゃんやっっているだけだから」

「もう!!お姉ちゃんたらそうやって血のつながりを出すんだから!!」

「そうだよ!!龍姫お姉ちゃんはわたしたちの大事な家族なんだから」

「そうだね!!ごめんね<m()m>ネプテューヌ・ネプギア」

龍姫はネプテューヌ・ネプギアの姉であると同時に転生する前に地球に置いてきた実妹の龍音のことともう一人の幼馴染みを考えていた。それを察したのかイストワールは龍姫達に

「今日やっていた書類で一ヶ月分ですので一週間の休暇を差し上げます」

と告げた。

白龍と紫龍の妹と黒龍の妹

やはり、運命とは皮肉なものでまた転生の間に新たな、死者が現れたのだ。

一人は茶髪でロングヘアで身長は160cmぐらいの女の子である。もう一人は龍姫にそっくりな女の子で身長は龍姫より少し低い163cmぐらいの少女で。もう一人は金髪で髪をハーフツインテールに結っていてどことなく星龍に似ていた。

「ここどこやねん!!…って龍音ちゃん!!天龍ちゃん!!起きて起きて!!」

「うう〜んどうしたんですか?武龍さん…ってここどこ?」

「お目覚めになられたんですね。」

「二え!!誰ですか?(や)二」

二人は声のする方へ向くと

「私は女神ツクヨミと申します」

「その女神様がなんか用なん?」

「武龍さん!!失礼ですよ!!」

ツクヨミは三人に自己紹介して武龍はツクヨミに何か用かと尋ね、龍音は武龍を止めた。

「ボクの名前は御子神武龍《みこがみ たける》や」

「鳴流神龍音(なるかみ りおん)です」

「獅子神天龍 《ししがみ てんりゆう》」

二人は自己紹介をした。ツクヨミは

「まさか!!鳴流神龍姫さんと獅子神星龍さんの妹ですか?」

「はい!!そうです!!先々月、ボクを庇って亡くなった。鳴流神龍姫の妹です。」

「同じく獅子神星龍の妹です」

「やはり、そうでしたか、今、あなたのお姉さまの龍姫さんと星龍さんはゲームギョウ界にのプラネテューヌとラスティシヨンの教会で働いています。」

驚きを隠せないでいた。龍音と空龍に姉の龍姫と星龍がゲーム

ギョウ界のプラネテューヌとラステイションの教会で働いていることを明かした。

続けてツクヨミは

「あなた達がここに来てるといふことは同じ時刻に死んでしまったといふことになります。」

三人に同時刻に死んでしまったと告げられたのだ。すると三人は「ボクはあの事故の後遺症で死んじゃったから。ごめんねお姉ちゃん。」

「ボクも同じだよ」

「ボクは持病の心臓病や」

自分たちが死んでしまったことに落ち込んでいた。ツクヨミは

「何で自分で終わったと思ってるんですか!!これからあなた達をゲームギョウ界に転生してもらいます」

三人に喝を入れ、ゲームギョウ界に転生させると言った。

「もう決めてるで!!ボクはルウィーやな転生者がいないのは落ち着いたらプラネテューヌとかにいく」

「ボクはプラネテューヌ」

「なら、ボクはラステイション」

「そうでしたか、もう行く場所が決まっているなら、これをお渡しします」

三人は思ったことを言い、ツクヨミはいつもの女神メモリーと少しだがゲームギョウ界の通貨と異世界の術技の能力を授けた。

「ボクは紫色だね」

「ボクは黒」

「ボクは無色や」

「ではご健闘お祈り申し上げます」

ゲームギョウ界に飛び立った。

舞い降りた紫龍の妹

龍姫は現在ネプテューヌ・ネプギアと一緒に街に出ているのであった。

「龍姫お姉ちゃん!!どうしたの?」

「そうだよ!!せっかく一週間の休暇なんだし、楽しもうよ!!」

「それもそうだね!!(嫌なこと思い出したな。)」

龍姫はネプテューヌ・ネプギアに実妹の龍音と重ね合わせてしまったのだ。

この時、龍音がプラネテューヌに転生しているとは気づいていなかった。

「ここがゲームギョウ界なの?」

どうやら、龍音はプラネテューヌの街はずれの平原に降りて来ていた。

「あそこに町があるってことは、人がいるんだよね?そしてお姉ちゃんが働いている教会があるんだね!!よしそこに向かうとしますか!!」

龍音はプラネテューヌの町に向かって歩いて行った。

「龍音は今頃なにしてるんだろう?」

龍姫はネプテューヌ・ネプギアと一緒に喫茶店でお茶をしていたがふと窓の方を見ながら実の妹の龍音のことを考えていた。

それを見たネプテューヌ・ネプギアは

「ねえ!お姉ちゃん!!ってばどうしたの?」

龍姫にさり気なく聞いたのだ。すると龍姫は

「あ!!ごめん、ちよつと龍音《リオン》のことを考えてただけだから。」

「龍音《リオン》って誰なの?龍姫お姉ちゃん。」

ネプギアは「龍音《リオン》」は誰なのか聞いたのだ。龍姫は

「ボクの実の妹だよ。」

「ええ!!妹さんのの!!」

「って!!実妹がいるの!!」

ネプテューヌ・ネプギアは義理の姉に実の妹がいることに驚きを隠せないでいた。ネプテューヌ・ネプギアは

「ごめんねお姉ちゃん。」

「別に気にしてないよ。それに今は家族だつて言ってくれる妹がいるんだから。そうだ!!ちよつと町の外に散歩に行こう」

龍姫はネプテューヌ・ネプギアに気にしてないと応え、お代を払い喫茶店を後にして町の外に散歩に出かけた。

一方その頃

龍音はというと

「このまま行けばいいんだよね」

と平原を町に向かって歩いて歩いていたのだが

「ヌラ〜ヌラ〜」

「なに!?何が起こってるの?」

スライヌというゲームギョウ界の魔物《モンスター》が龍音の前に立ちほだかり何と!!合体し始めたのだ。

「そういうえば、ツクヨミ様にもらったあの能力で何とかしないと。武器がなくてもできる術技はと・・・これに決めた。」

「揺らめく焔、猛追!・ファイヤーボール!!」

龍音はビッグスライヌにむかって初級魔術のファイヤーボールを放った。しかし

「ヌラ〜」

ビッグスライヌはまだ倒れてなかったのだ。

「え!まだ倒れないの!!どうしよう・・・助けてよ!!お姉ちゃん!!」
どこにいてもわからない姉の名を叫んでいた。

紫龍、実妹と再開するの段

龍姫はネプテューヌ・ネプギアを連れて街の近郊の平原に散歩に来ていた。

「ごめんね、こんなことに付合せて」

「ううん、別に気にしてないよお姉ちゃん」

「たまにはこういうのも悪くないなって」

龍姫はネプテューヌ・ネプギアは自分のわがままに付き合わせてるのを謝罪した。二人は気にしていないと言った。

その時、

「・・・助けてよ!!お姉ちゃん!!」

と聞こえてきたのだ。それに気づいた龍姫は

「龍音!!今、助けに行つてあげるから!セツトアップ!!」

「お姉ちゃん!!待って!!変身!!」

「一体どうしたの?わたしも、変身!!待って龍姫お姉ちゃん!!」

いきなり女神化して飛んで行ってしまったのだ。それを見た、ネプテューヌ・ネプギアは後を追うように女神化して追いかけた。

「ボク・・・ここで死んじゃうの嫌だよまた死ぬのはいやだよ!!お姉ちゃん!!」

「ヌラッ!」

龍音にビッグスライヌが襲い掛かったのだ。次の瞬間

「やらせない!!魔神剣!!」

「蒼破追蓮!!」

「星影連波!!」

どこから兎も角、無属性の斬撃を飛ばし、風属性の斬撃を二発飛ばし、光属性の鎌鼬が飛んできたのだ。ビッグスライヌは光となって消えていった。

龍音はふと斬撃が飛んできた方向を向いた、そこには

「お姉・・・ちゃんなの?」

「龍音!!助けにきたよ」

女神化した実の姉の龍姫がいたのだ。それを見た龍音は己の視覚

を疑った。それもそのはずなぜならツクヨミから姉が女神になっていると聞かされてないのだ。そのまま固まってしまった。

「もう!!お姉ちゃん!!いきなり変身して行くんだから」

「あれ?女の子が」

ネプテューヌ・ネプギアも合流して女神化を解いた。龍姫はそのまま

「お姉ちゃん!!く(; ;) / くくくわくん」

「龍音!!ごめんねお姉ちゃん、怖がらせちゃって」

「ううん、誤るのはこつちだからごめんねお姉ちゃん。」

龍音に抱きついた。

「とりあえず、教会に帰ろう、龍音!!」

「うん、わかったよ!!お姉ちゃん!!」

「じゃあ、行くよセットアップ!! ちゃんと捕まっつてよ」

「うん」

龍姫たちはとりあえず教会に帰ることにした。そして教会に着いて龍音は

「お姉ちゃん実は・・・」

「言わなくてもわかっているから、ボクと同じく転生したんでしょ。」

「なんでわかったの?」

「龍音がここにいるってことは死んじやつて転生するか又は次元震に巻き込まれるの二択しかないの」

龍姫は龍音が死んでしまったって転生したことに気づいたのである。自身が転生者であることも教えた。

「ねえ、話終わった、いーすんが呼んでるよ」

「今行くよ!龍音、一緒に行こうか。」

「うん!!お姉ちゃん!!」

龍姫と龍音はネプテューヌがイストワールが呼んでると言うので部屋を出てイストワールの所に向かった。

プラネテューヌの二人目の女神候補生

ゲームギョウ界に龍姫の実の妹の龍音が転生したのでそのことをプラネテューヌ教会の教祖のいーすんことイストワールに報告をしていた。

「鳴流神龍姫の妹の龍音《リオン》と申します、転生者で女神メモリーの適合者です」

「わたしはここプラネテューヌ教会の教祖のイストワールです。」

「わたし、ネプテューヌ!! プラネテューヌの女神でパールハート」

「わたしはプラネテューヌの女神候補生のネプギアだよ。」

それぞれの自己紹介が終わり、イストワールは

「龍音さん」

「はい!!」

「今日からプラネテューヌの女神候補生ということになります。よろしいでしょうか?」

「はい!! 謹んでお受けいたします。」

龍音はプラネテューヌの女神候補生になったのだ。すると

「つてことはわたしたちの妹だよね?」

「え? どういう事お姉ちゃん!!」

ネプテューヌ・ネプギアの「妹」発言に龍音は龍姫に事の真相を聞いた。

「ごめん言わないといけないよね、実はこの二人のお姉ちゃんになったんだ。」

「それってつまり」

「そう、龍音はネプギアの妹になったの」

「ええ、それ言つてよお姉ちゃん!!」

龍姫は龍音にネプテューヌ・ネプギアのお姉ちゃんになったことを言い忘れていた。

スキット：プラネ四姉妹

龍音「今日からギア姉の妹になったんだ」

ギア「うん、そうだよ!! 龍音!! 妹だからってビシバシ行くからね」

ネプ「そうか、とうとう、ネプギアもお姉ちゃんになったんだ」
龍姫「そうだね!!」

ギア「龍音!! 今日から姉妹になるんだからこれ上げる」

龍音「ギア姉とお揃いの髪飾りだ!! ありがとう、ギア姉!!」

龍音は「女神候補生の妹」・「霸王の妹」の称号を修得した。

その日夜、二人はお風呂に入りながら龍音は龍姫に

「武龍さんと天龍も転生してるよ」

「武龍と天龍もこっちに来てるの!!」

幼馴染みたちが転生していると告げられたのだ。しばらくしてネプテューヌ・ネプギアがやってきて

「お姉ちゃん!! 龍音!! 一緒に入ろう」

「いいよ、ネプテューヌ・ネプギア」

「おお!! お姉ちゃんも大きいけど龍音も大きんだね、はあく女神化してもネプギアより小さいし、わたしが女神でいいのかな?」

「もう!! お姉ちゃん!! たら元気出してよプラネテューヌの女神はお姉ちゃんだからね」

ネプテューヌは自分が覚醒していなく自分が女神で姉としてやっていけるか、悩んでいた。

「そうかお姉ちゃんはネプ姉のお姉ちゃんになっても最高責任者はネプ姉になるんだ。」

「そうだよ!! 龍音」

龍音は龍姫がネプテューヌの姉になっても国の最高責任者はネプテューヌだと教えた。全員風呂から上がり、自分たちの部屋に戻り

「お休みお姉ちゃん」

「お休み龍音」

この時、ネプテューヌの体に異変が起っていたことに気づいていなかった。

ネプテューヌのバリアジャケット

龍音がプラネテューヌの女神候補生になったその日の夜、突然ネプテューヌが

「あぐううくああ」

「お姉ちゃん!!どうしたの?」

「何かあったの?」

苦しみ出したのだ。徐々にはあるがネプテューヌの体が光り出したのだ。

「あぐううあーー」

「お姉ちゃん!!」

「ネプテューヌ!!」

「ネプ姉!!」

龍姫・ネプギア・龍音はただ見守ることしかできなかつたと思つたら龍姫は

「まさか!!ネプテューヌの眠っている力が覚醒しようとしてるんじゃない、いくよネプテューヌ!!」

龍姫はネプテューヌに手の平を向けて

「この者の秘められし力よ」

「真の姿を現せ、見えた!」

「大地の母の名を持つ女神マーテルよ」

ネプテューヌの体が光が強くなっていった。その光が収まつた。すると

「お姉ちゃん!!なの!!」

「どうしたの? ; ; つ、ん、ん みんなして」

「あれ?ネプギア小つちやくなってる?」

ネプテューヌは自分の異変に気づいていないのだ。

「違うよ!!お姉ちゃん!!が大きくなってるんだよって胸も大きくなってるよ!!鏡見なよ」

ネプテューヌはネプギアに言われるがまま近くにあつた姿見鏡で自分の姿を見た

「ええ・・・これがわたしなの」

今のネプテューヌの状態は

身長が女神化している状態(164cm)と同じぐらい伸びていて、胸も女神化しているより大きくなっていたのだ。髪も腰より少し下まで伸びている。

「とりあえずボクの服貸すね」

「ありがとう!!お姉ちゃん!!」

とりあえず龍姫はネプテューヌに自分の服を貸して事なきを得た。

翌朝

「おはよう!!いーすん!!」

「ねねね・・・ネプテューヌさんですか!？」

「ネプ子!なの!!」

「そうだよ!!」

「ねねねぶねぶ!!」

全員が驚きを隠せないでいた。

「じゃあ女神化してみて」

「行くよ!!括目せよ!!変身」

ネプテューヌは女神化してみることにした。すると

「ちよつと、胸がきついわ」

「そらそうでしょ」

それもそのはず、今ネプテューヌの状態は

身長が175cmまで伸びており、胸がパープルドラゴンハート並に大きくなっていた。髪はいつも通りである、プロフェツサーユニットの特に「胸部」がすごいことになっていた。

「そうだ、ちよつとネプテューヌの「バリアジャケット」完成したんだ」

「お姉ちゃん!!バリアジャケットがあるなら言っつてよ。あやゆく、敵の前で哀れな姿になるところだったじゃない」

ネプテューヌのバリアジャケットが完成したのできつそく着てもらうことになった。

「これがわたしの「バリアジャケット」」

ネプテューヌのBJは

黒と紫を基調に水色のラインが入っておりプロフェツサーユニットより露出がなく胸の部分に薄紫色のラインが入って、両手にはガンレットが装着され背中にはプロフェツサーユニットの様な翼が出ており、頭には四つのビットが独立してついておりもちろんチャームポイントの髪飾りもついている両足にはジェットブーツのようになっていた。左腰に二本差し出来るようになっていた。

ネプテユーンは「大地の母」の称号を修得した。

いざ、ラスティションへの巻

龍姫たちは一週間の休暇の二日目の現在、覚醒してしまったネプテューヌと女神候補生になった龍音の服と武器を買いに街に繰り出していた。もちろんアイエフ・コンパも一緒である。この後みんなでラスティションのノワールとユニの快気祝いに行くついでに龍音の幼馴染みで同じく転生者の天龍を探しに行くのである。

「わたし、これに、しよう」

「ボクもこの刀と小太刀にしようと、これください」

ネプテューヌは以前着用していた、パーカワンプとジャージワンプの大人物とブラを購入して龍音は刃渡り二尺三寸の打刀と一尺の小太刀を一本ずつ購入した。

スキット：新しい服と武器

ネプ「よかった!! 大人サイズのパーカワンプとジャージワンプが売ってるなって」

龍姫「そうだよね、普通こういう服ってあまり大きいのもって売ってないからね、そういや、龍音は日本刀にしたんだ」

龍音「うん、だって頭でイメージが浮かんだのがボクと同じ名前で長剣と小太刀で戦う剣士だったから」

コンパ「そうだったんですか。二人ともアイちゃんと同じ二刀流です」

買い物が終わり、教会に戻ってきた龍姫たちは各々にラスティションに向かう準備に取り掛かった。龍姫は自室に戻り、以前龍姫が打った「ニバンボシ」と「大典太光世」と名付けたの刀を刀袋に入れ、集合場所のプラネタワーの屋外展望台に行った。

「ほんじゃ行ってくるよ!! 龍音しっかり捕まってる」

「うん、お姉ちゃん!!」

「絶対、ノワールとユニちゃん驚くね」

「うん!! 変身!!」

龍姫たちは女神化してラスティションに向かった。その頃

「うくん、ゲームギョウ界に着いたのかな? 見渡す限り海なんだけど」

「どうやら、もう一人の転生者の天龍はラステーションの浜辺に降りていた。」

「あれって街だよな？善は急げだ行ってみよう」

天龍はラステーションの町に向かって歩いて行った。一方その頃
プラネ組はラステーションに向かって飛んでいた。

スキット：ネプテューヌのバリアジャケットと二振りの刀

ネプ「ねえ、お姉ちゃんなんでわたしの刀ホルダーが二つ着いてるの？それと二本の刀はどうするの？」

龍姫「あ！ネプテューヌも二刀流が出来るようにしておいたからそれとこの二本の刀はノワールと星龍に渡すものだよ」

ネプ「そうなの！！ってことはわたしもお姉ちゃんと同じく二刀流が出来るのね。」

アイ「わたしの立場が〜」

ノワール達はというトリハビリを兼ねてクエストに出かけていた。
もちろん星龍も同行していた。

星龍がラステーションに来てからノワールとユニも星龍の力に共鳴していたのだ。そのため、星龍と同じ、異世界の術技を修得していた。

キラーマシン襲来

ノワール達はラストレイションのミッドカンパニーに来ていた。もちろん魔物《モンスター》退治である。もちろん星龍も同行している「星龍も刀を得物にしてるの?」

「うん、使い慣れている武器だから龍姫ちゃんみたいに二刀流はできないよ」

「そうなんですか。」

そんなこんなで一行は討伐対象の魔物《モンスター》の群れを発見した。

ノワールは片手剣、ユニはライフル銃、星龍は日本刀をそれぞれ構え攻撃を仕掛けた。

「魔神剣!!」

「トルネードソード!!」

「アイシクルバレット!!」

星龍は龍姫と同じく無属性の斬撃を放ち、ノワールは右から左に薙ぎ払い、ユニは氷の弾丸を撃ち込んだ。

「へえ〜星龍、やるじゃない」

「まあ〜ね、これでも龍姫ちゃんとは昔、切磋琢磨してたから」

そんなこんなで魔物《モンスター》は終わりを迎えていたのだ。クエストを達成したのでギルドに報告しに行き、そのまま教会に帰ったのである。

「ふう〜左腕が使えるっていいわ」

「そうだね!!感謝しないとね!!星龍さんと龍姫さんに」

「ボクも龍姫ちゃんも別に大したことしてないよ」

星龍はノワールに別に大したことをしてないと言った。しばらく執務室でくつろいでいたら

「ノワール!!いるか?大変だ」

「どうしたの?ケイ?」

ラストレイション教会の教祖のケイが慌てて部屋に入ってきたのだ。そのわけは

「過激派の一団が廃工場でキラーマシンなどを製造していると情報が防衛隊からはいつてきたんだ。」

「なによ？それ今までわからなかったの？で状況は」

ケイはノワールに過激派の一団がキラーマシンなどの戦闘用のロボットを開発しているという情報を伝えた。ノワールはケイに過激派の一団の活動状況を聞いた。

「もうすでに3機は稼働しているという報告が来てる」

「ええ〜3機も！でキラーマシンはどこに向かったの。」

ノワールはケイにキラーマシンが向かったとされる場所を聞いた。すると

「リピートリゾート方面らしいんだ。詳しくはまだわからない。済まない。」

「そんだけ、情報があれば十分よ!!ユニ!!星龍行くわよ。」

「わかった!!」

ノワール達はリピートリゾートに向かった。しかし、そこには星龍の妹の天龍がいるのことに気づいていなかった。

その天龍はラストেশヨンの町に向かって歩いて行った。

「確かこっちに行ったら、町に行けるんだよね」

「キイーガコン」

「え!!何?」

天龍は物音がした方向を向くとそこには

「ギーガコン」

「なにこのロボットは!」

過激派の一団が製造していたキラーマシンであった。

黒龍の女神降臨

天龍はキラーマシンから離れているが見つかってしまった。

「どうしよう!! 確かお姉ちゃんと同じ能力が使えるんだよね。この魔術なら何とかなりそう、荒れ狂う流れよ・・・スプラッシュユ!!」

天龍はキラーマシンに向かって中級魔術の「スプラッシュユ」を放つたのだが

「キイー」

「え!! まだ動くの!! どうしよう武器もないし」

天龍はキラーマシンに囲まれてしまったのだ。次の瞬間

「ガギグゲー」

「キヤー!!」

キラーマシンは持っている剣で天龍に襲い掛かったのだ。しかし「ガキーン」と鉄がぶつかった音がしたのだ

「あなた、大丈夫?」

「はい!! 大丈夫です。えくと?」

「話は後よ!!」

そう、天龍を助けたのは女神化したノワールであった。がさすがに多勢に無勢で天龍を守るのでせいっぱいであった。

そして

「ギイー」

もう一体のキラーマシンが背後からノワールに攻撃を仕掛けた瞬間だった。

「お姉ちゃん!! 危ない!! はあーアクセス!!」

「ユニ!! あなた女神化できるようになったの」

そうユニは女神化出来るようになってはいたが、

身長と胸が縮んでしまっていたのだ。武器は逆に大きくなってしまっていた。それが仇になってしまったのだ。

「くらいなあ・・・え!!」

「ギイー!!」

縮んだ体で巨大化したライフルを構えなければならずライフルに

振り回されてしまい、キラーマシンにライフルを破壊されてしまった。

「ごめんねお姉ちゃん!!」

「謝るのは後よ!!」

三人は絶体絶命のピンチに陥ってしまった。ここぞとばかりにキラーマシンの猛攻から天龍を守っていた。

すると

「ふう〜やつと追い着いた。ってあそこにいるの天龍だよ!! どうしよう!! 龍姫ちゃん来るのまだし・・・もうあれしかないよね」

星龍はノワール達に追い着いたのも束の間、妹の天龍がキラーマシンに襲われてる上にノワール達は絶体絶命になってしまっていたのである。そして、星龍は徐に自分のポーチからあるものを取り出した。そう「女神メモリー」である。

「ごめんね。天龍、ノワールちゃん、ユニ、今助けるから」

「我、女神に転生され者なり」

「我、龍の名を持ち、黒の大地の力を使いし者なり」

「セットアップ!!」

星龍はみんなを助けるために黒龍の女神メモリーを使った。光が収まると

「これがわたしなの!! (これじゃ高町な○はだよ) ってそんなこと考えてる場合じゃないみんな今助けるから」

星龍の状態は

ノワール達同様に黒を基調にしており、某魔法少女のような格好になっていた。で髪型はいつもの通りにツインテールになっており、髪の色がノワール達と同じく銀髪になっていて前髪に金のメッシュが入っていた。目は右紅左翠のオッドアイで胸は元の大きさより大きくなっていった。もちろん龍姫同様に露出度低くなっていった。

天を統べる 魔王参上!!

星龍はキラーマシンに襲われている妹とノワール達を助けるため女神メモリーを使ったのである。

手には刀が握られておりノワール達のように巨大化はしておらず刀身が真っ黒になっていた。

「ちよつと!!頭、冷やそうか!!魔神剣!!」

「お姉ちゃん・・・星龍さんキャラが変わってるんだけど気のせいかな(〃。ω。)ノ」

「ユニ・・・気のせいじゃないわねこれ現実よ(〃。D。)」

ノワール・ユニは星龍の女神化した姿を見て固まってしまったのだ。もちろん天龍も固まった。

すると星龍にツクヨミが語り掛けてきた。

「星龍さん!!聞こえてますか?」

「聞こえてるよ(; ．．。D。) 何?」

「単刀直入に言います。今すぐにユニさんを覚醒させてください」

星龍にユニを覚醒させろと言ってきたのだ。すると

「わかったよ!!ツクヨミ様やってみるよ」

「お願いしますよ!!」

ツクヨミとの通信が途切れたのであった。星龍は丸腰になってた上に身長も胸も縮んでしまったユニに近づいた。

「せせ・・・星龍さんですか?」

「ごめんねユニ怖がらせちゃって、いきなりだけど行くよ。」

星龍はユニに手の平を向けて詠唱をし始めた。するとユニが

「うぐあー!!」

「ユニ!!」

黒い炎に包まれ出したのだ。そのまま星龍は

「この者に眠りし力よ」

「この者の真の姿よ」

「降臨せよ!!」「天を統べる!覇者」よ」

詠唱をしたのである。すると黒い炎は消えそこに現れたのは

「あれ？お姉ちゃん、小さくなったの？って胸が大きくなってる！！うふふこれが巨乳なのアタシはつに巨乳になったんだ。ってなんでアタシ大剣持ってるの？まあいいわこの大剣の錆にしてくれるわ」

「ユニって胸がないこと気にしてたんだ」

ユニはと言うと
身長が170cmまで伸びておりコンプレックスだった胸もベール並に大きくなっていった。プロフェッサーユニットは神々しい黒になっっておりどこかの魔王の様な風貌になっていた。なぜか黒い大剣を握っていた

「はあー!!魔神剣!!」

「ユニ!!あなた剣術出来たの?」

「お姉ちゃん!!何言ってるの?こんなの我流よ!!」

それもそのはずユニが剣技で戦っている上におまけに不釣り合いの「大剣」を使っているのだ姉に剣術で勝てたことのないユニである。

星龍は妹の天龍を安全な所に避難させた。

「天龍!!ごめんね怖がらせちゃって」

「お姉ちゃん!!うわ〜ん(T|T)／＼／＼」

「もう仕方ないな」

星龍は妹の天龍を抱きしめた。ノワールの助太刀に行こうとした瞬間だった。

「ギィー」

「しまった!剣が!!」

「お姉ちゃん!!(くっ!間に合わない)」

キラーマシンがノワールの剣を折っていたのだ。

「ギィー!!」

「ここで終わるのわたしはあとには任したわユニ・星龍」

ノワールが死を覚悟した直後だった。

「させない魔神剣!!ノワール!!受け取って!!」

「龍姫!!遅いのよ!!ってこれ刀じゃない!!こうなったら自棄よ」

そう、龍姫がノワールに向かって自分が打った刀「ニバンボシ」を投げたのだ。ノワールはそのまま抜刀したが、

「あれ？お姉ちゃんそんな構えだったっけ？」

ユニがノワールの刀の構え方がおかしいことに気付いた。なぜなら、いつもなら剣を突き出すように構えているのに今はなぜか右肩に担ぐように構えているのだった。

キラーマシン死すの巻

ユニが魔王に覚醒してノワールが龍姫から受け取った刀「ニバンボシ」を星龍は日本刀を構えキラーマシンに突撃していった。もちろん龍姫と龍音も合流している。

キラーマシンに向かって

「魔神連牙斬!!」

「魔神剣!!」

「蒼破っ!!」

「剛・魔神剣!!」

龍姫は無属性の斬撃を六連射し龍音は一発だけ放ち、ノワールは技名を略しながら風属性の斬撃を、

ユニは大剣を振り下ろし斬撃を放った。

「はあああ」

ユニはオーバリーミッツを発動させた。一機のキラーマシンに向かって

「裂空斬!! 火炎裂空!! 烈風月華衝!!」

「ユニ!! が!! しかも大剣で、くるくる縦回転してる!! (。D。)」

大剣とは思えない縦回転切りを浴びせだしたのだ。そして

「天を統べる覇者の証!! 魔王灼滅刃!!」

炎を纏った大剣で切り刻んだ後唐竹割りで決める秘奥義を放った。キラーマシンがこれに耐キレるわけがなく、木端微塵に碎け散った。

それを見たノワールは

「ユニが・・・魔王になっちゃった(。D。)」

石化してしまった。もう一機は龍音が相手をしている。そして「いい気にならないで!!」

とオーバリーミッツを発動させたのである。そのままの勢いで

「月閃光!! 月閃虚崩!! 崩龍斬光剣!!」

大小の二本の刀を巧みに使いトリツキーな動きで切り刻んで行った。もちろん最後は

「塵も残さない!! 行くよ!! 浄破滅焼闇!! 闇の炎に抱かれて消えて!!」

闇の炎を纏った二刀で十文字に切り裂き、縦に切り裂いた。木端微塵に砕け散った。

「わたしの・・・決め台詞が・・・(；；)／＼」

いつの間にか合流していたアイエフは自分のアイデンティティを言われてしまいその場で膝をついた。

最後の一機は龍姫と星龍が相手をしていた。もちろんのことながら、

「龍姫ちゃんここはわたしに任して、本気、見せてあげる!!」

「うん!!わかったよ星龍」

星龍もオーバーリミッツを発動させた。このまま、

「散沙雨!!秋沙雨!!閃光墜刃牙!!」

怒涛の連撃を叩き込み最後はもちろんのことながら

「気高き紅蓮の炎よ!!燃え尽くせ!!鳳凰天翔駆!!」

上空に飛びそこから特攻したのちまた真上に鳳凰の形の炎を纏い飛び上る秘奥義で止めを刺した。

「みんな、無事?」

「大丈夫だよ!お姉ちゃん!!」

全員の無事が確認出来たのでラスティション教会に天龍を連れてかえることにしたのだが、余程、龍音にアイデンティティを言われたのがショックだったのかアイエフは体育座りで海に向かって黄昏ていた。

ラスティション教会の応接間にい行くところには

「お姉ちゃん!!龍音!!ノワール!!ユニちゃん!!星龍どこに行ってたの?待ちくたびれたよ」

「ごめんね、ネプテューヌ!!ノワール達がロボットに襲われたから助太刀してたんだ」

「ねえ?龍姫?ちよつと聞いていい?」

「何?ノワール?」

ノワールは龍姫に恐る恐る聞いてきた。なぜなら

「なんで!!ネプテューヌが成長してるのよ!!(。D。)ノであなたがお姉ちゃんって呼ばれてるの!!(。D。)」

ノワールはネプテユーンが大きくなっていたのと龍姫がお姉ちゃ
んと呼ばれていることに驚きを隠せないでいた挙句目を白黒させて
いたのであった。

ラストテイション教会にて

星龍の妹の天龍と合流した一行はラストテイション教会の最上階の客間に来ているのであった。

スキット：ニバンボシ

ネプ「あれ？その刀お姉ちゃんがノワールに渡すことにしていた
「ニバンボシ」って勝手に名前付けちゃった刀だよ」

ノワ「え、そうなの」

龍姫「ノワールに合わして打った刀だよ快気祝いにと思ってそれに
星龍の能力と共鳴で覚える術技はショートソードとかだとすぐ折れ
ちやうからね」

ノワ「大事にするわ!!」

スキット：龍音の秘奥義《エグゼドライブ》

龍姫「龍音!!もう秘奥義できるようになったの」

龍音「うん!!今できる秘奥義だったから」

ネプ「どんな？秘奥義？」

龍音「闇の炎を二刀の刀に纏わして十文字に斬るだよ!!で最後に
「闇の炎に抱かれて消えて」言うんだよ」

ネプ「アイちゃんが言いそうな捨て台詞だね」

アイ「龍音の馬鹿野郎!!」

今現在、一行は部屋でくつろいでいたのだがノワールはネプテュー
ヌが成長したと妹のユニの覚醒について

「つまり!!ネプテューヌが成長したのって覚醒したのが原因なの」

「うん!!そうだよ、ユニも成長すると思うよ」

「えーじゃあこの忌まわしい胸と体の因縁がなくなるってことですか
？」

ユニは龍姫に自分の女神化によるデメリットがなくなるのか聞いて
いた。すると

「みなさん、こんにちは」

「ツクヨミ様、何か御用ですか？」

「はい!! ユニさんのことで来ました。」

「えーアタシですか?」

ツクヨミは天界から来てくれたのである。ユニの覚醒について話があるらしい。

「ユニさんの女神化すると起きていた胸と身長が縮む症状は完治しました。これは無理に女神化をしていた副作用のものでした。このたび魔王アスラの能力に目覚めたので、それに合わせて体が大きくなります。」

「え!! それってお姉ちゃんより大きくなるんですか?」

「はい!! そうですそれとノワールさんも覚醒した場合も同じです。」

「つまり、ネプテューヌが成長したのも力の覚醒が原因なの」

「はい!! その通りです」

ツクヨミはノワールに覚醒について聞かれたことについて簡単に説明した。

「では今後のご活躍楽しみにしています、では」

ツクヨミは天界に帰って行った。

スキット：霸王と魔王

ギア「ユニちゃんも覚醒したんだ」

ユニ「うん!! これでアタシも巨乳になれるんだ」

ギア「今のうちにユニちゃん写真撮ろう」

ユニ「なんで?」

ギア「だってーいまの姿のユニちゃんが見られるのが最後かもしれないから」

ユニ「仕方ないわね」

ギア「それじゃ行くよ! はいチーズ」

龍姫は星龍と一緒に女神について話をしていた。

「ええ!! ボクもう寿命じゃ死ねないの」

「うん!! 病気にはかかるんだけどね」

「そうなんだ!! 不老長寿になったんだ」

女神になったら寿命で死ねないうえ不老長寿になることを龍姫から教えてもらった星龍であった。

龍姫たちプラネテューヌ組は夜も遅いのでラスティションに泊ま
ることにした。

冥王の女神参戦

その日の夜、ネプテューヌとノワールは珍しくお風呂に仲良く入っていた。

「ねえ、ネプテューヌ胸触ってもいい?」

「いいよ!!触っても」

ノワールはネプテューヌの成長した胸を触っていた。

「本物なのね!柔らかいわ、それにわたしのより大きいし」

「ほんじゃ!お返しだ!!」

「ちよっと!!ネプテューヌ!!自分の胸揉みなさいよ!!」

結局いつもの二人であったのである。その後龍姫と星龍が料理を作り食事にするにした。

「おいしいよ!!龍姫お姉ちゃん」

「よかった!!喜んでくれて」

「ネプ子・・・アンタ」

「何?アイちゃん」

なぜかアイエフはネプテューヌを見て驚いていた。なぜかと言うと

「ネプ子!!ナス食べれるの!!」

「うん!!お姉ちゃんの作る料理で食べれるようになちやった。覚醒した影響かもね!!」

ネプテューヌは龍姫がゲームギョウ界に来るまでナス嫌いだったのだ。それが今ではナス料理を食べられるようになっていた。

そんな時だった「ドーン」という音が教会の屋上から聞こえてきたのだ。

「え!!なに!とりあえず行ってみよ」

龍姫たちは音がした現場の屋上に行くことにした。するとそこには

「誰かいるよ」

「こんばんは、あたしプラネテューヌの女神 プルルートって言うの。あなたは」

「わたし、鳴流神ネプテューヌっていうのでこっちがわたしのお姉ちゃん」

「始めましてネプテューヌの姉の龍姫です」

なんと自称プラネテューヌの女神を名乗る プルルートがいたのだ。龍姫とネプテューヌは自己紹介をした。

その日の夜はそのまま就寝することにした一行だった。翌朝、休暇三日目

「ユニ!!おはよう!!」

「お姉ちゃん!!おはよう」

「あなた、ユニなの?」

「どうしたの?お姉ちゃん;つ旦、」

ノワールはユニを起こしにユニの部屋に行ったのだがユニの様子がおかしいのだ。それに気づいたのかみんながユニの部屋に集まった。

「ユニ!!とりあえず鏡を見なさい!」

「わかったお姉ちゃん:ええ!!アタシ大きくなってるの。旦。」

いま、ユニは

身長が姉より少し高く胸も大きくなっていたのである。そのためユニは自分の胸を

「うふふこれが巨乳なのね!! (*^▽^*)」

「ノワール、コスプレ衣裳貸して上げたら?」

「そうねってなんでわたしの趣味知ってるのよ!!」

「だってあの時メイド服着てたから」

揉みながら鼻血を出していたさすがにユニの私服は入らないので仕方なくノワールが趣味でやっているコスプレ衣裳を貸してもらっていた。

この後ユニはケイに姉と間違えられたのである。

黒龍の女神ツンデレ女神の姉になるの段

星龍が女神になったことによりユニとの約束通りノワールの姉に天龍はユニの妹になることが決まった。但し国の全権はノワールが今まで通りすることになっている

天龍は姉から日本刀を譲り受け星龍は龍姫からさつき受け取った刀「大典太光世」を抜刀の構えていた。

今は何してるかと言うと、過激派の一団のアジトに乗り込んでいたのだった。

もちろん龍姫たちプラネテューヌ組も乗り込んでいた。

「年貢の納め時よ覚悟しなさい！」

「覚悟するのはテメーラの方だ野郎どもやつちまえ」

過激派の一団の隊長格が部下たちに号令掛け一斉に襲ってきたのだが、今の龍姫たちの敵ではなく

「獅子戦吼!!」

「三散華!!」

「飛燕連脚!!」

あつさりと素手でやっつけてしまった。これを見た隊長格の男はあつさりと自首したという。

スキット：ラスト四姉妹

星龍「今まではノワールが長女だったけど今日からボクがノワールのお姉ちゃんになって上げる」

ノワ「わたしが妹になるなんて思っていなかったわね別に悪くないわお姉ちゃん」

天龍「よろしくノワ姉ちゃんユニ姉ちゃん」

ユニ「今日からアタシもお姉ちゃんか、今日からアタシ〃獅子神ユニ〃だね」

星龍は「黒の女神の姉」の称号を修得した。

ノワールは「黒龍の女神の妹」の称号を修得した。

ユニは「黒龍の女神の妹」の称号を修得した。

天龍は「黒の女神の妹」の称号を修得した。

過激派の一団の件が終わったので龍姫たちプラネテューヌ組はルウイーに行こうとしたら、星龍たちも一緒に付いて来てくれるというのである。ユニのバリアジャケットは龍姫が星龍と共同開発したため、1時間で完成したのであった。今ユニがバリアジャケットを装着しているのだ。

「これがバリアジャケットなの」

ユニのバリアジャケットはミステックブラックをモチーフにされており黒に統一されており、大きくなった胸の分は銀のラインが入っているのだ。もちろん龍姫たちの同様に露出が少なく髪型はツーサイドアップのままである。もちろんリボンをしている。背中には銀色のリングが描かれている。レガースの着いたブーツを履いている

「ユニ!! 一応、銃も使えるようになってるから」

「ありがとう星龍お姉ちゃん・龍姫さん」

「やっぱユニに銃は欠かせないもんね」

ユニのバリアジャケットが完成したので一行はもう一人の転生者の武龍《たける》を探しにルウイーに飛び立った。

「どこや!ここって!!寒ー!!」

どうやら武龍はルウイーの雪原地帯に飛ばされたらしい。

「いくらなんでも人の居るところに飛ばさんかい!!」

武龍はツクヨミに文句を言っていた。仕方なく歩いていたら

「よかった!!町や!!どっか暖まれるとこ探さんと」

町に到着したようで武龍は街を探索することにした。

白龍の危機

龍姫たち一行はルウイーに向かって飛んでいた。もちろんプルルートも同行しているのだ

スキット：コスプレ根性

ギア「それがユニちゃんのバリアジャケット!!」

ユニ「そうよちゃんと胸も窮屈じゃないしプロフェッサーユニットより動きやすいわ」

ネプ「そうね、プロフェッサーユニットは翼が重かったしそれに比べてバリアジャケットは体型に自動的に合わせてくれるのよ。これもお姉ちゃんが女神になったおかげよ。ありがとうお姉ちゃん」

龍姫「別に気にしてないよ」

ノワ「わたしも着てみたいな〜」

スキット：ブランのコンプレックス

ネプ「そういやどうしようかしら」

ギア「どうしたの？お姉ちゃん」

ネプ「ほら元の姿でも胸が大きくなちゃったじゃない。ほらブラン胸にコンプレックスあるでしょう」

龍姫「そういや、前にわたしが女だつてばらした時笑顔でマジ切れしてきたよ」

龍音「どうしよう!!お姉ちゃん」

ノワ「大丈夫よ、ほつといたらいいんだから」

スキット：武龍について

ネプ「お姉ちゃん、武龍ってどんな人？」

龍姫「天真爛漫かな大阪出身でいつも元気な子だよ、だけど」

ギア「だけど？」

龍音「武龍さん、幼少期から心臓に先天性の病があつていつも入院を繰り返してたんだよ」

ユニ「それじゃあ!!早く見つけ出さないと手遅れになるじゃないですか!!急がないと」

龍姫「そうだね!!どこにいるの武龍!!」

一方その頃ルウイーの町に到着した武龍は

「あれ！教会やないか！中に入れてもらう。すみません」
教会を発見したので中に入ることにした。すると

「ようこそルウイー教会へわたしはこの教祖の西沢ミナと申します。」

ルウイー教会の教祖の西沢ミナが出迎えてくれたのだ。

「ちよつと町のこと聞きに來たんやけど」

武龍はルウイーの町のことについて聞くついでに暖まって行こうとしたのだ。その時

「へくシヨン!!」とくしゃみをしてしまった。そして

「うっ!!こんな時にまだ龍姫ちゃんと星龍ちゃんと輝龍ちゃんと飛龍ちゃんにも会えてないでなのにボクはまた死ぬのか、ごめん龍姫ちゃん・星龍ちゃん・輝龍ちゃん・飛龍ちゃん」

胸を押さえて倒れてしまったのだ。それを見たミナは

「しつかりしてください!!誰か!!誰かいないんですか。あの子たちも出かけているしブラン様は怪我が治ったばかりだし」

誰かに助けを求めていた。すると誰かが教会の扉を開けたのだ。

「武龍!!しつかりして!!気休めでしかないけど、卑しき闇よ、退け!!リカバー」

「龍姫ちゃんなんやなもう大丈夫や少し休めば大丈夫や」

龍姫が到着したところだったのだ龍姫は武龍にリカバーを掛けたのだどうやら発作がおさまったのであった。

白龍の復活

武龍の持病の発作が治まり、龍姫たち一行は客間に集合しているのであった。そんな時だった

「みなさんこんにちは」

「ツクヨミ様!!ちようどよかった!!」

「はい、なんでしよう龍姫さん」

なんとツクヨミがやってきてくれたのだ。龍姫はツクヨミに

「武龍の病氣治せないんですか?」と聞いた。すると

「実は武龍さんのご病氣をちようど治しに来たんですよ!!今、武龍さんはどちらに」

「今、ブランの仮眠室のベットで寝てるよ」

ツクヨミは龍姫に武龍が仮眠室のベットで寝ていることを教えた。

「なんで?転生するときに治さなかったの?」

「はい、それは女神メモリーを使うと持病を持った人でも病が治るので」

「そうだったんですか、つまり女神メモリーを使わないと武龍ちゃんが死んじゃうんですか」

「はい、そうですが武龍さんの場合、女神化する前に死んでしまうかもしれないと今判明しましたので天界から参ったのです。」

ツクヨミは龍姫達にわかるように説明し武龍の寝ている部屋に行った。

「えくと、誰ですか?」

「わたしの名前はツクヨミと申します」

ツクヨミはルウイーの教祖のミナに自己紹介をし武龍に近づいた。

「武龍さん!!今助けます」

ツクヨミは寝てる武龍に手をかざしたすると

「うくん、よく寝たわ、あれツクヨミ様何してんねん」

「どうですか?体の調子は」

「あれ?なんともない 息苦しくもないで、まさかツクヨミ様が治してくれたんか?」

「はい！そうです。もうあなたは龍姫さんたち同様の健康体ですよ」

ツクヨミは武龍に龍姫たち同様に健康体になったのだ。

「よかった!! 武龍みんな心配してたんだよ」

「ごめんなみんな!! もう大丈夫や」

武龍は龍姫たちに大丈夫と応えた。続けて

「そやそちらさんには自己紹介まだやったな!! ボクは御子神武龍《みこがみたける》や」

武龍はみんなに自己紹介をした。みんなも自己紹介をした。もちろんネプテューヌ達は武龍に敬語はいらないと答えた。

「龍姫ちゃん達は今何してねん？一応、ツクヨミ様からこれもらったんやけど」

「女神メモリーだねこれ使うと女神になれるんだよ」

「つで女神つてなんや」

武龍は龍姫たちに女神とは何かときいた。すると

「説明するのめんどくさいから証拠見せた方が早い変身!!」

と一斉に龍姫たちは女神化したのである。すると

「龍姫ちゃんと星龍ちゃんやんな？」

「そうだよ!!」

「武龍ちゃんこれが女神だよ」

「どうなてんねん！（。D。）」

武龍は幼馴染みたちの変動ぶりに驚きを隠せないでいた。そのまま石化したのであった。

しばらくして石化から戻った武龍であった。

白の大地のキラーマシン

龍姫たちは武龍に女神になったことを明かし落ち着かせたのだ

「へえ〜つまり龍姫ちゃんたちは女神様のお姉ちゃんやつてるんや」

「そうだよ!!お仕事で魔物《モンスター》退治に行ったりするんだよ」

武龍は龍姫たちに女神の仕事について説明を受けていた。すると奥から

「あれ?来てたの?って誰だよお前は」

「だれってネプテューヌだよ。こっちはネプギアだよ」

「ユニですよ!!大きくなってますけど」

「わたし〜プルルート」

どうやらブランはネプテューヌ達が成長していることに驚きを隠せないでいた。

もちろん

「テメラいい武器(胸)持つてるな!!その武器(胸)わたしに全部よこしやがれ!!<、>、>」

結局、ブランは笑顔で全員にマジ切れしていた。

「せっかく、快気祝いに来てあげたのに」

「帰りやがれ!!<、>、>」

と全員教会から追い出されてしまったのである。

「もうブランたらいい加減巨乳嫌い直したらいいのに」

「確かに、そうだ龍姫ちゃんクエストのやり方教えてくれへん?」

ネプテューヌはブランに文句をいい武龍は龍姫にクエストのやり方を聞いた。

「別にかまないけど武龍、武器持つてるの?」

「そうやなさすがに丸腰はまずいわな、この国の店わからんよ」

「大丈夫!!よ案内してあげる」

武龍は武器屋の場所がわからなかったのでアイエフは自分の携帯でネット検索で地図を出しみんなで武器屋に行くことにした。

「ボク、この斧と刀にするわ!!大将これ買うわ!!」

武龍は武器屋で斧と刀を購入した。一行はギルドに向かおうとし

た矢先アイエフの携帯電話がなったのだ。

「大変よ!!みんなラスティシヨンの過激派の一団の置き土産のキラーマシンがルウイー近郊で暴走してるらしいのよそれをルウイーの女神候補生の二人が戦ってるから」

「早い話、助太刀に行つてほしいってことだね、武龍しつかり捕まつてね」

「それじゃあ!!みんな行くよ!!変身!!」

どうやらラスティシヨンの過激派の一団が置き土産でルウイーにキラーマシンを送り付けていたそれを姉の代わりにロムとラムが食い止めてるらしいとアイエフの携帯に連絡が入ったのだ。

一行は女神化して龍音と天龍と武龍は龍姫と星龍とネプテューヌたちにお姫様抱っこされていた。プルルートは教会でお留守番を頼んだのであつた。現場に向かつた。

「ロムちゃん大丈夫?」

「うん! なんとか」

ロムとラムは女神化しているが? 満身創痍であることに変わりはないなかつた。

「ギイイー」

「キヤー」

キラーマシンは満身創痍の二人に襲い掛かつたのだ。その時だつた

「殺させない!!魔神剣!!」

「え!!誰?」

二人は斬撃が飛んできた方向へ顔を向けた。そこにいたのは。

「ロム・ラム大丈夫って大丈夫じゃないよね今回復させるから!!命を照らす光よ、ここに來たれ、ハートレスサークル!!」

「ありがとう、龍姫!!」

「とりあえずこのキラーマシンを片付けてからだよ」

龍姫は二人に「ハートレスサークル」を掛け傷を癒し、ネプテューヌたちも合流して各々、武器を構えた。

白い大地のキラーマシン殲滅作業の段

龍姫たちはルウイーの女神候補生のロムとラムの助太刀に来て
いるのだ。もちろん新規参入の武龍も同行してもらっている。

どうやらキラーマシンは一機ではなかった全部で五機もいたのだ
が、

「ボクのカ!!見したるで」

と武龍はいつの間にかオーバーリミッツを発動させていた。その
ままの勢いで

「弧月閃!!翔月双閃!!双月爆連舞!!」

斧で連撃を叩きこんで行った。もちろんこれで終わるわけがなく

「続けて喰らえや!!いくで!!震天!!裂空!!斬光!!旋風!!滅碎!!神罰!!
割殺撃くツ」

「長いよ!!(。D。)武龍!!」

武龍は斧で立て続けに怒涛の連撃を叩き込んでいったのだがあま
りにも技名が長い秘奥義だったので龍姫が思わず突っ込んだ。もち
ろんキラーマシンは木端微塵に砕け散った。

天龍はと言うと姉から譲り受けた無銘刀で圧倒していた。こっち
もこつちで

「調子に乗らないで!!」

とオーバーリミッツを発動させた。お約束で

「虎牙破斬!!魔王炎撃波!!熱破旋風陣!!」

虎牙破斬以外が火属性の斬撃を叩きこんでいき、お決まりの
「負けないの!!皇王天翔翼!!」

全身から炎を立ち上げジャンプしながら回転斬りから鳳凰のオー
ラを纏い突撃する秘奥義でキラーマシンを破壊した。

龍姫も妹たちに負けじと

「飛ばしていきますか!!」

とオーバーリミッツを発動させた。もちろん一刀流の状態で

「散沙雨!!閃空裂破!!翔破裂光閃!!腹括って!!天狼滅牙・飛炎!!」

連続で突き上空に回転斬りをし突きを出しながら急降下し斜め上に打ち上げ無数の閃光を繰り出し続けてバーストアーツを叩き込んで、キラーマシンにご褒美と言わんばかりに

「お終いにしてあげる!! 閃け!! 鮮烈なる刃!! 無辺の闇を鋭く切り裂き!! 仇名す者を微塵に砕く!! 決まった!! 漸毅狼影陣!!」

エンシエントドラゴンをに止めを刺したあの目にも止まらぬ速さで切り刻む秘奥義で破壊した。

ネプテューヌも手慣れた様子で

「飛ばしていくわ!!」

とオーバリーミッツを発動させたのである。ここぞと言わんばかりに二刀流で

「散沙雨!! 秋沙雨!! 驟雨双破斬!! 腹括りなさい!! 天狼滅牙・碎覇!!」

龍姫同様バーストアーツを叩き込んで最後は

「天地空!! 悉く制す!! 神裂閃光斬!!」

滅多斬りにし体術織り込ませながら最後は空破特攻弾の要領でキラーマシンを貫いた。

で木端微塵に砕け散った。

最後の一機はネプギアが相手をしていた。覚醒したネプギアの敵ではなかった。霸王紫龍神化しているのだから

「鬼炎斬!! 断空剣!! 猛虎連撃破!! 舞い降りろ!! 光翔戦滅陣・旋迅!!」

ネプギアも姉同様にバーストアーツまでつなぎ止めは

「輝け!! わたしのシエアエナジー!! これで終わりだ!! 翔旺神影斬!!」

キラーマシンを打ち上げ姉ネプテューヌの「ネプテューンブレイク」の様に空中で斬り刻み最後は敵の頭上から串刺しにした。

「あれが秘奥義なの」

「わたしも使ってみたいな」

ロムとラムは龍姫たちの技に見惚れていたのであった。

白龍、女神の世話役になるの段

キラーマシンを殲滅した龍姫たちはルウイーの教会にロムとラムを連れて戻って来てるのであった。幸い骨折もなかったので龍姫たちが治癒術を掛けて傷を治した。

スキット：成長

ラム「ネプギア!! ユニ!! なんで? 大きくなってるのよ!!」

ギア「覚醒しちゃたから」

ロム「覚醒?」

ユニ「そうよ!! でも武龍さんが女神にならないと無理だと思うけど」

ブラン「武龍!! ささつと女神メモリーを使いやがれ!!」

武龍「いやや!!」

スキット：あの服

ラム「ネプギア!! あの服何よ!! おまけに声可笑しかったわよ」

ギア「あれはBJ《バリアジャケット》って言って自動的に体型に合わせて着用する服だよそれと声がおかしかったのは霸王の力なんだよ」

ユニ「おまけにプロフェッサーユニットより軽くて見た目反して防御面も優れているのよ」

ラム「わたしも欲しい!」

ロム「わたしも」

ロムとラムはネプギアたちが成長していることに驚きを隠せないでいた。すると

「龍姫お姉ちゃん・ネプテューヌさん・ネプギアちゃん、どうやって秘奥義出してるの?」

「そうよ!! 教えなさいよ!!」

龍姫たちに秘奥義の修得方法を聞いて来たのだ。

「武龍の能力との共鳴率を上げると出来るようになるよ。」

「そうなんだ〜武龍お姉ちゃんわたしたちのお世話役なってほしいな

!!」

龍姫はロムとラムに武龍の能力との共鳴率を上げると秘奥義を修得出来ると教え、ロムは武龍に女神専属のお世話役のなつてほしいとたのんできたのだ。

すると

「しゃーないな、宿も金掛かるし持病も治ったことや今日からやっかいになるで!!ミナ!!」

「ありがとうございます」

武龍はミナにブラン専属のお世話役になるついでにやっかいになることを告げた。

「ねえ、お姉ちゃんあの時お姉ちゃんが秘奥義出してなかった?」

「初めてネプテューヌに会った時だね!確かボクが担当する国の女神を知らなかったからね。それに女神と共鳴出来ると思ってなかったから」

「そうだったの?」

ネプテューヌは龍姫が自分の転生先の変身前の姿を知らなかったのと共鳴出来ると知らなかったことを明かした。

でブランはと言うと

「うふふ(へへ)これでわたしもこの体とおさらば出来るのか」

「ねえラムちゃんお姉ちゃん怖いよ」

「そうだねロムちゃん」

覚醒すれば大きくなれると思っていた。それを見たロムとラムは姉の野望にひいていた。

「そういや、武龍は斧と刀にしたんだ」

「まあ、ね、だけどメインは斧で刀はサブにするつもりや」

「しかしあなたの秘奥義の技名長いわね!もつと短いのないの」

武龍は斧をメインで刀をサブで使うようでノワールは秘奥義の技名が長すぎるとしてききた。

すると

「なに言ってるねん!ノワールちゃん!!まだぎょうさんあるで今度みし

「てあげるさかい」
武龍はノワールにあの秘奥義はレパートリーの一つであると応え
た。

緑の大地の休日

今、教会ではある話題について話していた。それは龍姫たちプラネテューヌ組が使っていた。「バーストアーツ」（以後BA）のことである。

「そういや、龍姫たちは奥義に繋いだ後に更につなげてなかった？」

「あれはバーストアーツって言う戦闘術でオーバーリミッツ中じやないと発動できないんだよ。もちろん、あのまま秘奥義につなげられるよ」

「へえ〜そうなんですか、アタシもできるんですか？」

「もちろん!!出来るよオーバーリミッツ中にしか発動できないからね」

龍姫はノワールたちにBAができることを教えた。夜も遅いこともあり龍姫たち一行はルウイーのホテルで泊まることにした。そして、翌朝、休暇四日目

全員のNGIAにメールが入っていたので見ると

「何々一緒にリーンボックスの室内プールで遊びませんか、教会にてお待ちしていますもちろん水着は貸し出しますわ ベール」

とベールからのお誘いのメールだったのだ。

「せっかくだしそれに輝龍ちゃんと飛龍ちゃんに会いたいし」

「うふふこのアタシのダイナマイトボディを見せてあげるわ」

「ベールさん絶対驚くよユニちゃん、そうだノワールさんと一緒のツインテールしてみたらいいんじゃないかな」

「そうね、絶対ベールさんお姉ちゃんの間違えるとおもうわ」

でそんなこんなでホテルをチェックアウトしルウイー教会に向かった。すると

「わたしも輝龍と飛龍に会いたいそうでしょ武龍？」

「そうやな、一緒に遊んだことあまりないし」

「わたしも二人に会いたいな」

武龍とロムとラムはリーンボックスに行く気満々であるのにたいしブランは

「仕方ないわね一緒に行ってあげるわよ、今すぐに武龍を女神にしてほしいけど」

どうやら武龍に早く女神になってほしいブランであった。

一行は教会の外に出て

「リーンボックスに向かってレッツゴー!!」

と龍姫たち一行はリーンボックスに向かって女神化して飛んでいた。もちろんプルルートはネプテューヌがお姫様抱っこしているのであった。

武龍はまだ女神になってないので龍姫が負ぶっている状態であった。そんなこんなでリーンボックスに到着した一行はさっそく教会に行くことにしたのだ。

「ベール!!ご招待されたから来たよ!!」

「お待ちしております、さあこちらへどうぞ」

一行はメイドさんの案内で教会の客間に案内された。しばらく部屋でくつろいでると

「みなさん、お待ちしておりますわ、えくと・・・龍姫、ネプテューヌはどこですか?ノワールが二人いるんですけど」

ベールは龍姫にネプテューヌが成長していることとユニも成長している上にノワールと同じツイントールだったのと姉と同じクリアドレス姿だったので見分けがつかなかったのである。

仕方ないので二人は

「わたしはネプテューヌだよ」

「やっぱりベールさん引つかかったわねアタシはユニですよ」

ベールに正体を明かしたのだすると

「ネプテューヌ!!大きくなってるのです!!(；。D。)(ユニちゃんまでなんか病気ですの(；。D。)」

驚きを隠せないでいた。

プールにて

ベールに招待された龍姫たち一行はベールと妹になった輝龍と飛龍と合流していた。

約束通り室内プールに行くことにした。

「この水着にしよ」

龍姫達は室内プールの更衣室に行きベールが貸し出してくれた水着に着替えていた。

着替え終わったので室内プールのプールサイドにみんな集合していた。

「へえ〜お姉ちゃん大胆だねそれにしたんだ」

「そう？これが一番地味だったからこれにしたんだ」

「念願だったビキニが着れるって最高よ」

「そうだねユニちゃん!!」

龍姫たちの水着はと言うと

龍姫は青一色のビキニで、ネプテューヌは紫のビキニ、ネプギアは白ビキニ、龍音は競泳水着である。プルルートはフリルが付いたビキニ

星龍は星柄のビキニ、ノワールはピンクの水玉模様のビキニ、ユニは黒ビキニ、天龍は龍音と同じ色違いの競泳水着

武龍は赤ビキニ、ブラン達はフリルの水着

輝龍と飛龍は黒と白の縞々のビキニ、ベールは緑のビキニである
着ているのである。結局、いつもの通りに

「武龍、テメーいい武器《胸》持ってんなその武器《胸》よこしやがれ
もちろん全員よこしやがれ（；・・、ド・ン）」

「お姉ちゃん!!落ち着いて!!」

ブランは全員に笑顔でマジ切れしていた。ロムとラムはブランを止めていた。

一同はプールを満喫していたのであった。

「ところで輝龍と飛龍、女神の仕事に慣れた？」

「うん、簡単なお仕事を手伝ってるんだよ」

「ちゃんと書類関係のお仕事も手伝ってるし、クエストもこなしてるよ」

龍姫は二人に女神の仕事に慣れたか聞いていた。

二人とも少しではあるが女神の仕事に慣れてきたと言った。すると

「もう、そろそろ上がらない?」

「そうだね!!上がって更衣室に行こうか」

プールを満喫した一行は更衣室に向かい私服に着替え客間に向かった。で客間でしばらくくつろいでいた。

すると

「みなさん、お茶会の用意ができたので呼びにきましたわ」

「ほんじゃ、行きますか!!」

龍姫達はお茶会の会場に向かった。

紅茶などを飲み楽しいお茶会を楽しんだ龍姫たちはリーンボックスのホテルに向かいチェックインをして泊まることにした。

龍姫たちが寝ている頃、リーンボックス教会はと言うと

「お姉さま、よろしいでしょうか?」

「どうぞお入りになって、チカ、どうしたんです?」

ベールがチカが深刻な表情で入ってきた。すると

「実はアンダーインヴァースで不審者が目撃されたとの情報がリーンボックス特命科から報告がありましたわ」

「なんですって!!それは本当ですよ!!チカ」

「はい、ですがまた罫の可能性も否定できませんわ」

チカは特命科からアンダーインヴァースいうダンジョンで不審者を見かけたとのじ報告が入ったのだった。

リユウオウ現る

アンダーインヴァースで怪しい人影を見たという目撃情報を受けたベールは

「チカこのとは二人には内緒にしてくださいるかしら」

「なんですか!?お姉さま!!」

「声が大きいですわよ」

「すいません、お姉さま」

チカに妹の輝龍と飛龍には内緒にするようお願いしたのであった。そして、

「では、行ってまいりますわ。チカ二人のことはお願いしますわ」

「はい、お姉さま無事に戻ってきてくださいいね」

「はい、もちろんですわ」

ベールは調査のため夜も明けてないうちにアンダーインヴァースへ行ってしまったのである。

しばらくするとアンダーインヴァースの入り口に到着したベールは中に入って行った。

魔物《モンスター》を倒しながらそのまま進んで行った。すると

「ふあはは!!これで女神どもをギャフンとできるぜ! このエネミーディスクで」

とどこかで聞いた声がするではありませんか。そう、あの時ルウィーでロムとラムをトリックに誘拐させた人物だった。

それを岩陰から見ているベールは

「これはみんなに知らせないといけませんわ!!」

このことをみんなに知らせることにしたベールだったが

「ピーピー」

「なんですの!!」

人物に気を取られてどうやら小型防犯ロボに見つかってしまったらしいのであった。

それに気づいたのかぞろぞろと魔物《モンスター》が現れてしまったのである。もちろんあの人物も気づいていた。

「仕方ありませんわね、見つかってしまった以上、強行突破ですわ!!」

「逃がすかよ、やっちまえ!野郎ども!!」

ベールは出口に向かつて強行突破して行った。もちろんあの人物も黙っているわけもなく、持っていたエネミーディスクと呼ばれるものを放り投げたのだ。すると中から

「なんですか?一体このモンスターは」

「リュウオウ!!その女神をやっちまえ!」

巨大魔物《ギガントモンスター》「リュウオウ」が出てきたのだ。

「龍姫じゃありませんけど腹括りますわ!!」

ベールは女神化してリュウオウに立ち向かっていったのだ。

一方その頃

夜が明けて日付が変わって、翌朝 休暇五日目

ベールがアンダーインヴァースに行ってるとは知らない龍姫たち一行はそれぞれの国に帰るため教会に挨拶をしに行くのである。

教会の中に入った龍姫たちに

「龍姫ちゃん」

「星龍ちゃん、武龍ちゃん」

輝龍と飛龍が駆け寄ってきたのだ。その二人に龍姫と星龍と武龍は

「一体、何があったの(てん)?」

と聞いた。すると

「朝起きたら、お姉ちゃん!!が」

「いなくなつててチカ姐問いたしたら一人でアンダーインヴァースに不審者を捕まえにいちやっただよ」

とふたりは朝起きたら姉のベールがいなくて仕方なくチカを問いただしたら一人でアンダーインヴァースに不審者を捕まえに行つた。と言うのだ。

ベール!!の危機の段

ベールがアンダーインヴァースに護衛を着けずに行ってしまったと輝龍と飛龍から告げられた龍姫たち一行は教会で教祖のチカになぜ今まで黙っていたかを聞いていた。

「チカ!!どうして今まで黙ってたの?教えてよ」

「実はベールお姉さまにみんなには言う名と止められていたのです。多分、妹たちのこと思ってたのです」

どうやらベールは妹の輝龍と飛龍を危険にさらしたくなかったらしく夜、二人が寝てる間にアンダーインヴァースに調査にいったのだった。

「それでも!!わたしたちになんの相談もないなんてノワールじやあるまいし」

「なんで!!そこで!!わたしがでてくるのよ!!(; . . . ㄩ :)」

ネプテューヌ・ノワールはなぜか夫婦漫才みたいなことをこんな状況で始めてしまったのであった。

「アンダーインヴァースにベールを助けに行こうよ」

「龍姫ちゃん、一緒に行ってくれるの」

「星龍ちゃんと武龍ちゃんも」

龍姫は二人にベールを助けにアンダーインヴァースに行くことを言った。もちろんほかのみんなも一緒に行くと言った。

「あの〜プルルートを見てもらってもいいかな?」

「別に構いませんわ、ただしちゃんとベールお姉さまと輝龍と飛龍を連れて帰って来ることが条件ですわ」

「もちろん連れて変えて来るから、いい子でお留守番しててねプルルート」

「わかった〜」

龍姫はプルルートをチカに預け必ずベールを連れて帰って来ると約束してアンダーインヴァースに向かったのだ。

その頃ベールは

「やっと出口ですわ」

アンダーインヴァースの出口付近に到着していたのだが、
「グオオオー」

どうやらリユウオウがベールの背後から襲い掛かったのだ。不意
を突かれたベールは

「キヤー」

飛んで逃げようと思った矢先に左足を掴まれてしまいそのまま「ボ
キッ」という音とともにベールの左足は絶対に曲がっては行けない方
向に曲がっていたのだ。おまけに「翼」のプロフェッサーユニットも
破壊されてしまったのである。

それを見たリユウオウをエネミーディスクから出したあの人物は
「ぎやはは!!ぎまねーなこの国の女神はよ!!もう一丁エネミーディス
クがあるからなやつちまえ!」

とエネミーディスクを放り投げそこから出てきたのはキラーマシ
ンに似たロボットだった。

「わたくしはここで果ててしまうのですね。この国を頼みましたよ、
輝龍・飛龍・チカ」

ベールが死を覚悟した時だった。

「諦めないでお姉ちゃん!!」

「ベールを殺されてたまるもんですか!!」

「ベールを死なすもんか!!魔神剣」

龍姫たちが助けに駆けつけたのだ。戦いの火蓋は切って落とされ
た。

緑双龍の女神、見参

ベールを発見した龍姫たちはリュウオウとアキレスをエネミーディスクから出した人物に龍姫達は怒りを露わにしていたのだった。「きやははー！こうも簡単に女神をやれるとわな、いいだろうアタイの名は犯罪工員リンダだ」

「この落とし前キツチリ100倍に返したる」

「許せない絶対に許さないんだから」

武龍は女神メモリーを使わず斧を構え啖呵を切り、輝龍と飛龍は徐に相手に悟られないようにポーチに手を伸ばしあるものを取り出した。

「ごめんねベールお姉ちゃん!!」

「今、助けるから」

取り出したのは緑龍の「女神メモリー」である。二人の目には一切の迷いはなく

「我、この地に転生された者成り」

「我、緑の大地の龍の女神になる者なり」

「セットアップ!!」

二人は光に包まれ出したのだもちろんこれを見たリンダは腰が引けていた。

「やっちなえー！リュウオウ、アキレス!!」

リンダはリュウオウとアキレスに二人を攻撃するよう指示を出したが

「やらせないよ!!蒼破刃!!」

「わたしたちもいることも忘れなてない!!魔神剣!!」

「そうだよ!!古に伝わりし浄化の炎・・・落ちよ!!エンシエントノヴァ!!」

龍姫たちがいることを忘れていたので

蒼破刃と魔神剣と上級魔術の「エンシエントノヴァ」の雨霰を喰らっていた。で

光が収まったのするとそこにいたのは、

「これがわたくしなの!!」

「輝龍と飛龍なの」

二人はと言うと

髪が緑になっており前髪に青のメッシュが入っている、髪型が二人ともポニーテールで胸も大きくなっており服はベールと違い露出がなく、目の色は左右対称の紫と青のオッドアイで、ロングコートの様な上着を着ていた、色は赤と青になっており、手には槍が握られていた。身長はベールより高く二人とも172cmになっていた。

「ほんじゃボクたちも行くよ!!セツトアップ!!」

と龍姫たちも一斉に女神化したのだ。もちろんリンダは

「何人女神がいるんだよ!!こうなったら自棄だ。やっちなまえ!!」

龍姫たちが女神化したので自棄になっておりおまけに普通の女神化ではないことに一切、気づいてなかったのである。

もちろん女神化した龍姫たちの相手になるはずもなく

「ここはわたしたちに任して」

「お願いしますわよ」

輝龍と飛龍は龍姫達にモンスターを頼みリンダの方へ飛んで行き

「行くわよ」

輝龍はオーバードリミッツを発動させた。もちろんこのまま

「天雷槍!!飛燕連月槍!!風月!!切り刻め、風の如く!風塵!封縛殺!!」

槍で突き上げ雷を落とし、振り上げ空中で追撃しそのまま攻撃してBAまでつなぎお仕置きとばかりに

「来たれ雷!!裁きを受けよ!!煌華月衝閃!!終わりよ!!」

何の躊躇もなく槍に雷を纏わせ薙ぎ払う秘奥義を放った。リンダは秘奥義を喰らっているにも関わらず

「うぎやーこうなった逃げるが勝ちだ」

「待て!逃げ足は速いのね」

リンダに逃げられてしまった。

リュウオウ死す

龍姫たちはリンダが置いて行った。リュウオウとアキレスの相手をしていた。

リュウオウとアキレスに向かって

「閃空双破斬!!」

「獅吼爆炎陣!!」

「守護方陣!!」

「真空千裂波!!」

龍姫は回転斬りで舞い上がりそのまま虎牙連斬に繋ぐ奥義を、ネプテューヌはタツクルで怯ませて掌底を放ち炎を纏い兜割りにし爆風を熾し、ノワールは地面に刀を突き刺し魔方陣を出現させ、星龍は裂空斬から連続突きを放つ奥義を放った。

「飛ばしていくわ!!」

ノワールはオーバリーリミッツを発動させた。元々刀になれてなかったが持ち前の技のキレで

「爆碎陣!!虎牙連斬!!哭空裂襲撃!!腹括りなさい!!天狼滅牙・風迅!!」

前方宙返りをしながら刀を地面に叩き付け爆風を熾し、斬り上げ薙ぎ払い斬り降ろし、本来は拳で打ち上げるのだがノワールは左手にグローブを装備していないのでサマーソルトから回し蹴り薙ぎ払いB Aに繋いだ。

もちろんノワールがこれで終わるわけがなく、

「お終いにするわ!!閃け!!鮮烈なる刃!!無辺の闇を鋭く切り裂き仇名す者を微塵に砕く!!決まったわ!!漸毅狼影陣!!」

「あれって龍姫ちゃんの秘奥義だよ」

以前、龍姫がノワールを助けるために修得した秘奥義で最後は指パッチンでしめた。

「行きますわよ!!」

飛龍もオーバリーリミッツを発動させたのだ。巧みに槍を操り

「旋風槍!!月影刃!!落月爪!!切り刻む!!封塵衝月華!!」

竜巻を熾し高速で突き力いっぱい槍を叩き付けB Aに繋げ最後は

「あなたはここに果てていただきますわ!! 我に仇名す者を・・・冥府へ送りし・・・朧月の棺!! 霸王!! 籠月槍!!」

BAで拘束し蹴りと槍の斬撃の連撃を叩き込み、ボール直伝の槍投げで串刺しにする秘奥義で止めを刺した。

輝龍と飛龍は負傷したボールに近づき

「聖なる恩恵を!! キュア!!」

上級魔術「キュア」を掛けたのだがやはり

「二人ともごめんさい。うぐ!! やはり言うことは言ってくれないのですね。」

どうやら治癒術が体に馴染んでなく骨折した左足に力が入らなかったのだ。

「まだ骨折が治ってないんだから。よいしょっと」

輝龍はボールを背中におんぶしたのだ。このまま病院に直行したのだった。その間、

「変な感覚ですわいつもは背負ってあげる立場でしたからかもしれないわね」

ボールはいつもはおんぶしてあげるのでおんぶされるのは珍しいと思っていたのだ。

そんなこんなでリンボックスの病院に到着しそのまま緊急手術になった。

連絡を受けたチカは血相を変えて飛んできたのだ。

ベール、謝罪するの段

今、ベールの左足の手術が行われているのであった。もちろんチカも来ているのである。

手術室のランプが消え扉が開きストレッチャーに乗せられ左足にギブスを巻かれ麻酔が効いてるらしくぐっすりと眠っていたベールが運ばれてきた。

「先生!!お姉ちゃん（お姉さま）は大丈夫なんですか?」

三人は執刀医にベールの状態を聞いた。すると

「輝龍様・飛龍様・チカさん、大丈夫ですよ!!手術は成功しました。応急手当がよかったのか、もう回復傾向に向かっています。あと2〜3週間で完治しますよ。」

「ありがとうございます。先生。」

執刀医にお礼を言い三人はベールの病室に行った。龍姫たちはと
言う

「とりあえず挨拶だけでもして行こうか」

「そうだね」

挨拶をするためベールの病室に行ったのだが、本人はまだ眠っているらしく仕方なく輝龍と飛龍とチカに挨拶を済ませそれぞれの国に帰って行った。

ところ変わってプラネテューヌに帰ってきた龍姫たちはプルルトの
トのことをイストワールに伝えていたのだった。すると

「しばらくの間プルルトさんを教会で預かることにしましたのでよろしく願いますよ」

「わかったよ、いーすん!!よろしくねプルルト」

「龍姫ちゃん・ねぶちゃん・ギアちゃん・龍音ちゃんよろしくね」

しばらくプラネテューヌ教会で居候することになったプルルト
だった。

この日は食事にして就寝たのである。翌朝、休暇六日目 龍姫たちはバーチャルフォーレストの奥地に来ていた。もちろんプルルトも見学のためついて来たのだ。

なぜここに来ているかと言うと

「崩襲脚!!」

「義翔閃!!」

「二人ともく怪我しないでね」

術技の特訓が目的である。ここ毎日、龍姫がゲームギョウ界に来てネプテューヌのお世話役と言う名の武術指南役になって以来行っているのである。それもそのはず龍姫がお世話役になるまで実戦以外のことを妹のネプギアに全部押し付けていたのだ。その上、今いる場所は、ネプテューヌが書類関係の仕事をサボって逃げ込んだ場所である。

「なかなか！やるね!!お姉ちゃん!!」

「伊達にお姉ちゃんやってないからね!!」

そんなこんなで武術の特訓を切り上げ、朝食にするのであった龍姫とネプテューヌとプルルートであった。

「この目玉焼きおいしいよ!!」

「味噌汁も良いダシ使てるね!!」

「よかった!!喜んでくれて」

どうやら今日の朝食は龍音が作ってくれたようである。朝食を楽しんでっていると突然Nギアが鳴ったのだ。

「誰だろう?・・・ベールからだ!!何々皆様ご機嫌いかがでしょうか、この前の事件では大変、迷惑を掛けてしまいましたので改めて謝罪の言葉をこのような形で送ることを許してください、怪我に関しては順調に回復に向かっていますわ今はこの前ネプギアちゃんにチカのために作ってくれた電動車椅子に乗っていますわ、今度、遊びいらしてください輝龍と飛龍も楽しみに待っていますわ ベールより」だつて」

「ベール、気にしてたんだ!!あのこと別にいいのに友達なのに遠慮しちゃってね」

「まあ、ベールさんなりに筋を通そうと思ったんじゃないかな?」

なんと!!ベールからの写真付きのメールだった。

天界からの報酬の段

朝食を食べ終えた龍姫達は各々の部屋でくつろいでいた。龍姫はなにをしているかと言うと

「ツクヨミ様、何かご用でしょうか？」

どうやらツクヨミが龍姫に通信をしてきたのだった。その内容は「このたび、四か国すべての転生者を見つけ出したことをわたくしの上司であり天界の最高責任者であらせられます天照大御神△アマテラスオオミカミ△様に報告したところ、あなた方が生前、大切にしていたものお送りしたいと仰られたのでご連絡をさせて頂いているのです。もちろんほかの三か国の転生者も同じです。」

「ええ!!つまり生前、ボクの私物を送ってくれると言うことですか?」「はいそうです!!あと数分後に届くと思います。なのでこれを機に新たに頑張ってください。ではご健闘をお祈りします」

と言い、ツクヨミは通信を切ってしまったのである。自分の得物の手入れを終えると

「龍姫さん、よろしいでしょうか?」

「いーすん、どうしたの?」

「龍姫さん宛に荷物が届いているんですが、送り主が天照大御神△アマテラスオオミカミ△と書かれてるんです」

「まさか、もうきたの?それ、ボクにツクヨミ様が天照大御神様に頼んで送って来てくれた荷物だよ!!今、受け取りに行くね」

「わかりました!!ではサインしておきますので取りに来てください」
もう龍姫宛に荷物が届いているらしく、龍姫はその荷物を取りに行った。

「これが龍姫さん宛に届いた荷物です」

「いーすん、ありがとう」

荷物を受け取り

「ネプテューヌ!!今大丈夫?」

「大丈夫だよ、入って来てもいいよ!!」

荷物を抱えてネプテューヌ・ネプギアの部屋に入っていた。

「お姉ちゃん、その荷物なに？」

「あ、これツクヨミ様からのだよ」

「開けてみようよ!! 龍姫お姉ちゃん!!」

「開けるよ!!」

で荷物の段ボールを開けると中から

「これって、ボクたちが死ぬ前にいた世界のゲーム機とゲームソフトとアニメのDVDだよ!!」

「地球の日本って国のハードなの？」

「そうなんだ!! せっかくだしテレビに繋げて遊ぼうよ」

「そうだね!! 今日休みだし、まずこれにしようか」

何と龍姫と龍音が生前いた世界「地球」のゲーム機とアニメのDVDだったのだ。もちろん龍音を呼び出し

「お姉ちゃん、どうしたの……ってこれってプレイステーション3だよ!! まさか、あの時、いーすんがお姉ちゃんに言ってた荷物ってこれだったの!!」

「そうだよ!! なんかツクヨミ様が四か国の転生者を見つけ出した報酬だって。もちろん三カ国にも届けるって言ってたよ」

「絶対ベール遊びだすよ、龍音も遊ぼうよ!!」

「せっかくの休みだし、わかったよ付き合うよ」

「この「テイルズオブヴェスペリア」って言うソフトで遊ぶとしますか!!」

龍姫達は楽しい時間を過ごしていたのだった。

ナス畑へ

龍姫達は天界からの報酬の地球のハードで遊んでいたのだった。一段落したので昼食を取ったのでギルドに行くため町に繰り出していた。もちろんプルルートも一緒である。

スキット：地球のハード

ネプ「楽しかったね!!」

ギア「うん!!一瞬、ラステイションのハードに見えたよ」

龍姫「まあ、プ」レイステーション」3つて言うからね4人まで遊べるから」

プルルート（以後プル）「あれって〜コントローラー繋がなくていって便利だね〜」

龍音「あれ一応、充電式だから」

スキット：ゲームのキャラ

ネプ「あのゲームの主人公の性格ってノワールにそっくりだよね」
ギア「確かに、胸元が開いた黒い服着てるしなんでも一人でやろうとするところもそっくりだったね!!技もノワールさんに似てる技もあるよ」

龍姫「確かに、似てるよね「哭空裂襲撃」と「レイシーズダンス」が特に似てたね。おまけに「漸毅狼影陣」と「インフィニティットスラッシュ」まで似てたね」

龍音「確かに、似てるよね」

噂をされてる本人はと言うと

「ヘクシヨン!!」

「お姉ちゃん、風邪引いたの、無理せず休んだら」

「大丈夫よ、たぶんネプテューヌたちが噂してるだけだから」

思いつきりくしゃみをしていたのだった。そんなこんなでギルドの前に到着したので中に入ろうとした矢先、Nギアが鳴りだしたのだ。

「大変です!!アイエフさんがマジエコンヌらしき人物に連れ去られました」

「いーすん!! ホントなの!! 場所は」

「プラネテューヌ近郊のナス畑です」

なんとパトロールに出かけていたアイエフがマジエコンヌに連れ去られたいうのであった。

「なんで? ナス畑? ナス大丈夫だけど?」

「たぶん、覚醒したこと知らないんじゃない」

「そんなことより、アイを助けに行こう!!」

マジエコンヌが哀れに見えてきたのであった。ふぎけながら一行はナス畑に直行した。

一方その頃ナス畑では

「ふはははあの女神はナスが嫌いだと言ってたな」

どうやら結構情報が古いことに気づいていないマジエコンヌだった。アイエフはと言うと

「解け!! 今すぐ解きなさい!!」

「うるさい!! チンチクリンの小娘の分際が生ナスでも食つてろ!!」

どうやら縦けられた丸太に縛られていた自身の得物カタールを奪われたらしく口に生のナス入れられていた。

「アイちゃん、助けに来たよ」

「やつと来たか、野郎ども掛かれ!!」

マジエコンヌはアイエフを助けに到着した龍姫達に向かってナス型の魔物《モンスター》を喚けたのだが

「ん? あのバカ女神は逃げたかそれもそうだななんせ大嫌いなナスの軍勢だからな!! あははは」

完全にネプテューヌが覚醒の副作用で成長していることに気づいていなかったのだった。

アイリスハート見参

龍姫たちはアイエフを助けにナス畑に来ているのだが、どうやらマジエコンヌは

「あのちっこい奴だったな、野郎どもあいつだ」

「こつちく来ないで〜」

「プルルート!!」

ネプテユーンとプルルートを間違えたらしくナス型の魔物《モンスター》を嚇けてしまったのである。そのまま囲まれてしまった。で棒で突き始めた。

「ツンツン」

「助けないと!!変身!!」

龍姫たちは一斉に変身したのだがどうやらプルルートが

「ツンツン」

「もう怒っちゃっていいよね!!」ドーン!!」

なんと持っていたぬいぐるみを地面に思いつきり叩き付け光に包まれたのだそれを見た

龍姫たちは

「ぶるるん!!変身出来るの?」

驚愕していたのだが光が収まると

「お・バ・カ・さ・ん!!」

「ええ〜!!あれがぶるるん(プルルート)なの!!。(。Д。)(ノ」

それもそのはず

濃い紫色の服に背中には六枚の蝶々のような羽根が付いており右手には関節剣が握られていた胸も大きくなっておりいかにもDSが具現化したみたいだった。

「えーい!!おまえは誰だ!!」

「いいこと聞かない子はお仕置きよ!!」

「あれ、助けた方がいいんじゃない」

変身してしまったプルルートがマジエコンヌを鞭で袋叩きにしているのを龍姫達はただただ見てるしかできなかった

龍音はこの隙にアイエフを助けに

「アイさん!!今、助けます」

「ありがとう、龍音!!」

帯刀していた小太刀で縄を切りナス型の魔物を倒しって行った。

「アイちゃん、大丈夫?」

「ええ大丈夫よ」

この場を女神化したプルルートに任せ教会に帰ることにした一同であった。それに気づいたのかプルルートもこっちにきて

「みんな帰るの」

「うん!!帰ろ!!プルルート!!」

女神化を解きいつものプルルートに戻っていた。教会に帰るのであった。

その日の夜

「今日はナスカレーですよ!!どんどん食べるですよ!!ねぶねぶも食べれるようになってくれたので作り甲斐があるですよ」

「生はまだ無理だけど調理したナスなら食べれるよ!!」

「どうやらコンパがナスを使ったカレーを作ってくれたみたいだが

「どうしたの?アイ?」

「ななな・・なすだめえー」

「どうやらマジエコンの所為でアイエフは逆にトラウマでナス恐怖症になってしまったらしい」

そんなこんなで楽しい夕食は過ぎて行った。

一方その頃、怪我の療養中のベールはと言うと

「これが輝龍と飛龍たちがいた世界のハードですわね中々面白いゲームがそろっていますわ、おまけにアニメのDVDまで報酬にくれるなんて天照大御神様に感謝ですわ」

と輝龍と飛龍の世界のハードをベットに寝ころびながら遊んでいたのだった。

黒衣の断罪者

翌朝、休暇最終日

龍姫達はいつものように術技の特訓をし朝食を取り各々の部屋でくつろいでいたのだが急にネプテユーンが

「ねぷー!!大変だよ!!ノノノノワールが!!」

「どうしたの?ネプテユーン、ノワールがどうかしたの?」

慌てて龍姫の部屋に乱入してきたのだ。どうやらノワールに何かあったようで

「ユニちゃんからノワールが急に胸押さえて苦しみだしたんだよってメールが来たんだよ。(。D。ノ)」

「わかったよ!!ラストেশションに行く準備して」

ノワールが急に胸を押さえて倒れたと連絡が来たようで一行はラストেশションに女神化して飛んでいた。

ラストেশションでは

「うぐあああ〜」

「お姉ちゃん!!しっかりしてもうすぐ龍姫さん達来てくれるから」

「こんなの少し休めばよくなるから」

ノワールはどうやら覚醒の症状にうなされていた。しばらくすると、

「ノワール!!もう大丈夫だよ」

「龍姫さん!!ネプテユーン又さん!!ネプギア!!龍音!!来てくれたんですか?」

と龍姫たちが到着したのである。と突然、目の前が光が舞い降りてきたのだ。

「みなさんこんにちはツクヨミですどうやらノワールさんは覚醒が始まったですね。」

「え!!そうなんですか、ツクヨミ様!!」

「はい!!そうですよ、ユニさん!!ここは星龍さんに任せてくださいな」

「わかりました!ツクヨミ様、ノワール!!お姉ちゃんが今助けるから」
ツクヨミが天界からやって来てノワールが覚醒の最終段階と伝え

星龍に後を任せて天界に帰って行った。

そして星龍は深呼吸をして手をノワールに向け

「この者に眠りし黒き力よ」

「うああ〜」

「お姉ちゃん!! (ノワ姉!!)」

ユニ同様に黒い炎がノワールを包み込んでいった。星龍はそのま
ま

「この者に眠りし狼の名を持つ者の力よ」

「目覚めよ「黒衣の断罪者」の名を次し者!!」

詠唱をした。すると、ノワールを覆っていた黒い炎が消え中から現
れたのは

身長が165cmに胸がベールに匹敵するぐらい大きくなって
以外がそのまんまであるが着ていた服がとんでもないことになって
いた

「これがわたしの今の姿なの……って服がどうしようこれじゃ……」

「コスプレ用の衣裳新調するんだよね!! ノワール!!」

「ってなんで!! そうなるのよ!!」

「そうだった!! とりあえずお姉ちゃん!! 服貸して!!」

「そんなことだろうと思って、はい」

ノワールは星龍に服を貸してもらって事なきを得たのだった。
すぐに

「ノワール!! どんな? バリアジャケット欲しい?」

「いいの!! じゃこれなんだけど」

ノワールのバリアジャケットの作成に取り掛かる前にノワールか
ら趣味のコスプレの写真の中からモデルにする衣裳を選んでもらっ
ていた。

ノワールは「黒衣の断罪者」の称号を修得した。

黒の女神のバリアジャケット

今、龍姫たちは覚醒したノワールのBJの作成に取り掛かっていたのだった。ノワールは今まで着ていた私服とコスプレ衣裳をユニと天龍にあげることにした。天龍は大喜びしていた。

スキット：コスプレ根性2

ノワ 「この衣装をモデルに作ってほしいの、できる？」

龍姫 「なるほど、この衣装をモデルに作ってほしいのね」

ノワ 「なるべくかわいいのにしてほしいの」

星龍 「わかってるよ、ノワール、かわいいものが好きなの知ってたから待っててね」

ユニ 「お姉ちゃんたら」

天龍 「かわいい物が好きなんだから」

そんなこんなでノワールのBJが完成したのだった。ノワールの神力とBJのデータコアを合わせた。
リンカーコア

「ノワール!!女神化して見て」

「わかったわ!!お姉ちゃん!!アクセス!!これがわたしのバリアジャケットなの!!かわいい!!ありがとう、お姉ちゃん!!龍姫!!」

ノワールのBJはと言うと

黒を基調にしており、上着はノワールの注文通りクリアドレスをモチーフにしており、後ろ腰に大きいクリアリボンがついており、もちろんスカートもついており、後ろの丈を少し伸ばしており、覚醒したので女神化しても大きさが変わらない症状が無くなったので胸もさつきより大きくなっていたので胸の部分は露出せず青と黒のインナーになっていた。もちろん髪型はツインテールでリボンはいつも髪を束ねるときに使うクリアリボンである。で左腰に龍姫にもらった「ニバンボシ」が差している。両足に黒のブーツを履いている、両手にオープンフィンガーグローブで左だけガラムファンングになっている。身長はネプテューヌと同じ175cmになっていた。頭に猫耳型のプロフェッサーユニットが装備されていた

「これでも、ノワールの注文に合わせて作ってあるんだよ!!文句は言

わせないよ!!」

「完璧だわ！これのどこに文句がつけるのかしら!! 最高よ!!」

「どうやらノワールは心底、気に入ったらしく、疑問に思ったことを聞いてきた。」

「これ、敵の攻撃とかで破けたらどうするの?」

「大丈夫だよ!! 全員のB バリアジャケツト Jに自己修復機能つけてあるから安心して戦っているよ!!」

「ええ!! そうなの!! ありがとうお姉ちゃん・龍姫!!」

その場にいた覚醒したメンバーは龍姫と星龍にお礼を言った。するとノワールが

「ねえ!! 龍姫たちは今日まで休みよね?」

「そうだけど、どうしたの? ノワール?」

「一緒にクエストでもどうかなって」

「なんだ!! クエストと一緒に行ってほしいんだ!! わかったよノワール」

龍姫たちをクエストに誘ってきたのだ!! それに

「まさか!! 覚醒したことによりノワールのツンデレが治っちゃったの!!」

「たぶん、お姉ちゃんのツンデレは本当の自分を相手に伝える方法を知らなかっただけだと思いますよ」

ユニが姉ノワールのツンデレは自分をされけ出せなかったと述べたのだった。ただし、ネプテューヌには素直になれないようであった。

黒狼の女神

ノワールのBJが完成したので龍姫たちはプラネテューヌのシエアを上げるついでに一緒にギルドにクエストの受注に来ているのだ。
スキット：左の籠手

ノワ「そういうや女神化した時、左手だけガントレット形が違うの？」
星龍「それは、ノワールって右利きだったよね」

ノワ「そうだけど、それがどうかした？」

星龍「ほら、ノワールが左手を使って戦えるように左だけ籠手の形を変えてあるんだよ!!それに「獅子戦吼」と「戦迅狼破」などの技は剣を持ってない方で攻撃する技だからその形にしたの!!」

ノワ「そうなの!!ありがとうお姉ちゃん!!」

しばらく電光掲示板を見ていると

「このクエストに決めたわ!!」

「いいんじゃないかな」

どうやらセプテントリゾートに「火山亀」の討伐と「タートル」の討伐を選んだのである。そのまま龍姫達は現場に向かうことになったのだ。

そして、セプテントリゾートに到着した一行は討伐対象を発見したので各々に武器を構え、そのまま

「魔神剣!!」

「蒼破刃!!」

「魔神連牙斬!!」

「霸道滅封!!」

「ヴァリアブルトリガー!!」

「サンダーブレード!!」

一斉に攻撃を仕掛けたのだどうやらまだ倒れそうにないので
「アクセス!!真の女神の力見せてあげるわ!!」

ノワールは女神化したもちろんあのバリアジャケットを着ている状態で火山亀に向かって

「牙狼撃!!」

右に持っている刀で突き左でボディーブローを叩き込んでダウンさせたがすぐ体制を立て直してきたがノワールは攻撃させる隙を与えず

「飛ばしてくわよ!!」

オーバーリミッツを発動させた。もちろんノワールの戦闘マニアのスイッチが入ってしまった

「虎牙破斬!!」

素早く斬り上げ、斬り下ろし

「秋沙雨!!」

連続で突き最後に斬り上げ

「囓烈襲!!」

ガラムフアングと名前を付けたガントレットを装備している左拳の連続正拳突きをお見舞いし

「腹括りなさい!!天狼滅牙!!」

地面を叩き、怯ませそのまま切り刻んだ。勢いに身を任せ

「お終いにするわ!!閃け!!鮮烈なる刃!!無辺の闇を鋭く切り裂き!!仇名す者を微塵に砕く!!決まったわ!!漸毅狼影陣!!」

龍姫も修得している相手を中心に陣を描くように狼の如く切り刻む秘奥義を放った。それに耐えきれなかったのか火山亀は光の粒子になって消えていた。

「道閉ざす敵は何だつて斬り捨てるのみよ!!」

ノワールは勝利宣言していたのであった。でもう一体の討伐対象の「ターゲット」は龍音・ユニ・ネプギア・天龍が相手をしていた。もちろん龍姫・ネプテューヌ・ノワールも援護に回っていた。

タートル討伐の段

龍姫達はもう片方の討伐対象である、タートルの撃墜を行っていた。龍音・ネプギア・ユニ・天龍の妹組が相手をしていた。

龍音は大小の刀、ネプギアは数珠丸恒次、ユニは片手でも撃てるライフルと見た目割に女性でも片手で扱える片刃の斬馬刀を、天龍は無銘の刀をそれぞれに構え攻撃を繰り返していた。

「ここはボクに任せて!!いくよ!!」

龍音がオーバードリミッツを発動させた。このまま

「幻影刃!!」

突進しながら切り抜け

「空襲剣!!」

突進しながら斜め後方に切り抜け

「崩龍斬光剣!!」

“Z”の軌道を描きながら切り刻ぎみ

「舞い降りろ!!光翔戦滅陣・獅炎!!」

爆風を熾し、前方に獅子の炎を飛ばし

「目障りだよ!!ボクの前から消えて魔神!!煉獄殺!!これでわかった!!」

斬りつけた後オーラで巻き上げ連続で斬り刻み、斬り下ろし、最後に突き抜ける秘奥義で止めを刺したのだった。

「これでクエスト完了だね!!早く町に帰ろうか!!」

一行はクエストを達成したので報告のため町に帰るのであった。

スキット：調子

星龍「ノワール、どう、バリアジャケットの調子は？」

ノワ「全然問題ないわ!!寧ろプロフェッサーユニットより動きやすいわ」

龍姫「よかった!!気に入ってくれて!!」

ノワ「ありがとう!!龍姫・お姉ちゃん!!」

スキット：龍音の秘奥義

ネプ「龍音ってばまた新しい秘奥義覚えたの?」

龍音「うん!!今度はオーラで舞い上げて斬り捨てる秘奥義だよ!!」
ギア「アイエフさんいなくてよかつたね龍音」

龍姫「そうだね☒いたら浜辺で僻んでそうだよね!!」

そんなこんなでギルドに到着した一行は達成報告をし各々に解散したのであった。

プラネテニューヌに戻った龍姫達はすぐさま夕食の準備し夕食にするのであった。

「ふう〜いい湯だね!!」

「うん、明日からお仕事頑張らないと」

「ほんじゃ!!明日から気合入れていきますか!!」

龍姫・龍音はお風呂に浸かりながら明日から始まる仕事に行き込んでいた龍姫であった。

二人は風呂から上がり寝間着を着て

「お休み龍音!!」

「お休みなさい、お姉ちゃん」

と就寝したのである。翌朝、いつものようにバーチャルフォートレスの特訓場で

「魔皇刃!!」

「魔王地顎陣!!」

「斬魔飛影斬!!」

「無理しないでね〜」

といつものように術技の特訓に汗を流しているのであった。プルルートも毎日、見学しているのであった。

「この辺で上がろうか?」

「そうしよう!!早く朝ごはんにしよう!!」

特訓を切り上げ教会に戻り朝食を取ることにしたのだ。今日のメニューは

「ハムと目玉焼きと焼き魚だよ!!」

「いただきます!!おいしそう!!」

今日は何とネプテニューヌが作ってくれたようである。

「どう?おいしい?」

「おいしいよネプテューヌ!!」
と朝食を食べ終え今日の仕事場の執務室に行くのであった。

龍姫たちの術技の段

龍姫達は今、書類を片付けていた。もちろんあのネプテューヌも一緒にに行っているのだ。そんなこんなであつという間に書類を片付けてしまったのである。

「みんなと一緒にやると早く終わるね!!それもこれもお姉ちゃんと龍音のおかげだよ!!」

「そうですね!!龍姫さんがここに来るまでネプテューヌさんはサボるか逃走してましたから」

「そうだったの?ギア姉?」

「うん、そのせいで書類の山がいつぱいだっただから」

龍音は龍姫がプラネテューヌ教会に来るまでネプテューヌがサボってばかりだったことを教えてもらっていた。

「この後は何も予定が入っていませんので各自、自由にしてください!!」

「わかったよ、いーすん!!」

龍姫達は仕事が終わったのでみんなで教会のリビングに集まることにしたのだ。その理由は

「このゲームで遊ぼう」

「うん!!戦闘だけ四人プレイ出来るもんね!!」

龍姫達の世界のハードで遊ぶためだったのだ。ゲーム機の電源を入れ、プレイすることにした。しばらくしてふと時計を見ると

「お昼だね!!お昼にしようか?」

「お昼だー!!今日はなんだろ」

龍姫たちは昼食を摂ることにしたのである。

で昼食を食べ終えたのでネプテューヌはあることを龍姫に

「まさか!!わたしたちの術技つてもしかして!!さっきやってたゲームのキャラの術技なの?」

今やっていたゲームのキャラの術技が自分たちが今まで使っていた術技なのか聞いて来たのだ。

「たぶん、ツクヨミ様が言ってたこの世界とは別の世界の術技ってボ

クがやったこのあるゲームのキャラの術技だったんだ!! 道理で知ってる技とかスキルとかシステム出来るわけだ」

「そうなの!! じゃわたしたちが今まで使用してきた技と魔法は龍姫お姉ちゃんと龍音がやったこのあるゲームのキャラの術技だったんだ。」

どうやら龍姫はツクヨミから自分のやったことのあるゲームのキャラの術技を使える能力をもらっていたことに気づいてなかったのだ。

「けど!! そのおかげでわたしも回復魔法が使えるんだし結果オーライじゃない」

「それもそうだね!!」

そんなこんなで楽しいひと時を過ごしていた龍姫たちだったのである。

一方その頃、リーンボックスでは

「お姉ちゃん!! (お姉さま)」

「準備できた?」

「できましたわ!! じゃお風呂に向かいますか」

どうやらみんなでお風呂に入るようである。もちろんまだベールは電動車椅子に乗っているのである。

「いいお湯ですわーゲームしたあとは格別ですわ!! これも輝龍と飛龍がわたくしの妹になってくれたおかげですわ」

「そんなことないよ!! それにお姉ちゃん!! の怪我、お医者さんが驚いてたよ治りが早いって」

輝龍と飛龍は病院の医師にベールの怪我の治りが早いことを伝えた。

犯罪組織の影

リーンボックス組はお風呂を満喫していたのであった。

「お姉さま!! やっぱり片足が動かせないのはお辛いですか?」

チカはボールのギブスを巻いてある左足を見て聞いたのである。
すると

「確かに、不自由じゃないと言えばウソになりますわ、けど輝龍と飛龍
そしてチカ!! あなた達がいてくれるおかげで、こんな怪我でも辛くな
くなりましたわ」

「そうですわね!! 輝龍と飛龍に嫉妬していた自分が情けなく思います
わ!!」

「ほんじゃ!! お姉ちゃん!! 体洗ってあげるね!!」

と楽しい入浴を終えたのである。輝龍と飛龍が緑龍の女神になっ
て二週間が経った

「終わりましたよ!! ベール様、さすが女神様であられるお方ですね。
手術の後もきれいさっぱり消えてますよ!!」

「ありがとうございます先生!! ではわたくしはこれで」

ベールはギブスが取れたのである。もちろんあの三人も一緒に来
ているのだ。

「お姉ちゃん!! ギブス取れたんだ」

「はい、そうですわよこれで思う存分仕事がやれますわ!!」

「お姉さま、教会に帰りましょうか」

「そうですわね!! 帰りましょうか?」

と教会に帰って行くのであった。

とところ変わってプラネテューヌでは

「あそこの島なんだよね!! いーすん?」

「はい!! あそこに、犯罪組織の建物があるんです」

どうやらあのリンダと言う下っ端が所属している犯罪組織の一団
がプラネテューヌ近郊の島で暴れてると報告が入ったのだ。

「とりあえず、歩いて行こう。空から行くと見つかる可能性があるか
ら」

龍姫たちは上陸して女神化を解き歩いて現場に向かうことにしたのだ。すると、どつから兎も角

「やあ〜!!」

「助太刀に行かないと!!みんな行くよ」

と誰かが戦っているのである。龍姫たちは一人で戦っている人物の助太刀に行き、

「魔神拳!!」

「え!!誰!!」

「話はあとで!!獅子戦吼!!」

「そうだよ!!まずこの場を乗り切ってからだよ!!三散華!!」

龍姫は素手で衝撃波を飛ばし、ネプギアは獅子の闘気を叩き付け、ネプテューヌは素早く三回蹴り込んだ。犯罪組織の集団を素手で撃退したのである。

「ボクの名前は鳴流神龍姫」

「わたしの名前はファルコム!!よろしく龍姫!!会って早々済まないけどわたしはここを離れるわけにいかないんだ。それとさっきのやつらはこの先の建物に潜伏してるよ」

「別に構わないよ、ありがとうファルコム!!」

ファルコムはこの先の建物に犯罪組織の集団がいること龍姫達に教えてくれたのだ。

龍姫たちは犯罪組織が潜伏しているノーコネディメンションに向かったのだった。

ハードブレイカー見参

今、龍姫たちはというと、ノーコネデイメンションを

「魔神連牙斬!!」

「魔神剣・双牙!!」

「魔神剣!!」

モンスターを倒しながら進んでいるのである。もちろんプルルトは教会でお留守番である。しばらく進んでいくと

「もたもたするなよ!!」ここを占拠するのに二週間も掛かってどうすんだ!!」

と以前リユウオウとアキレスをエネミーディスクで召喚した張本人の下っ端ことリンダがいたのである。

で龍姫たちはしばらく様子を窺うことにした。すると

「リーンボックスに候補生がいるなんてよ!!しかもルウイーと一緒に双子だったしな!!あの双子がいなかったらリーンボックスのをこの手あの世に葬れたのに!!てか!!ゲームギョウ界にあんなに女神がいたのかよ!!」

犯罪組織の下っ端ことリンダはこの前、リーンボックスの襲撃の負け惜しみを述べていた。すると

「だがな、これで女神どもを地獄に送ってやれるんだからな!!このハードブレイカーでな!!」

なんと!!下っ端ことリンダはあろうことか!!対女神兵器「ハードブレイカー」を構成員らとともに完成させていたのであった。

それを物陰から見ている龍姫は

「龍音、下っ端に向かって魔術で攻撃してほしんだけど、出来る?」

「なに言ってるの!!お姉ちゃん!!一緒に特訓してたから大丈夫だよ!!これにしよう!!」

風よ起これ!!サツと吹いてサツと斬れ!!ウインドカッター!!」

龍音に魔術で下っ端ことリンダに攻撃するよう指示を出し、龍音は下級魔術「ウインドカッター」を唱え

「痛って!!誰だ!!」

見事命中したのである。龍姫・ネプテューヌ・ネプギアはこの隙にリンダの背後に回って

「お縄についた方が身のためだよ!! インカローズ!!」

「誰が!! インカローズだ!! アタイはリンダだ!! ってそっちの方が長いだろうが!!」

突っ込まれながら刀を突き付けた。するとインカローズことリンダは

「こうなったら自棄だ!! やっちまいなハードブレイカー!!」

ハードブレイカーに指示を出した。のだが、

「倒しても構わないだろうか!!」

「おい!! それ死亡フラグだろうか!! あとは頼んだぞ!! ボン!!」

「待て!! くそー!! 逃げ足だけは速いんだから!!」

ハードブレイカーは死亡フラグのセリフ言っつていまいリンダが突っ込んでしまったことにより隙を与えてしまいおまけに煙玉を使われてしまい結果、逃げられてしまったのである。

「こいつをほっておくと危ないしね!! いくよみんな!!」

「受けて立つ!! ハードブレイカーの名に懸けて!!」

こうしてハードブレイカーとの戦いの火蓋が切って落とされた。

ハードブレイカー決着

ハードブレイカーとの戦いの火蓋が切って落とされた。そして「では、参る」

ハードブレイカーが先に動いたのだ。しかしながら今の龍姫たちの敵ではなく、

「空牙昇竜脚!!」

「魔神月詠華!!」

「空破絶掌撃!!」

「魔神閃空破!!」

龍姫は炎を纏いながら飛燕連脚をする秘技を、ネプテューヌは月を描きながら二段斬りを行いそのまま斬撃を飛ばす奥義を、ネプギアは突き抜け振り向き突く奥義を、龍音は斬撃を飛ばし回転斬りに繋ぐ奥義を放った。

「ふん!!このハードブレイカーこの程度では倒れぬぞ!!」

とハードブレイカーは言っているが装甲が所々壊れているのである。そして

「今、楽にしてあげる」

「行くよ!!ネプギア!!龍音!!」

「!!ああ!!」

ハードブレイカーに攻撃を繰り出していたのだ。もちろんこの時、女神化をしていないのだ。

「なぜ!!女神化せぬのだ!!」

ハードブレイカーは女神化をしない龍姫たちに驚きを隠せないでいたのだ。

「だつてする必要を感じないから!!」

「こんなことも想定してましたから!!」

と龍姫たち言い、その間、ネプテューヌは

「天光満ところに我はあり、黄泉の門開くところに汝あり、出でよ!!神の雷・・・インディグネーション!!」

「ネプ姉!!」

「お姉ちゃん!!」

「すごい!!いつの間にかこんなすごい魔法出来るようになったの!!」

ハードブレイカーが龍姫に気を取られている隙に、雷の上級魔術「インディグネイション」の詠唱していたのだ。もちろんハードブレイカーに直撃したのである。

「許さんぞ!!く、く、く>女神ども!!」

どうやらインディグネイションを喰らったのが余程ショックだったようでロボットなのにキレ出した。

「さつき、楽にしてあげるって言ったよね!!」

「おおおお姉ちゃん!!キャラ変わってるよ!!」

龍姫はハードブレイカーに黒い笑みを浮かばせていたそれを見たネプテューヌ・龍音は突っ込んだ。

「飛ばしていきますか!!」

で龍姫はオーバーリミッツを発動させた。このまま一刀流で

「散沙雨!!」

刀で連続突きを放ち

「秋沙雨!!」

更に連続突きを行い最後に斬り上げ

「翔雨裂空撃!!」

秋沙雨と裂空斬の複合奥義を放ち

「焼き尽くす!!天狼滅牙・飛炎!!」

炎を刀身に纏わせ滅多斬りにし斬り上げるバーストアーツを決め、最後は

「お終いにしてあげる!!光龍滅牙槍!!」

刀身に光を纏わせ覇道滅封の要領で光の龍を飛ばす秘奥義で止めを刺し

「さよならだよ!!」

ハードブレイカーは光となって消えていた。

「お姉ちゃん!!」

「みんな!!ごめん、あれはハツタリをかましてただけだから帰ろうか?」

「「うん!!」」

龍姫たちはファルコムに報告をし教会に帰るのであった。

紫と白の夜

ハードブレイカーを倒した、龍姫たちは教会に帰って来てるのである。夕食まで時間があるので雑談することにしたのだ。

スキット：秘奥義

ネプ「秘奥義って言うてもいろいろあるね!!」

ギア「そうだね〜わたしたちのエグゼドライブも秘奥義って呼ばれるからね、龍姫お姉ちゃんほどの秘奥義が一番しつくり来るの?」

龍姫「やつぱり無属性の「漸毅狼影陣」さんこうろうえいじんだね!!」

ネプ「そうなんだ!! そうだよね、この前遊んだゲームの主人公の第一秘奥義でセリフを言いながら滅多切りにするんだもんね!! そういや、ノワールも真似てたよね?」

龍音「あつ! それ、星龍さんと一緒にあのゲームで遊んでいたからね!! 同じゲーム持ってるよ」

ギア「つまりノワールさんが修得できたのって、星龍さんが知ってたからなんだ!!」

スキット：インディグネーション

ギア「お姉ちゃん!! いつの間にあんなすごい魔法出来るようになったの?」

ネプ「あれね、なんか頭に浮かんだんだよね!!」

龍姫「え! そうなの、てつきり密かに魔術の特訓してたのかと思っ
たよ」

そんなこんなで夕食の時間になったのでプルルートと一緒に食事
にすることにしたのである。

「今日の夕食はマーボーカレーだよ!!」

「二回、マーボーカレー食べてみたかったんだ!!」

「マーボーカレーってあのゲームの料理だよね?」

「そうなんですか!! すごいですう!! 龍姫ちゃん」

今日の夕食のメニューはなんと!! 龍姫の世界のハードのゲームの料理「マーボーカレー」であった。

「うくん!!おいしいよ! (^o^)/お姉ちゃん!!」

「こんな料理初めて食べるけど、いけるわ!!」

「このカレー〜おいしいよ〜」

「よかった!!初めて作るからね」

どうやら好評であった。食事を終え後片付けをし、お風呂に入った。

一方その頃

「ブラン・ロム・ラムお風呂にやで〜」

「ハイ!!今行く」

どうやらルウィーもどうやらお風呂だったようだ

「ふう〜生き返るわ〜」

「そうだね、武龍お姉ちゃん」

「武龍も大きいんだね!!龍姫と星龍よりは小さいけど」

どうやらラムは武龍の胸が大きいことに興味を持ったようだ

「うん、武龍お姉ちゃんも大きいね」

「褒めてもなんも出へんで〜」

「おい!!武龍!!いつになったら女神になるつもりだ!!< (^.^)>」

で結局、ブランは武龍に笑顔でマジ切れしてる上に武龍に女神になるように迫っていた。

「なにゆうてんねんブランちゃん!!こゆうのはな、ブランちゃんたちが絶体絶命の時に使うんや!!わかったブランちゃん!!」

「わかったよ、これでも女神の端くれだからな、そうだ武龍一つ聞いていいか?」

ブランは武龍に疑問に思っていることを聞いて見たのだ。

白龍の決意

ブランは武龍にあることを聞いてみたのだ。

「もし、女神になったらどうすんだ？」と武龍にもし女神になったらどうするか聞いたのだ。すると

「そんなこと簡単や!!それは」

「「それは?」」

「ブランちゃんのお姉ちゃんになったる!!」

武龍はなんと!!ブランの姉になると宣言したのである。ブランが黙ってる訳がなく、

「この国、乗っ取るつもりか!!<・・・>良いぜ!!相手になってやるよ!!表に出ろ!!(;・・・ム・・)」

女神化してしまったのである。

「誰がこの国乗っ取るって言うた?この国はブランちゃんが最高責任者やボクはあくまでお姉ちゃんで補佐兼秘書や」

「そうか、すまねえ」

「わーい(*・▽・*) 武龍がお姉ちゃんになるんだ」

武龍は今まで通りブランが最高責任者でいることを頼んだ。ラムは武龍がブランの姉になってもいないのに喜んでいた。

「ほな!!上がるで」

風呂から上がることにした武龍であった。そして翌日、

「武龍お姉ちゃん行くよくアイスコフィン!!」

「なんのこれしき爆碎斬!!」

どうやら、武龍たちも術技の特訓をしていたのであった。

「これならどう?細やかなる大地のざわめきストーンブラスト!!」

「甘いで!!双炎刃!!今日はここまでや!!」

特訓を終了し、教会に帰ることにした武龍であった。

「おいしい!!」

「まあ!一応、それでも料理は出来るんやで」

朝食は武龍が作ってるようで侍従のフィナンシエは

「すごいですね!!わたしよりうまいんじゃないですか?」

「そんなことないで!!」

武龍の料理の腕に軽く嫉妬していたのであった。

「じゃ武龍、ロムとラムを頼むわね!!」

「はいよ!!まかせなさな!!」

ブランは仕事のため執務室に入って行きロムとラムの子守を武龍に頼んだのだ。しばらくすると

「大変です!ブラン様!!」

「なんだ!!こっちは忙しいんだよ!!」

「すみません!!町でまたキラーマシンが暴れるとの報告がありました。今度は別の過激派の一団のようで!!早く!!対策を」

「なんだと!!今すぐ行く!!」

なんとまたキラーマシンがルウイーで暴れてるらしいのだそれを聞いた武龍たちは

「ロム・ラム!!準備しいや!!」

「わかった!!」

「先に行ってるぜ!!」

各々に準備をしキラーマシンの撃墜に向かった。

「こんなことしといてただで済むかよ!!」(;)

「そやな、この落とし前キツチり返してもらおうで!!」

ブラン・武龍は現場に到着して現状を把握した後、ブランはハンマー、武龍は片手斧、

ロムとラムは杖をそれぞれ構えた迎撃の体制を取ってのだった。

白龍覚醒

武龍たちは街で暴れているキラーマシンの撃墜を行っていた。もちろんブラン・ロム・ラムは武龍の力の共鳴出来ているので異世界の術技を使用可能である。

「獅吼滅龍閃!!」

「雷神招!!」

「エクस्पロージョン!!」

「アイシクル!!」

武龍は斧で周囲を薙ぎ払い獅子の鬨気を叩き付け、ブランはハンマーを打ち上げ雷を落とし、ロムは火の魔法を、ラムは氷の魔法で攻撃を繰り返していた。

「しぶといな!!」

「そりゃな!!」

今回のキラーマシンはこの前の改良型のようになかなか装甲が硬いのだ。そんな時だった

「ギイイー」

「もう一体いたのかよ!!」

なんと!!キラーマシンは一機ではなく二機もいたのだった。それに気づいてなかったのだ。

「腹括るしかないな!!」

武龍は腰のポーチに手を伸ばしあるものを手に取ったのだ

「おい!!おまえ!!覚悟はできてるんだな?」

「さっき腹決めたんや後悔はないわ!!」

そうなにを隠そう透明の女神メモリーだった。そして武龍は

「我、龍の名を持つべきものなり」

「我、白き大地に降臨せし龍成り」

「セットアップ!!」

女神メモリー使い、光に包まれたのだ。すると

「これがうちなんか? (これじゃ八神は〇てや)」

「かっこいいな!!」

武龍はと言うと

龍姫と星龍と同じく露出はなく胸も大きくなっており服装が龍姫と星龍同様、某魔法少女の格好になっており

髪がロングヘアでブランと同じく白が入った水色になっていたが前髪が茶色のメッシュになっていた。目は右紅と左金になっていた。得物は白と金になっていた。

「ほんじゃ行くで!!」

「武龍!! 援護してやる!!」

武龍はキラーマシンに攻撃仕掛け、ブラン達は援護に回った

「飛ばして行くで!!」

武龍はオーバリーミッツを発動させた。でこのまま

「弧月閃!!」

月を描くように弧を描き

「翔月双閃!!」

更に月を二回描き

「空旋連転斧!!」

横に四回転で攻撃し

「大地の刃!! 天狼滅牙・碎覇!!」

連撃を叩き込んだのち地面を叩き衝撃波放った。もちろんこのまま

「うちのとつておきや!! これでも喰らいな!! もう一丁!! 旋嵐火爪!!」

なんと!! 斧を投げ、竜巻をお越し、最後に炎を纏った刀を投げ込んで爆風を熾す秘奥義でキラーマシンをまとめて破壊してのた。もちろん投げた武器はちゃんと手元に戻ってきた

「あれが武龍のもうひとつの秘奥義か」

ブランは武龍の秘奥義に言葉を失った。そして

「女神になってもうたんやな、ほんじゃ、約束通り、ブラン、今日からうちが三人のお姉ちゃんや!! 覚悟しいや!!」

「もちろん!! 覚悟はとつてきてるぜ姉貴!!」

こうして武龍が白龍の女神になったので約束通りブランの姉になったのだ。

武龍は「白の女神の姉」の称号を修得した
ブランは「白龍の女神の妹」の称号を修得した

紫と白と緑のその日

キラーマシンを撃墜したことで武龍が女神になったことをル
ウィー教会の教祖のミナに報告することにした。

「ミナちゃん!!」

「ミナ!! いるか?」

「ブラン様!! ご無事だったんですね!!」

「見ての通りな!!」

ミナはブラン達がみんな無事であることを聞いてほっとしていた
のであった。

そして

「ミナちゃんに報告があるの!!」

「報告とはなんです?」

ロムはミナに報告があると言い、ミナは報告とは何にか聞いた。

「武龍がお姉ちゃんになったんだよ!!」

「あのくどういう事か説明して欲しいのですけど? ブラン様」

ラムは武龍がお姉ちゃんになったことミナに報告したそれを聞いて
てこの真相をブランに聞いた。

「実はボク、女神になったんや!!」

「なに、嘘を仰られてるんですか!!」

武龍は自分が女神になったことを明かし、ミナは嘘だと思っていた
ので、

「武龍!! 変身しろ!!」

「そやな!! こうなったら、論より証拠や!! セットアップ!!」

「たまた武龍さんなんですか!! (。□。ノ」

「ウチやで!! なにゆうてんねん」

ブランは武龍に女神化するように指示を出し、それを見たミナは固
まってしまったのである。

「と言うことでよろしいですかブラン様?」

「ああ、別に構わないわ」

「今日から御子神家や!!」

と言うことで武龍はブランの姉になったのだった。

ところ変わってプラネテューヌでは

「ふう、書類、午前中に片付いてるからこうして休憩出来るんだもんね!!」

どうやら龍姫たちは午前中に書類を片付けてしまったのでリビン
グでくつろいでいたのだった。

すると、

「そうだ!!いーすん!!これからのスケジュールって、どうなっているの?」

「いや、別に何もありませんけど、それと、明日から五日間が休暇になっ
ていますけど」

「やった!!明日から休みだよ!!何しようか?」

「今日は取りあえずゲームでもやろうか!!」

ネプテューヌはイストワールに今後の予定聞いたら明日から五日間の休暇になったと聞き、龍姫はとりあえずゲームでもして時間をつぶ
そうと言った。

「うん!!やろやろ!!」

とゲームで遊ぶことにしたのだ。

「この料理おいしそうだね!」
「こゝろ」

「もう、お姉ちゃんたら料理は一回、戦闘しないとできないよ」

「そうだった!!とりあえずこの敵でも倒すか」

どうやらネプテューヌはゲームの料理と料理システムが気に入ったらしいのだが一回、料理したようでネプギアに戦闘を行うように注
意されていたのだった。

ところ変わってリオンボックスでは

「ゴホ、ゴホ!!」

「チカ姐、大丈夫?休んだ方がいいよ」

「今、車椅子持ってくるから」

「少し休めば大丈夫よ、いつものことだから」

どうやらチカが息切れと過呼吸になっていたようであった。

緑と紫の特訓

輝龍と飛龍はチカのことを気になるのでベールに聞いて見ることにしたのだ。

「お姉ちゃん、チカ姐つてどっか悪いの?」

「そういや、あなた達に話してなかったですわね、実はチカは生まれつき体が弱いんですの」

ベールは二人にチカが生まれつき体が弱いことを明かしたのだった。すると

「そうだったんだの!!」

驚きを隠せないでいたのであった。そして

「大変です!!ベール様!!」

「何ごとですか?」

どうやら職員が慌てて入ったのである。ベールは何かと聞いた。すると

「チカ様が倒れました!!」

「それはどういう事ですの、チカはどこですの!!」

「チカ様のお部屋です」

なんと!!チカが倒れたらしいのだすぐさまベールと輝龍と飛龍はチカの部屋に向かったのだ

「チカ!!大丈夫ですの!!」

「チカ姐!!」

「ベールお姉さま!!それに輝龍と飛龍!!心配掛けてごめんなさい」

「謝らなくていいのですよ、今日はゆっくりお休みなさい、仕事はわたくし達がやっておきましたから」

どうやらチカは休めば良くなるようで仕事は先ほど三人で済ませているのであった。

そんなこんなで夜になり夕食を済ませ、お風呂に入り、就寝したのであった。

この時、すでにベールの力が覚醒しようとしていたことに、輝龍と飛龍は知る由もなかったのだ。

そして次の日、休暇一日目、ところ変わってプラネテューヌではないつものように術技の特訓の真つ最中であった。

「魔王炎撃波!!」

「断空剣!!」

「獅吼爆雷陣!!」

「幻狼斬!!」

と各々の術技に磨きが掛かっていたのだ今回はなんと!!輝龍と飛龍とベールも来ているのであった。

「行きますわよ!!飛燕月華!!」

「負けてないよ!!轟破雷神槍!!」

「天雷槍!!」

と龍姫たちはキリのいいところで切り上げることにし、教会に戻ることにしたのだった。

今、龍姫たちは朝食を食べている最中である。

「今日は、わたしが作ったんだよ!!」

「ネプテューヌが!!作ったんです!!」

「大丈夫だよ!!この頃、ボクとコンパが時間が空いた時に料理を教えているから」

どうやらベールはネプテューヌが料理ができることが信じられないのであったが、龍姫とコンパが教えたことを教えたのだ。

朝食も終わり、龍姫は自分の部屋に戻っていたのだが、突然、自分のNギアがなったのだった。

「あれ輝龍からだ!!何々・・・ええ!!」

「どうしたの?お姉ちゃん」

どうやら先ほどリーンボックスに帰った輝龍からだったようで、ベールの身に何かあったらしいのだ。

「ちよつとリーンボックスに行つてくるね!!セットアップ!!」

「待ってよ!!お姉ちゃん!!」

と龍姫たちはリーンボックスに飛んだのであった。

審判を超えし者

輝龍から連絡を受けた龍姫たち一行はリーンボックスの教会に向かっているのである。

スキット：ベールの異変

ネプ「まさか!! ベールが」

龍姫「多分、覚醒の予兆かもしれない」

ギア「なら急ぐ必要があるね!!」

と一行はリーンボックスに到着したのだった。そのまま教会に向かったのだ。

「龍姫ちゃん!! お姉ちゃん!! が」

「落ち着いて!! 二人とも」

龍姫は二人に落ち着くように言い聞かせ、ベールの自室に向かったのだ。

「お姉さま!! 龍姫が来てくれましたわ!!」

「龍姫ですの?・・・うぐあ」

どうやらベールは覚醒の予兆が表れていたのだった。龍姫は輝龍と飛龍に

「二人とも聞いて!! ベールは二人の能力と共鳴したことによって覚醒しようとしているの!!」

「そうなの!! どうすればいいの!! 龍姫ちゃん!」

龍姫はベールが二人の能力に共鳴したことにより覚醒しようとしていることを教えた時だった。

「輝龍さん、飛龍さん」

「ツクヨミ様!!」

「どうしたんですか?」

なんとツクヨミが天界からわざわざやって来てくれたのだ。

「二人にベールさんを覚醒させてほしいのです!!」

「わかりました!! やってみます」

とツクヨミは二人にベールを覚醒させるように言った。そして二人はベールに腕を伸ばし

「この者の眠りし力よ」

「どうとう、わたくしも覚醒すのですね」

とベールを緑色の光が包み込んだ。そして

「目覚めよ!! 審判を超えし者よ」

と輝龍と飛龍は言い、光が収まり、そこにいたのは

「お姉さま!! (。D。) ノ服がとんでもないことになってますわ!!」

なぜならいまのベールは

身長が163cmから170cmに伸びてる上に、元々大きかった胸がさらに大きくなっていたので胸がとんでもないことになっていたのだ。

「どうしましょう (||。ω。) ノ着れる服がありませんわ」

「とりあえず、ボクの服とサラシ貸してあげる」

とりあえずベールは輝龍にジャージワンピースとサラシを借りたのであった。

「こんな服一度、着てみたかったんですわ!!」

どうやらベールは気に入ったのであった。

「じゃあ、ベールのバリアジャケットの作成に取り掛かるとしますか

!!ほら、プロフェッサーユニットの翼壊れてたでしょ」

「手伝うよ」

「龍姫ちゃん!!」

龍姫は早速ベールのバリアジャケットの作成に取り掛かるのであった。

待つこと数時間

「ベール!! できたよ!!」

みんなの協力もあり、ベールのバリアジャケットが完成したのである。

それをデータ化し、リンカーコア神力と融合させた

「お姉ちゃん!! 女神化してみて!!」

「行きますわよ!!...これがわたくしのバリアジャケットですよ!!」

ベールのバリアジャケットは

緑と白と黒を基調にしている、露出をなくし、胸の部分は緑色のX

のラインが入っており、ちゃんと大きくなった胸にも着れるようになっていた、両腕に籠手が装備されており、両足にレガースの着いたブーツが装備されていたのだった。もちろんスカートはベールの着ていたプリンセスドレスをモチーフの前にスリットが入っている。頭にヴァルクユリアの様なアタッチメントがついていた。もちろん髪型はポニーテールである。

「ベール、気にいった？」

「え、もちろんですわ!!」

ベールもご満悦であった。

チカの可能性の段

今、龍姫たちはベールのバリアジャケット姿に見とれていたのだった。なぜなら、

なんと、女神化を行った時の身長が167cmから180cmまで伸びていたのだった。

これは龍姫と星龍が女神化した時より大きくなっているのだ。おまけにボディラインも、クッキリと出ていたのだ。

「まさか、身長がとうとう180cmになるなって夢にも持つてませんでしたわ!!ちゃんと女に見えるでしょうか?」

「わたしたちより大きいから仕方ないんじゃない」

「大丈夫だよ!!お姉ちゃん!!胸も大きくなってるから」

ベールは身長が180cmになっているので、ちゃんと女としてやって行けるか不安になっていたが輝龍と飛龍とネプテューヌは大丈夫と励ました。

「あ、それと、チカさん、これをお渡しします」

「これは!!まさか!!「女神メモリー」ですわ!!」

ツクヨミはなんと!!チカに女神メモリーを渡したのであった。

「ツクヨミ様!!まさか!!わたくしにも適正があつたのですの?」

「確か、適正が無いと魔物《モンスター》になっちゃうんだよね!!」

「普通の女神メモリーの場合はそうですが、この女神メモリーはまたの名を「転生メモリー」と呼ばれているのです。なので、もしチカさんが力つきそうになった場合に使つて欲しいのです」

「ありがとうございますわ!!ツクヨミ様!!これでわたくしもお姉さまの妹になれるのですね!!」

「と言うことは、チカ姐がお姉ちゃんになるんだね」

ツクヨミはチカに渡した女神メモリーは天界の技術者によって作られていると教え、輝龍と飛龍はチカが姉になることに喜んでいた

「では、これで、それと武龍さんも女神になりましたよ!!ただ、まだبرانさん達を覚醒させるには経験値が足りません。みなさんに幸あれ!!」

とツクヨミは天界に帰って行ったのだった。

スキット：チカの女神転生

ベール「チカ!! どうするのですの?」

輝龍「そういや、“箱崎”って名字だよね?」

チカ「そのことですか、心配いりませんわ!! あくまで教祖で女神であなた達の姐御なのですからなのですから!! もし、女神になったら神楽堂性を名乗りますわ!!」

飛龍「なるほど、一応、箱崎のままなんだ。で女神になったら神楽堂に養子に入るんだね」

チカ「ええ、ちゃんと養子縁組をしますわ」

「武龍も女神になったんだ」

龍姫は武龍も女神になったことに喜びを隠せなかった。

「輝龍と飛龍に続き武龍も女神になったのですね!! それそうとわたくしの私服を新調しないといけませんわ!! チカ、お願い出来るかしら?」

「もちろんですわ!! お姉さま!! 皆様とゲーム等して待っていてください。では」

「では、みんなでチカが戻ってくる間、例のハードのゲームでもしましようか?」

とベールはチカに服の調達をお願いして、戻ってくる間、みんなで龍姫たちの世界のハードで遊ぶことにしたのであった。

アブネス見参

龍姫は輝龍と飛龍にあることを聞いて見たのである。それは

「そういや、二人とも女神の説明って受けたの？」

そう、輝龍と飛龍は女神になったことで説明されたかを聞いた。すると

「なにそれ!!聞いてないよ!!」

「お姉ちゃん!!説明してよ!!」

どうやら二人は説明してもらってなかったのであった。なので

「女神になると歳を取らなくなるんですの!!おまけに体も成長しませんわよ」

「ええ!!（。口。）ノそれってボクたち不老不死になっちゃったの!!」

「いいえ、不死にならず不老長寿になったのですわ」

二人とも話を聞いて驚きを隠せないでいたのであった。まだ説明は続き

「歳を取らなくなっただけですわ、それと、病気にもなりますわよ」

とベールは二人に説明を続けていたのだが、

「すみません!!言い忘れてました!!」

とツクヨミが慌てて天界からとんできたのであった。その内容は「龍姫さん・星龍さん・輝龍と飛龍さん・武龍さん・と龍音さん・天龍さんは女神ではあるんですが、担当の国のシェアが無くなっても死ぬことが出来ないのです」

ツクヨミは龍姫たち転生者は女神なくても国のシェアが無くても死なないこと教えた。そのことを聞いたベールは

「つまりわたくしとは違うということですよわね、つまりチカが女神になった場合も一緒ってことですよわね」

「はい、そうです」

ツクヨミにチカが女神になっても龍姫たちと同様なことになるか聞き、ツクヨミは「はい」と答えた後、天界に帰るのだった。

しばらく待っている

「お姉さま!!お洋服の準備ができましたわ!!」

どうやらベールの私服の準備ができたようでベールはいつも着ていたプリンセスドレスのサイズが大きいのを選んだ。もちろん、胸は強調しているのであった。

「大変です!!ベール様!!輝龍・飛龍様!!」

「どうしたの?」

教会の職員の一人が慌てて入ってきたのである。

「アブネスと名乗る人物がアイリス草原でイエローハートと言う女神と一緒に宣戦布告をしてきました!!」

なんと!!アブネスと名乗る人物がイエローハートと一緒にベールたちに宣戦布告をしてきたのである。

「輝龍・飛龍!!準備が出来ましてわすわね?」

「もちろん!!いつでも戦えるよ!」

「それじゃ、ボクたちも行くよ!!ネプテューヌ・ネプギア!!龍音!!」

と各々に準備をして一路、「アイリス草原」に飛んだのであった。

「ぴり、ここのメガミたおす」

「その通りよ!!ピーシエ!!あのにつくきネプテューヌごっここの女神を倒しなさい!!」

と見た目はベールに負けず劣らないのだが無理やり女神化させらてたように中身が子供の女神と見た目が幼女の様な女がアイリス草原で佇んでいた。

イエローハート登場

龍姫たちはベールたちとともにアノネスのいるアイリス草原に来ていた。プルルトは教会でお留守番である。

スキット：アブネス

龍姫「ネプテューヌ、アブネスって誰？」

ネプ「アブネスは子供が女神になることに反対してる奴だよ!!」

龍音「へえくそうなんだ!!」

ネプ「覚醒する前にお姉ちゃんが初めてルウイーに行つた時もあったんだよ!!おまけにわたしも幼女扱いしてきんだから!!」

ギア「今なら、ギャフンって言えるね!!」

モンスターを龍姫たちはベールたちともに

「魔神剣!!」

「瞬迅剣!!」

「絶影!!」

倒しながら奥へと進んで行つた。ついに

「よく逃げずにきたわね!!幼じょ・・・って!!どこにも幼女女神がいないじゃないのよ!!」

アブネスはネプテューヌが覚醒していたのに気づておらず、我を失っていた。

「わたしがあの時の女神ネプテューヌだ!!」

「嘘を吐くな!!(;・・・)もうやつちやいなさい」

「わかつたくびく行ってくる」

その上、ネプテューヌが名のついているのにも関わらずイエローハートと喚けただった。

「すごい!!シエアエナジーを感じるよ!!みんな変身だよ括目せよ!!」

と龍音以外全員が女神化したのであった。で龍姫は女神になった時に修得した「念話」で龍音に

「龍音、魔術でアブネスの後ろにある装置を破壊して!!わたしたちが囷になつてる間に」

「OK!!わかつたよ、お姉ちゃん!!」

どうやらイエローハートはアブネスの後ろに置いてある装置で一時的にシエアエナジーを補給していることを龍姫が気づいたので魔術で破壊するように指示を出し、自分は囷を引き受けたのだ。

「ぱくんち!!」

「甘いわ!!烈波掌!!」

イエローハートが攻撃を仕掛けてきたが、今のネプテユーンが当たるはずもなくかわし、掌底で吹っ飛ばしたのだ。

「キィ〜何やってるのよ!!さっさとやちやいなさいよ!」

アブネスは格の違いを思い知らせたことにより、

「裁きの十字、敵を撃て!!ブラッディクロス!!」

「そそシエアエナジー無限補給装置が(。D。)ノOTL」

龍音が中級魔術「ブラッディクロス」を放った、もちろん装置に直撃したのだ。

アブネスは装置を破壊されたことに驚きを隠せないでいたのであった。

「ぴい〜ナニシテタンダツケ」とイエローハートの女神化が解け女の子になった。

「折角の休暇を一日つぶしてくれたこと」

「後悔させてあげますわ!!」

とネプテユーンとベールはキレていた。

「本気!!見せて差し上げますわ!!」とベールはオーバーリミッツを発動させた。

チカの覚醒

今、ベールがオーバーリミッツを発動させた状態である。このままアブネスに向かって、

「天月旋!!」

サマーソルトで打ち上げ、

「月牙・鷹!!」

空中から衝撃波を纏いながら踏みつけ

「月華天翔刃!!」

槍で突きながらサマーソルトで打ち上げ

「切り刻む!!風の如くですわ!!風塵!!封縛殺!!」

風の檻に閉じ込めるバーストアーツを決め、最後は

「あなたにはここで果てていただきますわ!!」

「はああつあつああ継牙・双針乱舞!!」

ホーリイランス要領で無数の光の槍を撃ち込み最後は槍で切り刻む秘奥義で決めたのだ。

「わたくしに会ったのが運の尽きですわ!!」

とベールは決め台詞を言い、

「お縄につくことを進めるよ!!」

と龍姫たちはアブネスをひっ捕らえて役人に差し出したのであった。

「とりあえず、この子、教会に連れって上げるとしよう!!」

イエローハートになっていた子を負ぶって教会に帰るのであった。そんなこんなで一行は教会に帰って来たのだが

「チカ!!しっかりしてくださいですわ!!何があったのですか!!」

「お姉・・・さまですの?良かった最後に会えて」

なんと!!チカは吐血していたのであった。ベールはチカに何が起きたか聞いた。

「実はわたくしはもう長くないのです!!これは冗談ではありませんわ」

「見ればわかるよ!!そうだ!!チカ姐!!」

「女神メモリーは持つてるの!!」

どうやらチカは自分の命が長くないと言い輝龍と飛龍は女神メモリーを所持してるか聞いた。

「それなら・・・ゴフツ!!ポケットに入れ・・・ゴフツ」

「もう!!しゃべらないで!!ポケットだね・・・あつた!!」

自分の服のポケットに入れていると言いながら吐血した。輝龍はポケットに手を入れ女神メモリーを取り出して

「お願い!!」

「チカ姐!!を」

「助けて!!」

チカの手に握らせたのだすると、女神メモリーが光り出し、そのまま光に包まれたのだ。しばらくして光が収まると

「チカ姐!!」

「うううこれがわたくしの女神の姿ですよ!?!」

チカの女神姿は

髪がベール同様に緑色になっており、お揃いのポニーテールに結っている。

身長は167cmと前のベールと同じになっていた。胸も大きくなっている。

で白を基調にした、露出がないバリアジャケットを身に纏っている。

「お姉さまの前のお姿と変わりませんわね!!」

チカは自分が昔のベールの姿と似ているのであることに驚きを隠せないでいたのであった。

「あれがチカの女神の姿なの!!」

「お姉さま・輝龍・飛龍ご心配かけてすいませんでした。」

「いやいいのですよ!!チカが無事なら」

ベールはチカに無事であることに喜び、龍姫たちは新たな女神の誕生を心からよろこんだのだった。

黒との特訓

チカが女神になったことにより、今、ここに女神兼教祖が誕生したのだった。

スキット：チカの今後

チカ「念願のベールお姉さまの妹になったのですね!!」

ネプ「けどさ?どうすんの?チカ、箱崎家に連絡しなくて大丈夫なの?」

ベール「問題ありませんわ!!」

チカ「お姉さまが問題ないと仰っているのですから、大丈夫ですわ!!」

で龍姫たちはリンボックスを後にしたのであった。次の日、いつものように術技の特訓をしているのだが、どういうわけか、星龍・ノワール・ユニ・天龍も一緒に、

「ノワールと久しぶりに、やってみたかったんだよね!!」

「ほんなら、女神化してやってみるも良いのよ?」

で結局、ネプテューヌとノワールは戦闘狂のスイツチが入ってしまった、女神化をしてしまったのである。それを見て龍姫たちは

「もう!!お姉ちゃんたらなんでこうなるの!!」

「まあ、これでいいんじゃない!!」

呆れていたのであった。そんなこんなで教会に帰るのであった。

「これおいしい!!誰が作ったの?龍姫?それとも龍音?」

「これ実はネプ姉が作ったんだよ!!ノワールさん!!」

どうやら今回もネプテューヌが朝食を作ったようで、それを聞いたノワールは

「ね、ねぷー!!(。D。)ノネプテューヌが!!(。D。)ノ」

「へえくネプテューヌさんってお料理うまいんですね!!」

「それほどでも(*、▽、*)ないよ!!ユニちゃん、追い詰められたら何だって出来るよ!!」

あまりにも驚愕の事実だったのでそのまま、鳩が豆鉄砲を食ったよ

うに目が丸くなり、石化してまったのであった。ユニはネプテューヌの料理の腕を褒めていたのであった。

そんなこんなで朝食を終え、星龍たちことラスティション姉妹は帰って行ったのだ。

「今日はラスティションにでも気晴らしに行かない、お姉ちゃん!!」

「そうだよね!! たまには行ってあげるのもいいかも!!」

どうやら今回はラスティションに遊びに行くようである。

龍姫たちは

「じゃあ!! 行ってくるねーすん!!」

「変身!! セットアップ!!」

「いってらっしゃい」

「ねぶてぬ」

プラネタワローの屋外展望台から女神化した龍姫・ネプテューヌ・ネプギアはラスティションに向かって飛んで行ったのであった。もちろん龍音は龍姫にお姫様抱っこである。

スキット：ピーシエ

龍姫「結局、ピーシエ、わたしたちが預かることになっちゃったね」

ギア「仕方ないんじゃない、だってお姉ちゃんに懐いてたから」

ネプ「タツクルは辞めて欲しいわ」

そんなこんなでラスティションが見えてきたのであった。

アノネデスの影

ラストイションが見えてきたので、そのまま教会のバルコニーに行くことにしたのだった。

「あのくこれって不法侵入だよね！」

「大丈夫だよ!!お姉ちゃん!!ノワールとは幼馴染みだから」

龍姫はネプテューヌに入る場所を注意したのだが、

「あなた達くここは玄関じゃないわよく(´・`・´)く」

とノワールは笑顔でキレていた。仕方なく龍姫たちは玄関から入るのであったのは言うまでもない。

「もう!!ノワールったらわたしたちの仲じゃない」

「あなたたつて子は!!」

結局、二人はいつも通りだったのである。すると龍姫はある気配を感じて、

「龍音、誰かに見られてる様な気がするんだけど?」

「やっぱり、お姉ちゃんも気づいてたの、」

どうやら誰かに見られているようで、それを悟られないように念話で会話していたのだった。

「やっぱりノワールちゃんは大きくなってもかわいいわね!!もう小っちゃいノワールちゃんをもう見れないのは残念だけど」

どこかの部屋でオカマ口調でノワールを盗撮してるらしく、ノワール以外眼中にない人物がいるのであった。

一方その頃

執務室に案内された龍姫はとある棚に目をやっていた。それに気づいた龍姫は

「なるほどくこれで見てたんだ!!」

「どうしたの?龍姫ちゃん?」

あるものを発見したのである。星龍は龍姫に恐る恐る聞いて見た。

「はいこれ!!」

「つてこれ隠しカメラじゃないのよ!!」

「つてことは盗撮されていたんですか!!」

なんと隠しカメラを発見したのである。そして

「龍姫!! 犯人の居場所わかる?」

「ちよつと待てつて」

龍姫は発見した隠しカメラに手を当てたのだ。

「ねえ、龍姫は何をしてるの?」

「多分、カメラから持ち主の居場所を探してるんだと思います」

「そんなこと、出来るの!!」

ノワールは龍音に龍姫が何をしてるか聞いたのである。どうやらカメラから犯人の居場所を逆探知しようとしていると答えた。

すると、

「わかったよ!! 犯人の居場所!!」

「すごい!! お姉ちゃん!!」

どうやら盗撮犯の居場所を特定できたので龍姫達はその場所に向かうことにしたのだった。

「ここだよ!! みんな!!」

「とりあえず、反対側に周り込んどくわ!! 行くわよ、ユニ」

「わかった、お姉ちゃん!!」

と龍姫達は盗撮犯のアジトに到着したので、二手に分かれて挟み撃ちにする作戦をしたのであった。

「じゃあ!! 行くよ!! ネプテューヌ・ネプギア・龍音!!」

「二」わかったわ(よ)」

各々に異口同音の返事をした後龍姫達は突入したのであった。

「うふふん!! (´・`・´)」

と包囲されているのも気づいてなかったようである。

アノネデス、御用の段

龍姫の特殊能力により盗撮犯のアジトに潜入しているのである。

スキット：逆探知

ネプ「お姉ちゃん!!すごいね」

龍姫「どうしたの?いきなり」

ギア「カメラに触れただけで犯人の居場所がわかちやっただも
ん」

龍姫「あ!あれ実はラストイションに到着した時に誰かに見られて
る気配があっただよ。で教会の執務室に案の定、隠しカメラが出て
きたのと教会の付近の防犯カメラがね」

龍音「教会の執務室及びノワールさんの自室を向いていたんだよ」
ネプ「それって防犯カメラがハッキングされて乗っ取られたってこ
と」

ギア「じゃあ、あの時の行動はカメラの向きが変わるところを」

龍音「そういうことだよ!!相手を欺くには味方からって言うでしょ
う」

龍姫「それにハッキングするならどこでも出来るけど教会のセキユ
リティーを乗っ取るにはそれなりの場所がいるからね」

ネプ「そうだよね!!ネットカフェじゃ無理だね!!この場所がわかっ
たんだよね?」

龍姫「そうだよ!!空を飛んでいた時、この建物だけ変な電波が出て
たから」

ギア「それって!!わたしが作った「盗聴電波測定器」だね!!龍姫お
姉ちゃんが持ってくれたんだ」

龍姫「これのおかげでこの場所に辿り着いたから」

そんなこんなで犯人の部屋に到着した龍姫は鍵穴から中を覗き込
んだ。すると

「やっぱり、体が大きくなってもこの趣味は止められないわね!!(^ _ ^)」

「コスプレをやってくれないきゃノワールちゃんじゃないものね!!」

どうやら犯人はこれまで盗撮していた映像を観賞していたのである。それを見た龍姫達は

「あれって、ノワールのコスプレ集だね☒」

と半ば呆れていたのであった。それでも龍姫は刀で扉を斬り突入したのであった。

「ええ!!何よ!!入って来るならノックするのが常識よ!! ってあなた達誰よ!?!」

「盗撮犯に名乗る気なんてないよ」

盗撮犯は突然の出来事に驚きを隠せないでいたのであった。それに対し龍姫は落着いていた。

「この!!アノネデス!!ノワールちゃんのためなら、命の限り逃げさしてもらおうわ」

と盗撮犯並びにノワールのストーカーことアノネデスは逃走を計ったが、

「このわたしを盗撮してただで逃げようなんて考えないことね!!<(´・`・´)>」

「ひえ〜!!お助けよ!!」

と反対側に回り込んでいたノワールに捕まったのである。このまま牢屋むたぼしにぶち込まれたの言うまでもないのであった。

「ふう〜疲れたね」

とネプテユースはノワールたちが仕事が終わるまでリビングで待つことにしたのである。

「お待たせ!!みんな!!」

「もう!!お昼だよ!!ノワール!!」

「ホントだ!!急いで作るね!!」

と龍姫・星龍は台所に向かったのだが、

「龍姫とお姉ちゃんにお願いがあるの」

「どうしたの?ノワール?」

「わたしにも料理を教えて欲しいの!!」

なんと!!ノワールは龍姫・星龍に土下座で料理を教えて欲しいと言ってきたのだ。

「別に土下座までしなくても教えてあげるよ」

「もう、ノワールったらそんなにネプテューヌに負けたくないのはわかるけど今ぐらい仲よくしたら」

「ありがとう!!お姉ちゃん!!龍姫!!」

そんなこんなで楽しい料理を開始したのであった。

ノワール!!の初めての料理の段

ノワールが龍姫・星龍と一緒に昼食を作っている間、食卓のテーブルの椅子に座って待っているネプテューヌ達であった。

スキット：ノワールの料理の腕前

ネプ「ユニちゃん、ノワールって料理ってできたの?」

ユニ「妹のアタシでもお姉ちゃんが料理してるところ見たことないんですよ」

ネプ「どうしよう!!有害物質的なものが出てきたら!!」

ギア「大丈夫だよ!!お姉ちゃん!!龍姫お姉ちゃんと星龍さんがついてるんだから」

台所では、

「こんな感じでいいかしら、お姉ちゃん!!」

「上手にできてるよノワール!!」

「どうやら今回のメニューは

「いきなり手の込んだ「マーボーカレー」は無理だから、「オムライス」なら簡単に出来るから」

「ありがとう!!お姉ちゃん!!龍姫!!」

オムライスにしたらしいのである。どうやら完成したようで

「みんな!!できたわよ!!」

「よし、みんな!!腹括ろう!!」

「食べて見ることにしたのである。すると、

「おいしいノワールのくせにおいしい!!」

「くせは余計よでもよかった!!おいしいって言ってくれて」

とノワールは一安心したのであった。昼食を食べ終えた一行は一息入れることにしたのであった。

「ノワール!!大変だよ!!」

「ケイ?どうしたの?」

ケイが慌てて入って来たのだ。その理由は

「実はアヴニールが犯罪組織とつながっていたんだ!!」

「それってつまり」

「そう、この前のキラーマシンとハードブレイカーもアヴニールが開発したものだ。キラーマシンとヘビータンクがアヴニールが放棄した工場で暴走していると報告があった。行ってくれるか星龍・ノワール・ユニ・天龍？」

とキラーマシンとヘビータンクがアヴニールが放棄した工場で大暴走していると報告が入り、ケイは星龍たちに行つてくれるか尋ねた。もちろん、

「当たり前じゃない!!この国はわたしが最高責任者なんだから妹になつてもこれだけは譲れないわ!!行くわよ!!お姉ちゃん・ユニ・天龍!!」

「うん、わかった」

と星龍たちは現場に急行したのであった。

「そうだ!!ケイ、アヴニールが敵視してる工場ってわかる？」

龍姫はケイにアヴニールが敵視している工場があるか聞いたのだ。すると

「ほう、さすが、四女神が認めるだけはあるね!!取引しても無駄だしね!!その工場は街で食堂経営をしながら業務を行っているんだ!!で場所だが・・・」

「それだけ聞いたら検討はもう付いてるよ!!」

「そうだね!!食堂と工場と言えばあそこしかないよね!!行こう!!シアンの工場に」

「おう!!」

と龍姫たちは食堂経営をしながら工場をやっているシアンに会いに行くことにしたのであった。

ガナツシユの策略の段

今、星龍・ノワール・ユニ・天龍はキラーマシンとヘビータンクが暴走したという廃工場に来ていたのである。

「ここが報告にあった廃工場だね!!」

「じゃあ!!気合入れて行くわよ!!」

と中に入って行ったのだが、「ガチャ」という音がきこえてきたのだ。その方向へ向くと、

「あなたたちにはこここの魔物《モンスター》の餌食になってもらいますよ黒龍神と黒衣の断罪者の女神様!!」

「しまった!!これ罠だったんだ!!」

どうやら星龍・ノワール・ユニ・天龍は廃工場の閉じ込められてしまったのであった。

「あなたたちが我が社のキラーマシンとハードブレイカーを破壊したことはわかっています。」

「まさか!!教会に偽の情報を流したのって!!」

「ええ、そうです、我が社にとって邪魔になるパッセとかという町工場より女神様が直々に我が社に探りを入れていたことは調べがついてるんですよブラックハートとブラックドラゴンハート様、おつと申し遅れました、私はアブニール社のガナツシユと申します、では御健闘をお祈りします」

とガナツシユは星龍・ノワール・ユニ・天龍を廃工場に閉じ込めたのちどっかに行行ってしまったのである。

「こうなったら!!この扉真つ二つにしてやる!!」

と天龍は刀を抜刀し扉に向かって、

「爆炎剣!!」

刀身に炎を纏わせ爆風を熾す特技を放つが、

「ええ!!なんで壊れないのこのドア?」

「まさか!!このドアボクたちの技が効かないの」

「仕方ないわ!!ほかに出口があるか探すわよ!!」

なんとびくともしなかったのだ仕方がなくほかの出口を探す一行

であった。

一方その頃

「シアン!!生きてる?」

「勝手に殺すな!!ってお前さん誰だ?」

「ガクン!!ひどい!!折角会いに来て上げたのに!!」

　　どうやら龍姫たちは無事にシアンと合流したもののシアンが成長したネプテューヌに気づいていなかったののである。

「まさか!!ネプテューヌなのか?でそっちの二人は誰なんだい、一応、ネプギアのこと知っているからな」

「そうだよ、マーテルの能力に目覚めたネプテューヌだよ!!この二人はわたしのお姉ちゃんと末っ子だよ!!」

「おまえ、とうとう女神様から降ろされたか」

　　シアンに龍姫・龍音のこと言ったらクビになったのか聞かれてしまった。

「そうだね、ネプテューヌの姉兼秘書、鳴流神龍姫です」

「同じく、プラネテューヌの女神候補生で末っ子の鳴流神龍音です!!」

「つまりネプテューヌが最高責任者のままなのか?」

「そういうこと、わかった?」

　　と龍姫・龍音はシアンに自己紹介をしたのであった。

食堂にて

龍姫・ネプテユーン・ネプギア・龍音はラステイションのパッセと言う、町工場の社長シアンの家族が営んでいる食堂に来ていた。

「前に星龍が言ってた食堂ってここだったのか、けど工場の社長だよね？」

「そうだよ、一応、工場の社長だが、工場の稼ぎじゃ苦しいから母さんがここを片手間でやってくれてるんだ!!」

「ねえ!!シアン、アヴニールはどうしてるの?」

とネプテユーンがシアンにアヴニールの状況を聞いたのだ。すると、

「どうしたも!!こうしたも!!アヴニールの奴ら、結局、家電から兵器に至るまで何でも作って、そのラインナップの多さと低価格でほとんどの市場を独占してると言っても過言じゃないんだ!!おまけに犯罪組織に横流しをしていると噂になってるんだ!!」

とシアンは龍姫達にアヴニールの現状を教えてくれたのだ。

「いくらなんでも、家電から兵器まで作るってその会社、胡散臭さがすごいんだけど」

「おかげでこっちの商品は種類も価格もアヴニールに負けて物は売れないし、下請けをさせてもらえないわけでもないし、今月に入ってから知り合いの工場がも何件潰れたことか・・・」

「完全に真っ黒だよ!!アヴニールって!!そうだ、シアンに話があるんだよ!!」

「話って、なんだ?龍姫!!」

とシアンはアヴニールが市場を独占してる上にほかの工場も潰されたらしいのだ。そこで龍姫はシアンにケイが手に入れてくれた情報を教えた。すると、

「って、ことは完全に真っ黒だったわけってことかい」

「うん、これはケイが教えてくれたからあくまで、推測だから、シアン!!工場に行きたいんだけど、いいかな?」

「ああ、もちろん!!構わないさ!着いてきな!!」

と龍姫達はシアンに案内で工場に向かうことにしたのであった。

「とりあえず、真っ直ぐに歩いて来てるけど?」

「そうね、あれって!もしかして!!」

「もしかしてじゃなくてもエネミーディスクだよ!!」

「なんで!!あるの!?!考えてる場合じゃなかった!!来るよ!!」

と星龍達は廃工場に閉じ込められ出口を探していたらなんとエネミーディスクを発見した。もちろんそこからモンスターが出てきたので

そのモンスターの特徴は丸い球体型とインベーダーゲームのインベーダーそのものであったが、

「砕氷刃!!」

「爆砕陣!!」

「絶翔斬!!」

「屠龍閃!!」

星龍は刀身に冷気を纏わせ×の字に斬り捨てる特技で、ノワールは自身の技の「ボルケーノダイブ」を星龍の能力により覚醒させているこの前方宙返りしながら刀を地面に叩き付け爆風を熾す特技で、ユニは一応、銃を左に持ち、利き手である右手に片刃の大剣を持っている、その大剣で飛び上りながら斬り上げる特技で、天龍は刀を振り上げ火柱で打ち上げ、

敵を葬ったのであった。

パッセの危機

星龍たちは廃工場に閉じ込められエネミーディスクを壊して進んでいたのであった。

スキット：技名

ユニ「あれ？お姉ちゃん、その技って「ボルケーノダイブ」って言うてなかったけ？」

ノワ「そのこと、実はお姉ちゃん的能力と共鳴していくうちに、「爆砕陣」の方がしつくり来るようになっちゃったのよ」

星龍「そうなんだ〜ごめんねノワール、それって今まで使っていた技がもう使えないってことだよね」

ノワ「何言ってるのよ!!お姉ちゃん!!大丈夫よ技の名前が変わっただけよ!!気にしないで」

星龍「ありがとう、ノワール、これからもよろしくねもう一人のかわいい妹なんだから〜」

ノワ「恥ずかしいから!!」

と工場内を歩いていると、

「あれって・・・もしかして」

「もしかしてじゃない!!エネミーディスクよ!!」

「とりあえず、みんな!!変身して!!セットアップ!!アクセス!!」

「って!!ボクまだ女神じゃないよ!!とりあえず、抜刀しないと」

なんと、もう一枚エネミーディスクを発見したのである。そこから報告にあった、「ヘビータンク」が現れたのである。

「キィー」

砲身を星龍達に向かって砲弾を飛ばしていたのだが、今の星龍達には当たらず、

「いい加減にきなさい!!」

ユニがオーバーリミッツを発動させた。

「爆砕斬!!」

大剣を地面に叩き付け石つぶてを飛ばし

「ヴァリアブルトリガー!!」

星龍に頼んで作ってもらった片手で扱えるライフルで狙い撃ち、

「崩龍無影剣!!」

刀身に冷気を纏わせ敵に向かって特攻し折り返したのちまた特攻した

「疾風のように・・・天狼滅牙・風迅!!」

見た目に反して軽い片刃大剣で滅多切りした後、銃を粒子化し衝撃波を放つバーストアーツを叩き込んだ

「毎度!!ありがとうございます!!ごぎいます、地獄への片道切符、お安くしとくわよ?遠慮しなくていいのに!!エクスペンダブルプライド!!」

空中から銃で連射した後そのまま大剣に体重を乗つけて爆発を熾す秘奥義で止めを刺した。

「ぎつとこんなもんよ!!」

ユニは勝利の発言をしていたのだった。

「あれって出口じゃない!!」

「ホントだ!!急がないとシアン達が危ないよ!!」

どうやら出口が見つかったようでも星龍達は急いで町に戻るのであって。

一方その頃

「ここがわたしの工場だ!!」

と龍姫達はシアンに案内され工場前までやって来てのだ、龍姫達が工場の敷地に入ろうとした時だった。

「キィー」

「なんだよ!!こいつは、まさか」

「どうして!!あなた方が!!ここに・・・まあいいちよつと予定が狂いましたが、いいでしょう!!キラーマシン!!破壊しろ!!」

「そんなこと!!させないよ!!みんな!!行くよ、セットアップ!!括目せよ!!」

と龍姫達は一斉に女神化をしてアヴニールが放った刺客のキラーマシンに戦いを挑んだ。

客員剣士、聖王見参の段

龍姫達はシアンが社長をしているラスティションの小さい町工場「パッセ」を守るためキラーマシンに戦いを挑むのであった。

「おまえ!!女神だったのかよ!!嘘じゃないよな?」

「ごめんシアン、黙っていたことは謝るよでもね、今はこいつを片付けるのが先だよ!!」

と龍姫は鳩が豆鉄砲を食ったように驚きを隠せないでいたシアンに謝罪をした。

「キィイー!!」

「キラーマシン!!やってしまえ!!」

と眼鏡をかけスーツを着た男がキラーマシンに指示を出した。その時、

「させるか!!魔神剣!!」

「そんな!!馬鹿な!!確かに・・・って!!あなた方は誰ですか!!」

どうやら眼鏡を掛けた男はどうやら星龍達の女神の姿を見て思わず突っ込んだ。それもそのはず、眼鏡の男は覚醒前のノワール・ユニの情報しか持っていないかったのだ。

「だれって、あなたがあの廃棄した工場に閉じ込めた女神ブラックハートよ!!またの名を「黒衣の断罪者」って言えばわかるかしら?ガナツシュ?」

「そんなことはどうでもいい!!やってしまえ!!キラーマシン!!」

と眼鏡の男ことガナツシュはキラーマシンに指示を出し攻撃をさせた

「虎牙破斬!!」

とあっさりキラーマシンを一刀両断したノワールであったが、

「こんなこともあろうとキラーマシンをあと2機用意してたのですよ。」

「なんですって!!」

なんと!!ガナツシュは破壊されても良いようにキラーマシンを二機も用意していたのであった。

「天龍!! 今度はボクたちの」

「そうだよね!! 今までお姉ちゃん達に助けてもらってたんだもんね!!」

と龍音と天龍はポーチから女神メモリーを取り出したのだ。

「行くよ!! 龍音ちゃん!!」

「わかったよ、天龍!!」

「セットアップ!!」

二人とも光に包まれたのだ。それを見たガナツシユは

「まさか!! やってしまえ!! キラーマシン!!」

「させるか!! 蒼牙刃!!」

「次元斬!!」

キラーマシンに攻撃をさせたが龍姫は大きく振りかぶりながら刀を叩きつけ、星龍は闘気を刀身に纏わせ虎牙破斬の要領で範囲を広げ斬りつけた。

「これが!!」

「わたしなの!!」

二人はと言うと

龍音は某客員剣士そっくりの服になっていたがやっぱり姉同様、胸が大きくなり、髪はツインテールのままだが髪色が紫になっており身長が170cmになっていた。

天龍は髪が銀髪になっており、ハーフツインテールのままだが服が星龍同様に某魔法少女のバリアジャケットになっており、やはり胸も大きくなっている、身長は同じく170cmに伸びていた。

で二人ともオッドアイになっていた。

ガナツシユ逃亡するの段

龍音と天龍は女神メモリーを使い女神になったのだ。

「天龍!!いくよ!!」

「もちろん!!」

龍音・天龍はガナツシユが放ったキラーマシンに向かって攻撃を仕掛けた。

「工場を壊すのが先です!!キラーマシン!!」

「いい気になるな!!」

とガナツシユは二人を無視してキラーマシンに工場を襲わせたが、龍音がオーバーリミッツを発動させたのだ!!

「月閃光!!」

軌跡が月を描く広範囲斬撃を繰り出し、

「月閃虚崩!!」

そのまま月を描きながら斬り下ろし、

「爪竜連牙斬!!」

大小の二刀の刀で舞うように切り刻む奥義を、

「舞い降りろ!! 光翔戦滅陣!!」

光の魔法で攻撃し最後に斬撃を飛ばすバーストアーツを放ち、
「交わらざりし、今もたらされん刹那の奇跡!!時を経て・・・ここに融合せし未来への胎動!!義聖剣!!わたしは未来を切り拓く!!・・・斬る!!真神煉獄刹!!」

光を刀身に纏わせ、舞うように滅多切りした後、小太刀で斬り上げ、刀で貫く秘奥義で止めを刺した。

「ざっと!!こんなもんね!!」

と龍音は決め台詞を言っていた。

「一気に行くよ!!」

天龍も龍音に続きオーバーリミッツを発動させ、もう一体のキラーマシンに攻撃を仕掛けた。

「虎牙破斬!!」

剣士共通の斬り上げて、斬り下ろし、

「魔王炎撃波!!」

刀身に炎を纏わせ薙ぎ払い、

「翔凰烈火!!」

回転斬りで打ち上げ、掌底で鳳凰の炎を斜め上に放ち、

「焼き尽くす!!光翔戦滅陣・獅炎!!」

自分の周囲を攻撃した後、獅子の闘気を飛ばすバーストアーツを繰り出し、

「真の姿を現せ!!劫炎の剣!!その身に焼き付けろ!!・・・奥義!!業魔!!灰燼剣!!」

熱破旋風陣した後、切り抜েকে二回行い、最後に飛び上り、刀を叩き付け火柱を飛ばす秘奥義で止めを刺した。

「これが灼熱の炎だ!!」

天龍も決め台詞を言った。

「あれ?ガナツシユはどこいったの?」

「どうやら、戦っている間に逃げたようね、逃げ足だけは速いんだから!!」

どうやら、ガナツシユは龍姫達が戦っている間に逃亡たらしい。

「シアン!!大丈夫?」

「おかげさまで工場も無事だしな、しかしびっくりしたな!!おまえら本当に女神だったとは」

「ごめんね、シアン隠してて」

「別に気にしなくてないからな!!そうだ!!」

龍姫は自分が女神であることを隠してたことを謝罪した、シアンは気にしなくてもいいといった。

「そうだ!!お礼がしたんだが?」

「別にいいよ!!お礼なんて、女神として当然のことをやっただけだから」

シアンは龍姫達にお礼をしたいと申し出たが当然のことやっただけでと言いき、

「また、なんかあったらお願いするからな!!」

とシアンは龍姫達にそう言い食堂を後にし教会に帰るのであつ

た。

武装について

キラーマシンからシアンの工場を守り抜いた龍姫達はラストイシオン教会に泊まることにしたのだ。

今は龍姫と星龍の指導の下、ノワールが今晚の夕食を作っているのであった。ネプギアとユニも料理を習っていた。

「こんな、感じでいいの?」

「すごい!!お姉ちゃん!!もう「マーボーカレー」作れるようになったの!!」

「ノワールさんってお姉ちゃんと一緒に飲み込みが早いですね!!」

「それほどでもないわよ!!」

学校の調理実習みたいに楽しく作っていたのであった。

「オー!!(〇〇) /今日はマーボーカレーだ!!」

「食べよう!!いただきます!!」

とネプテューヌはノワールが作ったと知らず食べていたのである。

そんなこんなで夕食を食べ終えた龍姫達は新たに女神になった龍音と天龍の女神時の武装ついて話していた。

スキット：客員剣士

ネプ「龍音!!今日から女神化が出来るだよね?」

龍音「うん!!今まではお姉ちゃん達に助けられるばかりだった
ら」

龍姫「けど、無理しちゃだめだからね!!」

龍音「わかったよ!!お姉ちゃん!!」

ギア「しかし、龍音の武装ってまさか」

龍姫「あれって」

ネプ「ゲームのキャラの服だよね?」

龍音「うん!!あのバリアジャケットのモデルは実はリオン・Oグナスをモデルにしてるんだ!!」

龍姫「そういや、お母さんが龍音の名前付ける時このキャラからそのまま取ったって言ってたからね!!」

ネプ「そうだったの!!」

龍音「うん!!」

スキット：聖王

ノワ「天龍のバリアジャケットは何をモデルしたの?」

天龍「あ、あれは高町○ヴィオって言うキャラが女神メモリーを使った時に頭に浮かんじやたんだ!!そのキャラの着ていたバリアジャケットだよ!!」

星龍「つてことはバリアジャケットは親子になるね!!」

ユニ「そうなの?」

天龍「うん!!お姉ちゃんは高町○のはのバリアジャケットだったから」

星龍「ちゃんと黒になってたから大丈夫だよ!!本当は白だけど」

ノワ「ありがとう!!お姉ちゃん!!天龍!!コスプレの参考にするわ!!」

ユニ「結局、コスプレの衣装作るんだ」

でお風呂では、

「ノワールも大きくなつたんだ!!（へーへ）」

「大きくならなかつたら、おかしいでしょう!!」

「ほんじゃ!!いつものいつときますか!!」

「つて結局、揉んでどうすんの!!こうなつたらわたしも!!」

といつものネプテューヌとノワールであった。

翌日、休暇三日目

龍姫達は起きて早々、

「閃空衝裂破!!」

「まだまだ!!紅蓮翔舞!!」

と術技の特訓をしていた、もちろん

「哭空紅蓮撃!!」

「甘いよ!!殺劇舞荒剣!!」

「お姉ちゃん!!このぐらいにしてプラネテューヌに帰らないと行けないんだから」

と妹組は言いつたのであった。

紫と白の朝食

「私たちはアヴニールの後始末があるから」

「わかったよ、ノワール！また遊びに来るから」

と龍姫達はプラネテューヌに帰り朝食にしようとしたら、

「あれ？武龍だよ」

「龍姫ちゃん！！こんな時間やけど、約束通り、遊びにきたで」

「そうだ！！武龍、ご飯食べた？ボクたち今から朝食にするから」

「そういや、まだやったな！！ご一緒にさせてもらうで」

と龍姫達は武龍達と一緒に朝食にするのであった。

「今日はネプギアと一緒に作ったんだよ！！」

「うまそうやか！！」

「いただきます！！」

と武龍達と楽しい朝食を終えた一同は教会のリビングに来ていたのである。

「しかしあれをネプテューヌとネプギアが作っているなんてすごいわ」

「美味しかったねラムちゃん」

「うん！！あのスクランブルエッグとフレンチトーストは美味しかった」

とブラン・ロム・ラムは各々にさつき食べた朝食の感想を述べていたのであった。

「武龍も女神になったってことは」

「と言うと、まさか！！龍音も女神になったんかい！！」

「はい、ボクも昨日女神になったんですよ！！もちろん、天龍も女神になりました」

「ってことは転生者全員女神になったんやな、これでみんな不老長寿や！！」

「もちろん！！武龍はブランのお姉ちゃんやってるんだよね！！」

「何をゆうてんねん！！当たり前や！！ブラン達と義姉妹の誓いも交わしたしな！」

とガールズトークに花を咲かせていたのであった。

「武龍、今日は休みなの?」

「今日は休みやで!!」

龍姫は武龍に今日は休みなのか聞いたら休みと答えた。

スキット：龍音の秘奥義3

ネプ「あの秘奥義すごかったよ!!」

龍姫「あれって、確かジューダスの最終奥義だよね、仮面は被ってないけど」

龍音「そうだよ!!」

ギア「かつこよかったよ龍音!!」「漸毅狼影陣」みたいな念仏斬りしてたよね」

ネプ「絶対、アイちゃんもやりそうな秘奥義だよね!!」

アイ「龍音の馬鹿野郎!!」

しばらくリンピングでくつろいでいたら、

「こんにちは!!みなさん、お元気ですか?」

「元気だよ(や)、ツクヨミ様、何か御用ですか?」

「はい、武龍さんに早速ですが、やってもらいたいことがあるんですがよろしいでしょうか?」

「やってもらいたいことってなんですか?」

「それは、ブランさんたちを覚醒させて欲しいのです!!」

とツクヨミはブラン達を覚醒させれるまでに至ったことを教えたのであった。

「うふふふ(´・`・´・´)♪つにこの時が来たのね!! やつとユニと同様に巨乳になる日が☒ぎやはは☒」

「お姉ちゃんが」

「壊れちゃった!!」(。ω。)(ノ。(。D。(ノ」

さっきの話を聞いていたブランは壊れてしまい、それを見たロム・ラムは石化してしまったのであった。

白の女神の覚醒

ツクヨミにブラン達を覚醒させれるまで経験値が貯まったと武龍に教え、

「では、これで失礼します」

と言いついに天界に帰って行った。

「お姉ちゃん!! 早速で悪いけど、始めてほしいの」

「待つんや!! ブラン、一旦、ミナに伝えなあからルウイーに帰るで!!」

「じゃあ!!」一緒に行くようよ!!」

覚醒を迫ったブランを止め一旦、ルウイーに戻り教祖のミナに報告するため武龍達は女神化をしてルウイーに飛んで行った。後を追うように龍姫達も女神化をして飛んで行ったのである。

「おかえりなさい」

「ただいま〜ミナちゃん!!」

「実はさつき、ツクヨミ様が来られていたんですが、ブラン様達が覚醒できると仰られたんですか?」

「それなら、話が早い!!」

どうやらツクヨミは念のためミナにも言っていたようで

「じゃあ、始めるで!!」

「ああ、かまわないぜ!! 姉貴!!」

「ラムちゃん、怖いよ!!」

「大丈夫よ、ロムちゃんが一緒だったら怖くないんだから!!」

と各々、思っていることを言い、そして武龍はブラン達に腕を伸ばした。ブラン達は光に包まれた。

「この達の新たな姿を与える者成り」

「感じるぜ!! 熱い何かを」

「わたしも」

「それじゃブランから行くで!! この者の眠りし「白獅子」よ」

とブランを包んでいた光が収まり

「続けて行くで!! この者の眠りし「聖なる焔の光」を」

続けてラムを包んでいた光も収まり

「この者の眠りし「地水火風を司る精霊の王」の力」

ロムを包んでいた光も収まったのだすると

「「これがわたしたちなのか!!」」

「ブラン様!!」

ミナは目の前の光景に驚きを隠せないでいた。それもそのはず

ブランは髪が腰の辺りまで伸びており、身長は160cmまで伸びており、コンプレックスだった胸もベール並に大きくなっている

「これが巨乳なのね（うふふ、ギャハハハ）」

「服を着なさい!!」

とブランは武龍の服を借りたのであった。

ロムは髪が姉と同様に腰の辺りまで伸びており、身長は156cmに伸びており、胸もコンパほどになっていた。

ラムもロムと瓜二つであったが利き手が左から右に変わっていたのであった。

「武龍お姉ちゃん!!」

「服が欲しい!!」

二人は服を借りることにしたのであった。

「とりあえずブラン達は服を買いに行ってもらうことにして、ボクたちは三人のバリアジャケット作成に取り掛かるよ!!」

「そうね!!いつまでもお姉ちゃんの服を借りるわけにはいかないしブラも買ってくるわ」

「

龍姫達はブラン達が私服を買いに行ってる間、三人分のバリアジャケットの作成に取り掛かるのであった。

白の大地で

龍姫達は覚醒した三人分のバリアジャケットの作成に取り掛かっていたのだ。あらかじめ、ロムとラムからは注文を聞いていた。

「よし、できたよ!!そっちは?」

「完成したよ、お姉ちゃん!!」

「こっちも完成や!!」

どうやらできたようであればブラン達の帰りを待つだけであった。

「ただいまうできたバリアジャケット?」

「もうできてるよ!!」

「じゃあ、三人とも女神化してみてくれる?」

「わかった!!変身!!」

「これがバリアジャケットか」

「ありがとう武龍お姉ちゃん・龍姫!!」

今の三人はと言うと

ブランは髪がいつもの通り青味が掛かった白で、頭に猫耳が付いた帽子が付いており、

身長は163cmと余り伸びていなかったが、コンプレックスだった胸はさつきより大きくなっていた。両手足にオープンフィンガーグローブとブーツが装着されていた。服は白を基調にして露出は無くしてある。

ロムとラムは

髪が左右対称のサイドテールと変わりはないが、身長は二人とも160cmに伸びており服は

白とピンクで膝裏までのスカートがついており真正面にスリットが入っている。胸も二人とも大きくなった。髪色はロムが水色でラムがピンクである。なぜか二人とも刀を装備していた。

「かわいいね!!ラムちゃん!!」

「そうだよね!!ロムちゃん!!」

「よかった!!気に入ってくれて」

「そうだ!!一緒にクエストにいかねえか?」

「わかったよ、このメンバーならギガントモンスター巨大魔物出てこようとへっちやらだもんね」

と龍姫達は一路、ギルドに向かいクエストを選んだ後、世界中の迷宮と言うダンジョンの「百式型装甲戦闘車両」と「フォーマルハウト」と「デネブ」の討伐に向かった。

「いたよ!!括目せよ!!」

ダンジョンに到着してすぐに討伐対象を発見したので一斉に女神化して

「幻狼斬!!」

「魔神連牙斬!!」

「飛燕瞬連斬!!」

「幻影刃!!」

「爆碎斬!!」

「弧月閃!!」

「狂気と強欲の水流、旋嵐の如く逆巻く!!タイダルウェーブ!!」

「聖なる意思よ!!我に仇為す敵を討て!!ディバインセイバー!!」

龍姫は擦れ違い様に一閃し背後に回り込み斬りつけ、ネプテューヌは斬撃を三連発飛ばし、

ネプギアは突進しながら背後に回り蹴りを入れながら斬り上げ

龍音は擦れ違い様に一閃し、

武龍は斧を地面に叩き付け石つぶてを飛ばし、

ブランは斧で月を描きながら斬り上げ、

ラムは魔法で津波を発生させ、

ロムは魔法で四本の巨大な雷で攻撃していった。

「飛ばしていくぜ!!」

とブランはオーババリミッツを発動させた。

白の宴

オーバーリミッツを発動させたブランが討伐対象の内の百式型装甲戦闘車両に斧で攻撃を仕掛けたのだ。

「双牙掌!!」

斧で斬りつけ、アッパーを繰り出し

「疾風裂旋!!」

風を纏った斧で斬り

「斧顎襲砕撃!!」

斧で地面に叩き付け石つぶてを飛ばし更に飛び上り地面に叩き付け石つぶてを飛ばし

「喰らい!!やがれ!!大地の刃!! 天狼滅牙・碎覇!!」

斬撃と拳で地割れを起こし、最後は奥の手の

「行くぜ!塵になりやがれ!!これで終わりだ!!緋焰滅焦陣!!」

斧を叩き付け、灼熱の炎と共に飛び上り、最後は自身の秘奥義エグゼドレイブのように思いつ切り叩き付ける、秘奥義でまず一体、倒した。

「調子に乗らないで!!」

とロムがオーバーリミッツを発動させた。覚醒により体が大きくなったので片手剣などが使えるようになっていた。もちろんラムを同様である。自身の知っている剣技を

「穿衝破!!」

突きを繰り出しアッパーで衝撃波を繰り出し

「紅蓮襲撃!!」

飛び上り、そのまま、炎を纏った蹴りを浴びせ

「岩斬滅碎陣!!」

刀を地面に叩き付け石つぶてを飛ばし

「腹くくって・・・天狼滅牙!!」

滅多切りをするBAを放ち、

「響いて!!集いて!!すべてを滅する刃になって!!ロスト・フォン・ドレイブ!!」

オーラで巻き上げ刀で滅多切りした後、大上段から振り下ろし、某

魔王様よろしくのビームでと止めを刺した

「行くよ!!」

ラムもオーバーリミッツを発動させ

「双牙斬!!」

斬りつけた後、斬り上げ、

「烈震天衝!! → →」

突きを出した後、地面から土煙を上げ

「牙連崩襲顎!!」

崩襲脚と双牙斬の複合奥義を放ち、最後は

「始まりの力、手の内に!! こじ開けなさい!! スプリームエレメンツ!!
!! → →」

火炎斬り↓水流↓竜巻↓岩の槍と順に出し最後に地水火風の魔法陣からレーザー光線を出す秘奥義で止めを刺し、討伐対象を全滅させた

「さよならだ!!」

「ケンカ売る相手を考えてね!! (^^) /」

「身の程を知りなさい!!」

とブラン・ロム・ラムは決め台詞を言っていた。

「それじゃあ、ギルドに行こう!!」

龍姫達は世界中の迷宮を後にし町に戻り、ギルドで報酬を受け取り教会に帰って昼食を摂るため、メイドのフィナンシェと一緒に龍姫・武龍は昼食を作ることにした。

スキット：ロムの得物

ギア「ロムちゃん、いつの間に剣術出来るようになったの?」

ロム「覚醒した時に杖から刀に変わってたの」

ネプ「ええ!! どういうこと!!」

ラム「多分、覚醒したらそれに合わせて武器も自動的に変わるんじゃない?」

ロム「なるほど」ラムちゃん!!」

白と紫の特訓

スキット：ロムとラムの秘奥義

ギア「ロムちゃんとラムちゃんの秘奥義すごかったよ!!」

ラム「あの秘奥義くрукって言うキャラの秘奥義なんだから!!それと、わたしのはミラって言うキャラの秘奥義よ!!」

ギア「そうだったんだ!!」

スキット：利き手

ギア「ラムちゃんって左利きじゃなかった?」

ラム「なぜか、覚醒した所為で二人とも右利きになっちゃった」

ロム「わたしは元々右利きだよ!!」

と雑談に花を咲かせていたら、

「ごはん、できたよ!!」

と龍姫達は昼食にすることにしたのであった。

「このチャーハン、おいしい!!」

「うん、おいしい!!」

「よかったです!!喜んでいただいて」

どうやら昼食のメニューはチャーハンにしたようでみんなから絶賛であった。

リビングでくつろいでいたら

「ねえ、術技の特訓しない?」

「別にいいよ!!」

龍姫達は武龍達と一緒に術技の特訓をすることにしたのであった。

「行くで!!弧月閃!!」

「甘いよ!!鳴時雨!!」

龍姫の二刀が唸り、武龍の斧が吼え

「散沙雨!!」

「エアスラスト!!」

「遅いよ!!魔王炎撃波!!」

「虎牙破斬!!」

ネプギアの刃が轟き、龍音の二刀煌き、ロムの剣が光り、ラムの魔

術が冴え渡り

「ネプテューヌとやり合うのって早々ないな!! 魔神拳!!」

「そうだね!! 魔神剣!!」

ネプテューヌの二刀も輝き、ブランの斧も吼えた。

「今日はこのぐらいにして教会に帰ろつか?」

と龍姫達は術技の特訓を切り上げ教会に帰るのであった。

教会に戻った龍姫達は直ぐに夕食の準備に入ったのだが、

「わたしに料理を教えて欲しいんだが」

「ブラン様、お気を確かに!!」

「わたしはいつも正気だ!!」

「しようがないなくいいよ教えてあげるよ!!」

「ありがとう!! 今日は何作るんだ?」

「今日はお好み焼きや!!」

なんと!! ブランは料理を教えて欲しいと言ってきて、フィナンシエが驚きを隠せないでいたが、龍姫が教えることにした。

でそんなこんなで夕食を終え、

「じゃあ!! またね!!」

「また、遊びにいくから!!」

と龍姫達はプラネテューヌに帰るのであった。

次の日、休暇四日目

「真空裂斬!!」

「火炎裂空!!」

といつものように術技の特訓をしていたのだが、

「あ!! 刀が」

どうやら龍音の刀が折れしまったのである。

「その刀、買ってから戦い続きだったからね!! 教会に帰ったらボクの前に使っていた刀があるけど?..いる?..」

「え!! いいの、ありがとう!! お姉ちゃん!!」

龍姫達は特訓を切り上げ教会に帰るのであった。

「今日は和食にしてみました!!」

「わーい (*・▽・*) 今日は焼き魚があるんだ!!」

と朝食を摂り終えたのであった。

浮遊島

龍姫達は朝食を取り終え、イストワールに呼ばれ会議室にプルルートとピーシーエと一緒に集まっていた。

「さつき、プルルートさんとピーシーエさんの世界とこっちの世界が繋がったんです」

「ええ!! ぶるるん達帰っちゃうの!!」

「仕方ないよ、ネプテューヌ、あつちのプラネテューヌもシエアの維持が掛かってるんだから、その女神であるプルルートを返さないよ」

「わかったよ、お姉ちゃん!! いざとなったら、ツクヨミ様をお願いしてよ」

「機会があればお願いしてあげるから」

どうやらプルルートの世界のゲームギョウ界と龍姫達がいるゲームギョウ界が繋がったのでプルルートを返してあげることにしたのだ。

「じゃあ!! ぶるるん!! 元気でね!!」

「ネプちゃん達も元気でね」

プルルート達は元いたゲームギョウ界に帰って行ったのだ。

「なんか、あつという間だったね」

「うん、もうちよつと一緒に遊びかったよ」

「今日も休みだし町に出かけてみる?」

「そうだよね!! くよくよしてても始まらないしね!! じゃあ!! 町に遊びに行こう!!」

龍姫達はプルルート達を見送った後、町に繰り出すのであった。

「そうだ!! 気晴らしにギルドに行ってみよう!!」

「珍しいね、ネプテューヌからギルドに行こうなんて!! 別にいいよ!! 行こう」

「このクエストでいいんじゃないかな?」

「そうだね、龍音のレベルを考えると妥当かも!」

ギルドに着いた龍姫達はクエストを物色していたのだが、

「あれ? なんだ!!」

と外が騒がしいのである。それを聞いていた龍姫達は外に出てみることにしたのだ。

「なにあれ？島が浮いているんだけど」

「島だよね？おまけに大砲がついてるし」

なんとプラネテューヌの近海で島が宙に浮いていたのだ

「龍姫!!ネプ子!!ネプギア!!龍音!!」

「アイちゃん!!どうしたの？血相変えて」

「さつき、イストワール様から連絡が入ったのよ!!なんでも「キセイ・ジョ・レイ」と言う女が四か国の女神に宣戦布告をしてきたらしいのよ」

「どうやら、「キセイ・ジョ・レイ」と言う女が四か国の女神に宣戦布告をしてきたのだ!!」

「ネプテューヌ!!つて聞かなくても分かってるよね!!」

「もちろん!!ゲームギョウ界の平和を身だし奴はたとえ「法や評議会が許してもわたし達女神は許さない!!」だったよねお姉ちゃん?」

「もう!!お姉ちゃん!!たらゲームのキャラのセリフ言ってる場合じゃないよ!!」

「とりあえず、教会に戻ろう!!」

と龍姫達は一旦、教会に帰るのであった。

「龍姫さん!!行くんですね!!」

「うん!!あのままほつといたら何するかわからないから行ってくるよ!!」

「変身!!(セットアップ!!)」

龍姫達は浮遊した島に女神化をして飛んで行った。

キセイジヨ・レイ参上!!の段

龍姫達は浮遊した島に向かっていた、もちろんほかの女神達も来ていたのである。

「着いたわね!!」

「うん、殺風景だよ」

と龍姫達は島に上陸してそれぞれ思ったことを言った。すると

「お待ちしておりました、女神の皆様」

「あなた、誰なの？」

「わたしですか?わたしは!!」

「なんやねん!!急に光だしよった!!」

いきなり一人の女の人が現れてたのだ。思わずネプテューヌはその女の人に身元を聞いたのだ。

するといきなり、女の人が光り出したのだ。そして光が収まるとそこにいたのは

「ふははは!!わたしの名前はキセイジヨ・レイだ!!お前たち女神に宣戦布告をした者成り」

「性格、変わりすぎだ!!」

「つまり、あなたがわたし達を倒すと宣戦布告してきたってこと?」

「きやははは!!その通りだ!!この時のために頑張ったかいがあったと言える」

「まさか!!犯罪組織を裏で操ってたのって」

「そうだ!!この私だ!!」

なんと!!女神に宣戦布告をしてきたキセイジヨ・レイ本人だった。

その上、犯罪組織を裏で操っていたのである。

「なら本気で生かさせてもうぜ!!」

「来い!!女神ども!!」

と戦いの火蓋が切って落とされた

「魔神剣・双牙!!」

「無駄だ!!」

「余裕こいていられるのは今の内よ!!戦迅狼破!!」

「無駄だと何故わからないのです」

「悪いですけど、龍姫達に出会って自分が負けず嫌いと感じかされま
したわ!!轟破槍!!」

とキセイジヨ・レイは龍姫は斬撃を二発放ち、ノワールは狼の鬨気
を叩き付け、ベールは槍を地面に突き刺し岩の槍で攻撃していた。

キセイジヨ・レイは余裕を見せていたが顔には疲れが見えてきたの
だ。

「何故だ!!傷が治って行くだ!!」

「わたしがいること忘れないでよ!!氷結は終焉!!せめて刹那にて砕け
よ!!インブレスエンド!!」

「怪我は・・・わたしが治してあげるから・・・白き天の使い達よ、その
微笑みを我らに!! ナース!!」

「わたしも一応、魔法が使えるのからな!! 天光満ところに我があり、
黄泉の門、開く時汝あり・・・いでよ!!神の雷!! インディグネイショ
ン!!」

「ネプギア!!やりすぎよ!!」

キセイジヨ・レイは女神たちに啖呵を切ってしまったことに後悔を
隠せないでいた。

ラムが氷の上級魔術の「インブレスエンド」を繰り出し、ロムが中
級治癒術「ナース」唱え、全員の傷を癒し、ネプギアが雷の上級魔術
「インディグネイション」を放っていた。

ユニは思わず突っ込んだ

「そんなはずはない!!」

「だったら、今、楽にしてあげる!!」

「一応、命まで取らないから、安心して」

「わたし達も」

「飛ばして行くわよ!!」

龍姫・星龍・ネプテユヌ・ノワールは同時にオーバーリミッツを
発動させた。

さらば、キセイジヨ・レイ

「飛ばして行きますか!! (行くわ!!)」

龍姫・星龍・ネプテューヌ・ノワールは同時にオーバーリミッツを発動させた。

「なんだ!!この光は!!」

「これは闘気だ!!」

「あなたには到底真似できないわ!!」

キセイジヨ・レイはオーバーリミッツの光に驚きを隠せないでいた。

「行くよ!!鳳凰天駆!!」

「雷神剣!!」

「剛・紅蓮剣!!」

「蒼破牙王撃!!」

龍姫が鳳凰になり、星龍が雷を纏った突きを繰り出し、ネプテューヌが前方に炎を纏わせ斬りつけ、ノワールは蒼破刃と牙狼撃の複合奥義を出し

「行くよ星龍!!」

「行くわよ!!ノワール!!」

「!!はああああ!!」

「!!決める!!」

「!!見せてあげるよ!! (わ)」

「!!貫け!!」

(四人)「武神!!双・天・波!!」

「こんな・馬鹿な!!」

龍姫・星龍・ネプテューヌ・ノワールは同時に刀を地面に突き刺し巨大守護方陣を作りキセイジヨ・レイを閉じ込め、四方から切り抜け上空に飛び上り、最後に巨大魔神剣と蒼破刃で止めを刺す合体秘奥義「武神双天波」を繰り出した

「わたしの信念、燃え果てるまで!!」

「この正義、貫き通す!!」

龍姫・星龍・ネプテューヌ・ノワールは同時に決め台詞を言った。

「観念してもらおうおうか!!」

キセイジヨ・レイをお縄にし役人に突き出し刑務所ふたばこに入れたのであった。

「おなかすいたね!!」

「そうだね!! 教会に戻って、お昼にしょ!!」

「もしよかったらみんなで食べない?」

お昼にすることにしたのでネプテューヌはみんなを昼食に誘ったのだ。

もちろん、全員がOKを出し一行はプラネテューヌ教会に戻るのであった。

「今日のお昼はちゃんちゃん焼きですうよ!! みんな食べるですう!!」

「ちゃんちゃん焼きってあのゲームに出てくる料理だよ!! いただきます!!」

「おいしいですわ!! お姉さま!!」

「しかし、まさかチカまで女神になっていたとはおもってなかったわ

!! おまけにベールは180cmになってるし!!」

「今度、リンボックスにいらした時に驚かそうと思っていたら、このような事件が発生したのですから隠す必要がなくなつたのですわ!! それに身長のことには言わないでほしいですわ!!」

「ベール、気にしてんだ☒」

どうやら今日の昼食のメニューは「ちゃんちゃん焼き」にしたようでみんなには絶賛だったようで、ノワールは教祖のチカまで女神になつていたこととベールが覚醒し女神化すると身長が180cmなつていたことに驚きを隠せないでいた。

「ちよつと、昼寝でもしようよ!!」

龍姫は自分の部屋に戻り、昼寝することにしたのであった。

夢で

「——」 z z z」

龍姫は自室で昼寝をしていた。どうやら夢を見ているようで「あれ此処って？確かギョウカイ墓場だったよねけど少し違うような」

龍姫は夢でギョウカイ墓場来ていたのだが、

「ゲームギョウ界が壊れちゃうよ!!」

「何あれ、ネプテューヌ達が一人にやられてるってことは覚醒してないの!!」ってあの人の武装、防御力あるの?」

どこか違うゲームギョウ界の様でネプテューヌ達が一人に完膚無きまでに叩きのめされていたのである。

「夢か!!あの夢なんだっただろう?考えても仕方ない珈琲でも飲もう!!」

龍姫は目が覚めらしく、眠気覚ましに珈琲を飲みにもリビングに行った。

「もう、お姉ちゃん!!やっと起きたの?」

「ごめんね!!ネプテューヌ、今、何時?みんなは?」

「ほかのみんな帰っちゃったよ!! 今、13:30だよ!!」ってお姉ちゃんすごい寝汗だよ!!」

「ホントだ!!拭いてくるね!!」

龍姫はどうやら夢でうなされたいたらしく、寝汗を掻いていたのでタオルで拭き、みんなの所に戻ったのであった。

「さて、今日ギルドで選んだクエストはダークネス60の「イプシロン」一頭の討伐だよ!!」

「ほんじゃ、気合入れていきますか!!」

龍姫達はダークネス60にイプシロンの討伐に向かった。

「いたよ!!あれがイプシロンだよ!!」

どうやら討伐対象のイプシロンを発見したのである。

龍姫は一刀流で、ネプテューヌは二刀流、ネプギアは一刀流、龍音は大小の二刀、

をそれぞれ構え、戦闘を開始したのである。

その外見は、鉄の翼が付いたロボットであった。

「先手必勝だよ!! 久しぶりにクリティカルエッジ!!」

「ボクも!! 襲爪雷斬!!」

「ロボットつてことは物理防御が高いけど、逆に術防は低いよね!!…

デモンズランス!!」

「これならどうか? 破邪十字星!!」

ネプテューヌは自分が編み出した技で、龍姫は雷を刀身に雷を纏わせ斬りつけ、

龍音は魔術で闇の槍をぶん投げ、ネプギアは擦れ違い様に十文字に斬り捨てた

「飛ばして行くよ!!」

女神化しないでネプテューヌはオーバードリミッツを発動させた。

「ギィー!」

「遅いよ!! 散沙雨!!」

二刀で連続で突きを繰り返す

「秋沙雨!!」

散沙雨同様に二刀で連続で突き最後に斬り上げ

「驟雨双破斬!!」

更に連続で突き虎牙破斬で決め

「水よ!! 立ち昇れ!!」 天狼滅牙・水蓮!!」

刀を地面に突き刺し水柱を自分の周囲に発生させるバーストアーツを出した

「見せてあげるよ!! 喰らって!!」 天翔蒼破斬!!」

闘気を立ち昇らせ二刀の刀を粒子化し一刀にしてそのまま飛び上り地面に叩き付ける秘奥義を放ち、

「ギィー!! チュドン!!」

とイプシロンを討伐したのであった。

「安らかに眠って!!」

ネプテューヌは決め台詞を言っていた。

「お姉ちゃん!! 帰るよ!!」

「待ってよ!!みんな!!」
龍姫達はギルドに報告し報酬を貰い、教会に帰るのであった。

夢の話

龍姫達は教会に帰宅しており、今、夕食の準備をしているのであった。

「助かるよ!!ネプテューヌが手伝ってくれるから」

「別に料理はやらないと身につかないし」

「だって今日はみんな大好き「ハンバーグ」だからね!!こうやって形を調べて行ったらいいだよね?」

「お姉ちゃん、すごい!!」

今日の夕飯のメニューは「ハンバーグ」に決定した。

今日はみんなで一緒に作っている最中である。

「今日のご飯は自分で作ったからおいしい!!」

「そろそりでしょ!!」

と楽しい夕食になっていった。

「ふうくちよつと休憩!!」

「もう!!お姉ちゃん!!たら」

「ボクも、一息入れようかな?」

龍姫達はリビングで一息入っていたのだが

「そうだ!!昼寝してたら夢でネプテューヌ達が一人にコテンパンにやられていた挙句、ネプギアが「ゲームギョウ界が壊れちゃうよ!!」って叫んでる夢を見たんだけど」

「ええ!!いくらなんでも今のわたし達を倒せるの?」

「たぶん、龍姫お姉ちゃんはある此処とは別のゲームギョウ界のわたし達の夢を見たんじゃないかな?」

「そうだと思うよ!!だって夢に出てきたネプテューヌ達は覚醒してなかったし、おまけに星龍・輝龍・飛龍・武龍・龍音・天龍・ユニ・ロム・ラム・チカがいなかったし」

「肝心な人達がいらないよ!!ってなんでボクが入っていないの?」

「そんなことは起こらないと思うよ!!まあ、ツクヨミ様が救援に向かえって言うならあっちのわたし達を助けないとね!!」

「その時が来たなら!!みんなに声掛けないと!!」

昼寝をしていた時に見た夢を話していた。

龍姫達はもしあつちの自分たちが危機に陥った場合には助けに行くこと決心したのであった。

「お姉ちゃん、お休み〜」

「龍音、お休み!!」

龍姫達は就寝したのであった。翌日、休暇最終日

「今日の朝ご飯は玉子焼きだ!!いただきます!!」

どうやら朝食は玉子焼きと納豆した。

「今日はどうするのお姉ちゃん?」

「今日がお休みの最後の日だもんね!!」

「確かにほかのみんなはシエアの獲得で忙しからね!!特にラストイシヨンは」

「町にでも出かけてみる?」

龍姫達は休暇最終日を街に繰り出すことにしたのだ。

「やっぱり、いつ来ても人が多いね!!」

「けど、いつもなら学校に通っているからね!!平日は」

「そうだね、ボクも死ぬまでは普通の高校生だったからね!!」

「そーいや、そうだったね!!」

と話していたら、突然龍姫のNギアが鳴り出したのだ。

「あれ、いーすんからだ!!何々、「龍姫さんと龍音さんに荷物が届いています」だって」

「とりあえず、教会に戻ろうか!!」

どうやら教会に龍姫と龍音当てに荷物が届いてるらしく、龍姫達はお代を払い喫茶店を後にした。

天照大御神からの報酬

「いーすん!! ただいま!!」

龍姫達は教会に届いた荷物を

「これが龍姫さんのお届け物です。こっちが龍音さんのです。お二人とも送り主が天照大御神様アマテラスオオミカミになってましたので何かの報酬でしょうか?」

「とりあえず、開けてみようか!!」

龍姫と龍音は届いたダンボールを開けることにしたのだ。

すると中に入っていたのは

「これってボクが通っていた学校の制服だよ!!」

「ボクもだ!! あれ、手紙が入ってるよ!!」

なんと!! 龍姫が死ぬ前に通っていた学校の制服だったのだ。もちろん龍音は中学生だったのでその制服であった。一緒に手紙も同封されていたのであった。

「なんて書いてあるの?」

「とりあえず、読むね!! 何々」この度、四か国の転生者をすべて女神になったことを聞いた天照大御神様アマテラスオオミカミは報酬にこの制服と女神メモリーを報酬にすると仰られたのでご一緒に同封させていただきました!! 女神メモリーをアイエフさんとコンパさんにお渡し下さい 女神ツクヨミ」だって」

「制服は兎も角、アイさんとコンパさんにこれを渡せってこと」

手紙には同封されている女神メモリーをアイエフとコンパに渡すよう書かれていたのであった。

「制服はノワールが喜びそうだよね!! とりあえず、アイちゃんとコンパ呼んでくるね!!」

ネプテューヌはアイエフとコンパを呼びに行った。

「何よ!! ネプ子!!」

「ねぶねぶ!! 一体どうしたんですか?」

「これを二人に受け取って欲しいの!! これをツクヨミ様が二人に渡せて手紙にかいてあったから」

「これって女神メモリーじゃない!! ってことはわたしも女神になれるのね!!」

「アイちゃん、今使うんですう? もし女神になったらどうするんですう?」

龍姫はアイエフとコンパに同封れていた女神メモリーを渡したのだ。

コンパはアイエフに今女神メモリーを使うか聞いた。

アイエフは

「もちろん!! 今使うわ!!」

もう使うとコンパに答えた。それを聞いていた龍姫達は

「アイがそこまで言うなら止められないね!!」

「アイちゃんが女神になったら閨属性ばかり使いそう」

思っていたこと言い

「わかったですう!! アイちゃんが女神になるならわたしもなるですう!!」

「使ったら最後、人間戻れないわ!! いいのコンパ?」

「はいですう!! 龍姫ちゃんの言葉を借りて選ぶんじゃないかと、もう選んだんですう!!」

「それ言うておくけど、ゲームのキャラのセリフだから!! (||。ω。ノ)」

コンパは龍姫が以前ツクヨミに言ったゲームのキャラのセリフを言うてのけた。

それを聞いていた龍姫はコンパに思わず突っ込んだのであった。

暗黒と神癒

龍姫はツクヨミが報酬としてくれた女神メモリーをアイエフとコンパに渡したのである。

「じゃあ!!行くわよ!!コンパ!!」

「はいですう!!アイちゃん!!」

二人は女神メモリーを使ったのだ。二人とも光に包まれて

「コンパー!!」

「アイちゃん!!」

出し、しばらくして光が収まると、

「これがウチなんか!!」

「アイちゃん!!武龍ちゃんと一緒に関西弁になっているです!!」

「突っ込むところ!!そこなの!!。(。D。(ノ」

今のアイエフとコンパはと言うと、

アイエフは身長が163cmぐらいになっており、胸は今のネプテューヌより少し小さいが、さつきよりは大きくなっていて、服がいかにも忍者ようになっており、色は黒っぽい紫になっており、背中には紫の翼がついていた。そしてなぜか関西弁になっていた。

後腰に何故か、小太刀が二刀、帯刀していた。両手にオープンフィンガーグローブ、両足にブーツであった。髪がロングヘアーの赤になっていた。

コンパは身長が165cmになっており、胸は覚醒前のベールぐらになっており、服はナース服をモチーフにしており、白とピンクであった。背中には天使の翼をモチーフした翼がついていた。で武器がなぜか注射器ではなく、一本の刃渡り二尺の刀になっていた。髪がセミロングの銀髪になっていた。

二人とも露出はしていない

でコンパは自分が女神になっていることよりアイエフが関西弁でしゃべっていることに突っ込んでしまい、

龍姫はコンパに思わず突っ込んでしまった。

「アイちゃんも二刀流なんだね!!」

「わたし、龍姫ちゃん達みたいに剣術なんてできないです!!」

「大丈夫や!! コンパ!! 別に接近戦をすると決まったわけじゃないんや!!」

「刀は護身用だよ、コンパは回復と補助がメインなんだから」

「わかったですう!! 攻撃するときは、魔神剣するです!!」

コンパは得物が愛用していた注射器ではなく刀になっていたことに不安になったが、アイエフが励ました。

アイエフは「暗黒の女神」の称号を修得した

コンパは「神癒の女神」の称号を修得した

スキット：闇と癒し

ネプ「今日から、アイちゃんとコンパが女神になったってことは」
アイ「ずっと一緒にいられるわね」

コンパ「龍姫ちゃん達とねぶねぶとギアちゃんとずっと一緒に居られるですう!!」

ネプ「でも、アイちゃん女神になっても胸はわたしより小さいね!!」

アイ「これでも!! 大きくなったんだから!!」

龍姫「これから経験を積み大きくなると思うよ!!」

「そうだ!! 今日まで龍姫達は休みなんでしょ?」

「一緒にクエスト行くですう!! わたしは今日からお休みですから一緒にどうですう?」

「もちろん!! 一緒にクエスト行くよ!! お姉ちゃんも行くよね!!」

「いいよ!! 今日やることなかったし、部屋にいてもゲームしてから」
一行はギルドに向かうのであった。

暗黒の女神と神癒の女神、戦闘するの巻

龍姫達はアイエフとコンパが女神になったので力試しとプラネテューヌのシエアの獲得のためギルドに来ていた

「このクエストでいいんじゃない？」

「そうですね今のわたしとアイちゃんのレベルならちようどいいですう!!」

どうやら「アイスフィンリル」と「メガタートル」の討伐クエストに決まったのらしい、

「レッゴウアイランドにGO!!」

龍姫達はクエストの場所のレッゴウアイランドに向かったのであった。

「いたわ!!アイスフィンリルとメガタートルよ!!」

「ここはわたしとアイちゃんで行くですう!!変身!!ですう!!」

「天凱獄装!!」

「援護するよ!!アイ!!コンパ!!」

到着して早々ターゲットのアイスフィンリルとメガタートルを発見したのでアイエフとコンパは一目散に女神化をして

アイエフは二刀の小太刀、コンパは龍姫の愛刀より短い刀をそれぞれ構えて

「魔神剣!!や!!」

「魔神剣!!」

アイエフとコンパは無属性の斬撃を飛ばし、

「ワフン!!」

「ギューー」

見事に命中させ、

「ボクも魔神連牙斬!!」

「わたしも行くよ!!魔神連牙斬!!」

龍姫とネプテューヌは合計で十二発の斬撃を放った。もちろん、

「キューウウーン!!」

見事に全弾命中させた。

「おっ!!これできるんやな!!虎牙破斬や!!」

「アイエフさん!!もう「虎牙破斬」修得したんですか!!」

「流石!!プラネテューヌ諜報部!!」

まだ女神になっていきなりアイエフは「虎牙破斬」を修得してしまったのである。

ネプギアはアイエフの技の修得速度に驚きを隠せないでいた。

「ウォーン!!」

「痛っ!!」

「アイちゃん!!聖なる活力!!此処に来てくださいです!! ファーストエイド!!」

「サンキュー!!コンパ!!」

アイエフはアイスフィンリルの攻撃を直撃は避けたが当たってしまったが、すぐさまコンパが治癒術「ファーストエイド」を掛け傷を癒した。

「もう!!アイちゃん!!まだ女神になったばかりなんだから!!無理しないで!!」

「わかってるわ!!龍姫!!ネプ子!!ネプギア!!龍音!!もう一頑張りや!!」

「そうですね!!アイちゃん!!ねぶねぶの言う通り無理は禁物です!!」

ネプテューヌとコンパはアイエフに無理はするなと言った。

「ここはわたしと龍姫お姉ちゃんに任せてください!!」

「任せたですよ!!ギアちゃん・龍姫ちゃん!!」

ネプギアは自分と龍姫に任せてほしいと言い、コンパは後退しいつでも発動できるように治癒術を掛けれる体制に入った。

「飛ばして行きます!!」

「あれがオーバリーミッツです!!ギアちゃんすごいです!!」

「アイちゃんとコンパもできるけどまだ「バーストアーツ」と「秘奥義」修得してないよね?」

「そやな!!バーストアーツ!!と秘奥義!!いつか修得したる!」

ネプギアは女神化をしないでオーバリーミッツを発動させ、それを

見たアイエフは秘奥義修得に燃えていた。

暗黒女神と神癒の女神 秘奥義を見るの段

ネプギアが女神化をしてない状態でオーバークリミッツを発動させていた。

討伐対象のアイスフィンリルに向かって

「ウォーン!!」

「遅いです!!光龍槍!!」

アイスフィンリルの攻撃を避け刀から光の槍を飛ばし

「続いて断空剣です!!」

風を纏いながら回転斬りで舞い上がり

「斬魔龍炎斬!!です!!」

炎纏いながら回転蹴りと連続斬りを繰り返す奥義を放ち、

「巻き上がって下さい!!光翔戦滅陣・旋迅!!」

風で巻き上げた後、追いつき打ちをするバーストアーツを繰り返した。

もちろん奥の手の

「わたし達に会ったことに後悔してください!!はあああ!!
神葬星条破!!」
しんそうせいじょうは

刀を天に掲げ、自身の周りに星のオーラを巻き上げ刀身に纏わせ、

刀を地面に叩き付け、光の衝撃波を発生させる秘奥義で止めを刺した

「すごい!!ネプギア!!あれが秘奥義かいな!!」

ネプギアの秘奥義を見たアイエフは驚きを隠さないでいた。

「飛ばして行きますか!!」

龍姫もネプギアに負けじとオーバークリミッツを発動させた。もちろん女神化をしていない。そして一刀流の状態でメガタートルに向かって

「ガウア!!」

「遅いよ!!幻狼斬!!」

メガタートルの攻撃をかわした龍姫は擦れ違い様に斬りつけ、振り向きながら斬りつけ

「まだ行くよ!!虎牙連斬!!」

斬り上げた後、空中で左右に薙ぎ払い、斬り下ろし

「霧沙雨!!」

散沙雨と秋沙雨の合体奥義を繰り出し、

「焼き尽くす!! 天狼滅牙・飛炎!!」

刀身に炎を纏わせ、滅多切りした後斬り上げるバーストアーツを繰り出し

ネプギア同様に奥の手の

「お終いにしてあげる!! 閃け!! 鮮烈なる刃!! 無辺の闇を鋭く切り裂き!! 仇名す者を微塵に砕く!! 決まった!! 漸毅!!さんこうろうえいじん狼影陣!!」

龍姫が一番最初に修得し今ではノワールも修得した、敵を中心として狼の如く陣を描きながら切り刻む秘奥義で止めを刺した。

「龍姫ちゃん!!すごいですう!! 女神化をしてないのに速すぎですう!!」

龍姫の秘奥義を見たコンパは龍姫が物凄い速さで斬りつけていたことに驚きを隠せないでいた。

「華麗なる勝利!!」

「これが絆の力です!!」

龍姫・ネプギアは決め台詞を言っていた。

「ギルドに戻るよ!!お姉ちゃん!!」

龍姫達はギルドに戻るためレツゴウアイランドを後にしたのであった。

「クエスト達成してきました!!」

「ほうく珍しいね!!はい、これが報酬だ!!」

「ありがとう!!」

ギルドで報酬を受け取り、龍姫達は教会に帰るのであった。

「今日のメニューはコロッケと海の幸と大葉の天ぷらだよ!!」

「ワイイ!! (≡▽≡) !!いただきます!!」

今日の夕食は魚貝類と野菜の天ぷらとコロッケにしたのであった。

「このコロッケおいしいわ!!」

「そのコロッケ、ネプテューヌが作ったんだよ!!」

「そうなの!!ってネプ子か!! (。D。)ノ」

「もう!!アイちゃんたら、おいしさの余り言葉が出てこないの?」

龍姫がコロツケはネプテューヌが作ったとアイエフに教えたら、衝撃の事実を開いた口が塞がらない上に、そのまま気絶してしまったのだった。

暗黒女神と神癒の女神 術技を教わるの段

龍姫達は夕食を食べ終えたので、もう一つの報酬の龍姫達の制服とバーストアーツと秘奥義の話をすることにした。

「ねえ!!お姉ちゃん!!あの制服着て見てよ!!」

「そうだよ!!せつかく!!もらちゃったんだから!!着てみてよ!!龍音!!」

「わかったよ、そこまで言うなら、ちよつと待ててね!!」

「早く着替えて、わたしとアイちゃんにBバーストアーツAと秘奥義について教えて欲しいですう!!」

ネプテューヌとネプギアは龍姫と龍音に学校の制服に着替えて欲しいといい、コンパはBバーストアーツAと秘奥義について教えて欲しいと言った。

「着替えて見たけど?どう、似合ってる?」

「似合ってるよ!!お姉ちゃん!!龍音!!写真、撮っていい?」

「別にいいけど、変なことしないでって約束できる?」

「約束するよ龍姫お姉ちゃん!!」

龍姫と龍音の制服は、龍姫がブレザー、龍音はセーラー服である。

二人ともいつもは男物の服を好んで着ているのでこの服が唯一の女物の服であった。

ネプテューヌとネプギアはカメラで写真を取り始め、

「ネプ子!!龍姫がわたしとコンパにBバーストアーツAと秘奥義修得の話が出来ないでしょう!!」

「こんだけ、写真が撮れたら十分!!」

気が済んだのでネプテューヌとネプギアは写真を取り終えた。

「とりあえず、二人は今日、女神になったから知らないだろうから説明すると、まず、ある程度の術技を修得することなんだ!!」

「それじゃあ、今まで使ってきた技と魔法は使えるの?」

「それは大丈夫だよ!!ただし、これから覚える術技とも連携出来るよ!!ボクと龍音は転生者だったから、こっち世界の術技は修得できないんだ!!あと戦闘で修得する方法とこっちやって相手から教わる方法

の二種類があるから」

「そうなの!!龍姫はどんな技を教えてくださいの?」

「とりあえず、簡単な「蒼破刃」と「フォトン」を教えてください!!」

龍姫はアイエフとコンパに秘奥義の修得方法を教えた。

アイエフは「蒼破刃」を修得した。

コンパは「フォトン」を修得した。

一方その頃

「お姉ちゃんの制服かわいい!! (あの制服着てみたいけど)」

「もう、ノワールだったら、この制服着てみたいんでしょ?もう一着あるから着てみたら」

「良いの!!じゃあ!!着替えて来るから!!」

「ノワールだったら、コスプレになると顔に出るんだから!!」

「どうやらノワールは星龍と天龍の制服姿を見て、コスプレ魂に火がついてしまった。」

「着替えて見たけど!!この学校の制服、作っても良い?」

「別に構わないよ!!ノワールがいいなら」

「ありがとう!!お姉ちゃん!!」

「とりあえずノワールは星龍の世界の学校の制服を自作していたのであった。」

忘却の遺跡へ

龍姫たちの制服はもちろんリンボックスの輝龍と飛龍の所にも来ていたので

「かわいいですわ!! (*・▽・*) 輝龍・飛龍こっち向いてくださいな!!」

「わたくしも着てみたいですわ!!」

ベールは輝龍・飛龍の制服姿をカメラで撮影していた。それを見ていたチカは入り口のドア前でいじけていた。

翌日、龍姫達はいつものように

「アイ、行くよ!! 崩襲脚!!」

「こつちも行くで!! 双牙斬!!」

今回はアイエフとコンパの特訓に付き合っている。アイエフとコンパは女神化をしているのである。

「コンパ!! 行くよ!! 爆炎剣!!」

「負けてられないですう!! 虎牙破斬!! ですう!!」

「これぐらいにして朝ご飯にしよう!!」

教会に帰るため特訓を終えたのであった。

「いただきます!! 特訓をやった後のご飯っておいしい!!」

「この後はいーすんに呼ばれてるからね!!」

「今回はわたしとコンパも同行することにしたから」

「パトロールはいいの?」

「パトロールのついでにクエストに行くに決まっているじゃない!!」

龍姫達は楽しい朝食を終え、イストワールの所へ向かうのであった。

スキット：術技の修得

ネプ「アイちゃんとコンパが女神になってまだ二日しか経ってないけど、すごいスピードで術技を修得してるよね!!」

アイ「当たり前よ!! 早くB バーストアーツ Aと秘奥義を修得きやいけないんだから!! 一応、エグゼドライブは使えるけど!!」

コンパ「そうですう!! 龍姫ちゃんと龍音ちゃんが使っているこの治

癒術と攻撃魔法は今まで以上に効きますですう!!」

ギア「そうですね!!今まで単体専用の技ばかりでしたからね」

龍姫達はイストワールのいる部屋にやってきた。

「いーすん!! 入るよ!!」

「どうぞ、お入りください!!」

とりあえず、部屋に入ったのである。

「今日は魔物退治の依頼が来ています!!」

「内容は忘却の遺跡で「アンタレス」の二体討伐だね!!今のアイちゃん
とコンパには無理なんじゃ(・ω・)」

「そのためにアンタたちがいるんじゃない!!」

「そうですねよ!!ねぶねぶ、わたしとアイちゃんが女神になった意味がないですう!!」

今日の仕事は忘却の遺跡で「アンタレス」いう機会モンスターの魔物退治でネ
プテューヌはアイエフとコンパを心配してたが二人が大丈夫だと答
えた。

「それじゃあ!!忘却の遺跡にレッツゴー!!」

一行は忘却の遺跡に向かうのであった。

「ここが忘却の遺跡か」

「いたわよ!!」

遺跡に着いて早々ターゲット「アンタレス」を発見したので

「アイちゃん行くですう!!変身ですう!!」

「ほんじゃあ、天凱獄装!!」

アイエフとコンパは女神化をいたのであった。

暗黒女神と神癒の女神の乱舞

龍姫達は忘却の遺跡にてアンタレス二体討伐に来ているのであった。

「行くで!! 龍姫直伝!! 蒼破刃!!」

「ロボットですから、魔法の方が効きやすいですう!! わたしも龍姫ちゃん直伝!!」

光よ!! フォトン〜!!」

「わたしも負けられないよ!! 巻き起これ、春の嵐!! アリーヴェデルチ!!」

「ボクも、魔神剣!!」

「行きます!! 風雷神剣!!」

「ボクもいること忘れないでね!! ネガティブゲイト!!」

アイエフは龍姫に教えてもらった蒼破刃を、コンパも龍姫に教えてもらった下級魔術「フォトン」を、ネプテューヌは桜吹雪で攻撃する魔術「アリーヴェデルチ」を、龍姫は魔神剣を、ネプギアは風と雷を刀身に纏わせた奥義「風雷神剣」を、龍音は中級魔術「ネガティブゲイト」を発動させ、アンタレスに攻撃をして行った。

「ギイイー!!」

「しまった!! 痛た!!」

「アイちゃん!! 今治すですう!! キュア!! 無茶はダメですう!!」

「サンキュー!! コンパ!!」

アンタレスはアイエフに攻撃を仕掛けてきた。アイエフは直撃はなんとか免れたが余波で壁に背中をぶつけてしまったがコンパが治癒術「キュア」を掛け傷を癒した。

「なるほど、この感覚やな!! 飛ばして行くで!!」

「アイちゃん!! もうオーバーリミッツを発動できるようになったの!!」

アイエフはこの戦いの最中に戦闘術「オーバーリミッツ」を修得してのけたのだ!!

「行くで!! 虎牙破斬!!」

二刀の小太刀で斬り上げ、斬り下ろし、

「閃空裂破!!」

回転斬りで舞い上がり斜め下に急降下し、

「魔神双破斬!!」

魔神剣と虎牙破斬の複合奥義を出し、

「腹括りや!! 天狼滅牙!!」

滅多切りした後、

「これで決めるで!! 封魔九印剣!!」

「漸毅狼影陣ぜんごろうえいじんに似てるですう!!」

アイエフはここに来てなんと!! 秘奥義を修得してしまったのだ。

「わたしも行くですう!!」

コンパもオーバーリミッツを発動させた。

「行くですう!! ホーリイランス!!」

オーバーリミッツを発動させたことにより無詠唱でホーリイランスを放ち

「行くですう!! 邪と交わりし、悪しき魂に清き聖断をですう!! セイクツドブレイム!! 安らかに眠ってください!!」

コンパも秘奥義を修得したのだ。この秘奥義でアンタレスは二体とも倒し、龍姫達の傷も癒えたのであった。

「チヨロいで!!」

「甘いよ!!」

「チヨロ甘ですう!!」

と決め台詞を言っていた。

「さてと!! 教会に帰ろ!!」

「そうですね!!」

龍姫達は教会に帰るのであった。

「ただいま〜いーすん!! クエスト達成したよ!!」

「この調子で頑張ってください!!」

龍姫達は教会に戻り、イストワールにクエスト達成を報告した。

天王星の女神

アイエフとコンパがフリーの女神になって三日の月日が過ぎていた。

今、龍姫達は教会の執務室で書類を片付けていた。

「この書類で最後だよ!!ネプテューヌ!!」

「任せて!!チエストー!」

「どこの示現流!!」

そんなこんなで書類を片付けていき、

「終わった!!」

「ご苦労様でした!!これで今日のお仕事はありませんので、今日はごゆっくりどうぞ。また明日から頑張ってください」

「リビングで一休みしよ!!」

今日する仕事を午前中に終わらせリビングでくつろぐのであった。

「ふうくちよつと、食材の買い物に行ってくるね!!」

「わたしも行く!!待ってくお姉ちゃん!!」

一息入れた龍姫はネプテューヌと一緒に食材の買い出しに町に出かけた。

「こんなもんでいいんじゃない」

「こんだけあれば十分だよ!!ありがとう!!ネプテューヌ、じゃあ、帰ろうか」

「うん!!」

龍姫達はある程度食材を買い終え、教会に帰ろうと歩いていた。

「ここはどこだ!!わたしは確か・うぐ!!骨が折れてるの?」

白とオレンジを基調とした武装を纏っていた。どうやら此処とは別の世界の女神のようであった。

どうやら、怪我をしているようであった。

「今誰かの声が聞こえたような?」

「お姉ちゃん?どうしたの?」

「ちよつとね」

龍姫は誰かの声が聞こえた気がしたのだ。ネプテューヌは恐る恐る

る聞いたのだ。

「わたしはここで終わっちゃうの・・・」

「あれ？誰か!!倒れてる!!」

龍姫はふと路地の方を向くと、誰かが倒れていたのだ。それ見た龍姫は一目散に

「待ってよく!!お姉ちゃん!!」

「しっかりして!!」

「お姉ちゃん!!その子、怪我してるの!?!」

「うん、そうみたい!!今、回復してあげるから!! 聖なる恩恵よ!!
キュア!!」

どうやら、怪我をしていたようで、龍姫は治療術「キュア」を唱え、怪我を治してあげた。

「ありがとう!!わたし、女神でオレンジハートって言うの!!じゃあ!!わたし行かないと!!」

「待って!!行っちゃった〜」

「あの子、なんであんなに慌ててたんだろう?」

「さあくさすがにボクでもわからないよ!!とりあえず、教会に帰ろ」

オレンジハートと名乗った少女は龍姫にお礼を言い慌ててどっかに飛んで行ってしまったのである。

仕方なく、龍姫達は教会に帰るのであった。

「お姉ちゃん!!お帰りなさい!!」

「ただいま〜これ冷蔵庫に入れるね!!」

龍姫達は買ってきた食材を冷蔵庫にいれ

「お姉ちゃん?何かあったの?」

「実はねさつきボクたち、オレンジハートって言う女神に会ったんだ!!怪我をしてから治療術で治してあげただけど」

「けど?」

「お礼を言ってどっかにどっかに飛んで行っちゃったんだ」

「ええ!!つまりボクたち以外に女神がいるってこと!!転生者ならすぐわかるもんね!!」

龍音にオレンジハートと言う女神に会ったことを話した。

「わたしに言ってくれたら治してあげたですうよ!!会ってみたかったです!!そのオレンジハートっていう子に」

「なんか、近いうちにまた会える気がするんだよね!!」

それを聞いたコンパは会いたかったと言い、龍姫は近いうちに会えるかと信じていた。

この時、龍姫達はオレンジハートが近くにいることに知る由もなかった。

天王星の危機

龍姫達はオレンジハートつと言う女神に会ったことをみんなに話していた。

すると、

「龍姫さん!! 龍音さん!! わたしです!! ツクヨミです!!」

「ツクヨミ様、どうなされたんですか?」

ツクヨミが龍姫と龍音に念話をしてきたのだ。

「実はある世界のゲームギョウ界が破壊されたとわたしの部下から報告があったので龍姫さん達に知らせに来たんです!!」

「まさか!! プルルート達の世界のゲームギョウ界ですか!!」

「いいえ!! 違います、プルルートさんの世界ではなく、天王星うずめさんが女神をしている世界のゲームギョウ界です!!」

「それじゃあ、うずめはもう死んじゃったんですか?」

なんと!! 別の次元のゲームギョウ界が破壊されたとツクヨミから告げられたが、プルルートの世界のゲームギョウ界でなく、天王寺うずめという少女が女神になっている世界のゲームギョウ界が何者かに破壊されたとツクヨミは龍姫と龍音に教えた。

続けて、

「天王星^{てんのうぼし}うずめさんはオレンジハートに変身できるんです。なので何とかわたしの力でうずめさんだけは助けられたんですが、負傷なさっています!! 見つけ次第プラネテューヌ教会の方で保護を頼もうとお連絡させていただいた次第で」

「実はその子にさつき会ったんです。怪我をしていたので、治療術で治してあげたら、慌ててどっかに飛んで行ってしまったんです。ごめんなさい」

「そうでしたか、早くしないとうずめさんが死んでしまうんです。これをお渡しします」

ツクヨミはうずめが女神オレンジハートに変身できると教え、龍姫はさつきうずめに会ったことを話した。

ツクヨミは龍姫に橙色の女神メモリーを渡したのだ

「この女神メモリーはなんですか？死んじゃうって!!まさか!!」

「はいそうです!!うずめさんは今、龍姫さん達とは違い、国民のシェアを使って変身していたんです。ですが今うずめさんは自分の生まれたゲームギョウ界が破壊されたことによりシェアの恩恵を受けられない状況なんです。なので、その覚醒メモリーをうずめさんに使って龍姫さんと同じ状態にしてほしいんです」

「わかりました!!うずめの変身前の特徴はわかりますか?」

「うずめさんは変身前は自分のことを「俺」と呼んでいます。あと髪が長く赤っぽい色の髪に髪を後ろで二つに結っています。どこかの学校のカッターシャツとインナーとオレンジ色のネクタイと灰色のミニスカートを身につけていて両手にグローブをはめています。頭にヘアピンを着けています」

「ありがとうございます!!ツクヨミ様!!」

「いいえ別に大したことはしてません!!では失礼します」

うずめに危機が迫っていること、うずめの変身前の特徴を教えツクヨミは通信を切った。

「ハアハア・・・どうすつかない!!このままだと俺やばいな、さっきのねぷっちに教会につれててもらってたらよかったか」

プラネテューヌの町はずれで一人の少女が今にも力尽きそうであった。

天王星との再会

ツクヨミからうずめを助けて欲しいと覚醒メモリーを渡された龍姫は考えていたら、

「龍姫さん!! 大変です!! バーチャルフォレストで上位危険種「フェンリスヴォルフ」が暴走していると報告がありました。お休み中で失礼ですがお願いできますか?」

「別に構わないよ!! みんな行くよ!!」

(三人)「うん!! わかった」

「それと、赤髪の女の子が戦っているとの情報が入って来てます。発見次第、保護をお願いします」

「わかったよ、行ってくるね!! (まさか!! うずめじゃないよね!!)」

バーチャルフォレストでフェンリスヴォルフが暴走していると教会に討伐依頼が来たのだ。

おまけに赤い髪の女の子が戦っているとの情報も入って来ていたのだ。すぐに龍姫達はバーチャルフォレストに向かった。

「ガウルル〜!!」

「くそーこんな時にやるしかないか」

その少女は戦闘をしていたようで手に拡声器を持っていた。どうやらそれが得物らしく

「ワアー!! これで大人しくなったら」

「グルルル〜!!」

「って効いてないのかよ!!」

思いっ切り拡声器をフェンリスヴォルフに向け大声で叫んだが全く効いていなかったのだ。

「このあたりだったよね?・・・あっちだ!!」

「あ!! 龍姫お姉ちゃん!! あそこに誰がいるよ!!」

「ホントだ!! なんで拡声器? さっきの声って拡声器で叫んだ声だったんだ!!」

龍姫達も現場のバーチャルフォレストに着いていたのだ。どうや

ら拡声器の音が聞こえてきたので、聞こえてきた方へ向かった。

「仕方ねえ!!変身!!」

「ええええ!!あの子、ボクとネプテューヌが怪我を治してあげた子だったの!!」

「ほんにやーいくにやー!!」

「って!!ネプテューヌと真逆の女神だよ!!(。D。ノ)」

それもそのはずさっきの男勝りの性格からいきなり変身前のネプテューヌみたいな言動になったのだ。

「ガウー!!」

「あ!!武器が!!...って!!女神化が解けちゃった!!」

フェンリスヴォルフに攻撃を仕掛けたのだが武器を破壊されてしまったのだ。

おまけに女神化も解除されてしまったのだ!!

「ガルル!!」

「俺はここで終わるのか...ねぷちちごめんm()m」

「させないよ!! 魔神剣!!」

「ええ!!」

「大丈夫!!」

「ああ、ありがとう!!」

フェンリスヴォルフは女神化が解けたことをいいことに止めを刺そうとした瞬間ネプテューヌがフェンリスヴォルフに向かって魔神剣を放ち、攻撃を防いだのだ。

「下がって!!変身!!」

「いや!!俺も戦う!!変身!!」

「ねぷちち」

「ネプテューヌ!!助太刀するよ!!セットアップ!!」

「ボクも、セットアップ!!」

「わたしも変身!!」

龍姫達も合流し、一斉に女神化を行ったのである。

天王星、保護される

龍姫達はバーチャルフォレストでフェンリスヴォルフと遭遇し女神化をして体制を整え、攻撃を仕掛けた。

「そこだ!! 魔神剣!!」

「喰らえ!! 屠龍連撃破!!」

「氷結せし刃、鋭く空を駆け抜ける!! フリーズランサー!!」

「崩龍斬光剣!!」

龍姫は魔神剣を放ち、ネプテューヌは斬撃と突きで連続で攻撃する
奥義を

ネプギアは魔法で氷の槍を飛ばし、龍音は乙に切り刻む奥義で攻撃していった。

「ガルルー」

「キヤー!!」

「させない!! 魔神炎!!」

フェンリスヴォルフはオレンジハートに攻撃を仕掛けたのだ。ネプテューヌが炎の斬撃飛ばし防いだ。

「ここはわたしがやるよ!!」

「わかった!! 龍音、任せたよ!!」

「ググルル!!」

「いい気になるな!!」

龍音が自分に任せてと言い、フェンリスヴォルフが攻撃を仕掛けて来たが、龍音がオーババリミッツを発動させ、ぶっ飛ばした。

「がる!」

「遅い!! 幻影刃!!」

攻撃を躲し、切り抜け、

「双連衝破!!」

大小の二刀で斬り刻み、

「崩龍斬光剣!!」

乙のように斬り抜け、奥の手の
浄破滅焼闇!! 闇の炎に抱かれて消え

ろ!!」

大小の二刀に闇の炎を纏わせ、斬り捨てる秘奥義で止めを刺し、捨て台詞まで言っていた。

「こんなもんだな!!」

おまけに決め台詞を言っていた。

「そうだ!! 大丈夫?」

「あれ? いつの間に女神化が解けてんだ!! …… って!! おまえらも女神だったのかよ!!」

「ごめん!! あの時、言えなくて、そうだ一緒に教会に来てくれるかな?」

「そうだな!! 此処にいても始まらねえし、な!! そうだ、俺の名前はてんのうぼし天王星うずめ」だ!! よろしく!!」

「ボクは鳴流神龍姫」

「わたしは妹のネプテューヌ!!」

「同じく、妹のネプギアと言います!!」

「龍音です!!」

龍姫達はうずめに簡単に自己紹介をし教会に戻るのであった。

「いーすん!! ただいま」

「お帰りなさいませ、あれ、そちらの方は?」

「今日から此処にやっかいになる、てんのうぼし天王星うずめだ!! またの名はオレンジハートだ」

「オレンジハートって言うことは女神ですか?」

「そうだ!!」

教会に帰ってきた龍姫達はイストワールにフェンリスヴオルフ退治の報告とうずめの保護を報告して、奥の部屋に入って行った。

「そうだ!! さつき……」

「うずめ!!」

「体が……どうやら、限界が……」

「しゃべらないで!!」

「お姉ちゃん!! それって」

うずめが何か聞こうとした瞬間、うずめの体が傾いたのだ。龍姫が

受け止め、ポケットからあるものを出したのだ。

「そうだよ!! ツクヨミ様がうずめを助けられて渡された「覚醒メモリー」だよ!!」

「それを使えばうずめは助かるの?」

「そうだよ!! 行くよ!! うずめ!!」

龍姫はうずめにツクヨミからもらった覚醒メモリーをうずめの手
に握らせた。

すると橙色の光がうずめを包み込み、しばらくして光が収まると

「うくん、あれ、苦しくない!!」

「うずめく!!」

何とかうずめを助けた龍姫であった。ネプテューヌは思わずうず
めに抱きついた。

覚醒メモリーについて

龍姫はうずめを教会で保護することにした。ちょうど、お昼の時間になっていたので、

「うずめ、何か食べたいものある？」

「いいのか？じゃあ・・・焼き飯!!」

龍姫はうずめに食べたいものを聞いたら、焼き飯と答えたので作ることにした。

「ねぷつち!!聞きたいことがあるんだが、いいか？」

「別にいいけど何？」

「自己紹介の時、自分が龍姫の「妹」って言ってたが？」

「なんだ、そのこと、いーすんがお姉ちゃんか女神になった時にわたし達のお姉ちゃんになってくれて言っただよ!!」

「それだと、ここの最高責任者って龍姫になるのか？」

「違うよ、ここの女神はわたしのままでよ!!」

龍姫が昼食を作っている間、うずめはネプテューヌが自己紹介の時、龍姫の妹であると言ったことについて聞いたのだ。

ネプテューヌはその理由を話した。

「焼き飯できたよ!!」

「食べよ、うずめ!!」

「そうだな!!いただきます!!」

ネプテューヌとうずめが話している間に焼き飯が出来たのでお昼にすることにしたのである。

「ふうふう良かったな、龍姫の料理」

「こんなの簡単に出来るよ!!」

「そうなのか？じゃあ!!今度、俺に教えてくれないか？」

「別にいいよ、うずめでも簡単な料理から教えてあげる」

「龍姫、ありがとうな!!」

うずめは龍姫に料理を教えて欲しいと言ってきたので、龍姫は承諾したのであった。

「うずめって、武器どうするの？」

「あ!!そっか!!あいつに壊されたんだっけ!!拡声器」

「剣とか使えるの?」

龍姫はうずめに武器をどうするか聞いたのだ。

「こんにちは!!みなさん」

「あれツクヨミ様どうしたんですか?」

「今日はうずめさんに話がありました」

「わかっている、アンタが俺をこの世界に飛ばしたんだろう!!そして、わたしの居た世界はもうないってことだろう?」

「はい、うずめさんが仰られた通りです!!ですが今日は違う用件で来ました」

ツクヨミがやってきたのである。うずめに真実を話し、別件で来たと言った。

「で、俺に用ってなんだ?」

「それは、龍姫さんに渡した「覚醒メモリー」について説明をしに来ました。」

「あれって、確かうずめをここの環境に合わせるためのものじゃないんですか?」

「それもありますけど、龍姫さんと同じ能力を使えるようにするためにネプテューヌさん達と同様に覚醒させるものです。ですが、まだ覚醒させるための経験値がありません」

「つまり、俺も龍姫達同様に剣術とかできるようになるのか!!」

「はい、そうです!!後の詳しい説明は龍姫さんか龍音さんに聞いてください。ではこれで」

ツクヨミは龍姫に渡していた覚醒メモリーに龍姫と同じ力をうずめに使えるようにしていたのだ

天王星、料理と術技

ツクヨミが天界に帰っていき、

「俺にも龍姫やねぷちみたいなのが出来るんだな、これからどうすんだ?」

「もう、今日はお仕事ないよ」

「あのさ、龍姫達にお願いがあるんだが、俺に戦闘術を教えてくださいませんか」

「別に構わないよ!!」

うずめが龍姫達に戦闘術を教えてくださいたくないかと頼んだ。もちろん龍姫達は承諾し、一行は準備をしいつもの特訓している場所まで行くのであった。

「着いたよ!!はい、うずめはこの竹刀使って」

「そうだな、特訓でいきなり真剣はまずいからな!!っでどんなことするんだ?」

「まずは「魔神剣」を教えるね!!」

「こうか?・・・魔神剣!!」

「うずめさん、もう魔神剣出来るようになったんですか!!」

到着して龍姫はうずめに竹刀を渡したのだ。

うずめは「魔神剣」を修得した。

「お!これ俺に出来るのか!!・・・虎牙破斬!!」

「うずめってネプテューヌと一緒に飲み込み早いね!!」

「そうかもな!!いつもは拡声器で戦ってたからな!!刀も悪くないな!!」

うずめの術技修得速度の速さに感心しつつ、教会に帰るのであった。

「さてと、うずめ、準備できてるよ!!」

「今日は何作るんだ?」

「今日はマーボーカレーを作るよ!!」

「マーボーカレーってなんだ?」

「麻婆とカレーライスを合わせた料理だよ!!」

今日の夕飯は龍姫がうずめと一緒にマーボーカレーを作ることにした。思わず、うずめはマーボーカレーは何か龍姫に聞いていた。

「こんなもんだな!!」

「初めて教えてたけど上出来だよ!!」

「できたぜ!!ねぷっち!!」

「オオー!!今日はマーボーカレーだ!!いただきます!!」

出来たマーボーカレーをテーブルに並べみんなと一緒においしく召し上がったのであった。

翌日、

「うずめ行くよ!!蒼破刃!!」

「きかねえ、なつと!! こっちも行くぜ!!蒼破刃!!」

朝の特訓をしていたのであった。

「お!!これ行けるか!!獅子戦吼!!」

「ほう、やるじゃない!!今日はここまでにして教会に帰るよ!!」

特訓を切り上げ教会に帰るのであった。

「今日のお味噌汁おいしかった!!」

今日の朝食は和食の様であった。

「さてと、今日からうずめもお仕事手伝ってくれるしね!!」

「まあな、何もしないのも性に合わないんでな、今日はなにするんだ?」

「確か、今日は魔物退治だったよね。場所はレツゴウアイランドで「リザードキング」の討伐だったよね」

「昨日、いーすんが言ってくれたから、間違いないよ!!」

今日は魔物退治が教会に寄せられてらしく、レツゴウアイランドで「リザードキング」の討伐であった。

うずめ、秘奥義を覚えるの段

龍姫達はレツゴウアイランドに、ギガントモンスター巨大魔物の「リザードキング」の討伐依頼教会に寄せられていたので、そのクエストに来ていたのであった。

「ここがレツゴウアイランドか」

「そっか、うずめは初めてだっけ」

「あ!!腕が鳴るぜ!!」

「気合い十分だね!!」

としばらく雑談をしながら探索していくと、

「いた!!あいつだな!!」

「みんな!!構えて!!」

リザードキングを発見したので、それぞれに武器を構えた。

「ギギャー!!」

それに気づいたのかりザードキングは得物である戦斧で斬りかかってきたが

「遅い!! 衝破魔神拳!!」

「こつちも行くよ!! 32式エクスブレイド!!」

「轟雷刃!!」

「裂空刃!!」

「大地の躍動 その身を贄にして敵を砕かん!! グランドダッシャー!!」

、
躲し、うずめは地面を叩き付け衝撃波を出し

、
ネプテューヌは自身の技で剣を降らせ、

ネプギアは刀身に雷を纏わせ切り裂き、

龍姫は鎌鼬を発生させ、

龍音は魔術で地面から大量の岩の槍で攻撃を仕掛けた。

「ギャオー!!」

「まだ動くのかよ!!」

「行くよ!!ネプテューヌ!!見切った!!」

「必殺!!」

「龍虎!!滅牙斬!!」

龍姫とネプテューヌは共鳴技「龍虎滅牙斬」を繰り出したがりザードキングは龍姫達の攻撃を受けてもまだ倒れていなかった。

「ギャオオー!!」

「カキーン!! しまった!! 俺の刀が!!」

「うずめ!! これ受け取って!!」

「サンキュー!!」ってこれ龍姫の刀じゃねか!!仕方ねえ、変身!!」

リザードキングは戦斧で地面を叩き衝撃波を発生した。その衝撃波でうずめが持っていた刀が折れてしまったのだ。それに気づいた龍姫は自身の得物の「鬼丸国綱」と名付けた刀を鞘ごとうずめに向かって投げ、それをうずめがキャッチし、女神化をして戦闘の体制を整えた。

「ほんにやー!!飛ばして行くニャー!!」

「うずめさん!!もう、オーバリーリミッツを修得しちゃたんですか!!」

うずめは土壇場で戦闘術「オーバリーリミッツ」を修得し、発動させたのだ。それを見たネプギアは驚きを隠せないでいた。

「ギャーオー!!」

「遅いにや!!飛燕連脚!!」

回転蹴りを食らわし

「続いてく秋沙雨!!」

連続で突き最後に斬り上げ

「猛虎く連撃く破く!!」

斬り上げ、斬り下ろしを繰り返す奥義を放ち

「龍姫直伝く!! 焼き尽くすく 天狼く滅牙・飛炎く!!」

龍姫がよく好んで使う火属性バーストアーツを繰り出し、

「終わらせてくやるく!!閃く刃は勝利の証!! 白夜殲滅剣く!!」

どっから兎も角、満月を出現させ、月の光で刀身を光らせ、滅多切りした後、納刀したと同時に満月が砕け散る秘奥義を発動させた。

うずめの秘奥義をまともに喰らったりザードキングは光の粒子になって消えていった。

「こんなもんだ!!」

「クエストも完了したし帰ろ!!」

うずめは決め台詞を言い、教会に帰るのであった。

龍姫の術技の属性

龍姫達はギルドからの依頼を完了したので報告して、教会に帰って来ているのであった。

「ただいまーいーすん!!」

「みなさん、お疲れさまです。今日の午後からは自由になさって結構です」

「わかったよ、いーすん!! ちょうどお昼の時間だし、お昼ご飯にしようか!!」

ちょうどお昼の時間だったので、龍姫達は昼食を取ることにしたのだ。

「ミートソーススパゲティできたよ!!」

「いただきます!!」

「おいしい!!」

「うまいぜ!!」

どうやらメニューは「ミートソーススパゲティ」にしたのであった。

「龍姫、刀返す」

「それはもう、うずめの刀だよ」

「良いのか? もらっても?」

「良いよ!! ちゃんと手入れをしてね」

「もちろん、ちゃんと手入れをするさ」

うずめはあの時、受け取った、妖刀「鬼丸国綱」を龍姫に返そうとしたが、龍姫は受け取って欲しいと言い、うずめは承諾した。

「そうだ!! 龍音もこの刀渡すね!!」

「いいの!! ありがとうお姉ちゃん!! けどお姉ちゃんの武器が小太刀二本しかないよ?」

「そのことなら大丈夫!! 実はこの前、新しい刀を打ったんだ!!」

「その刀の名前はもう付けてるの?」

「もう、つけてあるよその刀は「長曾禰虎徹」と「天羽々斬」と「三池典太」って言う名前にしたんだ」

「さすが!!お姉ちゃん!!アイちゃんよりネーミングセンスいいもんね!!」

「何よ!!それわたしがネーミングセンスが壊滅的ってことじゃない!!」

龍姫はもう一振りの「童子切安綱」を龍音に譲り、時間が開いていた時に企画書で「長曾禰虎徹」・「天羽々斬」・「三池典太」と名付けた刀を作成していた。

「この「天羽々斬」と「三池典太」をボクの新しい得物にして、ネプテューヌは「長曾禰虎徹」をあげるね!!」

「ありがとう!!お姉ちゃん!!」

龍姫は三本の内「天羽々斬」・「三池典太」を自分の得物にし、ネプテューヌに「長曾禰虎徹」を渡した。

「お姉ちゃんと龍音が使っている術技の属性って雷・氷・風・火の四属性以外使ってなかった?」

「言うの忘れてたけど、ボクが使ってる術技の属性はゲームギョウ界にある、無・火・風以外は水・地・光・闇なんだ!!雷は火・風で、氷は水・風の混合属性になるんだよ!!」

「ってことは、雷属性と氷属性は火・風・水を一辺に使ってるんだ!!」

「この前も言ったけど、地・水・火・風・光・闇・無の七属性しか使えないんだ!!」

「なるほど、だから見たことのねえ技が出来るんだな!!」

「そういうことになるね!!」

ネプテューヌは龍姫と龍音に使っている術技の属性を聞いたら、龍姫は地・水・火・風・光・闇・無の七属性を扱えると答えてのであった。

うずめは龍姫の話を聞いて納得していたのであった。

うずめと鍋焼きうどん

龍姫はネプテューヌ達に自身の術技の属性について話し終わった。
スキット：うずめの秘奥義

ネプ「うずめも秘奥義修得したんだね!! 満月が出てきてかつこよ
かったよ!! まるで侍だったよ!!」

うずめ「なに言ってるんだよ!! 聞いたぜ龍姫、「漸毅狼影陣」ぜんごろうえいじんという
カツコイイ秘奥義が出来るらしいな!! 確か「閃け!! 鮮烈なる刃!! 無辺
の闇を鋭く切り裂き!! 仇なす者を微塵に砕く!! 決まった!!
漸毅狼影陣!!」ぜんごろうえいじん って言いながら決めるってねぷちちに聞いたんだが」
龍姫「そうだよ!! あの秘奥義は一番しつくり来る技だから!! 一応、
「緋凰絶炎衝」と「光竜滅牙槍」が出来るよ!! あと二刀流でも秘奥義修
得済みだよ」

うずめ「そうなのか!!」

「もう、こんな時間だよ!! うずめも晩御飯作るの手伝って!!」
「わかった!!」

どうやら、雑談をしていたら、晩御飯の時間だったので、龍姫達は
夕飯の準備に取り掛かるのであった。

「今日は「鍋焼きうどん」でいいかな?」

「別に構わないよ!! かまぼこ切るね!!」

「俺は土鍋に水入れてネギ切って」

「その間にお米を炊いとくよ!!」

今晚のメニューは鍋焼きうどんにしたのであった。

「アイちゃん!! コンパ!! ご飯できたよ!!」

「いただきますです!!」

「おいしいわ!! 今日は誰が作ったの?」

「今日はみんなと一緒に作ってみたんだ!!」

「みんな!! ひどいです!! わたしも一緒に作りたかったです!!」

「どうやら、鍋焼きうどんは好評だった。」

「いい湯だぜ!!」

「うずめ!! 一緒にお風呂入ろう!!」

「わたしも一緒ですけど？大丈夫ですか？」

「俺は構わないぜ!!」

夕食を終えたうずめがお風呂に入っていたら、ネプテューヌ・ネプギアが乱入してきたがうずめは構わないと答えた。

「オー!! (^◇^) うずめって結構胸大きいんだね!!」

「なに触ってたんだ!! ねぷちち達の方がでかいだろう!!」

「よかったね!! うずめ、ブラン達が覚醒してる時にこっち来て」

「なんでだ?」

「ブランさん覚醒するまで、自分の体型にコンプレックスを持っていたんです」

「そうなのか、って俺も覚醒したらこの胸が大きくなるのかよ!!」

「そうだよ!! わたし達も覚醒したから身長と胸が大きくなったんだ!!」

うずめがブランが覚醒した後に来たのと、覚醒すると身長と胸が大きくなることを聞かされたうずめであった。

「龍姫・ねぷちち!! お休み!!」

「お休み!! うずめ!!」

龍姫達は就寝するのであった。もちろんうずめはたまたま空いていた部屋を借りて寝ることにしたのだ。

うずめ、ラスティションに行く

うずめがこの次元に来てから三日が経とうとしていた。

龍姫達はいつものように

「行くぜ!!崩襲脚からの襲爪雷斬!!」

「甘いわよ!!うずめ!!カオスエツジ!!からの三散華・追蓮!!」

「ボクも行くよ!!散沙雨からの虎牙連斬!!」

「なんのこれしき!!守護方陣!!」

術技の特訓をアイエフと一緒に行っていたのであった。

スキット：うずめの上達ぶり

ネプ「うずめがここに来てもう三日も経つんだね!!」

龍姫「ネプテューヌ達と一緒に飲み込みが早くて教え甲斐があるよ!!」

うずめ「そうだな、こつちに来てからいろいろな技を修得したしな

これも龍姫達のおかげだぜ!!」

ギア「これからもお願いします!!」

うずめ「こちらからも頼むぜ!!」

「今日はベーコンと目玉焼きとお豆腐の味噌汁だよ!!」

「いただきます!!」

「龍姫が作る料理は何でもおいしいわ!!」

「よかった、喜んでくれて」

今日の朝食はベーコンと目玉焼きとお豆腐の味噌汁にしたようだ。

「さてと、執務室行くよ!!今日も書類を早く片付けよう!!」

「おうー!」

龍姫達は朝食を食べ終え食器を片付けて執務室に向かって行った。

ところ変わってプルルートの世界のゲームギョウ界は

「ネプちゃん達今頃なにしてるんだらう〜」

「プルルートさん!!お仕事してください!!」

「どうやら、プルルートはネプテューヌ達のことばかりで仕事をサボっていた。

「ねぷっち!!書類、出来たぞ!!チェック頼む!!」

「はいよ!!・・・OKだよ!!」

「この書類で最後だよ!!ネプ姉!!」

「みなさん、ご苦勞様でした!!明日から三日間の休暇を差し上げます!!うずめさんも体を休めてください!!」

「わかった!!」

こっちのゲームギョウ界は順調に仕事が終わったので今日半日と三日間の休暇が出来たらしく、

「そうだ!!うずめ!!わたしの友達に紹介したいんだけどいい?」

「アイとコンパ以外って誰だ?」

「そうだね!!ボクもうずめに会わせたい友達がいるから!!」

「今から行っても大丈夫だよね!!」

「じゃあ!!まずはラスティションに行こう!!」

うずめをノワールが統治しているラスティションに向かうため、

「いーすん!!行ってくるね!!」

「アイ!!コンパ!!女神になったからって無茶しないでね!!」

「じゃあ!!行ってくるぜ!!変身!!」

プラネタワーの屋外展望台から女神して飛んで行くのであった。

スキット：ノワール

うずめ「ねぷっち!!ノワールって誰?」

ネプ「そうだったわね!!うずめはノワールに会うのは初めてだったわね!!」

龍姫「ノワールはネプテューヌのことが好きなんだけど、素直になれない娘なんだよ」

うずめ「わかった〜ノワールはツンデレさんだね!!」

ギア「否定できないな!!」

「着いたわよ!!此処がラスティション教会よ!!」

そんなこんなで龍姫達はラスティション教会に到着したのであった。

天王星、黒の大地に舞い降りる

龍姫達はうずめを連れてノワールが統治しているラスティションに来ているのであった。

「ノワール!!生きてる?」

「ネプテユーン!!勝手に殺すな!!もう!!あなたって子は!!」

「なあ?龍姫、ねぶつちとノワールっていつもこうなのか?」

「うん、ボクがこの世界のゲームギョウ界に来る前からこうなんだよ

☒ (・ω・)」

ネプテユーンとノワールはいつものようにバカップルみたいなことを始め出し、それを見ていたうずめは龍姫にいつものことか聞いていた。

龍姫は自分がゲームギョウ界に来る前からと答えた。

「もう!!ノワールたらせつかく新しい友達を紹介しようと思ってたのにく」

「新しい友達ってだれよ!!?」

ネプテユーンはノワールにうずめを紹介しようとした。ノワールは誰と言っていた。

「うずめ!!こつち来て!!」

「うずめってだれよ!!」

「俺がさつき紹介にあったてんのうぼし「天王星うずめ」だ!!よろしく頼むぜ、ノワール!!」

「あなたがうずめ、始めまして此処ラスティションの女神ブラックハートこと獅子神ノワールよ!!よろしくうずめ!!」

うずめはノワールに簡単に自己紹介をし、龍姫達はリビングに案内されるのであった。

「龍姫ちゃん!!久しぶり!!元気にしてた?あれそちらは?」

「まず、人に名前を聞くときはまず自分から名乗ると思うが?」

「ああ!!ごめんごめんボクは龍姫ちゃんの幼馴染みでノワールのお姉ちゃんの「獅子神星龍」だよ!!」

「俺は龍姫達のダチでてんのうぼし「天王星うずめ」だ!!よろしくな!!星龍!!」

リビングに連れて来られた龍姫達はうずめに星龍を紹介した。うずめも簡単に自己紹介した。

「ねえ、星龍達ってまだ仕事だった？」

「今は休憩してたところだよ!!じゃあまた後で!!」

「こっちはプラネテューヌと違って大変そうだな」

「まあ、ノワールは友好条約結んだ今でもあんな調子なんだよ!!」

「友好条約ってなんだ？」

星龍は仕事に戻り、うずめはネプテューヌに友好条約は何かと聞いた。

「あ!!そっか、うずめは知らなかったね、友好条約はお互い武力行使でシェアを奪い合いしないって言う条約だよ!!」

「そうなのか、けどよ、たまには休んだ方がいいんじゃないやね？」

「それが、ノワールは一度スイッチが入っちゃうと周りが見えなくなるからね、星龍が来るまでは人に頼ることもしなかったからね」

「そうなのか」

うずめは友好条約の事をネプテューヌに説明してもらい、ノワールの性格についても教えてもらっていた。

うずめ、食堂に行くの段

龍姫達はラステイション教会のリビングでうずめに友好条約とノワールの性格について教えていた。

しばらくリビングのソファアークでくつろいでいたら、

「今日の仕事は終わったわよ!!」

「ご苦労様!!俺は「天王星^{てんのうぼし}うずめ」って言うんだ!!」

「初めまして、アタシは星龍とノワールの妹の天龍の姉で「獅子神ユニ」です!!」

「同じく妹の「獅子神天龍」です!!ここラステイションの女神候補生です」

ノワール達は仕事が片付いたよううずめはユニと天龍に簡単に自己紹介した。

「ねぶつち!!「女神候補生」ってなんだ?」

「うずめは知らなかったね、「女神候補生」は女神の妹のことを言ってそれと次の女神になる子を指すんだよ」

「へえくそうなのか、つまりネプギアと龍音がそれにあたるのか」

「そうだよ!!」

うずめはネプテューヌに女神候補生とは何か聞いていた。ネプテューヌは簡単に説明した。

「今日はなにしに来たのかしら?」

「何ってうずめに星龍達を会わせてあげたかったから」

「そうなんですか!!」

ノワールは龍姫達が遊びに来た理由を聞いた。龍姫はうずめに星龍達に会わせてあげたかったと答えた。

「そうだ!!うずめ、お昼食へに行こう!!行きつけの食堂があるんだ!!」

「たまには外で食うのもいいかもな!!」

「待って!!ボクも行く」

龍姫達はうずめをラステイションの行きつけのあの食堂に連れて行くことにしたのだ。

「シアン!!元気にした?」

「此処がねぶつち行きつけの食堂か!!」

「今日は新顔がいるのか?わたしはこの隣で工場しているシアンだ!!」

「俺は「天王星てんのうぼしうずめ」だ!!ねぶつちの所でやっかいになっている。よろしくなシアン!!」

「早く、食べよう!!」

龍姫達はうずめをシアンの母が営んでる食堂に連れて来たのだ。うずめはシアンに簡単に自己紹介した。

「この定食うまいな!!」

「そうか、気に入ってくれて何よりだ」

「シアン、あれからアヴニールどうしてる?」

「そのことならおまえらがアヴニールが作ったキラーマシンなどの兵器を破壊したのこの前のキセイジョ・レイだったかそいつを捕まえてくれたおかげでアヴニールは解体し社長のサンジユは辞任して今、此処の工場で働いてもらっている。まあ事故が原因で人間不信になっちまったからな。だけど秘書のガナツシユは依然逃亡中らしい」
「なあ、アヴニールってなんだ?それと、キセイジョ・レイって誰だ?」
「そういや、うずめは知らなかったね、アヴニールとキセイジョ・レイってのは・・・なんだよ!!」

「そうだったかよ!!」

食堂で昼食を食べながらシアンにアヴニールのこと聞いていた。うずめはアヴニールとキセイジョ・レイを知らなかったので龍姫が簡単に説明していた。

スライヌ大量発生

「ごちそうさまでした!!」

「いつでも来いよ!!」

龍姫達はシアンの実家の食堂で昼食を摂り教会に帰っていた。

「そうだ!!うずめ、あなたラステイションは初めてだったわよね!!」

「そうだが?」

「じゃあボクたちが案内してあげる!!」

「サンキュー!!」

うずめは星龍達にラステイションを案内してもらうことにしたのだ。もちろん龍姫達も一緒に。

「こんな、工場みたいな町にもどかな村があるんだな」

「工場みたいとは余計よ!!」

「ボクも初めて来た時も建物ばかりの町って印象だったな」

「お姉ちゃんもヒドイ!! (; | :)」

「もう、ノワール泣かないの!!よしよし (´ω´)ノ」

「泣いてないし!!子供じゃないわよ!!ネプテユヌ!!」

うずめはラステイションの近郊にのどかな村がある場所に案内されていたが、自分が思ったこと言い、それに便乗して星龍は初めて来たこと感想を言い、ノワールは星龍にヒドイと言い、ネプテユヌはノワールを茶化しながらノワールをあやし出し、ノワールはネプテユヌといつものようにバカップルみたいなきことをし始めた。

「ヌラー!!」

「あれってスライヌの群れだよ!!」

「ノワール!!ちゃんとやってるの!!」

「ごちやごちや言ってる暇はねえ!!行くぞ!!ねぷつち!!」

どうやら防犯システムが故障していたのかはたまたシステムが反応出来ないほど繁殖したのかスライヌの群れが村の近郊に住み着いていた。

仕方なく、龍姫は「天羽々斬」と言う刀を、ネプテユヌは「長曾禰虎徹」だけ抜刀し、全員それぞれ構え、

「魔神剣!!」

「蒼破刃!!」

「霸道滅封!!」

「魔神連牙斬!!」

「ピコハン!!」

「一気に片付けるよ!! 来たれ爆炎!! 焼き尽くせ!! バーンストライク!!」

龍姫はいつものように斬撃を飛ばし、ネプテューヌは蒼破刃を、ネプギアはマルチビームブラスタの如く灼熱の極太レーザを刀から気合いで放ち、ノワールは斬撃を六連発放ち、うずめはなぜかピコハンを投げつけ、星龍は中級魔術「バーンストライク」を唱え、火炎弾を降らせた。

「ヌラ☒」

「片付いたな!!」

何とかスライヌを片付けたのであった龍姫達であった。

「教会に帰って休憩しようぜ!!」

「賛成!!」

一行は教会に帰るのであった。

「ノワール!! 何か飲み物〜プリ〜ズ!!」

「なんでわたしなの!!」

どうやら、ネプテューヌはのどが渴いたので飲み物をノワールにせがむのであった。

「なんでスライヌがあんなところに群れてたんだ?」

「さっき防犯システム見てきたけど問題なかったよ!!」

「そうなの?」

「うん、正常に機能してるしから」

「たぶん、あれだろう、大量発生した所為で防犯システムが処理しきれなかったんじゃない?」

「それで防犯システムが誤作動を起こしたんだね!!」

さっきのスライヌの群れが発生したことに疑問を抱く龍姫達であったがどうやらスライヌが大量発生した所為で防犯システムが誤

作動を起こしたらしいのであった。

天津飯を作る

龍姫達は夕飯の時間まで時間があるので、

「星龍、今日の夕飯の食材って買ってあるの?」

「そういや、今日買いに行くんだった!!」

「俺と一緒にやってやるよ!!町を見て回るついでだ!!」

「ありがとう!!うずめちゃん!!」

「そういう事だからちよつくら行ってくる!!」

「気を付けてね!!」

龍姫は今日の夕飯の食材があるかどうかを聞いたら、どうやら食材が残り少ないことに星龍は今思い出したので、買いに行こうとしたらうずめと一緒に行ってやると言い、近くのスーパーに買いに行った。

スキット：うずめのこと

ノワ「ねえ、ネプテューヌ、うずめのこと聞いていいかしら?」

ネプ「別にいいけど、なんで?」

ノワ「気になるじゃない!!いきなりあなたがわたしの知らない娘を連れて遊びに来るから」

ネプ「もしかして!!ノワールってわたしのことが好きなの!!」

ノワ「そうなるのよ!!いいから教えなさい!!」

ネプ「たまたま緊急クエストでプラネテューヌの森に行ったら、一人でフェンリスヴォルフと戦ってたからお姉ちゃん達と一緒に助太刀して倒して、どこか行く宛があるか聞いたら、ないって言うから、プラネテューヌ教会で保護って形で一緒に暮らしてるんだよ!!」

ノワ「わかったわ!!ありがとうネプテューヌ!!」

ネプ「どういたしまして!!」

スキット：ピコハン

ネプ「まさかうずめがピコハンを覚えるなんて!!コンパが覚えてるのは知ってるけど」

ユニ「あんな攻撃があるなんて知りませんでしたよ!!」

龍姫「あれでも一定の確率で敵をピヨらせるから」

ギア「そうなんだ!!一応、わたしも覚えているけど」

天龍「あれの技は「ピコピコハンマー」・「コチハン」・「ポイハン」・「ピコレイン」・「コチコチハンマー」・「ミラクルハンマー」の派生技があるんですよ!!」

ネプ「結構あるんだね!! そういやわたしも使えるけど、ブランは使えるのかな?」

龍姫「そうだよね、今は普通に斧使ってるけどゲームギョウ界でハンマーって言えばブランだもんね」

「お待たせ!!」

「買ってきたぜ!!」

「ごめんね、うずめせっかく遊び来てくれた上に買い物につきあわせて」

「別に気にするなって!! ダチなんだから遠慮なしだ!!」

「そうだね!! ちょうど夕飯の支度の時間だね!! じゃあ!! みんなは待っててね」

「わかった!!」

買い物に行っていた星龍とうずめが帰ってきたので星龍は冷蔵庫に買ってきた食材をしまい、夕食の支度に取り掛かった。

「今日は「天津飯」だよ!!」

「ワイイ!! (≧▽≦) 天津飯だ!! いただきます!!」

「うまいぜ!!」

「よかった!! うまくできてるか心配だったんだよ!!」

今日の夕飯は「天津飯」であった。

黒とうずめ

夕飯を食べ終えたので龍姫達はお風呂が沸くまで

「ねえ!!明日はどうするの?」

「一応、明日から三日間の休暇になってるから順番にルウイーとリンボックスに行くよってだけど」

「じゃあ!!わたし達も一緒に行くわ!!」

「仕事はいいのか?」

「それなら今日でひと段落したから」

「じゃあ!!明日は朝に特訓して朝ごはん食べてルウイーに行こう!!」

「賛成!!」

ノワールは龍姫に明日一緒にルウイーに行くと言ってきたのだ。

「お風呂沸いたよ!!お姉ちゃん!!」

「ありがとうユニ!!」

「ラストেশヨンのお泊まりのお約束の、ノワール!!一緒にお風呂入ろう!!うずめもどう?」

「いいのか?じゃあ!!お言葉に甘えて行こうぜねぷっち!!」

「どうして、こうなるのよ!!助けて!!お姉ちゃん!!」

「いいじゃない、ネプテューヌちゃんと夫婦みたいなんだから!!」

「わたしとネプテューヌは女よ!!」

風呂の湯が沸いたのでいつも様にネプテューヌとノワールは一緒にお風呂に入るのであった。今回はうずめも一緒である。星龍はノワールを茶化していた。

「へえノワールも結構胸デケーな!!」

「覚醒したからよ!!ってネプテューヌ!!いい加減にきなさい!!(; .

、ム・ン)」

「いいじゃん!!わたしとノワールの仲じゃない!!」

「仲いいんだな!!二人は」

結局二人は傍から見ると女同士の夫婦みたいなことをやっていた。それをうずめは見守っているのであった。

「お休み!!星龍・ノワール・ユニ・天龍!!」

「お休みなさい!!」

そんなこんなで明日に備えて就寝するのであった。

そして翌日、休暇一日目

「行くわようずめ!! 魔神剣からの蒼破追蓮!!」

「きかねえなつと!! こつちも行くぜ!! 光破刃からの魔神剣・双牙!!」

いつものように特訓をしているのである。

「ユニちゃん、試さしてもらうね!! 魔神剣!!」

「アタシだつて負けてないんだから!! 魔神剣!!」

「きようはこのぐらいして教会に帰るよ!!」

特訓を切り上げるのであった。

「やあ!!おはよう!!神宮寺ケイだ!!ここラスティション教会の教祖をしている、君がプラネテューヌ教会で保護されたという」

「天王星うずめだ!!よろしくな、ケイ!!」

ケイはうずめに簡単に自己紹介した。

「教祖つてなんだ?」

「教祖は女神の補佐をするのが仕事だよ!!」

「へえ〜そうなのか」

どうやらイストワールが教えてなかったらしくうずめは教祖を知らなかったので、龍姫が簡単に説明してあげたのである。

「今日は「フレンチトースト」と「玉子焼き」だよ!!」

「いただきます!!」

「おいしいわ!!」

今日の朝食はフレンチトーストと玉子焼きにしたようであった。

うずめ、白の大地に行くの段

朝食を食べ終えた龍姫達は少し休憩していたのであった。

スキット：武神双天波

ギア「龍姫お姉ちゃん!!お姉ちゃん!!あの時の秘奥義すごかったよ!!」

ネプ「あの時って?」

龍姫「キセイジヨ・レイをやった「武神双天波」だよ!!」

うずめ「どんな秘奥義なんだ?」

ノワ「二人同時に「守護方陣」を行って、捕らえてる相手に向かって二人で切り抜けるのよ、斬り抜けた後、上空に飛び上って、「魔神剣と蒼破刃」を同時に放つ秘奥義よ!!」

星龍「あの時はボクと龍姫ちゃん・ノワールとネプテューヌちゃん
の二組で出しちゃったけどね」

うずめ「なんかすげー秘奥義なんだな」

「それじゃあ、ルウイーに向けていきますか」

「うずめ、あなたはわたしがお姫様抱っこするわ」

「俺一応、これでも女神だからな、変身!!大丈夫!!自分で飛べるニヤー」

「キャラが違いすぎるわよ!!(。D。)ノ」

「本当にうずめさんなんですか!!(。D。)ノ」

「うん!!どう言うわけか女神化すると180度性格がネプテューヌと違う意味で変わっちゃうだよ(。ω。)」

ルウイーに向かうため教会のテラスにやってきた龍姫達は女神化をしたのが、うずめの変貌ぶりにノワール・ユニは驚きを隠せないでいた。そのことについて龍姫が簡単に説明していたのであった。

「気を取り直して、ルウイーに出発!!」

とりあえず一行はルウイーに飛んで行くのであった。

スキット：ブランについて

うずめ「ブランってどんな子なの?」

ネプ「普段は大人しいのだけど、一度キレると止まらないのよ」

うずめ「仲良く〜出来るかな〜」

龍姫「出来るよ!!」

「ルウィーが見えてきたわ!!」

「上陸するわよ!!」

一行はルウィーに上陸するのであった。

「此処がルウィーか・・・ヘクシヨン!!」

「うずめたらそんな格好じゃ風邪ひくよ!!はいこれ」

「サンキュー!!龍姫」

「ほんじゃ!!ルウィー教会に乗り込みますか!!」

「ガサ入れに行くじゃないんだよ!!。(。D。)ノ」

ルウィーに到着した龍姫達は教会に向かうのであった。道中ネプテューヌに突っ込む龍姫であった。

「ブラン!!遊びに来たよ!!」

「星龍達まで一緒にいるなんて珍しいわね!!・・・あなたはわたしは此処ルウィーの女神ホワイトハートこと「御子神ブラン」よ」

「俺は「天王星^{てんのうぼし}うずめ」だ!!よろしくな!!ブラン」

「なんや、龍姫ちゃん達やないかそれに星龍ちゃん達まで、そちらさんはボクは龍姫達の幼馴染みでブラン達の姉の「御子神武龍^{てんのうぼし}」や」

「天王星^{てんのうぼし}うずめだ!!よろしくな武龍!!」

「早く教会に入ろう!!」

「そうだね!!お邪魔します!!」

龍姫達は教会の中に入るのであった。

「ネプギアちゃん!!ユニちゃんまでいるの・・・この人誰?」

「わたしは御子神ラムこつちがロムちゃん」

「俺は天王星^{てんのうぼし}うずめだ!!よろしくな!!ロム・ラム」

うずめはロムとラムに簡単に自己紹介した。

白き大地の橙色

ルウイーに到着した龍姫達は教会に入り

「あれ、龍姫さんじゃないですか、それに星龍さん達も、え〜とわたしはここルウイー教会で教祖をしております」「西沢ミナ」と申します」「俺は天王星うずめだ!!よろしくな!!」

「わたくしはブラン様の侍従をしておりますフィナンシエと申します、ではこちらにどうぞ」

執務室に行くのであった。

「今日は何しに来たの?」

「何しにって遊びに来て上げたのに!!」

「まあいいわ、ゆつくりして行ったらいいわ、忙しいから」

「今日は忙しいみたいだね!!」

「だな、そうだ、武龍!!ルウイーの町に行きたいんだが案内してくれるか?」

「そやな!!気分転換に町に行こうや!!」

どうやらブランは仕事が片付いて無いようで、龍姫達はルウイーの町に繰り出すことにした。

「このボクでも手伝えへんし、せつかくみんながいるんやクエスト受けへん?」

「そうね!!教会にゴロゴロするのどうかと思うし、それに、覚醒した口

ム・ラムの実力もみたいわね!!」

「ラムちゃん!!クエスト頑張ろう」

「ほんじゃ!!ギルドに行きますか!!」

「このクエストでいいんじゃないうずめの実力を考えると」

「そうだな、これぐらいが丁度いい」

町に繰り出していた龍姫達は武龍の提案で、ギルドでクエストを受け時間を潰すことにしたのだった。

「いたよ!!フェニックス!!」

「準備はいい?」

「いつでも良いぜ!!」

「みんな!!行くよ!!」

龍姫達は世界中の迷宮でフェニックス討伐クエストでいている。

各々に得物を構え、

「喰らえ!!星影連波!!」

「災害警報、お住まいの地域は荒れ模様だよ テンペスト!!」

「アクアレイザー!!」

「空破鉄鎚!! エアプレッシャー!!」

うずめは三日月状の斬撃を三発飛ばし、ロムが魔法で竜巻を起し、ユニが水の魔法弾を発射して、ラムが魔法で重力場を発生させた。

「キエー!!」

「まだ動くのかよ!!行くぞ、ねぶっち!!」

「任せて!!」

「衝破、十文字!!」

フェニックスはまだ倒れてなかったので、ネプテューヌとうずめは共鳴技「衝破十文字」を浴びせた。

「キエー!!」

「どうやら、まだ動けるのね!!うずめ!!あなた秘奥義は修得してるのかしら?」

「修得してるが?ここはロムとラムの二人に秘奥義やつてもらおうんじゃないの?」

「うずめの秘奥義見たいのよ!!」

「しゃあねえな腹括りますか!!変身!!本気で行くニャー!!」

「うずめって女神だったかい!!ってさつきと別人やんか!! (。D。)
ノ」

「うずめさんなの?」

「うん、あれがうずめの女神の姿だよ!!」

フェニックスは弱ってはいるが、まだ攻撃できるようで、ノワールはうずめに止めを刺すように言い、うずめは言われるがまま女神化をした。

それを見た武龍が思わず突っ込んだいた。ロムがあまりにもうずめの変貌ぶりに着いて行けず、龍姫が簡単に説明していた。

抜刀!! 研ぎ澄ませ!!

龍姫達はクエストで世界中の迷宮にフェニックス討伐のクエストにみんなで一緒に来ていた。

そして今うずめが女神化したところであった。

「キエー!!」

「飛ばして行きますニャー!!」

フェニックスはうずめに攻撃を仕掛けたがうずめがオーバーリミッツを発動させたので吹っ飛んでいた。

「こっちから行くニャー!! 三散華!!」

三回無手で攻撃する技だがうずめは龍姫のものとは違い、殴打・回し蹴り・踵落としの順に繰り出し、

「閃空裂破!!」

回転斬りで舞い上がり突きを繰り出しながら急降下し、

「牙連蒼破刃〜!!」

連続斬りから蒼破刃に繋ぐ奥義を放ち、

「龍姫直伝!! 腹括るニャー!! 天狼滅牙〜!!」

龍姫が指南したバーストアーツを繰り出し最後は

「終わらせてやるニャー!! 遠慮もしなにやい!! 決めてやるニャー

!! 斬空刃!! 無塵衝〜!!」

刀をベルトのホルダーから鞘ごと抜き、納刀したまま打ち上げ、三散華の要領で三回、蹴りを食らわし、抜刀した勢いで無数の斬撃で攻撃する秘奥義を放った。

これをもろに受けたフェニックスは光の粒子になって消えていた。

「雷鳴の如く鋭く速くニャー!!」

うずめは女神化を解かずに決め台詞を言っていた。

「ギルドに報告しに行こう!!」

「わかった!! すぐ行く!! ねぷっち!!」

「やっぱりうずめはこっちの方がしっくり来るね!!」

「そりゃな!! 違和感の塊やったで!!」

ネプテューヌがギルドに報告しに行くのと号令をかけたので、うずめ

は女神化を解き、みんなと一緒に出口に戻るのであった。

その道中、星龍と武龍はうずめの変貌ぶりに各々感想を言っていた。

「これが報酬だよ!! いつでも受けに来てね!!」

「また、今度!!」

ギルドに達成報告をし報酬を貰い、

「早く、教会に帰ろう!! ブランがキレてるかもしれないし」

「そうですね!! 勝手に出かけてしまってますからね!!」

「とりあえず、おなか減ったたら早く教会に帰ろう!!」

一行はブランをほったらかしにしていたので足早に教会に帰るのであった。

「お姉ちゃん!! ただいま!!」

「お帰りなさいませ、武龍様、ロム様、ラム様、皆様、お昼のご用意が出来てますのでお手洗いが済み次第、食堂にお集まりください」

「お言葉に甘えてお昼にしようかな!!」

龍姫達は教会に帰ってきてフィナンシエが出迎えてくれたうえ、昼食を用意してくれたらしく、龍姫達は手洗いを済まし食堂にむかっていた。

スキット：うずめの秘奥義其の弐

ネプ「うずめの秘奥義、今度は抜刀術がメインだったの」

うずめ「咄嗟に頭に浮かんだのが、あの秘奥義だったからな!!」

龍姫「うずめの秘奥義はアス〇ルの秘奥義だよ」

うずめ「そうなのか!!」

うずめ、白との特訓

クエストから帰ってきた龍姫達は教会で昼食をとることにしたのであった。

「流石、フィナンシエやな!!この前教えた、アサリのパスタもう作れるんやな」

「何を仰られるんですか武龍様 侍従ならこんな朝飯前ですよ!!」

昼食はアサリのパスタだったようで、

「うまいぜ!!」

「それはよかったです!!」

うずめには高評価だった。

「そうだ!!ブランは今何してるの?」

「今は趣味の読書をなさっておられます」

「へえくねぶつちの話だとキレやすい体質って聞いたんだが」

「それはですね、自分の邪魔などをされたりするとブラン様は鬼神化するんですよ!!」

「そうなのか、てつきり会った瞬間にキレられると思ったからな」

ネプテューヌがフィナンシエにブランが今何してるのか聞いたら、読書をしているようで、うずめがキレ出すと思っていた。

昼食を食べ終えたので龍姫達は一休みしていたら、

「あら、みんな何してるの?」

「あ、ブラン、今はお昼食べてみんなと一緒に一休みしてるよところだよ!! 読書と仕事終わった?」

「ええ、さつき一段落したわ!!うずめ、あなたにお願いがあるのだけど?」

「お願いってなんだ?」

ちようどそこに仕事を終わらせたブランがやって来てうずめに頼み事をしてきたのだ。

「特訓に付き合って・・・欲しんだが!!」

「ブラン☒(・ω・)女神化しながら頼み事するって器用だな!!いいいぜ!!晩飯まで時間あるしな」

「恩にきるぜ!!」

「ボクたちも付き合うよ!!」

「近くの雪原に移動や!!」

どうやらブランはうずめの実力知りたかったらしく特訓に付き合っただけと女神化しながら頼んできたのだ。

「さっさと始めようぜ!! (^^) /」

「良いぜ!! こっちも女神化した方がいいか?」

「その方がいいと思うよ」

「行くぜ! ブラン!! 変身!! ほんニヤー始めるニヤー!!」

「おい、龍姫ちよつと聞いていいか?」

「いいけど?」

特訓をするためいつも武龍達が特訓をしている場所に来た龍姫達はブランが女神化をして戦闘の態勢を取ったので、うずめも女神化をし戦闘の態勢を取ったのだが、

ブランは龍姫にうずめのことを聞いて来たのだ。

「いくらなんでも龍姫達の友達とは言え、真逆すぎるだろ!! (。D。)
ノ」

「ボクも初めて会った時も思ってたから、今になっては気にならないけど」

「早くするにゃ!!」

「そうだな!! 気を取り直して行くぜ!!」

ブランはうずめの女神化した姿と性格の豹変ぶりに驚きを隠せないでいたが気を取り直して

ブランは戦斧を、うずめは龍姫から譲り受けた天下五剣・妖刀「鬼丸国綱」を抜刀し構えたのであった。

ピコハン合戦!!

ブランがうずめに特訓を申し込んで

「行くぜ!!手始めに!! ピコハン!!」

「お返しにや!! ピコハン!!」

「何この、ピコハン合戦は☒(・ω・)」

「もっと、派手なの想像したじゃない!!」

なぜかブランとうずめはピコハン合戦を始めてしまい、ノワールは呆れてしまい、ラムがいじけ出した。

「ほんじゃ!! 魔神拳!!」

「きかねえにやつと!! 魔神剣!!」

今度は衝撃波を撃ち合い、「カキーン」と斧と刀がぶつかり合い、

「弧月閃!!」

「爆炎剣〜!!」

ブランは月を描き、うずめは爆風を熾し、

「爆碎斬!!」

「魔神連牙斬!!」

ブランは斧で地面を叩き石つぶてを飛ばし、うずめは斬撃を六連射飛ばした。

「ふう〜いい汗かいたぜ!!今日はここまでにしようぜ!!」

「うん!!そうするにや!!」

「うずめ、いい加減に女神化解いた方がいいよ」

「あ、ごめんごめん・・・すまんちよつとテンションあげ過ぎた!!」

どうやら二人はキリのいいところで終わったらしく、龍姫はうずめに女神化を解くように言い、うずめは女神化を解いた。

「それじゃ、帰ろうか!!」

「そうだね!! 教会に帰ろう」

龍姫達は教会に帰るのであった。

「ただいま〜」

「お帰りなさいませ、夕飯の準備が出来次第お呼びしますので、どうぞおかけになってお待ちください」

「わかった!!」

教会に戻ってきた龍姫達は夕食まで時間があるので雑談をするこ
とにした。

スキット：ピコハンII

ネプ「ブランもピコハン修得したんだ!!」

ブラン「当たり前よ!!ゲームギョウ界で伊達にハンマーを得物にし
てないわ」

武龍「ボクも修得したで〜龍姫ちゃんは修得したんか?」

龍姫「もちろん龍音も修得したよ!!」

星龍「こつちも全員修得済みだよ!!」

「夕食の準備が出来ましたので食堂に起こしてください」

「みんな行くよ!!」

夕食の準備ができたようで全員で食堂に向かうのであった。

「今日のメニューは「クリームシチュー」です どうぞ召し上がってく
ださい」

「ワイイ(≡▽≡)シチューだ!!いただきます!!」

「ネプテューヌ!!大声出さないの!!いただくわ!!」

「おいしい!!」

夕食はクリームシチューだったようでみんなで楽しく食べるので
あった。

「明日、朝練付き合って欲しいんやけど」

「別にいいよ!!じゃあ!!また明日ね!!」

龍姫達は武龍との朝練の約束をし予約したホテルに行くのであつ
た。

「明日は朝練してリーンボックスに行くよ!!お休み!! (――) z z
z」

疲れていたのか龍姫はホテルの自分の部屋に着いて風呂に入り寝
間着に着替えベットに寝ころんだらそのまま爆睡するのであった。

天王星 緑の大地

龍姫達は武龍との約束で朝練付き合っていた。星龍達は仕事の都合でラスティションに帰って行った。

「それじゃあ、行くよ!! 虎牙破斬からの空牙昇竜脚!!」

「なんの!! 翔月烈月華や!!」

「ふう〜これぐらいでいいかな」

「そやな、また頼むで」

「それじゃあ!! また遊びに来るね!!」

龍姫は武龍との特訓を切り上げネプテューヌ達と合流しリーンボックスに向かったのである。

スキット：ベールII

うずめ「ベールって〜どんな感じなの〜」

ネプ「ゲームが好きだよ」

うずめ「そうなの」

龍姫「確かにゲームが大好きだよね」

ギア「あとはシスコンだな」

「着いたわよ」

「此処がリーンボックスか、木が多いな!!」

「まあ、緑の大地って言うし、とりあえず教会に行こう!!」

「その前になんか食べよう」

「そういや、ホテルチェックアウトしちゃったから朝ごはん食べてなかったね途中、コンビニにでも寄ってから行こう!!」

とりあえず龍姫達は教会に向かう途中でコンビニにより朝食を済ませ教会に

向かうのであった。

「ベール!! 遊びに来たよ!!」

「あらーネプテューヌ!! それに龍姫・ネプギアちゃん・龍音ちゃんまで・・・おや今日は新しい方と一緒にですの!! あ、もし遅れましたわ!! 此処、リーンボックスの女神グリーンハートこと「神楽堂ベール」ですわ!!」

「龍姫達のダチで天王星うずめだ!! よろしくな!!」

「龍姫ちゃん!! 遊びに来てくれたの!!」

「そうだよ!! そうだ!! うずめ!! 二人に挨拶してあげて」

「天王星うずめだ!!」

「龍姫ちゃんの幼馴染みでリーンボックスの女神候補生 神楽堂輝龍」

「同じく、神楽堂飛龍」

リーンボックス教会に着いたうずめはベールたちに簡単に自己紹介した。

「あら、龍姫、来たいたんですわね!!... おや? 新しいお方ですの? わたくしは此処、リーンボックスの教祖兼女神代行をさせていただきます
ております 神楽堂チカですわ」

「天王星うずめだ!!」

後からチカもうずめと自己紹介した。

「あれ? ベール、いつも着ているドレスはどうしたの?」

「実は今まで来ていたドレスの胸の部分がサイズが合わなくなっ
てしまい、仕方なく、ドレスが出来るまでの間、輝龍とお揃いのパーカワ
ンピを来ているのですわ!!」

「そうなんだ!! 早く出来ると良いねドレス!!」

「そうですわね!! この服も気に入ってるのですわ!!」

ベールがいつも来ている胸を強調しているプリンセスドレスでな
くパーカワンピを着ているのでネプテューヌはそのことを尋ねたら、
どうやら覚醒した副作用で胸が大きくなったので胸部分がきつく
なっただけらしく、企画書で新しいドレスが出来るまで輝龍とお揃いの
パーカワンピを着ていると答えるベールであった。

紫龍、ライブに出てくれの段

珍しくいつものプリンセスドレスではなくパーカを着ているベールに龍姫は

「長ズボン履いてるんだね!! 似合ってるよ!!」

「一応、輝龍がこのズボンをプレゼントしてくれたのですわ!!」

「そうなんだよ!! 快気祝いに買ってあげたんだよ!! 男物なんだけど」

「ちゃんと緑のパーカなんだね!! ベールが着ると雰囲気が変わるね!!」

「実は輝龍と飛龍のパーカを見ていたら、自分も着たくなったのです!! したら輝龍がプレゼントしてくれたんですわ!!」

ズボンを履いていたので似合っていると評価して、ベールは輝龍がプレゼントしてくれたと答え、自分も着てみたかったらしく、パーカもプレゼントでもらったと教えていた。

「そうですわ!! 龍姫とネプギアちゃんと龍音ちゃんに折り入ってお話があるんですが?」

「何? 話って?」

「ご本人に説明してもらった方が早いですわね!! 5pbちゃん出てくさいな!!」

ベールは龍姫・ネプギア・龍音に折り入って話があるようで、リンボックスのシンガーソングライターの5pbを呼んだのだが

「どうしたんですの?」

「知らない人がいっぱい出て行けない!! (+|+)」

「どうしたんだ? こいつ」

「ボク、歌ってる時は大丈夫なんだけど、人が苦手なんだ!! 知ってる人なら大丈夫だけど」

「要するに、人見知りまたは軽い「対人恐怖症」なんだ(・ω・)」

「うんボクたちも初めて会った時も逃げ出したんだよ!!」

「どうやら5pbは歌っている時以外は人見知りが激しいらしく龍姫達の前に出て来れないのであった。」

「出てきてくれないと何の話か分からないよ!!」

「だったらそのまま聞いて欲しいんだけど、ボクと一緒にステージに立って欲しいんだ!!」

「つまりお姉ちゃんもネプギアと龍音にステージで一緒に歌って欲しいってことなの」

「はい、もちろん 星龍様・天龍様・武龍様達にも頼んだら承諾してもらいました」

「つまり龍の女神と女神候補生全員が今日のライブでステージに立って歌うの!!」

なんと5pbは四ヶ国の龍の女神と女神候補生と一緒にステージに立って歌って欲しいと言ってきたのだ。

「いいよ!!一緒にステージに立って歌ってあげるよ!!」

「ありがとうございます!!」

「しゃねえ、俺もそのライブってやつに出てやるよ!!」

「うずめもステージに立って歌うんですの!!」

「大丈夫だよ!!うずめなら!!」

龍姫と一緒にライブに出ることを承諾したのでネプギア・龍音も承諾し、うずめも一緒にライブに出てやると言った。

「じゃあ!!わたしとベールはビデオカメラ買ってくるからね!!」

「ボクたち夕方のライブに備えて体を休めるとしますか!!」

ネプテューヌはベールと一緒に家電量販店にビデオカメラを買いに行き、龍姫達は夕方のライブに備え休むのであった。

ライブ準備

龍姫達がライブに出ることになったのでラストেশョンに帰っていた星龍達は

「そうだ!!この制服でライブに出よう!!」

「ボクも制服で出るよ!!」

「アタシは仕方ないわね、天龍のお揃いの制服着てあげるわ」

「準備できたの?出発するわよ!!(お姉ちゃんとユニと天龍の晴れ舞台だもん!!気合い入れて行かないと)」

(三人)「ハイ(´ω´)ノ」

急いでリーンボックスに向かったのであった。なぜかノワールは気合いが入っていた。

「このビデオカメラにしよう!!値段も安いし!!流石に今からプラネテューヌに戻ってたら時間がなくなっちゃうよ!!」

「そうですわよ!!ネプテューヌ、今からネプギアちゃんに作ってもらうのは遅いですわ!!」

「そうだよね!!それじゃあ、急いで教会に帰ろう!!」

家電量販店にビデオカメラを買いに來ていたネプテューヌとベールは最安値のビデオカメラを買い教会に帰るのであった。

「ただいま!!」

「ネプテューヌ、ベール早かったね!!」

「はい!!思いのほか、いいカメラが早く手に入りましたのですわ!!」

「こっちは準備万端だよ!!そっちは?」

「こっちも準備万端だぜ!!」

「ほんじゃあ!!ライブ会場に行きますか!!」

龍姫達はネプテューヌ、ベールと合流しライブ会場に乗り込むのであった。

「さてとボクたちはこっちに行くけど、いーすんには」

「大丈夫ですわよ、イストワールにはわたくしから帰るのが明日になると連絡を入れときましたわ」

「ありがとう!!ベール」

「何を仰るんですの友達なのですから当然ですわ!! 今日が龍姫達のお休みの最終日なのに無理を頼んでしまったのですから」

「わかったよ、それじゃあ行ってくるね!!」

ライブ会場の裏側に着いた龍姫達はイストワールに連絡を入れようとしたらベールが代わりに入れてくれたらしく、龍姫達は控え室に行くのであった。

「取り敢えずこの持つてきていた制服に着替えてと・・・よし!! これで準備OKと」

「お姉ちゃんも準備できたんだね!! 取り敢えずギア姉はここに用意されてた衣裳に着替えたよ」

「どう龍姫お姉ちゃん似合ってる?」

「似合ってるよ!! ネプギア!! (胸が大きくなったミ○ヒだよ、おまけにイヌ耳とイヌ尻尾まで装備してるし)」

控え室に着いた龍姫と龍音は念のため持つてきた自分が通っていた学校の制服に着替え

終え、ネプギアはベールが用意してくれたいた某ピンクのイヌのお姫様のコスプレ衣裳を着ていたのであった。

「龍姫〜!! 似合ってるかにゃ?」

「なるほど、うずめは女神化しちゃえばいいもんね、一応、衣裳に着替えたんだね!! 似合ってるよ!!」

「うん!! おまけに猫耳まで用意されてたニャー!! 丁度いい衣裳だにゃ」

「お姉ちゃんも、はいこれ」

「お決まりの猫耳だね!!・・・これでよし!!」

龍姫と龍音とうずめの状態は

三人揃って猫耳を着け、うずめはプラネテューヌの高校の制服を着ていたのであった。

ライブの打ち合わせ

龍姫達はライブに出るため輝龍達と一緒に控え室でスタンバイをしていた。

「龍姫ちゃんも学校の制服にしたんだね!!おまけに猫耳まで着けちゃって!!」

「あと髪型をツインテールしたらあ○にやんだよ!!」

「自分でもそれは自覚しているよ、どう見てもそのコスプレにしか見えなしいし」

「だったらお姉ちゃん!!この際、ツインテールにしようよ!!」

「黒髪でツインテールしたらノワールだよ!! 十字キーの髪飾りつけてるけど!!」

龍姫の今の格好があまりにも某バンドアニメのキャラに見えるらしく、

龍音にツインテールを進められたので髪型をツインテールにしたのであった。

「龍姫ちゃんくお待たせ……って猫耳つけてるの、おまけにツインテールにしちゃってるから、ノワールがあ○にやんのコスプレしてるの思いつい出しちゃったよ!!」

「もう!!星龍まで!!ひどいよ!!。(。口。)ノ」

「どう見ても龍姫さんの今の格好を見たら、お姉ちゃんがそのあ○にやんのコスプレ風景が浮かびますよ!!」

「ユニまで☒(。・ω・。)」

しばらくして星龍達も合流したのだが、ノワールのコスプレ風景にしか見えなかったらしく、

龍姫は半ば受け入れたのであった。

「ネプギアはかわいいワンちゃんなのね」

「そうなんだよ、ユニちゃんもかわいいよ!!」

「褒めても何も出ないわよ!!」

「白とピンクの衣裳に、ピンクのイヌ耳と尻尾着けてるからミ○ヒのコスプレかと思ったよ」

「ぎっつき、龍姫お姉ちゃんが言っていました」

ユニはネプギアのステージ衣裳の感想を述べ、星龍は龍姫同様、そのアニメに出てくるイヌの姫様を思い出したのであった。

「みんな、集まってるんやな!!結局みんなこの制服かいな!!」

「いいなくネプギアちゃんだけくかわいい衣裳で」

「そうよ、ネプギアだけずるい!!」

「これを着るようにメモが書かれてたから、そのまま着ただけだよ!!
(; 皿)」

「誰か、エ○レ○ルのコスプレ衣裳着てくれへんかな?」

ルウイー組も合流した。

ロムとラムはネプギアがベールが用意していた衣裳を身に纏っていたので、

文句を言い、武龍はその衣裳を見てそのアニメに出てくるイヌの親衛隊のキャラのコスプレを誰かしないかぼやいていた。

「これで全員揃ったみたいやな!!」

全員そろったことを確認していたら、

「打ち合わせを始めてもいいですか?」

「いいよ!!やつと顔が見れたよ」

「うん、ボクも初めて見たよ!! 今日よろしくね、5pbちゃん!!」

「5pbです!!よろしくお願いします!!」

青のロングヘアーにヘッドホンを着け肩と腹部を露出した服を着た、

リーンボックスの歌姫の5pbが龍姫達の控え室に入ってきて、

ライブの打ち合わせをすることにしたのであった。

「まずはボクがトップバッターでいいですか?」

「なにゆうてんねん!!リーンボックスの歌姫が一番最初に出て行かんと」

「そうですね、ではボクが紹介したらステージの脇から登場すると言いうこととネプギアちゃんがトリでよろしいですね?」

(龍姫達)「OK!!」

打ち合わせで順番を決め、龍姫達は、

「このライブ成功させよう!!」

全員「おう!!」

円陣を組み、気合いを入れたのであった。

ライブスタートの段

「みんなー!! 5pbだよ!!」

「うおおおー!!」

「5pbちゃんだ!! 今日ライブのチケット取れて良かったぜ!!」

「それじゃあ、ミュージックスタート!!」(^^♪」

ライブが始まったのである。

一方その頃

「ライブ始まったよ!! ノワールは気合十分だし」

「当たり前じゃない!! 自分の身内がゲストに出るんだから!!」

「そうですわよ!! ネプテューヌ、わたくしのかわいい輝龍・飛龍がゲストなんですのよ!!」

「こっちはお姉ちゃんとロムとラムが出るんだから!!」

ネプテューヌ達は女神専用のVIP席で自分達の姉妹の出番を待っていたのであった。

ところ変わって龍姫達は

「ライブ始まったよ!! お姉ちゃん!!」

「大丈夫だよ!! ボクたちは堂々としてればいいんだから!!」

「龍姫ちゃんは昔から本番には強いからね!!」

「うん!! だからネプギアリラックスしてね!!」

「わかったよ、龍姫お姉ちゃん!!」

「ネプギアがおオトリなんだ!! 胸張ってる!!」

「うずめちゃん!! 女神化してステージに上がろうね!!」

「当たり前だろう!! さすがにこの姿じゃまずいからな!!」

ステージ脇で出番を今かと待っていた。うずめは出番が来るまで女神化を解いていた。

「5pb最高く!!」

「ウオオー!!」

どうやらライブがクライマックスになっており、

「みんなー!! 実はみんなに紹介したい人達がいるんだけど? いいかな?」

「5pbちゃんの紹介なら何でもOK!!けど男は無しで!!」

「それじゃあ、紹介するね!!みんな!!出番だよ!!」

5pbがステージ脇に合図を送った。

「合図だよ!!みんな!!」

「それじゃあ、行くよ!!」

「腹括って!!行きますニャー!!」

とネプギア以外のメンバーが一斉にステージに

「うおお!!」

「あの猫耳ツインテールの黒髪の娘誰だろう?」

「あのオレンジ色の髪の娘かわいいな!!」

出て行き、龍姫達が舞台に立った瞬間、観客が興奮状態になっ
た。

「それじゃあ、自己紹介お願い!!」

「こんばんは〜プラネテューヌの紫龍の女神!! 鳴流神龍姫で〜す!!

今楽にしてあげるよ!! (*・▽・*) ☒

「龍姫ちゃん〜!!楽にしてください!!」

「プラネテューヌの二人目の女神候補生!! 鳴流神龍音で〜す!! 闇

の炎に抱かれないのはだれ?」

「龍音ちゃん!! 闇の炎で抱いてくださ〜い!!」

「プラネテューヌの臨時女神 天王星うずめだにや!! よろしくにや
!!」

「よろしくお願ひしますにや!!」

「ラストイシヨンの黒龍の女神 獅子神星龍だよ!! ボクの全力全壊

受けてみる?」

「星龍ちゃんの全力全壊受けたいで〜す!!」

「ラストイシヨンの第一次女神候補生 獅子神ユニで〜す!! アタシ

の剣と銃どつちで逝きたい?」

「ユニちゃん〜!! どつちでも逝けます!!」

「ラストイシヨンの第二次女神候補生 獅子神天龍で〜す!! 紅蓮の
炎で踊ってみる?」

「天龍ちゃん〜!!いつでもOKで〜す!!」

「ルウイーの白龍の女神 御子神武龍や!! よろしくな!!」

「武龍ちゃん〜!!」

「ルウイーの女神候補生の御子神ロムです!! ラムです!!」

「ロムちゃん!!ラムちゃん!! マジ天使!!」

「リンボックスの女神候補生の神楽堂 輝龍と飛龍です!! ボクたちの歌で逝けるなんて最高だよ!!」

「輝龍様!!飛龍様!! 最高〜!!」

と龍姫達は自己紹介したのであった。

ライブ終焉

龍姫達は今、ライブの舞台上上がっているのである。

「せっかく、ゲストに来ていただいたので!!ボクと一緒に歌ってもらいま〜す!!」

「じゃあ!!聴いてください!! ETERNAL BLAZE!!」
「遙か〜空響いて〜る〜」

とゲスト組は龍姫の十八番の曲で幕を開けるのであった。

一方その頃

「お姉ちゃん!!歌うまいな〜」

「そうですね!!」

「わたしよりうまいなんて〜(;|;) / ~~~OTL」

「あのノワールが燃え尽きてる!!戻ってこい!!」

「今、わたし〜(。ロ)ココハドコ? (ノロ) / アタシハダアレ? って戻ってきたわよ!!」

「よかった、あれ?ネプギアがないよ?」

「その事でしたらじつは5pbちゃんのマネージャーさんにあるお願いを頼んだのですわ!!」

「なに、聞いてないよ!!ネプギアの実の姉であるわたしを通してよ!!」
「何言ってるのよ!!ネプテューヌそんなのネプテューヌには内緒にするでしょ」

ネプテューヌ達女神組は龍姫の歌声に酔いしれていたのだが、

ネプテューヌはネプギアがないことに気づいたのだが、ベールが5pbのマネージャーに頼んでネプギアにあるお願いを頼んでいたことを明かした。

「伸ばした腕に迎える〜」

「離さない〜」

龍姫&星龍 龍音&天龍で「Preserved Roses」を
歌い終え

「うおっおおお!」

「じゃあ!!この娘に最後は〜てもらおうよ!! ミュージックスタート

!!」

と大歓声の中、5pbがミュージックスタート!!と合図すると、

「♪～アイタイLoveLoveLoveLoveLoveのに～(ハハ♪)」

「ネプギア!!すごい!!(。D。)」

「まさかコスプレしながら歌っているの!!(このわたしが女神候補生にコスプレで負けるなんて、おまけに歌もうまいなんて反則よ!!OTL(TT)T)／～～)」

「輝龍に狂いがありませんでしたわ!!」

「あのコスプレ衣裳ってお姉ちゃんの世界のアニメのキャラの衣裳だよ!!おまけにこの曲はお姉ちゃんのNギアに入ってる曲だよ!!」

「そうですねよ!!飛龍に頼んで作ってもらっていたのをネプギアちゃんに着てもらったんですわ!!」

「Love Destiny」のメロディーともにネプギアが歌いながらステージに登場したのだ。もちろんあのピンクの犬姫のコスプレ衣裳を着た状態で

「姫様～最高!!」

と観客がペンライトを振り回しながらスタンディングオベーションをし始めたのである。そして

「もう戻れやしない～これが～最後の真実～☒ 御観賞ありがとうございました!!」

「うううおおおお!!」

ネプギアが歌い終え、観客が大歓声が響き渡った。

「自己紹介してもらいま～す!!」

「プラネテューヌの女神候補生の 鳴流神ネプギアです!! これからもプラネテューヌをよろしくお願いします!!」

「ネプギアちゃん～!! マジ天使!!&最高!!」

ライブは大盛況の中、幕を閉じるのであった。

控え室では

「ライブの成功を祝って乾杯!!」

と祝杯を挙げていたもちろんジュースと麦茶である。

「ネプギア、着替えたんだね!!」

「うん!! 流石にあの衣裳のまま飲めないよ!!」

「あの衣裳似合ってたよ!! ネプギア!!」

「もう!! 茶化さないでよ!! 龍姫お姉ちゃん!!」

龍姫はネプギアを茶化すのであった。

「今日は龍姫ちゃん達は教会に泊まるんだよね?」

「そうだよね、流石に今からプラネテューヌに帰るのは遅いし、ベールがいーすんに許可を入れてくれたからそうするね!!」

「それじゃあ!! お姉ちゃんを迎えに行こう!! 龍姫ちゃん」

「ほんじゃあ!! 行くよ龍音・ネプギア・うずめ!!」

「また今度、ゆつくり遊ぼうぜ!! じゃあな!! 楽しかったぜ!! 5pb」

龍姫達はリーンボックス教会に急遽一泊するこにしたのであった。

ライブの後

龍姫達は急遽予定を変更してリーンボックス教会に一泊することにしたのであった。

もちろんイストワールには龍姫からも連絡を入れていた。今龍姫達は

「今日の夕飯はビーフシチューですわよ!!」

「まさかベールが作ったの!!。(。D。ノ)」

「何を仰いますの輝龍と飛龍はライブで疲れているのですから、代わりにわたしが丹精込めて作りましたわ!!どうぞ!!召し上がってくださいいな!!」

全員「いただきます!!」

ベールが作ってくれたビーフシチューを食べてみると、

「おいしい!!」

「うまいぜ!!」

「よかったですわ!!喜んでいただいて!!」

「どうやらうまくできたようで、みんなには好評だったのであった。

「ふうく生き返るく!!言いながらボク一回死んでるけどね!!」

「おい!!何ノリ突っ込み入れてんだ?」

「しかし今日はまさかライブに出るなんて夢にも思ってたよ!!」

龍姫達は輝龍と飛龍と一緒に風呂に入っているのであった。

「まさか、うずめちゃんが女神で、変身すると性格がある意味で180度変わったちゃうんだもん!!びっくりしたよ!!」

「すまん、いきなりライブに出ることになったから言うの忘れてた」

「ライブが終わって誰にも見つからなかったのがよかったよ!!」

「そうだな!!俺の今の姿見た奴驚くだろうな!! 同一人物なんだからな」

「しかし、輝龍と飛龍も胸デケーな!!」

「もう!!うずめちゃんたら!!」

輝龍と飛龍はうずめの女神化を見て驚きを隠せないでいたのだが、

うずめは輝龍と飛龍の胸は見て感想を言っていた。

うずめは「スケベ大魔王二号」の称号を修得した。

そして龍姫達は風呂から上がり用意された部屋に入って

「お休み!!」

「お休み!!お姉ちゃん!!」

Nギアで目覚ましを掛け就寝したのである。

そして次の日、

「おはよう!!みんな!!」

「おはよう!!龍姫ちゃん!!」

龍姫達は私服に着替え顔を洗い

「いただきます!!」

「おいしい!!」

朝食を食べ、

「また、遊びに来るね!!」

「今度はゆっくりしようね!!」

プラネテューヌに帰るのであった。

スキット：ライブの感想

ネプ「すごかったわよ!!お姉ちゃんも龍音もうずめも」

龍姫「こんな事って滅多にないからね」

ネプ「まさか!!お姉ちゃんとネプギアがアニメのキャラのコスプレでステージに立って歌うんですもの!!あのノワールが意気消沈してたわよ!!」

ギア「そうだったの!!お姉ちゃん!!」

龍音「まあ、ノワールさんなのだから大目に見てやったら」

うずめ「そうするにゃ!!」

「やっど帰ってこれた!!」

「教会に入ろうぜ!!」

「ただいま!!いーすん」

「お帰りなさいませ!!どうでした?ライブの方は?」

「大成功だったよ!!ごめんね予定変更しちゃって」

「いいえこれは仕方なかったことですしちゃんと仕事をしてくれるの

でしたら予定を考えてますので気にしないでください」

「うん!!それじゃあ!!荷物置いたら執務室でお仕事だよ!!」

「はい」

プラネテューヌに帰還した龍姫達は教会に帰り自分の部屋に戻り荷物を置き執務室に向かうのであった。

この時、ネプギアに新たな力が覚醒したことに気づいてなかった。

星光魔王と犬姫侍!! 見参

龍姫達がライブに出て三日が過ぎ、いつものように執務室で

「この書類見てくれ!! ねぷっち」

「ハイよ!! お終いにしようぜ!!」

「お姉ちゃん!!」さんこうろうえいじん「漸毅狼影陣」しちやダメだよ!!」

そんなこんなで書類を片付けていったのであった。

「ふうく仕事終わりのプリンは最高だぜ!!」

「ネプテューヌたらく」

「いーすん、今日の予定は?」

「この後は何も御座いませんで明日までごゆっくりお休みください」

「わかりました!! いーすんさん」

書類を片づけイストワールに今後の予定を聞き明日まで休むことにした龍姫達プラネテューヌ組はリビングでくつろいでいたら、

「こんにちは!! みなさん!! ツクヨミです」

「ツクヨミ様今日は何の用ですか?」

「ツクヨミ様ってことは俺が覚醒できるのか?」

「それもありますがもう一つ嬉しい知らせがありますよ!!」

「なにそれ? 教えてよ!! ツクヨミ様」

「わたしもご一緒にさせていただきます!!」

ツクヨミがやってきたのだ。要件はうずめの覚醒とあることを知らせてきたのであった。もちろんイストワール・アイエフ・仕事が終わったコンパも同席している

「うれしいお知らせってなんですか?」

「それは・・・先日行われたライブに出ていたのは覚えていますよね?」

「覚えてるけど、それがどうしたんですか?」

「実は先日行われたライブを天界から見ている「天照大御神アマテラスオオミカミ」さまが感銘されたようで、その中でネプギアさんが印象的だったので「天照大御神アマテラスオオミカミ」様が新たな女神の衣を渡すよう預かり参上させて頂いた次第で」

「でもわたしには龍姫お姉ちゃんが作ってくれたバリアジャケットがありますけど?」

「それとは別のバリアジャケットなのです!!もちろんそのまま戦闘服としても使えますので安心してください!!」

「わかりました!!そのバリアジャケットをお受けします!!」

どうやら天照大御神アマテラスオオミカミは先日のライブを見ていたらしく、トリを飾ったネプギアの頑張りがよかったらしく天照大御神アマテラスオオミカミから新たなバリアジャケットをネプギアに渡すように言われたらしく、ネプギアはそのバリアジャケットを受け取った。そのバリアジャケットは光になり、ネプギアの中に入ってしまった。

続いて

「うずめさんも覚醒できるまで経験値が貯まりましたので、覚醒できますけどよろしいですか?」

「ああ!!もうとつくに腹は決めたぜ!!」

「では、龍姫さんお願いします!!」

「でもうずめは此処の世界の女神じゃないですよ!!」

「ご安心ください!!この世界のゲームギョウ界の女神として転生させたので大丈夫ですよ!!それとついでにこのバリアジャケットの企画書と素材を渡しておきます」

「わかりました!!行くよ!!うずめ!!」

「おう!!どんと来い!!」

ツクヨミはうずめをこの世界のゲームギョウ界の女神として転生させた龍姫達に明かし、うずめを覚醒させるため龍姫はうずめに腕を伸ばし

「我、このものの力を目覚めし者なり」

「これが覚醒か!!」

うずめを茜色のオーラが包み込み

「目覚めよ!!」星光を司る魔王「!!よ」

「うずめ!!(さん)(ちゃん!!)」

オーラが収まるとそこにいたのは

「うううん、あれみんなどうしたんだ（。D.C.）」

「何って、うずめ!!鏡見たら」

「たぐししょうがねえくな・・・どうなってんだ!!（；。D.C.）」

今のうずめの状態は

身長が龍姫と同じ身長（165cm）になっており、胸が覚醒する前のベールの女神姿と同じサイズになり、髪が伸びていた。もちろん「ってなんで俺、服が・・・」

「ちよつと待ってて、はいこの前買ったこのパーカとインナーウェアアーあげるよ」

「サンキュー!!龍姫、助かったぜ!!ありがとうな」

「どういたしまして」

服が大事なところ以外破けてしまっていたのであった。

龍姫が自分用に買っておいたパーカとインナーウェアとズボンをあげるのであった。

「そうだ!!ネプギア!!新しいバリアジャケット着てみてよ!!」

「どう着るかわからないよ!!」

「ネプギアさん、そのバリアジャケットの装着は女神化するとき「勇者降臨」と頭の中で念じてくださいもしくは叫んでください!! もう一つのバリアジャケットは「霸王転生」と念じてくださいまたは叫んでください!!それとアイエフさんとコンパさんは自由聖騎士女神になりましたので自分の好みの体型に変身できます!!ではご武運を」

ツクヨミはこう言い残し天界に帰っていた。

「それじゃあ!!行くよ!!括目してください!!勇者降臨!!」

ネプギアは言われて通りに女神化した。すると

「あれ?声そのままなんだけど?」

「ネプギア!!鏡見たら!!」

「わかったよお姉ちゃん!!・・・ってなにこれ（。D.C.）ノ」

今のネプギアはというと

露出は無く、身長は覚醒時（175cm）と同じで胸は同じぐらいに大きくなっており、脛当てと胸当てと籠手が装着されており、スカートはロングスカートで正面の布が短くなっていた。なぜか髪が

ピンクになっていた。ちゃんと紫色の武装になってはいたが

「なんでイヌの耳が生えてるの!!尻尾まで生えてるの!!。(㊦。)ノあれわたし耳が無くなってる!!どうしよう」

「これって本物!! (*・▽・*) 触らせてよネプギア!!」

「痛い!! (+o+) お姉ちゃん!!優しく触ってよ!!もう(; ; ㊦。)」

「お姉ちゃん、間違いなく」

「うん、DOG DOYSのミ○ヒの戦闘服だよ」

龍姫と龍音のいた世界のアニメのキャラの武装になっていたもちろん左腰に刀を差す剣帯が装着されていた。

ネプテューヌがネプギアの耳で遊んでいたのは言うまでもない。

自由聖騎士の二人

ネプギアが新たな力を手にいれ、うずめが「星光魔王」に覚醒し、アイエフとコンパが自由騎士女神に昇格したのだが、

「―――」 z z z ネプギアの尻尾気持ちいい（―――） z z z

「お姉ちゃん!!起きてよ!!」

「気に入ったみたいだね、ネプテューヌは」

「うん、気持ちよさそうに眠ってるね（・ω・）」

「おまけに一国の守護女神が鼻提灯作ってるぜ!!」

ネプテューヌが犬姫侍モードのネプギアの尻尾に挿んだまま鼻提灯を作ったまま眠ってしまい起きそうになかった。

「ねぷつちが起きるまでの間、龍姫、ツクヨミからもらった素材と企画書で俺のバリアジャケットを作ってくれるか?」

「そうだね!!作るよ!!うずめも手伝ってネプギアがあれだから」

「もう!!こうなったら」

「（―――） z z z ・ ・ ・ ゴンツツ!!（〇〇）はあくあく寝たく」

「ねぷつち!!起きたなら手伝ってくれ!!」

「わかった!!」

ネプテューヌが寝ている間にうずめのバリアジャケットをツクヨミからもらった素材と企画書で作成しようとしたらネプギアが女神化を解き元の人間状態になって尻尾を消しネプテューヌを叩き起こした。

「できたよ!!うずめ!!女神化してみて」

「わかった!!変身!!」

「あれってお姉ちゃんの世界のアニメのキャラの確か「高〇な〇」のバリアジャケットだよ!!」

「そうなにやのか?」

うずめがバリアジャケットを着てるのだがその状態が

白の魔王様そっくりのバリアジャケットになっており、胸も大きくなっていたが、露出が全然なく、髪色が魔王様と似ているのか白いリボンでツインテールに結っていた

左腰に刀を差すホルダーが装着されていた。

「全力全壊!!だにや!!ちよつと頭冷やそうかにやく」

「怖いからやめて!!。(。D。)ノ」

で本人はそのキャラのセリフを言い遊んでいた。

「そーいやツクヨミ様が自由聖騎士にわたしとコンパを昇格させてくださったのよね?」

「そーだよ、試しに女神化してみたら?」

「そうですね!!女神化してみるですう!!じゃあ行くですう!!変身!!」

「天凱獄装!!」

自由聖騎士女神に昇格したアイエフとコンパは試しに女神化をしたのだ。すると

「アイちゃん!!お胸が大きくなっているです!!」

「ほんまや!!コンパも大きくなってるで!!」

今の二人はと言うと

アイエフは身長が覚醒時(163cm)のまんまだったが胸が少し大きくなっていて、髪が赤だったのが金髪になっており、服が紺のロングコートにインナーウェアを着こんでおり、胴丸が装着されていた。下にズボンにレガースが着いたロングブーツを履いて、二刀の小太刀が後腰にホルダーごと装着されていた。

コンパは白を基調にしている法衣を纏っていた。もちろん左腰に刀を差す剣帯が装着されていた。胸も大きくなっていて上に銀色胸当てが装備されていた。両足はロングブーツになっていた。頭に戦乙女の兜が装着されていた。

アイエフは「闇の聖騎士女神」の称号を修得した。

コンパは「光の聖騎士女神」の称号を修得した。

うずめの買い物

アイエフとコンパの自由聖騎士の能力に目覚めたので今龍姫達は「今日は何もお仕事ないからね〜」

「そうだね!!たまにはゆっくりしようか?」

「さっきまで寝てた奴が言うセリフか!!」

今日は午前中に仕事を終わらせてしまったのでゆっくりリビングでくつろいでいたのであった。

「そうだ!!俺、服買いに行きたいんだけど」

「そっか、うずめ自分の服がサイズがなかったね、一緒に買いに行こう!!」

「助かるぜ、龍姫!!」

「じゃあ!!町に行こう!!」

「そうだ!!ついでに今晚の夕飯の食材買ってこないと」

うずめが服を買いに行きたいと言ったのでそのついでに今晚の夕飯の食材を買いにことにしたのであった。

「この服でいいな、これいくらだ?」

「1000クレジットです」

とうずめは街にある百貨店の服屋で男物のジャケットを二着とフリーサイズのインナーウェアを二着とカーゴパンツを二本買い、下着売り場で

「どれ買えばいいんだ?」

「お客様どう言ったものをお探してでしょうか?」

「動いてもずれない奴をさがしてるんだが?」

「でしたらこちらはどうぞでしょうか?サイズもフリーサイズになっております」

「そうなのか!!これに決めたいくらだ?・・・500クレジットだな」

「お買い上げありがとうございます!!またのご来店お待ちしております!!」

ブラを買ったことがなかったらしくうずめは店員さんに聞いて大人用の龍姫達も愛用しているスポーツブラを念のため三つ買った。

もちろん三色とも色違いである

「覚醒する前にギルドで稼いどいてよかったぜ!!結構買ったからな
〜」

「うずめ〜服と下着ちゃんを買えたの?」

「おう!!店員に聞きながら買ってきたぜ!!ギルドで稼いどいてよかつたぜ!!」

「まあ、ここ国の商品はボクたちも作るの協力してるからね!!」

「そうだな!!今日、やってた書類って此処の商品情報とかあったもんな〜」

「こつちも買い物終わったから教会に帰ろう!!」

と龍姫達は教会に帰るのであった。

「さてと冷蔵庫に食材入れてと」

龍姫はさつき大型百貨店で買ってきた食材を冷蔵庫に入れた。

スキット：犬姫侍と白星光魔王

龍姫「まさか天照大御神様がボクの居た世界のアニメを知っているとは思ってなかったよ!!」

ネプ「ネプギアの新しいバリアジャケットってお姉ちゃんが貸してくれたDVDのヒロインの戦闘服だったもん!!けど胸きつくなかったあんな銀色の胴丸着いてたけど」

ギア「まさかピンク色のイヌ耳とイヌ尻尾まで生えてくるんだもんびっくりしたよ!!それとあの銀色の胴丸は胸の大きさに合わせくれるから大丈夫だよ」

龍音「そうだったの!!うずめさんなって白の魔王様でしたよ!!」

うずめ「そういや龍姫にそのアニメのDVD借りて見たことあったな!!けどよ、星龍のバリアジャケットにそっくりだったんだが?」

龍姫「仕方ないよ!!星龍はあのキャラがあのアニメで一番好きだったから!!ボクはその幼馴染みの金髪のカラがあのアニメで一番好きだよ」

うずめ「そうなのか!!まあラストイションが黒の大地って呼ばれてからバリアジャケットが黒だったんだな」

ネプ「ノワールが見たらコスプレの参考にすると思うよ」

龍姫「言えてるね」

乙女の時間

龍姫達は夕飯の下拵えをしていた。

「白菜切れたよ!!」

「土鍋に水入れて、火に掛けて!!」

「わかった!!」

「どうやら今晚のメニューは寄せ鍋のようで、そんなこんなで楽しく作っけていき」

「できたよ!!」

「今日はお鍋ですか!!」

「いただきます!!」

「おいしいです!! 龍姫さんがプラネテューヌ教会に来てからあのネプテューヌさんが真面目に仕事をし、おまけに料理まで出来るようになったから」

「いーすんたらそんなことないよ人って追い詰められたら何でも出来るようになるもんだよ!!」

「そうだけ!! いーすん!! 俺だって龍姫に会うまで料理したことなかったからな!! 今じゃあラザニアやグラタンとか作れるようになったからな」

「そうだったんですうか!!」

楽しい夕食を終え、龍姫達は少し休憩するのであった。

スキット：自由聖騎士

ネプ「アイちゃんとコンパが聖騎士女神になるなんて思ってたよ!!」

アイ「自分でも実感がわかないわよ!! けどこの胸が大きくなったからいいけど、まさか胴丸が自動装着されるとは思ってたわ!!」

コンパ「わたしも胸が大きくなってます!! けど服が戦ヴァルキユリア乙女みたいになっていたですう!!」

龍姫「そうだったよね!! けどあの胴丸は自動的に胸の大きさに合わせて装着されるからね」

ネプ「そのおかげで戦闘中胸が擦れないんだね!! わたしもついてる

よ!!」

ギア「そういうことじゃないと思うけど」

「今日もいい湯だな!!」

「うずめ!!一緒に入っていい?」

「ねぷつちか?いいぜ一緒に風呂入ろうぜ!!」

「それじゃあ、お邪魔します!!」

「今日は龍姫と龍音とネプギアも一緒か」

龍姫達はみんなでお風呂に入ることにしたのである。

「龍姫と龍音は姉妹揃って胸でかいな」

「うずめだつて大きくなったじゃない」

「そうだなねぷつちも大きいしな!!写真見せてもらったけどちっこい

のと同じ人物とは思えないな!!」

「うずめつたらヒドイ!!」

「うずめつてスポーツブラ買ったんだね!!ボクもサラシ巻いてたけど

最近スポーツブラとインナーウェアにしたんだ!!」

「龍姫と龍音つてサラシ巻いてたのかよ!!」

「実はサラシがボロボロになっちゃったから、時間が開いた時に龍音た

ちと一緒に買いにいたんだよ!!」

「お姉ちゃんは女神になる前から大きかったから結構大変だったんだ

よ!!前にわたしが書いたかわいいスポーツブラの企画書のスポーツ

ブラがもう売ってたんだよね!!」

「うん!!かわいい装飾の黒と紫と青のスポーツブラとインナーウエ

アーを一着ずつ買ったんだ!!」

「そうなのか!!けど龍姫達もだけど俺も着痩せするタイプみたいだし

な!!こういう下着は助かるぜ!!」

うずめは覚醒する前のネプテューヌの写真を見て思ったことを言

い、龍姫はうずめとガールズトークをした後、お風呂から上がるので

あった。

そして全員自室に戻り就寝した。

この時、すでにプルルートの世界ではある異変が起こっていたこと
誰も知る由もなかった。

神次元編

紫龍の女神!! 神次元へ行くの段

ネプギアが「犬姫侍」のバリアジャケットを貰い受け・うずめが「星光魔王」に覚醒し・アイエフ・コンパが「闇と光の聖騎士女神」に昇格して、

一週間が過ぎた。龍姫達は教会に寄せられた魔物^{モンスター}退治で洞窟に来ていた。

「いたわよ!!」

「みんな!! 行くよ!!」

「構えて!!」

今回はアイエフ・コンパも一緒に付いて来てるのであった。

龍姫・ネプテューヌ・ネプギア・龍音・うずめは打刀を、アイエフはカタール、コンパは注射器をそれぞれ構え

「魔神剣!!」

「真空裂斬!!」

「シャープネス!!」

「剛招来!!」

「飛燕連脚!!」

龍姫は牽制に斬撃を飛ばし、ネプテューヌは縦回転切りした後真上に上昇する剣技を、コンパは味方の物理攻撃力を上げ、うずめは気を溜め物理攻撃力を上げ、アイエフは回転蹴りを浴びせた。

「ふう〜片付いた〜」

「女神化する必要がなかったね」

「仕方ないよ、上位の魔物じゃないからね!!」

「帰って休もうよ!!」

「そうだね!!」

龍姫達は教会に帰るのであった。

「一仕事した時の麦茶は最高だね!!」

「もうお姉ちゃんたら!!」

教会に帰ってきた龍姫達はリビングで麦茶を飲みながらくつろいでいたら、

「みなさん、こんにちは、ツクヨミです!! 大変です!!」

「どうしたんですか? そんなに慌てて」

「実はプルルートさんの世界のゲームギョウ界で異変が起きたと報告がありましたので、至急龍姫さん達にプルルートさんのゲームギョウ界に助太刀に行ってほしいのです!! もちろんこの依頼も報酬を用意しています」

「わかりました!! けど向こうでは女神化はできますか?」

「その事でしたら、大丈夫ですよ!! 覚醒したことによりどの異世界でも女神化が可能です!!」

ツクヨミが血相を変えて龍姫達の前に現れ、プルルートのゲームギョウ界に行ってほしいと龍姫達に依頼した。

龍姫は依頼を受けることについてネプテューヌ達に

「ボクは行くけど一緒に来る?」

「当たり前のこと聞いてどうするの!!」

「そうだよ!! わたしも行く!! いーすんが何言おうとも!!」

「水臭いぜ!! 俺も行くぜ!!」

「これでも客員女神だもん!! 行くに決まってるよ!!」

「そうだった!! ボクたち「ほつとけない病」末期患者だったね!!」

着いてくるかと聞いたら行くと答えたので

「いーすん、ごめんしばらく留守にするから!!」

「大丈夫ですよ!!」

「そうよ!! この闇の自由聖騎士女神と」

「光の自由聖騎士女神がいるプラネテューヌは大丈夫ですよ!!」

「そうだね!! こういうことを想定してツクヨミ様が二人を自由聖騎士女神にしたんだもんね!! じゃあ!! 行ってくるよ!!」

「では、しばらくの間龍姫さん達をお借りします!! 行ってまいります!!」

ツクヨミが龍姫達の足元に魔法陣を出現させて光で包み込むように柱が出現し、収まると龍姫達は転送された。

「いちやったわね!!」

「大丈夫ですう!! 龍姫ちゃんから教わった技と魔術があれば何とか
るですう!!」

「そうですね!! 気長に龍姫さん達の帰りを待ちましょう!」

龍姫達を見送ったアイエフ・コンパ・イストワールは龍姫達の帰りを待つことにした。

神次元に上陸するの段

プルルートの統治している世界に行くことになった龍姫達はツクヨミの能力で転送中である

「もうすぐ出口です!!」

「みんな!!何があっても良いように準備して!!」

ネプテューヌ・ネプギア・龍音・うずめ「わかった!!」

何が起こつても良いように体制を整え、

「うわあああ!!」

「吸い込まれる!!」

出口を抜けようとした時まぶしい光に包まれたのだ。

しばらくして光が収まると、

「ドン!!」

「ゴン!!」

「ドサ!!」

「ホギヤ!!」

「痛たたくみんな!!大丈夫?」

「なんとかな!!」

「此処はどこかの森林みたいだね?」

「いくらなんでも町の近くに飛ばしてくれたらいいのに!!<(´・`・´)>」

> どうやら龍姫達はどこかの森の近くに飛ばされたらしく、ここにいないツクヨミに龍音は文句を言っていた。

「ネプテューヌ!!ネプギア!!大丈夫?」

「大丈夫だよ龍姫お姉ちゃん!!」

「わたしも何とか・・・ん?なんか下に柔らかい物が(プにプに)」

どうやらネプテューヌとネプギアも無事だったのであったが、

「あのくそこどいていただけるかしら?<(´・`・´)>」

「つて大丈夫!!(。D)骨折してないよね?」

「大丈夫よ!!骨折はしてないわよ!!であなた達は一体誰?」

「相手に名前を聞くときは自分から名乗るもんだらう!!」

なんとネプテューヌが落ちたところに人が下敷きになっていたのだ。おまけに胸を揉んでいたのがあった。

その人物に怪我はないかと尋ねたら無いと答えて、

龍姫達に名前を聞いて来たのだが、うずめが自分から名を名乗るのが筋だとジト目になりながら言った。

「そうよね、わたしはノワールよ!!」

「ええええ〜!! (。D。) ノワールルル〜!! (。D。)」

「何よいきなりそっちが名乗れって言ってきたから名乗ったのにその反応は!!」

「あ、ごめん、ボクは鳴流神龍姫」

「妹のネプテューヌ!!」

「同じく、妹のネプギアです!!」

「同じく、妹の龍音です!!」

「ええ!! 姉妹!! そっちの二人とこっちの二人はわかるけど!! (おまけにボク!! その顔で男の子なのかしら)」

なんとその人物はへそを出した服を着ていたが覚醒前のノワールにそっくりな上に名前まで「ノワール」だったので龍姫達は驚きを隠せないでいた。

落ち着いたので龍姫達は順番に自己紹介したのだが、龍姫達が四姉妹であることに驚きを隠せないでいたノワールだったが、

「それはボクと龍音がネプテューヌとネプギアを養子縁組したからなんだよ!!」

「そうだったのね!! そっちのあなたは」

「俺は天王星うずめだ!! こいつらのダチだ!!」

「うずめね、であなた達は一体何してるのこんなところで? (今度は俺!!? なにこの集団は!!)」

「わたし達は依頼でここに来たんだよ!! けど迷子になっちゃったからプラネテューヌ教会に案内してよノワール!!」

「仕方ないわね!! ついてきなさい!!」

「ありがとうノワール!!」

「勘違いしないでよ!! あなたたちのためにやってないんだから!!」

龍姫がネプテユーンとネプギアの義理の姉妹になっていることを教え、うずめはノワールに簡単に自己紹介してノワールがここに何してるの聞いて来たのでネプテユーンはノワールに道案内を頼み、ノワールは渋々引き受けてくれたのだが、その道中龍姫達はこっちの世界のノワールもツンデレなんだねくと本人に聞こえないよう呟いていたのであった。

冥王星との再会

プルルートの世界のゲームギョウ界に到着した龍姫達はこっちの世界のノワールに道案内を頼み、プラネテューヌに向かっていたが道中、

「ヌラ〜!!」

「スライヌね!!あなた達は戦える?」

そんなにも生易しくなくスライヌの群れが立ちはだかつたのでノワールは得物のショートソード抜刀しながら龍姫達に戦えるのか聞いたのが、

「魔神拳!!」

「抜刀するの面倒だ!! 衝破魔神拳!!」

「そうだよね!!スライヌ如き斬る刀なんて持ち合わせてないもんね!!

三散華!!」

「そういうことですから!! ネガティブゲイト!!」

「龍音!!やりすぎだよ!!けどまとめて倒したらいいよね!! サンダーブレード!!」

そんなお構いなしに、龍姫は拳を振り衝撃波を飛ばし、うずめは地面をに拳を叩き付け自分の周囲に衝撃波の壁を作り、ネプテューヌは素早く三回蹴りを入れ、龍音は魔術で闇の球体を作りまとめて攻撃し、ネプギアに至っては魔術で空から雷を帯びた巨大な32式エクスブレイドの様な剣を落として着弾点にまで攻撃しスライヌを

「ヌラ〜☒(・ω・)」

まとめて倒したのであった。

それを見たノワールは

「ちよつと聞いていいかしら?」

「うん、何ノワール?聞きたいことって?」

「あなた達は一体何者?こんな技や魔法見たことないわよ!!(。D。)
ノ」

「見ての通り、通りすがりの」

「集団だが」

「どこが普通の集団よ!! 明らか怪しすぎるわよ!! まあいいわ!! 話はプラネテューヌに着いてからじつくり聞かせてもらうから覚悟しなさい!!」

龍姫達の術技に格の違いを思い知らされたらしく驚きを隠せないでいた。

そのうえ不審者扱いしだったのであった。

しばらく街道を歩いて行くと、

「着いたわよ!! 此処がプラネテューヌよ!!」

「よし!! 教会に行こう!! ……って此処の教会ってどこ?」

「そんなことだろうと思った!! こっちよ着いてきなさい!!」

プラネテューヌに着いたのだがこの世界のゲームギョウ界のプラネテューヌは龍姫達が住んでいるプラネテューヌと違っていたので教会の場所がわからなかった。仕方なくノワールに教会まで案内してもらったことにした。

「此処がプラネテューヌ教会よ!!」

「ありがとう!! ノワール!! 教会に入ろう!!」

「悪いけど、わたしも同行させてもらうわ」

教会に着いたので龍姫達は中に入ることにしたがノワールはまだ龍姫達のことを疑っていた。

「ぶるるん!!」

「あ!! ネプちゃんくん!! それに龍姫ちゃんとネプギアちゃんと龍音ちゃん!! とあなたは誰? わたしはプルルート」

「俺は天王星うずめだ!! ねぷつちのダチだ!!」

「えええ!! あなた達!! プルルートと知り合ってたの!! (。D。) ノ教会に入ったらプルルートが出迎えてくれたのだ。久しぶりの再会に喜びを隠せないでいた。

それを見たノワールは驚きを隠せないでいた。

疑い晴らすの段

龍姫達はプルルートとの再会し、うずめはプルルートに自己紹介していた。

「ネプちゃん!! 一体どうしたの? みんなして?」

「そんなことより話してくれるはよね!! あなた達のこと」

「いい加減!! ラステイションに帰ったら?」

「いやよ!! あなた達のような不審者集団ほつとけるわけないでしょ!!」

プルルートは龍姫達がここに来てることに不思議がっていたがノワールは龍姫達のことをまだ疑っていた。

「誰か来てるんですか? プルルートさん?」

「実はネプちゃん達が来てくれたんだよ!!」

「ええ!! いーすん!!」

「けど、ちっこいな!!」

なんとこつちの世界のプラネテューヌ教会の教祖もイストワールだったのであった。

「はい、わたしはプラネテューヌ教会の教祖のイストワールですけど」

「ごめん ボクは鳴流神龍姫」

「わたしはネプテューヌ!!」

「ネプギアです!!」

「龍音です!!」

「天王星うずめだ!!」

仕方なく龍姫達は自己紹介をして、

「そんなことより執務室に案内して差し上げたら!!」

「どうしたの? ノワールちゃん!! 怖い顔してネプちゃん達は怪しくないよ〜」

「信用できるわけがないでしょ!!」

ノワールは龍姫達を使用できないのでいた。すると

「みなさん!! 聞こえていますか? ツクヨミです!!」

「ツクヨミ様どうしたんですか?」

ツクヨミが龍姫達に念話をしてきたのだ。

「実は言い忘れていたのですが、皆さんのポケットにどこの次元でも使えるデバイスでNギアと合体させました。その上、Nギアよりコンパクトになりました」

「つまり此処とあつちのみんなと通信が出来るんですか?」

「そうです!! 使い方は音声に従ってください!! それと音声は龍姫さん達にしか聞こえません!! それとそのデバイスは女神化した時に自分の好きなバリアジャケットに変更できますでは失礼します」

「ありがとな!! ツクヨミ様!!」

ツクヨミは龍姫達と通信を切ったのであった。

「着いたわよ!!」

「もうノワールさんいい加減許してあげたらどうですか?」

「だってわたしの知らない技と魔法使ってたのよ!!」

どうやらノワールは龍姫達を目の敵にしていたのだ。

イストワールは許してあげたらと言ったら嫌だと言って聞こうとしなかった。

「実はボクたちは此処とは違うゲームギョウ界から来たんです!!」

「そうだったんですか!!」

「そんな嘘よ!!」

「嘘じゃないよノワールちゃんだつてあたしもネプちゃん達のゲームギョウ界に行ったことあるんだもん!!」

「わかったわよ!! プルルートがそこまで言うなら少しは信用してあげるわ」

「ありがとう!! プルルート!!」

仕方なく龍姫達は自分が異世界のゲームギョウ界から来たこと暴露した。プルルートの説得によりノワールの疑いが晴れたのであった。

「取り敢えず、この教会のお手伝いさせてみて逃げ出すようなら、斬り捨てるわ!!」

「こうなったらノワールちゃん止められないの、いいかなネプちゃん?」

「仕方無い、此処は腹括ろう!! 別に構わねえ」

「すいません!!みなさん」

そんなこんなで此処のプラネテューヌ教会の仕事を手伝うことになったのであった。

女神メモリー回収の巻

こっちの世界のプラネテューヌ教会に来て三日が経ったのであった。

「プルルートさんに龍姫さん達からも仕事をするように言っただけですけど」

「はい、わかりました!!(ネプテューヌに初めて会った時を思い出すよ*)」

「どうやら、肝心のプルルートが仕事を放棄しているのだった。」

「イストワールは龍姫達からも言っただけで欲しいとお願いしてきたのであった。」

「プルルート!!お仕事しよ!!しないとご飯作ってあげないよ!!」

「そんなく龍姫ちゃん達の料理美味しいのにくそうだ!!」

「どうしたの?なんか閃いたみたいだけど?」

「龍姫はみんなを代表してプルルートに仕事しろと言いにいき、その上ご飯で釣ったのだ。」

するとプルルートは何かを閃いたらしく、

「実はね、女神メモリーを回収に行こうと思ってたのくノワールちゃんと一緒に」

「そういえばこっちのノワールは女神化出来ないのって」

「はい!!この世界では女神メモリーの適合者がその女神メモリーを使わないと女神になれないんですよ!!」

「そうなんだ!!(実はボク達はもう女神なんだけどね)」

ノワールと一緒に女神メモリーを回収に行くと言いだしたのだ。

「龍姫はそうなんだ!!と合鎚を打っていた。もちろん龍姫達は自分が女神であることをプルルート以外教えていない上にばれっもないのであった。」

「プルルート!!女神メモリーを回収に行くわよ!!」

「今く行くね」

ノワールがプルルートを迎いに来たので龍姫達は一緒に女神メモリーを回収に行くのであった。

「着いたわよ!! 此処で女神メモリーが見つかったって報告があったわ!! じゃあわたしは先に行くから!!」

「ノワール!! 待つて!! いちゃったくどうしようお姉ちゃん?」

「追いかけるしかないよね、行くよみんな!!」

女神メモリーが発見されたと言うレンガ造りの遺跡に龍姫達はノワールの案内で着ていたのだが、ノワールが龍姫達に女神メモリーを使われると思いこんでしまい遺跡の中に走って行ってしまったのだ。

龍姫達はノワールの後を追いかけたのだが、

「どうしようノワールさん見失なったよ!! そうだ!! 女神化してあのバリアジャケットならいけるかも、変身!!」

「ネプギアちやくん!! がワンちゃんになちやったく」

見失ったのだ。ネプギアがあることを思いついたらしく、犬姫侍女神化をしたのであった。もちろん今回はパスワードを念じて省略した。

それを見たプルルートははしゃいでいるのであった。ノワールを探しながら遺跡を歩いていたら、

「これなんだろう?」

「それく女神メモリーだよ」

「そうなのかよ!! こんな道端みてえーなところに落ちてんだな!!」

「けど、お姉ちゃんとボクの使ったのと違うね!!」

「確かにボクのはこんな水晶見たいのじゃなかったよ!! 形は同じ菱形だけど、ボクの世界のアニメに出てくるバリアジャケットを着るためのデバイス見たいな奴だったからね」

なんと龍姫達は広い場所に出たのだが、地面に光る水晶の様な物を見つけたので拾ってみるとそれが女神メモリーだったのだ!!

しばらくすると、

「龍姫お姉ちゃん!! 隠れて誰か来たみたい?」

「人の気配なんてしないよ?」

「ネプギアは今、犬の聴力を持った状態になってるから遠くの足音が聞こえるんだよ!!」

「いいから、ねぷつちも隠れろって」

「わかった!!」

「どうやらネプギアが人の気配を感じたらしく龍姫達は近くに会った岩陰に隠れたのだ。」

すると

「今日の回収ポイントはここチユー」

「そうだな、さっさと回収するぞ!!」

「あの人たちって」

「マジエコンヌとワレチユー!!」

「なんとあのマジエコンヌとワレチユーが龍姫達がいる部屋に入ってきたのだ。」

マジエコノヌと双刃

女神メモリーを回収するため遺跡に来ていた龍姫達はなんとあのマジエコノヌとワレチューに遭遇したのであった。もちろんあつちのマジエコノヌとワレチューとは姿が一緒なだけで別人である。

そんなことはさておき

「チュー？」

「あそこって確かわたし達が立つてたところだよ!!」

どうやらワレチューが何やら見つけらしく、さっきまで龍姫達がしゃべっていた場所である。

「おぼはん!! あったつチュー!! しかも二つ」

「二つだと? それとおぼはんはやめろ!!」

「まさか二つも取れるとは思ってなかったチュー!! きつとおぼはんがいらんしてたからこうなったチューね」

「おい糞鼠・・・ 死にたくなければおぼはんと呼ぶな!!」

「あれって女神メモリーだね!!」

どうやら龍姫達と同じで女神メモリーを回収に来ていたらしい。

龍姫達は岩陰からしばらく様子を窺っていると、

「どうしたんだ!! 目的の物は手に入れたんだ!!」

「いや、人の気配がしたでチュー」

「人の気配?」

(龍姫達) 「!! まさか気づかれた!!」

ワレチューが人の気配を感じたらしく龍姫達は気づかれたかと思っていたら、

「こんな辺鄙へんびとこに来る人間がいるか?」

「・・・来た見たいでチュー!!」

「もうく龍姫達たらついてこないし、おまけにどこ行つたのよ!!・・・つてあなた達!! 今すぐ手に持っているそれをこっちに渡しなさい!!」

「ノワール!! ったら!!」

どうやら龍姫達には気づいておらず、ノワールは無用心にもほどがあるのだがマジエコノヌとワレチューに手に持っている女神メモ

リーを超越せと言いだしたのだ。

「おまえもこの女神メモリーが目当てなんだな!!…鼠これ持って先に戻れ!!こいつはわたしが相手をする」

「あなた一人でわたしの相手をするって言うの?」

「そうだ!!光栄に思うがいい!!七賢人が一人、マジエコンヌ様が直々に貴様の相手をしてやろう!!」

「なんですって!!?!」

「ヂュー!!何自分から正体バラしてるツチュカ!!」

(龍姫達)「いちやいけないこと、いちやった」

マジエコンヌはノワールの相手をしてやると言ったのだが、こつちのマジエコンヌも相当アホだったのか自分から正体をバラしたのであった。それを聞いていた龍姫達は呆れていた。

「構うものか、こいつはこの世から消えるんだからな!!」

「わあく負けフラグ立ったよ」

「おぼはんがどうなろうと知らないチュー!!」

「ネプギア逃げたワレチュー追って」

「わかったよ」

おまけにマジエコンヌはノワールに負けフラグを立ててしまったことに気づいておらず、ワレチューにまで見放されていた。ネプギアにワレチューを追わせた。

「待ちなさい!!それ置いてけ」

「待つのは貴様だ!!それに瞬殺するのは趣味ではない、足搔いて見せろ」

ワレチューを追いかけようとしたノワールはマジエコンヌに阻まれてしまった。

次の瞬間、マジエコンヌは黒いオーラを纏いだしたのだ。

「あのおばさん変身出来るの!!」

黒いオーラが無くなるとそこにいたのは、

「クク!!冥土の土産だ!!」

ダブルセイバー

鉄の翼を纏い、双刃を手に持ち、頭に獣を象った仮面を被った人型の何かがいるのであった。

神次元のボス戦

マジエコノヌは変身しノワールに宣戦布告をしていた。

「この姿、目に焼き付けておけ!!・・・それから」

「みんな!!気づかれたみたい」

「わかった!!お姉ちゃん!!」

「行くよ!!」

「そこに隠れている奴らもだ!!」

マジエコノヌはノワールの方では無く、龍姫たちが隠れている岩壁に向かって魔神剣のような斬撃を飛ばしてきたのだが、それよりも先に龍姫は合図を出し、

「消し飛んだか?ワハハハ!!」

「まさか龍姫!!ネプテユヌ!!」

マジエコノヌは龍姫達がやられたと思ひ込み、時代遅れの高笑いをしていたので。

ノワールは木端微塵に砕け散った岩壁を見て呆然としていたのだが、

「喰らえ!! 魔神連牙斬!!」

「鷹爪襲撃!!」

「魔神剣!!」

「龍姫ちゃんく直伝く ライトニングく!!」

「絶風刃!!」

龍姫達はマジエコノヌが自分たちに気づいたのを変身前から知っていたのだ。

隠れていたメンバーはマジエコノヌの死角に回り込み、

龍姫は斬撃を一度に六発飛ばし、ネプテユヌはマジエコノヌの真上から踏みつけ、龍音は斬撃を一発だけ飛ばし、プルルートは以前龍姫たちの特訓を見学した際に身につけた魔術で雷を落とした。うずめは刀を十文字に振りその軌跡に沿って鎌鼬を発生させた。

「龍姫!!みんな!!生きてたの!!ってあなたが手に持っているそれって

まさか女神メモリー!?」

「よくも!!小賢し真似を!!しかし今日は珍しいことに女神メモリーが三つも見つかるとはな、その黒髪!!その手に持っている物をこちらに渡せ。そうすれば命だけは助けてやる!!」

「そいつに渡しちゃダメよ!!龍姫!!」

「ふん、渡すわけないよ!!こんな奴に!!」

「そうか、なら、全員皆殺しにして!!その女神メモリーをもらおう!!」

マジエコンヌは龍姫達に不意打ちを食らったのが余程ショックだったようで龍姫が手に持っている女神メモリーを寄越せと言ってきたが、龍姫は断った。

するとマジエコンヌは龍姫の挑発に乗ってしまった。

「喰らえ!!」

「遅いよ!! 魔神剣!!」

「ふん!!」

「わたしもいることを忘れないでよね!!喰らいなさい!!」

マジエコンヌは龍姫目掛けて双刃で斬りかかってきたがあまりにも遅かったので龍姫はマジエコンヌの死角に回り込み魔神剣を放ち、マジエコンヌは魔神剣を双刃で防御した。その隙にノワールは得物のショートソードで斬りつけた。

「甘いわ!!」

「しまった!!わたしの剣が!!」

マジエコンヌはノワールの攻撃を双刃で止め、そのままノワールのショートソードを叩き折ったのだ。

「ノワール!!こうなったらいいよね!!お姉ちゃん!!括目せよ!!」

「そうだね!!緊急事態だからね!!行くよ!!セットアップ!!」

「そうだな!!変身!!」

「ええ!!あなた達!!女神だったの!!(。D。)」

龍姫達はノワールを助けるため女神化したのだ。それを見たノワールは鳩が豆鉄砲を食ったように目を丸くした。

いつものマジエコンヌ

龍姫達はノワールを助けるため女神化をしたのであった。

「貴様ら!!女神だったのか!!これはこれで面白い!!」

「つまりあなた達は女神メモリーを必要なかったの!!」

「ごめんノワール、隠してたことは謝るよ!!」

「話は済んだか?この女の命貰い受けるとするか!!」

「キヤー!!」

マジエコンヌは龍姫達が女神だったことに面白がっていた。龍姫はノワールに女神であることを隠していたことを謝罪した。マジエコンヌは双刃で丸腰のノワールに斬りかかったのだが、

「やらせないにや!!」

「貴様!!この一撃を片手で受け止めただと!!」

うずめがノワールと双刃の間に入り片手で真剣白刃取をしていたのだ。マジエコンヌは受け止められたことに驚愕した。

「うずめ!!行くよ!!見切った!!」

「必殺!!」

(龍姫&うずめ)「龍虎!! 滅牙斬!!」

「うあおお!!」

その隙を逃す龍姫ではなく、うずめと二人で龍の鬨気を纏い左右に挟み込み上空にジャンプし刀を叩きける共鳴技「龍虎滅牙斬」を繰り出した。

もろに喰らったマジエコンヌは呻き声を上げていた。

「ノワール!!その目で焼き付けなさい!!」

「何をやる気なの?」

「どう足掻こうと、同じことだ!!」

ネプテューヌはノワールにその目に今からすることを目に焼き付けろと言い、マジエコンヌは悪足掻きをし出したのだが、

「飛ばしていくわ!!」

「何!!あのオーラは何なの!!」

「そっちがその気ならこちらも行かず!!」

ネプテューヌはオーバーリミッツを発動して虹色の闘気を放出し身に纏った。

それを見たノワールは格の違いを思い知らされた。

マジエコンヌは黒い闘気を纏ったが、

「そんなもんでわたしの攻撃を防げると思っ、襲爪雷斬!!」

「何!!わたしのオーラが破られただ!!」

ネプテューヌが斬り上げたのち雷を落とし、斬り下ろす特技「襲爪雷斬」を放ち黒いオーラを切り裂いたのだ。

マジエコンヌはオーラを破られたことに驚きを隠せないでいた。

「来ないのならこっちから、行かせてもらおうわ!! 散沙雨!!」

二刀の同じ長さの刀で滅多刺し、

「秋沙雨!!」

更に滅多刺しにした後、斬り上げ、

「驟雨双破斬!!」

滅多刺しにしたあと斬り上げ、斬り下ろす奥義をしたのち

「腹括りなさい!! 天狼滅牙!!」

滅多切りにして切り抜けるバーストアーツに繋げ、

「天地空!! 悉く制す!! はあ!! てあ!! まだまだ行くわ!! てい

や!! 行くわ!! 神裂閃光斬!!」

怒涛の連続斬りの後、蹴り上げた後、空破特攻弾のように斬り抜ける秘奥義で決めた。

「女神・・・如きにこの私が・・・!! 覚えてろ!!」

秘奥義をまともに受けたマジエコンヌはベタな悪役の捨て台詞を吐きワレチューを追いかけるため逃げた。

「ああ!!待ちなさい!!・・・逃げただけは速いんだから!!それとあなた達、女神だったのね、どうして隠してたのよ!!」

「それにはちよつとしたわけがあつて」

「まあ、いいわ、あれ?ネプギアはどこ?」

「あ、それなら・・・」

「龍姫お姉ちゃん!!ワレチューから女神メモリー取り返してきたよ!!」

「ありがとう!!ネプギア!!」

「ええ!!ネプギア!!あなたの頭のそれ何?おまけにそれ尻尾?本物の?／＼(。ロ＼)ココハドコ? (／ロ。) /アタシハダアレ?」

ノワールは龍姫達が女神であることを隠していたことに怒っていた。

龍姫は謝罪して、ノワールはそれほど気にしてなかったらしく、ネプテューヌにネプギアはと聞いた。

しばらくするとさつきワレチューが入って行った通路からネプギアが女神メモリーを持って犬姫状態で現れたのだ。

ノワールはネプギアを見るなり混乱状態になってしまったのであった。

「お〜い、ノワール!!戻っておいで〜」

とネプテューヌがいったことは言うまでもない。

誕生!! ブラックハート?

遺跡でマジエコンヌを撃退した龍姫達は回収した女神メモリーを

「ノワール!!これが必要なんでしょ!!はい、あげる!!」

「いいの!!もらっても!!こんな足手まといなのに!!」

「何、言ってるのさくわたし達はもう友達なんだから!!」

「ありがとう!!龍姫・ネプテューヌ!!一つだけ頼みたいことがあるのいいかしら?」

「何、その頼み事って?」

ノワールに一つあげることにしたのだ。しかしノワールはさっきの戦いでマジエコンヌに手も足も出なかったことに龍姫達の足手まといだと抱えていたが、

ネプテューヌが友達なんだからと励ましたのだ。龍姫達にノワールはある頼み事をしたのだ。

「わたしが女神メモリーの適合者でなく魔物化したらその刀で介錯をお願い」

「つまり女神メモリーの適合者じゃなかったら、殺せってこと!!」

「わかった!!ただし、適しなかつたら問答無用に斬り捨てるから」

「お姉ちゃん!!何、言ってるの!!」

「龍音!!この女神メモリーは天界で作られた物じゃねえんだ!!ノワールが魔物化することも考えろ!!」

「ノワールなら、大丈夫だよ!!」

「ありがとう!!ネプテューヌ、じゃあ、始めるわよ!!」

その頼み事は女神メモリーの適合者選ばれなく魔物化したら殺してほしいと言ってきたのだ。

その頼み事を龍姫は承諾し、ネプテューヌがノワールの可能性に賭けると言い、ノワールは女神メモリーを使ったのだ。

「キヤアアアアあ!!」

「ノワール!!」

女神メモリーを使ったノワールから眩い光が包みだしたのだ。いつでも介錯が出来るよに龍姫は刀を抜刀していた。

そして光が収まるとそこにいたのは、

「これがわたしの姿なの!!」

「よかった!! ノワールが魔物にならなくて!!」

今のノワールは

髪型が銀髪のツインテールで、武装が黒のラインが入っているのだが、なぜか龍姫達が来た世界のゲームギョウ界のノワールと違い灰色になっていた、もちろん黒衣の断罪者に覚醒している龍姫達のノワールと違い、胸元が開いているので、谷間が全開になっていた。その上、身長も全然伸びてなかった。

「ついにわたしは女神になったのね!!アハハハ（*・▽・*）」

（龍姫達）「これじゃあ、マジエコンヌだよ（||——||）」

なぜかマジエコンヌ同様に時代遅れの高笑いをし出したので、龍姫達は遠い目でノワールを見ているのであった。

「ノワールはどうしようか?」

「ああなったら、気が済むまで止めねえからなほっという教会に残り二つの女神メモリー持つてずらかろうぜ!!」

「そうしよう!!」

自分の世界に行っているノワールをほったらかして教会に帰る龍姫達だった。

「ただいま!!いーすん!!」

「お帰りなさい、みなさん、あれ?ノワールさんは」

「自分の世界にいちやっただから遺跡にほったらかして帰ってきた!!」

「あの人ですからしょうがないです、龍姫さん女神メモリーは回収出来ましたか?」

「女神メモリーなら回収できたよ!!はい、女神メモリー!!」

「はい、確かに女神メモリーですね!!今日はこれでお仕事は無いのでまた明日よろしくお願いします」

教会に帰ってきた龍姫達はイストワールに回収してきた女神メモリーを渡し夕食まで時間があるので下宿している部屋に行き、くつろぐのであった。

もちろんこの後「なんで!!一声掛けてくれなかったのよ!!く、く、く、」

「とノワールに言われたのは言いうまでもない

その日の夜

教会に帰ってきただ龍姫達は徐にツクヨミからもらった新しい次元デバイスを取り出していた。

「流星に星龍達に連絡しとかないとだめだよね!! 取り敢えずあつちのプラネテューヌ教会に連絡してみよう!!」

「そうだよ!! アイちゃんとコンパ以外にこっちに行くことは言っていないからね!!」

龍姫は向こうのゲームギョウ界が気になるので連絡するためデバイスを起動させた。

「マスター!! ご用件はなんですか?」

「ボクたちのゲームギョウ界のプラネテューヌ教会と連絡が取りたいんだ!! やってくれる、イルミナル?」

「はい!! お受けいたします!! ではしばらくお時間がかかりますよろしいですか?」

「別に構わない!!」

龍姫はイルミナルと名付けたデバイスにあつちのゲームギョウ界のプラネテューヌ教会に通信できるよう指示したのだ。

「龍姫ちゃん!! どうして何も言わなかったの!! <、>」

「ごめん、みんなツクヨミ様が至急こっちのゲームギョウ界に行ってくれて依頼されたから」

「それはそうと龍姫達は元気にしてる? こっちはみんな元気よ!!」

「元気にしてるよ!! ノワール!! みんな!! 心配かけちゃってごめん!!」

「そっちは心配なんてしてないんだから!!」

すると何も無い空中にスクリーンが表示され、向こうのプラネテューヌ教会が映ったのはいいが、どうやら星龍達が遊びに来てたらしく龍姫達がいらないのと勝手にプルートのプラネテューヌに行つたことに怒りを露わにしていたのだが、龍姫は簡単にこっちに行くことになった事情を説明し、あつちのノワールはいつも通りだった。

「それじゃあ!! また連絡するから!!」

「必ず、帰って来てね!!」

龍姫達は通信を切った。

「どうやらあつちは心配なさそうだな!! 龍姫!! 飯にしようぜ!!」
「そうだね!! 作るの手伝って!!」

龍姫達は夕飯の準備に取り掛かったのだ。

「今日は鰯の照り焼きだよ!!」

「いただきます!!・・・おいしい!!」

「すいませんわたしが不甲斐ないばかりに」

「いいのいいの気にしないで!! (こっちのいーすんも遅いんだね!!)」

今日の夕飯は鰯の照り焼きのようでもみなでおいしくいただいた。

龍姫達は食器を洗い片付けて女神全員でお風呂に入ることにしたのだ。

「ふう〜今日もいい仕事したね〜」

「そうだね〜あたしも女神化したけど〜ネプちゃんたら〜おいしいとこ〜持っていていくんだもん〜」

「だって〜最後は秘奥義で決めたいんだもん!!」

「流石にあればやりすぎたかもしれねえけど、あつちも殺るきだったんだからいいんじゃない!!」

「あたしも〜秘奥義〜やってみたいな〜!! それは〜そうと、龍姫ちゃん達のお胸、さ・わ・ら・せ・て!!♡(ゝ――)もちろん女神化した状態で!!」

なぜかプルルートは女神化して龍姫達に女神化した胸を触りたいのであった。

「いいけど、変なところ触らないですよ!!」

「うふ、胸だけよ!! こんな感じかしら? みんなよくこんな大きい胸で戦っていられるのね、みんな何センチあるの?」

「あう!! 計って、ないからわからない!! それに胴丸が胸の大きさに自動的に合わせてくれるからね」

「みんなあたしより大きいじゃない? これは、お・し・よ・き・よ!!」
そんなこんなで楽しい入浴であった。

神次元のギルド

龍姫達が女神メモリーを回収して三日が経ち、いつものように教会の仕事をしていたのだ。

「もう一回ノワールさんの所にて勉強してください!!」

「ひゃー!!」

(龍姫達) 「またプルルート(ぶるるん)だな」

どうやらこの前、プルルートを女神に昇格したノワールが統治しているラストেশヨンに研修もといバイトに行かせたらしいのだが、

「早い話が全く仕事の内容を覚えてないと☒」

「はい!!みなさんが仰ってる通りです!!全くと龍姫さん達がいるからって・・・プルルートさんは・・・」

「龍姫、たぶん俺らも様子見にラストেশヨンに行けって言われるな」「そうしよう、こっちのいーすんさんのお話は長いからほっといてプルルートさんの様子見にいこう」

どうやら全く仕事の要領をわかってなかったらしくプルルートをまたラストেশヨン教会に放り込んだらしく龍姫達はラストワールが勝手にプルルートを愚痴り出したので、

龍姫達は多分プルルートの仕事の様子を見て来いと言われが分かっていたのか、ラストワールをほったらかしてラストেশヨンに全員で向かったのであった。

「で、みなさん!!聞いてるんですか!!<、ω、>・・・あれ龍姫さん!!」

自分が愚痴ってる間に龍姫達はラストেশヨンに向かったもとい逃げたことに気づいたラストワールであった。

スキット：こっちのいーすん

ネプ「お姉ちゃんとおえてよかったわ!!」

龍姫「どうしたの急に?」

ギア「だって龍姫お姉ちゃんが来るまで仕事サボってたからな」

龍姫「そうだったね、あのままだったら一緒に地獄の愚痴の雷雨浴びてたよ」

ネプ「そうね〜」

「見えてきたよ!!ラストイション!!」

「それじゃあ!!降りて教会に行くわよ!!」

そんなこんなで龍姫達はラストイションに到着し、流石に町の中に着陸するのはまずいので町の入口近くの平原に着陸し教会に向かった。

「ノワール!!元気にしてる!!」

「あれ、あなた達!!どうせプルルートの様子を見て来いって言われたんでしよう」

「言われるのわかったから、飛んできた!!」

「ガクッ☒ 流石は龍姫率いる鳴流神家だけあるわね〜(´・ω・´)」
教会に着いた龍姫達をノワールは出迎えてくれた。ノワールは龍姫達の感の鋭さに呆れて何も言えなかった。

「そうだ!!ノワール!!ふるふるんはちゃんとバイトしてる?」

「するわけないでしょ!!」

ネプテューヌはノワールにプルルートがちゃんと研修もといバイトをちゃんとしてるか聞いたら、全くやってくれないようで怒っていた。

「そうだ!!今からプルルートをギルドに連れて行くの一緒に来てくれるわよね?」

「別にいいよ!!こっち来てからギルドに行つてないから」

「あれ〜龍姫ちゃん〜なんでいるの?」

「なんでつておまえを見張るために来たんだよ〜、ω、>!!」

「そういうことだからギルドに行くよ!!」

「わかった〜」

そんなこんなでギルドに向かうのであった。ノワールはギルドの受付に行き、

「クリスタルスカル三つ納品のクエストにしたわ!!みんな!!準備できた?」

「とつくにできてるよ!!それよりノワールはできたの?この前おばさんに剣叩き折られたし」

「大丈夫よ、武器屋で新しい剣買ったら大丈夫よ!!それじゃあ!!風来洞に行くわよ!!」

クリスタルスカルと言う鉱石を三つ納品するクエストを持ってきてくれたので一行は目的地風来洞に向かうのであった。

女神とは

龍姫達はプルルートの監視でラスティションに来ていたのだがノワールはプルルートに女神の仕事を教えるため、クエストで風来洞に来ているのであった。

「いたわ!!クリスタルゴーレム!!見てなさい!! わたしの剣裁き!!
ヴェノムフエンサー!!」

「全然倒れそうにないよ!!」

クリスタルスカルを落とす魔物クリスタルゴーレムを発見したのでノワールはショートソードで攻撃したが全く効いてないので、

「もう!!見てもらえないよ!!剣術はこうやるんだよ!!ノワール!! 魔神剣!!」

「グオー!」

「ええ!!なんでわたしの剣は効かないのにネプテューヌの技は効くの?」

痺れを切らしたネプテューヌはクリスタルゴーレムに向かって魔神剣を放った。見事命中したのだ。それを見たノワールはまた格の違いを見せられてしまった。

「へえ〜こんだけいればクリスタルスカル三つはすぐ集まるな!!ほんじゃあ!!手始めに、魔王炎撃波!!」

「わたしも行きます!! 霸道滅封!!」

「あなた達!!刀からレーザー出してどうするの!!」

「ノワール!!無理しないでいいよ!! 獅吼爆炎陣!!」

「そうだよ!!後ろでプルルート見張って!! 守護方陣!!」

「わかったわ、そうするわ☒」

うずめも刀身に炎を纏わせ薙ぎ払い、ネプギアは刀から極太のレーザーを放ち、

ネプテューヌは獅子の鬨気を叩き付けドーム状の爆炎で追撃し、龍姫は刀を地面に突き刺し方陣を作り出し攻撃した、

「グオー☒」

「倒した数の分落としたよ!!」

「ノワール!!ギルドに戻るよ!!」

「わかった!!」

クリスタルゴーレムを倒してクリスタルスカル三つを手に入れた龍姫達はギルドに向かうのであった。

「まあ、こんな感じでやるのよ!!わかったプルルート?」

「やっぱりく面倒くさいく」

「あなたって子は!!いい、あなたは女神なのよ!!これは誰でもやろうと思えばできるの!!その目上である女神がそれをやればシエアも獲得出来るし、アイテムやお金だって手に入るの!!」

「わかったく!!」

「わたしが、龍姫達がこうやってあなたのために時間を割いてあげてるの!!それと明日から徹底的に行くからね!!覚悟しなさい!!プルルート!!」

「そんなく明日もくだったら龍姫ちゃんがやってた技と魔法使っている?」

「別にいいわよ!!ただし、イストワールの許可が下りるまでやるからね!!」

「ボクたちもいるんだから!!」

「そうだぜ!!」

「ありがとうくみんなく」

「今日はラストイシヨンに泊まって行こうか?」

「そうだよね、今から飛んで行ったら夜になるし」

「ノワール!!今晚の夕飯作ってあげるからさく」

「仕方ないわね、いいわよ!!泊めてあげる」

そんなこんなで龍姫達はラストイシヨンに泊まることになり教会に戻るのであった。

神次元の白き女神

プルルートに女神の仕事を教えるためクエストに行っていた龍姫達はラスティション教会に泊まることにした。

今龍姫達は台所を借りて夕食の準備を行っていた。

「大根を切って、水を入れたお鍋にいれて〜」

「お醤油とお砂糖を大きじ一杯と」

「アオリイカを切ってお鍋に入れて煮込めば!!」

「はい!! イカと大根の煮付の完成!!」

どうやら今日の夕食はイカと大根の煮付である。

「いただきます!!」

「おいしいわ!! (わたしも料理できたらこんな簡単なのに、プルルートより料理出来ないなって〜)」

「ぶるるんも料理出来るんだね!!」

「だって〜あたしく裁縫とか〜が得意なの〜」

「そうだったんだ」

たのしい夕食を楽しんだ龍姫達であった。夕食で使った食器を片付け、

龍姫達は風呂に入ることになったのであった。

「ネプテューヌ、あなたの胸触ってもいい?」

「ノワールったら〜いいよ!!」

「柔らかい〜そして大きい〜この重量感」

「お返しだ!! 久々のこの大きき〜もう触れないと思ってたよ〜」

「自分の胸でしなさい!!」

結局、こっちでもネプテューヌはノワールとこうなるのであった。

龍姫達がプルルートの監視に来て風来洞のクエストから数日が経ち、

「ノワールちゃん!! この書類で最後だよ〜」

「プルルート、この頃どうしたのよ? 龍姫達が監視に来てからあれほど嫌がってたクエストに行ったり、わたしの書類の管理を手伝ったりして〜」

「だつて〜ネプギアと龍音には負けたくなかったから〜」

「そういうことなのね〜」

プルルートのこの頃やる気が出たらしく、ノワールはそのことに驚きを隠せないでいた。

理由はネプギア・龍音に負けたくなかったらしくノワールは呆れていたのであった。

「ノワール・ぷるるん!!お昼にしよ!!」

「わ〜い!!お昼ご飯〜!!ノワールちゃん!!お昼ご飯行こうよ〜!!」

「そうね、ちょうどお昼の時間よね!!」

プルルートとノワールはネプテューヌに呼ばれてお昼ご飯を取ることにした。

「今日はカルボナーラにしてみたよ!!」

「いただきます!!」

「おいしい!!これ誰が作ったの?」

「この主人公ネプテューヌが作りました!!」

「ネプテューヌが作ったの!!。(。D。)ノ」

お昼はネプテューヌがカルボナーラを作ってくれたらしく、ノワールは料理でも格の違いを思い知らされた。

お昼ご飯を食べ終えたので食後のお茶を飲んでいたら、

「ブラックハート様!!一大事です!!ラストেশヨンの国境付近にルウイーのホワイトハートが単身で乗り込んできました!!」

「なんですって!!誰か見張りは付いてるの?」

「いいえ、単独の警備だったので、連絡が出来ませんでした!!」

「何してるのよ!!あなたの仕事でしょ!!仕方ないわ!!」

龍姫達「こっちのノワール(さん)は人望がなさすぎるよ〜(；;」

なんとルウイーの女神ホワイトハートがラストেশヨンの国境の近くに来てると警備兵が慌てて入ってきたのだ。

おまけに見張りを付けるのを忘れていたのであった。ノワールはその警備兵を罵倒し得物を手に持ち部屋を飛び出して行った。

龍姫達はあっちのノワール方がいいと思っていた上に、こっちのノ

ワールの人望の無さに遠い目で呆れていたのであった。

「大丈夫か？」

「はい、大丈夫です、あなた方も女神様なんですからね!!」

「そうだよ!!ノワールに辞めさせられたら〜プラネテューヌに来て〜欲しんだよ〜」

「はい、もうこんな部下に思いやりのない女神なんてうんざりです!!
本当の女神はあなた方です!!」

「よかった、じゃあ!!ボクたちもラスティションの国境付近に行こう!!」

「それでしたら、バンディクラツシュにホワイトハートがいます、くれぐれもお体に気を付けてください!!」

「ありがとう!!」

龍姫達はさつきノワールに散々な扱いを受けていた警備兵を慰めたらどうやらノワールについていけなかったらしくプラネテューヌに移住すると言い、龍姫達にノワールに言わなかった情報を教えてくれた。

龍姫達はラスティションの国境に向かうのであった。

神次元ラスティシヨンの国境にて

ラスティシヨンの国境にルウィーの女神が単身で乗り込んで来たとの報告があったのである。

龍姫達はラスティシヨンの国境付近のバンディクラツシユに来ていた。ネプギアに念のため犬姫女神になってもらっているのであった。

スキット：こっちのブラン

ネプ「そいえばこっちのブランはどんなのかな？わたし達の次元のブランは覚醒したからあまり胸のことを気にしてないしね」

プル「ネプちゃん達が知ってるブランちゃんとあまり変わらな
いよ〜」

龍姫「それってつまり」

ギア「小さいままなんだね〜」

「あ、ねえねえ誰かいるよ〜!!?」

突然プルルートはある方向を指して誰かいると言ってきた。

「あれがこっちのブランなの!!（覚醒前のブランだよ）」

その人物のは龍姫達の次元のブランの覚醒前の姿のままなのだ。違いがあるとすれば白の服に赤のラインが入っているだけなのだ。

「こっちも女神化して行かないとね!!」

「まずいぞ!!あの状態って確かねぶっちに聞いてたけど覚醒前は」

「うん、女神化すると」

「常時キレっぱなしになるんだよ!!（。D。ノ）」

「みんな、此処の草陰に隠れて!!」

ノワールは女神化しているブランに無用心に女神化して飛んで行ってしまい、龍姫達は近くの草陰に隠れてノワールの方向を向いて合掌しながら事の成り行きを見ることにした。

「来てあげたわよ!!」

「げ!!こんな時にくんのかよ!!間が悪すぎるぜ!!ちゃらんぼらん顔してんな!!」

「誰がちやらんぽらんな顔ですって!! あ、挨拶が遅れたわね、ラストイシヨンの女神ブラックハートよ!! それにしてもルウイーの女神がこんなちんちくりんなんでね」

(龍姫達) 「ブラックハートじゃなくってグレーハートだろう!! これだったらあつちのノワールの方がブラックハートで「黒衣の断罪者」ぽいな(よ)(;|一|)」

「新国境が聞いてあきれるぜ!! 客をこんなところに待たせるんだからな!!」

「生憎、あなたの様な人を国入れるわけにはいかないんです」

「ルーキー女神が調子に乗るんじゃない!」

「そのルーキーに手こずっているロートルーター女神に言われてもね」

ノワールはブランに会って早々挑発的な態度を取り出し、ブランにちやらんぽらんな奴呼ばわれされたのが効いたのか敵意をむき出しながら自己紹介していたのだが、

それを草陰から見ている龍姫達は自分達がいた次元のノワールの方が何万倍もいと心中に言いながら遠い目で見たいたら、ノワールとブランは子供の喧嘩レベルの言い争いを始めてしまったのだ。

しばらく事の成り行きを見ていたら、

「ブラックハート様!! 事件です!!」

「何があったの?」

「ラストイシヨンの工場が襲撃されました!!」

「なんですって!! ……ここでも言わしてもらおうあなた、クビよ!! さつさと荷物まとめて出て行きなさい!!」

なんとラストイシヨンの工場が襲撃されてたと警備兵が報告してきたのだが、ノワールはクビにしまったのだ。

そのままノワールは襲撃された工場に飛んで行ってしまったのだ。

流星に龍姫達はさっきのノワールの態度を見て

(龍姫達) 「あれじゃあ、人望がないわけだよ、どう見ても、ゲームに出てきた騎士隊長だよ!! (;|一|)」

「大丈夫ですか? もしよかったらプラネテューヌ教会に来てくださ

い」

「いいんですか？こんなダメな人物で」

「何言ってるんだ!!捨てる神あれば拾う神ありって言うだろ!!流石にノワールのあの態度は治さないと!!」

「ありがとうございます!!正しくあなた方は正真正銘の女神様だ!!」

「じゃあ!!ボクたちは工場に向かうね!!」

警備兵を励まし、龍姫達も女神化して襲撃された工場にむかったのであった。

「何してんだわたしは!!」

ブランは放置されたのであった。

コピリーエース参上

龍姫達はラスティションの襲撃された工場にノワールを追いかけながら向かっていた。

スキット：神次元ノワールの態度

ネプ「ノワールったら自分のミスを他人に押し付けるなんて」

龍姫「そうだよね、あれじゃあ秘書が雇えないわけだ、あんな女神土下座しても秘書なんてやらない」

龍音「わたしもお断りさせてもらう」

うずめ「早く、帰ってあっちのノワールに会いたいにやー」

ギア「そうだねーわたしも早くユニちゃん達に会いたいよ」

「あの、工場じゃない？」

「たぶんこの工場だよ!!だって煙が上がってるから」

「急ぐぞ!!」

龍姫達はどうやら目的地の工場に到着したのであった。

「うわーしつちやかめつちやかー」

「工場って言うより、戦場跡だな!!」

「取り敢えず、ノワール探そう!!」

工場を見た龍姫達は無残になった工場を見て戦争中なのかと述べていた。

「誰がこんな真似を・・・一刻も早く辞めさせないと!!」

先に到着していたノワールは木端微塵になった工場の敷地を見て襲撃犯に怒りを露わにしていたのだが、

「壊せー!!壊せー!!コピー出来ないゲームなんて!!壊れてしまえ!!」

「あなた達が工場をこんなにしたの?七賢人の仕業でいいかしら?」

「そのとーおり!!俺様は七賢人が一人コピリーエース様だ!!」

「ほかに誰がいるチュー」

「だったら塵も残さなくらいに叩きのめすだけよ!!」

工場の奥で暴れてるキャタピラが付いたロボットコピリーエースとワレチューが暴れていたのだ。

ノワールは問いたただすのであった。ワレチューがノワールを挑発

しているのであった。

そしてノワールは女神化して戦いの火蓋が落とされたのであった。

「奥に誰かいるみたいだよ!!」

「急ごう!!」

龍姫達は魔物と警備ロボットを倒しながら工場の最深部に向かった。

「此処が最深部だよ!!」

「龍姫に鍛えてもらってなかったら息切らしてお陀仏だったぜ!!」

龍姫達は何とか工場の最深部の扉の前に到着して扉を開けようとしたとき、

「喰らうか!!」

「キヤアあ!!」

「ノワール!!」

ノワールの悲鳴が聞こえて来たのだ龍姫達は恐る恐る扉を開けると

「ワハハハ!!お前らは誰だ?」

「この女神もお終いですちゆね!!・・・チュー!!お前たちは・・・」

「ノワール!!しっかりして!!許さない!!確かにこっちのノワールは最低だったけど」

「おまえらの方がもつと最低だ!!」

「いいだろう、その心意気に免じて名乗ってやる!!俺様はコピリーエース様だ!!」

なんとノワールがコピリーエースに無残な姿にされた上、瓦礫の下敷きされていたのだ。

龍姫達はコピリーエース達に怒りを露わにしていた。

コピリーエースの最後

龍姫達は工場を襲撃したコピリーエース達に怒りを露わにしていた。

「おまえらにこのコピリーエース様に敵うわけがないだろう!!」

「あとで泣いて謝っても許してあげないから!!」

「ここは任せたでチュー!!」

「いいだろう!!この俺様が相手になってやる!!」

「行くよ!!みんな!!セットアップ!!」

この時コピリーエースは龍姫達の相手になるならないうちに知る由もなかった。

「喰らえ!! 幻狼斬!!」

「ちよこまかと!!」

「キヤタピラでわたし達についてこれると思ったか!! デモンスラン
ス・ゼロ!!」

「きかねえ!!」

「そうかしら!! 龍姫直伝!! 裁き時来たれり! 虚空の彼方!! エ
クセキューション!!」

「なんじやこりやあ!!」

龍姫はスピードを活かし擦れ違い様に一閃した後背後に回り込み一閃し、龍音は魔術で闇の槍を呼び出し12発の追尾弾を放ち、ブルルトは龍姫に教わった魔術で闇の波状攻撃を放った。

「ぬおおお!!いい加減にしやがれ!!」

コピリーエースは龍姫達に攻撃が当たらないので苛立ちを隠せな
いでいた。おまけに所々装甲と武装が壊れていた。

「こんなこととして許されると思っつて!! 破邪七支星!!」

「効くかよ!!」

「お嬢際が悪いな!! 魔王炎撃波!!」

「いい加減するにゃ!! 紅蓮剣!!」

ネプテューヌはスピードと二刀流を活かし目にも止まらぬ速さで
斬り刻み、霸王女神化しているネプギアは炎を刀身に纏わせ薙ぎ払

い、うずめは炎の斬撃を飛ばした。

「これでも喰らえ!!・・・あれハッチが開かねえ!!」

「当たり前だよ!!わたしたちの攻撃全部ノーガードで受けてたんだから!! こっちから行くよ!! 飛ばして行きますか!!」

「なんだ!!その光は!!」

コピリーエースは龍姫達にミサイルのハッチなどを全部破壊されたのに気づいてなかったのでハッチが開かなかったのだ!!

龍姫は一刀流の状態で虹色の闘気を放出しオーバーリミッツを発動させた。

「喰らえ!!」

「遅い!! 虎牙破斬!!」

コピリーエースの攻撃をかわし斬り上げ、斬り下ろし、

「秋沙雨!!」

滅多刺しにした後、斬り上げ、

「殺劇舞荒剣!!」

炎を纏いながら体術と斬撃を組み合わせた奥義「殺劇舞荒剣」を浴びせ、

「焼き尽くす!! 天狼滅牙・飛炎!!」

拳で地面を叩き斬り刻み、最後は斬り上げるバーストアーツを叩き込み、

「お終いにしようよ!! 閃け!! 鮮烈なる刃!! 無辺の闇を鋭く切り

裂き!! 仇名す者を微塵に砕く!! 決まった!! 漸毅狼影陣!!」

「ぐああああ!!割れる!! 俺様の最強の体が!!」

「チュードン!!」

最後は標的を中心に陣を描きながら狼の如く四方八方から切り刻む秘奥義「漸毅狼影陣」で止めを刺した。

もろに喰らったコピリーエースは断末魔と共に木端微塵になり、ただの鉄屑になったのであった。

「さようなら!!」

龍姫は決め台詞を言っていた。

「ノワール!!しっかりして!!今、治すから!! 彼の者を死の淵から呼

び戻せ!! レイズデッド!!」

コピリーエースを倒した龍姫達は瓦礫を退かしノワールを引きずり出し、

ネプテユーンは瀕死状態のノワールに治癒術「レイズデッド」を掛けた。

「龍姫くゴフツ!!」

「しゃべっちゃダメだよ!!」

ノワールの状態はレイズデッドを掛けて一命は取り止めたのだが、両手足の骨が大腿骨以外が折れており、おまけに肋骨が折れてるので肺に刺さってる可能性が出てきた、幸い脊髄神経と頭蓋骨の骨折はしてなかったのが救いだった。

「お願い、ゴフツ!! わたしを置いて・・・」

「嫌よ!!」

「取り敢えず、ここから出ないと!!」

「わたしが足を持つから、ギア姉は上半身持つて」

「わかった!!」

龍姫達は工場を脱出しラスティションの病院に搬送するのであった。

天界上層部

ラストイシヨンの工場を襲撃したコピーリースを倒した龍姫達は重傷を負ったノワールを病院に搬送し、今、ノワールの緊急手術が行われているのだ。

しばらく手術室の前のベンチに腰を下ろして待つことにしたのだ。
スキット：今後のこと

ネプ「どうしようノワールが死んじゃったら」

龍姫「大丈夫だよ!!ネプテューヌ、ボクたちだって応急手当やったんだから」

うずめ「そうだぜ、俺達にできることは精一杯やったんだ」

龍音「それに、あのノワールさんだよ!!　こんなことで死んじゃう人じゃないでしょう」

プル「あとは手術のく成功を祈るだけ」

ネプ「そうだよ!!」

「先生!!」

「ノワールは!?!」

手術中のランプが消えたので中から執刀医と数名の医師と看護師とストレッチャヤーに乗った包帯とギブスを巻かれて点滴しているノワールが出てきた。

龍姫とネプテューヌは医師にノワールの容態を聞いた。

「肺に肋骨が刺さっていましたがそれ以外は脊椎の損傷と頭蓋骨の骨折と脳出血は見られなかったので何もなければ時期に良くなるでしょう、ただあの怪我では仕事はおろか日常生活は送るのは無理でしょう、ではこれで失礼します」

「ありがとうございます!!」

肺に肋骨が刺さっていたが、命に別状はなかったので龍姫達はほっとしたのだ。

「ノワール、これからどうするんだろ?」

「そうだよね、こつちには星龍さん達いないし」

「何言ってるの、ボクたちがいるでしょ!!」

ネプテューヌ・ネプギア・龍音はこれからノワールのことについて話していたのだ。

「みなさん!!」

「あれ、ツクヨミ様!! 報告書ならこの前に提出しましたけど」

「その事ではなく、ここ次元のことについて報告があるんです」

「ここ次元のこと?」

麻酔が効いて眠っているノワールが起きるまで待合所のベンチで待っていた龍姫達の前にツクヨミが現れて、今いる次元のゲームギョウ界について報告があると行ってきたのだ。

「実は天界で此処の次元の女神がプルルートさん以外の三女神の仲がよろしくないのです、特にラステイションのノワールさんの態度が上層部の耳に入ってしまったらしく、ノワールさんから神力の剥奪が上層部の会議で決まっちゃいました、わたしが参った次第sで」

「じゃあ!!ここ次元のノワールはもう」

「はい、残念ですが、ですが、もう一つ報告があるんです」

「その報告のゝ内容ってなんなの?」

ツクヨミは天界の上層部の会議で此処の次元のノワールの神力の剥奪が決定したと龍姫達に告げたのだ。

続けてツクヨミは報告があると言ってきたのだ。

「それは此処の次元のゲームギョウ界と龍姫達さん達が住んでいるゲームギョウ界の二つを統合すると言うことが上層部の会議で可決されました。もちろん天照大御神様も賛成されました」

「それってつまり」

「はい、わたしが向こうのゲームギョウ界に送らなくなったのと龍姫さん達が七賢人内、五人を撃退したことによる、天界での龍姫さん達の評価が上がったので、プルルートさんとピーシエさんは一緒に暮らすことが出来ます」

「やったくあたしくネプちゃくン達とく暮らせるんだ」

「それと、ノワールさんの神力は剥奪されますが、星龍達さんの妹になるならいいと天照大御神様は仰っておられましたのでこの黒の覚醒メモリーをお渡しします。それとプルルートさんも龍姫さんの能力

と共鳴で覚醒が可能です。龍姫さんお願いしますよ。ではこれにて失礼します」

獅子神家に養子に入るならノワールにこの覚醒メモリーを渡すよ
うツクヨミは龍姫に渡し、プルルーツは龍姫の能力と共鳴出来たので
覚醒が可能と言いつクヨミは天界に帰って行った。

「プルルーツが覚醒が可能なのか」

「それはそれ、ノワールの女神剥奪はびっくりしたよ!!」

「そうだね!!今日は遅いし教会に帰ろ!!」

龍姫達は教会に帰るのであった。

「いいですか？やった!!久しぶりに龍姫さんの手料理が食べれるんだ!!」

「たまたま龍姫達がいる部屋の前を通りかかったユニは龍姫達に何してると聞いたら、

そのままラスティション教会の宿泊部屋に送られたと説明して朝食を作るのであった。

「いただきます!!」

「今日は大根と牛蒡の味噌汁と鮭の焼き物だよ!!」

「久々に龍姫達の手料理を食べたかったのよね!!」

「そうだったの!!」

今日のは朝食は大根と牛蒡の味噌汁と鮭の焼き物であった。

ノワールは久しぶりの龍姫達の手料理に舌鼓を打っていたのであった。

スキット：外の様子

龍姫「ネプテューヌ外の様子どうだった？」

ネプ「それが、本当にあつちの次元のゲームギョウ界が格国ごとにくっ付いていたんだよ!!」

ノワ「さつき外にネプテューヌを追いかけて行ったら知らない建築物があつたからびっくりしたわ!!」

ギア「本当に二つの次元くっつけちゃったんだね、天界の神様達は」

天龍「いいんじゃない!!」

「そうだ!!ノワール、今日時間ある？」

「少しなら時間はあるけど？」

「一体どうしたの？龍姫ちゃん」

「ちよつと星龍達に会わせてたい子がいるんだよ!!」

「どこにいるんですか？」

「昨日、怪我しちゃったから、病院に入院してるんだ!!その子」

「そうだったの!!お見舞いに行つてあげるわ!!」

「ありがとう!!ノワール」

龍姫はノワールに時間を作れるか聞いたら、少しなら時間が作れると言い承諾した。

龍姫達は星龍達と一緒にあっちの次元のノワールが入院している病院に向かうのであった。

二人の黒の女神

あっちの次元のノワールのお見舞いのため龍姫達は入院している病院の待合所に来ていた。

「受付に行つてくるから待っててね!!」

「わかった!!長椅子に座って待ってる!!」

龍姫は病院の受付に行き、面会許可を貰いに行った。その間、そのほかのメンバーは待合所の長椅子に座って待つことにしたのだ。

「面会許可!!下りたよ!!」

「行くわよ!!」

「うん、確か、女神専用の病室だったね」

「そうだよ!!それじゃあ!!行こう!!」

面会の許可が下りたので、龍姫は女神専用の病室で入院しているもう一人のノワールに会いに行くのだった。

「着いたよ!!みんな準備は良い?」

「いいよ!!」

「じゃあ!!入るわよ!!」

「お邪魔します!!」

「誰!!?龍姫・ネプテューヌなの?」

「ノワールちゃん!!お見舞いに来たよ」

《星龍達》「ええええ!!ノワール!!。(。D。)ノ」

病室に入った星龍達ラステイション組は入院している人物がノワールと聞いて驚きを隠せないでいた。

「ノワール、調子どう?」

「見ての通り、身体中、包帯とギブスでグルグル巻きにされてて、顔の右側に包帯が巻かれてるけど、眼球と角膜は異常がないのと、脊髄と脳に損傷がなかったのが奇跡だつてそれと全治2〜3か月だつてお医者様が言つてたわ。それと龍姫、今日は誰かと一緒なの?」

「うん!!今日はボクの幼馴染み達も来てるんだよ!!」

「こんにちは、龍姫ちゃんの幼馴染みの獅子神星龍だよ!!」

龍姫はベットで安静にしているノワールに調子を聞いたら見ての

通りと答え、星龍は自己紹介をした。

「ユニです!!」

「天龍です!!」

「ラストイションの女神 ブラックハート、この姿での名はノワールよ!!ごめんなさいこんな状態」

「別に構わないわ、そのあなたの名前を教えて欲しいのだけど?」

続けてユニと天龍も自己紹介し、ノワールも自己紹介した。

ノワールはもう一人のノワールに名前を聞いたのだ。

「あなたと同じラストイションの女神ブラックハート、けどこの姿での名は獅子神ノワールよ!!」

「ええ!!あなたもノワールなの!!うぐ!!」

「もう!!怪我してるんだから!!興奮しないの!!」

「龍姫どうなってるの?説明して欲しいのだけど?」

自分と同じ名前だったので龍姫に説明を求めたのだ。すると、

「こんにちは、みなさん!!ツクヨミです!!星龍さん達も元気そうでないよりです、今日は星龍さん達に折り入ってお願いがありまして」

「お願いって何よ!!」

「その前にあることを教えないといけませんでした。実は天界の上層部の会議で二つの次元のゲームギョウ界を統合完了ともう一人のノワールさんの女神の能力の剥奪が決定しました」

「そんな・・・わたしもう女神じゃあ・・・そうよねわたし部下に八つ当たりしちやっただから」

「そんな顔しないでください、龍姫さん以前渡した物は持っていますか?」

「それなら、今持っていますけど?」

「それをこっちのノワールさんに使ってあげてください!!怪我の治療を早めることができます」

ツクヨミが龍姫達の前に現れたのだ。ツクヨミは上層部の会議で決まった内容を説明して、龍姫に覚醒メモリーを入院しているノワールに使えと言ってきたのだ。

「ただし、ラストイションの女神は獅子神家のノワールさんが受け持

つことになりますので、も一人のノワールさんには獅子神家に養子になってもらうことになります」

「それだと、ノワールが二人になちやうけど？」

「それだったら、わたしが名前を変えればいいじゃない!!」

「大丈夫よ!! こっちのゲームギョウ界のノワールはあなたなのだから」

「ええ、選ぶんじゃないくて!! もう選んだのよ!!」

ツクヨミは龍姫達が出張していたゲームギョウ界のノワールを姉妹にするよう覚醒しているノワールに進めたのだ。ノワールは受け入れるのであった。

そしてプルルートの次元のゲームギョウ界のノワールは星龍の妹になることを決めたのであった。

「そうだ!! 名前決めないとね!! 龍菜(りゆうな)ってどう? ボクと龍姫ちゃんと天龍と龍音に共通してる「龍」の文字と菜の花の「菜」を合わせてみたんだけど?」

「いい名前じゃないお姉ちゃん!! 今日からノワール改め獅子神龍菜って名乗るわ!! よろしくねお姉ちゃん!!」

「わたしは双子の姉妹になるけど怪我が治るまでは療養してなさい!!」

「ノワール、ありがとう!! 双子のお姉ちゃん!!」

こうしてもう一人のノワールは名を獅子神龍菜と名乗る決意をしたのだ。

二人の紫の女神

龍姫達は今ツクヨミから天界の上層部の会議で決定した事柄の報告を受けていたのだ。

「取り敢えず、覚醒メモリーを使うね!!」

龍姫は覚醒メモリーをポケットから取り出し、に使ったのだ。

「何、この光、温かい」

「それは覚醒の光なんつですよシェアエナジーの回復速度を早めることが出来るんですよ」

「そうなの!!これからよろしくね!!みんな!!うぐ」

「うん、よろしく!!もう怪我人は寝てなきやダメでしょ!!」

「それじゃあ!!プラネテューヌに帰るけど」

「大丈夫、こっちは何とかするから今日はありがとう!!龍姫ちゃん達!!」

「またね!!星龍!!」

龍姫達はことの成り行きを見届けてプラネテューヌに帰るのであった。

スキット：ラストেশヨンの今後

ネプ 「ノワールは大丈夫かしら?」

龍姫 「大丈夫だよ!!ノワールならすぐ仲良くなれるよ!!なんだって龍菜を双子の妹にしたんだから」

ネプ 「それもそうね!!二人そろってコスプレするわね!!」

ギア 「あり得るな」

「ただいま!!いーすん!!」

「お帰りなさい!!その様子はどうでした?」

「まあ、二つのゲームギョウ界を統合しちやったからね」

「そうですね、実は皆様にお客様がお待ちになられていますので、客間の方へ行ってほしいんですけどよろしいですか?」

「ボクたちにお客様?別にいいけど、みんな客間に行こうか?」

「うん!!」

プラネテューヌに帰ってきた龍姫達は大きい方のイストワールに

龍姫達にお客が来ると言ってきたので、龍姫達は客間に行くのであった。

そこにいたのは、

「ねぷっ!!。(。D。)(ノ」

「お姉ちゃんにそっくりだよ!!(一一。D。(ひいいッ!(。D。(一一)」

「衝撃の事実だよ!!どうしよう!!お姉ちゃん!!わたしに双子の姉妹がいたんだよ!!(一一。D。(ひいいッ!(。D。(一一)」

「落ち着きなよ!!ネプテューヌ!!・・・ツクヨミ様も一緒に来てるみたいだし、あのツクヨミ様説明してもらっても良いですか?」

黒と紫のパーカワンプスを着たネプテューヌにそっくりの人物がいたのだ。おまけに今のネプテューヌと同じく成長した姿だったので、隣に座っていたツクヨミ様に龍姫は説明を求めたのだ。

「この方は確かに「ネプテューヌ」さんですが、この方とネプテューヌさんは別人ですよ!!それと覚醒メモリーをお渡ししましたので女神化が可能です。たまたま二つのゲームギョウ界を統合した時にこの方はこの次元にやってきたのです」

「そうだよ!!あなたもネプテューヌって言うんだ!!よろしくね!!・・・えくと?」

「鳴流神龍姫、こっちのネプテューヌのお姉ちゃんだよ!!」

「同じく、妹のネプギアです、お姉ちゃんに敬語って違和感あるなく」

「同じく、龍音です」

「天皇星うずめだ!!」

「へえ〜龍姫は一番上なんだね!! さっきツクヨミ様から説明があったけど覚醒メモリーを渡されたからもう使っちゃった!!今日から女神化が出来るよ!!それと龍姫にお願いがあるんだけどいい?」

「なに、お願いって?」

龍姫達はもう一人のネプテューヌに自己紹介し、もう一人のネプテューヌは龍姫にあるお願いをしたのだ。

そのお願いとは、

「龍姫の妹にして欲しいんだよ!!」

「それってつまり、わたしと龍音のお姉ちゃんになりたいんですか？」
「うん!! そうとも言う!!」

なんと龍姫達と姉妹になりたいと言ってきたのだ。それを聞いた龍姫は

「いいよ!! けど名前を変えないとね!!」

「それならお姉ちゃんが付けてあげたら」

「そうだな!! 龍姫が付けた方が無難だしな」

「わかったよ!! :ボクと龍音の「龍」と人々から愛される女神になってほしいから「愛」と大空に羽ばたくの意味の「翔」を合わせて龍愛翔《りあと》ってどう?」

「素敵なお名前ですね!!」

「うん!! 今日からネプテューヌ改め鳴流神龍愛翔だね!! よろしくね!! お姉ちゃん!!」

「うん!! 龍愛翔よろしくね!!」

「わたしとは双子ってことでもいいんじゃない!! ってことでわたしが龍愛翔の双子の姉のネプテューヌだ!!」

龍愛翔と名付けたのだ。こうして鳴流神にまた家族が増えたのであった。

二人の緑の女神《ベール》

龍愛翔を家族に迎えた龍姫達は今昼食を作っているのであった。
ツクヨミは先程、また来ると言い残し天界に帰って行った。

「龍愛翔も料理出来るんだね!!」

「お姉ちゃん!! ヒドイ!! わたしだって料理ぐらい出来るもん!!」

「まあまあく落ち着いてく龍愛翔ちゃん!!」

そんなこんなで料理が出来て行き、

「いただきます!!」

「おいしい!!」

「この焼きそば、ソースが効いてておいしい!!」

「どうやら今日の昼食は焼きそばにしたようでみんなで一緒においしくいただき、

「さてと、溜まっているお仕事片付けるよ!!」

「そうだな!! 腹括って行きますか!!」

龍姫達は溜まっているだろうと思われる書類を片付けるため執務室に入って行った。

一方その頃

!! えええ!! お姉さまが二人!! @。o。)σ / (。□。*) / え——

!! 落ち着いて!! チカお姉ちゃん!! こっちのベールお姉ちゃん小さいよ

!!

!! 「誰が小さいですって!! これでも大きいですわよ!!」

「どうしましょう二人とも「ベール」では問題になりますわ!!」

「そうだよね、お姉ちゃん呼ぶとき二人とも反応しちゃうからね」

リンボックスでもこっちの次元のベールと服がウィンドドレス

のあっちの次元のベールが鉢合わせになってしまったのだ。おまけ

にチカが暴走してしまった。

「そうですわねくそうですわ!! わたくしが改名すればいいのですわ!!

そうすればわたくしも神楽堂家に籍を置けるのですわ!! そのお二

人はわたくしがお姉ちゃんになってもよろしいでしょうか?」

「

「うん、いいよ!!」

「けど、名前を付けないとね」

「あなた方にお任せしますわ!!」

あっちの次元のベールも妹が欲しかったようで輝龍と飛龍にお姉ちゃんになってもいいか聞いたら、

輝龍・飛龍はお姉ちゃんになってもいいと答え、名前をつけて欲しいと言ってきたのだ。

「それだったら「翔龍《しょうりゅう》」ってのはどうかな?」

「あなた達が付けてくれた名前なんですわよ!!ですから今日からベール改め神楽堂翔龍ですわ!!」

「それですとわたくしとは双子ってことでよろしいですか?」

「もちろん問題ないですわよ、ベール!!わたくしの双子のお姉ちゃん!!」

「言いますわね!!」

輝龍・飛龍は翔龍と言う名を授け、また神楽堂家に家族が増えたのであった。

(輝龍&飛龍)「ワイイ(≧▽≦)今日からよろしくね翔龍お姉ちゃん!!」

「そうですね、やってみたかったことがあるんですわ!!」

「何するんですの!!ベール!!(;。D。)」

「お姉さま!!何なさっているのですか!!」

「何って自分に抱きつくことは出来ないのですから、こうして翔龍に抱きついてるんですわ!!」

「ベール!!苦しいですわ!!」

ベールは翔龍に抱きついたのだ。抱きつかれた翔龍は顔がベールの胸の高さにあったので、そのままベールの胸に顔を埋もれてしまっていたのであった。

二人の白の女神

神楽堂家に家族が増えたその頃武龍達御子神家でも、

「お姉ちゃんが小さくなってる!!」

「ちがうよ、ラムちゃんこの人お姉ちゃんに似てるけど」

「わかってるやないか」

「どうしたの?・・・テメエ!!誰だよ!!わたしは御子神ブランだ!!」

「おまえも!!」
「ブラン」かよ!!」

白獅子のブランと巫女服のような和服を着たブランがご対面して
しまったのだ。

で結局、

「オメエもブランなんだら、その武器よこしやがれ!!」(???)
「はあ!!何いちゃもん付けてんだ!!」(???)
「ゴルア!!」

(???)
「ゴルア!!」

(ロム&ラム)「どうしよう!!」(。D。)
「ノお姉ちゃん同士で女神化して喧嘩し出したよ!!」

ブラン同士で低レベルの喧嘩をし始めてしまい、ロムとラムは怯えてしまったのである。

「いい加減にせんかい!!」(；・；
「怒」

「痛てっ!!ないしやがる!!」(；・；
「D・」

「お姉ちゃんでも譲れねえんだ!!」

「ほううちよつと頭冷やさへん(へーへ)」

結局、武龍が二人に拳骨をしたのだが、二人は辞めそうになかった
ので武龍は黒い笑みをしながら、

「お姉ちゃん!!許してください!!もうしません!!<m」
「m>」

「許してください!!武龍様!!お許しよ!!m」
「m」

二人にお尻ぺんぺんをしていたのであった。

「武龍お姉ちゃん!!」

「あ、ごめんなロム・ラムもう大丈夫やで!!」

「うん!!」

武龍はロムとラムを落ち着かせたのである。

「そうや、ブランの双子にならへん？」

「なんで!! そうなるんだよ!! そしたらわたしは「ブラン」って名乗れねえだろう!!」

「その手があったな!! ロム!! ラム!! お姉ちゃんが増えるけど?」

ロム&ラム「うん!! いいよ!! やった!!」

武龍は巫女服のブランに家族にならないかと持ち掛けたのだ。

それを聞いたロムとラムは喜びを隠せなかった。

「だったら名前をくれないか?」

「それやったら会った時に思いついてたで、「秋龍☒しゅうりゅう

☒」ってのはどうや?」

「そうね、あなたの雰囲気会ってるし」

「秋龍かく気に入ったぜ!! 今日からブラン改め御子神秋龍だ!! よろしくなお姉ちゃん!! ロム・ラム!!」

「うん!! よろしく新しいお姉ちゃん!!」

巫女服ブランは御子神秋龍と名を改めブランの双子の妹として御子神家に籍を置くことになった。

「どうしたんや秋龍?」

「わたしは胸と身長がないからロムとラムのお姉さんやって行けるか心配なの」

どうやら秋龍は胸と身長がないことにコンプレックスがあったのだ。

「みなさん!! こんにちは!!」

「誰?」

「コラ秋龍!! お姉ちゃんを転生させた人に向かってなんちゅう口の利き方してるんや!! すいませんツクヨミ様」

「いいえ、お気になさらないでください!! これで別次元のゲームギョウ界の四か国の女神がそれぞれの担当の国に来たことにより覚醒が可能です」

いきなり武龍達前にツクヨミが現れ、四か国に別次元の女神が来たことにより覚醒が可能と言ってきたのだ。

「今から、服を買いに行くのは遅いっと思ひまして、この、巫女服を着

てください!!」

「ありがとうな!!ツクヨミ様!!」

ツクヨミは大人用の巫女服を秋龍に渡した。

そして

「ほんじゃあ!!行くで!!この者に眠りし力」

「これが覚醒なの!!」

武龍は秋龍に腕を伸ばし覚醒の儀式に取り掛かったのだ。

「目覚めよ!!」「金色の妖狐」の魂よ!!」

「うわああ!!」

秋龍が金色の光に包まれたのだ。しばらくして光が収まると

「服が〜!!。(。D。)ノってこの服着ればいいのよね!!・・・これでよし!!」

今の秋龍はと言うと

そっくりそのままブランと同じ体型になってしまったのだ。来ていた服が大事なところ以外隠せてなかったのでさつきツクヨミにもらった服に着替えたのであった。

「それとこのバリアジャケットの企画書をお渡しします。もちろんほかの四か国とも渡しておきましたのでそれではみなさんまたお会いしましょう!」

「ありがとう!!ツクヨミ様!!ありがとなお姉ちゃん!!」

「なに言ってるんなねん!!家族なんやこんなの当たり前のことしただけや!!さつきとバリアジャケット作成すんで!」

ツクヨミは天界に帰り、武龍達はバリアジャケットの製作に取り掛かった。

再びの平穩無事

二つのゲームギョウ界が統合され一週間が過ぎたのであった。
プラネテューヌではいつもの通り龍姫達は

「ネプテューヌ!!この書類のチェックしたら終わりだよ!!」

「わかった〜飛ばして行きますか!!」

「オーバリーリミッツしてどうすんの!!。(。D。)ノベシ!!」

〜こんな感じで書類を片付けて行つたのだ。

「ふう〜終わった〜ね〜」

「そうだね〜」

「そうだ〜龍姫ちゃん一つお願いが〜あるんだけど〜いいかな?」

「構わないけど、ピーシエのことなら大丈夫だけど?」

「ピーシエちゃんのことじゃなくって〜あたしも〜龍姫ちゃんのこと
妹になりたいの〜」

プルルートは龍姫に妹にして欲しいと言つてきたのだ。すると龍
姫は、

「何言ってるの、もうプルルートはボクたちの家族になってるんだよ
!!」

「いつの間にく〜手続き〜してたの〜?」

「いつって二つのゲームギョウ界が統合されて時に手続きをしてたん
だよ!!だから鳴流神プルルートになってるんだよ!!位置づけはネプ
テューヌの三つ子の妹にしてあるよ!!」

「ネプちゃんくんの〜妹になつた〜んだ〜あたし〜」

「そうだよ!!胸張つてボクの妹って言えるよ!!」

「よろしくね〜お姉ちゃん!!〜」

「よろしく、プルルート!!」

一週間前の二つのゲームギョウ界が統合された時に手続きを終え
ていたのであった。

「たつぬ〜!!」

「ピーシエちゃんたら気持ちよさそうにお昼ねしてるんだ〜」

「起こしちやダメだから自分の部屋に戻ろうか?」

「そうだね〜お姉ちゃん〜」

龍姫達はピーシエがお昼ねの邪魔にならないよう自分たちの部屋に戻って行った。

一方その頃

「まさかブランに猫耳が生えるとは、秋龍に至っては狐耳やで」

武龍達は一週間前にツクヨミからもらったバリアジャケットの企画書で作成していたバリアジャケットをブランと秋龍が女神化して見たら

「あれ、なんで鎧なんて着てるんだ?・・・ってなんで頭に猫耳生えてんだ!! (。D。) ノおまけに尻尾まで」

「こっちは狐になってるんだよ!!」

「あれってDOG DAYSのレオンとユ○カ○ゼやんか!!」

「いいなくお姉ちゃんだけずるい〜」

二人とも龍姫達の世界のアニメのキャラの服になっておりブランが白い鎧を見に纏った獅子に、秋龍が白の胴丸を装備した白い装束を身に纏った妖狐になっており、

ブランは青みかかった銀髪で、秋龍が白金髪になっていたのだ。

おまけにブランはライオンの尻尾が生えており、秋龍は狐の尻尾がはえていたのであった。

もちろん前に作ったバリアジャケットもあるので大丈夫であった。

一方その頃

「龍菜!! (づ)飯だよ!! あ〜ん」

「(？?；?；) ムシヤムシヤ ありがとう!! お姉ちゃん!! (づ)めんね、こんな妹で」

「なに言ってるの、まだ両手足のギブスが取れてないんだからやっとな顔の包帯が取れたんだから!! よかった、顔に傷が残らなくて!! 顔は女の命だから心配しちゃった!! ○宮も○巢も無事だってお医者さんが言ってたよ!!」

「早く、お仕事手伝いたいなくほかのみんなはもう手伝ってるって言ってるのに肝心な時にわたしはこんな怪我しちゃうだもん」

「まあまあ、龍菜は怪我を治すのがお仕事なんだから焦らずゆっくり

「でいいんだよ!!」

「そうよね、焦っても仕方無いわよね!!だってやっと教会に帰ってこれたんだもん!!」

「そうだよ!!じゃあ!!何かあったらデバイスで呼んでね!!」

「わかったわ!!お姉ちゃん!!お仕事頑張ってるね!!ふうくしかしこのデバイスどういう仕組みなのかしら?」

龍菜が病院から退院し教会に戻って来ていたのだ。その時ツクヨミからもらったデバイスがどのようなになっているか気になっていたのであった。

楽しいお買い物

二つのゲームギョウ界が統合され、龍姫達はプラネテューヌにある百貨店に食材と洗剤などの消耗品を買いに来ていたのであった。

「今日はすき焼きにしようつと!!」

「すき焼き!! やった!!」

「すき焼き〜!!」

「龍愛翔も買い物手伝ってよね!!」

「はい(´ω´)ノ」

そんなこんなで龍姫達は豆腐に牛肉にネギに糸こんにゃく椎茸などの食材を買い、この後消耗品も買い龍姫達は教会に帰るのであった。

「いーすん、ただいま!!」

「お帰りなさい、どうでした? お買い物方は?」

「大丈夫だったよ!!」

「それは安心しました!!」

「買ってきたものを冷蔵庫に入れてこないとね!!」

教会に帰ってきた龍姫達はイストワールにただいまと言いい冷蔵庫に食材を入れに行った。

「さてと、始めるとしますか!!」

「まずはお砂糖とお醤油を入れて」

「お肉を〜入れて〜煮込んで〜」

「ネギ切って!!」

「お豆腐を切ってと!!」

龍姫達は夕食のすき焼きを作ることにしたのであった。もちろん全員で作っている。

「それじゃあ!!」

「いただきます!!」

「おいしい!!」

龍姫達は夕食を楽しむのであった。龍姫達は夕食を食べ終えたので使った食器を片付け、お風呂に入るのであった。

「こうしてみるとお姉ちゃんと龍愛翔お姉ちゃんってそっくりなんだね!!」

「そうだよね、二人とも体型が同じだし、その上二人とも右利きで二刀流まで一緒だから今の状態で見分けがつかないね!!」

「確かに知らない奴が見たら間違えるな!!」

お風呂に入っているネプギア・龍音・うずめはネプテューヌと龍愛翔のことで話が盛り上がっていた。

「ほんじゃあ!! 上がろう!!」

お風呂から上がるのであった。続けて、

「龍愛翔と一緒にお風呂に入ると自分が二人いる感覚だよ!!」

「なに言ってるのネプテューヌとは双子同然なんだから、おまけに女神化してもそっくりなんだから」

「確かにそうだよね、おまけに胸の大きさも一緒だもんね!!」

「何言ってるの!!」

ネプテューヌと龍愛翔がお風呂に入ってきたのである。二人は仲良くお風呂を満喫し、お風呂から上がるのであった。

「お休みお姉ちゃん!!」

「うん、明日もお仕事があるからね!! じゃあお休み〜(――) z z z」

龍姫達は寝間着に着替え、明日に備え寝ることにしたのだ。龍愛翔はネプテューヌ・ネプギアと一緒に部屋で就寝しているのである。

翌日、龍姫達は

「ベーコン焼けたよ!!」

「こつちも目玉焼き焼けたよ!!」

「ご飯も炊けたぜ!!」

「それじゃあ!!」

全員「いただきます!!」

「おいしい!!」

「この目玉焼き焼き加減もちょうどいい!!」

朝食でベーコンを焼き、目玉焼きを作り、楽しく朝食を済ませた後、「今日のお仕事はパナソニックでモリガニの討伐クエストが教会に寄せられました」

「わかった!!みんな行くよ!!」

「いざパナンジヤングルに出陣!!」

「いざ鎌倉のノリなのんだね」

執務室でイストワールの二人から教会に寄せられたモリガニ退治を受け龍姫達はパナンジヤングルに向かうのであった。

決める!! 冥空斬翔剣!! &冥王麗姫!!

教会に寄せられたモリガニを討伐するため龍姫達はパナンジャングルに来ていたのであった。

「龍愛翔!! 刀の準備できてるよね?」

「もちろん、抜かりないよ!!」

「どうやら、敵さんのお出ましだぜ!!」

「それじゃあ!! みんな行くよ!!」

どうやら龍姫達に気づいたのか、討伐対象のモリガニが現れたので、

龍愛翔は同じ長さの打刀を二振りとも抜刀し、龍姫達も各々の得物を構え、

「手始め!! 魔神剣!!」

「蒼破刃!!」

「サツと吹いてサツと斬ってウインドカッター!!」

「灰燼と化せ!! エクスプロード!!」

「空破絶風撃!!」

龍姫は斬撃で牽制し、ネプギアは紫色の風の斬撃を放ち、プルルトは風の魔術で攻撃し、うずめは魔術で爆風を熾し、龍愛翔は風を纏った突きを繰り出した。

「まだ倒れそうにないよ!!」

「こうなった!! 飛ばして行きますか!!」

「龍愛翔!!」

モリガニはまだ倒れてなかったので、龍愛翔は虹色の闘気を放出しオーバーリミッツを発動した。

「行くよ!! 崩襲脚!!」

飛び上りながら蹴り落とし、

「秋沙雨!!」

二刀で滅多刺しにし、

「翔雨裂空撃!!」

連続で突き斬り上げた後、そのまま縦回転斬りで追撃し、

「焼き尽くす!! 天狼滅牙・飛炎!!」

炎を刀身に纏わせ滅多斬りにするバーストアーツに繋ぎ、

「負けるものか!! 冥空斬翔剣!!」

右手に持つ刀で袈裟斬りにし、左手に持つ刀でさらに斬り込み、さらに逆風に斬り上げて、最後は叩き斬る秘奥義を繰り出しモリガニは光になって消えていた。

「華麗に大勝利!!」

龍愛翔は決め台詞を言ってるのあった。

「ほんじゃあ!!モリガニも倒したし、教会に帰るよ!!」

モリガニを倒した龍姫達は教会に帰るのであった。

スキット：冥空斬翔剣

ネプ「龍愛翔、あの秘奥義を二刀流でやるなんつて」

龍姫「うん、あれ普通一刀流でも難しい秘奥義なんだよ!!」

龍愛翔「そうだったの!!実は「天翔蒼破斬」か「神裂閃光斬」か「緋凰絶炎衝」で迷っていたら、この秘奥義が思いつちゃったんだよね!!」

ギア「流石、お姉ちゃんの双子の妹だね!!」

「ただいま!!」

「お帰りなさい、みなさんご苦労様でした!!今、ツクヨミ様が来られていたのですが、プルルートさんのバリアジャケットの企画書などを龍姫さんに渡すよう言付かっています」

「それってつまりふるるんが覚醒が可能になったんだね!!」

「お姉ちゃんみたいな胸が大きくなるんだ」

教会に帰ってきた龍姫達はプルルートが覚醒が可能とツクヨミがバリアジャケットの企画書と私服の企画書などをイストワールに預けていたのだ。

「それじゃあ!!プルルート行くよ!! この者の眠りし力よ」

「あくん」

「なんで色っぽいんだよ!!」

龍姫は腕を伸ばしプルルートの覚醒の儀式を開始した。

「目覚めよ「冥王麗姫」の力よ」

「あくん!!・・・お姉ちゃん!!ボインボインだよ」

「プルルート!! 服着やがれ!!」

「この大きさのこの服って持ってないよ」

「大丈夫だよ!! きつきもらった企画書で作ってあげるからね」

プルルートはと言うと、

身長が164cmになっており、胸が女神化した時と同じ大きさになっており、

服が大事なところ以外は隠せてない状態なので

「できたよ!!」

「ありがとう!! お姉ちゃん!! へえ、下着まであるんだ、これでよし」

急いで龍姫は企画書でプルルートがいつも来ている服の大人用を作り上げたのだった。

「なんで? 髪型がノワールちゃんと同じなの?」

「流石にそこまではわからないよ!!」

どういうわけか髪型がサラサラヘアのツインテールになっていたのだ。

冥王の戦闘服

プルルートが冥王麗姫の力に目覚め、龍姫達はバリアジャケットを作成しているのであった。

「これをこうして・・・できた!!」

「できたの〜?」

「それじゃあ!!プルルート、女神化してみて!!」

「わかった〜変身!!・・・なかなかいいじゃない!!窮屈じゃあないわね!!うふん♡」

プルルートのバリアジャケットは、

紫を基調としていて、胸も大きくなっているが、覚醒前に着ていたプロフェッサーユニットは露出が多かったのだが、このバリアジャケットは大きくなった胸を覆うように胴丸が装着されているが、胸の形になってなく、龍姫達と同様に武士のような板状で黒みかかった紫になっており、下は長ズボンにレガースが付いたブーツが装着され、両手には籠手が装備されていたのであった。で関節剣だったのが、龍姫達と同様に紫色の刀身の刃渡り二尺三寸の日本刀が二振りになっており、ちゃんと左腰に二本差しに装備する剣帯ごと装備されていた。身長が173cmになっている

「お姉ちゃん〜このアーマー外しちゃダメ?」

「絶対ダメ!!下にインナーウェア着てると言え、絶対ダメだよ!!あのベールでさえ装備してるから」

「わかったわよ、お姉ちゃんに免じて諦めるわ!!(あたし的にはこの大きくなった豊満の胸を強調したかっただけなのに)」

「まあ、気持ちはわかるけどね〜」

「どうやらプルルートは胸を露出させたかったのだが龍姫に止められてしまったのだ。」

「わたしも刀なのね!!前の関節剣と鞭は?」

「それなら使えるよ!!ただ標準装備が刀だけだから」

「よかったわ〜お仕置き出来ないと思っただじゃあない!!」

「ぶるるん〜!!いい加減に女神化解いたら?」

「そうね・・・疲れた〜」

「それじゃあ!!みんなでお昼にしようか!!」

「わ〜い(≡▽≡) お昼〜」

龍姫達は一段落したので、お昼にするのであった。

「今日のお昼は焼うどんだよ!!」

「いただきます!!!!」

「おいしい!!」

今日のお昼は焼うどんを作り、みんなで作ることにしたのだ。

「しかし、ネプテューヌもそうだけど、プルルートもよく食べるね!!」

「だって大きくなったから〜」

「そうだよね、しょうがないわたしが新しい炊飯器作ってあげるから

ね!!」

「流石!!ギア姉!!」

どうやらいつもの五合炊きの炊飯器では足りなくなってしまったのでネプギアが一升炊きの炊飯器を作ってあげるといつてくれたのであった。

スキット：プルルートのバリアジャケット

龍姫「そういや、プルルートのバリアジャケットのモデルってソフィの服だったよ!!」

プル「そうだったの〜」

龍音「そうだよ!!今のプル姉の姿だって大人になったソフィだもん」

ネプ「あ、確かに言われてみれば、ゲームで出てきたキャラに似てるもんね!!」

プル「ツインテールになったわけがそのソフィちゃんさんの髪型なんだね〜」

龍姫「まあ、ラスボス倒すとロングヘアになるけど」

黒の双子と緑の真実の守護者

龍姫達がお昼を食べてる頃、

「ご飯よ!! 龍菜!! あ〜ん」

「いただきます!! (???) ムシヤムシヤ」

「どう、美味しい?」

「おいしいわよ!! ノワール、はあ(●・△・) はあ〜」

「どうしたの? ため息なんて吐いちやって」

星龍達もお昼にしていたようで今日はノワールが龍菜にご飯を食べさせていたのだが、龍菜はため息を吐いていたのでノワールはどうしたのか聞いたら、

「ユニと天龍も一生懸命に頑張っているのに肝心な時にわたしはこんな怪我で動けないなってそれにほかのみんなはもうノワールみたいに覚醒の儀式を終えたって言うのに!!」

「龍菜!! 何言いたいかわかるものだって龍菜ほどの怪我じゃなかったけど、わたしもドツジって怪我して肝心な時に戦えないことがあったの!!」

「え!! ノワールにもわたしと同じことを経験したの?」

「そうよ!! あの時はネプテューヌに勝とうと思ってたの、自分でも何やってもネプテューヌに勝ったことあまりないのに、唯一勝てるとしたら勉強意欲ぐらいかしらけど今は龍姫・龍音・うずめがいるからわからないけど」

「そうだったの〜」

「どうやら龍菜は自分が仕事を手伝えないこと悔やんでいたのだが、ノワールは昔の自分のことを話し励ました。

「だから、龍菜、焦っても意味がないの!! 龍菜は今できることをすればいいの!!」

「そうよね、ノワールお願いがあるんだけどいいかな?」

「いいわよ、でお願いって?」

龍菜はノワールにお願いをしたのだ。

「今日、夜、添い寝してほしいの」

「添い寝!!Σ(。D。)いいわよ」

「よかつた〜グフツ」

「もう、あなたは怪我人なのよ、ただでさえ両手足がギブスでグルグル巻きになってるのよ!!」

「わかっているわよ!!そんなこと、あとお姉ちゃんにも添い寝してもらいたいから」

「お姉ちゃんにはわたしが言つといてあげるからね!!何かあつたらその首に掛けてるデバイスで念話飛ばしてくれば来てあげるわ。じゃあ!!わたしは仕事に戻るから」

「わかつたわ!!」

なんとノワールに就寝時に添い寝して欲しいと言つてきたのでノワールは承諾し、星龍には自分が伝えると言い仕事に戻るのであった。

一方その頃

「じゃあ!!始めるよ」

「翔龍お姉ちゃん!!」

「いつでも行けますわ!!」

リーンボックスで輝龍・飛龍は翔龍の覚醒の儀式に取り掛かったのだ。

「この者眠りし力よ!!」

「あう〜ん!!これが覚醒なのですの」

二人は翔龍に腕を伸ばしたのだ。すると翔龍は緑色の光が包み込んだのだ。

「目覚めよ「真実の守護者」の力よ!!」

そして光が収まると、

「これがわたくしなのですか…キャーわたくしの服が!!Σ(。D。)おまけに胸が大きくなっていきますわよ!!Σ(。D。)こんなに大きくなってしまったら着れるお洋服がありませんわ!!」

「そんなことだろうと思って、ハイ、この服を着てね」

「これってパーカですわよ!!けど大きいですわね!!・・・ふうく一時はどうなることかとありがとう輝龍・飛龍わたくしの大切な妹」

「それほどでもないよ!!しかしベールお姉ちゃんと双子だなんて感じがするね!!」

「そうですわね!!ドレスが名残惜しいですけど」

「それなら胸の露出してないのなら前に企画書出してあるからもうお店に並んでたよ!!」

「そうなのですの!!しかし胸は女の武器の一つですけど仕方ないのですわ!!今から買いに行つてきますからベールには言つといてくださいね!!」

「いちやっただね!!さてと、ベールお姉ちゃんに伝えに行きますか!!」

翔龍も覚醒したのである。その姿は今のベールに瓜二つなのであった。

翔龍は「真実の守護者」の称号を修得した。

各国の事情

翔龍が真実の守護者に目覚めた頃

「そっち行ったぞ!! ブラン!!」

「おう!! 任せとけ!! 喰らえ!! 獅子戦吼!!」

「お姉ちゃん達気合い入ってるね!!」

「そうやな!! この調子で行くぞ!!」

武龍達は教会に寄せられたクエストで魔物退治に来ていたのであった。

「どうやら、こいつが頭みたいだな!!」

「どうする!! こっちが決めてやっても良いだぜ!!」

「そうだな!! 秋龍!! お前が決める!!」

「おう!! 飛ばして行きますか!!」

魔物のボスらしき魔物が現れたのでブランは秋龍に任せて、秋龍はオーバーリミッツを発動させ、虹色の鬨気を纏った。

「行くぞ!! 弧月閃!!」

斧で月の軌跡を描き、

「翔月双閃!!」

更に月を描き、

「双月爆連舞!!」

斧で地面を叩き石つぶてを飛ばし月を描き追い打ちする奥義に繋げ、

「腹括れよ!! 天狼滅牙!!」

拳を地面に叩き付け怯ませ連続で攻撃するバーストアーツに繋げ、

「しぶといな!! 仕留めてやるぜ!! 森羅!! 爆碎!!」

回転斬りをしそのまま上空に舞い上がり斧を地面に魔物ごと叩き付け粉碎する秘奥義で止めを刺し魔物は光になって消えていた。

「相手が悪かったな!!」

秋龍は決め台詞を言っていたのだが、

「斧が」

「わたしもだ」

「どうやら秘奥義に耐えきれんようになったちやう」

なんとブランと秋龍の斧が音を立てて砕けてしまったのだ。

「どうするのお姉ちゃん!!」

「心配するな!!また買えばいい、教会に帰ろぜ!!」

「そうね!!流石におなか空いたわ」

武龍達は教会に帰るのであった。

一方その頃

「龍姫!!折り入って話があるんだがいいか?」

「どうしたの?うずめ?」

プラネテューヌではうずめが龍姫と二人きりで話しており、うずめが龍姫にある頼み事をしていたのであった。

「前から思っていたんだが、俺を龍姫達の家族にしてくれ!!頼む」

「そんなこと気にしてたのわかった、うずめがそこまで言うなら養子縁組の手続きをするけど?天王星じゃなくなるよ!!」

「選ぶんじゃねえ!!選んだんだよ!!ピーシエには悪いけど、俺は女神なのに自分の故郷も守れなかった駄女神なんだよ!!」

「そんなことないよ!!ボクにはそうは見えない!!確かに男勝りなところあるけど、うずめはれっきとした星光魔王の女神なんだよ!!」

「龍姫。。。 (。O。)。 。 。 わくん」

「よしよし泣きたい時はいつでも言っとうずめは女の子なんだから!!」

「うん!!お姉ちゃん!!」

「わかったよ!!いーすんに頼んでうずめを鳴流神家に籍を作ってもらってあげるからね!!」

うずめは龍姫達の姉妹になりたいと言ってきたのだ。龍姫は理由を聞くと自分には何もないと涙を流しながら言ってきたのだ。それを聞いた龍姫はうずめを抱き泣き止むまで待ち、イストワールに頼みうずめを鳴流神の戸籍を作ってくれるよう頼んだのだ。

「そんなことだろと思ってもう作ってあるだよ!!」

「どういうことだ!!まさか」

「うずめがここに保護された時にツクヨミ様がうずめの戸籍を作って

くれたんだよそれも「鳴流神うずめ」でね」

「つまり俺も龍姫と龍音と同じ女神で転生者ってことか」

「そうだよ!! まあ、ライブの時に天王星っていちやったけど!! 問題ないよ!! うずめはうずめだし!!」

「あはは!! なんか急にほっとしたら腹減った」

「仕方ないなくそうだ冷蔵庫にボクが作ったプリンがあるんだった!!
一緒に食べよう」

「そうだな!! お姉ちゃん!!」

龍姫はうずめがツクヨミによつて転生させられた女神であることを教えたのであった。

一方その頃

「龍菜!! 入るわよ!!」

「入るよ!!」

「ごめんねいきなり添い寝して欲しいって言っちゃって」

「別に構わないわよ!!」

「そうだよ!! 姉妹なんだから遠慮なつていらないよ」

星龍とノワールは龍菜に頼まれていた添い寝をするため龍菜の部屋に来ていた。

「今日は女神化して添い寝してあげる」

「そうね、ただ寝間着着て添い寝するのもね、アクセス!!」

「お姉ちゃんとノワールっていつもは着痩せしてるからわからなかったけど大きい」

「そうだこうしてあげる!!」

「お姉ちゃん!! 頭に柔らかいものが・・・って胸が当たってるわよ!! なんでわたしの胸揉んでるの!! おまけにノワールまで」

「こうした方が、」

「クツシヨンになるでしょう!!」

「ありがとう!! お姉ちゃん!! ノワール・・・気持ちいい!!」

今の状態は龍菜の右半分をノワールが、左半分を星龍が女神化して、龍菜の両腕に巻かれているギブスとベットの間に体をすべり込ませていたのだが、ちょうど二人の大きい胸が龍菜の顔を覆いかぶさつ

ていたのである。なぜか二人は龍菜の胸を揉んでいた。

もう一人の黒衣の断罪者

星龍とノワールは龍菜と一緒に添い寝をしてそのまま、

「龍菜、ノワールお休み（――） z z z」

「お姉ちゃん、龍菜も寝ないと朝起きられないわよ（――） z z z」

「お姉ちゃん!! ノワールもう、けどこのまま寝ちゃおうかしらお休み

（――） z z z」

三人とも深い眠りについたのである。そして翌日、

「おはよう、お姉ちゃん、龍菜；つ旦、」

「おはようノワール、龍菜；つ旦、」

「おはよう、お姉ちゃん、ノワール；つ旦、」

何事もなかったのように起きたのだが、

「ちよつといいかしら、お姉ちゃん!! ノワール!! いつまでわたしの胸驚掴みにしてるの!!」

「ごめん龍菜」

「どうやらこのまま寝ちゃったみたいね!!」

「まあ許してあげるわよ!! それよりこんなところユニと天龍に見られたら大変よ!!」

「そうね!!」

「じゃあ!! 着替え終わったらまた来るからね!!」

そう言って星龍とノワールは龍菜の部屋をユニと天龍に見つからないように出て行き自分の部屋に戻り、

「龍菜!! 寝汗すごかったからバスタオル持ってきたよ!!」

「お姉ちゃん、ありがとうってわたし自分で拭けないわよ!!」

「何言ってるのボクが拭いてあげるって!!」

星龍は龍菜が寝汗を掻いていたらしくバスタオルで拭いてあげることにしたのだ。

「どう? 龍菜!! 気持ちいい?」

「気持ちいいわ!!」

「さてと、此処は入念的にやらないとね!!」

「確か、胸の周りは入念に拭いて欲しいの、お姉ちゃん達の方が大変そ

うだけど」

「まあ、大きいと大変なこともあるけどね」

「くすぐつたい!!」

「これで良し!!服も着させてあげるね!!」

星龍は龍菜の胸の周りを拭いて、服もきさせてあげるのであった。

それから二週間が過ぎたのである。

「それじゃあ行つてきます!!」

「それじゃあ!!行くよ!!龍菜!!」

星龍は龍菜を車椅子に乗せ病院に向かうのであった。

「ギユイーン!!はい、終わりましたよ、流石女神様の姉妹であられるお方なのですね!!初診では2〜3か月は治るのに掛かる上に、リハビリに二週間は必要なのですよ。では気を付けてお帰りください」

「ありがとうございます!!先生!!」

「龍菜!!松葉杖なしでもう歩けるんだ!!」

「ごめんねお姉ちゃん、心配かけちゃつてもう大丈夫だから!!」

「それならよかつたよ!!教会に帰ろう!!」

「うん!!」

龍菜はギブスが取れたのであった。おまけに普通は松葉杖がいるのだが、覚醒メモリーの効果で普通に日常生活を遅れるまで回復していた。

星龍と龍菜は教会に帰るのであった。

「ただいま!!」

「お帰りなさい!!お姉ちゃん!!龍菜お姉ちゃん!!」

「もう動けるまで回復したのね!!」

「ごめんね心配かけちゃつて」

「何言つてるの姉妹なんだから遠慮しなくっていいのに」

「それもそうね!!」

教会に帰ってきた星龍と龍菜をノワール達が出迎えてくれたのである。

「そういえば、さつきツクヨミ様が龍菜お姉ちゃんが覚醒できるまでのシエアエナジーが貯まつたつて連絡があつたわ!!」

「でも、わたし怪我で何もやってないのいいのかしら？」

「何言ってるのよ!! せっかく女神に戻れたんだし素直に受け入れたら!!」

「それもそうね!! じゃあ!! お願いお姉ちゃん!!」

「それじゃあ!! 行くよ!! 龍菜!! この者の眠りし力よ!!」

「キヤアあー!」

どうやらツクヨミがノワール達に龍菜が覚醒できることを告げ、星龍は龍菜に腕を伸ばし覚醒の儀式を行った。龍菜を黒のオーラが包み込んだ。

「目覚めよ「黒衣の断罪者」の力よ!!」

「これがわたしなの!!・・・服が!! どうしよう!! おまけに胸が!!」

オーラが消え今の龍菜は、

今のノワールとそっくりそのままの体型になってしまったのだ。

おまけに元々お腹と肩が露出していた服を着ていたのだが、服が破け、物凄い状態になっていた。

「やっぱりこうなるんだね!! はい、この服着て!!」

「ありがとうお姉ちゃん!!・・・これで良し!!」

「よかった!! 前に企画書で胸が大きい人ための服を作つといたんだ!! もちろん自分が着るためだけだ」

「この服気に入ったわ!! それとこのスポーツブラもかわいい柄と装飾が付いてるのね!!」

「胸が大きくてもかわいいブラはつけたいものよ!!」

「そうよね!! ありがとうお姉ちゃん!! ノワール!!」

龍菜は星龍が前に企画書で作っていた胸が大きい人用の露出がない衣服「エクエステイオー」を龍菜にあげたのだ。もちろん黒色である。

統合されし白の大地に向かつて

龍菜は星龍に作ってもらった「エクエステイオー」という服のことについて聞いていた。

スキット：エクエステイオー

龍菜「お姉ちゃん!!胸が大きくても目立たないようにしてるのね!!」

星龍「そうだよ!!その服はほかの服と違って着る人を選ばないから胸が大きくても着痩せして目立たなくて、息苦しくないように作つてあるからね!!それと前に着てた服、お腹が出て、冷えるといけないからちゃんとお腹を冷やさないようになっているから、もちろん一年中着られるようにしてあるよ」

ノワ「そうなの!!じゃあ!!わたしの今着てる長袖が付いてる黒と白の基調にした「ミラセリア」も同じなの?」

星龍「もちろんそうだよ!!もちろんユニの着てる「ワンピースドレス」も同じように生活性と戦闘面を配慮してあるんだよ!!もちろんボクと天龍が今着てる服も性能は一緒だよ!!」

ユニ「そうだったんだ!!この服念のため三着買っちゃったからね!!もちろん自分のお小遣いで買ったんだからね!!この服だけだと心細いからから一応、ブレザー羽織ってるけどね!!」

天龍「ボクも上にマントのようなジャケットを羽織ってるよ!!」

龍菜この「ニバンボシ」をあげるね!!流石に刺突剣じゃあこれから使つて行く術技は強度が持たないから、それとノワールとお揃いなんだよ!!」

「そうね!!ちようど新しい得物が欲しかったところだったのありがとうお姉ちゃん!!」

「どういたしまして!!」

龍菜は星龍から龍姫が作った「黒衣の断罪者」の愛刀「ニバンボシ」をプレゼントされたのであった。

ところ変わってプラネテューヌでは

「龍愛翔の場合は力だけ覚醒させればいいんだよね!!それじゃあ!!始

めるよ!!この者の眠りし力よ!!」

「ねぷく!!」

龍姫は龍愛翔の覚醒の儀式を行っていた。

「目覚めよ「大地母神」の力!!」

「あれ?何も変わってないよ!!」

「当たり前だよ!!龍愛翔はちゃんと成長してる姿で覚醒の儀式をしてるんだから!!力だけ目覚めさすだけだよ!!」

「そっか!!忘れてた!!」

龍愛翔は「大地母神」の称号を修得した

「今日のお仕事ってどうなってるのいーすん?」

「今日から三日間はみなさんは休暇になっています」

「それじゃあ!!ルウィーに遊びに行こうよ!!」

「そうだね!!そういえば出張した時ルウィーとリーンボックスには行ってなかったな」

「ならルウィーに行こうぜ!!」

「プラネタワーの屋外展望台に準備が出来たら集合だよ!!」

「わかった!!」

龍姫達はイストワールに予定を聞いたら今日から三日間は休暇になったので龍姫達はルウィー↓リーンボックスの順に回る予定にしたのであった。

「いーすん!!行ってくるね!!ピーシェいい子にお留守番しててね!!」

「いってらっしゃいませ!!ピーシェさんは責任を持って面倒を見ますので!!」

龍姫達はイストワールにピーシェの子守を任してプラネタワーの展望台から女神化してルウィーに飛んで行くのであった。

不適合者

三日間の休暇になった龍姫達は統合して初めてルウイーに行くのであった。

「見えて来たわよ!!」

「此処がルウイー!!」

「統合してから初めて来るからまさかとは思ってたけど」

「取り敢えず、降りてみるか」

龍姫達は統合されたルウイーに降りるのであった。

「雪が積もつてるところとく積もっていないところがあるよ」

「前にお姉ちゃんが見してくれた本に載ってたお姉ちゃんと龍音がい
た世界の日本の都市の古都「京都」って場所に似てるんだが」

「そうだよ!!おまけに京都の伏見にある「伏見稲荷大社」と宇治にある

「平等院鳳凰堂」と「金閣寺」に「銀閣寺」まで!!」

「それに「平安神宮」と「清水寺」と「八坂神社」まであるよ!!」

龍姫達は龍姫と龍音がいた世界の歴史の教科書で見た京都の街並みに似ていたのであった。

「取り敢えず、教会に行こう!!」

「そうだよね、話はそこですればいいし」

龍姫達は一先ず教会に向かうのであった。

「ブラン!!遊びに来たよ!!」

「あらあなた達!!いらっしやい!!秋龍出てきなさい!!」

「ブランの双子の妹 御子神秋龍よ!!旧姓はブランよ」

「そうだったのくアタシも名字が付いたんだよ」

「プルルートつたら!!ネプテューヌ達の姉の鳴流神龍姫」

「龍愛翔だよ!!」

「鳴流神うずめだ!! 旧姓は天王星だ!!」

龍姫達は教会に到着して中に入りブランが秋龍を紹介し、各々自己紹介をした。

「ブラン!!町が京都になってたよ!!」

「わたしも外に出た時びっくりしたから!!」

「ネプギアちゃん!! 龍音ちゃん!!」

「ロムとラムも元氣そうだね!!」

「ネプギア・龍音、ロム達と遊んで来たら」

「そうするよ!! じゃあ行こうか」

「うん!!」

ネプテューヌはブランに町が京都になっていたことを言ったら、ブランは外に出た時のことを教えてくれ、ロムとラムはネプギア・龍音と遊ぶため自室に行った。

「そうだわお茶をしながらお話ししない」

「別にいいけど!!」

ブランは龍姫達にお茶を飲みながら雑談をしたいと言ってきたので龍姫達は執務室に案内されたのだ。

「ブラン話って何?」

龍姫はブランに話とは何か聞いたのだ。すると、

「あなた達、女神メモリーは知っているわよね」

「うん、確か適合しなかったら魔物化しちゃう危ない代物だよね!!」

「そう、その女神メモリーを使って魔物化しちゃってる女の子がいるのよ」

「なんだってΣ(？∩?)!!」

「(〇^)/ねぷつち!!」

なんと女神メモリーで不適合者が魔物になるとブランが教えてくれたのだが、それを聞いたネプテューヌは驚きの余り固まってしまったのであった。

魔物化

龍姫達はブランから女神メモリーを不用意に使ってしまった魔物化してしまった少女を助けるため龍姫達は現場に来ていたのであった。

「あの子が女神メモリーを使っちゃって魔物化しちゃった子なの？」

「報告でそう聞いているわ」

「どうすんだよ!!このまま攻撃したら殺しちゃうぞ!!」

「助けて〜」

うずめの言う通りこのまま攻撃したら少女は死んでしまうのである。

「どうしよう!？」

龍姫達が打開策を考えていたら、

「みなさん!!聞えていますか?」

「ツクヨミ様!!」

ツクヨミが龍姫のデバイスを通して念話を送ってきたのだ。

「龍姫さん、治療術「レイズデッド」を少女に掛けてください!!」

「わかりました!!ツクヨミ様」

ツクヨミは龍姫に治療術「レイズデッド」を魔物化している少女に掛けるよう言ってきたので、

「助けて〜よ!!」

「今、助けてあげるからね、彼の者を死の淵より呼び戻せ!! レイズ

デッド!!」

「お姉ちゃん?」

「龍姫!!何、回復魔法掛けてんだ!!」

龍姫はツクヨミに言われた通りレイズデッドを魔物化している少女に掛けたのだ。

それを見ていたブランは龍姫に突っ込んだ。

「あれ見て!!魔物が」

「女の子に戻って」

「いるのかよ!!」

「ふう〜どうやら気を失っているみたいだね!!」

「これって女神メモリーだよ!!」

「ホントだ!!」

魔物は龍姫が掛けた治癒術「レイズデット」の効果で龍姫達と同じ年頃の髪がオレンジ色のツインテールで胸が大きい女の子の姿に戻り女神メモリーは分離し、女の子の側に落ちたのである。

「龍姫!!どうなってんだ!!?」

「ツクヨミ様がレイズデットを掛けたら元に戻るって教えてくれたんだよ!!」

「そうだったの〜!!」

「この女神メモリーはどうしよう?」

ブランは龍姫にどうなってるか聞いたら、ツクヨミが教えてくれたと答えたのであった。

「取り敢えず、教会に戻る!!」

「そうだよね、休憩しよう!!」

女神メモリーを回収し女の子を保護した龍姫達は教会に戻るのだった。

「ただいま!!」

「ブラン様、武龍さん、秋龍様お帰りなさいませ、ブラン様ツクヨミ様がお見えになっています、客間にお待ちしてもらっていますか?」

「なら、お会いするわ!!」

教会に戻ってきた龍姫達はミナに出迎えてもらい、ツクヨミが来ると言ってきたので、客間に向かうのであった。

「みなさん!!こんにちは」

「ツクヨミ、あなたがわたし達に何か用なの」

ツクヨミはいつも通りの対応をし、ブランは何か御用か聞いたのだ。

「はい、先ほど魔物化した女の子から女神メモリーを回収したを見てほしいのです」

「別に構いませんけど」

「ありがとうございます、ではこの女神メモリーを安全なものに変換します!!」

ツクヨミは先ほど龍姫達が回収した女神メモリーを見つけてほしいと言ってきたので女神メモリーを見せ、ツクヨミがその女神メモリーに向かって手を伸ばした。

すると、

「女神メモリーが光り出したよ!!」

女神メモリーが光り出したのだ。しばらく様子を窺うと、

「これで大丈夫です!!」

「あれ? さっきと違うよ!!」

「まさか!!」

「そのまさかです!! 女神デバイスに作り替えました!! もちろん先ほどの女の子が使っても大丈夫です」

なんと女神メモリーを安全な女神デバイスに作り替えたのである。

「どうするの、この女神デバイス?」

「だったらあの子が起きたら聞いて見たらいいじゃないかな?」

「そうだな、お姉ちゃんの言う通りだな」

龍姫は女の子が起きたら女神になるか聞くことにし、ツクヨミは帰って行った。

御神咲耶

龍姫達は保護した女の子が起きるまで執務室のソファに座ってくつろぐことにしたのだ。

「いらないと言ったらボクたちが預かってたらいいよね!!」

「その方がいいと思うわ、女神が管理した方がいいかもしれない」

女の子が女神デバイスを破棄した場合、龍姫達が管理することになったのだ。

「ブラン様、先ほど保護した女の子が起きました」

「早速向かうわ!!」

どうやら保護した女の子が気が付いたようで、龍姫達は女の子の元に向かった。

「うくん、此処はどこ?」

「気分はどう?ここはルウイー教会よ!!」

「教会・・・あ!!わたし、女神メモリーを拾って、女神になろうとして気が付いたら」

「魔物になってしまったからボクたちが治癒術を掛けてもとに戻したんだ」

「そうだったんですか!!ありがとうございます」

女の子は辺りを見渡し、ブランが女の子に教会であることを教え、女の子が女神メモリーを使った経緯を説明してくれた。

「今、女神になりたいと心の底から思ってる?」

「今は考えさせてください!!明日には答えが出せると思うので」

「わかった、そうだボクは鳴流神龍姫、名前を教えて」

龍姫は女の子に心の底から女神になりたいか質問したら、明日まで時間をくださいと言ってきたので、自分の名前を名乗り、女の子に名前を聞いたのだ。

「わたしの名前は「御神咲耶^{みかみさくや}」です!!」

「咲耶!!明日教会で待ってるから、自分の中でケジメが付いたらボクたちに会いに来て」

「わかりました!!では失礼しました!!」

「咲耶は龍姫達に名前を教え、龍姫は自分の中でケジメがついたらまた明日ルウィー教会に来て欲しいと言い、咲耶は教会を出て行った。

スキット：咲耶のこと

ネプ「あの子大丈夫かな？」

龍姫「何言ってるの、ネプテューヌ、あの子なら大丈夫だよ」

ブラン「そうね!! 最終的に決断するのはあの子なんだから」

ネプ「そうだね!! 咲耶は大丈夫だね」

「ぐう〜（*´ω´）」

「ネプテューヌったら」

「だってお腹がすくんだもん!!」

「そうだね、お昼にしよう」

「わたしも手伝うわ」

ネプテューヌが空腹を訴えたので龍姫達は昼食にすることにしたのである。

「エビドリアできたよ!!」

「いただきます!!」

「おいしい!!（≡?≡*）」

「よかったです皆様のお口に合って」

「流石、フィナンシエとお姉ちゃん達だね!!」

今日の昼食はエビドリアでみんなで舌鼓を打ちながらおいしく食べるのであった。

「ふう〜」

「はあくん；つ匹、」

「流石にお昼は眠くなるね!!」

「たまにはお昼ねでもしようかしら」

昼食を取り終えた龍姫達は教会の執務室のソファで昼寝をすることにしたのであった。

炊き込みご飯

龍姫達がルウィー教会で昼寝をしている頃、ラステイションでは、「龍菜!!双子だからって手加減はなしよ!!」

「ノワール!!そう来なくちゃ!!」

ノワールが龍菜にリハビリがてら術技の特訓に付き合っていた。

「行くわよ!! 魔神剣!!」

「こつちだつて!! 魔神剣!!」

ノワールと龍菜はお互いに斬撃を飛ばし、ちょうど二人の間の間地点でぶつかり消滅し、

「虎牙破斬!!」

「こつちだつて!! 虎牙破斬!!」

「双子で特訓してたらどつちかわからないよ!!」

確かに、ロムとラムは髪の長さで見分けが付くし、お姉ちゃんと龍菜お姉ちゃんは同じ髪型だからね」

ノワールと龍菜はお互いに「虎牙破斬」同時に繰り出し、それを見ている星龍達は服以外で見分けが付かないと言っていた。

一方その頃

「はくあく;つん、)よく寝た」

「お姉ちゃん起きたの?」

「うん、今起きたとこ」

どうやら龍姫は昼寝から目が覚めたのであった。

「どれくらい寝てたんだろう?」

「取り敢えず、時計を見るわ、どうやらあれから1時間寝てたみたい」

「まだ夕食まで時間があるんだ」

「そうや!!夕食の材料買いに行かへん?」

「それもそうだね!!」

まだ夕食の時間まで時間があるので龍姫達はルウィーの百貨店に夕食の材料を買いに行くことにした。

「今日は何にするの?武龍?」

「そやな、山菜の炊き込みご飯にしようかなって、それとお吸い物にし

「ようかな」

「いいじゃない!!お姉ちゃん」

「まあ、炊き込みご飯の元をかうんやけど」

「まあ今から山に入るのは遅いしね」

「どうやら今晚の夕食のメニューは炊き込みご飯とお吸い物にしたのであった。」

「さて!!作るで!!フィナンシエ!!手伝ってな!!」

「わかりました!!武龍様!!」

「教会に戻ってきたのも束の間、武龍とフィナンシエは夕食を作り始めたのだ。」

「洗ったお米が入った炊飯器にこの炊き込みご飯の元を入れてスイーツを入れて」

「炊き上がるまで、おかずの下拵えをしてと」

「順調に進んでいき、」

「みなさん、ご飯の用意が出来ました!!」

「お、待っていました!!」

「それじゃあ!!」

「いただきます!!」

「夕食が出来たのでフィナンシエが龍姫達を呼び、一緒に夕食を頂くことにしたのであった。」

「おいしい!!」

「ネプテューヌと龍愛翔はホントによく食べるね!!」

「だって!!おいしいんだもん!!」

「そういつてくれると作り甲斐があるってもんや」

「ネプテューヌと龍愛翔はいつも通りマイペースで食べているのであった。」

「それじゃあ!!また明日」

「夕食をごちそうになった龍姫達はプラネテューヌに帰ることにしたのであった。」

「この時龍姫は咲耶の身に何かが迫って来てることを知る由もなかった。」

咲耶の・・・

プラネテューヌに帰ってきた龍姫達はお風呂に入り、

「明日はルウイー教会に行かないとね!! じゃあ!! 龍音お休み(―――) z z z z」

「うん、お休みお姉ちゃん(―――) z z z」

龍姫達は明日ルウイー教会に行くので就寝するのであった。

そして、翌日、休暇一日目

「おはよう、みんな」

「おはよう、お姉ちゃん」

「みなさん!! おはようございます」

龍姫達は起床し、みんなに挨拶を済ませ、

「冷蔵庫の中は・・・ベーコン・卵・納豆・豆乳・牛乳・味噌・豆腐か、まあこっただけあれば十分だね」

冷蔵庫内の食材を確認し、炊飯器に洗米したお米を入れ水を入れ、スイッチを入れ、

「今日は玉子焼きと豆腐の味噌汁にしよう!!」

龍姫は卵をボウルに割り、かき混ぜ、玉子焼き鍋に流し込み形を整え、皿に盛りつけた。

水を張った鍋を火に掛け、沸騰したので、みそを入れ、しばらくして豆腐を投入し軽く煮詰めって完成した。

味噌汁を茶碗に入れ、ご飯をよそい、

「いただきます!!」

龍姫達は朝食にするのであった。

「それじゃあ!! 行ってくるね!!」

「行ってらっしゃい」

「たつぬ」

朝食を食べ終えた龍姫達はいつもの通りプラネタワーの屋外展望台から女神化してルウイーに向かった。

「着いたわ!!」

「早速、教会に行こう!!」

ルウィーに到着した龍姫達は早速教会に向かうのであった。

「おはよう、ブラン」

「おはようございます」

「あれミナ、武龍達は？」

「武龍様達ならもう少しでこちらへ参られると思うのですが」

教会に入った龍姫達をミナが出迎えてくれたので、龍姫は武龍達はと聞いたらまだ来るのに時間が掛かるとミナが教えてくれたので、

龍姫達は側にあつた長椅子に座って待つことにしたのであった。

「もう龍姫ちゃん達来てたんか、ごめんやで待たしたみたで」

「ボクもさつき来たばかりだから」

「そうなの、此処じゃあなんだから、執務室であの子が来るの待ちましょ」

「そうだね!!」

しばらくして武龍とブランが来て挨拶をし、龍姫達は執務室で昨日保護した女の子御剣咲耶が来るのを執務室で待つことにしたので。

一方その頃

「さてと、これでよし!!今日は教会に行かないとね」

咲耶は身支度を済ませ、龍姫達との約束通り教会に向かうのであった。

「ふう〜、ちよつと緊張してきたな、だつてわたし女神様に直々に助けてもらっちゃったし!!・・・いけない!!がんばれわたし!!オウ!!」

咲耶は昨日自分が魔物化したとはいえ、女神達に助けてもらったことにはしゃいでしまったが、ふと我に帰り気合を入れ教会のドアを開けるのであった。

採掘場

咲耶は教会の扉を開け中に入ると、

「すいません、御剣咲耶ですけど、約束通り来ました」

「あなたは昨日、ブラン様達に保護された」

「はい、御神咲耶です!!」

「今、ブラン様達をお呼びしますので、こちらにお座りになられてください」

「わかりました」

教祖のミナが出迎えてくれた。咲耶は言われた通り教会の長椅子に座って待つことにした。

「ブラン様!!咲耶さんがお見えになられています」

「わかったわ、今行くわ」

咲耶が来たことをミナが龍姫達に伝え、龍姫達は咲耶に会いに行くのであった。

「咲耶!!来てくれたんだ!!」

「女神様、やや約束通り来ました!!」

「取り敢えず、落ち着いてくれるかな?」

「すすすすいません!! (+ | +)」

龍姫達は咲耶を出迎えたのだが、咲耶が緊張してしまい、龍姫は落ち着くように言った。

「単刀直入に聞いわ、今、この女神デバイスで女神になりたいと心の底から思っている?」

秋龍は咲耶に単刀直入に女神になりたいか聞いたのだ。

「わたしは・・・」

咲耶が誠意を見せようと口を開こうとした矢先、

「ホワイトハート様!! 事件です!! 採掘場が襲われました!!」

「なんやて!! 状況はどうなってんねん!!」

「はい!! 採掘場入り口で警備をしていた者からいきなり、魔物が出現したと、一応、警備に当たっている者で食い止めてはいるのですが」

「わかったわ、咲耶、急だけどこのまま教会で待って!!」

「行くよ!!ロムちゃん!!」

「うん」

なんと、ルウィーの採掘場が魔物が暴れていると採掘場で警備をしていた兵士が教会に血相を変えて駆け込んできたのだ。

それを聞いた龍姫達は咲耶にこのまま教会で待機するように言い、採掘場に向かうのであった。

「助けてくれ!!」

「ウォーン!!」

「そのまま行くでチュー!!」

採掘場で犬型の魔物が暴れていて、その傍らにあのマジエコンヌと一緒にいたデカイ鼠こと、ワレチューがいたのだ。

「やっちゃえでチュー!!」

「うわー!!」

ワレチューが犬型の魔物に採掘場で働いている兵士に襲い掛からせたのだ。

その時だった

「魔神剣(拳)!!」

「ワフーン」

「この技!!もしかしてでチュー!!」

どっから兎も角、衝撃波が飛んできたのだ。それを見たワレチューは突如悪寒に襲われていた。

それもそのはず

「チュー!! ルウィーの女神!! おまけにプラネテューヌの女神もチュー!!」

「観念してもらおうか!! (???) ゴルア!!」

堪忍袋の緒が切れたブランと秋龍がまがまがしい闘気を纏い、斧を肩に担いでワレチューにマジ切れしていたのだから。

もちろん龍姫達は黒い笑みをこぼしていた。

「まだ詠唱終わらないのかよ!!」

どうやら魔物化した女の子は薄れていく意識の中で龍姫達に自分を誰かを傷付けてしまう前に殺してと涙を流しながらテレパシーで訴えてきたのだ。

プルルトが道具としてこのまま死ぬつもりか問いただしたら、まだ人として生きていたいと、遠吠えをしながらテレパシーで訴えてきたのだ。

ブランと秋龍がまだかと焦っていた。

「ウォーン!!」

「しまった!!斧が」

「ブラン!! (間に合わへん!!)」

「お姉ちゃん!!」

ブランが不意を突かれ、得物の斧が粉々に砕け散ったのだ。武龍が助けに入ろうとしたが時すでに遅しであった。

「不甲斐ないぜ」

「ウォーン!! (殺したくない!!)」

ブランが覚悟を決めたのだ。

その時だった

「わしの名を呼べ!!」

「誰だ!!」

「死にたくなかったらわしの名を」

「こうなったら自棄だ!!」

ブランに誰が語りけてきたのだ。そして

「わしの名は」

「おまえの名は」

「グランヴェール!!」

「なんや!!」

ブランは語り掛けてきた主の名を何も疑問にならず叫んだのだ。
すると

「あれが新しいブランの武器なの!!」

「これがわたしの武器、まあいい!!行くぞ!!」

ブランの目の前に一本の片方の刃が小さい両刃斧が現れたのだ。それをブランは手に取り、

「ウォーン!!」

「今だ!!」

「彼の者を死の淵より呼び戻せ!! レイズデット!!」

攻撃を受け止め、その隙にネプギアが治癒術「レイズデット」を掛けたのだ。

「元に戻って行くよ!!」

「よかった!!」

すると、犬型の魔物は髪が董色の二つ結びで咲耶と同一年くらいで胸が龍姫ほどではないが、大きい女の子の姿に戻ったのだ。

「さて、この子教会に運ばんと!!」

「そうだね!!七賢人今度会ったら許さない」

龍姫達は女の子を保護し、女神メモリーを回収し教会に戻るのであつた。

新たなる転生者

女の子を保護し、女神メモリーを回収した龍姫達は教会に戻ってきたのである。

「ただいま!!」

「お帰りなさいませ、みなさん!! ブラン様やはりまた」

「ああ、今度はワレチューが使わせたらしい」

「そうでしたか、こちらでも調べて見たのですが、七賢人が関わっているとしたか」

「それはさておき、この娘どうしよう?」

「そうですね、起きるまで待つしかないですし、この子はわたしが見ておきますからみなさんは咲耶さんの所に行つてください」

教会に戻ってきた龍姫達をミナが出迎えてブランに調べていた内容を教え、保護した女の子をミナに預け、龍姫達は応接間にいる咲耶の所に向かった。

「女神様!!」

「ごめんやで待ってもらって」

「お気になさらないでください!!」

応接間に入り、咲耶に武龍が待つてもらっていたことに謝罪をした。咲耶は気にしないでと言った。

「それじゃあ、本題に入りたいのだけど、その手に持つてる物は何?」

龍姫は咲耶が手に持っていた物の事を聞いたのだ。

すると、

「実は昨日、わたしが通っていた学校からきた退学届です」

「ええ!! どういう事?」

「昨日、わたしが女神メモリーを誤って使っちゃって魔物化して暴れていたことが学校にばれまして」

「あれはあなたのせいじゃない!! たまたま女神メモリーを拾ってしまつて、女神メモリーが暴走しただけじゃない」

「咲耶!! あなたが通っている学校にわたしが抗議してあげるわ」

どうやら咲耶が誤って女神メモリーを使つてしまつて魔物化して

暴れたことが学校にばれたらしく、咲耶は退学を書類上とはいえ、宣告されてしまったのだ。

それを聞いたブランが女神の職権を使って咲耶が通っていた学校に退学を取り消すように頼んであげると言ったのだ。

「いいんです、女神様、もう終わったんです。それにわたし、孤児なんです」

「咲耶がそこまで言うのなら止めはしないけど、孤児ってどういうこと？」

「わたし生まれてすぐ両親を病で亡くし、施設に預けられたんです、けど経営不振になってしまっただけ」

「それ以上は言わないでいい!!」

咲耶が孤児である訳を龍姫達に話し、龍姫はもう話さなくてもいいと言った。

すると

「ブラン様、さつき保護された女の子が目覚めました」

「わかったわ、咲耶この話はこれでお終いにするわ」

「わかりました、あのご一緒にしても良いですか？」

「別にいいけど」

「ありがとうございます!!」

先ほど保護した女の子が目覚めましたらしく、ブランは咲耶の話を終わらせ、女の子の所に向かうのであった。

「う〜ん」

「気分はどう？」

「大丈夫です!!」

「ねえ、あなた名前は？ わたしは御子神ブランよ、此処ルウィーの女神ホワイトハート」

「えー!!女神様!。(。口)ノ・・・あ!!申し遅れました!!わたしはりゆうぐうじとうや「龍宮寺刀夜」と言います」

ブランは保護した女の子に自己紹介がてら女神であることを教え、名前を聞いたのだ。

名前を聞かれてので女の子こと龍宮寺刀夜は自己紹介をした。

「刀夜なの!!」

「咲耶ちゃんなんで？」

「なんだあなた達知り合いだったの」

「はい、友達です!!」

なんと刀夜と咲耶が友達であった。

「そうだ!! さっき回収した女神メモリーを女神デバイスに作り替えて置いたよ!!」

「ありがとう、それはそうとあなた達に聞きたいことがあるの」

「はい、わたしが女神になるかでしたね」

「それどういこと咲耶ちゃん!!」

「昨日、咲耶には女神に本気でなりたいか聞いていたんだ!!」

「そうだったんですか」

ネプギアは回収した女神メモリーを女神デバイスに作り替えていたので、

ブランは咲耶たちに本題である、女神になるか聞いたのだ。

それを聞いた刀夜は驚きを隠せないでいた。

そして

「女神様!! わたし!! 女神になります!!」

「咲耶ちゃん!! わかりました!! わたしも女神になります!!」

「わかったよ、その言葉に偽りがないなら」

「はい、もう」

「選ぶんじゃないくて」

「もう選んだんだです!!」

「まさか、あなた達」

「はい、実はわたし一度死んでるんです」

「つまり転生者ってこと」

咲耶と刀夜は女神になること決めたのだが、なんと龍姫が前に言っていた「選ぶんじゃないくて、もう選んだんだ」と言ってきたのだ。

「はい!! ……って鳴流神龍姫と御子神武龍ちゃんなの!!」

「ええ!! 知り合いだったの!! (。D。)ノ」

「実はあの時、気づいてたんですが、あえて失せてました。もちろん

「こっちの学校に通っていたのは事実ですから」

「それで孤児だつて言ったんだ」

「それにしても、お姉ちゃん!!なんで隠してたの!! (;)」

「ごめんこっちに来て、忘れてた」

なんと龍姫と武龍とは同級生で友達だったのだ。

二人の女神侍

咲耶と刀夜が龍姫と武龍と友人であることがわかったため、

「なんで転生する時に女神デバイスもらえなかったの？」

「実は龍姫と武龍と違う神様に此処に転生させられたんです」

「と言うことは、ツクヨミ様の組織じゃなく」

「別の組織ってことだね、その神様の名前は覚えている？」

「確か、フォルトナっていう神様だったよ、此処の世界のこと知らなかったみたいだし」

「ガク!! ミ(ノ) (ノ) || 3 ドテツ どここの影の薄いラスボスの女神様」

どうやら咲耶たちはツクヨミではなく、龍姫達が良く知っているゲームのシリーズのあまりにも中ボスより影の薄いラスボスと同じ名前の女神様に転生させられたと龍姫達に打ち明けたのだが、それを聞いた龍姫達はずこけてしまった。

「そーいや、なんで龍姫と武龍の名字を女神様が名乗ってるの？」

「実はボクと武龍は女神様のお姉ちゃんになちゃったから」

「まさか!! 龍姫ちゃん達って!! 女神様!!」

「そうだよ!! お姉ちゃんは女神になったからわたしのお姉ちゃんになつてくれたんだよ」

咲耶は龍姫に女神様が龍姫と武龍の名字を名乗ってるのか聞いたのだ。

龍姫は咲耶たちに自分が女神になったことを暴露し、女神様の姉になつたことも明かした。

「あのお龍姫様と武龍様にお問い合わせがあるのですが」

「なんで敬語なの？」

「それは女神様だから」

「別にいつも通りにしていいよ」

「お姉ちゃんの友達なんだから」

「では、お言葉に甘えて、女神の姿を見せて!!」

咲耶たちはなぜか龍姫と武龍に敬語でしゃべり出したので、龍姫達

は敬語はいらないと答え、咲耶たちは龍姫と武龍に女神化をして欲しいと言ってきた。

「わかったよ、ネプテューヌと龍愛翔、女神化してもいいかな？」

「いいよ!!今日は咲耶と刀夜には特別だから」

「行くで!!龍姫ちゃん!! セットアップ!!」

龍姫はネプテューヌと龍愛翔に許可を得たので、武龍・龍音と一緒に女神化をしたのだ。

「これがウチらの女神の姿や!!」

「ちよつといいかな？」

「どうしたの?咲耶?刀夜?」

「なんで!!龍姫ちゃんはフェ○で、武龍ちゃんが八○は○で、龍音ちゃんがリ○ン・マ○ナ○なってるの!!。(。D。)ノ」

「驚くところなの!!。(。D。)ノベシ!!」

それを見た咲耶と刀夜は某魔法少女と客員剣士の名前を言って突っ込んだ。

その突っ込みに龍姫は突っ込み返した。

「次は咲耶達だよ!!」

「うん!!行くよ!!」

「わかったよ、咲耶ちゃん!!」

「せーの!! セットアップ!!」

咲耶と刀夜は女神デバイスを使い、

「これがボクなの?」

「胸が大きくなってるく!!」

「ボクも大きくなってるけど」

女神になったのだが、

咲耶が身長が170cmになっており、胸が大きくなって、板状の胴丸が装着されており、髪が栗色で髪を青いリボンでツイントールに結って、両手足にオープンフィンガーグローブとレガースが装着されて、服が裾の長い外蓑に短パンになっていた。

刀夜は身長が172cmで胸が今のプルルート並になっており、龍姫達同様に胸に胴丸が装着されて、服が陣羽織に両足に脛当てが装着さ

れて、手に侍の籠手が装備されて、髪が茶髪の一本結びになっていた。
二人とも左腰に剣帯が付いていた。

翔龍との模擬戦

咲耶と刀夜が女神になったので、今後のことを話し合うことにした。

「二人はどうするの？」

「そうだよ、女神になったらどうするか考えてなかった」

「女神になったからって、国を持たなくてもいいんだよ」

「そうなの!!よかった!!」

「そうだ!!龍姫にお願いがあるんだけどいいか？」

「何咲耶？」

咲耶は龍姫にお願いがあるらしく、

「わたしと刀夜を龍姫の所で働かして欲しいの!!」

「ええ!!ルウィーじゃないの!!。(。口。)ノ」

ブラン&秋龍「おい、咲耶に刀夜、何、プラネテューヌに寝返ってんだ!! (†▼?▼) 」

「ブラン!!秋龍!!気持ちわかるけどな、これは二人が決めたことや!!ボクたちがどうこう言う権利はないんや!!」

「わかったよ、お姉ちゃんがそこまで言うならあきらめる」

なんと此処ルウィーじゃなく鳴流神家があるプラネテューヌで龍姫の下で働きたいと頭を下げながら申し出たのだ。

それを聞いたブランと秋龍が二人にキレたが、武龍が二人を説得した。

「ネプテューヌ、二人がプラネテューヌ教会で働きたいって」

「いいよ!!ちゃんとお仕事することが条件だよ!!」

咲耶&刀夜「ありがとう!!」

「あれ?龍姫ちゃんじゃないの？」

「ボクはあくまでネプテューヌのお姉ちゃんで仕事上はネプテューヌの秘書兼お世話役だよ」

「ボクはロムとラムのお目付け役やで」

「そうだったんだ!!」

二人は龍姫と武龍が国の最高責任者だと思っていたのだが龍姫は

二人に説明した。

ところ変わってリーンボックスでは

「ベールの友達のネプテューヌはどれくらい強いのでしょうか？そいですわ!! デバイスで果し状を送ればいいのですわ!!」

「どうしよう!!」

翔龍はネプテューヌと手合せをしたかったようでベールからネプテューヌのデバイスにメールを送信した。

それを輝龍が壁越しに目撃してしまったのだ。

一方その頃

「マスター!! 誰から、メールが着きましたよ!!」

「ありがとう!! 内容はくねぷく!!」

「どうしたの!! ネプテューヌ」

「どうしよう!! リーンボックスからわたしを果し合いに指名してきたよ!!。(。D。ノ)」

「落ち着いて、取り敢えず、リーンボックスに向かった方がいいよね、ネプテューヌ場所は書かれてる?」

「えくと、ゼーガ森林でお待ちしています、翔龍って」

「翔龍はさて置き、今からリーンボックスに向かうけど二人はどうする?」

「もちろん」

「一緒に行くよ!!」

なんとネプテューヌのデバイスに果し状のメールが送りつけられたのだ。

龍姫達は足早にルウィーを後にしてリーンボックスのゼーガ森林に向かうのであった。

「着いたわ!!」

「此処がリーンボックス」

「統合されてもあまり変わらないな」

龍姫達は統合されたリーンボックスに上陸し思っていたこと各々に言い、女神を解き、

果し合いの場所のゼーガ森林に向かった。

そしてどこから兎も角

「待ちくたびれましたわ!! しつぽ巻いて逃げたかと思いましたが!! けど逃げずに来たことは褒めてあげますわ!!」

「その声、ベール!!」

「残念ですわ!! ネプテューヌ、正解はベールの双子の妹の翔龍ですわよ!!」

「どういうこと!!」

声が聞こえてきたのである。その声を聞いたネプテューヌはベールの名を叫んだが、近くの樹に隠れていたベールの双子の妹の翔龍が待ち構えていた。

「なるほど、ネプテューヌに果し状のメールを送ってきたのは」

「わたくしですわ!! 申し遅れましたわ!! わたくしベールの双子の妹で輝龍・飛龍の姉の神楽堂翔龍ですわ!! 旧名はベールですわ!! 準備はよろしくて? ネプテューヌ?」

「わかったよ、翔龍!! こうなってしまうて以上は全力全壊で行かしてもらおうわ!!」

翔龍は龍姫達に自己紹介をした後、女神化をしてあのベールとお揃いのバリアジャケットを身に纏い、槍を構えた。

それに応じるようにネプテューヌも女神化してバリアジャケットを纏い、抜刀した。

そして、

「行きますわよ!! 瞬迅槍!!」

「甘いわよ!! 魔神剣!!」

「流石は、ネプテューヌですわね!! これはどうです!! ダージリンローデ!! からの弧月閃!!」

「なかなかやるわね!! けど!! まだわたしは負けられないのよ!! 虎牙

破斬!! クリティカルエッジ!! 獅子戦吼!!」

戦いの火蓋が切って落とされ、翔龍が槍で突きを繰り出し、

それをネプテューヌはかわして斬撃を放ち、

続けて翔龍は自身の技から輝龍達との特訓で修得した技で月を描

き、

ネプテューヌはそれを虎牙破斬からクリティカルエッジで相殺し、獅子の鬨気を翔龍に叩き付けた。

「本気で来ますわよ!!」

「そっちがその気なら!! 飛ばして行くわ!!」

二人ともオーバーリミッツを発動させたのだ。

「あなたには此処で果てていただきますわ!! リーンボックスの女神の力をお見せしますわ!! 来たれ雷!! 裁きを受けなさい!! 煌華月衝閃!! いかがです?」

「とどめー!! はあああ!! 見せてあげるわ!! 天翔!! 蒼破斬!!」

最後は秘奥義のぶつけ合いになった。

そして土煙が晴れるとそこに立っていたのは

「ぎつとこんなもんよ!!」

「ネプテューヌが勝ったんだ!!」

勝負はネプテューヌの勝利で幕を閉じたのであった。

「こんなの認めませんわ!!。。(。(p(≡□≡)q)(。)。ウワーン!!」

負けた翔龍は悔しさの余りその場で泣き出したのである。

翔龍!! 連行されるの段

そんなこんなでネプテューヌVS翔龍はネプテューヌの勝利で幕を閉じたのだが、

「こんなこと知られたらベールたちに顔向けできませんわ!! (´Д`。) グスン」

「いい加減負けを認めたら?」

「嫌ですわ!!」

翔龍はネプテューヌに負けたことを認めていなかったのだ。

「いい加減にして欲しいですわ!! 翔龍お姉ちゃん!!」

「輝龍!! 離してほしいですわ!!」

「取り敢えず、お腹空いた!! (´ω´) ご飯まだ?」

「そうだよね、お昼食べないで、こつちに飛んできたからね」

「それに積もる話もありますし」

翔龍が今だに駄々をこねていたのだが、ジャストタイムングで女神化した輝龍来てくれ、翔龍を羽交い締めにして拘束し、ネプテューヌが空腹を訴えたので、龍姫達はリーンボックス教会に向かうことになったのである。

「ただいま戻りましたわ!!」

「もう!! どこに行ってたんですの!! (´;´、D´)」

「それは・・・」

「まあ、事情は輝龍が話してくれましたわ!!」

「輝龍!! あなた!!」

「ごめん、たまたま翔龍お姉ちゃんの部屋を通りかかったら聞こえてきたんだよ!!」

「輝龍は悪くありませんわ!! 翔龍みんなに言うことがあるのでは無くて?」

「ネプテューヌ、ゴメンナサイ」—?—●ごめんなさい」

「もう翔龍たら顔あげてよ済んだことなんだから!! それよりお昼にしようよ!!」

「それもそうですわね!!」

のだ。
で龍姫が身振り手振りで女神候補生の説明をしたのであった。

咲耶と刀夜討伐クエストを知るの段

龍姫が咲耶と刀夜に女神候補生の事を説明し終わったのであった。

スキット：咲耶と刀夜のバリアジャケット

龍姫「咲耶の女神化で着ていたバリアジャケットって」

咲耶「実はSAOのシリカが着ていた服をモデルにしたんだ!!ほらわたしSAO好きだったから」

刀夜「そういえば咲耶ちゃんSAOでシリカが好きだったよね!!」

咲耶「うん、そうだよだってシリカかわいいんだもん!!」

ネプ「刀夜はバリアジャケットは誰をモデルにしたの?」

刀夜「わたしはDOG daysのダルキアン卿の戦闘服をモデルにしたんだよ」

ギア「それで如何にも侍って感じのバリアジャケットだったんですね!!」

刀夜「かっこいいからね!!あの服」

輝龍「そんな理由だったの!!」

「お二人は今後はどうなさるのですか?」

ベールは咲耶と刀夜にこれから先のことを尋ねたのだ。

「わたし達はプラネテューヌ教会で龍姫ちゃん達の」

「お仕事を手伝うことにしたの」

「そうでしたか(この二人をわたくしのゲームの相手にしたかったですわ)」

咲耶と刀夜はベールにプラネテューヌ教会で働くことにしたと言
い、

それを聞いたベールは残念そうにしているのであった。

「咲耶ちゃんと刀夜ちゃんはクエストってやったことあるの?」

「あるけど、やったことあるクエストはお店の日雇い仕事ならした
ことあるけど」

「わたしも同じことしてた」

「なるほど、お二人はまだ魔物の討伐と採取クエストをやったことが
ないのですね」

「恥ずかしながら」

「その通りです!! まさか!! 龍姫ちゃんのお仕事って魔物退治って」

「教会に寄せられる緊急クエストのほとんどは魔物退治なんだよ」

「どうしよう!! (。D。) アタフタ」

「わたし、龍姫ちゃん達みたいに武道やったことないよ!!」

「大丈夫!! ボクだってこっちに來てからは我流で戦闘術覚えたんだから」

「そういや、咲耶と刀夜はフォルトナって女神様からなんか特殊能力貰っていないの?」

輝龍は咲耶と刀夜にクエストをやったことがあるのか聞いたら、

日雇い仕事のクエストをやったことがあると答え、刀夜は龍姫に教会の仕事で魔物退治をするのか聞いたら、龍姫は教会に寄せられる緊急クエストのほとんどは魔物退治であると教えた。

それを聞いた咲耶と刀夜は戦闘が出来るか心配になっていた。

ネプテューヌは咲耶と刀夜に転生させられた時にフォルトナに特殊能力は授けてもらったか聞いたら、

「それなら一応どんな能力が欲しいか聞かれたから」

「二人とも「テイルズオブシリーズ」の術技が使えるようにしてもらった」

「それを先に言ってよ!! (。D。) ノバシ!!」

「まさか!! 龍姫達も」

「そうだよ!! ボクはツクヨミ様から担当する国の女神の力と共鳴させてボクがやったことがある「テイルズオブシリーズの術技」を女神様達に修得させる能力と女神の力を覚醒させる能力をもらったんだ」

「と言うことは、星龍と武龍と輝龍・飛龍も」

「そうだよ、ボク達も同じ能力をもらったんだ」

「そうだよね輝龍!!」

どうやら、付けてもらえたらしく、龍姫は思わず突っ込んでしまった。

それを聞いた咲耶と刀夜は龍姫達はその上位能力を使えること驚きを隠せないでいた。

咲耶と刀夜、女神について学の段

咲耶と刀夜は龍姫達から女神について学んでいた。

「そういうや、二人に女神になったら、老いることが出来なくなるんだよ。けど、怪我や病気にはなるんだけど」

「ってことはわたし達も」

「不老長寿になっちゃったの!!。(。D。ノ)」

「その通りですわ!!」

「一生この姿なんだね!!」

「何もなければこの肉体のままだけ」

咲耶と刀夜は女神になったら歳を取れなくなることを聞かされて驚きを隠せないでいた。

「咲耶と刀夜は武器って持ってる?」

「持ってるよ!!」

「そうだよね、これから龍姫ちゃん達のお手伝いしなきゃいけないからね」

「だったら、今から武器屋に行こうよ!!」

「そうだね」

龍姫は咲耶と刀夜に武器を持っているか聞いたら、まだ持っていないと答えたので、

町に買いに行くことにした。

「へい!いらっしやい!!好きなの見てきなよ!!そうだこの前、良い刀を仕入れたんだが見た行くか?」

「いえ、こっちの安い刀にしますから」

龍姫達は武器屋について早々店の大将に以前龍姫が企画書で打った刀「天下五剣一式」と「ニバンボシ」を進めてきたが、咲耶は安い無銘刀を一振りを購入した。

「わたしはこの刀にしよう!!」

「毎度あり!!」

刀夜も無銘刀を購入したのであった。

スキット:あの刀

咲耶「まさかあのキャラの刀が売ってるなんて」

龍姫「あの刀はボクが企画書で打った刀だよ」

刀夜「龍姫ちゃんが作った刀だったの!!」

咲耶「あのユーリの愛刀「ニバンボシ」を作るなんてセンスいいんだね!!」

龍姫「それほどでもないよ、だって企画書に書かれてる素材を集めたらなんだったって出来るんだよ」

刀夜「そうだったんだ!!」

「今日はこれからどうするの?」

「取り敢えず、プラネテューヌに帰らないと、咲耶と刀夜のこといーすんに話しておかないと行けないし」

「わかったよ、また遊びに来てね!!」

「たぶん、咲耶と刀夜は研修で来ると思うけど」

「そういうえば、わたし達は女神になったばかりだもんね」

「それじゃあ!!みんなプラネテューヌに帰るよ!!」

輝龍は龍姫達にこの後の予定を聞いたら、咲耶と刀夜をイストワールに報告しないと龍姫は輝龍に言い、龍姫達はプラネテューヌに帰るのであった。

スキット：あの話

咲耶「さつきベールに聞いたんだけど」

刀夜「龍姫ちゃん達、リーンボックスのライブに出たってホント?」

龍姫「ホントだよ!!」

ネプ「二人に生で見せたかったわくお姉ちゃんと龍音の晴れ舞台」

咲耶「そのライブの時、龍姫ってあずにやんのコスプレしてたんだって!!」

龍姫「もうベールったら」

武士女神!! 黒の大地に

「ただいま!! ぃーすん!!」

「お帰りなさいませ、龍姫さんこちらの方々は? 申し遅れました、此処プラネテューヌ教会教祖イストワールと申します」

「わたしは御神咲耶です」

「龍宮寺刀夜です」

「ぃーすん、この二人を教会で働かせてほしいんですけど?」

「お願いします!!」

「ですが、いくらネプテューヌさん達の姉の龍姫さんでも」

龍姫達はプラネテューヌ教会に帰って来て、イストワールの二人は咲耶と刀夜に自己紹介をして、咲耶と刀夜も自己紹介をした。

龍姫は咲耶と刀夜を教会に置いて欲しいとイストワールに頼んだのだが、いくら龍姫でもダメだと言っていた。

「ぃーすん様、でしたら、こちらにも考えがあります」

「それは一体なんですか?」

「括目してください!!」

「セットアップ!!」

「まさか!! 咲耶さんと刀夜さんは!! (。D。ノ)」

「はい!! 女神デバイスで女神になった」

「武士女神です!!」

咲耶と刀夜は女神化を実行したのだ。それを見たイストワールは驚きを隠せないでいた。

しばらくして

「わかりました、お二人が女神であられる以上、断る訳にはいきませんが、お二人は龍姫さん達の直屬にします!! よろしいですか?」

「はい!! 謹んでお受けします」

「では、明後日から龍姫さんのお仕事のサポートに入ってください!!」

「わかりました!!」

こうして二人は龍姫達の直屬の女神になることになったのであった。

そして翌日休暇最終日

「今日はラスティションに行くよ!!」

「咲耶と刀夜は準備できた?」

「いつでも行けます」

「別に敬語はいらないぜ!!」

「それじゃあ!!行つてきます!!」

「どうやくさくさ」

龍姫達は咲耶と刀夜を星龍達に紹介するためラスティションに向かうのであった。

ネプテューヌ&龍愛翔「ノワール!!龍菜!!元気に生きてる?」

ノワール&龍菜「勝手に殺すな!!もう貴女達って子は!!<(、へ、)>

>

「龍姫に聞いていたけど」

「ノワールちゃんと龍菜ちゃんは双子でツンデレ女神なんだ」

「あれ?咲耶ちゃんに刀夜ちゃん」

「星龍!!」

「会いたかったよ!!」

「え!!お姉ちゃんのお友達?」

「そうだよ!!この二人はボクの幼馴染みだよ!!」

「みつともないとこ見せたわね!!わたしは此処ラスティションの女神

でブラックハートよ!!この姿では獅子神ノワールよ」

「御神咲耶です」

「龍宮寺刀夜です!!」

「わたしはノワールの双子の妹でブラックハートけどこの姿では獅子神龍菜よ!!」

ネプテューヌと龍愛翔はラスティション教会に着くなり、いつも通りにノワールと龍菜と夫婦漫才みたいなことを結局するのであった。
しばらくして各々に自己紹介をして行き、

「あ、咲耶さんと刀夜さん!!」

「天龍ちゃんも転生してたんだ!!」

「もう!!天龍つたら!!あ!いけない!!此処ラスティションの女神候補

生の獅子神ユニです」

「御神咲耶って言うの」

「わたしは龍宮寺刀夜だよ!!」

奥から天龍とユニが部屋から出てきたので、ユニは咲耶と刀夜に自己紹介をしたのである。

ジエツトセット山道

龍姫達はラスティションに来ているのである。

「咲耶さんと刀夜さんはもう女神になったんですね!!」

「一応、女神デバイスで女神になったの」

「けど、プラネテューヌ教会で働くことにしたけど」

「そうなの!!」

「けどまだ戦闘はやったことがないのね!!」

「はい、その通りです!!」

「一応、龍姫ちゃん達に稽古を着けてもらってるんですけど」

「まあ、稽古と実戦は違うからね!!」

ユニと天龍は咲耶と刀夜が女神になったことに喜んでいた。

二人は実戦をしたことがないので、

「そうだ!!ちょうど教会に魔物退治のクエストが寄せられて来たんだよ」

「ちようどいいわ!!咲耶!!刀夜あなた達の実力見せてもらおうわ!!」

「わかったよ、ノワール!!」

「ボクたちが危なくなったら助けに入るから」

そんなこんなで龍姫達はラスティションにあるジエツトセット山道に魔物退治に向かった。

何故、咲耶と刀夜が敬語じゃないかと言うとノワールと龍菜が辞めさせたのだ。

スキット：ノワールと龍菜のコスプレ魂

ノワ「咲耶、刀夜あなた達のバリアジャケットなんだけど」

龍菜「お願い後で女神化してモデルになってほしいの?」

咲耶「いいよ!!」

刀夜「ちゃんとこのコスプレ衣裳見せて!!」

ノワ「ありがとう!!」

龍菜「咲耶、刀夜」

天龍「また始まった☒(; _ _)」

「着いたわ!!」

「確か、エンシエントドラゴンの一体討伐だったね」

「エンシエントドラゴンか、懐かしいね!! (*・▽・*)」

「そういえば、お姉ちゃんも初めて会った時ってエンシエントドラゴンを討伐しに来たんだよね!! ノワールときたら左腕骨折するし」

「そんなことはいいでしょ!!」

「なんだろう、わたしとノワールは二人そろって骨折してるわね」

「グお〜」

「どうやら敵さんのお出ましだぜ!!」

「みんな!! 行くよ!!」

ジエツトセット山道に到着した龍姫達は依頼書を見て、エンシエントドラゴンの討伐と書かれていたことに、初めて龍姫がネプテューヌに出逢ったことを思い出していたら、

前方5 mに討伐対象のエンシエントドラゴンが現れたので、龍姫達は各々に得物を構えて、

「魔神剣!!」

「蒼破刃!!」

「一気に行くわ!! 貫け!! 槍よ!! デモンズランスレイン!!」

「集え暗き炎よ!! 宴の客を戦慄の歌で迎え 持て成せ!! ブラッ
デイハウリング!!」

咲耶は斬撃を放ち、刀夜も負けじと風の斬撃を放った。

ユニは魔術で闇の槍を作り出しそのまま投げつけ、曲がりながら飛び回る闇の槍で攻撃し、龍音は魔術で闇の音色を響かせた。

「グオオオー!!」

エンシエントドラゴンは呻き声を上げ、

「終わったみたいだね!!」

「あの、光がそうなの」

青い光になっていったのである。

武士女神、シアンの実家の食堂に行くの段

龍姫達は咲耶と刀夜に実戦を積ますため、星龍達と一緒にクエストを行なった。

「初めて実戦した割にやるじゃない!!」

「見直しましたよ!!」

「ありがとう!!ノワール!!ユニ!!」

ノワールとユニは咲耶と刀夜を褒めていたのであった。

「ほんじゃあ、お昼ご飯にしよう!!」

「そうだね!!」

「ちようどお昼だもんね!!」

龍姫達は教会に帰るのであった。

「ただいま!!ケイ帰ったわよ!!」

「お帰り!!みんな、星龍達はこれからどうするんだ?」

「お昼にしようかと」

「そうか!!」

教会に戻ってきた龍姫達をケイが出迎えてくれた。

星龍達にこれからどうするか聞いたらお昼にすると答え、

「そうだ!!みんなでシアンの食堂にお昼ご飯食べに行こう!!」

「それもそうね!!」

「シアンって誰?」

「ボクたちがラストেশションの行きつけの食堂経営兼工場長だよ!!」

「龍姫はそんな人物と知り合いだっただの!!。(。D。(ノ」

「咲耶ったら、驚くことないでしょ!!さあ、行くよ!!」

どうやらシアンの実家の食堂に行くことにしたのであった。

「ごめんください!!」

「おう!!龍姫じゃあないか!!おまけにみんなも・・・あれネプテューヌが二人いるんだが?ノワールも二人いるんだ?」

「実は二つのゲームギョウ界が統合されて所為なんだよ」

「すまん、そんなことより今日は此処で食べていくんだろ?」

「もちろんそのつもりです!!」

シアンの実家の食堂に着いた龍姫達は扉を開け中に入り、シアンが偶然にも出迎えてくれた。

シアンはネプテューヌと龍愛翔とノワールと龍菜が双子のようにそっくりだったので、

シアンは自身の視覚を疑った。

その事を龍姫がシアンに説明したのである。

龍姫達は定食を頼み、昼食を取ることにしたのである。

「また、来いよ!!」

「うん、ラストイシヨンに来た時は立ち寄るよ」

龍姫達はお代を払い、

「また、来てね!!」

「うん、今度は研修で来るかもしれないけど」

「お姉ちゃんの幼馴染みだからって手加減はしないわよ!!」

「覚悟しなさい!!」

「それじゃあ!!プラネテューヌに帰るよ!!」

教会に戻り、教会のベランダからプラネテューヌに向かって女神化して帰るのであった。

「ただいま!!」

「お帰りなさいませ!!咲耶さんと刀夜さん、ちょうどあなた方のお部屋を用意が出来ました」

「ええ!!どうこと!!」

「何言ってるのよ!!アンタたちは仮にも女神なんだから!!同然じゃない」

「アイエフさんが仰った通りです」

「こう見えてアタシもアンタたちと一緒に女神やからな!!」

「アイも女神だったの!!。(。D。.)ノ」

「そうですう!!何を隠そうこのわたしも女神なんですう!!」

「コンパまで!!。(。D。.)ノ」

龍姫達はプラネテューヌに戻って来て、イストワールとアイエフとコンパが出迎えてくれた。

イストワールは咲耶と刀夜に教会に住むよう二人に部屋を用意し

てくれたのだ。

二人ということわからなかったが、アイエフとコンパが女神であることを明かしたので、

「なるほど!!」

「教会は女神様の住居でもあるんです!! ですからお二人には此処で生活してもらうことになります」

二人は女神になったことで、新しく不動産屋で部屋を探すことがなくなったことをイストワールが教えた。

「今日は、まだお休みだから部屋に戻ろ」

「わたしもやりたいゲームをしたいから部屋に戻ってるね!!」

龍姫達は各自、自分の部屋に戻ってくつろぐことにしたのであった。

この時、ある次元で平和が壊れようとしていたことに龍姫達は知る由もなかった。

鳳翼熾天翔と天界開通

プラネテューヌに新たに二人の女神が降臨して、二週間が過ぎた。今、龍姫達は教会に寄せられた魔物退治でZECA一号遺跡に来ていた。

「喰らえ!! 魔神連牙斬!!」

あれから龍姫達と特訓した成果なのか、咲耶と刀夜は何とか奥義を出せるまでになっていた。

「此処は任せて!! 飛ばして行きますか!!」

「咲耶!! 頑張りなさいよ!!」

「ボクたちはこの辺りの魔物を片付けるよ!!」

咲耶はオーバリーミッツを発動させたのである。

龍姫達は周りの魔物を片付けることにし、咲耶はカノープスに攻撃を仕掛けたのである。

「グオーー!」

「甘い!! 虎牙破斬!!」

咲耶はカノープスの攻撃をかわし、透かさず斬り上げ、斬り下ろす特技「虎牙破斬」を浴びせ、

「襲爪雷斬!!」

斬り上げて雷を落とし、そのまま斬り下ろす秘技「襲爪雷斬」に繋げ、

「斬魔龍炎剣!!」

炎を纏いながら回転蹴りと斬撃の合わせたネプギアも修得した奥義「斬魔龍炎剣」に繋げ、

「疾風のように・・・天狼滅牙・風迅!!」

滅多切りにした後、左手で掌底を叩き付け吹き飛ばすバーストアーツを繰り出し、

「天に還る翼を持っていきなさい!! 鳳翼熾天翔!!」

敵の周囲に無数真紅の羽根を巻き上げて攻撃する秘奥義「鳳翼熾天翔」で止めを刺し、カノープスは光になって消えていった。

「これがわたしの本気!!」

咲耶は決め台詞を言っていた。

「こつちも片付いたよ!!」

「ギルドに報告して教会に帰ろう!!」

クエスト達成報告のため、ギルドに行き報告して報酬をもらって龍姫達は教会に帰るのであった。

スキット：凰翼熾天翔

龍姫「咲耶!! 秘奥義、修得したんだ!!」

ネプ「あの、紅い羽どっから出てきたの?」

咲耶「あれは奥義またはバーストアーツから出してるけど魔術の秘奥義なんだよ!!」

ギア「なるほど魔法で赤い羽を作りだしてたんですね!!」

「お姉ちゃん!! お昼にしようよ!!」

「そうだね!!」

「今日のお昼はたこ焼きだよ!!」

「いただきます!!」

今日の昼食のメニューはたこ焼きにしたようであった。

「ごちそうさまでした!!」

「この後は確かこのまま何もなければお休みだったよね」

「その予定になってるよ!!」

「取り敢えず、自分の部屋に戻ってるから何かあったら呼びに来てね」

龍姫達は午後の予定を確認したら半日休みになっており、各自の部屋で休むことにしたのであった。

「こんにちは!! ツクヨミです!!」

「あれ? ツクヨミ様どうしたんですか?」

龍姫が自室で休んでいたら、ツクヨミが現れたのである。

「実は教会とわたく達が住んでいる天界を繋げることになりましたのと、この前のフォルトナが女神デバイスを咲耶さんと刀夜さんに渡し忘れたを謝罪しに来ました」

「そうだったんですか!! つまり各国の教会から天界に行けるんですか?」

「その通りです!! なので天界にある町行くことが出来ます!! このこと

は天界上層部で可決していますので安心してください」

「わかりました!!」

「それと、龍姫さん達が付けている胴丸を見せて欲しいのですがいいですか?」

「それだとネプテューヌ達呼んでこないと」

「わかりました、わたしはリビングで待たせてもらいます」

なんと天界へゲームギョウ界にある四か国の教会から行けるようになったことをツクヨミが龍姫に報告した。

ツクヨミは龍姫達の女神の姿で装備している胴丸を見せて欲しいと言ってきたので、龍姫はネプテューヌ達をリビングに集まってもらった。

天界開通編 龍姫達の成長

龍姫はツクヨミに言われ、みんなを呼び、今教会のリビングに集合しているのであった。

「ツクヨミ様!! みんなを呼んできました!!」

「急なことで申し遅れました。そちらのお二人は初めてでしたね!! わたしはツクヨミと申します」

「御神咲耶です」

「龍宮寺刀夜です」

「ツクヨミ様、お姉ちゃんがわたし達にも用があるって言ってたけど」
ツクヨミは咲耶と刀夜に名を名乗り、ネプテューヌはツクヨミに用とは何か尋ねた。

「それについては龍姫さん・ネプテューヌさん・龍愛翔さん・ネプギアさん・龍音さん・うずめさんお手数で女神化してください!!」

「なんで?」

「名を上げたみなさんの装備されている胴丸を見せて欲しいのです」

「そういうことだったですね!!」

「みんな!! 変身!!」

ツクヨミは龍姫・ネプテューヌ・龍愛翔・ネプギア・龍音・うずめに女神化して装備されている胴丸を確認させてほしいと言ってきたので、龍姫達は一斉に女神化を行った。

すると

「見た感じ、変わった様子はないのだけど?」

「そうだな」

それぞれの胴丸を見ても変わった様子はなかったのだが、次の瞬間、ピキツ!! という音がしたのだ。すると

「キヤー!!」

「胴丸が壊れた!! なんで!!」

女神化したメンバーの胴丸が粉々に砕け散ってしまったのだ。

「まさかと思っていましたがみなさんの胸が大きくなっていますよ!!」

「どうしよう!! (。D。) ノアタフタ!!これじゃあ!!」

「胸が邪魔で刀が振れないニヤ!!」

「いま龍姫ちゃん達、今のベールさんより大きくなってるですよ!!?」

なんと龍姫達の胸が大きくなってしまったのだ。そのせいで胸がつつかえて抜刀が出来ないでいた。その大きさはなんと今のベール並になっていたのだ

「そうだわ!!女神化を解けばいいのよ!!」

「なるほど!!その手があったね!!」

龍愛翔が女神化を解けばいいと言ってきたので、龍姫達は女神化を解いたのだ。

「ボクは大丈夫だけど龍音は?」

「ちよつと胸がきつく感じるけど今のところは大丈夫」

龍姫は元々胸が大きかったので気にしていなかったのですが、龍音に大丈夫か聞いたら少し胸が窮屈だったが大丈夫だと言った。

ネプテューヌ&龍愛翔「ねぷ〜!!胸が」

うずめ&ネプギア「大きくなってるよ (やがる)」

「アンタ達服からはみ出てるわよ!!」

「どうしよう!!せつかく新しい服に新調したのに!!」

なぜか元々女神であるネプテューヌ・龍愛翔・うずめ・ネプギアの胸が覚醒時より大きくなっていた上に、服からはみ出していたのである。

「龍姫達の裏切り者!! (; . . D . .)」

「このサイズの服とスポーツブラあるかな?」

「その事でしたら大丈夫ですよ!!」

「まさか!!」

「はい、天界と四か国の教会から転移が可能になりましたので、天界の街のお店で衣服を買うことが出来ますよ!!もちろん今持っている通貨でお買い物ができます、それとこの胴丸の企画書をお渡しします。この企画書で出来る胴丸は胸が大きくなっても大丈夫なように、四次

元になっていきます、もちろんちゃんど胸の感触はあるので安心してくだ
さい」

「どうするの？わたし達このままじゃ天界に行けなよ!!」

「この大きさとサラシで収まるかな？」

「そうでしたね!!みなさんにはこの上着を着てください!!」

「ありがとうございます!!ツクヨミ様!!」

それを見たアイエフは絶叫して、僻んでしまった。

ツクヨミはネプテューヌ達に天界開通の報告をし、ネプテューヌ達
に大きなジャケットを上げ、ネプテューヌ達はそれを着て、

「それじゃあ!!行ってくるね!!」

「こっちはわたし達でなんとかしとくから安心して行って来てね」

「いざ天界に!!」

龍姫達は咲耶達に留守を任せ天界に行くのであった。

もちろんラスティションでも、

「胸が大きくなってるわ!!」

「この胸アタシのものよね!!この感覚たまらないわ!!O(≧▽≧)O
イエー!!」

「コラ!!ユニ、鼻血が出てるよ!!そうだしツクヨミ様が言った」

「天界に行けるって言ってたわね!!」

「それじゃあ!!天界に行きましょう!!」

胸が大きくなっていったのだが、なぜかユニだけが変身前の姿で胸が
成長していたのだ。

その上ユニは鼻血を出しながら自分の胸を揉んでいた。透かさず
星龍がティッシュでユニの鼻の孔に詰めた。

星龍達も天界に行くのであった。

天界の百貨店

龍姫達は今、天界の街にある教会に来ていた。もちろん、着いたよ!!」

「此処が天界の教会、わたし達が暮らしてる教会と変わらないね!!」

「何言ってるの、天界だからってそんなに変わるわけないでしょ」

「それもそうだね!!」

それぞれに思っていたことを言っていた。しばらくして、

「みんな!!着いたわよ!!」

星龍達も天界に到着したのである。

「あれ、龍姫達じゃない!!ネプテューヌどうしたのそんなジャケットなんつって着て」

「ノワール、これには深い事情があつて」

「まあ、いいわ、そんなことより町に行きましょう!!」

「ユニちゃん!!どうしたの!!その包帯とテーピング!!」

「まさかユニちゃん胸、怪我してるの?」

「違いますよ!!胸が成長しちゃったから、サラシを巻いていたらお姉ちゃんが救急箱持ってきていきなり包帯でサラシの上から包帯を巻いて、テーピングで止めてるだけよ!!」

「それなら安心したよ!!ユニちゃんも一緒に町に行こう!!」

ノワールはネプテューヌ達がいつもと違うジャケットを着ているのを疑問に思っていたが、気にせず教会を出て行ってしまった。

ネプギアはユニが窮屈そうに服を着ていたのに気づいたのだ。おまけに襟口から包帯とテーピングが見えていたのでユニがサラシと包帯とテーピングで成長した胸を抑え込んでいると言ったのである。

で龍姫達は教会を出て町に繰り出したのである。

「此処が天界の街なんだ!!」

「プラネテューヌみたいだね!!」

「そんなことより!!服と下着買いに行こう!!」

「そうだね!!」

教会を出て見ると、プラネテューヌのような建造物が建ち並んでい

た。

龍姫達は服を買いに天界百貨店に向かうのであった。

「此処が天界の百貨店か」

「此処ならいい服と下着売り場がありそうだね!!」

百貨店前に着いた龍姫はそのスケールに驚きを隠せないでいた。

龍姫達は百貨店に入って行った。すると、

「あれ、ベール達だよ!!」

「あ!!龍姫ちゃん達だ!!(^ O ^) / ここだよ!!」

「何してるの?」

「ベールお姉ちゃん達が天界に売っているゲームを買うのに付き合ってるんだよ!!」

「なるほど、そういうことかベール達らしいね!!」

「龍姫ちゃん達は胸大丈夫だったの?」

神楽堂家の面々と出くわしたのだが、輝龍・飛龍は姉達の買い物に付合わされていた。

ベール達はゲームの品定めをしているので、お店の近くのベンチに座って輝龍・飛龍は龍姫達に胸は大丈夫か聞いて来た。

「その事ならボクは女神の姿だけ胸が前より成長してたんだよ!!」

「そうだったんだね!!僕たちも女神の姿だけ胸が大きくなっていたから!!」

「もちろん、お姉ちゃん達も胸が大きくなってから、服を買ってから此処に来てるんだよ!!」

「そうだったんだ、それじゃあ!!ボクたちはもう行くね!!」

「今度はボクたちがお休みに遊びに行くから!!」

質問に龍姫は簡単に説明し、龍姫達は服を買いに服売り場に向かうのであった。

天界百貨店ではじめてのお買い物

龍姫達は服を買いに天界にある大手百貨店の服売り場に来ているのであった。

「此処が天界の服売り場なんだね!!」

「値段見ながら服買わないと」

「そうだね!! 取り敢えず、動きやすい服買わないと」

そう言つて龍姫達は服を品定めをするのであった。

「すみません!!」

「お客様どうなされました?」

「胸が大きい人でも着れる動きやすい服つてありますか?」

「そうでしたか、それでしたらこの「パーカワンプ」と「ジャージワンプ」はいかがですか?」

龍姫・ネプテューヌ・龍愛翔・ネプギア・龍音・うずめは服売り場の担当の店員に胸が大きい人でも着れる服があるか尋ねたら、龍姫達にパーカワンプとジャージワンプ薦めてのた。

「あの、試着していいですか?」

「はい、大丈夫です!! こちらの試着室で試着してください」

龍姫達は店員に試着していいか尋ねたら、店員に試着室に案内された。

「取り敢えず、試着してみるか・・・どうなてるんだらうこの服? 結構ボク着痩せする体質とはいえ、胸が締めつけられる感覚が全然ない!!」

「お客様、お気になされましたでしょうか?」

「はい、胸が締め付けられてる感じが 아닙니다!!」

「それはよかったです!! その服は○社が胸がどんなに大きい女性にも着こなせるようデザインをした服になっておりますので、お客様の胸が大きくても大丈夫ですよ」

「そうなんですか!! じゃあ、この服にします・・・お値段は・・・ええ!!」

「777クレジット!! (ゲームギョウ界より安いよ (+|+))」

「ご購入ありがとうございます!! またのお越しを」

龍姫達は試着室に入って店員に勧められたパーカワンプを試着して見たら、思いのほか胸が締め付けられるような感覚がなかったのだ。

パーカワンプを試着した龍姫達に店員が簡単に説明してもらい、

レジに勧められたパーカワンプとジャージワンプを持っていき、一着分の値段がゲームギョウ界より安いことに龍姫達は驚きを隠せないでいた。

「お姉ちゃん、瑠璃色にしたんだ!!わたし達は前に着てたのと同じ色にしたんだよ!!」

「わたし、一回お姉ちゃんとペアルックしてみたかったんだ!!」

「そうだったのネプギア!!」

「ボクは黒にしたんだ」

「俺は白にした」

龍姫は瑠璃色、ネプテューヌと龍愛翔はいつも着ていたのと同じ色、ネプギアは以前着ていたセーラワンプと同じ色、龍音は黒、うずめは白のパーカワンプとジャージワンプを購入した。

「次は下着売り場に行かないと」

下着を買うため龍姫達は下着売り場に行くのであった。

天界百貨店ではじめてのお買い物 後編

服を購入した龍姫達は、ブラを買いに下着売り場に來たのであった。

「ブラって言ってもこんなにサイズと種類が豊富なんだね〜」

「此処のラインナップってわたし達の行きつけの百貨店より多いかも」

「此処ならこの大きくなった胸に合うブラがあるはずだよ!!」

下着売り場に到着した龍姫達はまたもや天界百貨店のラインナップの多さに驚きを隠せないでいたのだった。

「あれ、龍姫ちゃん達やないの」

「武龍それにブラン達も」

「そっちも例の」

「そうよ!!この胸が大きくなっていたから」

「ボクもこの姿でも胸が大きくなってもうたから」

どうやら武龍達も胸が大きくなっていたらしく、龍姫達と一緒にブラを品定めをするのであった。龍姫達がブラを見ていたら、

「お客様、お下着をお探しでしょうか?」

「胸が大きい女の人のブラを探してるんですけど?」

「でしたらあちらでサイズを計らしてもらってもよろしいでしょうか?」

「そうだね!!お願いします!!」

後方から下着売り場の担当の店員さんが話しかけてくれたので、ネプギアが胸が大きい人用のブラを探していると店員さんに伝えたら、胸のサイズを測定したいと言ってきたので龍姫達は店員さんにサイズを測定するため、外から見えない場所まで案内された。

「では、お客様、ジャケツトをお脱ぎになつてください!!」

「はい、わかりました!!・・・これでいいですか?」

「それでは測らせていただきます」

龍姫達は龍姫から順に店員さんの前で上着を脱いで、店員さんが顔色一つも変えず、慣れた手つきで繊維製巻尺で測っていった。

「お客様のサイズならこの「ソフトブラ」はいかがでしょうか？」
「試着してもいいかしら？」

「お試着ですか？ではこちらの試着室でお願いします!!」

店員さんは先ほど測った龍姫達の胸のサイズを参考にブラを持ってきてくれたので、龍姫達は試着室で試着することにした。

「緊張するなくこんな本格的なブラって自分で着けたことないけど、取り敢えず、着けてみるか・・・こんな感じかな、よかった!!全然胸回りがきつくないし息苦しくないそれにちゃんと胸が揺れないから擦れる心配もない、おまけにこんなにかわいい絵柄で胸をちゃんと隠せているから大丈夫だね!!」

「お気に召されましたでしょうか？」

「はい!!そうだ、すいません寝る時用のブラってありますか？」

「はい、お客様のサイズの「ナイトブラ」もございますよ!!」

龍姫達は試着したブラが思いのほか、着け心地が良かったのと、かわいい装飾が施されたいたので、

龍姫達は店員さんに就寝時に着用するブラはあるか尋ねたら、店員さんが先ほど測ったサイズを参考にナイトブラを持って来てくれたので、

「このブラにします!!いくらだろう?・・・850クレジットと750クレジット(ブラまでゲームギョウ界より安いよ)」

「お買い上げありがとうございます!! またのご利用お待ちしております」

龍姫達はレジに順番に並び、お会計をしたのである。

また龍姫達は天界百貨店がゲームギョウ界より安いことを思い知らされたのであった。

「ついでに、晩御飯の食材買って行こうか？」

「そうだな」

龍姫達はついでに晩御飯の材料を買い、

「星龍・武龍・輝龍・飛龍また一緒にお買い物しようね!!」

「うん!!今度休暇が出来たらプラネットユーヌに遊びに行くで!!」

「それじゃあ!!教会に帰りますか!!」

天界にある転移装置の上に立ち、それぞれの国に帰るのであった。

天界の市場

「ただいま!!みんな!!」

「お帰り〜龍姫〜」

「お帰り、龍姫ちゃん天界のお店どうだったの?」

天界百貨店から帰ってきた龍姫達を咲耶と刀夜が出迎えてくれた。刀夜は天界の市場はどうだったか聞いて来たので、

「刀夜、この荷物片付けてからでいいかな?」

「その通りだね!!半分持つから刀夜はもう半分お願い!!」

「わかったよ、咲耶ちゃん!!」

「咲耶と刀夜、ありがとう!!」

「どういたしまして」

龍姫は買ってきた物を部屋に運んでからと言い、咲耶と刀夜が半分ずつ持つてくれたので、龍姫は二人にお礼を言い、取り敢えず、食材を台所に運ぶのであった。

「お帰りなさい!!龍姫!!」

「天界でのお買い物どうでした?」

「アイ・コンパ・イーすんだいま食材を冷蔵庫に入れてから話すね!!」

台所に到着した龍姫達はアイエフとコンパと二人のイストワールにただいまを言い、買ってきた食材を冷蔵庫に入れていった。

「天界のお店の様子はどうでした?」

「活気にあふれてたよ!!」

「それにゲームギョウ界より物価が安くて、品揃えも多かった」

「そうなんです!!。(。D。)ノお仕事が入ってなかったら一緒に行けたですよ☒从〜、从ショボーン」

「仕方ないよ、コンパは女神だけど本業は看護師なんだから」

「わかったですよ!!今度休暇を取って龍姫ちゃん達と一緒に行くです」

先程、刀夜とイストワールの質問に龍姫が丁寧に答え、コンパは今度休暇を取って一緒に行きたいと決意をした。

四ヶ国の室内大浴場

龍姫達はツクヨミが教会に増築してくれた大浴場で疲れを取っていた頃、

「いい湯だわ!!」

「そうだね!! ノワ姉!!」

「まさかボクたちが天界に買い物に行ってる間にこんな大きいお風呂が出来てたんだ」

「これ、天照大御神様の仕業だよ」

「別にいいじゃない!! こうして姉妹全員が浸かってもまだ広々してるし」

「まさか、檜風呂とジャグジーまで造ってくれるなんてね!!」

ラストイションでも教会の庭で温泉をツクヨミの部下が調査の一回で掘っていたら、ラストイションでも掘り当ててしまったのだ。

今、星龍達はその増築された檜風呂とジャグジーを楽しんでいた。

「いい湯だね」

「そうですね!!」

「べールお姉さま!! 翔龍お姉さま!! お背中流せてください」

「お願いしますわ!! けど、チカあなたも胸が大きくなったのですね」

「はい、こんなわたくしのような教祖でありながら女神にさせていただいた上に女の象徴である胸まで大きくしていただけるなんて夢にも思っていませんでしたわ」

「何言ってるの、チカお姉ちゃんも女神なんだよ」

「そうですね!! 教会の庭で温泉が出てくるなんて思っていませんでしたわ!!」

「おまけに檜風呂とジャグジーまで付けてもらえるなんて」

「流石、ツクヨミ様の所属している組織だね!!」

どうやらリンボックスでも教会の庭で温泉が出てきたらしく、輝龍・飛龍達は新しく増築された大浴場で姉妹全員でお風呂を楽しんでいるのであった。

当然、チカも胸が大きくなっていった。

「気持ちいい〜!! (^◇^)」

「ラムちゃん、これって武龍お姉ちゃんが教えてくれたジャグジーだよ」

「ロムちゃん、一緒にジャグジー入ろう」

「うん!!」

「等々、上り詰めたこの胸に」^{たかみ}

「こんだけ大きかったら十分だ」

「そやけど、龍姫ちゃんと星龍ちゃんはこんな大きいもん付けていたんやな、実際なつてみて痛感したわ」

「わたしも皆様の胸の大きさに驚いています」

ルウイーでもほかの三方国同様に教会に大浴場が増築されていた。

武龍達も大きくなった自身の胸を見てそれぞれに思ったことを言っていた。

「ふう〜お風呂から上がろうと」

龍姫達はお風呂から上がり脱衣所に向かうのであった。

「お姉ちゃん、早速、今日買ってきたブラと寝間着の出番だね」

「そうだね!!・・・これで良し!!」

「へえ〜お姉ちゃんナイトブラは青紫にしたんだ!!おまけにかわいい猫の絵が描いてあるし」

「この色のナイトブラが目に入って、サイズも大丈夫だったから」

「ナイトブラがあるなんて知らなかったよ!!」

「そうだね!!龍姫お姉ちゃんと龍音がいた世界のブラって大きいサイズでもかわいいのがあるんだもんね」

「このナイトブラは寝るときに胸が擦れなくするのと、型崩れをしなくするためのブラなんだよってボクも着けたの初めてだけど、クーパー靱帯が切れないようにする効果もあるんだよ」

「そうなんだ〜だからこのブラ胸を持ち上げてくれる感覚があるんだね!!」

「そうだね!!」

脱衣場で龍姫達は今日買ってきたナイトブラを着けそれぞれに思っていたことを言い、

「お休み〜」

「うん、お休み〜お姉ちゃん〜」

龍姫達は自分の部屋に戻って就寝したのであった。

天界開通翌日

天界とゲームギョウ界が行ったり来たり出来るようになって、翌日「はあ〜（ ㊦ ）、」

「お姉ちゃんおはよう〜（ ㊦ ）、」

龍姫と龍音はいつものように起き、

「早速、昨日買った、ソフトブラとパーカワンピを着てみよう」

「ボクも」

昨日、天界百貨店でジャージワンピと一緒に購入したソフトブラを着け、パーカワンピに着替えた。

もちろんパーカワンピとジャージワンピは三着ずつ購入しているのである。

「ネプテューヌ・龍愛翔・ネプギア!!」ゝ〇ゝ（ ㊦ 朝だよ」

「は〜あお姉ちゃんと龍音おはよう；つ㊦、」

「おはよう；つ㊦、」

「早く着替えないといーすんに怒られるよ!!」

「(、ω、) ノハイイ!!」

着替え終わった龍姫と龍音はネプテューヌ・龍愛翔・ネプギアの部屋に行き、三人を起こした。

三人は寝間着から昨日購入したソフトブラを着けてパーカワンピに着替えるのであった。

「プルルート!! ピーシエ!! 朝だよ!!」

「お姉ちゃん〜もう朝なの？；つ㊦、」

「ピーーまだ眠い」

「ピーシエ!! 起きないと、「死者の目覚め」するから」

次にプルルート・ピーシエを起こしに部屋に来たのだが、プルルートは素直に起きて寝間着からいつもの服に着替え始めたのだが、ピーシエが起きそうになかったので、龍姫は右にお玉、左にフライパンを粒子化から実体化し、ピーシエに某ゲームの主人公の妹のように構えていた。

「死者のめぎじゃめはいやー」

そんなこんなでピースェは起きるのであった。

「おはよう；つ旦那、龍姫」

「おはよう龍姫ちゃん」

「おはよう咲耶と刀夜!!」

「お姉ちゃん、おはよう；つ旦那、」

「うずめはちゃんと起きるんだね!!」

「なに、当たり前のこと聞いてるんだよ!!」

ちようどりビングに向かっていたら、廊下でうずめと咲耶と刀夜と鉢合わせになり、全員で台所に行くのであった。

「おはよう・・・たた龍姫とうずめと龍音なの（；旦那）誰!!?」

「たた龍姫ちゃん達がねぶねぶの服着てるですう（旦那）ノ!!」

「おはようございます龍姫さん・・・龍姫さんなんですか!!（旦那）ノ!!誰!!」

台所に先に来ていたアイエス・コンパ・イストワールの四人は龍姫・龍音・うずめがいつも着ていた男物の服装でなく、ネプテューヌの着ている色違いのパーカワンプを着ていたので驚きを隠せないでいた、目が点になっていた。

「もうアイちゃん達、驚きすぎだよ!!」

「だって龍姫がアンタの色違いの服着てたら」

「驚くに決まっていますう!!」

ネプテューヌがアイエフとコンパに突っ込んだら、アイエフとコンパが逆に突っ込んで来た。

「取り敢えず、朝ご飯にしよう!!」

「そうだね!!」

二進も三進も行きそうになかったので龍姫は朝食の準備に入っただけであった。

フエンリスヴオルフ再び

龍姫達は台所で朝食を作っているのであった。

「ご飯できたよ!!」

「へえ、今日は出し巻としめじのお味噌汁なのね!!」

「それじゃあ!!」

「いただきます!!」

朝食が出来たので台所のテーブルに並べ、椅子に座って朝食を頂くことにした。

スキット：天界製の衣服

アイ「龍姫達、胸が昨日見た時より」

コンパ「小さく見えるですう!!」

龍姫「あ!!その事、実は今着けてるソフトブラで胸を抑えてるんだよ!!その上にこのパーカワンプいで着痩せしてるんだよ!!」

咲耶「そうだったんだ!!」

刀夜「ちゃんと姉妹揃ってあの女の子からも憧れを持たれていた豊かな胸は健在なんだね

!!」

ネプ「そうだよ!!だから心配しないでいいよ!!」

アイ「けど、ちゃんと谷間はできてるのねガクツ!!」?—○ :

「?—(…:…:…:—?!…:…:…:—i…:…:…」

ギア「アイエフさん!!。(。D。)ノ戻って来てください!!。(。D。)ノ」

アイ「龍姫達の裏切り者!!ム——」[○: D. ○]——カ」

龍姫「アイ、今も胸がないこと気にしてたんだ(;—」——)」

「さてと、朝ご飯も食べてたし執務室に行こうか」

「そうだね!!」

「取り敢えず、食器を片付けないとね!!」

龍姫達は朝食を食べ終え、食器を片付け、今日の仕事をするため執務室に向かった。

一方その頃

「ツクヨミ様!!」

「どうしたのですか?」

「はい、例の物が出来ましたのでご報告に参った次第で」

「あれが完成したんですね?」

「はい!! その通りです!!」

「その例の物は今すぐに用意できますか?」

「もちろんです!! 大至急、ご用意します、では、失礼しました!!」

「流石にアイエフさんだけ、あのままはかわいいそうですね」

どうやら、天界ではツクヨミが何かを作っていた。その物はアイエフに関係がある代物の様であった。

「さてと、今日もクエストが寄せられたから」

「今日はバーチャルフォレストでフェンリスヴォルフの討伐だつて」

「それじゃあ!! 張り切って行こう!!」

龍姫達は今日の仕事の内容を確認したら、あのうずめと初めて会った時に討伐したフェンリスヴォルフの討伐クエストになっていたので、

龍姫達はフェンリスヴォルフが生息しているバーチャルフォレストに向かうのであった。

「此処だよね・・・あ!」

「あれが討伐にあったフェンリスヴォルフなんだね」

「そうだよ!!」

「みんな準備は良い?」

「いつでも行けるよ!!」

バーチャルフォレストに到着した龍姫達は奥に進み、フェンリスヴォルフを発見したので龍姫達は各々に得物を構えたのである。

無想神烈閃!!

龍姫達はギルドから教会に寄せられたクエストでバーチャルフォレストに着ているのだが、

「ウォーン!!」

そのクエストにあった討伐対象のフェンリスヴォルフと戦闘中である。

「ウォーンー!!」

「来たよ!!」

「わかった!!」

「喰らえ!! 魔神剣!!」

フェンリスヴォルフは攻撃をしてきたのだ。

龍姫達は慣れてた様子で巧みにかわし、刀夜が斬撃を飛ばした。

「キューーン!!」

ものの見事にフェンリスヴォルフに命中し、悲鳴を上げた。

「グオーん!!」

フェンリスヴォルフは再び攻撃を仕掛けてきたのだが、これもかわした。

「刀夜!! 決めて!!」

「わかった!! 飛ばして行くよ!!」

龍姫は刀夜に指示を出し、刀夜はオーバーリミッツを発動させた。

「ウォーン!!」

「遅いよ!! 爆炎剣!!」

フェンリスヴォルフは刀夜に攻撃を仕掛けたのだが、刀夜が刀を振り落とし、火柱を発生させ、フェンリスヴォルフの攻撃を中断させて、

「続けて行くよ!! 砕氷刃!!」

刀身に冷気を纏わせ十字に斬り捨て、

「虎牙連斬!!」

斬り上げ、薙ぎ払い、斬り下ろしで追撃して、

「雷神轟天撃!!」

刀身に雷を纏わせた刀を突き出しながら斬りつける奥義「雷神轟天

撃」をお見舞いし、

「斬り裂け!! 天狼迅牙!!」

本来は龍姫とノワールと龍菜が見本にしている剣術の使い手の「黒衣の断罪者」の相棒の青い毛並みの愛犬のバーストアーツを刀夜なりにアレンジした結果、龍音が修得している月閃光のように斬り上げて、空中で裂空斬のように追撃するバーストアーツをお見舞いし、

「覚悟を決めて!! 荒ぶる魂、無風なる水面の如く!! 鎮まれ!! 斬る!! 無想神烈閃!!」

フェンリスヴォルフに白夜殲滅剣ように斬撃を連続で叩き込んだ後、切り抜け一閃する秘奥義「無想神裂閃」を決めた。

フェンリスヴォルフは光の粒子になって消えていった。

「安らかに眠ってね!!」

刀夜は刀を納刀しながら決め台詞を言っていた。

「ギルドに報告に行くよ!!」

「そうだね!!」

龍姫達はギルドに報告しに行くのであった。

スキット：無想神烈閃

ネプ「刀夜の秘奥義ってなんかうずめの「白夜殲滅剣」みたいだね!!」

刀夜「確かに似てるからね!!」

龍姫「あの秘奥義ってク○エの秘奥義だよね!!」

刀夜「本当は「白夜殲滅剣」か「獣破轟衝斬」が候補に挙がってたんだけどうずめちゃんに譲ることにしたんだ」

うずめ「別に気にしてないぜ!! 被っても構わねよ!!」

刀夜「わかったよ、次からはわたしの「白夜殲滅剣」見せてあげる!!」

咲耶「楽しみにしてるわ!!」

「ただいま!!」

「お帰りなさい!! どうやら無事にクエストをこなしたんですね!!」
「うん」

「この後は、昼食休憩を取った後、執務室で書類を片付けです」

「ありがとう、いーすん!!」

「お昼にしようよ!!お腹減った〜(´・ω・´)ハラヘツタ〜」

教会に戻ってきた龍姫達はイストワールからこの後の仕事の内容を聞き、

ネプテューヌと龍愛翔が空腹を訴えたので台所に向かうのであった。

「たまには息抜きもしないとね!!」

ベールと翔龍は天界百貨店で買ったゲームをしに自分の部屋に戻って行った。

輝龍・飛龍は二人に付き合うのであった。

ところ変わってルウィーでは、

「武龍お姉ちゃんく!!」

「どうしたんや!! ロム・ラム」

「お姉ちゃんと秋龍お姉ちゃんが遊んでくれない!!」

「そんなことかいな!!」

ロムとラムがブランと秋龍が遊んでくれないので武龍に泣きついたのであった。

「あの二人はそんなに忙しかったっけ?」

「武龍様、ブラン様と秋龍様はもう書類整理を終えておられますよ!!」

「じゃあなんや?」

「ブラン様と秋龍様、実は部屋に籠って同人誌をお書きになられてるんですよ!!」

「そういや、この前、倉庫に行ったときに見たあの新聞でカモフラージュしてた奴か!!」

「はい、その通りです!! 武龍様」

「その新聞を剥がして見してもらったけどあれは同人誌って言えへんで(・ω・)」

「わたくしも、拝見させてもらいましたのですが、あまりにも文学の欠片もありませんでした」

「お姉ちゃん達の本ってそんなにヒドイの!!?」

「本当やで!! けどな、ロム・ラムにはまだ早い」

「なんとなく」

「想像できる」

どうやらブランと秋龍は二人仲良く部屋に籠って同人誌の執筆をしていることを侍従のフィナンシエが武龍達に教えてくれて、武龍も倉庫に行った時に見た新聞紙でカモフラージュしていた同人誌を見た

時に感想を述べていた。
その同人誌の出来はひどかったのは言うまでもなかった。

忘れていた企画書

天界とゲームギョウ界が教会を通じていけるようになって一週間が過ぎた。

龍姫達はいつものように、

「この書類のチェックで最後だよ!!」

「わかった!!」

「ふう〜片付いたな!!」

書類整理をしていた。どうやら、片付いたようであった。

「そういや、お姉ちゃんがツクヨミ様からもらった企画書で胴丸を作らない?」

「確かに、この頃女神化してなかったからすっかり胴丸のこと忘れてね!!」

「しっかりしてよ!!龍姫!!」

「ごめん!!それじゃあ!!すぐ胴丸の製作に取り掛かるよ!!」

龍姫は最近、女神化してクエストする必要がなかったので、すっかり胴丸の事を忘れていたのであった。

すぐさま龍姫はツクヨミがくれた企画書で天界の技術者が発案した胴丸の製作に取り掛かるのである。

「必要な素材は「鉄鉱石」「紅蓮石」「ゴットソウル」を組みわせれば」

「完成だね!!」

「クエスト行ってた甲斐があったよ」

龍姫達は企画書に書かれてる通りに素材を組みわせていき、見事に完成したのである。

「龍姫、実はこの前龍姫達が天界にお買い物行ってる間にツクヨミ様がこれ龍姫に渡して欲しいって預かった企画書と手紙なんだけど」

「咲耶、その企画書見せて!!何々…これ龍音の新しいバリアジャケットの企画書だよ!!」

「ボクの新しいバリアジャケットの企画書だったの。(。D。)ノ!!」

咲耶がツクヨミから預かっていた企画書と手紙を龍姫に渡した。

龍姫はその企画書と手紙を受け取った。そこに書かれていたのは

龍音の新しいバリアジャケットの企画書であった。

「いいのかなくボクだけこんなにしてもらって？」

「何言ってるの!! 龍音だってこの頃クエストとか頑張ってるじゃない!!」

「ツクヨミ様のご好意なんだから、素直に喜べよ!!」

「そうだね!! ありがとう!! うずめお姉ちゃん!! 早速作ろうよ!!」

「そうだな!! 龍音はこうじゃねえとな!!」

龍音は自分だけ報酬が出たことに、謙虚になってしまったが、うずめが龍音を励まして、その企画書を元に龍音の新しいバリアジャケットの製作に取り掛かるのである。

「このバリアジャケットに必要な素材は「古着」「竜の鱗」「獣の鬣たてがみ」だよ!!」

「竜の鱗と獣の鬣はあるけど、もひとつの素材の古着って」

「古着って!! ネプテユーナ!! 覚醒する前に着てたパーカワンピとジャージワンピはどうしてる?」

「それなら、段ボールに入れて教会の物置に片付けてたよ!!」

「まさか!! 此処に書かれてる素材の「古着」って」

「そのパーカワンピとジャージワンピを素材にすればいいんだよ!!」

龍姫は企画書に書かれていた素材を開発室の机の上に並べていたのだが、素材の一つ「古着」が足りないことに気が付いたのである。

龍姫はネプテユーナに覚醒する前に着ていたパーカワンピとジャージワンピはどうしたのか聞いたら、教会の倉庫に段ボールに入れてしまったと答えたので一行は教会の物置に行くのであった。

閃光

龍姫達は企画書に書かれていた素材である古着のパーカワンピとジャージワンピを探しに今現在、

教会の物置に来ているのであった。

「ネプテユース、この段ボールでいいかな？」

「確かに黒マジックで着れなくなった服って書いてあるしね!!」

「それじゃあ!!開けるよ!!」

龍姫は黒マジックで着れなくなった服と書かれた段ボールを見つけて、ネプテユースに尋ねたら、これだと言ったので確認のため段ボールを開けるのであった。

「これだよ!!懐かしいな」

「これが昔ねぷちがちっこい時着てた服か」

「そうだよ!!お姉ちゃんど初めて会った時に着てた服だよ!!」

「それじゃ!!名残惜しいけど、開発室に行くよ!!」

段ボールを開けてみると、龍姫と初めて会った時に着ていたパーカワンピとジャージワンピが敷き詰められていた。

龍姫達は名残惜しいがそのパーカワンピとジャージワンピ入った段ボールを持って物置を後のするのであった。

「これで全部そろったね!!」

「そういえば、お姉ちゃん!!手紙って読んだの?」

「そうだった!!読むね!!何々龍姫さんへ、この前の出張の報酬にこのバリアジャケットの企画書をお渡しします!!それとアイエフさんに天界に来るようお願いします、ツクヨミよりだって」

「そうだったんだ!!この企画書って」

「それは兎も角、アイちゃんに天界に来てほしいって書いてあったけど」

「その事は本人に言った方がいいだろう!!それより龍音の新しいバリアジャケットのお披露目だろ」

「そうだったね!!それじゃあ!!行くよ!!セットアップ!!」

龍姫は企画書と一緒に渡された手紙を読んでもみると、この前の報酬

にこの企画書とアイエフに天界に来てほしいとのことだった。

アイエフ本人に言っとくことにして、龍音は新しいバリアジャケットを着るため女神化をしたのである。

「これが新しいバリアジャケットなんだ」

龍音の新しいバリアジャケットは、

紫を基調にしている、白いラインが入っており、龍姫達の剣のアニメに出てくる「閃光」の異名を持つキャラの服になっており、先ほど作っておいた胴丸のおかげで大きくなった胸がツクヨミの言った通り、某猫型ロボットの四次元ポケットの機能で、装備している間は胸が目立たなくなっていた。髪は以前と同じく紫のまま、前髪だけ黒のメッシュが入っており、髪型はツインテールのままであった。右碧左紅のオッドアイになっており、身長は171cmになっていた。もちろん、左腰に剣帯が装備されており、龍姫から譲り受けた刀を差し、後腰に左で抜刀出来るように小太刀が横に装備されていた。

一陣の風、天界に行くの段

新しい胴丸と龍音の新しいバリアジャケットが完成したのである。
スキット：閃光の龍

龍姫「龍音の新しいバリアジャケットのモデルってSAOのアスナなんだ!!」

龍音「まさか!! ツクヨミ様がボクのためにアスナの戦闘服の企画書を書いてくれるなんて」

ネプ「となると龍音は「客員剣士」と「閃光剣士」のバリアジャケットをネプギアと一緒にフォームチェンジ出来るんだ!! いいなくわたしもフォームチェンジやつてみたい!!」

ギア「お姉ちゃんは今でも十分強いんだから」

ネプ「そうだよね!!」

咲耶「いざとなったらみんなと一緒に作ったらいいんだから」

スキット：紫龍の胴丸

龍姫「これで心置きなく女神化出来るんだ」

龍音「そうだね!!」

ネプ「しかしこの胴丸、どういう仕組みになってるのかしら?」

龍愛翔「そういえば、大きくなった胸がぺったんこになってるわ!!」

ギア「けど、ちゃんと大きくなった胸の感触は伝わってくるな」

刀夜「そうなの!!」

龍姫「うん!! ジャンプしてみたら胴丸の中で大きくなった胸が揺れた感覚がしたよ!!」

ネプ「ホントだわ!! 良かったら本当に覚醒する前のブランみたいになっちゃったらどうしようかと心配したわよ」

ギア「そんなこと言ったらブランさんがキレルと思うが」

「そうだ!! アイにツクヨミ様事の伝えないと!!」

龍姫はツクヨミの事をアイエフに伝えるため、ポケットからデバイスを取り出し、

『マスター!! ご用件はなんですか?』

「アイエフに連絡してほしいんだ!!」

「はい、かしこまりました」

龍姫はアイエフの携帯に連絡した。

「もしもし」

「もしもし、龍姫だけど、アイ、今大丈夫？」

「大丈夫よ!!今ちようど教会に向かつてるわ!!」

「わかった!!執務室で待ってるから!!来てね」

「わかったわ!!」

「これでよし!!」

アイエフと通信が繋がったので龍姫は教会に着いたら執務室に来て欲しいと言い、執務室で待つことにした。

「龍姫!!来てあげたわよ!!わたしに連絡したってことは何か用があるんじゃないの?」

「うん、ツクヨミ様がアイに天界の教会に来てくれて、手紙に書いてあったから」

「そういう事だったのね、わかったわ、天界に行ってくるわ」

「待つですう!!わたしも一緒に行くですう!!」

「お願いしていいかな?ボクたちはこれから書類整理などしなきゃいけないから」

「はいですう!!」

しばらく待っていたら、アイエフが執務室にきたので龍姫はツクヨミからの手紙を渡し呼びつけた理由を述べた。

それを聞いたアイエフは早速、天界に向かうことにしたのだが、

たまたま一緒に来ていたコンパもアイエフに同行すると言ってきたので龍姫は仕事の都合で一緒に行けないことをコンパに言い、

「それじゃあ!!行ってきますですう!!」

教会にある転送装置でツクヨミが住んでいる次元の天界に向かったのであった。

アサシンブレード

龍姫からツクヨミからの手紙を受け取ったアイエフ・コンパは教会の転送装置でツクヨミたちが住んでいる次元の天界に、

「ふうく無事に到着したわね!!コンパは大丈夫?」

「だいじょうぶですう!!」

「此処がツクヨミ様達が住んでいる次元の天界の教会なのね!!」

「なんか、龍姫ちゃんのいた世界の「神社」って言う建物の中みたいですよ!!」

「そうね、取り敢えず、ツクヨミ様に会いに行きましょう!!」

「そうですうね!!」

無事に転送できたのであった。コンパは以前龍姫から転生する前にいた日本の建造物の「神社」の事を思い出したのである。

で二人はツクヨミに会いに行くのであった。

「こんにちは、アイエフさん、それにコンパさん」

「こんにちは!!ツクヨミ様」

「こんにちはですう!!ツクヨミ様!!」

部屋から出てそのまま執務室に向かったアイエフとコンパは、執務室の部屋のドアをノックして返事があったので、ドアを開け中に入ったら、ツクヨミが出迎えてくれた。

アイエフとコンパは挨拶をするのであった。

「アイエフさんをお呼びしたのはこれを受け取っていたかどうかと思いましたが、本来ならそちらに窺うのがいいのですが、この頃、執務が忙しくなかなか時間が作れなかったので、申し訳ありません」

「ごちうこそ、女神にしてもらったんです!!おまけに「アサシンブレード」までもらってもいいですか?」

「何を言ってるのですか、これはアイエフさんが闇の自由聖騎士に昇格した時に渡したかったんですが、開発が遅れてしまったので」

「別におきになさらいでください!!」

「そうですう!!わたしも女神にしてもらったんですうから!!」

「ありがとうございます!! それではこの辺でこの後も執務がありますので」

「いいえ、こちらこそ失礼しました!!」

ツクヨミはアイエフに天界の技術で作ったカタールと同じ暗器の「アサシンブレード」を二つ授けたのである。

アイエフとコンパはツクヨミにお礼を言い、ツクヨミは執務のためその場を後にして、

アイエフとコンパもゲームギョウ界に帰るため、その場を後にするのであった。

「さてと、コンパ!! 帰るわよ!!」

「もうちょっと居たかったですう〜仕方ないですう!! 今度はお休みを取ってくるですう!!」

アイエフとコンパは転送装置でゲームギョウ界に帰るのであった。

「ただいま!! 帰ったわよ!!」

「ただいまですう!!」

「お帰りなさい!!」

「龍姫達はもうお仕事終わったの?」

「もちろん!! もう五日分の書類整理を終わらせたよ!!」

「すごいですう!!」

「それそうと、アイ、ツクヨミ様の用は済んだんだね」

「ええ、ツクヨミ様からアサシンブレードもらったわ!!」

無事に天界から戻ってきたアイエフとコンパは龍姫達に出迎えてくれたのであった。

アイエフは龍姫に仕事は終わったか聞いたら、もう五日分の書類を片付けたと龍姫が答えたのであった。

」

魔王獄炎波!! 闇に飲まれろ!! アイン・ソウ・アウル!!

女神の仕事が一段落して、一週間が過ぎていた。

龍姫達は教会に寄せられた魔物退治に、龍姫とネプテューヌ達が初めて出会った洞窟に来ていた。

「懐かしなく」

「そうだよね!! 此処から始まったんだもんね!!」

「あの時は自分が女神様のお姉ちゃんに成るなんて思ってたから」

「そう言えば、ノワールが左腕骨折したんだっけ、そのせいでわたしが女神化して戦うことになって」

「ボクが助太刀に来たんだっけ」

龍姫とネプテューヌは初めて会ったことを思い出していた。

しばらく洞窟を歩いて行くと、

「いたよ!! エンシエントドラゴン」

「みんな準備いい?」

「いつでも行けるよ!!」

討伐対象のエンシエントドラゴンがいたのだ。

龍姫達はそれぞれ得物を構えたのだ。

「グオー!」

「遅いわ!! 魔神拳!!」

エンシエントドラゴンが攻撃を仕掛けて来たのだが、今の龍姫達では見てからかわせるので、攻撃を躲し、アイエフが新しい得物「アサシンブレード」を振り衝撃波を飛ばした。

「グオー」

「効いてる〜ここは〜あたしに〜決めさせて〜」

「わかった!! 援護するよ!!」

「飛ばして〜行くよ〜変身!!」

見事に命中したのである。プルルートはここは任せろと言ってきたので龍姫達は援護に入り、プルルートはオーバーリミッツを発動させてそのまま女神化をしたのである。

「グオオオオー！」

「こつちよ!! 虎牙破斬!!」

エンシエントドラゴンが攻撃してきたがプルルートは躲して、関節剣を伸ばさず、斬り上げ、斬り下ろす特技「虎牙破斬」で攻撃を中断させた。

攻撃の隙を与えず、

「お仕置きよ!! 瞬連刃!!」

連続で斬りつける特技「瞬連刃」を透かさず繰り出し、

「鷹爪襲撃!!」

真上に飛び踏みつける秘技「鷹爪襲撃」に繋げ、

「碎覇双撃衝!!」

関節剣を伸ばさず突きを繰り出しながら二発の斬撃を飛ばし、

「腹括りなさい〜 天狼滅牙!!」

本来は拳で地面を叩き、相手を起こし怯ませ滅多切りにするのだが、プルルートは足で踏みつけるアレンジを施した。

「遊びは終わりよ〜この一撃で沈みなさい!! 魔王獄炎波!!」

プルルートはエンシエントドラゴンに特攻し、滅多斬りにした後、前方宙返りをしながら関節剣を伸ばさず叩きつけ、闇の炎で包み込む秘奥義「魔王獄炎波」を発動させた。

プルルートがこれで終わるはずもなく、

「あははは!!延長サービスよ!! 闇に飲まれなさい!! アイン・ソフ・アウル!!」

そのまま関節剣にオーラを纏わせ振り下ろす秘奥義「アイン・ソフ・アウル」に繋げたのだ。

「グオオオオ〜」

エンシエントドラゴンは闇に飲まれず、光の粒子になって消えていった。

「安らかに眠りなさい!!」

プルルートは決め台詞を言っていた。

分史世界編

四龍の女神!! 外史世界に行くの段

龍姫達は教会のクエストを終えたのでギルドに報告をして、教会のリビングでくつろいでいた。

スキット：アイン・ソウ・アウル

龍姫「プルルートの秘奥義はエ〇ルの「魔王獄炎波」からの「アイン・ソウ・アウル」が出来るんだ」

プル「女神化しちゃうとく閨っばい秘奥義になっちゃうんだよ」

ネプ「ぶるるんの女神の姿を物がたったたよ!!」

龍音「実は「魔王獄炎波」は閨属性だけど、「アイン・ソウ・アウル」は見た目に反して光属性の秘奥義なんだよ!!」

プル「そうなんだ」

「大変です!! 龍姫さん!!」

「どうしたんですか!! ツクヨミ様!!」

龍姫達がリビングでくつろいでいたらツクヨミが血相を変えて、龍姫達のデバイスに通信をしてきたのだ。

「実はある外史世界のゲームギョウ界が存続の危機に陥っているとわたしの部下から報告がありました」

「まさか!! 前にボクが見た夢に出てきたゲームギョウ界ですか!!」

「はい!! 龍姫さんが夢で見たゲームギョウ界なんです!! それと向こうでも女神化が可能です!! 向こうのゲームギョウ界のシエアの影響は受けません」

「前にプルルートの次元に出張した時と一緒になんです!!」

「その通りです!!」

なんと、此処とは違う次元のゲームギョウ界が存続の危機に陥ってしまったとツクヨミが龍姫達に助けを求めてきたのである。

「わかりました!! ボク行きます!!」

「ボクじゃないでしょ!! 行くな」ボク「たちだよ!!」

「そうだよ!! 龍姫お姉ちゃんだけ行くなんって、姉妹なんだから水臭

いのは無しだよ!!」

「けど、ネプテューヌ達が此処を長く開けるとマズインじゃ」

「大丈夫ですよ!!行ってください!!」

「そうよ!!こっちの次元のゲームギョウ界のプラネテューヌには四人の自由聖騎士女神がいるのよ!!」

龍姫はほっとけない病が発症してしまったので二つ返事で承諾し、外史世界のゲームギョウ界に行くと言った。

それを聞いたネプテューヌ達もほっとない病が発症してしまったのか一緒に行くと言って聞かなかったが、

イストワールが龍姫達に行ってくれと言っただ。

続けてアイエフが四人の自由聖騎士女神の代表してここは任せて欲しいと言った。

「それと星龍さん達もさつき連絡があり、龍姫ちゃん達ばかり任せられるわけにはいかないと言ってきたので、向こうで合流すると言う形になりました」

「ええ!!星龍達も一緒に来てくれるんだ!!」

「はい!!ですが、龍菜さん・ベールさん・翔龍さん・チカさん・秋龍さんの五人はこのゲームギョウ界で龍姫さん達の帰りを待つと言っていました」

「そうだね!!ほかの三方国は此処と違って行ける人数が限られてるもんな!!」

ラストイションから龍菜以外のメンバーと、ルウィーから秋龍以外のメンバーとリーンボックスから輝龍・飛龍の二人が外史世界のゲームギョウ界に行くと言乗りを上げたのだ。

「それじゃあ!!行ってくるね!!みんな無茶しないでよ!!」

「龍姫ちゃん達も無茶しないでよ!!」

こうして龍姫達は教会の次元転送装置で外史世界のゲームギョウ界に旅立ったのだ。

分史世界のゲームギョウ界

龍姫達はツクヨミとネプギアが共同開発した次元転送装置で分史世界のゲームギョウ界に向かつてるのである。

もちろんお約束の、

「ドス!!」

「ドサ!!」

「ゴン!!」

「ドン!!」

「痛ッ!! なんてこうなるの!!」

「みんなく骨折してないよね?」

「大丈夫だよ!! プル姉」

高所から落ちるのであった。

「此処はいつも特訓してる場所だよ!!」

「そう見たい、そうだ!! ネプテューヌとネプギアは偽名考えたの?」

ネプギアが周りを見渡したら、いつも特訓しているバーチャルフォレストにある切り拓けた場所だったのである。

ふと龍姫はネプテューヌとネプギアに仮の名を考えたのかを聞いたのだ。

「そうだった!! こっちにもわたし達がいるんだったの忘れてた!! (。D。)」

「どうしよう!! そこまで頭が回ってなかったね☒」

「そんなことだろうと思ったよ!!」

「お姉ちゃん!! まさか考えてくれたの!!」

「もちろん!! ネプテューヌは「真龍姫^{マリア}」でネプギアが「美龍飛^{ミルヒ}」でどう?」

「ありがとうお姉ちゃん!! 此処の次元にいる時は鳴流神真龍姫って答えればいいだよね!!」

「わたしは鳴流神美龍飛って名乗ればいいんだよね!!」

どうやら二人とも考えていなかったようで、龍姫はネプテューヌに「真龍姫」・ネプギアに「美龍飛」と言う名を名乗るように言った。

二人とも承諾した。

「ここにもても埒が開かねえな!!」

「そうだね!! 取り敢えず、歩いてこっちのプラネテューヌ教会に行こう!!」

「どうして女神化して飛んでつたらダメなの」

「何言ってるの!! さっき偽名着けた意味がないでしょ!! しばらくは女神であることは伏せない」と

「そっかくこっちでは女神様を信仰してる人が少ないんだつたね」

「そうだよ!! ツクヨミ様がこっちのゲームギョウ界がある犯罪組織に存続の危機に陥ってるって言ってたらね!!」

取り敢えず、龍姫達は分史世界のゲームギョウ界のプラネテューヌ教会に向かうのであった。

その道中でプルルートは龍姫に女神化して教会に行かない理由を聞いたのだ。

龍姫はツクヨミからこっちの次元のゲームギョウ界では女神を信仰している人が犯罪組織によつてあまりいないことを此処に来る途中でデバイスに情報が入ってきたことをプルルートに教えた。

プルルートは納得した。

しばらく真っ直ぐに歩いていたら、

「あそこ見て!!」

「あれってネプギアだよ!! 覚醒してないけど」

「おまけにアイさんにコンパさんもいるそれにあいつは」

「インカローズ（下っ端）!!」

偶然にも分史世界のゲームギョウ界のネプギア達を発見してしまったのである。

おまけに下っ端もといインカローズこと構成員リンダもその場いたのであった。

遭遇!! ゲームキャラ

分史世界のゲームギョウ界に降り立った龍姫達はこっちの次元のゲームギョウ界のネプギア達を偶然、発見してしまったのだ。

「取り敢えず、近づかないと」

「何か遭ったら助太刀出来ないもんね!!」

「全員で近づくのはまずいんじゃないかね」

「その事だったら、ボクに任せて!!」

「わかった!! わたし達はバーチャルフォレストの出口で待ってるから!!」

「無茶しないでよ!! 龍姫お姉ちゃん!!」

龍姫はほかのメンバーに先にバーチャルフォレストの出入口で待ってるようにリンダに聞こえないようにデバイスを通して念話で指示を出し、龍姫は一人、こっちの次元のゲームギョウ界の下っ端もとい龍姫が転生する前にやっていたシリーズのゲームに出てくる敵キャラインカローズの声がにているリンダと戦闘中のネプギア達にいつでも助太刀が出来る位置で粒子化していた愛刀「天羽々斬」と「三池典太」と二刀の無銘の小太刀を刀ホルダーごと実体化し、帯刀して、ことの成り行きを近くの大木に隠れて窺うことにした。

「観念してください!!」

「観念して・・・やるかよ!!」

「しまった!! 「ゲームキャラ」が」

「やらせない!! 魔神剣!!」

しばらく様子を見ていたら下っ端もといインカローズことリンダは降参する振りをして、ネプギア達がゲームキャラと言ったものに鉄パイプで壊そうと大上段に構え振り下ろそうとした瞬間、龍姫が抜刀して斬撃を放つ特技「魔神剣」をリンダの背後から放ったのだ。

もちろん、

「いだ〜!!」

見事に命中し、リンダの破壊行動を阻止したのであった。

「お姉ちゃん・・・じゃない一体誰ですか?」

「おまえ!!誰だよ!!このリンダ様に楯突こうてか!!上等だ!!」

そのまま龍姫は歩いて行き、戦闘中のネプギア達の前に姿を見せたのだ。

リンダは龍姫に不意打ちを食らったのが悔しかったようで、ゲームキャラから龍姫に攻撃目標を変更して襲い掛かってきたのだ。

「遅い!! 牙狼撃!!」

「うぐ!!こいつ・・・強すぎる!!」

リンダが龍姫の相手になる訳がなく、その上遅いので龍姫は無殺傷モードになっている刀で突いて、刀を持っていない左でボディーブローを叩き込む龍姫が転生する前にやっていたゲームの主人公「黒衣の断罪者」の特技「牙狼撃」をリンダにお見舞いた。

もろに牙狼撃を受けたリンダは悶絶した後、その場で気絶した。

「はい!!これが必要だったんでしょ!!それじゃあボクはこれで!!」

「ありがとうございます!!わたしはプラネテューヌの女神候補生のネプギアって言います!!あのよろしければお名前を教えてくださいもいいですか?」

「何言ってるのよ!!アンタ!!こいつ敵かも知れないよ!!」

「アイちゃん!!だったらそのままゲームキャラさんを壊すと思いますけど」

「それもそうね!!アタシはプラネテューヌ諜報部のアイエフよ!!疑つてごめんなさい!!」

「別に気にしてないから、ボクの名前は鳴流神龍姫!!それじゃあ!!行くね!!」

「あ!!待ってください!!」

「行っちゃったですう」

「コンパ!!近いうちにまた会えるわよ!!それにプラネテューヌの「ゲームキャラ」も無事だったんだし!!」

「そうですね!!それじゃあゲームキャラに力になってもらいますね!!(鳴流神龍姫さんか、かつこよかったなくそういや、なんでお姉ちゃんとは色以外の服着てたんだろう?)」

龍姫はCDディスクのようなものをネプギア達に渡したのだが、

こっちの次元のゲームギョウ界のアイエフが敵意を剥き出しにして龍姫にカタールを向けてきたのだ。

コンパが説得してくれて何とか事なきを得たので龍姫は名前を名乗り、バーチャルフォレストの出入口で待っているネプテューヌこと真龍姫達の下に行くのであった。

「ふう〜（ネプギア!!頑張ってね!!）」

「お〜い!!お姉ちゃん!!」

「今、そっち行くから!!」

「お姉ちゃん大丈夫だったのか?」

「大丈夫だったよ!!ボクたちは教会に向かわないとね!!」

「そうだね!!」

バーチャルフォレストの出入口に着いた龍姫は振り向き、心の中でネプギア達に声援を送りついていたのだが、龍音が大声で呼んでいたの
で龍姫は急いで出口に向かい合流し、

プラネテューヌ教会に向かうのであった。

異変の真実

龍姫達は分史世界のゲームギョウ界のプラネテューヌ教会に向っている最中であつた。

「見えてきたよ!!」

「俺達が住んでるプラネテューヌと変わらねえな」

「うずめつてば分史世界パラレルワールドのゲームギョウ界に来てるんだよ」

「あ、そっか」

「けど、なんか、町の様子が変だよ!!」

「言われてみれば、人が少ない気がする、この時間帯ならボクたちの次元のゲームギョウ界は街の人たちでごった返してるからね」

分史世界のゲームギョウ界のプラネテューヌに到着した龍姫達は町の異変に気付いたのだ。それもそのはず町の外を歩いている人が少ないのだ。

その事を気にしながら街を歩いて教会に向かうのであつた。

「教会に着いたよ!!」

「此処もあまり変わらなね〜」

「取り敢えず、教会で、こっちの次元のゲームギョウ界で起こっていること聞かないとね!!」

「それじゃあ!!失礼します〜(いつもは、ただいま!!だけどね)」

外史世界のゲームギョウ界のプラネテューヌ教会の前に行ってきた龍姫達は教会で何が起こっているか聞くため中に入って行つた。

「すいません〜誰かいませんか?」

「ようこそ、此処、プラネテューヌ教会に!!あのどう言つたご用件でしようか?あ、申し遅れました、わたしは此処プラネテューヌ教会の教祖のイストワールと言います」

「ボクは鳴流神龍姫って言います!!あの単刀直入に聞いていいですか?」

「はい、なんででしょう?」

「此処の女神様に会わせてください!!」

教会の中に入った龍姫達はイストワールに出迎えられたのである。もちろん名前が一緒に姿形が一緒だけで龍姫達が住んでる次元のゲームギョウ界のイストワールとは別人である。

閑話休題

龍姫はこっちの次元のゲームギョウ界で起きてる異変のこと知るため、イストワールに女神に会わせてほしいと言った。

「申し訳ありません!!それは出来ないんです!!」

「どうして?」

「実は三年前にギョウカイ墓場に犯罪組織マジエコンヌの戦いの戦場に向かわれたのですが、しかしマジエコンヌ四天王の一人に手も足も出なく、そのまま完膚無きままそのままギョウカイ墓場に幽閉されてしまい、何とかネプギアさんは救出できたのですが、このままだとマジエコンヌにゲームギョウ界が壊されてしまうのです」

「それで町に人が少なかったんだ!! (ボクが以前見た夢は正夢だったんだ!!)」

「はい、それと「マジコン」はご存知でしょうか?」

なんと龍姫が以前、昼寝をしている時に見た夢の通り、四ヶ国の女神達がたった一人に完膚なきまでに叩きのめされ、その上全員がギョウカイ墓場に幽閉され、何とかネプギアは救出できたと龍姫達はイストワールから聞かされたのである。

イストワールは龍姫達に「マジコン」と呼ばれるものを知ってるか聞いて来たのだ。

「確か、ゲーム会社のハードのソフトを無許可でコピーして遊ぶSDカードみたいなものだったけ」

「はい、龍姫さんが申しあげられた通りです!!これを犯罪組織マジエコンヌは四ヶ国に無料ばらまいているんです」

「なるほどな!!そのマジコンを四ヶ国にばら撒いて各国のシェアを空っぽにさせて女神達を弱体化させたんだな」

「なんで、ギョウカイ墓場にそんな状態で女神様達を向かわせたんですか?」

「普通は迎撃するのがセオリーだよな?」

「これはわたしの責任です!!女神様と候補生一人をシエアエナジーが枯渇しているのにギョウカイ墓場に行かせてしまったのですから」

「まあ〜済んだことをとやかに言うのは〜置いといて〜」

「そうだね!!イストワール様ありがとうございます」

「そうだ!!何かあったらいけないからこれお渡しします」

「ありがとうございます!!」

マジコンの事を聞かされた龍姫達はマジコンに知っていることを簡単に述べ、イストワールにシエアが枯渇しているのにギョウカイ墓場に行かせたことを龍姫達は叱咤したのだが、プルルートが済んだことをとやかに言うのをやめさせ、龍姫達はイストワールに自分の電話番号を書いたメモを渡し、教会を後にしたのであった。

黒の・・・

教会でネプギア以外の女神達がギョウカイ墓場に捕らえられていると聞かされた龍姫達はプラネテューヌで泊まることにして、ホテルで部屋を取り、今部屋で集まっていた。

「うん、さつきツクヨミ様に連絡したら、マジエコンヌ四天王のバックに権力者が大勢いるって、そのせいで天界の上層部でも何も出来ないって!!」

「それじゃ、天照大御神様も手がだせねえわけだな」

龍姫達はホテルの部屋に入るなり天界百貨店に行ったついでに買った、四次元ポーチをテーブルの上に置き、デバイスで天界にいるツクヨミに天界上層部でなんとかできないか聞いたら、マジコン促進団体にゲームギョウ界の権力者が多数マジエコンヌ四天王のバックにいる所為である天照大御神様ですら手が出せない状況であった。

「取り敢えず、お姉ちゃん!!ほかのみんなに連絡してみたら?」

「そうだね!!もうこっちに来てもいい頃だね!!」

「わたしもユニちゃんに連絡しなきゃ!!」

「ボクも天龍に連絡しよう!!」

取り敢えず、龍姫達はこっちの次元のゲームギョウ界で合流する手筈だったほかのメンバーに連絡したのである。

一方その頃

「取り敢えず、ホテルで部屋を取ったのはいいけど」

「うん、流石にノワールとユニは本名を名乗るのはまずいよね」

「そうね!!どうしようかしら」

星龍達は星龍がホテルのフロントで受付して、四人部屋を取って、ノワールとユニが本名を名乗るはまずいと感じていた。

「それならノワールが「勇龍^{ユウリウ}」でユニが「龍華^{リウカ}」でどう?」

「お姉ちゃん!!その名前ってゲーム主人公の名前よ!!」

「別にいいじゃないお姉ちゃん!!こっちにもアタシ達がいるんだから」

「そうね、その主人公じゃないけど、選ぶんじゃない!!選んだんだし

!!

「そうだね!! そうだ!! 勇龍姉と龍華姉ツクヨミ様からもらったあの服
着て変装したら」

「それもそうね!! 確か、デバイスで着替えられたわよね!!」

星龍はノワールに勇龍、ユニに龍華と言う名のを言い渡し、二人とも承諾して、天龍は二人にツクヨミ様からもらったあの「黒衣の断罪者」と「医学者」の服にデバイスで着替えるのであった。

「これでいいかしら? お姉ちゃん!!」

「似合ってるよ!! 二人とも!!」

「勇龍姉がその服着ることになったから一時はどうしようかと思ったよ」

「わたしも最初もらった時はびっくりしたわよ!! 良かったわ、胸がうまいことこのアンダーウェアと黒のソフトブラで隠せてるわ!!」

「龍華姉はちゃんとした、いかにも医学者って感じなんだね」

「この服着てるからって、医療なんてできないんだからね!!」

二人は似合っているか星龍・天龍に聞いたら似合っていると答えてくれた。

二人ともうまいこと着痩せしているのであった。

「勇龍はそのクリアリボンを外さないかね!!」

「そうよね!!・・・これでよし!!」

「今の勇龍姉見たら本当に「黒衣の断罪者」だよ!!」

「本当ね!! こうして鏡で見るとあのゲームの主人公に見えるくるわね!! それに得物もニバンボシだし、あのキャラって確か左利きだけど、わたしは右利きだから右に武醒魔装具ホーディプラステイアが装着されてるのね!!」

星龍は龍理にクリアリボンを外すように言った。

なぜなら、こっちの次元のゲームギョウ界のノワールと身長以外がそっくりなので外したのである。

外して鏡で自分の姿を見たノワールこと勇龍はゲームの主人公の姿に見えたと言った。

灯

星龍達はホテルの部屋で休んでいたら、

「あ、龍姫ちゃんからだ!!」

「アタシはネプギアだわ!!」

「ボクは龍音だ」

「わたしはネプテューヌだわ!!」

デバイスに龍姫達から通信がきたのだ。

「星龍く!!無事に到着したんだね!!」

「龍姫ちゃんも大丈夫そうで何よりだよ!!」

「ノワール!!」

「ネプテューヌ!!声が大きいわよ!!それと今は勇龍って名乗ってるんだから!!」

「わたしも真龍姫って名乗ってるよ!!勇龍ったら変装目的とはいえ、「黒衣の断罪者」のコスプレしてるんだ!!もちろん、相棒のワンちゃんもいるの?」

「これはしようがなく変装で着てるだけで、それに相棒の犬は後々ツクヨミ様が式神として後で来てくれる予定よ!!」

「それならよかった!!こっちは大丈夫だから!!」

真龍姫はあの青い毛並みの犬はまだいないのか聞いたら、勇龍はあとで来てもらうことになると言ったのだ。真龍姫は大丈夫と言い、通信を切った。

「今日は取り敢えず、休んで、また明日、ギルドにでも行ってみましょう!!」

「そうだね!!お休み」

星龍達は今日の所は休んでまた明日にギルドに行くことにし、就寝した。

ところ変わってこっちの次元のゲームギョウ界のプラネテューヌ教会では、

「いーすんさん!!ただいま戻りました!!」

「ゲームキャラの力は借りられましたか?」

「はい!!この通り」

「良かったです!!」

「あの人は教会に来ましたか?」

龍姫の助太刀により、何とか無事にプラネテューヌのゲームキャラの力を手に入れたネプギア達は教会に戻ってきているのだが、こつちの次元のゲームギョウ界のネプギアは龍姫はもちろん、別次元の自分を知ってるはずもなく、ネプギアはイストワールにダメ元で尋ねただ。

「御名前はお聞きになりましたか?」

「はい!!確か、鳴流神龍姫って名乗ってたですう!!」

「どうやら、入れ違いになってしまっただけです」

「まさか!!此処に来てたんですか?」

「はい!!先ほどお帰りなられたんです!!」

「いーすんさん!!何か預かってないですか?」

イストワールはネプギアにその方の名前を聞いたのか尋ねるのだ。

するとネプギア達は鳴流神龍姫と名乗っていたことをイストワールに伝えたのだ。

入れ違いになってしまったことをネプギア達に伝えたのだ。

ネプギアは何か預かってないかと聞いたのだ。

「実はその方からこのメモを預かっています!!どうぞ」

「これ、電話番号です!!」

「これで龍姫ちゃんに会えるですうね!!」

「それじゃあ!!早速Nギアで掛けて見ます!!」

イストワールはネプギア達に龍姫の次元デバイスの電話番号が書かれたメモを渡した。

ネプギアはメモに書かれてる番号に掛けるのであった。

一方その頃

「?誰からだろう?」

「お姉ちゃん、誰から?」

「取り敢えず、ちよつと出るね」

「わかった!!早く帰って来てね!!」

「そんなにかからないよ」

龍姫はネプギアからデバイスに着信が着たので、一旦部屋を出るところにしたのだ。

「もしもし!!」

「もしもし!!ネプギアです!!龍姫さんですか?」

「そうだよ、鳴流神龍姫だよってスクリーンに映ってるんだけど」

「そうでした(・ω・) 実は龍姫さんに折り入ってお願いしたいことがあるんですけど?」

「協力してほしいんじゃないのかな?」

「どうして!!わかちやったんですか!!Σ(。D。)」

「今日、教会でマジエコンヌ四天王のことを教えてもらったんだよ」「そうだったんですか!!ダメですよ?」

部屋を出て、ホテルの外に出て、龍姫は電話に出ることにしたのだ。空中に大学ノートサイズのスクリーンが現れ、そこに映っていたのは、こっちの次元のゲームギョウ界のネプギアだったのだ。

ネプギアは龍姫に涙を流しながら龍姫にお願いをしたのだ。

感が鋭い龍姫は協力してほしいのか聞き返したのである。

あまりの出来事にネプギアは驚きを隠せないでいたのである。

続けてネプギアは龍姫にダメもとで協力してほしいと言ってきたのである。

「じゃあ、明日教会で待っててほしいんだ!!いいかな?その時に答えてあげる」

「わかりました!!教会に待ってますから!!」

龍姫は真龍姫達と相談するため、ネプギアに明日教会で待っていて欲しいと言い、ネプギアは承諾したのである。

]

凜々の明星

龍姫が助太刀した日の翌日、龍姫達はいつものように起床して、天界百貨店で買った某猫型ロボットの四次元ポケットならぬ四次元ポーチからジャージワンプと長ズボンを取り出し、着替えて、ホテルのレストランで朝食を取り、部屋に戻って忘れ物がないか確認をして、ホテルの受付に行きチェックアウトしたのだ。

「みんな準備できた？」

「大丈夫だよ!!」

「うん、教会に〜行こう〜」

龍姫達は約束通り教会に向かうのであった。

「着いたよ!!」

「大丈夫だよね!!わたしはネプギアじゃなく鳴流神美龍飛!!」

「大丈夫だよ!!みんな行くよ!!」

教会の前に到着した龍姫達はネプギアはこっちの次元のゲームギョウ界の自分に名前を聞かれたら、「鳴流神美龍飛」と名乗れるように自分に言い聞かせていた。

龍姫達は教会の扉明け中に入って行くのであった。

「すいません!!」

「龍姫さん!!来てくれたんですね!!」

「ネプギア、約束通り来て上げたよ!!今日はボクの妹たちも一緒だよ!!」

教会に入ってきた龍姫をこっちの次元のゲームギョウ界のネプギア達が出迎えてくれた。

龍姫はネプテューヌこと真龍姫達も一緒に来てることをネプギア達に言った。

「わたしはプラネテューヌの女神候補生のネプギアと言います!!」

「プラネテューヌ諜報部のアイエフよ」

「ナーズのコンパですう!!」

「わたし〜鳴流神龍姫の妹の鳴流神真龍姫って言うの!!」

「同じく、妹のうずめだ!!」

「アタシゝ妹のゝプルルート」

「同じく妹の龍愛翔!!」

「六女の鳴流神美龍飛です」

「七女の龍音です」

ネプギア達が自己紹介をしてきたので龍姫以外のメンバーも自己紹介をしたのである。

もちろん、

「ただ妹がいるんですか!!Σ(。∩。)」

「落ち着いて!!」

「わたし達は鳴流神家に養子に入ったんです!!」

「それとボクは真正正銘の実の妹ですから安心してください!!」

「そうだったんですか(あの二人お姉ちゃんに似てるような、それにあの子はわたしに似てる気がする)」

ネプギア達は驚きを隠せなかったのだ。龍姫達は落ち着くように言い、真龍姫達は義姉妹であることを明かして、龍音は龍姫の実妹であることを明かした。

「龍姫さん!!昨日の答えを聞かせてください!!」

ネプギアは昨日龍姫に協力してほしいという依頼の返答を求めたのだ。

「義を以って、義を成せ、不義には罰をか・・・その依頼、夜空に瞬く
ブレイブヴェスベリア
凛々の明星の名に懸けて受けてあげるよ!!」

「それって、つまり一緒にお姉ちゃん達を助け出すことに」

「手を貸してあげるよ!!」

「ありがとうございます!!」

龍姫達はゲームに出てくるギルドの掟を咄くと、ネプギア達に協力することにしたのであった。

「実はわたし達はラストイションに向かうところだったんです」

「ちやうど良かった、実はラストイションで友達と合流することになってたんだ!!」

「そうなんですか」

「うん、今、連絡するね!!」

ネプギア達はこれからラステイションにゲームキャラを探しに行くことにしていたので龍姫はラステイションで星龍達と合流することを教え、龍姫は星龍達に連絡するのであった。

一方その頃

「ワン!!」

「まさか、あのゲームの主人公の相棒と同じ青の毛の犬だよ!!」

「あ、ツクヨミ様からメールが着てる!! 何々、この子は星龍さん達の式神で、星龍さん達同様に不老長寿ですなのでこれから一緒に旅をすることになりましたのでよろしくお願いします。ツクヨミより。だつて」

星龍達もホテルをチェックアウトして待ち合わせ場所のギルドに向かおうとしたら、星龍達の前にあの「黒衣の断罪者」の相棒の犬に隻眼ではないがそれ以外はそっくりの犬が星龍達の前に座り込んだのだ。

ふと星龍はデバイスにツクヨミからメールが着ていたので読んでみたら、今日から星龍達の相棒になる式神であると書かれていた。

「そうだわ!!この子に名前を付けないと」

「ラピードでいいじゃない?」

「何、みんなもわたしと同じこと考えてたの!! まあいいわ、あなたは今日から「ラピード」よ」

「ワフ!!」

「くすぐったいわよ!!」

こうしてラピードは星龍達の相棒になったのだ。

外史世界の黒の大地

外史世界のゲームギョウ界のネプギア達の依頼を受けることにした龍姫達「凛々の明星」はラステイションにいる星龍達に連絡が出来たので、合流地点であるラステイションのギルドに向かっていたのだが、ネプギアこと美龍飛とこっちの次元のゲームギョウ界のネプギアのあの某親善大使の護衛剣士並の機械好きが黙ってる訳がなく、

美龍飛&ネプギア「機械がいっぱいだよ!! O (≡▽≡) O イエイ!!」

結局二人ともあっちの世界に行ってしまった。

「お〜い、勇龍!! 待った?」

「今、着いたところよ!!」

「ワン!!」

「この犬まさか!!」

「そうよ、今日からわたしの相棒の「ラピード」よ」

ちょうど、星龍達もギルドに到着したのであつたようで、ネプテューヌこと真龍姫はノワールこと勇龍に挨拶をしたのだ。勇龍はあの龍姫達がやっていたゲームの主人公の服を身に纏っていた。もちろん、ゲームの主人公のように胸元が開いていたのだが、流石に大きくなった胸を隠せそうになかったので、天界百貨店で買った黒のアンダーウェアと黒のソフトブラで着痩せさせていた。おまけに、あの「黒衣の断罪者」相棒の犬と同じ青の毛並みの犬が側に寄り添っていた。もちろんゲームに出てきたあの犬と同じ名前を付けたのだ。

「よろしくね!! ラピード!!」

「ワフ!!」

「よしよし!! いい子いい子!!」

「わたしネプギアって言います」

龍姫達がラピードに近づいたら、自ら歩み寄ってきたのである。

ネプギアが近寄ったら、

「ワン!!」

「なんでわたしから逃げるんですか!!」

「あなたが覚悟が決まってるからって」

「まさか、勇龍さんはラピードさんの言葉がわかるんですか」

「いや、なんとなくよ(デバイスで翻訳して念話で会話してるなんて言えないわよ)」

ラピードは距離を置いたのである。そのわけは覚悟を決めてないからと勇龍がデバイスを通して念話で翻訳してネプギアに伝えた。もちろん、デバイスを通して翻訳していることは龍姫達以外ばれてない。

「取り敢えず、ギルドに入るわよ!!」

「なんで教会に行かないですか？」

「あなたは知らないのね、此処の教会の教祖は何かとビジネスにしたがるのよ」

「なるほど、先に教会じゃなく、ギルドでクエストを受けて、情報収集するんですね」

「その通りよ、あ!!自己紹介がまだだったわね、アイエフよ」

「コンパですう」

「龍姫ちゃん達の幼馴染みの獅子神星龍だよ!!」

「さつき紹介があったけど、改めて、次女の獅子神勇龍よ」

「四女の龍華です」

「五女の天龍です」

アイエフがギルドでクエストを受けることを提案してきたのだが、ネプギアは教会に行かないのか聞いたしたら、こっちの次元のゲイムギョウ界のラステーション教会の教祖もあの神宮寺ケイである。アイエフはケイの性格上いい情報を手に入れそうにないことを教えてくれた。

アイエフは星龍達に自己紹介をして、星龍達も自己紹介をしたのだ。

「あれ?三女の人は?」

「あ、ごめんね、今、分け合って一緒に来てないんだ!!名前は龍菜って言うんだよ!!勇龍とは双子なんだよ!!」

「そうだったんですか、失礼ですけどもしかして・・・」

「察しの通り、お姉ちゃんと天龍が実の姉妹でわたしと龍菜と龍華は獅子神家に養子になってるの」

「ごめんなさい!!」

「何、誤ってるのよ!!そんなことよりクエスト受けないなさいよ!!」

ネプギアは自己紹介を聞いていたら、三女がいないことに気づいたので、星龍が事情を説明して、勇龍は獅子神家に養子であることを明かして、龍華はネプギアにギルドでクエストをもらってくるように言

い、

「うん、わかったよ、龍華ちゃん!!それじゃあ!!行ってきます!!」

ギルドに入って行った。

「すみません!!クエスト」

二人「貰いに来ました!!」

「え!!アンタもクエスト受けに来たの?(この子、アタシと同年代はいわね)」

「うん、シエアを上げようと思ってるんだ」

「なに、その優等生発言はまあいいわアンタ名前は」

「ネプギアだよ!!」

「ネプギアね、アタシはユニ!!さっきのお詫びとして報酬の半分をあげるわ!!」

「よろしくね!!ユニちゃん」

こうしてネプギアはユニとともに龍姫達の下に戻るのであった。

外史世界のクエスト

外史世界のゲームギョウ界の女神達を助けるため、龍姫達はクエストでボーンフィッシュと言う魔物を討伐のため外史世界のラストイシヨンのリビートリゾートに来ていたのである。

「確か、ボーンフィッシュを四体退治だったね!!」

「この人数で行くのは多すぎねえか」

「いいじゃない、アンタ達が見たいのよ!!」

龍姫達は依頼書の内容を確認しながら歩いているのだが、うずめがこの依頼に行くのに人数が多すぎないかと言ってたら、アイエフが全員の実力を見たいと言ってきた。

しばらく道なりに歩いて行くと、

「ワンツ!!」

「流石、ラピード!!」

「アンタ達、準備は良い?」

ラピードが討伐対象のボーンフィッシュを発見して、本来なら右側に小太刀を帯刀しているが、ゲームギョウ界ならではの粒子化していた小太刀を抜刀状態で実体化させ、そのまま口にくわえた。

それを見たアイエフは龍姫達に行けるかどうか聞いたのだが、

「蒼破刃!!」

「ワフっ!!」

龍姫達以外「勇龍(さん)!!ラピード!!なに一人と一匹で倒してるんですか(のよ)!!(。D。)ノ」

「流石は、勇龍だね(´・ω・｀)」

戦闘狂の勇龍とラピードがボーンフィッシュを四体まとめて倒してしまったのである。

ネプギア達は一人と一匹に突っ込んでいた。

「轟け!!勝利の歌!!」

「ワン!!ワン!!ウォーン!!」

「決まったわね!!」

勇龍とラピードはほかのメンバーに目もくれず愛刀「ニバンボシ」

の峰で肩を叩きながら決め台詞を言っていたのである。

この体質を知っている龍姫達は呆れて物が言えなかった。

「まあ、いいじゃないのアタシはほかのクエストに行かないと行けなかったらね」

「それじゃあ、わたし達のために時間を割いてくれたんだね!!」

「勘違いしないでよね!!このクエストも一人でやるよりほかの誰かと一緒にやって早く終わらせたかっただけよ!!」

「ユニたら、素直じゃないんだから」

ユニは思いのほか早く片付いたので、自分がほかのクエストに行かなければならないことを教えてくれたのだがこっちの次元のゲームギョウ界のユニはまだツンデレが入っていた。

ユニこと龍華は素直になつたらどうとユニに言った。龍姫達はクエスト達成報告のためギルドに向かおうと矢先、

「くそく覚えてろよあの黒髪ポニーテール暴力女侍!!・・・あれ、あの黒髪ポニーテール暴力女侍とクソガキ女神のパーティー、もうラストイションに入つてやがったか・・・しかも知らねえ紫侍四人、オレンジ髪一人、黒髪侍三人と金髪ツインテールが二人とガキが一人、青い犬ツコロが一匹も増えてんじやえかよ!!まあいいか覚悟しろよ」

インカローズもとい下っ端リンドもリビートリゾートに来ていて、龍姫に完膚なきまでボコボコにされたことを根に持っていたのだが、リンドは龍姫達のメンバーの人数を数えて、物陰に隠れて、龍姫達に不意打ちを仕掛けようとしていたが、

「ワン!!」

「何しやがる!!この犬が!!」

「ナイス!!ラピード!!」

「アイちゃん!!コンパ!!大丈夫だった?」

「ええ、ラピードが助けてくれたから大丈夫よ!!そんなことよりアンタまた悪巧みでも考えているんでしょ」

「ばれちまったらしかたねえ!!」

下っ端もといインカローズことリンドはラピードの存在を忘れていたらしく、アイエフとコンパの背後から鉄パイプを大上段に構えて

飛び出した瞬間にラピードが下っ端もといインカローズことリンダは足を払われコケていた。

ラピードに不意打ちを阻止されてしまった下っ端もといインカローズことリンダは自棄になって龍姫達に襲い掛かって来たのだが、「いい加減にしてください!!」

とこっちの次元のゲームギョウ界のネプギアが女神化してしまったのだ。

それに続いてユニも女神化してしまった。

「勇龍!! 此処は堪えてね!!」

「わかっているわよ!! 今女神化したら、本名を隠してる意味がなくなることくらいわかってるわよお姉ちゃん!!」

星龍はノワールこと勇龍にアイエフに悟られないように念話でこの場は堪えてくれと言った。もちろん勇龍は了承した。

「覚えてろよ!!」

「待ちなさい!!・・・逃げ足は速いんだから!! アンタ女神だったのね」「ごめんユニちゃん黙ってたことは謝るから」

「この場を以ってアンタはアタシの敵よ!!」

「待ってユニちゃん!!」

「何、ボケっとしてるの!! 追いかけるよ!!」

「はい!! 龍姫さん!!」

リンダが候補生とは言え女神を二人を相手に勝てるわけがなく結局、コテンパンされ、ベタな悪役の捨て台詞を言って逃げていった。

ネプギアが女神であることを知ってしまったユニは敵意を剥き出しにしてネプギアに宣戦布告を言い渡し、飛んで行ってしまったので、一行はあとを追いかけることにした。

「完全に見失ったわね!!」

「あとはラピード、頼めるかしら?」

「ワフっ!!」

ユニを追いかけていたら町まで来てしまったのだが完全に見失ってしまったので勇龍は相棒のラピードに頼んだのである。

「此処に居るのね・・・って教会じゃない!!」

「しかたねえな!! いい噂がないって評判の教祖様の顔を拝みに行く
としますか!!」

ユニの匂いをラピードに追わせていたら、教会の前まで来て、ラ
ピードは此処に居ると言わんばかりに座り込んでしまった。

仕方なく龍姫達は腹を決めてあのラスティション教会教祖神宮寺
ケイに会うことにして教会の扉を開けて中に入って行った。

「ようこそーラスティション教会へ!! 教祖の神宮寺ケイだ」

「ネプギアと言います!! あのユニちゃんに会わせてください!!」

「それは無理な相談だね!!」

「そういうと思った!! それじゃあ、ラスティションのゲームキャラの
居場所は知ってるのか?」

「タダでは教えられないな!!」

「どうせ、ギョウカイ墓場で何かあったのかを知りたいんですよ!! け
どそっちがその気なら教えるわけにはいかないよ!!」

「全部お見通しってわけか、それだったら「宝玉」と「血晶」を持って
きてくれたら情報を渡そう」

「どうやら、こっちの教祖様はビジネスがお好きみたいだな!! く、く

、く」

「うずめ!! 待ちなさい!!」

教会に入って早々、こっちの次元のゲームギョウ界のラスティショ
ンの教祖のケイが出迎えてきたのだ。ネプギアはユニに会わせて欲
しいと頼んだが、拒否されたので、ケイの態度にジト目になっていた
うずめはラスティションのゲームキャラの居場所を知ってるのか聞
いたのだが、ケイは教える気が全くなかったので、龍姫もジト目に
なってしまうた。その上ケイは「宝玉」と「血晶」を要求してきたの
だ。

とうとう、うずめが耐え切れなくなり、ケイに悪態をつき、教会を
出て行ってしまったので龍姫達は後を追うように教会を後にしたの
であった。

宝玉の有りか

外史世界のゲームギョウ界のラステイションの教祖ケイの態度に龍姫達は苛立ちを抑えながら、これからの事を話し合うため昨日星龍達が泊まったホテルではなく、違うホテルに宿泊することにした。ネプギア達とは明日合流することを約束して別れたのだ。

スキット：神宮寺ケイ

うずめ「世界があぶねえていうのにあの態度はねえじゃねの!!」

龍姫「このボクでもあの態度はないと持っているよ!!」

真龍姫「こっちの次元のゲームギョウ界のケイもビジネスのことしか考えてなかったね!!」

勇龍「別次元とはいえこのブラックハートであるわたしもケイの態度には散々注意したんだけどね」

龍華「お姉ちゃんのせいじゃないわよ!!改めてケイの態度を見ただあれじゃね」

星龍「そうだね」

「ラステイションのゲームキャラの居場所なんだけど、ここじゃないかしら?」

「こっつて「セプテントリゾート」だよ、確証はあるの?」

「その事ならさっきデバイスでラステイションの全域を表示してみたのよ、そしたらセプテントリゾートにゲームキャラの反応が出たのよ!!」

「そういや、ケイの事で頭がいっぱいでデバイスで調べられるのすっかり忘れてたよ!!」

「そんなことだろうと思ったわ!!もちろん、ルウィー・リオンボックスのゲームキャラの居場所も確認済みよ!!けど、このことはわたし達の間だけの秘密にしましょ!!」

「わかった!!」

勇龍はケイの態度の所為で頭がいっぱいになってしまった龍姫達にデバイスでゲームキャラの居場所を調べ上げていたのだ。それを聞いた龍姫達はこっちの次元のゲームギョウ界のネプギア達には内

緒にすることにしたのだ。

「取り敢えず、明日は二手に分かれましょ」

「そうだね!!お休み!!」

「寝坊したらただじゃ措かないからね!!それじゃあ!!お休みください!!」

龍姫達は明日は二手に分かれることにして、就寝するのであった。

そして翌日

「それじゃあ!!わたし達はセプトリゾートの付近で待ってるから」

「うん、ボクたちはネプギア達と合流地点に行くね!!」

龍姫達は予定通り二手に分かれて行動することにした。

「龍姫さん!!お待たせしました!!今日は星龍さん達とは一緒じゃないんですか?」

「今日は別件の用事が出来たらしくて、今日はボクたちだけなんだよ!!ごめんね!!」

「いいんです!!龍姫さん達が一緒に来てくれるだけでも十分なんですから!!」

「それと、昨日は悪かったな!!」

「何言ってるのよ!!うずめ!!アンタがあの時、皮肉ってくれてなかったらアタシがキレてたわよ!!」

「そんなことより「宝玉」と「血晶」を探しに行くですう!!」
「そうですね!!」

ネプギア達と合流した龍姫達は星龍達がセプトリゾートのゲイムキャラの居場所に向かったことを伏せて、うずめは昨日の謝罪をしたら、逆にアイエフにお礼を言われて、一行は「宝玉」と「血晶」を探しに行くことにした。

「とは言ったものの、手掛かりがないんじゃないかね」

早速、アイエフが弱音を吐いていたのである。

「どうやら、お困りの様だね!!わたしはファルコム!!「血晶」の有りかはわからないけど、「宝玉」はプラネテューヌの魔物が落とすよ!!一緒に行ってあげたいのは山々なんだけど目的地が逆方向なんだ!!」

「ありがとうございます!!ファルコムさん」

偶然ラスティシヨンの町に来ていた冒険家のファルコムが宝玉はプラネテューヌの魔物が落とすと教えてくれたので、一行はプラネテューヌにとんぼ返りするのであった。

第五回 エンシエントドラゴンの段

ファルコムから宝玉を落とす魔物の居場所を聞いた龍姫達はプラネテューヌのバーチャルフォレストの龍姫とこっちの次元のゲームギョウ界のネプギア達と初めて会った場所に来ていたのである。

「あのドラゴンさんじゃないですか?」

「コンパ!!でかした!!」

「龍姫さん達は準備は良いですか?」

「いつでも行ける!! (なんでボクたちはエンシエントドラゴンと縁があるんだらう?)」

コンパが明らかバーチャルフォレストに生息していないエンシエントドラゴンを発見したのだ。

龍姫達はそれぞれ得物を構えた。

「グオ〜!!」

「こつちだよ!! 幻狼斬!!」

「すごい!! 龍姫さん!! もしかしたらお姉ちゃんより強いんじゃないか!!」

「ネプギア!!よそ見してる場合じゃねえ!! 魔神剣!!」

「グオオオオ〜!!」

「すいません!! うずめさん!!」

龍姫はいつもの通りにエンシエントドラゴンの攻撃を捌きながら攻撃していた。それに見とれていたネプギアはエンシエントドラゴンの攻撃に気づいてなかったのだが、うずめが当たる寸前に斬撃を放つ特技「魔神剣」で攻撃を中断させた。

「グオ〜☒」

何とかエンシエントドラゴンを倒して宝玉を手に入れたのであった。

「これが宝玉なんだね!!」

「宝玉が手に入ったんだ一旦町に帰ろうぜ!!話はそこですればいい」

「はい!!」

宝玉を手に入れた龍姫達は一旦町に帰ることにしたのだが、

「そいつは無理だぜ!! 黒髪ポニーテール侍とクソガキ女神!!」

「また現れたよあのアナゴ族☒(・ω・)」

「このまま行ったら、TOVのザギを超えるんじゃない」

「アタイはアナゴ族でもそのザギってやつでもねえ!!」

あのアナゴ族の仲間入りが出来そうならに龍姫達に散々痛めつけられてるのに懲りない下つ端もといインカローズことリンダが龍姫達の前に姿を現したのだ。

「これでお終いだぜ!! やっちまいな!!」

アナゴ族もとい下つ端もといインカローズことリンダは丸い球体のマシンに号令を出し龍姫達に睨けたのだ。

「ネプギア!! 変身よ!!」

「わかりました!! アイエフさん!! …あれ女神化出来ない!!」

「そんなことは対策済みなんだよ!!」

アイエフはネプギアに女神化するように指示を出したのだが、どうやらあの球体型のマシンが女神をできなくしていたのである。

そんな時だった

「ちよつと待ったー!! REDちゃん!! 参上!!」

「誰ですか!! Σ(。D。)」

鮮血の名を持つ剣士のような赤い髪に、金色の龍を纏い、紅い服を身に纏った女の子が乱入してきたのだ。

「将来の嫁を助けに来るのは当たり前だよ!!」

「将来の嫁?」

「考えるのは時間の無駄!!」

乱入してきた女の子はネプギアに向かって将来の嫁と言いだしたのだが、うずめが考えるのは後にしろと言った。

「しようがない、ネプギアちゃん!! 共鳴行くよ!!」

「何!! この青い線は!! Σ(。D。)」

「話は後だよ!!」

もう一人のネプギアこと美龍飛は女神化が封じられてるこっちの次元のゲームギョウ界のネプギアと自分のデバイスから青い糸のような物を出して共鳴したのである。

「なんだか知らねえが!! やっちまえ!!」

下つ端もといインカローズことリンダは球体型のマシンに号令を掛けたのだ。

「この技出来るのかな?」

ネプギアは美龍飛と共鳴したことにより龍姫達が修得している術技のビジョンが頭に入ってきたのだ。

そして何の躊躇もなくあのゲームの大体の剣士なら修得しているあの剣技を、

「魔神剣!!」

「チュドーン!!」

「まさか!! 暴力黒髪ポニーテール侍の技じゃねえかよ!!」

「すごいわ!! ネプギア!!」

そうネプギアは斬撃を放つ特技「魔神剣」を修得してやってのけたのだ。ビームソードから放たれた斬撃はあのマシンに命中して木端微塵に碎け散ったのだ。

「さてと!! アイエフ!! コンパ!! 休んでていいよ!! 雷神剣!!」

「あとはボクたちが片付けておきますから!! 月閃光!!」

「あとは任せたわよ☒」

龍姫達は残りのマシンを片付けたのであった。

「あれ? アナゴ族は?」

「どうやら、わたし達が戦ってる間に逃げたみたいね!!」

「取り敢えず、積もる話は街に帰ってからするよ!!」

「そうですね、流石におなかが空きました(´・ω・｀)ハラヘッター」

マシンを鉄屑にしている間に下つ端もといインカローズことリンダは尻尾を巻いて逃げていた。

龍姫達は腹が減ったので一旦町に帰るのであった。

血晶を求めて

アナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダの襲撃を躲した龍姫達は食事を食事をするためプラネテューヌに戻ってきているのである。

「わたしはREDちゃんっていうの!!」

「わたしはネプギア!!」

「そうだよね!!将来、嫁にするんだもん、名前を言わないとね!!」

食事をしながら真紅の衣を身に纏った女の子ことREDはネプギア達に自己紹介をしていた。

「そういえば、嫁を探して旅をしてる女の子がいるって」

「その女の子こそREDちゃんだよ!!」

「そうなんだ!!ちよつと美龍飛ちゃん聞いていいかな?」

「共鳴システムの事かな」

「流石は凛々の明星が一派の鳴流神家ね!!」

アイエフはREDの噂があつたことをネプギアに教え、ネプギアは美龍飛に先ほどの戦闘で美龍飛が行った戦闘術について聞いたのだ。

「アタシも気になってたわ!!それにいきなりネプギアがアンタ達と同じ技を使いだしたからびっくりしたわよ!!」

「ごめん!!あれはこの「リアルオーブ」でネプギアちゃんにダメもとで共鳴してみたら」

「偶然にも共鳴出来ちゃったんですか!!」

「そういうこと、この「リアルオーブ」は適正が無かったら使えないんだよ!!」

「なるほどね、ネプギアに「リアルオーブ」の適正があつたってことね!!」

「わたしとアイちゃんは適正者じゃなかったんですう?」

「さっきの戦闘で試みたんですけどお二人に適正がなかったみたいですよ」

「そんなくわたしも龍姫ちゃん達みたいに戦いたいですう!!」

「コンパ!!ダダ捏ねないの!!この話は終わりにして、血晶を探しに行

きましよう!!」

「そうですね!! プラネテューヌにないとなればラステイションですうね!!」

美龍飛はアサルトオーブのことを簡単に説明して、アイエフが話を切上げて、血晶を求めラステイションにお代を払って向かうのであった。

「キミがネプギアだね? 自分は防衛隊に所属してる者なんだが」

「はい、そうですね!!」

「実は君みたいな女の子を見かけたら声を掛けてある仕事をお願いしてほしいと頼まれてね、今、ブラックハートがご不在で防衛隊が手が回らない状況になってるから」

「ちよつと聞いていいか? アンタにその頼み事してきた野郎は銀髪の短い髪に黒い燕尾服来て、短パンに碧眼の姉ちゃんか?」

「その通りだ!!」

「いい加減出てきたらどうだ、ラステイションの教祖様よ!!」

「これでも、うまく隠れていたつもりなだけだね」

「俺達に防衛隊員を喚びてくる野郎なんて俺の知ってる中でアンタしかいねえからな、さつき出てきた所からアンタの胡散臭い匂いが漂ってきたんでな」

ラステイションに到着した龍姫達に防衛隊員の一人がネプギアを見るなり声を掛けてたのだ。

「どうやら龍姫達にある人に頼まれて仕事の話を持ち掛けてきたので、うずめは話しかけてきた防衛隊員に仕事を依頼してきた人物の特徴を述べて尋ねたら防衛隊員はその人物から頼まれたと答えた。」

それを聞いたうずめは路地裏に隠れてるケイに態と聞こえるように防衛隊員の方を見きながら出てくるように言った。

「流石は、凜々の明星の天王星のうずめだね!! まあいい、君たちに折り入って頼みたいことが・・・」

「どうせ、巨大魔物を討伐して来いって言うんだろ!! いいぜ、その依頼、夜空に瞬く凜々の明星の名に懸けて受けてやるぜ!!」

「リビートリゾートのシーハンターを討伐してほしいんだよ!! 報酬は

出すよ」

「そうと決まれば!!リビートリゾートに行こう!!」

全員「応!!」

一行はリビートリゾートにシーハンターを討伐しに行くのであった。

ネコントキヤツト

ラストイションの教祖ケイからシーハンターを討伐してくれと依頼された龍姫達はリビートリゾートに来ているのであった。

「うずめ!!よくわかったわね!!教祖様が防衛隊員に指示をしていたこと」

「実はラストイションの街に到着した時からあいつの胡散臭い匂いがしたもんでな、態と気づいてない振りしてたら、案の定、路地に隠れて俺らを監視してたからな」

「そうだったのね!!プラネテューヌ諜報部の面子がないわね」

「しつかりするですよ!!アイちゃん!!」

アイエフはうずめにケイが防衛隊員に隠れて指示を出していたことに気づいていたことを聞いたら、ラストイションの町に着いてから気づいていたと答えた。アイエフは龍姫達に格の違いを思い知らされて落ち込んでしまった。

「シーハンター見つけたよ!!REDちゃんえらい!!」

「確かに翼をもったイルカだね!!」

「早いこと終わらせてあのいけ好かない教祖様の顔を拝みに行こうぜ!!」

「そうだね!!」

REDがシーハンターを見つけたので、全員一斉にそれぞれ得物を構えた。

「見た感じ、水属性の技っぽいけど」

「氷ってことは水と風の混合属性だね!!」

「それならこの技はどう? 襲爪雷斬!!」

討伐対象のシーハンターは氷で攻撃してきたので龍姫達は分析した後、真龍姫が斬り上げて雷を落とす斬り下ろしながら雷を落とす秘技「襲爪雷斬」は叩き込んだ。

「ネプギアちゃん!!決めるよ!!見切った!!」

「わかったよ!!美龍飛ちゃん!!必殺!!」

美龍飛&ネプギア「龍虎!!滅牙斬!!」

美龍飛とネプギアはシーハンターに止めを刺すため、敵を挟み込み飛び上ってそのまま剣を叩き付ける共鳴技「龍虎滅牙斬」を叩き込んだ。これを受けたシーハンターは光の粒子になって消えていた。

「これで依頼は完了だね」

「すごいわ!!ネプギア!!もうそんな技出来るようになったのね!!」

「美龍飛ちゃんと共鳴してやっとなんでいくのがやっとなんですから」

「そこまでわたしに合わせられるならもう一人でわたし達の術技が修得できるんじゃないかな」

「まだ無理だよ!!」

「町に戻ろうよ」

討伐対象のシーハンターを討伐したので、龍姫達はラスティシヨンの町に戻ることにしたのだが、

「ちよつと待つてください!! あそこに誰か倒れてるですよ!!」

「チュウ!! もう動けないでチュウ」

鳴流神家一同「ワレチューだよ☒(; _ _) どうしてこう縁があるんだろう?」

「そんなデカイ鼠ほつたらかして行くわよ!!」

「そんなことできません!! 今助けるですよ!!」

その帰り道に龍姫達の次元のゲームギョウ界のワレチューと瓜二つのワレチューが行き倒れていたのだがアイエフがほつたらかして行こうとしたらコンパがワレチューの傷の手当てをし始めたので、それを見ていたプルルートは、

「早く帰りたいから 快方の光よ宿れ!! ファーストエイド」

早く帰りたいかららしく、ワレチューに龍姫が使う詠唱が違う治療術「ファーストエイド」をワレチューに掛けて傷を癒したのである。「チュウ ここはどこでチュウ…あ、あのお名前はなんというでちゅか?」

「わたしはコンパですよ」

「あたしはプルルート」

「コンパちゃん!! プルルートちゃん」

「おい! ぷるるん!! コンパく置いてくよ!!」

「今く行く」

ワレチューが名前を尋ねてきたのでコンパとプルルートは名前を名乗り、町に戻るのであった。

「可愛い!! 天使っチュ!! コンパちゃんとプルルートちゃんマジ天使」

龍姫達が去った後大空に向かって叫ぶワレチューであった。

ところ変わってラストেশヨンの町に戻ってきた龍姫達は

「シーハンターを討伐して来ました!!」

「早かったね!! それじゃあ約束通り報酬の「血晶」の有かを教えてあげるよ!!」

「ちゃんとした情報なんだろうね」

「どうやらボクは信用がないみたいだね!! ちゃんとした情報だ!!」

セプテントリゾートに生息してる「ネコントキャット」と言う魔物だ!!」

「セプテントリゾートだね、みんな行くよ!!」

シーハンターを討伐したので依頼主のケイに達成報告をして血晶がセプテントリゾートに生息しているネコントキャットと言う魔物が落とすと言う情報を手に入れた龍姫達は早速セプテントリゾートに向かったのである。

「見つけた!! ネコントキャット!!」

「さてと、さつさと片付けてゲームキャラの居場所を吐かせようぜ!!」

「その意見にはボクも同感だよ!! うず姉!!」

セプテントリゾートに到着した龍姫達は道中の魔物を倒しながら進んで行き、ネコントキャットを発見したのだが、

「ユニちゃん? どうして此処に居るの?」

「ネプギアに龍姫さん達も来てたのね・・・」

「ユニちゃんも血晶を探しにきたの?」

「どうやら、あのラストেশヨンの教祖様に嵌められたみたいだね!!」
龍姫達がきた道の反対側からユニが歩いてきたのである。龍姫達

はケイに嵌められたのだ。

「ユニちゃん!!」

「アンタにアタシと話すことなんてない!!」

「なんでわたしを拒絶するの!?!」

「泣いても無駄よ!!」

「どうする、お姉ちゃん?」

「こうなったら、止めるのは逆効果になるから見守るしかない」

ネプギアとユニが言い合いを始めてしまったのだ。

龍音が龍姫にどうするか聞いたから見守るしかないと答えた。

「おい、いい歳こいてかくれんぼか?」

「なんで!!アタイが隠れてるのがわかったんだよ!!」

「なんでってか、あんなところにぶら下がってるのがこっちから丸見えなんだよ!!」

「チクショー!!こうしてやる!!」

「ニャー!!」

「しまった!!」

二人が言い争ってるのを道のガードレールにぶら下がっているアナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダを見つけたうずめは声を掛けてたのだが、リンダはまたもや自棄になり、ネコントキヤットに攻撃して絶賛対立中の二人を襲わせその隙に逃げって行った。

「危ない!!ネプギアちゃん!!ユニちゃん!!」

「ニャー!!」

「美龍飛ちゃん!!」

「怪我が無くて良かった!!」

「二人とも!!喧嘩してる場合!!」

「此処は暴走したネコントキヤットを片付けるのが先だよ!! 守護方陣!!」

「わかりました!!」

対立中の二人の背後から暴走したネコントキヤットが襲い掛かったのである。

ネプギアに共鳴していた美龍飛が二人を得物である妖刀「数珠丸恒次」で防御して庇った。

アイエフが二人に喝を入れて、龍姫が刀を地面に突き刺し魔方陣を展開させ傷を癒しながら敵を攻撃する奥義「守護方陣」で二人を守った。

そして龍姫達はネコントキャットを葬ったのである。

「これが血晶だね!!」

こうして龍姫達は血晶を手に入れたのであった。

光翔戦滅陣!!

ネコントキヤットを倒して血晶を手に入れた龍姫達は町に戻ろうとした矢先、

「ネプギア、アンタ、アタシとタイマンで勝負しなさい!!」

「なに言ってるですう!! ユニちゃん!!」

「いいよ、ユニちゃん・・・」

「ネプギアちゃんまで!! 龍姫ちゃん達も止めてくださいですう!!」

「コンパ、此処で止めたら二人の溝がより深くなるんだよ!!」

「そうよ!! コンパ、龍愛翔の言う通りよ!!」

「わかったですう!!」

ユニはネプギアとタイマンを申し込んできたのだ。コンパは龍姫達に止めてくれと言ったが、龍愛翔は二人が気の済むまでやらせてやれと言い、アイエフは龍愛翔の意見に賛成し、コンパは二人のタイマンを見守ることにした。そして二人は女神化した。

「喰らいなさい!! ヴオルケーノバレット!!」

先に動いたのはユニだった。ネプギア目掛けて炎の銃弾を発射したが、ネプギアはその場を動かさず美龍飛との共鳴を切る前に修得したあの、

「魔神剣!!」

「まさか!! 斬撃で相殺しつたの!!」

「こっちも行くよ!! ユニちゃん!! 虎牙破斬!!」

「くっ!! この剣技!! お姉ちゃんも知らない剣技じゃない!! けど、タダで負けてあげるほど優しくないわよ!! アイシクルバレット!!」

「どうして!! 仲良くしたいだけなのに!! 爆炎剣!!」

斬撃を放つ特技「魔神剣」で銃弾を相殺し、続けて、斬り上げ、斬り下ろす特技「虎牙破斬」で追撃した。それに驚きを隠せないユニは続けて氷の銃弾を放ったが、ネプギアが炎をガンブレードの刀身に纏わせ振り下ろし火柱で攻撃する特技「爆炎剣」を攻撃ではなく、銃弾を相殺するために繰り出した。

「お姉ちゃんが帰ってこればよかったのに!! 帰ってきたのは女神候補生のアンタだった、この気持ち判る?」

「ごめん!! ユニちゃん!! お願い話を聞いて!!」

「アンタなんて死んじやえばよかったのよ!!」

「わかったよ、ユニちゃん、それで済むなら、わたしは死んでもいい!!」
「じゃあ!! お望み通り、死になさい!!」

ユニはネプギアに八つ当たりまがいには、姉のこっちの次元のゲームギョウ界のノワールではなく、救出されたのが目の前にいるネプギアだったことに苛立ちを隠せなくなり、ユニはネプギアに向かって死んでくれと罵倒して、ネプギアはユニがそれで済むなら死んでもいいと言ってしまったのだ。ユニは無防備のネプギアに向かって銃弾を発砲した。

その銃弾がネプギアに当たる寸前に、

「死んでもいい!! ふざけてんのか!!」

「・・・ごめんなさい!!」

「もう二度と言うなよ!!」

「誰だろう?あの黒い髪の男の人は、それに近くに人、なんとなくコンパさんに似てる、あの人は多分わたしにも言ってるんだね!!」

ネプギアの脳裏に此処とはべつの異世界で命を投げ出そうとしたコンパと同じ髪色をした少女に、勇龍と同じ黒い長い髪の青年が叱咤してる場面が脳裏をよぎったのだ。

そして、

「わたしはまだ人として生きたいんだよ!!」

「遅いだよ!! ネプギア!!」

「ギアちゃんはとうしちやっただんですか?」

「何!! あの光は!!」

「あれは、オーバリーミッツ!!」

「オーバリーミッツ?」

「簡単に言うと、時間制のパワーアップのことだよあーやって攻撃を当てたり受けたりしてたまった闘気を放出するとあんな感じに体に闘気を纏うことができるんだよ、けど、まだネプギアはLv.1が限

界だね!!」

「前言撤回ってわけね!! そのツケは高いわよ!! アイスバレット!!」

ネプギアはまだ死ねわけには行かなくなり、土壇場でオーバーリミッツを修得したのである。放出した闘気で銃弾を塵にした。

それを見たコンパは鳩が豆鉄砲を食ったように目が丸くなってしまった。

龍姫はアイエフにオーバーリミッツの説明を簡単にした。

ユニはそんなことはお構いなしに先ほどより小さい氷の銃弾を放ったが、

「止まって見えるよ!!」

今のネプギアには銃弾が止まって見えてるので、あっさりかわし、

「ユニちゃん!! 話を聞いて!! 魔神双破斬!!」

「まさか!! 技を合体させたの!!」

ユニに魔神剣と虎牙破斬の複合奥義「魔神双破斬」を繰り出したが、ユニはライフルで防いだのだが、この時ユニは失念させられることに気づいていなかったのだ。

「ユニちゃん!! 舞い降りて!! 光翔戦滅陣!!」

「キヤー!!」

ネプギアは地面から発生した光で攻撃した後、魔神剣のような斬撃を放つ「黒衣の断罪者」の幼馴染みの金髪碧眼の騎士団長のバーストアーツ「光翔戦滅陣」を叩き込んだのである。

これをライフルで防御したユニはライフルごとぶっ飛ばされ、ライフルが木端微塵に碎け散った。

「わたしの勝ちだよ!! ユニちゃん、話を聞いてくれるよね!!」

「アタシに一回勝ったくらいでいい気にならないで!!」

「待って!! ユニちゃん!!」

タイマンに勝ったネプギアはユニに近付き手を差し伸べたのだが、ユニは差の出られた手を振り払って飛んで行ってしまったのである。

「ネプギア!! 町に戻るよ!!」

「そうですね!! 血晶も手に入れましたから」

「これでラストেশションのゲームキャラの居場所がわかるね!!」

真龍姫はネプギアに声を掛けて町に戻ることを言い、龍姫達は町に戻ることになった。

「あの子ったら、世話が焼けるんだから!!」

事の成り行きを物陰に隠れて見ていた勇龍はこっちの次元のゲームギョウ界のユニに文句を言いつつ、龍姫達を追うように町に戻るのであった。

黒の銃姫

ネコントキャットを倒して血晶を手に入れた龍姫達はラステイシヨンの教会に戻ってきたのである。

「血晶を持ってきました!!」

「これでラステイシヨンのゲームキャラの居場所を教えてくださいませんか?」

「もちろん!! 教えるよ!! ゲームキャラはセプテントリゾートにいるよ!!」

「あのくユニちゃんは?」

「実は戻ってきてから部屋に引きこもったままなんだ!! ごめん」

「ユニに会うのは日を改めたらいいよ」

「そうですね!! 焦ってもしょうがないですね!! 早速、セプテントリゾートに向かいましょう」

ネプギアはケイに手に入れた血晶を渡してラステイシヨンのゲームキャラの居場所を聞いたので、ネプギアはユニのことを聞いたら、余程、ネプギアにバーストアーツを叩き込まれた挙句、愛用のライフルまで破壊されたのがショックだったようで、部屋に入ったまま引きこもってしまったとケイに言われて、龍姫達は教会を後にした。

「今日はホテルに泊まりしよ」

「どうしてですか!! アイエフさん!!」

「ネプギア!! アイの言う通りだよ!!」

「そうだな、今日はいろいろ合って疲れたしな」

「それに、ネプギア、得物を見せて」

「はい、わかりました!! 龍姫さん!!」

教会を出た龍姫達はアイエフの提案で今日はホテルに泊まって明日にセプテントリゾートに向かうことにした。

龍姫はネプギアに得物であるビームソードを見せて欲しいと言い、ネプギアは粒子化していた得物であるビームソードを実体化させたのだが、

「あ、わたしのビームソードが」

「粉々になちやつてるですう!!」

「どうやら、バーストアーツに耐えられなかったんだね!!」

「どうしよう!! これじゃ戦えないよ!!」

「どうするの!! 今、マジエコンヌ四天王の所為で武器屋が乗っ取られてるのよ!!」

「ネプギアは剣術と格闘が出来るんだよね!!」

「はい、一応、お姉ちゃんの刀で特訓しました!!」

「この刀、使って!!」

「いいんですか!! 龍姫さんの愛刀じゃないんですか!!」

さっきのユニとのタイマンでバーストアーツにビームソードが耐え切れなく、刀身を出現させる柄が砕け散ったのだ。

おまけにマジエコンヌ四天王の所為で一般的に武器が出回っていないのでネプギアは途方に暮れていたのだ。

龍姫は愛刀でもある名刀「三池典太」をネプギアにあげたのである。

「いいの!! ボクには天羽々斬と小太刀が二振りあるから」

「そういえば、龍姫は四本も刀を帯刀してたわね!!」

「そうだよ!! 一度に使うのは二刀だけなんだけど」

「ありがとうございます!! 龍姫さん」

「それじゃあ!! ホテルに行きますか!!」

ネプギアは龍姫にお礼を言い、ホテルに向かうのであった。

一方その頃

「どうせ、アタシなんて!!」

ネプギアにタイマンで負けてしまったユニは部屋で泣いているのであった。

「アタシがなんだって?」

「誰?」

「こんばんは、黒のお姫様!!」

「勇龍さん!! まさか!! ベランダから入ったんですか!!」

「そうよ!! ここまで来るのに疲れちゃたけど、完全に不法侵入だけどね」

なんと勇龍がベランダからユニの部屋に入ってきたのである。勇龍は不法侵入の謝罪した。

「警備兵は呼ばないのね」

「実は勇龍さんは、なんとなく雰囲気がお姉ちゃんに似てるんです。いざつとなつたらアタシの知人と言うことにしときます」

「そう、ありがとう、それとあなたはどうして三年前、ノワールの命令を無視して一人でも助けに行かなかったのかしら？」

「それはアタシが選ばれなかったからです」

「そんな理由は聞きたくなかったわ!!」

勇龍はユニに警備兵は呼ばなくてもいいのか聞いたら、ユニは自分の知人で通しておくと言い、勇龍はユニに三年前、姉のブラックハートことノワールを命令を無視して一人でも助けに行かなかった理由を聞いたら、ユニはマジエコノ又討伐隊に候補生代表に選ばれなかったという言い訳を勇龍にしてしまい、勇龍はユニに激怒した。

「あなたが、ネプギアとタイマンしてでも守りたかった姉の存在を守りに行かないの!!」

「それは・・・ってなんで知ってるんですか!!」

「たまたま、ギルドのクエストでリビートリゾートに行ったらちょうどあなたがネプギアにコテンパンにされてるところだったのよ!!」

そんなことより、今更、姉のためとか言わせない!!」

「・・・お姉ちゃんを助けてください!! ウワアア—————。。(。、
ん。。)—————ん!!!」

「わかったわ、約束する、夜空に瞬く凛々の明星の名に懸けてあなたのお姉ちゃんを助けるのに協力してあげる」

勇龍はユニにあのゲームの主人公の「黒衣の断罪者」のようなことを言い、ユニは勇龍に姉を助けて欲しいと泣きながら頼んできたのだ。

勇龍はユニにブラックハートことノワールを助けることに協力すると言った。

「泣き止んだかしら？」

「はい、すみません、服汚しちゃって」

「別にいいのよ!! それじゃあ!! わたしはみんなの所に帰らないと」

「勇龍さん!! お願いがあるんですけど」

「何、お願いって」

「今日、此処に泊まって欲しいんです!! それと今だけ勇龍さんのこと「お姉ちゃん」って呼んでいいですか?」

「そうね!! 今からお姉ちゃん達の所に帰るのは遅いからね、いいわよ!!」

「ありがとうございます!! お姉ちゃん!!」

勇龍はユニが泣き止んだことを見届けてベランダに行こうとしたら、ユニに呼び止められてしまい、ユニは勇龍に今日は教会に泊まって行ってほしいと言い、今だけお姉ちゃんになって欲しいと言ってきたので勇龍は承諾して教会に泊まることにしたのであった。

ブラツクディスク

勇龍はユニに教会に泊まって欲しいと言われたので御好意に甘えてひと晩泊まることにしたのである。

今二人は一緒にお風呂に入っていた。

「はあくハアー（―ロー；）―ア」

「どうしたの？ ユニ？」

「だっってお姉ちゃんって着痩せするんだなて」

「ああ、胸の事気にしてたのね」

「はい、アタシ、女神化すると胸が小さくなるし!! おまけに身長まで」

「なるほどね、それは女の子にとって胸が小さくなるのは確かに悩むわね」

「どうしたら、いいのかな？」

「気にしないでいいじゃない、今は女神様を助けに行かないとね」

「そうよね!! お姉ちゃん!! 胸触らせて!!」

「別にいいけど、あまり強く触らないでよ」

「うん!! お姉ちゃんの胸、大きくて柔らかい!!」

「どうやら、ユニは勇龍の胸が大きいことに憧れを持っていたのであった。」

「今日是一緒に寝てあげるわよ」

「うん、お姉ちゃん!!」

お風呂から上がった二人は一緒の部屋でそれも一緒のベットで寝ることにしたのであった。

そして 翌日

「セプテントリゾートのゲームキャラに行こう!!」

「待ちなさい!! わたし達も行くわ!!」

「あれ？ 勇龍にユニちゃん!! どうして一緒にいるの?」

「何よ!! アタシが勇龍さんと一緒にいちゃ悪いの!!」

「ユニちゃん・・・」

「アンタ達と一緒に行ってあげるわ!!」

「ユニちゃん!! (^ O ^) /」

「勇龍、いったいどうなってるの?」

「昨日、ちよつと二人きりで話してただけよ、セプテントリゾートに行くわよ!!」

なんと勇龍がユニを連れて合流してきたのである。その上ユニは龍姫達と一緒にいて行くことにしたのであった。

そしてラストイションのゲームキャラのいるセプテントリゾートに行くのであった。

「そういえば、ユニちゃん、武器はどうするの?」

「どうするのって、アタシは同行者と言うことになってるから」

「そうだよね!! この人数なら護衛できるから」

セプテントリゾートに到着した龍姫達はユニを護衛しながら道なりを進んでいくのであった。

スキット：三池典太

ユニ「アンタ!! その刀」

ギア「この刀は龍姫さんがわたしにくれた大事な刀なんだよ!!」

ユニ「そういえば、さつきからビームソードを使ってないってことは」

ギア「うん、バーストアーツに耐え切れなかったみたいで壊れちゃった」

ユニ「そうだったのね、大事にしなさいよ」

ギア「当たり前だよ!!」

「これじゃないかな?」

「そうね、ほかには何も見当たらないし」

龍姫達はセプテントリゾートの奥に台座のような所に灰色のCDディスクをみつけたのだ。

「これは予想外の来客だな!! さらにプラネテューヌの女神候補生に加えてパープルディスク、お前まで一緒にいるとはな」

「わたしが女神達について行きたいと申したのです」

「あの、お願いがあります!! わたし達に力を貸してください!!」

台座に備えられていた灰色のディスクことブラックディスクにネ

プギアは力を貸してくれと言ったのだが、

「おまえらの望みはなんだ？」

「俺達はこいつの頼まれてギョウカイ墓場で幽閉されている女神達を助けてくれて言ってきたんでな」

「そうか、状況は理解した、おまえ達とは一緒には行けん!! これがわたしの答えだ!!」

「なるほど、つまり此処を離れたらここを守る術が無くなるからボクたちと一緒に行きたくないんだ!!」

「感が鋭い奴がいるとは、おまえが言った通りだ!!」

うずめがブラックディスクに女神様を救出したいとネプギアに協力していることを明かしたら、一緒には行けないと言ってきたので、龍姫はここを離れると守る術が無くなるのか聞いたら、ブラックディスクは龍姫の言う通りと答えた。

「どこにいるチュー・・・ついにコンパちゃんとプルルートちゃんの幻が見えてきたでチュー・・・いや違う、あれは本物でチュー!!」

「キヤー!! この間のネズミさん? 元気になって良かったですう!!」

龍姫達「このワレチューどうしようかな(；一一一)」

龍姫達がブラックディスクと会話をしていたらワレチューが乱入してきたのだ。

龍姫達は白い目でワレチューを見るのであった。

「コンパちゃんとプルルートちゃん!! 一緒にあのディスクを割るでチュー!!」

「白状してくれてくありがとうね」

「コンパとプルルートが助けたネズミがマジエコンヌだったの!! 流石のREDちゃんもびっくりだよ!!」

「コンパちゃん」

「わたしは女神様の味方ですう、だから嫌いですう!!」

「ガクン!! コンパちゃんとプルルートちゃん 覚悟するでチュー!!」

「そうわさせない!!」

ワレチューはコンパとプルルートにブラックディスクを一緒に割って欲しいと龍姫達の目で自白してしまったのがいけなかったのか、コンパとプルルートに振られて自棄を起こして、CDディスクのような物を放り投げるとそこからフィンリルが現れた。

それを見た勇龍は左手を上げて指パツチンをして合図を送ったのだ。

すると、

「ワン!!」

「なんでチュー!! この犬は〜」

「お姉ちゃん!! もう昨日どこにいたの!!」

「ごめんなさい!! ちょっとね、そんなことより、龍華、あなた銃は持ってる?」

「今、左に持ってるじゃない!!」

「その銃を貸して欲しいの」

「わかったわよ!!」

「ユニ!! 受け取って!!」

「はい!! 龍華!! これでアタシも戦える!」

「ユニ、アンタにその銃貸してあげるわ!!」

物陰に隠れていたラピードがワレチューに飛びかかり、龍華は勇龍が昨日どこにいたのか問いただしたら、勇龍は龍華に銃を貸して欲しいと言い、龍華は銃をユニに向かって投げ、ユニはその銃をキャッチした。

黒のゲームキャラの協力

龍姫達はワレチューとフェンリルを相手にしているのであった。

「チュー!!」

「魔神剣・双牙!!」

「チュー!!」

ワレチューを美龍飛とネプギアと龍華とユニが食い止めていた。

「一気に片付けるわよ!!」

「わかった!!」

「ワン!!」

「勇龍!! 無茶はしないでよ!!」

フェンリルは残りのメンバーで相手をしているのであった。

もちろん、アイエフとコンパ以外がフェンリルより実力が上なので、

「円閃牙!!」

「幻狼斬!!」

「魔王炎撃波!!」

「ワン!!」

「勇龍さん!! 刀はペンじゃないですよ!!」

「コンパ!! 突っ込むとこそこのなの!!。(。D。ノ)」

勇龍は刀で斬りつけて反動でキャッチして逆回転させるあの「黒衣の断罪者」の代名詞と言える特技「円閃牙」を繰り出し、龍姫も「黒衣の断罪者」が修得している擦れ違い様に一閃して、振り向きながら一閃する特技「幻狼斬」を、星龍は刀身に炎を纏わせて薙ぎ払う秘技「魔王炎撃波」を、ラピードは口にくわえた小太刀で斬撃を放つ特技「魔神犬」を放ち、コンパは思わず勇龍に突っ込んでしまった。

「チヨロイわ!!」

「甘いよ!!」

「チヨロ甘だな」

「ワン!!」

勇龍・龍姫・うずめ・ラピードは決め台詞を言い、フェンリルを片

付けた。

美龍飛達はと言うと、

「チュー!!」

「絶翔斬!!」

「魔神剣!!」

「岩斬滅碎陣!!」

「アイシクルバレット!!」

爪で攻撃して来たワレチューを龍華が斬馬刀で飛び上りながら斬り上げる特技「絶翔斬」で浮かせ、ネプギアが斬撃を放つ特技「魔神剣」で追撃して、美龍飛が刀を地面に叩きつけ石つぶてを飛ばす奥義「岩斬滅碎陣」で攻撃して、ユニは龍華から借りた片手で扱えるライフルで氷の銃弾を放った。

「我が生涯に・・・一片の悔いなしっちゅ・・・」

「どこの世紀末の霸王!!。(。D。ノ)」

四人の攻撃をもろに喰らっていたワレチューはどっかの世紀末の霸王のセリフを言つて気絶していた。

「斬つて!!」

「撃ち抜いて!!」

「悪の野望は阻止します!!」

美龍飛・ネプギア・龍華・ユニは勝利の掛け合いをしていた。

「これでも一緒には行かないって言うのかしら?」

「なるほど、今のゲームギョウ界に仇名す者か、これ以上の敵がいるのだなしかしお前らとは一緒には行けない!!」

「いい加減にしなさい!! あなたは世界がこのゲームギョウ界が消えてもいいの!!」

「勇龍と言ったか、おまえはあのブラックハートに似ているな、いいだろう、勇龍に免じて、力を貸してやろう!! 持つてけ!!」

「ありがとうございます!! ゲームキャラさん そして勇龍さん」

「何言ってるのよ、世界が危ないって言うのにごちやごちや言ってる暇がないんだから協力するのは当たり前よ!!」

勇龍はブラックディスクに世界が危ないのにごちやごちや言つて

る暇があるのかと言い、ブラックディスクは勇龍を見てブラックハートに似てると言い、勇龍の顔を立ててネプギアに力を貸すのであった。

「さて町に戻ってあのビジネス教祖様に報告しに行こうぜ!!」

ブラックディスクの協力を得た一行は教祖ケイに報告しに行くのであった。

「どうやら、ゲームキャラの協力が得られたみたいだね」

「はい」

「これからどこへ向かうんだ？」

「ルウィーに行こうかと」

「だったら女神候補生「達」には気を付けなよ!!」

「わかりました!!」

「星龍達はどうするの？」

「もちろん一緒に行くよ!!」

「何、当たり前前の事聞いているんですか龍姫さん!!」

「そうだよね!! 今日ホテルに宿泊して明日、町の入り口に集合でいいかな?」

「それでいいわよ」

教会に戻ってきた龍姫達はケイにブラックディスクの協力が得られたことを報告してホテルに宿泊してから、明日ルウィーに向かうことにした。

ロム人質にされるの巻

ラスティションのゲームキャラの協力を得ることが出来た龍姫達はホテルの部屋で武龍達に連絡を取っていた。

「武龍達は今どこにいるの？」

「ルウイーのホテルに宿泊してるんやけど」

「明日、ルウイーに行くことになっちゃった」

「そうなんや、そやったらルウイーのギルドの前で集合や!!」

「わかった!! そういえばブラン達の偽名は決まったら教えて」

龍姫は明日ルウイーに行くことになったことをルウイーのホテルに泊まっている武龍に伝えて明日、ルウイーのギルドで落ち合うことにしたのであった。

龍姫はブラン達の偽名を教えると言ったのだ。

「ブランは「芽龍」^{メル}ロムが「龍琥」^{ルーク}ラムが「礼龍」^{れいりゆう}」になったで

「そうなんだ、わかった!! じゃあ!! お休み」

「龍姫ちゃんもお休み」

ブランが「芽龍」・ロムが「龍琥」・ラムが「礼龍」と名乗ることにしたと龍姫は武龍から教えてもらい、明日のために就寝することにした。

「それじゃあ!! ルウイーのギルドに向かうわよ!!」

翌朝、龍姫達はラスティションの町の入り口で集合したので、一行はルウイーのギルドに向かうのであった。

「ルウイーはいつ来ても寒いわね!!」

「まあ、一年中雪が積もってるからね」

龍姫達は無事にルウイーに到着したのであった。

「あれ、あいつは」

「新製品のマジコンだよ!!」

「あのアナゴ族どうしよう? お姉ちゃん」

「取り敢えず、お客の振りして取り押さえてみる」

「そうね、その作戦で行きましょう」

龍姫達はルウイーの町で堂々とコピーツール「マジコン」のビラを

ばら撒いているアナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダがいたのであった。

龍姫達は客の振りして近づぐことにした。

「なんでビラ配りなんてしなちやいけねえんだ……それもこれをあの暴力侍集団とクソガキ女神どもが邪魔ばつかする所為だしな!! 特にあの黒髪ポニーテール侍の姉の方がな」

「暴力黒髪ポニーテール侍の姉って誰の事かな?」

「黒髪にジャージワンピに長ズボン履いて、おまけに刀を四本も腰に差してる野郎だよ」

「その暴力黒髪ポニーテール侍の姉ってボクの事じゃないかな?」

「そうそう……って!! もうルウイーに入ってやがったのかよ!!」

「年貢の納め時だよ!! アナゴ族!!」

「誰が!! アナゴ族だ!!」

「逃げんじゃねえ!!」

「ラピード追って!!」

「ワフ!!」

アナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダは龍姫が氣配を消して背後から来ているのにも関わらず、龍姫達の悪口を言っていた。

龍姫は小太刀を抜刀状態してリンダ背後から突き付けたのだが、煙玉で逃亡した

勇龍はラピードにリンダを追わせただが、

「此処でラムちゃんを待ち合わせ!!」

「流石にあの侍集団とクソガキ女神とやり合うのはまずいな……ちようどいいところに、オイ!! そのガキ!!」

「誰!!」

「これで人質ができたな!! これであいつらも手が出せないぜ!!」

「しまった!!」

「じゃあな、クソガキ女神&暴力侍ども!!」

「コラー!! 待ちやがれ!! C || C || C || C || (o>口) oマテマ
テ」

「ワン!!」

たまたまこっちの次元のゲームギョウ界のロムがこっちの次元のゲームギョウ界のラムと待ち合わせをしているところにアナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダが来てしまったのだ。

そのままロムを拉致して人質してしまい、そのまま町の外へ逃亡して行ったのだ。

ラピードが先行して龍姫達も追いかけることにした。

分史世界の白の双子

ロムを人質にしたアナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダはルウイーの町の外へ逃げていったのをラピードが先行して龍姫達が追いかけている頃、

「龍姫の奴、どこ掘起歩いてんだよく(´・`・´)＞!!」

ルウイーのギルドで龍姫達と待ちわせていた白のアンダーウェアにソフトブラを付けて、ツクヨミから変装用にもらった寡黙な斧使いの服の上に白のロングコートを着て、髪をツインテールに結っているもう一人のブランこと芽龍は待ちぼうけを喰らってキレていた。「もしかしたら龍姫お姉ちゃんはいつものほっとけない病が発症しちゃったんじゃないかな?」

「流石、龍琥ちゃん!!」

白のアンダーウェアにソフトブラを付けて、その上からツクヨミが変装用にくれた某親善大使の服を着たもう一人のロムこと龍琥は龍姫がいつものほっとけない病が発症したんじゃないかと言い、同じく白のアンダーウェアにソフトブラを身につけて、その上からツクヨミから変装用にもらったあの精霊の主の露出度が低い方の服を着たもう一人のラムこと礼龍はいつものように龍琥に賛同した。

そんな時だった、

「大変や!! 女の子が攫われたって、町の人がゆうてたで!!」

「その犯人を龍姫達が追ってるんだな!!」

「おまけに青い犬までいったらしいんや!!」

「どっちの方角に行ったんだ?」

「ルウイー国際展示場の方へ行ったらしいんや」

「じゃあ、決まりだね!!」

「龍姫ちゃん達を追いかけるで!!」

町の様子を見に行っていた武龍が龍姫達がアナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダを追いかけて行つたと町の人が言っていたのを芽龍達に伝え、武龍達もルウイー国際展示場に向かったのであった。

「ワン!!」

「ラピード、此処にアナゴ族がいるんだね!!」

「そういうえば、さつきから下っ端さんじゃなくななんでアナゴ族なんですか?」

「なんでって、昔やってたゲームで何回も出てきたボスキャラの事を言うだよ!!」

「そうだったんですか!!」

下っ端を追いかけてルウイー国際展示場に着いた龍姫達は、コンパが下っ端もといインカローズことリンダの事をアナゴ族と呼んでいることを聞いたら、龍姫は昔やっていたゲームで何回も戦うボスキャラの総称と答え、コンパは納得した。

「このまま行くとまずいよね!!」

龍姫はみんなの目を盗んで、脇道から下っ端の背後に回るためみんなから離れた。

「此処から行ったら背後に回れるよね!!・・・武龍!!」

「龍姫ちゃん!! なにしてんねん!!」

「実は犯人の背後に回ろうとしてたんだよ!!」

「そういうことだったのね!!」

パーティーから離れた龍姫は脇道を進んでいたら偶然にも武龍達と遭遇してしまったのである。

「ごめん!!」

「何、誤ってるの龍姫お姉ちゃん!!」

「早いところ、犯人をけちよんけちよんにしに行こう!!」

「そうだよね!!」

龍姫は約束を守れなかったことを武龍達に謝罪したら武龍達は気にしていないと言い、武龍達と合流した龍姫は下っ端を追いかけるのであった。

「見つけたわ!!」

「もう追ってきたのかよ!! けどな!! こっちには人質がいるんだからな!!」

「そっぴや忘れてたわ」

「プラネテューヌ諜報部が聞いて呆れるぜ!!」

龍姫がパーティーから離れていることを知らないネプギア達は下っ端を追い詰めたのだが、ロムが人質にされていて成す術がなかった。

「ギャハハハ!! 人質がいるから手も足も出ないってか!!」

と下っ端は余裕をかましていたら、

「人質を返さんかい!! 魔神拳!!」

「鷹爪襲撃!!」

「いだ〜!!」

「龍姫さん!!」

「それとアンタ誰?」

「大丈夫?」

「うん!!」

「龍琥と礼龍はその子を頼むで!!」

「わかった!!」

背後から武龍がいることに気づかなかつたのと、頭上から龍姫が相手を踏みつける格闘術の秘技「鷹爪襲撃」と武龍が拳を振り上げて放つ無手版の「魔神拳」を余裕をかましてるリンダに命中させて人質を奪還して龍琥と礼龍を護衛に着けた。

「お縄についてもらうで!!」

「ロムちゃんを返せ〜!!」

「ぎゃああ!!」

「ラムちゃん〜(;|;)／〜」

リンダは龍姫と武龍に不意打ちを食らって立ち上がると思っていたら、武龍にお縄につけと言われた直後、さっき龍姫がいた所からこちらの次元のゲームギョウ界のラムが待っていた杖で兜割りの要領でリンダの脳天を叩き気絶させたのであった。

分史世界のルウイー教会

ロムを攫ったリンダにお灸を据えていたら、さらに追い打ちで脳天を殴打したルウイーの女神候補生のラムとロムに

「いきなり現れやがってこのクソガキ!!」

「拉致ったおまえが悪いんだろが!!」

「ロムちゃん泣かせた罪を償ってもらうから、ロムちゃんも変身して!!」

「うん・・・」

アナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダは逆切れしていた。

うずめは自業自得だとリンダに向けて言った。

ロムとラムはリンダにお灸を据えるため、女神化した。

「お姉ちゃんも行く?」

「ああ! くちようどこの新しい斧を試したかったからな!!」

「芽龍!! 変身はあかんで!!」

「こんな奴に女神化してどうすんだよ!!」

「ユニちゃん行くよ!!」

「任せなさい!! アクセス!!」

「ネプギアちゃん!! 共鳴するね!!」

「ワン!!」

「ラピードも気合い入ってるわね!!」

ロムが龍姫達に一緒に戦ってほしいと言ってきたので龍姫達は一斉に得物を構えた。武龍は芽龍に女神化をするなど指示を出して、芽龍は承諾した。

ネプギアとユニは女神化して、美龍飛とネプギアがリアルオーブで共鳴した。

「は? 女神が四人!!・・・意味が分からねえんですけど」

「嫁たちがこんなに!! これってすごい光景だよ!!」

「観念しなさい!! 下っ端!!」

「此処は逃げるしかねえ」

アナゴ族もとい下つ端もといインカローズことリンダは女神が四人いる光景に驚きを隠せないでいた。

REDが女神が四人いる光景を見てはしゃいでいた。リンダは戦略的撤退と言い逃亡した。

「わたし達さいきよー!!」

「さいきよー・・・」

「逃げ足だけは速いだな!!」

「お姉ちゃん達誰?」

ロムとラムは龍姫達に名前を聞いて来た。

「わたしはネプテューヌの妹のネプギアだよ」

「アタシはラステイシヨンの女神候補生のユニよ!!」

「ねぷてゅーぬ? それにラステイシヨン!! ってことはわたし達の敵よ!!」

「やっぱり、こうなるんだね(・ω・)」

ネプギアとユニが名前を二人に教えたら、二人はネプギアとユニに宣戦布告をしてきたのであった。

「行こう、ロムちゃん!!」

とラムがロムに町に帰ろうと言ったのだが、

「お姉ちゃん!!」

「ちよつと!! わたしはあなたのお姉ちゃんじゃないのよ!!」

なんとロムがもう一人のブランこと芽龍に抱きついてしまったのだ。

「ロムちゃんの馬鹿く!!」

「ラムちゃんく」

「追いかけるわよ!! ラピード!! お願い!!」

「ワン!!」

その光景を目の当たりにしたラムは等々、ロムにキレてしまったどこかに飛んで行ってしまったので、勇龍はラピードに先行させて追いかけることにした。

「結局、また教会かよ!!」

「仕方ないよ、うずめ・芽龍」

「取り敢えず、この子を返さない」と

「そうやな、みんな行くで!!」

「こんなとこ誰かに見られたら、殴り込みにしが見えないよ!!」

ラムを追いかけていったら結局ルウイー教会に辿り着いてしまったので龍姫達はロムを返すため教会に入って行った。

「すいません!! 誰かいませんか?」

「ようこそ!! ルウイー教会へ!! 教祖の西沢ミナです!!」

「この子を助けたんですけど!!」

「すいません!! その子がなんか悪さをしたんですか?」

「マジエコンヌの下っ端が拉致ったから助けてやったら、芽龍の背中で寝ちまった」

「それと、もう一人の女神候補生を追いかけてたらこの子が女神候補生だったのでお連れしたまでや」

「すいません!! お手数をおかけしました!! では客間でお待ち下さい」

「じゃあ!! お言葉に甘えて、失礼します!!」

教会に入るなり真龍姫と龍愛翔は大声で挨拶をしたら、教祖のミナが出迎えてくれたのであった。

龍姫達はミナに事情を説明したら、客間で待てほしいと言われたので、龍姫達はお言葉に甘えて客間に行くのであった。

もちろん、龍姫達がいた次元のゲームギョウ界のミナとは姿形が一緒だが全くの別人であることは一緒である。

白のゲームキャラ

人質になっていたロムを救出した龍姫達は外史世界のルウイー教会の客間で待たされていた。

「すいませんでした!! あの子たちが迷惑を掛けてしまったようで」

「別に気にしてないよ」

「お名前を聞くのを忘れていました!!」

「そういや、ボクたちも名乗るの忘れてたね!!」

しばらくしてミナがやって来て、ロムとラムが迷惑をかけた謝罪を龍姫達にして、龍姫達に名前を聞くのを忘れていたので、龍姫達は自己紹介をした。

「それじゃあ、みなさんは 鳴流神家と獅子神家と御子神家の方々の集まりなんですか!! Σ(。D。)」

「はいそうです、今はいいんですけど、神楽堂家もいるんです」

「そうなんですか!!」

「あの〜ラムちゃんは?」

「実はさつき帰って来て、自分の部屋に引きこもってしまったんです」
「そうですか」

ミナは龍姫達が四世帯で仲良くこうしていると説明して、ネプギアがラムのことを聞いたなら、自室に入ったきり、引きこもってしまったと教えられたのであった。

「ここに居ても罅が開かないよ」

「そうだな、一旦町に出てみるか!!」

「それじゃあ!! お茶、美味しかったわ!!」

真龍姫が待っていても罅が開かないと言ってきたので、うずめが町の様子を見に行きたいと言い、勇龍はお茶のお礼を言い、一行は町に戻るのであった。

「お姉ちゃん!! あそこにいるのって」

「間違いなく、アナゴ族だね!!」

「取り敢えず、様子を見ましょう!!」

町に戻った龍姫達はマジエコノ又信仰活動真っ盛りのアナゴ族も

とい下っ端もといインカローズことリンダを発見したので、尾行することにした。

「あれ、ペンがない・・・」

教会の客間で寝ていたロムが起きたのだが人質になった時に大事なペンがないことに気づきそのまま教会を出て、町に繰り出したのである。

「あれ、あの子、何してるんだろう?」

「どうしたんや? 芽龍!!」

「芽龍さん!! 待つてください!!」

「どうするよ、お姉ちゃん、俺達だけでもゲームキャラの所へ行くか?」

「そんなことしたら、アイエフに疑われるよ!! ここは大人しく下っ端の尾行に専念しないと」

「わかったよ、そうする」

アナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダを尾行していたら、芽龍が挙動不審なロムを見つけてしまい、そっちに行ってしまったので、ネプギアも一緒について行ってしまった。

念話でうずめは龍姫に自分たちだけでゲームキャラのところへ行かないかと言ったのだが、龍姫はこのまま尾行に専念すように言い、うずめは二つ返事で承諾した

「どうしたの?」

「ペンがないの・・・」

「わかったよ、一緒に探してあげる!!」

「ありがとう」

「町にはなさそうね!!」

「と言うことはあそこですね!!」

「ルウィー国際展示場!!」

ペンを探していたロムに芽龍とネプギアが通ったら、一緒に探してあげると言い、三人はリンダが逃げ込んだルウィー国際展示場に向かうのであった。

「ペンってこれじゃあないかな?」

「ありがとう・・・ネプギアお姉ちゃん・お姉ちゃん!!」

「お姉ちゃんはちよつと、名前で呼んでほしいな」

「わたしも名前をお願い」

「うん・・・わかった・・・ネプギアちゃん、お姉ちゃん!!」

「結局、わたしはお姉ちゃんなのね(´・ω・´)」

ルウイー国際展示場にロムの大事なペンを探しに来た三人は目的のペンを見つけたので、ロムがお姉ちゃんと呼んでしまったので、ネプギアと芽龍は名前で呼んでほしいと言ったら、結局、芽龍はお姉ちゃんと呼ばれてしまった。

みんなの所へ戻ろしたら突然ネプギアのNギアに着信が入ったのである。

「ネプギアちゃん!! 今どこにいるの!!」

「芽龍!! はよ帰ってきて!!」

「ごめん!!」

「さっき下っ端に電話が入って来て、ブロックダンジョンにゲームキャラがいるって行ってから先に、世界中の迷宮に向かっているね」

「わかったわ、大至急そっちに向かうわ!!」

「わたしも一緒に行く・・・」

どうやらリンダの携帯電話に連絡が入ったので、美龍飛が盗み聞きしたら、世界中の迷宮にゲームキャラがいるとの情報を聞いたのである。

芽龍とネプギアとロムは大至急、世界中の迷宮に急ぐのであった。

外史世界のキラーマシン

龍姫達はリンダを尾行して世界中の迷宮に来ているのであった。

「なんだろう、嫌な予感がするな・・・」

龍姫はいつもの感が働いたのである。

するとそこに、

「遅れて、すいません!!」

「お姉ちゃん、ごめんなさい!!」

「わたしが・・・悪いの・・・」

「取り敢えず、全員がそろったんや!! 行くで!!」

ロムのペンを探しに行っていた芽龍とネプギアが遅れてやってきたのである。

もちろん、ロムも一緒について来た。

一行は先を急ぐのであった。

「魔神剣!!」

「虎牙連斬!!」

「ネプギアちゃん、技、知らない・・・」

「あれは美龍飛がネプギアにリアルオーブで共鳴してるからだよ!!」

「わたしもリアルオーブで共鳴・・・したい!!」

「わたしがリアルオーブで共鳴してあげる」

「何、この青い糸?」

「リアルオーブで共鳴すると二人の間に青い糸が現れるんだよ!!」

「これで・・・知らない魔法が・・・使えるんだ!!」

世界中の迷宮を魔物を倒しながら進んでいたら、ロムがネプギアが自分の知らない技を繰り出していたのを見て、自分も使いたいと言いつつ、龍琥が持っていたリアルオーブをダメもとでロムと共鳴させたから、成功したのであった。

「あー!! あれってゲームキャラじゃない?」

「そうみたいだね!! アナゴ族もないみたいだし」

REDが指差した方向を向くとそこに白い台座があり、その上に白いCDディスクが置かれていたのであった。

「あなたは・・・パープルディスクにブラックディスクもいるんですね!! あなたはネプテューヌさんですか? しかも二人も」

「わたしは鳴流神真龍姫こつちが龍愛翔!!」

「他人の空似だったんですね、すいませんでした!!」

「ゲームキャラさんにお問い合わせがあるんです」

「力を貸してほしいのですね!! ですが、協力することはできません!!」

「なるほど、さつき二人のこと「ネプテューヌ」って言ってたってことは、ネプテューヌとの誓いがあるんじゃないのかな?」

「どうやら、そちらの方は察しがついてるんですね!! その通りです!! ですが、一部の力だけならお貸しします!!」

「ありがとうございます!!」

ルウィーのゲームキャラことホワイトディスクは真龍姫と龍愛翔を見て「ネプテューヌ」と呼んでしまったが、二人は落ち着いて名乗った。

ネプギアがホワイトディスクに力を貸してほしいと言ったら、出来ないと答えたのだが、龍姫がそのわけを代弁したら、一部の力だけなら貸せると言い、ネプギアに力を渡そうとした瞬間、突然、勇龍とラピードが

「また、いい歳こいて、かくれんぼかしら」

「ワン!! ワワン!!」

「なんでわかるんだよ!!」

「どうせ、俺達にゲームキャラの場所を案内させて、隙を見て、破壊する気だったんだろ」

「ばれちゃあしようがねえ!! やっちまえ!! モンスターども!!」

「結局、こうなるんですね!! まとめて行きますよ!! 天光満る所に我はあり、滅びの門開く所に汝あり!! 出でよ!! 神の雷!! イン

デイグネイション!!」

「モンスターが・・・なんてな!!」

「しまった!! オトリだったんだ!!」

「間に合わない!!」

「これでゲームキャラはお終いだぜ!!」

物陰に隠れていたリンダを発見したのだが、魔物たちを嚇けてきたのである。

それを龍姫達が相手をする事になり、その隙にホワイトディスクを破壊されてしまったのである。

「ゲームキャラが封印していた殺戮兵器 キラーマシンだ!!」

なんと、ホワイトディスクが壊れた所為で封印されていたキラーマシンが出てきてしまったのだが、

「仕方ないね、魔神剣!!」

「なんで!! 一発で壊れるんだよ・・・ってな」

「おい!! 一機だけじゃねえのかよ!!」

「ここはいったん退くよ!!」

星龍が一刀両断にしたのだが、封印されていたのが一機だけじゃなかったのだ。

泣く泣く、壊れたホワイトディスクを回収して龍姫達は戦略的撤退をするのであった。

ホワイトディスクの修復

ホワイトディスクをリンダに破壊されてしまった龍姫達はルウイー教会に戻っていた。

スキット：失態

龍姫「ごめん!! ボクが早く気づいていればこんなことにはならなかったんだから」

真龍姫「お姉ちゃんは悪くないよ!!」

アイ「そうよ!! アンタはこれっぽっちも悪くないんだから!!」

ギア「そうです!! 悪いのはマジエコンなんですから!!」

龍音「ネプギアの言う通りだよ!!」

龍姫「そうだね、済んだことについても引きずってもしかなかったないもんね」

勇龍「龍姫はこうじゃなきや!!」

ラピード「ワン!!」

龍姫「ありがとう、みんな!!」

「なるほど、そんなことがあったんですか」

「はい、わたし達はこれからホワイトディスクを直そうと思います」

龍姫達はミナにキラーマシンが復活したことを教えていたのである。

龍姫達はこれからホワイトディスクを治すため教会を後にしたのである。

「直せるにゆ!!」

「誰?」

「ブロッコリーにゆ!! この本に載っているにゆ!! 64Pを見るにゆ!!」

「本当に載ってるんだね(・ω・)」

「どうやら、レアメタルとデータニウムが必要なんでね!!」

「レアメタルはルウイー国際展示場、データニウムは世界中の迷宮にあるにゆ!!」

「ここは二手に分かれた方が効率がいいわ!! わたし達と武龍達がル

ウィー国際展示場で、龍姫達とネプギア達が世界中の迷宮でいいかしら？」

「もちろん、異論はないぜ!!」

「各自、素材を手に入れたらルウィー教会に集合だね!!」

教会から出た龍姫達に黄色い球体に載った女の子ことブロッコリーが声を掛けてきたのである。

話しを聞くと、その本の64Pに載っているレアメタルとデータニウムがホワイトディスクを治すのに必要と書かれていたので、龍姫達は世界中の迷宮に、星龍達はルウィー国際展示場に二手に別れて行くことにした。

「あの魔物だけ、前に来た時はいなかったよね」

「どうやら、あの本に載っていたこと本当だったのね!!」

「ワン!!」

ルウィー国際展示場に到着した星龍・武龍達は前に来た時はいなかった二枚貝のような魔物がいたのである。

各々に得物を構えて

「爆砕陣!!」

「弧月閃!!」

「アクアレイザー!!」

「揺らめく焔、猛追!! ファイアーボール!!」

「紅蓮剣!!」

「魔神剣!!」

「ワウオ!!」

勇龍は前方宙返りで刀を地面に叩き付けながら斬りつけ火柱で攻撃する特技「爆砕陣」を、芽龍は魔戦斧グランヴェールで月を描く特技「弧月閃」を、ユニは水の銃弾を放つ奥義「アクアレイザー」を、ロムは下級魔術「ファイアーボール」を、天龍は炎の斬撃を飛ばす奥義「紅蓮剣」を、星龍は斬撃を放つ特技「魔神剣」を、ラピードは擦れ違い様にアイテムを盗む特技「ローバーアイテム」をそれぞれ繰り出した。

「これがレアメタルね!!」

「ワウ!!」

「ラピードが何か啞えてるけど・・・さっきやった技ってローバーアイテムだったんだ!!」

「これ氷結石だね!!」

「レアメタルも手に入ったし、教会に戻るわよ」

二枚貝の魔物を倒してレアメタルと氷結石を手に入れた星龍達は教会に戻るのであった。

「あのモンスターじゃないかなあ?」

「そうだよね!! この前来た時はいなかったもんね!!」

「行くよ!!」

世界中の迷宮にデータニウムを探しに来た龍姫達は星形の眼鏡を掛けた魔物を発見したので、一斉に得物を構えて、

「虎牙破斬!!」

「瞬迅剣!!」

「爆炎剣!!」

龍姫は斬り上げ斬り下ろす特技「虎牙破斬」を、ネプギアは刀を振り下ろし爆炎を熾す特技「爆炎剣」を、龍愛翔は踏み込みながら突く特技「瞬迅剣」をそれぞれ放ち、

「これがデータニウムだね!!」

「素材も手に入ったし教会に帰ろう!!」

龍姫達も魔物を倒し、ホワイトディスクを直すのに必要な素材の一つデータニウムを手に入れたのである。

待ち合わせ場所教会に戻るのであった。

分史世界のハードブレイカー

ホワイトディスクを直すために必要なレアメタルとデータニウムを手に入れたので、今現在、教会の開発室で修復作業を行なっているのだ。

「こうすれば、出来た!!」

「う・・・ここは？ わたしはあの時消滅したはず」

「復活した!! やっぱり嫁たちはすごい REDちゃん感激!!」

「ホワイトディスク、わたし達のことわかる？ 取り敢えず、直したけど」

「はい!! 直したと言うと、封印が解けてしまったんですね!! お願いがあるんですが」

「元の場所まで連れって欲しいんだね」

「はい!! その通りです!!」

「それじゃあ!! 気を取り直して!! いざ!! 世界中の迷宮にレッツゴー!!」

ホワイトディスクが直ったので、ホワイトディスクが封印されていた台座がある世界中の迷宮に連れって欲しいと言ってきたので龍姫達はもう一度世界中の迷宮に向かうのであった。

「ブロッコリーもついてくるにゆ、戦術は持ち合わせてるにゆ」

さつき龍姫達にホワイトディスクを直すための攻略本をくれたぶち子ことブロッコリーも龍姫達についてくると言ってきたので龍姫は動向を認めた。

「そういや、ラムはどうしよう?」

「あれ? 芽龍はどこいったんや?」

「多分、ラムちゃんの部屋に行ったんじゃないのかな」

「仕方ないなく芽龍が戻って来るまでここで待つしかないわね」

天龍がラムはどうするか考えていたら、いつの間にか芽龍が姿を消していたのだ。

プルルートはラムの部屋に行ったんじゃないかと言い、龍姫達は芽龍が戻って来るまで待つことにした。

「ロムちゃんの馬鹿」

ラムはロムが芽龍に抱きついてしまったのを見たショックで部屋に引きこもってしまったのである。

そこへ、

「わたしに嫉妬をしているのかしら？」

「確か、ラムちゃんが抱きついた」

「御子神芽龍よ、ちよつと話をしましょう」

「いや!! だってネプギア達の味方なんでしょ!! 敵の癖に!!」

「あなた、甘つたれるんじゃないやねえ!!、(∵)、「口」、(ノミコラーツ」

「!! グスン」

「これ以上話しても無駄みたいだな、あ、気に入らねえなら選択肢は二つだ、ネプギアのように戦うかもしくはテメエのようにいつまで現実から目を背けるかだ!!」

「そんなの・・・」

「忠告したぜ!! あとはお前次第だ!! わたしは仲間のところへ戻るわ!!」

芽龍がラムの部屋の前に来てそのままラムが芽龍を拒絶してしまったのだ。それに芽龍は激怒したのだ。

芽龍は去り際に気に入らないのなら選択肢は二つと言い、ネプギアのように真つ向から戦うか、現実から目を背けるかの二つだと論じたのだ。

芽龍は龍姫達の下に戻るのであった。

「お姉ちゃん!!」

「みんな、ごめんなさい!!」

「ラムちゃんを説得してくれたの・・・」

「ダメだったわ」

「きつと判つてくれるよ!!」

「そうね、急ぎましょ!!」

芽龍は龍姫達と合流したので一行は世界中の迷宮に向かうのであった。

「前に来た時よりキラーマシンが増える」

「どんだけ、封印されていたんだ!!」

「そうだ!! さつきホワイトディスクを直す傍ら、これ作ってみたんだけど」

「これって「明星壺号」だよ!!」

「なるほどね、それって確か、魔物の大群真只中で使う物だっけ」

「その通りです!! 勇龍さん」

「その役目はわたしと真龍姫が引き受けたわ!! その間にホワイトディスクを台座のまで持っていきなさい!!」

「お姉ちゃん!! わたしも」

「ダメよ!! あなたはネプギア達のサポートに回ってちょうだい!!」

「大丈夫だよ!! 龍華ちゃん!! なんだってわたしと勇龍の幼馴染みコンビが組むんだから!!」

「わかりました!! 絶対に無茶しないでよ!!」

「わかったよ、危なくなったら、「明星壺号」を使うわ!!」

世界中の迷宮に到着した龍姫達は思いのほかキラーマシンが大量生産されていたのだ。

その状況を打破するため、美龍飛がホワイトディスクを直す傍ら同時製作していた兵器「明星壺号」を勇龍に渡し、勇龍と真龍姫とラピードがキラーマシンの大群の真只中で明星壺号を発動させるため、龍姫達をホワイトディスクが置かれていた台座に向かわせた。

「行くよ!! 勇龍!!」

「言っとくけど、女神化しちやダメだからね!!」

「わかってるよ!! それじゃあ!! 腹括って!! 行きますか!!」

「ワン!!」

龍姫達にホワイトディスクを任した真龍姫と勇龍とラピードはそれぞれ得物を構えてキラーマシンの大群に目掛けて突っ込んでいった。

「戻ってきたのかよ!! 暴力侍どもとクソガキ女神!!」

「いい加減にしてくれろく 今、楽にしてあげるよ!!」

「やってみろよ!! 行け!! ハードブレイカー!!」

「承知した、だが、倒してしまっても構わないのだろうか?」

「負けフラグ立ててんじゃねえよ!! アタイは暴力黒髪ポニーテール侍の姉とやるから、おまえはクソガキ女神の相手をしろ!!」

「何、このデジャヴ(´・ω´・)」

「お望み通りアタイが相手だ!!」

世界中の迷宮のホワイトトディスクが置いてあつた所に到着した龍姫達はアナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダが直々に龍姫の相手を名乗り出て、ハードブレイカーをネプギア達の相手をするように命令したら、ハードブレイカーが負けフラグのセリフを言つてしまい龍姫達は呆れてしまった。

もちろんアナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダが龍姫に勝てるはずがなく、

「喰らいやがれ!! 黒髪ポニーテール侍の姉!!」

「受け身取つてね!!」

「ウゲ〜!!」

「龍姫お姉ちゃん、下っ端投げちやった・・・」

「ロムちゃん、あの技は投げ技の「背負い投げ」つて言う技だよ」

「ロムはもうちよつと大きくなったら教えてあげるで〜」

「うん・・・」

龍姫に背負い投げで投げ飛ばされ、気絶した。

それを見たロムはアナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダに向かって合掌していたのは言うまでもない。

封印完了

アナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダが龍姫に投げ飛ばされて気絶している頃、星龍達はハードブレイカーの相手をしていた。

「無駄だ・・・」

「そうか、良く見てみ、ボロボロやで〜」

「早く帰りたい〜から〜 ネガティブゲイト!!」

ハードブレイカーが負けフラグが確立している状態になってしまってるのであった。

プルルートは早く帰りたいらしく、空間を捻じ曲げる闇属性の魔術「ネガティブゲイト」を発動させた。

「あの魔法やってみたい・・・」

「ロムちゃんには無理だよ!!」

プルルートの魔術を見たロムがネガティブゲイトを修得して見たいと言いつ出したので、ネプギアと美龍飛が止めた。

「アイデンティティーが・・・ 幽体離脱」

「アイちゃん!! 今、助けるですう!!」

アイエフはプルルートに闇魔術を使われたことが余程ショックだったのか幽体離脱してしまいコンパがアイエフの魂を追いかけました。

「裂空斬!!」

「魔神月詠華!!」

「魔神剣!!」

「爆碎斬!!」

「獅子戦吼!!」

美龍飛は縦回転切りをする特技「裂空斬」を、星龍は魔神剣と弧月閃の合体奥義「魔神月詠華」を、芽龍は斧を地面に叩きつけ石つぶてを飛ばす寡黙な斧使いの特技「爆碎斬」を、武龍は獅子の闘気を叩き付ける秘技「獅子戦吼」を繰り返した。

「ネプギアちゃん!! 行くよ!!」

「わかったよ!! 美龍飛ちゃん!!」

美龍飛&ネプギア「衝破!! 十文字!!」

それに負けじと美龍飛とネプギアが共鳴技「衝破十文字」をハードブレイカーに決めたのだ。

そしてハードブレイカーは

「馬鹿な・・・」

と言いつつ光の粒子になって消えて行った。

「ホワイトディスク!! 早く封印しろ!! 二人と一匹があぶねえんだよ!!」

「わかりました!! では 封印を行います!!」

うずめがホワイトディスクに早く封印をするように指示を出して、ホワイトディスクは封印を開始し、無事次元の狭間の門が再び閉じたのだ。

一方その頃

「どうやら、封印できたみたいね!!」

「そうだね!!」

「ワン!!」

「キーン!!」

「取り敢えず、これでも喰らいなさい!!」

真龍姫達と戦っていたキラーマシンの大群はホワイトディスクが封印したおかげで機能が停止仕掛けていたので、勇龍は美龍飛から託されて明星壺号を起動させたのだ。

明星壺号をから青い光が発生してキラーマシンの大群が光の粒子になって消えて行くのであった。

「壊れちゃったよ!! 明星壺号!!」

「まあ、いいじゃない!! こうして無事だったんだし!!」

「ワフ!!」

「お姉ちゃん!! 勇龍さん!!」

「ごめんね!! 美龍飛、せっかく作ってくれた明星壺号、壊れちゃった!!」

「いいの!! お姉ちゃん達が無事だったら良いんだよ!!」

「みんな!!教会に戻るよ!!」

明星壺号は壊れてしまったのだが、美龍飛は無事にいてくれたことがうれしいと言い、龍姫達は教会に戻るのであった。

紫龍と黒龍!! 定期船に乗り損ねるの段

ハードブレイカーとキラーマシンを封印しホワイトディスクの力を手に入れた龍姫達は教会に戻ってきていたのだ。

「キラーマシンを封印して、ホワイトディスクから力を貸してもらったんですね!!」

「はい!!」

教会にキラーマシンを封印したことホワイトディスクから力を貸してもらったことを報告していた。

すると奥から、

「ロムちゃん・・・ごめんなさい!!」

「ラムちゃん・・・怒ってないよ・・・」

「わたしも一緒に行く!! お姉ちゃんを助けるの!!」

「芽龍、なんかしたんだろう?」

「あの子を諭しただけよ」

芽龍に諭されたのが効いたのかラムがロムに謝罪をし龍姫達に同行すると言ってきたのだ。

「あとはリーンボックスだけか、ボクちよつと連絡した人がいるから」「早くしなさいよ!! 龍姫!!」

龍姫はこっちの次元のゲームギョウ界のリーンボックスに来てるだろう輝龍・飛龍に連絡するため外に出て行った。

「輝龍、飛龍!! リーンボックスにいるの?」

「うん、今、リーンボックスのホテルに泊まってるんだよ」

「今からワレチューとリンダって言う人物の顔写真送るから」

「来たよ!! この顔の人を見つけたら尾行してるね!!」

「ボクたちは船で行くことになるからそれまで二人で何とかして」

「わかったよ、龍姫ちゃんと星龍ちゃんも無理はしないでね!!」

「また、合流地点はリーンボックス教会前でもいいかな」

「OK!!」

龍姫は二人にリンダとワレチューの顔写真を送り警戒するように言い、通信を切ったのだ。

「お姉ちゃん!! ラステーションの船着場に行くよ!!」

「わかった、すぐ行く!!」

龍姫達はリーンボックスに向かうためラステーションの船着場に向かうのであった。

「コンパ〜早く〜」

「あ〜いちやったく〜」

「コンパちゃんとプルルートちゃん〜」

「クソガキ女神に暴力侍ども!!あばよ!!」

リーンボックスに向かうためラステーションの船着場に来た龍姫達は定期船に乗り遅れてしまった挙句、アナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダとワレチューが先にリーンボックス行きの定期船に乗っていたのだ。

唯一遅れてきたのはコンパだけだった。

おまけにこれが最終便だったので龍姫達はラステーションで一泊する羽目になってしまったのである。

「あ、龍姫ちゃんからメールだ!! 何々・・・ええ!! (。 ㇏。)

「どうしたの!! 輝龍!!」

「リンダとワレチューが先にリーンボックスに行っちゃって」

「どうしよう!! (。 ㇏。) ノあたふたく〜」

「そうだ!! 教会に行こう!!」

「そうだよね!! こっちの次元のゲームギョウ界にもチカお姉ちゃんがいるだよね!!」

「うん、ボクたちはあくまでこっちでは女神様の協力者だよ」

「忘れてないよ!! それに女神化はいざという時にしか使わないよ!!」

「チカさんって呼ばないと」

「うん、龍姫ちゃん達が来るまでボクたちだけで何とかしよう!!」

龍姫から定期船に乗り損ねたこととリンダとワレチューが先にリーンボックスに行ってしまったことをメールで知らされた輝龍・飛龍は龍姫達が来るまでの間、何とかすることを決めたのであった。

飛龍!! マジエコンヌの手に墜ちるの段

龍姫達がラスティションで足止めを食らっていた頃、輝龍・飛龍はリーンボックス教会に向かっていた。

「取り敢えず、教会に着いたね!!」

「中に入ろう!!」

教会に到着した輝龍・飛龍はアナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダ達より先に教会に入るのであった。

もちろん愛用している槍はいつでも戦闘が出来るように粒子化しているのである。

「ようこそ!! リーンボックス教会へ、わたくしは教祖の箱崎チカですわ!!」

「ボクは神楽堂輝龍です」

「妹の神楽堂飛龍です(外史世界だけど、やっぱりチカお姉ちゃんはいるんだね)」

「御用件は何ですか?」

「実はマジエコンヌの事で折り入って聞きたいことが」

教会に入った輝龍・飛龍は外史世界の胸の大きさ以外は瓜二つの教祖チカが出迎えてくれたのである。

二人はこっちに來て間もないのでマジエコンヌについて聞こうとした矢先、

「邪魔するぜ!! お前がリーンボックスの教祖の箱崎チカだな!! 今さつき、船着場の定期船を壊してきたんでな!! 大人しくしてもらおうか!!」

「こんな時、ベールお姉さまがいてくれた!!」

「観念するんだな!!」

「あのくボクたちのこと忘れてないかな?」

「部外者はすっこんでろ!!」

リンダが教会に乱入してきたのだが、輝龍・飛龍の事が目に入っていなかったのであった。

得物の鉄パイプでチカに殴り掛かったのだが、

「させないよ!!」

「テメエには関係ないだろうが!!」

「わたくしを置いてお逃げなさい!!」

「嫌だよ!! 龍姫ちゃん達が来るまではボクたちがやらなきや!! 誰が此処を守るの!!」

「龍姫だと!! テメエらあの暴力黒髪ポニーテール侍の姉の仲間だな!! 野郎ども!! やっちまえ!!」

「輝龍!! 教祖様を連れて逃げて!! ここはボクに任せて!!」

「でも・・・」

「行つて!!」

「ちよつと!! あなた!!」

「待ちやがれ!! チツ!! まあいい!! こいつをリーンボックスのアジトに連れてけ!!」

「あとは任せたよ、龍姫ちゃん」

飛龍が粒子化していた槍を実体化させ防いだのだ。輝龍にチカを連れて逃げるように言い、輝龍は無言でチカをお姫様抱っこして窓を突き破って町の方へ逃げるのであった。

しかし多勢に無勢だったので、飛龍は槍を床に放り投げて降参して、リンド達マジエコノヌのリーンボックス支部のアジトに連行されてしまった。

「ここまで来れば大丈夫だね、飛龍は大丈夫かな」

「これからどうするのですの?」

「そうですね、その格好だと目立ちますし、あ!! ちよつと待てつてください!! いきますよ!! これでよし!!」

「あなた、その端末どういう仕組みですか? そんなことは後にして、なるほど、パーカワンピースにジーパン姿で、フードを深く被ってしまえば顔が見られる心配がありませんわね!! これからどこへ行きましょうか?」

「龍姫ちゃん達が来るまで、ホテルに隠れましょう!!」

「そうですね、背に腹は代えられないですわ!!」

何とかマジエコノヌを撒くことに成功した輝龍は人目が付かない

路地裏に行き、ツクヨミからもらったデバイスに備え付けられている
リライズ機能を使ってチカの服をジャージワンピースとジーパンとス
ニーカーに精製した。

チカは自分が着ていた服が緑と白のパーカワンピースに変わってし
まったことに驚いてしまったが、パーカワンピースについてあるフードを
深く被り、輝龍達が泊まっているホテルに逃げ込んだのだ。

一方その頃

「今度こそは大丈夫ね!!」

龍姫達はリーンボックスに向かうためラステーションの船着場に
来ていたのだが、

「え、全便欠航ですって!!」

「はい!! どうやら、リーンボックス側でトラブルに巻き込まれてし
まったらしく」

「アナゴ族の仕業だね(・ω・)」

なんとラステーションの船着場に定期船が一隻も戻ってきてなく
全便欠航になっていたのである。

「何とか出来ないのかしら?」

「実は船蔵に故障中の船が一隻残ってるのですが、錨・帆・船首像があ
れば直せるんですが、確かギルドにクエストが出ていたはずです!!」

「わかった、今回は3チームに分けるぞ!!」

「錨はボクたちが調達してくるよ!!」

「帆はボクたちが行くね!!」

「船首像はボクたちが行ってくるぞ!!」

「ありがとうございます!! お礼として無料で乗船してください!!」
「それじゃあ!! 各自手に入れたらここに集合だよ!!」

全員「応!!」

船蔵に故障中の定期船が閉まってるらしく、それを直すのに怒り・
帆・船首像の三つが必要と言われたので、錨は鳴流神家&ネプギアが、
帆は獅子神家・ユニが、船首像は御子神家・ロムとラムがそれぞれ担
当することになり、一刻も早く輝龍・飛龍がいるリーンボックスに行
くため急いでパーツ集めに向かうのであった。

この時、飛龍がマジエコンヌの手に墜ちたことを知る由もなかった。

外史世界の緑の大地

リーンボックスに向かうため船蔵の定期船を修理するパーツである「錨」を集めていた鳴流神家・ネプギアチーム、「帆」を集めに行った獅子神家・ユニチーム、「船首像」を集めに行った御子神家・ロムとラムはそれほど時間を掛けずにラストেশヨンの船着場に戻ってきたのだ。

「これで足りみますか？」

「はい!! これで船を修理できます!! それじゃあ!! 今すぐ取り掛かります!!」

龍姫達は集めてきた船のパーツを船着場にいる整備士に渡した。

龍姫達が集めたパーツをもらった整備士はすぐさま船の修理に取り掛かったのである。

しばらく待っていると、

「お待たせしました!! 船の修理が完了しました!! ご利用の方は足元にご注意ください!!」

「どうやら、船が直ったみたいだね!!」

「早く!! 輝龍達と合流しないと!!」

「そうね!! 幾ら、輝龍・飛龍が強いからってマジエコンヌが数で攻めてきたらまずいわ!!」

「さっさと船に乗り込もうぜ!!」

船蔵の定期船の修理が完了したので龍姫達は輝龍・飛龍と合流するため船に乗り込むのであった。

「やっと着いた!!」

「あれ? 輝龍からメールだ!! ええ!! (。D。)

「どうしたのよ? 龍姫?」

「輝龍をマジエコンヌから逃がして、飛龍が連行されたって!! 輝龍からメールが届いてたんだよ!!」

「クソ!! 一足遅かった!!」

「飛龍がやられたと決めつけるのは早いよ!!」

「そうだな!! 取り敢えず、輝龍と合流しないと!!」

「龍姫、輝龍・飛龍って誰？」

「ごめん!! そういや、REDとアイとネプギア達は知らなかったね、ボクの幼馴染みだよ!! 二人とも槍使いだよ!!」

「そうなのね、ありがとう龍姫!! そうと決まれば輝龍と合流するわよ!!」

何とかリーンボックスに到着した龍姫達は輝龍からメールで飛龍がマジエコンヌの手に墜ちたと知らされたのだ。この真相を知るため約束通り輝龍と合流するため一行はリーンボックスのギルドに向かうのであった。

「龍姫ちゃん(; | ;) / ~ ~ ~」

「何があったか説明できるか？」

「その事でしたらわたくしが説明させていただきますわ!!」

「まさか!!」

「リーンボックス教会教祖、箱崎チカですわ!! お見知りおきを、実は飛龍はマジエコンヌが教会に攻めてきた時、たまたま来ていた輝龍とわたくしを逃がすため殿を買って出てくださいだったのですわ!!」

「そうだったんだ!!」

「教会に誰かが変装している偽チカがいるってことだね!!」

「そうですわ!! あなたに至急リーンボックス教会に来るようにイストワールに伝えるように言っていたはずですわ!!」

「はい!! その通りです!! まさか!!」

「なるほど、敢て、偽の頼みことを聞く班と、教会に残って化けの皮を剥がす班に別ければいいんだな!!」

「わたし達が騙された振りをする班に行きます!!」

「それじゃあ!! 決まりね!! ラピード!! あなたは教会の外で待っててね!!」

「ワン!!」

「ラピードが偽チカに吼えたと同時に本物のチカが出て行ったらいいだな!!」

「それじゃあ!! 教会に乗り込むとしますか!!」

リーンボックスのギルドに到着した龍姫達は入って早々輝龍が泣

きついで来たのだ。

続けてチカがパーカワンプのフードを龍姫達の前で脱ぎ、此処に至った経緯を説明して、美龍飛達が騙される班に、龍姫達は偽チカの正体を暴く班別れ、一行は教会に行くのであった。

「ようこそ!! リーンボックス教会に(ゲツ!! クソガキ女神どもかよ!! あれ? 暴力黒髪ポニーテール侍どもはいねえみたいだな)」
「あのう、いーすさんから至急、リーンボックス教会に行くように頼まれたんですけど?」

「そうだったかしら? あ!! 思い出したわ!! あなたにガベイン草原の魔物退治を依頼したかったのですわ!!」

「わかりました!! 失礼しました!!」

「ふう〜何とかかなったな、ギャハハ!! クソガキ女神どもめまんまと騙されやがったぜ!!」

「どうしようか、こつちまで笑い声聞こえるだけど(っ・ω・)」

「取り敢えず、わたし達はガベイン草原に行つてきます!!」

「美龍飛と龍音はネプギア達について行つてあげて!!」

「わかったよ、行つてくるね!! お姉ちゃん」

「さてとボクたちはアナゴ族をと捕まえて飛龍の居場所を聞き出さない」と

偽チカことリンダはネプギア達女神候補生しか教会に来なかったので、女神候補生ガベイン草原の魔物を倒してくるようになましたのだが、教会の門で龍姫達が待ち構えていることを考えていなかったのか、自分の声で高笑いをしていたのである。

騙された振りをした女神候補生に美龍飛と龍音と龍華と龍琥と美札の五人を護衛に着けてガベイン草原に向かわせた。

龍姫達は作戦通り、教会に入つて行つた。

ケイブ参上!!

龍姫達が偽チカことリンダから飛龍の居場所を聞き出すため、教会に入っている頃、美龍飛達は騙された振りをしてガベイン草原に魔物退治に来ていた。

「ネプギアちゃん!! 一応、格下にも負けることを想定してね!!」

「うん!! わかったよ、美龍飛ちゃん!!」

「武道の世界でも黒帯が白帯に負けることがあるからね!!」

「そうだったわね、龍姫さん、下っ端を背負い投げで投げ飛ばしてたもんね!!」

「龍姫お姉ちゃん・・・素手で・・・お姉ちゃんに勝てそう・・・」

「そうね、龍姫には逆らわないで行くわ(´・ω・｀)」

美龍飛はネプギアに格下にも負けることを想定するように言い、ネプギアは承諾した。

龍華が以前、龍姫がアナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダをタイマンで背負い投げで投げ飛ばしたこと思い出して、ロムが龍姫なら、姉ブランに素手で勝てると言わしめた。

アイエフは龍姫に逆らわないと決めていた。

そうこうしているうちに目的地に着いたのだが、
「あそこで誰か戦ってます!!」

どうやら先客が来ていたのである。しばらく様子を窺うと、戦っている人物の背後から魔物が攻撃を仕掛けようとしていたので、

「ここは任せて!! 魔神剣!!」

龍音が一瞬で大小の刀を抜刀して、利き手である右手に持つる刃渡り二尺三寸の刀を振り抜き斬撃を放つ特技「魔神剣」を繰り出した。
魔神剣を食らった魔物は光の粒子になって消えて逝った。

「ありがとう!! 流石のわたしも背後から来ているのは気づかなかつたわ!! あ、わたしは、リンボックス特命科の ケイブよ!!」

赤い髪をツインテールに結っていて、白と赤のメイド服のような服の下に胸元が開いた黒のアンダーウェアを着て、黒いニーソックスを履き、白のブーツを履いた女性ことケイブは美龍飛達にお礼を言っ

てきた。

「実はリーンボックスの教祖の箱崎チカが犯罪神の信仰を」

「規制解除してしまったんですよね!!」

「なんで!! 知ってるの?」

「実は、龍姫さん達が教会にいる偽教祖を捕まえて、龍姫さんのお友達の飛龍さんの居場所を自白させてるんです!!」

「もちろん、本物チカさんも一緒に居ますよ!!」

「安心したわ!! 教会がマジエコンヌに攻め込まれたと聞かされた時はどうしようか、思ったわ、けど、その飛龍って子の身柄の確保が最優先ね」

「そうと決まれば、急ぐわよ!!」

こうしてケイブを助けた美龍飛達は急いでリーンボックス教会に戻るのであった。

一方その頃

「失礼します〜誰かいませんか?」

「どうなされたんですか? (今度は暴力黒髪ポニーテール侍達かよ!!)」

「ちよつと教祖様にお聞きしたいことがあるんですけど〜(*^_^*)」

「それはどう言った御用で (早く、してくれ!!)」
教会にいる偽教祖ことリンダを捕まえるため教会に乗り込んだのだ。

プルルートが黒い笑みをこぼしながら偽教祖ことリンダに質問した。

「そうですね、来て!! ラピード!!」

「ちよつと教会内ではペットの侵入は禁じられています!! (マズイぞ、あの犬は)」

「ワン!! ワン!! ワン!!」

星龍が外で待機していたラピードを教会に呼んで偽教祖の匂いを嗅がせたら吠えて、

「わたくしは・・・こつちくんじゃねえ!!」

「じゃねえ?」

「空耳ですわよ!! (あぶねえ!! もう少しでばれるところだった)」

「教祖様はこの方に見覚えはありませんか?」

近付いたら口調が一瞬変わったので、後で待機していた本物のチカがフードを偽教祖ことリンダ前で脱いだのである。

すると、

「あなたは・・・お前は!! あ!! しまった!!」

「等々、尻尾を出してくれたね!! 飛龍はどこにいるの?」

「さあな!! あばよ!!」

「クソ!! 逃げんじゃねえ!! C || C || C || (o>ロ) o マテ
マテー」

「ラピード!! お願い!!」

「ワフ!!」

偽教祖ことリンダは龍姫達の前でぼろが出てしまい、一目散に逃げ
て行ってしまったので勇龍はラピードを先行して龍姫達も追いかけ
るのであった。

アンダーインヴァースに囚われし緑龍

龍姫達は偽教祖ことリンダを教会を出て追いかけていたら、ちょうどガベイン草原の魔物退治に行っていた美龍飛達が戻ってきたので、「ワン!!」

「捕まって、たまるかよ!!」

「コラ!! 待て〜!! C || C || C || C || (o>口) oマテマテー」

「あ、下っ端!!」

「わたし達も追いかけるよ!!」

合流してアナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダを追いかけることにしたのである。

マジエコンヌの手に墜ちてしまった飛龍は、

「うくん、此処はどこだろう?」

どうやら飛龍はリーンボックス内の建物内に監禁されていたのであった。

「取り敢えず、此処を出ないと、困ったなく槍が有ったらこんな扉破壊できるのに!! さすがに女神化したらまずいしな!! おまけにポーチも盗られてるし、待てよ、アレはポケットに入れたから盗られていないならあるはず」

飛龍は今、置かれている状況を整理していた。もちろん、得物の槍に、ポーチを取り上げられたのだが、飛龍はあることを思い出して徐にズボンのポケットに手を入れて中を探していた。

「良かった!! 盗られてなくて!! このデバイスがあれば此処から出られる!! この扉なら魔術で破壊できる!! 良し!! 灼熱の軌跡を以って、野卑なる蛮行を滅せよ!! スパイラルフレア!! これで外に出られる!! ここは地下みたいだね!! こういう場合は近くにありませんよね!! .. あった!! ボクの槍!! 流石にこんだけ派手にぶっ飛ばしたのに見張りが来ないのはどうなんだろう (・ω・) こうしちや居られない!! 出口はこっちだね!!」

どうやらツクヨミにもらっていたデバイスは盗られていなかった
ので、攻撃魔術が苦手な輝龍・飛龍でもこのデバイスを使えば全属性
の攻撃魔術を使えるようになるのだ。

飛龍は中級魔術「スパイラルフレア」を発動させ、扉を破壊して外
に出たら、どうやらどこかの建物の地下の部屋に閉じ込められていた
のだが、当たり前のように出てすぐの部屋に愛用の槍とポーチが置いて
あったので、飛龍は急いでその場から離れたのであった。

一方その頃

「ここに逃げ込んだようね!!」

「ワウウ〜」

「どうやら、アンダーインヴァースのガスの匂いと下っ端の匂いが混
ざったんだ!!」

「ラピード、ご苦労様!! 此処からは自力で下っ端を探さないとね!!」

下っ端もといインカローズことリンダを追いかけたら、アン
ダーインヴァースに辿り着いたのだが、マグマのガスの所為でラピー
ドの鼻で追いかけることが出来なくなったので龍姫達は魔物に注意
しながら中を進んでいった。

すると、

「なんだろう? これスライヌだよ!!」

「なんか、上から落ちてきてるよ!!。(。D。(ノ」

「こうなったら、剛招来!!」

「ヌラ〜」

「ボクも!! 熱波旋風陣!!」

「守護方陣!!」

「獅吼爆炎陣!!」

「轟破槍!!」

「すごい!! あっという間にあの大量発生したスライヌを片付けるな
んて!!」

上から大量発生したスライヌが降ってきたので、龍姫は自分の周囲
を炎で包み、その炎でスライヌを攻撃しながら、自分の攻撃力をあげ
る特技「剛招来」で吹き飛ばし、天龍は回転切りをした後、斬り上げ

て、真下に急降下して爆炎を熾す奥義「熱波旋風陣」で一掃し、勇龍は愛刀「ニバンボシ」を地面に突き刺し魔方陣で味方の傷を癒しながら攻撃する奥義「守護方陣」で片付け、真龍姫は獅子の鬨気を叩きつけた後、兜割りの要領で刀を叩き付け爆風を熾す奥義「獅吼爆炎陣」で葬り、輝龍は槍を地面に突き刺し岩の槍で攻撃する特技「轟破槍」でスライヌを片付けたのだ。

それを見たケイブは感心していた。

「ふう〜何とかなんつた〜」

「先を急ぐわよ!!」

「あそこに誰かいます!!」

「龍姫ちゃん〜!!」

「良かった!! 飛龍!! 無事だったんだね!!」

「一旦教会に戻った方がいいよね〜」

「チカの事が心配だわ!!」

スライヌを一掃した龍姫たちは得物を閉まって奥へ歩いて行ったら、向こうからマジエコンヌに捕まっていた飛龍が歩いて来たのだ。

所々、傷を負っていたが、軽傷だったので、体制を立て直すため一旦教会に戻るのであった。

「ケイブ!! それに飛龍!! みんなも!! 無事だったのね!!」

「チカ!! あなたは大丈夫だったようね」

「ええ、この子たちに助けられたのよ!! そんなことよりあなたをここに呼んだのはギョウ界墓場で何があったのか教えて欲しいのよ!!」

「その事なら大体はいすーんが話してくれたんだが、四人とも今にギョウカイ墓場にぶち込まれてるらしい」

「そうだったのね!! 実はゲームキャラが犯罪組織の手に墜ちてしまったのよ!!」

「先越された時点で、予想はしてたんだが、まさかそっちの予想が的中しちゃうなんて」

教会に戻った龍姫達にチカはネプギアにギョウカイ墓場のことを聞いたら、うずめがそれを代弁して、リーンボックスのゲームキャラがマジエコンヌの手に墜ちたと知らされたのだった。

グリーンディスク

飛龍の怪我の治療のため一旦教会に戻ってきていた龍姫達にゲームキャラが犯罪組織の手に墜ちたと言うことを聞かされた。

「飛龍、大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ!!」

「無理はしないでいいんだよ!!」

「ありがとう!! みんな」

飛龍が治療を終えたようで、幸いにも掠り傷程度だったようで龍姫達にそのまま合流したのだ。

「アンダーインヴァースにもう一回、行くけど？」

「うん、この落とし前を着けに行かないとね!!」

「どうやら、本人は言っても無理だな!!」

「それじゃあ!! アンダーインヴァースに行くよ!!」

アンダーインヴァースにゲームキャラを救出に向かう龍姫達だった。

そんなこんなでアンダーインヴァースに到着した龍姫達は龍姫をはじめとする前衛を筆頭に最深部に進んでいくのであった。

しばらく進んでいるとアナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダとワレチューが何か言い争っていて、手には緑色のディスクを持っていた。

「それでプルルートちゃんに正体がばれて、本物の教祖が現れてボロが出た挙句、槍使いまで逃げらたつちゆか? プルルートちゃん目を欺くには1000年早かったちゆね!!」

「言わせておけば!! 桁増えてんじゃねえか!! 元々、変装なんて柄じゃねえんだよ!!」

「ガサツな女に教祖の真似事は土台が無理だったちゆね!! プルルートちゃんならきつと完璧にこなせたでちゆよ!!」

「なんだろうな、暴力黒髪ポニーテール侍どもに馬鹿にされてるよりむかつくのはよ...」

「嫉妬は見苦しいでちゆよ、こっちは命令通りゲームキャラを捕まえ

たでちゆよ!!」

「わたしを捕らえて何をするんですか？」

「誰が教えるかよ!!」

この二人の言い争いがエスカレートしていった。

「御用改めである!! お縄に尽け!! アナゴ族!!」

「真龍姫!! 龍愛翔!! 時代劇じゃないよ!! (。D。) ノベシ!!」

人と一匹が絶賛対立している所に龍姫達が到着した。

「アタイはアナゴ族じゃねえ!! もうこうなったら纏めてかかってこい!!」

リンダは自棄になって龍姫達全員を相手にしてやると言い出したので、

龍姫達は一斉に得物を構えて、

「魔神連牙斬!!」

「絶風刃!!」

「霸道滅封!!」

「サンダーブレード!!」

「ヴァリアブルトリガー!!」

「魔神剣!!」

「大地の咆哮!! グランドダツシャー!!」

「聖なる意思を……我に仇名す……敵を討て!! デイバインセイバー!!」

斬撃とビームと雷と銃弾と地震の雨霰を繰り出していた。

もちろんリンダとワレチューは、

「ギヤアアアア!!」

「ヂュユユユ!!」

悲鳴を上げていたのは言うまでもなかった。

「飛ばして行きますよ!!」

ネプギアがオーバーリミッツLV, 1を発動させて、

「行きます!! 虎牙破斬!!」

斬り上げて、斬り下ろす特技「虎牙破斬」から入り、

「魔王炎撃波!!」

刀身に炎を纏わせて薙ぎ払う秘技「魔王炎撃波」に繋げ、
「閃光裂破!!」

刀身に光を纏わせて連続で突く奥義「閃光裂破」でさらに追撃し、
「荒ぶる大地です!! 光翔戦滅陣・震斬!!」

地面から発生させた岩で攻撃した後、斬撃で追撃するバーストアーツ
「光翔戦滅陣・震斬」でめた。

「観念して、ゲームキャラを返してください!!」

「ネプギアちゃん・・・すごい・・・」

「この短期間でスキル変化バーストアーツまで修得しちゃったね」

「あの連撃はお姉ちゃんでも無理ね(´・ω・´)」

「ネプギアだけ!! ずるい!! バーストアーツしたい!!」

ネプギアの華麗なる剣舞を見て各々に思っていたことを言っていた。
た。

「お久しぶりですね!! グリーンディスク!!」

「我がこうして揃うのも随分と久しいな!!」

「無事でよかったです!!」

今ここには四ヶ国のゲームキャラが終結したのである。

「どうやら、急ぐ必要があるみたいですね!! わたしの力を彼女に受け
取ってもらいましょう!!」

グリーンディスクがネプギアに力を授けようとした時、

「こうなったら、奥の手だ!!」

アナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダは懐から黒
いディスクを取り出すと黒い何かがリンダとワレチューに入って行
き、

「これなら、暴力黒髪ポニーテール侍どもなんて簡単にやれるぜ!!」

「コンパちゃんく、プルルートちゃんく!!」

龍姫達「どうやらあちらさんはもう手遅れだね(´・ω・´)」

魔物化してしまったのだが、龍姫達は呆れて物が言えなかったのは
言うまでもなかった。

壮麗なる!! 天使の歌声!! ホーリーソング!!

魔物化したリンダとワレチューと戦っていた龍姫達はと言うと、鳴流神家・獅子神家・御子神家・神楽堂家以外のメンバーは苦戦を強いられていた。

「このままじゃ!! 持たないです!!」

「コンパちゃん」

「こつち来ないでくださいですう!!」

「喰らいやがれ!! 暴力黒髪ポニーテール侍!!」

「掌底はこうするんだよ!! 烈破掌!!」

「ギャー!!」

そんな時だった、

「ボクの歌を聴けえ!!」

「頼もしい、援軍だわ、一曲聴かして貰ってもいいかしら」

「こんな状況で歌ってやがるぜ!! ギャハハハ(*^▽^*) . . . あれ?」

「仕方ない、ボクもご一緒にいいかな?」

「デュエットは大歓迎だよ!!」

「特別なく☒ 気持ちになれる人☒ 出会い別れ☒ の中 探し続けて☒」

「暴力黒髪ポニーテール侍まで歌ってんじやねえ」

「壮麗なる、天使の歌声!! ホーリーソング!!」

「あれ? さつき蹴られたとこ痛くない!!」

「それに、なんだか力が漲って来ました!!」

「チュー!! 元に戻ってるチュー!!」

「ここは一旦退くぞ!!」

あのリーンボックスの青い髪之歌姫が戦闘真っ只中に駆けつけて、歌を一曲歌いだしたので、龍姫と一緒に歌いながらホーリーソングを発動させて、魔物化したリンダとワレチューを元の姿戻し、味方の傷を癒しながら、物理攻撃力を上げた。

リンダとワレチューは一目散にグリーンディスクを置いて逃げて

いった。

「ありがとうございます!! ってどうして逃げるんですか!!」

「ボク、歌ってる時は平気なんだけど、歌い終わると、人見知りになるんだよ!!」

「あのく彼女に力を渡してもよろしいですか?」

「すみませんでした!! お願いします!!」

こっちの次元のゲームギョウ界の5pbはあいかわらず人見知りが酷かったのであった。

グリーンディスクはネプギアに力を授けたのであった。

龍姫達はアンダーインヴァースを出て教会に戻るのであった。

スキット：ホーリーソング

ギア「龍姫さんも歌が上手なんですネ」

龍姫「そうかな、気にしてないからね」

5pb「そんな事ないよ、今度はステージでデュエットしてみたいな」

コンパ「龍姫ちゃんが5pbちゃんと一緒に歌ったらなんか力が漲ってきたですう」

龍姫「あれは補助魔法の一種で詠唱が歌うことなんだよ!! あの曲は適当だったけど」

勇龍「なるほどね、だから一緒に歌ったのね!!」

「ゲームキャラの動向を許可します!!」

「ありがとうございます!!」

教会に戻ってきた龍姫達は教祖のチカにグリーンディスクの同行の許可をもらっていた。

すると、

「ボクも一緒に女神様を助けに行く!! そしていろんな人にボクの歌を聴いて欲しいから」

「あなた!! 仕方ないわ、チカ、わたしも一緒にこの子たちについて行くわ!!」

「そうね!! 一刻も早くベールお姉さまを救出してきなさい!!」

「よろしく、ケイブ・5pb!!」

「いちいちお願いするわ!!」

5pbが龍姫達に同行したいと名乗り出てきたのである。

それを見たケイブは一緒に行くと龍姫達に同行を申し出てくれたので、龍姫達は喜んで同行を認めた。

この後、教祖チカが主催のライブがあると言うので龍姫達はライブ会場に乗り込むのであった。

案の定・・・

龍姫達はリーンボックスのライブ会場に乗り込んでいたのである。理由はチカが主催のライブに招待されたからである。

間もなくライブが始まるとしていた。そして、

「みんな!! ボクの歌を聴けえ〜!!」

「5pbちゃん〜!!」

ライブがスタートしたのであった。

もちろん龍姫達は5pb. が用意してくれた席についていた。その席は女神などの著名人などが座るVIP席である。

「龍姫達はライブには来たことあるの?」

「二回かな、一般席で観賞してたけど(本当はあっちの次元のゲームギョウ界のライブに出演したんだけど)」

アイエフは龍姫達にライブ会場に来たことがあるか聞いたら、龍姫達は本当のことを伏せて二回と答えた。

そんな時だったそろそろ5pb. が歌い終わるとした瞬間、

「龍姫さん達はどこ行くんですか?」

「ちよつと、トイレに行つてくるね!!」

「早くしなさいよ!!」

「なるべく早く帰つて来るわよ!!」

「(本当は何か、起きそうだからなんだけどね)」

龍姫達は席を立ちネプギアがどこに行くか聞いたら、トイレに行つてくると答えて、いつでもステージに何があつてもいいようにステージ裏に行き、

「着替え、完了!! デバイスのリライズ機能使うと今の体型のサイズの制服に着替えられるから良かった」

「だってあのチカお姉ちゃんだもんね!! 絶対、観客が男の人が大勢いるこの状況でも問答無用で男性アイドルを出演させるはずだもんね!!」

「どうするの?うずめまで来ちゃったけど?」

「忘れてた!! 女神だってことは内緒にしなきゃいけないんだった!!」

「大丈夫だよ!! うず姉、歌うと声は女の子なんだし!!」

「そうだったなって、龍音!!」

「許して〜うず姉〜」

「あたしく歌えるかな〜」

「大丈夫だよ!! プルルート、別に歌うわけじゃないんだよ!! あくまでネプギアの性格ならボクと一緒に「ほっとけない病」の末期発症者だと持つてるから」

「うん、この別次元とはいえネプギアであるわたしがいるんだよ!!」

龍姫達はチカが観客が5pb. 目当てのこの状況で男性アイドルを投入すると情報をたまたま、このライブ会場に来た時に知ったので、ツクヨミからもらった次元デバイスのリライブ機能で前にライブに出演した時に着ていた制服に着替えたのだ。

もちろん大きくなった胸が目立たなくなるようになっていたのである。

なぜか、美龍飛はイヌ耳のお姫様の歌姫コスチュームになっていた。

今回は全員にインカムを装備されていた。

ついにその時が来たのだ。

「ふぎけんな!! 5pb. ちゃん出せ!!」

「どうしよう〜!! あわわ!! ぐ(*ム*ぐ三ノ*ム*)ノ あわわ!!」

「どこ行ったのよ!! 龍姫達は、こんな時に!!」

「こうなったら、龍姫さんみたいに、腹を括って来ます!!」

「ネプギア!! 待ちなさい!!」

「ネプギアちゃん〜 待って・・・」

案の定、龍姫達が予想した通り、観客が男性が多数占めているこの状況にチカが男性アイドルを投入してしまい、観客からブーイングの嵐が起こってしまったので、ネプギア達は無我夢中でステージに上がってしまったのである。

「どうしよう〜!! 何も考えてなかったよ〜あわわ!! ぐ(*ム*ぐ

三ノ*五*ノ あわわ!!」

と白紙の状態だったのだ。

すると、

「誰かに捧ぐ命なら〜☒ 自分の境界も越えて〜☒」

どっからとなく音楽が流れてきたのだ。

そして

「龍姫さん!!Σ(。D。)」

「何してるんですか?」

「そんなことは後にしてこの状況を打破しないとね!!」

「おお〜!! 誰だ!! あの黒髪猫耳ツインテールの制服を着た女の子は」

「こんばんは〜今日はライブに来てくれてありがとう!! 女神様の協力者の鳴流神龍姫で〜す!!」

「龍姫ちゃん〜!!」

「5pb.の助っ人で来ました!! 真龍姫と龍愛翔です〜!!」

「おお〜!! 双子の歌姫最高!!」

「同じく、5pbちゃんの助っ人の 獅子神勇龍よ!! 今、楽にしてあげるわ!!」

「勇龍様!! 楽にしてください!!」

「みんな!! 女神様を信仰してくれるかな?」

「いいとも!!」

そんなこんなで龍姫達の助太刀のおかげで無事、ライブは成功に終わったのであった。

もちろん、美龍飛はあの格好で一曲披露して幕を閉じたのであった。

漸毅狼影陣!!

チカが主催したライブは小さなアクシデントに見舞われたが制服と犬姫のコスチュームに身を包んだ龍姫達の活躍で事なきを得たのであった。

「大成功だったわ!!」

「おまえの所為で危うく暴動が起きかけただろうが!! <(´・`・´)>」

「まあまあ、落ち着いてよ!! 二人とも!!」

チカの所為で危うく暴動が起きたのは言うまでなかった。

「必ず!! ベールお姉さまを助けなさい!!」

「はい!!」

こうしてリーンボックスのゲームキャラ騒動に終止符を打ったのであった。

教会を後にした龍姫達がプラネテューヌ教会に帰ろうとした時だった、ネプギアのNギアが鳴ったのだ!!

「すいません!! ネプギアさん!! 今どこにいますか?」

「ちようど、これからプラネテューヌに帰ろうとしていた所ですけど」

「実はプラネテューヌの南西に位置する島で犯罪組織が占拠していると報告がありましたので、そちらに向かっていただけかもしれませんよ?」

「行こう!! その島に!!」

「そうですね!!」

なんとプラネテューヌの南西に位置する島でマジエコンヌが拠点を築こうとしていたのだ。

龍姫達はすぐさまその島に向かうのであった。

「確か、此処に小さな町があるって言ってたけど?」

「このまま道なりに進んでいけばいいはずよ!!」

龍姫達はイストワールが言っていた島に上陸していた。

しばらく進んでいくと、

「家が見えてきたよ!!」

「あそこにいるのファルコムさんだよ!!」

小さな町が見えてきたのだ、その前にいたファルコムに龍姫達は近づいて行った。

「ネプギアに、龍姫達、久しぶりだね!! しばらく見ない間に随分と大所帯になったじゃないか。それでネプギアと龍姫達はどのようにここに」

「実はここに犯罪組織が拠点を築こうとしてると、いーすんから聞いて来たんだよ!! 此処ってファルコムの故郷なんだよね?」

「そうなんだよ!! たまたま里帰りをしたら犯罪組織が急に町を占拠しようとしてきてね。ネプギアと龍姫達が来てくれるとは思わなかったよ!! わたし一人じゃ町を守るのが精一杯だから、ノーコネデイションって言うダンジョンに犯罪組織が拠点にしてるから」

「わかったよ、ファルコム!! そのお願い 夜空に瞬く凛々の明星が引き受けるよ!!」

「流石、噂には聞いてたけど、あらゆる武術に精通した集団がいるって聞いたど、まさか、龍姫達がその「凛々の明星」の一員だったんだね!! お願いするよ!!」

龍姫達はファルコムにノーコネデイションにいる犯罪組織を潰してきてくれと依頼されたので快く引き受けた。

龍姫達はノーコネデイションに向かうのであった。

スキット：ライブ2

ギア「ありがとうございます!!」

龍姫「どうしたの急に?」

ユニ「ライブでアタシたちがステージでオロオロして時に助太刀してくれたじゃないですか」

美龍飛「困った時はお互い様だよ!!」

ロム「美龍飛ちゃんの・・・衣裳・・・可愛かった!!」

ラム「ぶく、双子はわたしとロムちゃんの専売特許なのにく」

真龍姫「いつから専売特許になったの・・・」

「魔神剣!!」

龍姫達はノーコネデイションに潜入して魔物を倒しながら奥へ進んでいったのだ。

最深部に到着した龍姫達はアナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダを発見したので、突入の機会をうかがっていた。

「あく!! イライラする!! あんな小さい町一つ潰すのに何日掛かってやがる!! セっかく現場の指揮任されたってのに使えない部下ばかりでイライラしてくるぜ・・・」

どうやら、ファルコムに邪魔されて町が落とせないことに苛立ちを隠せないでいたのだある。

「へえ〜。今回は現場監督してんるんだな!! 自分が出来ねえこと、他人に押し付けてんじゃねえよ!!」

「な!! 黒髪ポニーテール侍ども!! また邪魔しに来やがったか!!」
「いい加減にしてよね!! あなたの顔見飽きたわよ!!」

「ワン!!」

「現場指揮つてことは出世されたんですか? おめでとうございませす!! でもそれだともう下っ端つて呼ばないですう」

「それはすごく困るよ!! なんて呼べいいのかわからないじゃん!!」

「インカローズかザギまたはバルバトスつて読んでやればいいんじゃないかねえ!!」

「そうだね!! 部下にザギ係長つて呼ばれるんだ!!」

「ザギ係長・・・」

「テメエら!! 相変わらずの減らず口を叩きやがって!! いつまでも調子になってんじゃねえぞ!! 出ろ!! リユウオウ!! こいつらをぶっ潰せ!!」

「何このデジャヴ」

龍姫達に馬鹿にされた上に、アナゴ族の称号を付けられて、自棄を起こしたリンダは懐からディスクを取り出し放り投げたのだ。

中からリユウオウが出てきたのであった。

「どうだ!! 暴力侍ども!!」

リンダはこの時、龍姫達がリンダに秘奥義を見せていないことに気づいていなかったのだ。

「どんな相手でも負けるわけにはいかないよ!!」

リユウオウが凛々の明星の相手にならないことを思い知らされる

のである。

龍姫達は一斉に得物を構え、戦闘形態に入った。

「火属性の技だね!!」

「水属性が弱点だね」

「水属性って何?」

「話は後にしてあげる!! 狂気と強欲の水流、旋嵐の如く逆巻け!!」

「タイダルウェーブ!!」

「ぎゃやく!!」

「スゴイ・・・龍姫お姉ちゃん・・・魔法で・・・渦巻き・・・で攻撃してる」

「わたしもあの魔法!! やってみたい」

「ラム、まだ無理や!!」

龍姫達はリュウオウの攻撃を捌きながら観察していき、龍姫が巨大渦巻で攻撃するゲームギョウ界に存在しない水属性最強の通称「洗濯機」の別名を持つ上級魔術「タイダルウェーブ」を修得していたスキル「スピードスペル」で詠唱を唱えるだけで即座に発動して見せたのだ。

タイダルウェーブを見たロムとラムは修得に燃えていた。

リンダが巻き添えを喰らっていたのは言うまでもない。

「ネプギア!! その目に焼き付けてね!! 飛ばして行きますか!!」

「あれ? わたしのオーバーリミッツと色が違います」

「龍姫はオーバーリミッツLv. 3を発動させたのよ!!」

「何それ!! オーバーリミッツは何段階あるのよ!!」

「全部で4段階だよ!! けど秘奥義を発動させるにはLv. 3以上じゃないと無理なんだよ!!」

龍姫はネプギアに秘奥義を教えるためオーバーリミッツLv. 3を発動させて、橙色の闘気を身に纏った。

それを見たネプギアはまだ龍姫達の実力に追いついていないことを思い知らされたのだ。

アイエフはオーバーリミッツが全部で四段階あることを思い知った。

「手始め!! 散沙雨!!」

特技の中で最も連続で攻撃する特技「散沙雨」から入り、

「秋沙雨!!」

連続で突いた後、斬り上げる秘技「秋沙雨」に繋げ、

「霧沙雨!!」

あの散沙雨と秋沙雨の複合奥義「霧沙雨」に繋げ、

「水を立ち昇れ!! 天狼滅牙・水蓮!!」

刀を地面に突き刺し水柱で周囲を攻撃するバーストアーツ「天狼滅

牙・水蓮」に繋げ、

そして、あの「黒衣の断罪者」の

「お終いにしようよ!! 閃け!! 鮮烈なる刃!! 無辺の闇を鋭く切り

裂き!! 仇名す者を微塵に砕く!! 決まった!! 漸毅狼影陣!!」

「スゴイ!! 龍姫さん!! 女神じゃないのにあんなにも早く、切り刻

むなんて」

「あんなの、お姉ちゃんの「インフィニットスラッシュ」の非じゃない
ないわ!! もしかしたらお姉ちゃんより剣術の腕は上なんじゃ!!」

敵を軸に狼の如く陣を描きながら四方八方から切り刻み最後は背

後から切り抜ける秘奥義「漸毅狼影陣」を繰り出した。

漸毅狼影陣を食らったリウオウは光になって消えて逝き、こつち
の次元のゲームギョウ界のネプギアは龍姫達が別次元のゲームギョ
ウ界のプラネテューヌの紫龍女神パープルドラゴンハートであるこ
とは知らないので女神でもない人間状態であんなに早く切り刻むの
を見て驚きを隠せないでいた。

ユニは姉ノワールのエグゼドライブ「インフィニットスラッシュ」
の非じゃないと言って呆然としていた。

「さようなら!!」

龍姫は決め台詞を言っていた。

「あれ? アナゴ族は?」

「どうやら、戦ってる間に逃げたみたいね」

アナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダは龍姫達が
戦っている間に逃亡したのであった。

「取り敢えず、ファルコムに報告しよ!!」

龍姫達はノーコネディションを後にしてファルコムに報告するのであった。

「ファルコム!! 犯罪組織を仕切ってたのボクたちのストーリーカーだったよ」

「まあ、あの下つ端はしつこいからね、ネプギアと龍姫達はこれからどうするの?」

「一旦、プラネテューヌ教会に戻るつもりだよ!!」

「そうか、あたしもまた旅について行きたいところだけど、今回の犯罪組織の傷痕の後始末を手伝わないといけないからね」

「そうだよね!! 復興頑張つてね!!」

龍姫達は犯罪組織を追い出したことをファルコムに報告して、ファルコムは故郷の街の復興の手伝いをすると言って、龍姫達はプラネテューヌ教会に戻るのであった。

白の大地 九割

あの「黒衣の断罪者」の第一秘奥義「漸毅狼影陣」でリュウオウに引導を渡した龍姫はパーティーに合流してプラネテューヌ教会に戻っていたのであった。

スキット：漸毅狼影陣

ギア「あれが秘奥義なんですか!!」

ユニ「あの速さ、女神化したお姉ちゃんより早かったですよ!!」

ケイブ「そうね、例えるなら、狼ね」

ロム「龍姫お姉ちゃん・・・は・・・龍の方が・・・じっくりくる」

龍姫「あの秘奥義、実は勇龍も修得してるんだよ!!」

ギア「そうだったんですか!!」

「ただいま!! いーすんさん!!」

「お帰りなさい、ネプギアさん、女神義勇「凛々の明星」のみなさんも」
「何とか、四ヶ国のゲームキャラに協力してもらいました」

ネプギアはイストワールに四ヶ国のゲームキャラに力を貸してもらったことを報告していた。

「ここでライブしたら何人入るんだろう?」

「キョロキョロするなにゆ、田舎もん丸出しだにゆ」

5pb. は教会の内装を見て思っていたことを言い、ぷち子ことブロッコリーは5pb. を注意してしていた。

「あとは敵の根城に乗り込むだけだな!!」

「はい、あとは転送装置と新しいシエアクリスタルを作ってる最中です。それが終わったら完了です」

「いよいよ、マジエコンヌ四天王のお出ましね!! 早く戦いたいわね!!」

「お姉ちゃん・・・お願いだからその戦闘狂を抑えて」

「どうやらギョウカイ墓場に幽閉されている女神様を救出するための準備が行われていた。」

勇龍はマジエコンヌ四天王と戦いたいらしく気持ちが高揚していた。

龍華は抑えてくれと言っていた。

そんな時だった急に

「ロム!! ラム!!」

「どうしたんや!!」

「大変よ!! ルウイーのシエアが9割持ってかれたらしいわ!!」

「取り敢えず、気休めしかならないけど、命を照らす光よ!! 此処に来たれ!! ハートレスサークル!!」

「ありがとう・・・星龍お姉ちゃん・・・大丈夫」

ロムとラムがその場にへ垂れこんでしまったのだ。すぐさま星龍が治癒術「ハートレスサークル」を発動させて二人の体力を回復させた。

「ルウイーに行くしかないね!!」

「そうだね、早く終わらせてギョウカイ墓場に乗り込もう!!」

こうして龍姫達は再びルウイーに向かうのであった。

「そういや、芽龍達は大丈夫なの?」

「大丈夫よ、わたしはあっちの次元のゲームギョウ界のルウイーのシエアで変身するから」

「わかったよ」

その道中、真龍姫が芽龍に大丈夫か聞いたら、自分はあるもののゲームギョウ界のシエアで行けると念話で返していた。

「みなさん、それにロム、ラム」

「取り敢えず、この二人を休ませないと」

「では、こちらへ」

「あなたの方が大丈夫なの!! 仕方ないわね!! これで良しと」

「何をなさってるんですか!!」

「取り敢えず、仮眠室はどこ?」

「それでしたらこちらです」

ルウイー教会に到着した龍姫達はロムとラムを休ませるため二人の部屋に案内してもらおうとしたら、寝不足だったらしくミナが倒れそうになり、勇龍がお姫様抱っこして仮眠室に向かうのであった。

「さてと、ルウイーの町に偵察しに行こうか」

「取り敢えず、今度も二手に別れた方がいいな」

「こんだけの人数だもんね!!」

「ネプギアと美龍飛達が町に偵察、ボクたちが教会でお留守番でいいかな?」

「わかりました!! それじゃあ!! 町に偵察に行つてきます!!」

ルウィーのシエアを九割持つて行つた犯人を捜すため龍姫達は二班に別けたのだ。

ネプギアと美龍飛達が町に偵察で、龍姫達は教会で留守番をするこ
とになったのだ。

「あそこにいるのワレチューだよ!!」

「マジコンはいらんかね」

「マジコンを配ってるの」

「あとをつけるよ!!」

町に偵察に行つていたネプギアと美龍飛達はマジコンの宣伝をし
ているワレチューを発見したのだ。

ワレチューに気づかれないように尾行することにした。

「ちよつとアンタ!!」

「チュー!! 逃げるチュ!!」

「待ちなさい!!」

「アイさんは諜報部なんだろうか(´・ω・｀)」

路地裏に入ったワレチューをアイエフが尋問しようとしたら、一目
散に逃げられてしまい、龍音は呆れて物が言えなかった。

「観念するです!!」

「いくら、コンパちゃんの頼みでも嫌だチュ」

ワレチューを追いかけていたらアイリス草原まで来てしまい、ワレ
チューを何とか追い詰めたのだが、ワレチューが戦闘態勢に入つてし
まったのでネプギアと美龍飛達は各々に得物を構えたのだ。

「喰らうでチュよ!! ワレテツカー!!」

「キヤー!!」

「みんな!! 龍音はワレチューをお願い!! 白き天の使い達よ、その

微笑みを我らに ナース!!」

「わかったよ、美龍飛姉!!」

「ありがとう!! 美龍飛ちゃん」

ワレチューが雷を落とすエグゼドライブ「ワレテツカー」を繰り出してきた。

美龍飛達は大丈夫だったが、ネプギア達はかなり効いたようで、美龍飛は龍音にワレチューを任せて、治療術「ナース」を発動させて傷を癒したのだ。

「チュー!! こっちに來ないでほしいでチュー!!」

「そうも、いかないんだよ!! 月閃光!!」

「チュー!!」

「白状してくれるかな? (*^_^*)」

龍音は逃げ惑うワレチューに月の軌跡を描くあの客員劍士の特技「月閃光」を叩き込んでワレチューを捕まえたのだ。

ワレチューはあるお方にマジコンをルウイーで配るよう言われていたこと聞いたネプギア達はこれが罠だと気づいたのであった。

ロリコン参上

美龍飛達がワレチューを捕まえていた頃、龍姫達は教会の白の姉妹の自室でロムとラムの看病をしていた。

その時

「あのクソガキ女神はワレチューを追いかけてるころだな」

「早くしろ!! ロムちゃんとラムちゃんに会わせろ!!」

「何してるのかな〜(´・`・´)」

「なんで暴力侍どもがいるんだよ!!」

あのアナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダがマジエコンヌ四天王が一人トリックを連れて不法侵入してきたのだ。

龍姫達がいることを計算に入れていなかったたので、ロムとラムがいる部屋で鉢合わせしていた。

「ワレチューを囮にしてたんだらうけど」

「おまえらみたいなの熟女には興味はない!! 二桁は俺の好みじゃない!!」

「誰が熟女だって(´・`・´)ポキポキ」

トリックの守備範囲の狭さに龍姫達は呆れて物が言えなかった挙句、芽龍が笑顔でマジ切れしていた。

「何!! 怒らせてるんですか!! トリック様!! あいつらは素手もやれるんですから!!」

「おい!! あれを出せ!!」

リンダはトリックを注意していたのだが、お構いなしにトリックはリンダにあるものを出せと指示をだしたのだが、

「わかりました・・・あれ?」

「お探し物はこれかしら?」

「ワン!!」

「返しやがれ!! そのクリスタル!!」

「勇龍!! 多分、女神を洗脳するクリスタルだよ!! 壊して!!」

「わかったわ!!」

「おのれ!! 熟女ども!!」

龍姫達と言い争っている間にラピードがリンダからクリスタルを掠め取り、星龍は勇龍に女神を洗脳するためのものと教えて壊すに言い、勇龍は床にクリスタルを叩き付けて壊したのだ。

クリスタルを壊されたトリックはキレていた。

「トリック様!! 此処は逃げましょう!!」

「仕方ない、命拾いしたな、今度会う時はタダでは済まさん!!」

「何しに来たんだろう?」

「多分、この二人を洗脳して、町を破壊しようとしたんじゃないかな」
リンダは龍姫達が自分たちより実力が上であることを知っていたので、トリックは捨て台詞を言って帰って行った。

「どうやら、ワレチューを囮にしてロムとラムをクリスタルで洗脳しよとしていたようだったらしいのであった。」

「龍姫さん!!」

「ロムちゃんとラムちゃんは大丈夫ですか?」

「見ての通り、二人ともぐっすり寝てるよ!!」

「マジエコンヌ四天王のトリックが来たけど、わたし達がクリスタルを壊したら何もせずに帰って行ったよ!!」

「そうだったの!!」

「取り敢えず、この二人の回復を待ってから敵さんの根城に乗り込むとしますか!!」

トリックたちが帰って行った頃、ワレチューを追って行ったネプギアと美龍飛達が教会に戻ってきたので龍姫達はこのことであることを説明して、ロムとラムが回復を待ってから女神達が幽閉されているギョウカイ墓場に乗り込むことにしたのであった。

間違った正義!!

ルウイーでアナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダとマジエコンヌ四天王のトリック・ザ・ハードによってもたらされた危機は回避されて龍姫達はロムとラムが回復したので、プラネテューヌ教会に戻るのであった。

「ただいま、いーすんさん!!」

「ルウイーのシエアを奪っていたのは、やはり」

「マジエコンヌ四天王のトリックって言ってたよ!!」

「そうでしたか」

「今度会ったら、美札に教わった魔法で消し炭にしてやるんだから!!」

「ラムちゃん・・・教わったんじゃないくて・・・共鳴だよ!!」

龍姫達はルウイーのシエアをトリックたちが仕組んだことを報告して、ラムがトリックを魔法で消し炭にすると宣言していた。

そんな時だった、ユニのNギアが鳴ってのだ。ユニが応答すると、

「ユニ!! 今どこにいるんだ!!」

「どうしたの? ケイ、そんなに慌てて」

「マジエコンヌ四天王を名乗る人物がラスティションに宣戦布告してきたんだ!!」

「わかったわ、ラスティションに戻るわ!!」

「ボクたちも一緒に行くよ!!」

ケイからマジエコンヌ四天王を名乗る人物がラスティションに宣戦布告してきたのだ。

龍姫達は直ぐにラスティションに向かうのであった。

「ケイ!!」

「実は、ユニを指定してきたんだ!! 場所はゾーンオブエンドレスだ!!」

「わかったわ、アタシ、行ってくる!!」

「わたしも一緒に行くよ!! ユニちゃん!!」

「美龍飛、二人に気づかれないうように後を付けて行ってあげて」

「龍華、あなたも行きなさい!!」

美龍飛&龍華「わかった(わ)、お姉ちゃん!!」

龍姫達はラストテイション教会でケイからマジエコンヌ四天王がユニを指定してきたのでネプギアも一緒に行くと言って指定された場所である、ゾーンオブエンドレスに向かった。

真龍姫と勇龍は美龍飛と龍華に二人に気づかれぬようにゾーンオブエンドレスに行くように指示を念話で出し、二人はゾーンオブエンドレスに向かった。

「来てあげたわよ!!」

「おまえが黒の女神候補生か？ 俺の名は、ブレイブ・ザ・ハード」

「ラストテイションに宣戦布告してどうするつもりなの？」

「黒の候補生よ、戦う前にお前たちに聞きたいことがある」

「なんですか？」

「何故、我らマジエコンヌの統治を受け入れようとしぬい？ マジエコンヌの統治ならば誰もが等しくゲームを楽しむことが出来るというのに」

「お断りよ!! お姉ちゃん達をギョウカイ墓場に幽閉して、何が、誰もが等しくゲームを楽しむですって!! 寝言は寝てから言ってよね!!」

「わたしもユニちゃんに賛同します!!」

「そうか、抗うか、ならばもう一つお前たちに問おう、ゲームを手に入れない子供たちはどうなる？ お前たちは無償でそのような子供たちに手を差し伸べられるのか？」

「それは、」

「その戸惑いが貴様の答えと見た、それが女神の統治ではどうにもならない物だ、女神は国を発展させるがゆえにそういった貧困には目をつぶってきたのだからな!!」

ゾーンオブエンドレスに到着したネプギアとユニはそこに待っていたマジエコンヌ四天王のブレイブ・ザ・ハードに貧民層の子供たちがゲームを楽しめないのは女神に非があるとユニに言った。

「確かに、そうかもしれない!! だからと言って、お姉ちゃん達をギョウカイ墓場に幽閉するのは間違っています!!」

「アンタ・・・」

「いいだろう、思いだけでどうにもならないことをその身に刻んでやる!!」

「行くよ!! ユニちゃん!!」

「わかったわ!! アクセス!!」

その問いにネプギアが反論したのだ。

ネプギアに反論されたブレイブ・ザ・ハードは得物である両刃の大剣を構えた。

二人は女神化して、得物を構えたのである。

こうしてブレイブ・ザ・ハードとの戦いの火蓋が切つて落とされたのだ。

決意の前夜

ブレイブ・ザ・ハードとの戦いの火蓋が切って落とされたのである。ネプギアとユニは女神化して、ブレイブ・ザ・ハードと戦っていた。ネプギアの得物は龍姫から譲り受けた名刀「三池典太」なのだが、女神化すると刀身が淡い紫色になっており、ユニは龍華から譲り受けた両利き用の片手でトリガーを引くことが出来るライフルで応戦していた。

「龍姫さん直伝!! 魔神連牙斬!!」

「なんだ!! この斬撃は!!」

「アタシも!! マルチブラスト!!」

「効かぬ!!」

ネプギアは龍姫に時間が空いてる時に武術を習っていた時に、龍姫が以前アンダーインヴァースでリンダとワレチューに放っていた時と美龍飛とリアルオーバーで共鳴してる間に修得した、魔皇刃よりは威力はないが、連射に優れている斬撃を放つ奥義「魔神連牙斬」を、ユニは自身の修得していた技で応戦していた。

「見事だ!! これならどうだ!!」

ブレイブ・ザ・ハードは得物である大剣に炎を纏わせて攻撃して来たのだ。

「く!!」

「やるわね!! 流石わ!! マジエコンヌ又四天王ね!!」

「まだ、抗うか、面白い!! 受けて立とう!!」

「しまった!! 銃が!!」

何とかかわした二人はブレイブ・ザ・ハードを評価して、ブレイブ・ザ・ハードはさらに大剣で攻撃してきた。

不意を突かれてしまったユニは得物であるライフルを弾き飛ばされてしまつて、丸腰になってしまったのだ。

「ユニちゃん!! 間に合わない!!」

「お姉ちゃん・・・」

「さらばだ!! 黒の候補生よ!!」

ネプギアが助けに入るとしたが、出遅れてしまい、ブレイブ・ザ・ハードはユニに向かつて大剣を振り下ろしてきたのだ。

ユニが死を覚悟した時だった、

「ユニは、死なせない!!」

「大丈夫、ユニちゃん!! 今、治すね!! 聖なる活力此処へ、ファーストエイド!!」

「おまえらは誰だ!!?」

「名前を聞く時は自分から名乗るのが筋よ!!」

「そうだったな、マジエコンヌ四天王が一人、ブレイブ・ザ・ハード!!」
「アタシは女神義勇「凛々の明星」の獅子神龍華!! またの名をアスラ!!」

「同じく、女神義勇「凛々の明星」の鳴流神美龍飛!! またの名は霸王です!!」

「ありがとう、龍華に美龍飛」

「どうして、此処に来たの?」

「話は後にしてくれる!!」

なんと二人を尾行していた美龍飛と龍華が助けに来てくれたのである。

龍華は間一髪、星龍が打ってくれた軽いて丈夫な斬馬刀でブレイブ・ザ・ハードの大剣を受け止めて、美龍飛がユニの傷を癒すため治療術「ファーストエイド」で癒した。

ブレイブ・ザ・ハードは二人に名を名乗れと言ったが、龍華に人名を時は自分が先に名乗れと言って、ブレイブ・ザ・ハードは名乗り、二人も名乗った。

ネプギアは二人がどうしてここにいるのか聞いたただそうしたら、龍華が話は後にして欲しいと言い戦闘を再開した。

「アンタの魔王炎撃波は、魔王炎撃波じゃないわ!!」

「あの技はブレイブソードだ!!」

「見せてあげる!! アタシの魔王炎撃波を!! これが本物の魔王炎撃波!!」

「わたしも!! 魔王炎撃波!!」

さつきネプギア達に放った技はブレイブソードだとブレイブ・ザ・ハードは龍華に否定され、刀身に炎を纏わせて薙ぎ払う秘技「魔王炎撃波」を美龍飛と一緒に繰り出した。

「見事だ!! 読みが甘かったようだ!! 今日この所はこれで勘弁してやろう、また会うのが楽しみだ!!」

二人の魔王炎撃波を食らったブレイブ・ザ・ハードは獅子を象ったボディーに大きな亀裂が入っていた。

また会うのが楽しみにしていると云ってブレイブ・ザ・ハードはテレポートした。

「美龍飛ちゃん!! ありがとう!! どうしてここに?」

「お姉ちゃん達がなんかあったら二人に助太刀するように後を付けてたんだ、ごめん」

「何、謝ってるのよ!!」

「そうだよ!! そのおかげでユニちゃんが助かったんだよ」

「はい、龍華ちゃんから貸してもらった銃!!」

「ありがとう、美龍飛!!」

「その銃、アンタにあげるわ!!」

「いいの!! もらっても!!」

「アタシにはこの星龍お姉ちゃんが打ってくれたこの斬馬刀があるから」

「ありがとう、龍華!!」

「早く、みんなの所に帰ろう!!」

ネプギア達は美龍飛達にお礼を言って、美龍飛達は姉達に後をつけるように言われたことを暴露して謝罪した。

二人は気にしていないと答えて、龍華はユニに愛用していた両利き用で片手で引き金が引けるライフルをあげることにした。

ユニは龍華にお礼を言って教会に戻るのであった。

「ただいま!! いーすんさん!!」

「待っていましたよ!!」

「明日、ギョウカイ墓場に戻り込むことになったよ!!」

「はい、いよいよお姉ちゃん達を助けられるんだ!!」

「今日はゆっくり休んでほしい」

プラネテューヌ教会に戻ってきた美龍飛達は明日、ギョウカイ墓場
に乗り込んで幽閉されている女神達を救出することを告げられて、明
日に備えて休むことにした。

四ヶ国の教祖もプラネテューヌ教会に集結していた。

「ここなら、大丈夫かな」

龍姫は一人、プラネタワーの屋上に来ていた、そこに、

「龍姫さん、ご一緒にしてもいいですか？」

「いいよ」

どうやら、寝付けないのかネプギアがやって来て隣に座った。

「綺麗ですね!! そういえば、どうして龍姫さん達はわたし達を助け
てくれるんですか？」

「実はボク、困っている人見ると持病の「ほっとけない病」が発症し
ちゃうんだ!! ネプギアだってほっとけない病の末期発症者だよね
!!」

「龍姫さんには言われたくないです!!」

星を見ていたネプギアがどうして龍姫達が自分たちを助けてくれ
るにか聞いたらほっとけない病が発症すると答えた。

龍姫はネプギアもほっとけない病だよねと言いついたら、龍姫には
言われたくないと言いつ返されてしまった。

「絶対、女神達を救出しないとね!! ボクはもう寝るね!!」

「はい!! おやすみなさい龍姫さん!!」

龍姫とネプギアは明日の女神達救出作戦のため寝ることにしたの
であった。

狂気のギョウカイ墓場

今日は女神達を救出作戦決行の日である。

龍姫達はいつものように寝間着から私服であるジャージワンピースに七分丈の木綿のズボンに着替えるため、ツクヨミから次元デバイスのリライズ機能を使って着替えて、

「おはよう!!」

「おはようございます!! 龍姫さん!!」

「取り敢えず、朝ごはん食べに行こう!!」

龍姫達は朝食を食べることした。

そして、いよいよ女神達を救出するべくプラネテューヌ教会から転送装置にギョウカイ墓場へ乗り込むのであった。

「それじゃあ、お願いしましたよ!!」

「必ず、ノワールを連れて帰って来てくれ」

「お姉さまを必ず助けなさい!!」

「お願いします、ブラン様を」

「大丈夫です、龍姫さん達やみんながいれば絶対助けられます!! それじゃあ!! 行ってきます!!」

教会にある転送装置に乗り、龍姫達はギョウカイ墓場に乗り込んだのであった。

「ここがギョウカイ墓場なんだ」

「ここが敵の本拠地か、みんな気を引き締めて行こう!!」

全員「応!!」

教会の転送装置でマジエコンの本山のギョウカイ墓場に到着した龍姫達は辺りを見わして、女神達が幽閉されている場所に向かった。

しばらく進んで行くと、

「このままでは暇で死ぬ!! 暇死にする!! 貴様らが暴力侍どもと呼ば奴は剣と魔法と体術を使うと言ったな!! だが待てぬ!! お前らが相手をしろ!!」

「無理ですよ!! 相手になわけねえですって!! だから抑えてください

い!!」

「どうやら、あちらさんはある意味手遅れよ!!」

「そうだね☒(´・ω´・)」

「ジャツジ・ザ・ハード様のご機嫌取なんて到底無理っチュ!! 早く来てほしいチュー!!」

「呼んだ?」

「おせいよ!! 危うくアタイが肉片になるところだったんだからな!!」

「おまえがネプギアと龍姫か?」

アナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダとワレチューがマジエコンヌ四天王のジャツジ・ザ・ハードにやられかけている現場に遭遇した。

リンダは龍姫達に文句を言ってきたが、龍姫達は聞き流した。

「女神様達返してぶっ倒されるのと、ぶっ倒されて女神様を返すのと、どっちか選んでくれる?」

「俺はそんなことはどうでもいい!! 本気で来い!! でないと・・・上り詰められないからな!!」

「どうやら、無理みたいだぜ!! お姉ちゃん」

「そうみたいだね!! ネプギアは準備できてるよね?」

「もちろんです!! 変身!!」

龍姫はあのゲームの主人公「黒衣の断罪者」がヒロインを攫った騎士団長に向かって言いたあのセリフを女神様に置き換えてジャツジ・ザ・ハードに突き付けたら、ジャツジ・ザ・ハードはどうやらあの異端の殺し屋と同じく狂戦士化してしまい返答が出来ない状態に陥っていたのだ。

ネプギア達は一齐に女神化して、龍姫達も得物をかまえたのだが、「これが・・・(お姉ちゃんと一緒の色です)」

ネプギアのプロフェッサーユニットが濃い紫色になり、露出が多くなっていた。

「さあ!! 始めようぜ!! こんな戦いは久しぶりなんだからな!!」

「あなたを倒してお姉ちゃん達を返してもらいます!!」

こうして女神様を救出するためジャツジ・ザ・ハードとの戦いの火蓋が切って落とされた。

關・魔神王剣!!

龍姫達はギョウカイ墓場に幽閉されている女神様を救出するため、マジエコンヌ四天王のジャツジ・ザ・ハードと火花は散らしていた。

「鳳凰天駆!!」

「覚悟はできてる? デモンズランス!!」

「巻き起これ!! 春の嵐!! アリーヴェルデルチ!!」

ネプギアは鳳凰の鬨気を纏って特攻する奥義「鳳凰天駆」を、龍姫は闇の槍を魔術で作って敵に向かって投げ飛ばす闇魔術「デモンズランス」を、龍愛翔は桜吹雪で敵を攻撃する魔術「アリーヴェルデルチ」をそれぞれ繰り出した。

「効かねえって言ってるだろう!!」

攻撃を喰らっているジャツジ・ザ・ハードは装甲が壊れていることに気づくわけがなかった。

「ちよこまかとすんじやねえ!!」

「キヤー!!」

「ネプギア!!」

ジャツジ・ザ・ハードは得物であるハルバードで攻撃してきて、ネプギアが風圧で吹き飛ばされてしまった。

「ネプギア!! 聖なる恩恵を キュア!!」

「ありがとう、龍音ちゃん!!」

吹き飛ばされたネプギアの傷を癒すため龍音が治癒術「キュア」を発動させ、ネプギアの傷を癒したのだ。

その時だった

「何? この炎は!!」

「まさか!!」

ネプギアからいきなりあの時あっちの次元のゲームギョウ界のネプギアこと美龍飛が覚醒したのと同じ炎がネプギアを包み込むように現れた。

「今更、遅いんだよ!!」

「させるわけにはいかないのよ!! 絶風刃!!」

「いや!! 助けてお姉ちゃん!!」

「ネプギアちゃん!!」

そんなことお構いなしにジャツジ・ザ・ハードは攻撃を仕掛けて来たのだが、勇龍が愛刀のニバンボシを素早く十文字に振りその軌跡に沿って鎌鼬を放つ奥義「絶風刃」を放ち攻撃を止めた。

ネプギアはどうしていいかわからずもがき苦しんでいたその時、ネプギアの脳裏にある人物が映ったのだ。

「俺は滅びぬ!! 弱きものを導くこの意志がある限りな!!」

「この人、お姉ちゃんが女神化した性格と似てる!! そうだよ、女神は弱い人を導く存在だもん」

その人物は弱きものを導く意志を持った背の高い男でいかにも霸王の風格があるのであった。

薄れ行く意識の中でネプギアはその人物が姉が女神化した時と性格が似てると言い、国王と女神と言う違いさえあれど、弱い人を導く意志を持つと言うことだと自分に言い聞かせ、

「わたしは滅びない!! 弱い人を導く意志がある限り!!」

「どうやら、自分の眠ってる力に気が付いたんだな!!」

「けど、こちらさんを片付けないとね」

「上がって来た」

ネプギアは脳裏に映った人物と同じセリフを復唱した瞬間、包んでいた紫色の炎が落ち着きを取り戻した。

龍姫達はジャツジ・ザ・ハードが明後日の方向に行っているのを食い止めていたら、

「これがわたしなのか? …あれ? なんでわたしは声がお姉ちゃんみたいになってるんだ!! おまけに身長まで伸びてるんだ!! 胸まで大きくなってる」

「あれがががネプギアなの!! (。D。)ノ」

今のネプギアはと言うと、

身長が173cmまで伸びており、胸がこっちの次元のゲームギョウ界のボールより大きくなっており、プロフェッサーユニットが先ほどより黒みかかった紫色になっており露出が無くなっていた上に声が

姉が女神化した声と似ていた。

「さあ、始めようか」

「そうだ!! 俺はこれを待っていたんだ!!」

「遠慮はいらないな!! 飛ばして行くぞ!!」

「ボクたちは援護に入るとしますか」

霸王と化したネプギアはジャツジ・ザ・ハードとの決着をつけるためオーバリーミッツLv.3を発動させた。

龍姫達は女神化しないで援護に入った。

「なっ!! 俺の一撃を素手でしかも片手で!!」

「来ないならこつちから行く!! 虎牙破斬!!」

「俺の得物が!!」

「ネプギアちゃん・・・が・・・」

ジャツジ・ザ・ハードはハルバードでネプギアに攻撃を仕掛けたのだが、素手でそれも片手で受け止められたことに驚きを隠せないでいたら、ネプギアがジャツジ・ザ・ハードの得物であるハルバードを飛び上りながら斬り上げて、斬り下ろす特技「虎牙破斬」で一刀両断して退けた。

「喰らえ!! 真空破斬!!」

刀で真横に薙ぎ払って真空の刃で攻撃する特技「真空破斬」から入り、

「虎牙連斬!!」

飛び上りながら斬り上げ↓左右に薙ぎ払い↓斬り下ろす秘技「虎牙連斬」に繋げ、

「思刃金剛波!!」

刀身に力を溜めて切り刻む奥義「思刃金剛波」を放ち、

「壮麗なる流れ!! 光翔戦滅陣・蒼弾!!」

敵を水柱で攻撃した後、周囲に水玉を放出し、破裂させて攻撃するバーストアーツ「光翔戦滅陣・蒼弾」に繋げ、

「心得よ!! 我が剣は女神の刃!! 六道の悪行を浄滅せん!! 闢・魔

神王剣!! 成敗!!」

「この俺が消えると言うのかああ!!」

刀で敵を打ち上げて魔法陣に捉え、空中で一刀両断するあの黎明王の秘奥義「闘・魔神王剣」でジャツジ・ザ・ハードを成敗した。

ジャツジ・ザ・ハードは光になって消えて逝った。

「これが女神の剣だ!!」

ネプギアは決め台詞を言ったのであった。

外史世界での再会

霸王化したネプギアが闢・魔神王剣でジャツジ・ザ・ハードに引導を渡したのだ。

「マジかよ!! ジャツジ・ザ・ハード様が・・・報告だ!!」

「さてと、アイエフさん、お姉ちゃん達を」

「わかったわ、ついて来て」

ジャツジ・ザ・ハードが龍姫達に成敗されたのを見届けたアナゴ族もとい下っ端もといインカローズことリンダは逃げていった。

龍姫達はアイエフの案内で女神達が幽閉されている場所に行くことにした。

「ネプ子!! 助けるわ!!」

アイエフは懐からシエアクリスタルを取り出して幽閉されている女神達に向かって使った。

女神達に絡みついた黒いコードが消え、

「ネプギア・・・」

「お姉ちゃん!!」

「よかったな、ネプギア!!」

「お姉ちゃん・・・わたしのことわかるんだな」

「何言ってるのよ、例え姿が声が変わってもあなたの事はわかるものよ!!」

「姉妹なんだから!!」

「お姉ちゃんウワアア——。。(。旦。)。——ん

!!!!

「大きくなって変わらぬのね」

「これからはずっと一緒にいてくれるの?」

「もちろん、三年間あなたを一人にしてしまったことの償いだから」

感動の再会を果たしたこっちの次元のゲームギョウ界のネプギアは姉のネプテューヌとの身長差をもともせず泣きながら抱きついて、そのまま疲れて眠ってしまった。

「わたくしにはお迎えがないのですのね」

「チカさんが待っていますから、落ち込まないでください」

「それもそうですわね!! 待つてくれる人がいるだけでも良しとしましよう」

こっちの次元のゲームギョウ界のルールには妹がいなかったのので、一人落ち込んでいたので5pb. がチカが待つていると伝えて立ち直った。

「ねぶねぶとお話したいですう!!」

「コンパ、空気呼んだ方がいいよ」

「そうですね!! 龍姫ちゃん達はこれからどうするんです?」

「そうだね、マジエコン又四天王を何とかするまでは協力するよ」

「ここでやめたら義に反するからね!!」

「ありがとう、龍姫ちゃん達」

コンパは三年ぶりに親友のネプテューヌと話がしたかったのだが、龍姫に二人きりにしてあげてと言われて、コンパは龍姫達にこれからのことを聞いたらまだ協力すると答えた。

「そうだ!! 女神様の傷を癒さない!! 万物に宿りし生命の息吹を此処に、リザレクション!!」

「ありがとう」

「当然のことをしたまですよ」

勇龍があまり使わない魔術の一つで広範囲の対象の傷を癒す治癒術「リザレクション」を発動させて女神達の三年分の傷を癒した。

「帰ろ!! プラネテューヌ教会に!!」

全員「応!!」

こうして三年間幽閉された女神達を無事に救出できた龍姫達はプラネテューヌ教会に帰るのであった。

外史世界の女神の仕事

ギョウカイ墓場に幽閉されている女神様を無事救出できた龍姫達はプラネテューヌ教会に戻ってきた。

この後、女神達とネプギアは龍姫達の治療術で傷が癒えてるとはいえどこかしら異常があったらいけないと病院で一週間の検査入院を余儀なくされた。

この間の書類整理などは鳴流神家がプラネテューヌ、獅子神家がラストイション、御子神家がルウィー、神楽堂家がリーンボックスにそれぞれ雇われる形で三年分の書類を片付けていた。

何故、ネプギアが検査入院することになった理由は時を遡ること一日前である。

「ネプギアさんが紫色の炎に包まれて、それが収まったらまるで別人になったと報告がありましたので、ネプギアさんも皆さんと一緒に検査入院をしていただきます」

「わかりました、けど、お仕事の方が」

「それなら、ボクたちがやっておくよ!!」

「いいんですか!!」

「協力するってことは女神様の仕事を手伝うことも入ってるんだよ!!」

「お願いします!!」

そんなこんなでプラネテューヌの女神の仕事の代役を鳴流神家が請け負うことで教会に居候することになった。

ネプギアはプラネテューヌのコンパが勤務している病院へ向かったのであった。

「これで、あと3／1だな!!」

「すいません、わたしが不義ないばかりに」

「こういう仕事は慣れてますから(これ、絶対いーすんの所為だね(ω・・))」

龍姫達はあつという間に三年分の書類の3／2を三日間で片付けてしまったのだ。

龍姫は内心でイストワールが人の30倍掛かっていることが原因であることはわかっていたのであった。

もちろん、書類のサインは実印で行っていた。

「今、何時？」

「ちようど、お昼だね!!」

「ここらへんでお昼にしようか」

「龍姫さん達のおかげです、自分のペースでお願いします、冷蔵庫に入ってるプリン以外の食材なら使ってくださいでもいいですよ」

「ありがとうございます!!」

龍姫達は執務室の時計を見たらちようど正午を指していたので書類整理を一旦切り上げて昼食を取ることにした。

「今日はレタスとベーコンのサンドウィッチと卵サンドだよ!!」

「いただきます!!」

「美味しい!!」

「これ差し入れに持って行ってあげようか？」

「そうだね、お仕事が片付いたら、差し入れに持って行こう!!」

昼食はレタスとベーコンのサンドウィッチと卵サンドにしたのであった。

龍姫達は書類を片付けたらサンドウィッチを持ってお見舞いに行くことにしたのであった。

「お昼も食べたし!!」

「腹括って!! 残り三分の一を片付けるとしますか!!」

昼食を食べ終えた龍姫達は残り三分の一の書類を終わらすため再度執務室に入って行った。

ところ変わってルウィーでは、

「ラムちゃん!! ぴちぴちの十三歳!! (^ ^ ♪」

「わたしは・・・四十歳!! (||。ω。ノ」

「わたしは・・・三十歳」

「ボクは、十五歳!!」

「わたしは、二十歳、鍛えてた甲斐があったわ」

武龍達は長方形の板状の上に片足立ちで立ってバランス年齢を

計っていた。

ブランがロムよりバランス年齢が高ったのが効いたのか、自棄になりボクシングゲームで八つ当たりをしていた。

もちろん、しばらくの間、筋肉痛で動けなくなったのは言うまでもない。

導く出した答え

龍姫達は三年分の書類の残り三分の一を片付けているのだ。

「この書類を確認したら終わりだよ!!」

「わかった!! お終いにするよ!!」

「光竜滅牙槍もしちやダメだよ!!。(。D。)ノベシ!!」

そんなこんなで書類を終わらせてのであった。

「これで三年分の書類が片付きました!! ありがとうございます
龍姫さん達にはなんとお礼をしようかと」

「別にお礼とかいららないですよ。 教会に居候させていただいてる身分ですから!!」

「そうですね、それでしたらしばらく此処に居てくださいっても構いません!! ネプテューヌさん達が帰ってきたら二人に武術指南役をやってもらってもよろしいですか?」

「わかりました!! お引き受けします!!」

「ありがとうございます!!」

「書類も片付いたし、お見舞いに行こう!!」

三年分の書類を龍姫達はイストワールからしばらく教会に居候しても良いと言われたので、龍姫達は承諾して、イストワールからネプテューヌとネプギアの武術指南役をして欲しいと依頼されたので、龍姫達は快く引き受けた。

龍姫達は差し入れに作ったサンドウィッチを持って女神達が検査入院しているコンパが勤務先の病院へ向かった。

「ここで待っててね!! 受付に面会許可もらってくるから」

「うん、わかった!!」

病院に到着した龍姫達は受付で面会許可をもらうため龍姫が受付に行き、あとのメンバーは病院の長椅子に座って待つことにした。

しばらく待っていると、

「面会許可が下りたよ!! 病室は女神専用の特別室だって」

「わかった!!」

面会の許可が下りたので龍姫達は女神専用の病室に向かった。

「お見舞いに来てあげたよ!!」

「あ、龍姫さん!! それにみなさんも」

「わたしはネプテューヌ!! 名前は?」

「ボクは鳴流神家が長子、鳴流神龍姫」

「次女の真龍姫!!」

「三女の龍愛翔!!」

「四女のプルルート」

「五女のうずめだ!!」

「六女的美龍飛です（お姉ちゃんと自分に自己紹介するとは）」

「七女の龍音です!!」

「ねぷく!!Σ（。∩。）」

病室に入った龍姫達はこっちの次元のゲームギョウ界のネプテューヌに名前を聞かれたので龍姫達は順番に自己紹介をしたらこっちの次元のゲームギョウ界のネプテューヌが鳩が豆鉄砲を食ったような目になってしまった。

「お姉ちゃん!! しつかりして!!」

「だって!! いくらなんでも七人姉妹だよ!!Σ（。∩。） おまけにボクっ子に俺っ娘だよ!!」

「まあ、驚くのは無理もないけど」

「わたし達は鳴流神家に養子として引き取られたんです（本当は龍姫お姉ちゃんが女神になっちゃったからなんだけど）」

「ごめんね、変なこと聞いちゃって」

「ううん、別に気にしてないから、それより調子はどうなの?」

「検査の結果は龍姫達が魔法で治してくれたおかげで異常ないって!!」

あと三日で退院出来るってお医者様が言ってたよ!!」

「けど、どうしよう!! 三年分の書類とかが待ってるんだよね!!」

「書類なら片付けてあげたよ!! 一応、最終的なチェックはほかの職員の方に任せてあるけど」

「それってつまり、遊んでもいいんだよね!!」

「実は二人の武術指南役を依頼されたんだよね」

「まさか」

「そのまさかだよ!! いくら才能でここまで来たと言つてもこれからのことを考えるとマジエコンヌ四天王に勝てないよ!!」

「わたし達、五人がかりでも勝てなかったんだよ!!」

「その事なら、原因はわかってるよ!!」

「龍姫達はわたし達の攻撃が効かなかった理由がわかるの?」

美龍飛がネプテューヌにわかりやすく説明したら、悪いことを聞いてちやつと龍姫達に謝罪をしたら、龍姫達は気にしてないと言いい、ネプテューヌに調子の事を聞いたら、龍姫達が治療術で応急手当したおかげで医師にあと三日で退院してもいいと言われたのも束の間、教会に戻ったら三年分の書類が待っているといい込んでいたら、龍姫達が三年分の書類を片付けたと伝えたらネプテューヌは遊びに行く気満々だったのですかさず龍姫は二人の武術指南役を引き受けたことを教えたのだ。

確かにネプテューヌは天武の才があるのだが、この先マジエコンヌ四天王の残り三人を相手にしなければならぬのである。

ネプテューヌはネプギアを含めた五人がかりにたった一人に完膚無きまでにされたことを龍姫達にぶちまけたのだが龍姫達は女神の攻撃が効かなかった理由がわかったと龍姫が言った。

「だって!! わたしとノワールの合体技でもあの黒いオーラが破れなかったんだよ!!」

「その黒いオーラの正体は暴星バリアまたは鋼体だね!!」

「けど、ジャツジ・ザ・ハードにはわたしの技は効きましたよ!! それに龍姫さん達の技も」

「それは、ボクたちは自身の修得した技で、ネプギアの眠っていた力だよ!! あの時、何を見たのかな? (本当はボクが転生した時にツクヨミ様がプラネテューヌの女神にボクの好きなゲームの「テイルズオブシリーズ」の術技を修得させる能力で修得した技なだけだね)」

「確か、背の高い、黒い髪に赤い瞳に腰に龍姫さん達みたいに刀を差してお姉ちゃんやんが女神化した性格の男の人が頭の中に入ってきたんです!! それと「俺は滅びぬ!! 弱きものを導く意志がある限りな

!!」って言っていたのが聞こえてきたんですけど?」

「なるほど、それはネプギアが思い描いていた強くなりたいう意志の表れだよ!! リリアルオーブで美龍飛と共鳴した時見たと思うけど」

「そういえば、美龍飛ちゃんとリリアルオーブで共鳴している間、だけ、龍姫さん達が修得してる技のビジョンが見えてきたんです」

「実はリリアルオーブを作ったのは美龍飛なんだよ」

「ええ!! Σ(。D。) 美龍飛ちゃんが作ったの!!」

「うん!!」

「鋼体を破壊するには龍姫達の術技を修得するのが近道なんだね!!」

「そうなるね!! その前にゆっくり体を休めてね」

「そうだ!! これ二人で食べてね!!」

「ワイ(≡▽≡)!! サンドウィッチだ!! いただきます!! (´・`・´;)」

?) ムシヤムシヤ おいしい!! (*^▽^*)!!」

龍姫は自身の戦闘で得た知識とネプテューヌの証言で龍姫はある過程を導き出した結果、あの黒いオーラは暴星バリアまたは鋼体であると龍姫は二人に説明した。

ネプギアは自分が修得した技と龍姫達が使っていた技はジャッジ・ザ・ハードに効いていたことと自分があの時、霸王のような姿になったことを龍姫達に聞いたら龍姫は美龍飛とリリアルオーブで共鳴した時にネプギアが強くなりたと思う意志が新たな力になり具現した姿だと教えた。

リリアルオーブを作製したのは美龍飛であることを明かした。

二人は今できることに専念することにした。

龍姫は差し入れに作っていたサンドウィッチを入れ物ごと渡した。

二人はサンドウィッチをおいしく頂いたのであった。

分史世界の紫の女神とツクヨミ

龍姫達は検査入院をしているネプテューヌとネプギアのお見舞いに来ているのである。

「そろそろ、教会に戻らないと」

「三日後に迎いに行くから!!」

「わかった!! わたしだって、早く、龍姫達の手料理食べたいんだもん!!」

龍姫がふと時計を見ると教会に戻って夕食の準備をする時間だったので病室を後にした。

ネプテューヌとネプギアには三日後に迎いに行くと言った。

「真龍姫と龍愛翔ってわたしに似てなかった?」

「わたしも髪型を変えただけだけど美龍飛ちゃんとわたしも似てる気がしたよ!!」

「他人の空似って言うから気にしてないんだけど!!」

「そうだよ、気にしてなんていられないもんね」

ネプテューヌとネプギアは真龍姫と龍愛翔と美龍飛が別次元のゲイムギョウ界の自分達であることは気づいてなかったが、どこかしら自分の面影が見えたと二人は語り合っていた。

美龍飛は髪を羽根の髪飾りで軽くツーサイドアップのロングタイプに結っているのだ。

もちろんあの十字キーの髪飾りは着けている。

「さてと、夕食を作るとしますか!!」

教会に戻ってきた龍姫達は台所で今日の夕食の準備に入っていた。

そんなこんなで調理を行って行った。

「今日はカレーライスだよ!!」

「いただきます!!」

今日の夕食はカレーライスにしたのであった。

「美味しかった!!」

「龍姫さんは本当に料理がお上手なんですわね!!」

「こんな一般的な家庭で覚えた料理だよ!! 二人が退院したら教えるつ

もりです」

「そこまでしてくれるんですか!! ぜび二人が退院なさったらお料理も教えてあげてください!!」

夕飯を食べ終えた龍姫達は食器を片付けていたらイストワールが龍姫の下にやって来て龍姫の料理の腕を褒めた。

龍姫は家庭料理レベルだとイストワールに言い、二人が退院したら料理も教えると龍姫はイストワールに言ったら、イストワールからぜひお願いしますと言われたので龍姫は快く引き受けたのだ。

食器を片付け終わったので龍姫達はお風呂に入ることにした。

「流石にみんなで入るのは無理だからね!!」

「仕方ないよ、此処はあっちの次元のゲームギョウ界の教会じゃないからね!!」

龍姫達は二班に別けてお風呂に入っていた。

しばらくお風呂を堪能して龍姫達はお風呂から上がった。

「お休み!!」

「お休み、お姉ちゃん!!」

龍姫達は下宿している部屋で就寝した。

もちろん、天界百貨店で買ったナイトブラを着けているのである。

その日の夜

「ネプテューヌさん!! ネプテューヌさん!! 起きてください!!」

「誰く;つひ、) わたしは眠いんだけど」

「わたしはツクヨミと言います」

ネプテューヌは夢の中でツクヨミに起こされたのだ。

「そのツクヨミ様がわたしに一体何か用なの?」

「はい、ネプテューヌさんを含めた五人がかりでも手も足も出なかったマジエコンヌ四天王に勝つための力を授けに来ました」

「それじゃあ!! 特訓しなくてもいいだね!!」

「それでは意味がありません、龍姫さん達の攻撃がなぜマジエコンヌ四天王に効いたかと言うとわたしは龍姫さん達にどの次元でも影響されない「魔力」と「異世界の術技」を授けたのです!! もう気づいているはずですよ」

「まさか!! 真龍姫と龍愛翔って別次元のゲームギョウ界のわたしなの!!。(。D。)ノ」

「はい!! そうです」

「もしかして、龍姫は女神なの!!。(。D。)ノ」

「その通りです!! プルルートさんとうずめさんと龍音さんも魔力を使って女神化が出来ますのでシェアに影響されません!! 美龍飛さんは別次元のゲームギョウ界のネプギアさんですよ!! それとリリアルオーブの企画書を美龍飛さんに渡して作らせたのもわたしです」
「どうりで似てると思った、けど、そんな大事なことをわたしに話しても大丈夫なの?」

「いずれ、真実を龍姫さん達がお話してくれるつもりですのでこのことはわたしとネプテューヌさんの間で秘密にして欲しいんです」

「わかったよ、ツクヨミ様!!」

「それともう一つ龍姫さん達を初めてとする次元探偵の方々には魔力の影響で体が成長しているんです。ネプギアさんもリリアルオーブで共鳴した時に美龍飛さんから魔力を分けてもらったのであの時あなたを助けたが一心で「黎明王」に目覚めたんです!! 影響で少しずつ体に変化が現れるはずですよ。わたしはこれで失礼します」

「ありがとう!! ツクヨミ様!! このことはいざって時にみんなに伝えるから」

龍姫達をこっちの次元のゲームギョウ界に送り込んだ張本人のツクヨミから魔力を授けてもらったネプテューヌは真龍姫と龍愛翔が別次元のゲームギョウ界の自分自身で龍姫と龍音が女神であることに気が付いたのだ。

ツクヨミからプルルート・うずめも女神であることを教えられたのだが、二人だけの秘密にして欲しいとお願いされたのでネプテューヌは承諾した。

ネプテューヌはツクヨミとの会話を終え眠りにつくのであった。

大きな一歩!!

龍姫達が見舞いに来てツクヨミから龍姫達を送り込んだことを明かされて三日が過ぎたのだ。

そうネプテューヌとネプギアが検査入院を終えて退院する日である。

「ネプテューヌ!! ネプギア!! 迎えに来たよ!!」

「お医者も異常がないって」

「これで龍姫達の手術料金が食べられるよ!!」

「それはそうと、ボクが二人に料理を教えてあげるよ!!」

「いいんですか!!」

「武術を教える傍ら料理も教えてあげるよ!!」

ネプテューヌとネプギアを迎えに来た龍姫達は二人に武術を教えながら料理を教えると言ったのだ。

それを聞いた二人は喜んでいたのであった。

「ただいま!! いーすん!!」

「お帰りなさい、ネプテューヌさんも、ネプギアさんも異常がなくて良かったです!! それと明日から龍姫さん達に武術指南をしてもらいます、いいですか?」

「いずれにせよ!! 龍姫達の技を修得しなきゃ始まらないもんね!! そうだほかのみんなはどうしてるの?」

「その事ですが、どうやら、ネプテューヌさんより怪我の程度が酷かったのですが、勇龍さんが掛けてくれた回復魔法のおかげで順調に回復に向かっているとのことですよ」

「それじゃあ、今、女神で動けるのって私だけなの!! (。D。ノ)」

「そうなります、そのために龍姫さん達に武術指南役をお願いしたんです」

「そうだったんだ、帰って来て間もないけど、書類を片付けないとね!!」

「書類は龍姫さん達が代わりに片付けてくれましたので、あとは教会に寄せられるクエストを片付けるだけです。．．どうしたんですか

!! ネプテューヌさんからお仕事をしたいなんて!!。(。D。)ノ まさかマジエコノ又四天王との戦いの所為で脳に異常が」

「いーすん!! そんなんじゃないよ!! いつまでも龍姫達に任せてられないんだって気づいたんだよ!! それに龍姫達を見てると自分も決めないといけないと思っただけ」

「あのお仕事をいつもわたしとネプギアさんに押し付けていたあのネプテューヌさんの口から仕事をすると聞けるなんて(TωT)ウルウル」

「大げさだよ!! 龍姫達を見て思ったんだよ!! どうせ選ぶなら自分で選んだ方がいいって思ってるだけだよ!! それが正しいかどうかわからないよ!!」

「お姉ちゃん・・・」

「どうやら、ネプテューヌもボクと一緒にほっとけない病末期患者だったみたいだね!!」

「そうでしたか、龍姫さん達に影響されたんですね!!」

「うん、わたしがわがまま言ったらまた叱ってくれる?」

「もちろんです!!いつもの事ですから」

教会に戻ってきた龍姫達とネプテューヌとネプギアをイストワールが迎えに来てくれた。

どうやら、守護女神で動けるのがネプテューヌだけが、勇龍が治療術「リザレクション」を掛けてくれたおかげで順調に回復してることを教えられたのである。

いきなり、ネプテューヌが書類を終わらせたいと言い出したのだ。

書類は龍姫達が三日かけて終わらせてくれたのであとは教会に寄せられたクエストをして欲しいとイストワールが鳩が豆鉄砲を食ったようになってしまってネプテューヌの脳に異常が出たと思ひ込んでしまったのだが、あえてツクヨミに叱咤されたことを伏せて、龍姫達を見ていたら自分が変わらないといけないと言ったらイストワールが泣き出したのである。

ネプテューヌはどうせ選ぶなら自分で選んだ方がいいって思っているとそれが正かったどうかは終わってみないとわからないと龍姫が

自分のモットーにしている「黒衣の断罪者」のようなことをイストワールに言つてのけたのだ。

ネプテユーンは自分が立ち止まったら叱つてくれとイストワールに言つたのだつた。

天羽々斬

ネプテューヌとネプギアが退院してネプテューヌが一大決心をして三日が過ぎようとしていた。

龍姫達は二人の武術指南役を任されたので、朝の特訓を行っていた。

この後はイストワールから纏められたクエストがあるのだった。

「行くよ!! クリティカルエッジ!!」

「そんな技じゃ、マジエコンヌ四天王に勝てないよ!! 魔神剣!!」

「だったら、お返しだ!! 魔神剣!!」

「龍姫さんが手加減してるとはいえ、魔神剣系列を経った三日で修得しちゃったんだね」

「いつかは二刀流を教えるつもりだよ!!」

「そうだよ、だって真龍姫と龍愛翔は二刀流なんだもん!! 絶対修得して見せるんだから!!」

「その意気だ!! ねぷつち!!」

あれからネプテューヌは龍姫達の指導の甲斐あって「魔神剣」と「蒼破刃」系列をすべて修得したのだ。

もちろん真龍姫と龍愛翔が交代しながらリアルオーブで共鳴しているのだ。

こうして朝の術技訓練を終えたのだ。

「今日は焼き鮭と大根と榎と油揚げのお味噌汁だよ!!」

「おいしそう!! いただきます!!」

「美味しい!!」

特訓を終えた龍姫達は教会に戻ってきて朝食を摂っていた。

メニューは和食をメインにしていたのである。

「今日のクエストを纏めておきました」

「ありがとう、いーすん!!」

「ギルドに行こう!!」

朝食を食べ終えた龍姫達はイストワールからノルマクエストのリストを受け取りギルドに向かったのである。

「今日はレツゴウアイランドの魔物退治が五つだよ!!」

「その前に武器屋には行かなくてもいいの?」

「そうだよね!! 龍姫の言う通りだね!! わたし達が帰ってきたから武器屋が犯罪組織に売らなくなったからね!!」

「それだったら、この刀を龍姫さんに返せるんだね!!」

「別にいいよ!! 使ってくれても」

「そうはいきません!!」

「わかったよ、ボクもちょうど武器屋に行きたかったんだ!!」

ギルドでイストワールからもらったノルマクエストのリストの分のクエストを受注して、念のため武器屋に行くことにしたのである。

「いらつしやい!!」

「すいません、刀はありますか?」

「無銘刀なら置いてあるよ!! マジエコンの所為で武器が入ってこなくてな」

「そうですか、この刀をください!!」

「毎度!! お、その姉ちゃん達、いい刀を持ってるね!!」

「なんでわかったんですか!! 粒子化してるんですけど」

「なに、長年武器屋やってるとわかるだよ!! 見せてくれないか」

「わかりました!!」

「これは業物じゃねえか!! これどこで手に入れたんだ?」

「犯罪組織が活発化する前に買ったものですけど（本当は自分が企画書を書いて打った刀なんだけど）」

「そうか、ほれ、返すぜ!! 大事にしなよ!!」

「ありがとうございます!!」

武器屋に到着した龍姫達は武器屋の品揃えを見ながら刀を物色していたのである。

どうやら、マジエコンを信仰する集団の所為であまり上質な武器が入って来ないと武器屋の大将から教えてもらった。

ネプギアは本来の得物であるビームソードではなく無銘刀を購入して龍姫から借りていた名刀「三池典太」を龍姫に返したのである。

龍姫達は武器屋を後にしようとしたら、武器屋の大将が龍姫の神代

三剣が一振り名刀「天羽々斬」を見せて欲しいと言われたので龍姫は粒子化していた天羽々斬を実体化させて武器屋の大将に渡したのである。

天羽々斬を受け取った武器屋の大将は業物であることを龍姫に言い、どこで手に入れたか聞かれたので龍姫はマジエコノヌが活発化する前と言って自分が企画書を書いて打った刀であることは伏せたのである。

そのまま龍姫達は武器屋を後にするのであった。

分史世界の紫の女神の危機

武器屋を後にした龍姫達はノルマクエストに指定されているレッツゴウアイランドの巨大魔物討伐を含めた五つの魔物退治のクエストに来ていた。

「早く、終わらせて、龍姫達と一緒に料理を作るんだから!!」

「ネプテューヌ!! ネプギア!! 今日のボクたちが出したミッションは覚えている?」

「もちろん!! 覚えているよ!! 女神化を使わないでクエストを片付ければいいんだよね!!」

「覚えてるならよかった!!」

「みんな!! 腹括れよ!!」

全員「応!!」

龍姫はネプテューヌとネプギアに女神化を禁じた状態でこのクエストを達成すると言うミッションを課したのである。

龍姫達はいつものように愛刀を抜刀状態にして、いつでも二人に助太刀が出来るように構えた。

ネプテューヌはいつもは木刀を特訓で使っていたのに、なぜか両刃の大剣を実体化してやや真一文字のように構えて左右に体を揺らしていた。

ネプギアは先ほど武器屋で買った刃渡り二尺三寸の無銘刀を抜刀して鞘は龍姫が作ってくれた剣帯に差しているのである。

「行くよ!! ジャンピンググアーツ!!」

「魔神剣・双牙!!」

「朧月夜!!」

「裂空刃!!」

ネプテューヌは龍姫達が修得している三散華のように無手で攻撃する自身の技を、龍姫は刀を素早く二回振り抜き斬撃を放つ秘技「魔神剣・双牙」を、うずめはその場で周囲を衝撃波で攻撃する秘技「朧月夜」を、ネプギアは鎌鼬のような斬撃を放つ奥義「裂空刃」を一斉に繰り出したのだ。

もちろん龍姫達の技を受けた魔物達は光になって大方消えて逝って後は巨大魔物の「アイスフェンリル」だけになったのだ。

「グルルル〜」

「相当気が立ってる見たいだよ!!」

「来るよ!!」

どうやら、アイスフェンリルは相当気が立っているらしく龍姫達は気を引き締めて得物を構えたのだが、

「グオー!!」

「そっち行ったよ!! お姉ちゃん!!」

「任せて!! これで決めるよ!! クロスコンビショ!! あわわ!! ミ

(ノ―) ノ||3 ドテツ!」

「ネプテューヌ!! 大丈夫!!」

「ありがとう!! 真龍姫!!」

「ネプテューヌは一旦退いて!! 虎牙破斬!!」

アイスフェンリルが真龍姫と共鳴中のネプテューヌに向かって突進を仕掛けて来たので、ネプテューヌは迎え撃とうと攻撃の態勢に入って攻撃しようとしたらどうやら三年間、ギョウカイ墓場に幽閉されていた所為と身の丈以上の大剣を使っていた所為でバランスを崩して転倒してしまったのだ。

共鳴していた真龍姫は刀でネプテューヌとアイスフェンリルの間に入って庇った。

龍姫は一旦後ろに退くよにネプテューヌに指示を出して、斬り上げて、斬り下ろす特技「虎牙破斬」で攻撃した。

アイスフェンリルは光になって消えて逝った。

「大丈夫!! お姉ちゃん!!」

「ありがとう!! ネプギア!! わたしまだ本調子じゃないのに前衛に出ちゃって ごめんね!!」

「今回は真龍姫とリアルオーブで共鳴してたから良かったけど、今日はゆっくり休んだ方がいいよ」

「うん、そうするよ」

「お姉ちゃん落ち込まなくても、敢て、龍姫さん達はわたし達に武術指

南役をしている間は冷たくしてるだけだからね、一緒にギルドに報告しに行こうよ!!」

「そうだよね!!」

転倒したネプテューヌにネプギアが駆け寄って起き上がらせて、龍姫はあえてネプテューヌに厳しく叱咤して達成報告のためギルドに戻るのであった。

ギルドに報告してクエストの報酬を貰い教会に戻るのであった。

「龍姫さん、ネプテューヌさんはどうなされたんですか？ いつもならノルマクエストを終えたら自分の部屋でゲームで遊んでるのですが、上の空でプラネタワーの展望デッキで座ってボーとしてるんです」

「実はこんなことがあります・・・」

「そうだったんですか!! すみませんがしばらくネプテューヌさんのことを頼みました。それでは失礼します」

どうやら教会に戻ってきて龍姫達と一緒に昼食をいつものように食べていたのだが、自分の部屋に戻らず教会と通路で繋がっているプラネタワーの展望デッキのベンチに座って上の空になっているとイストワールから教えられた龍姫はイストワールに事情を説明したらしばらくネプテューヌの様子を見るように頼まれたので龍姫はプラネタワーの展望デッキのベンチで座っているネプテューヌの下に向かった。

「ネプテューヌ!! そんな所にいたら風邪引くよ!!」

「どうせ!! 龍姫はわたしのことなんてわからない癖に!! ほっといてよ!!」

「どうしたの!! ネプテューヌ!! いきなり大声出して!!」

「わたしのこと、足手纏いでネプギアといーすんがいなきや何も出来ない駄女神って思ってる癖に!! わたし、女神でいいのかわからないんだよ!!」

龍姫はプラネタワーの展望デッキのベンチで上の空で座っているネプテューヌに声を掛けたらいきなりネプテューヌが龍姫に向かって大声を出したのだ。

龍姫はどうしたのかを聞いたら、ネプテューヌは自分が龍姫達の足を引つ張って、ネプギアとイストワールがいないと何もできない駄女神だと龍姫に向かって言った上に女神をやって行く自身がないと半ば自暴自棄になっていたのだ。

「どうして、そんなことが言えるの!! 一人で勝手に終わった気にならないでよ!! ボクたちがギョウカイ墓場から助けた時のネプギアに見せた笑顔は作り物だって言うの!! ネプギアと約束は全部嘘だって言うの!! 最後まで筋を通すのが女神じゃないの!! 最後までしゃんと女神をやってよ!!」

「ホント、容赦ないね龍姫は・・・ごめんねわたしがどうかしてたよ」「わかってくれたならいいけど、教会の中に戻ろ!!」

自暴自棄になつていたネプテューヌに龍姫は思わず大声で叱咤してしまったのである。

ネプテューヌはふと我に帰り龍姫に謝罪した。

龍姫はネプテューヌに教会の中に戻ろうと言いネプテューヌと一緒に戻ろうとした時だった、

「ネプテューヌ!! しっかりして!!」

「どうしたんです? !! 誰か!! 救急車を!!」

「お姉ちゃん!! しっかりして!! 死んじやいやだ!!」

「大丈夫だから・・・心配しなくて・・・ゴフ!!」

「喋っちゃダメ!!」

いきなりネプテューヌが吐血したのだ。

龍姫はすぐに治療術で応急手当を始めたのだ。

それに気づいてイストワールが飛んできてすぐに救急車を手配するように教会職員に指示を出し、ネプギアが泣きながら治療術で応急手当を龍姫と一緒にしていた。

数分後に教会に救急車が到着し救急隊員が担架を持って来て担架にネプテューヌを乗つけて救急車に乗せてネプギアも救急車に乗り込んで教会のすぐ近くのコンパが勤務している病院に搬送されたのだ。

「イストワール様、すいませんでした。ボクがそばに憑いていたのに

吐血するまで思い詰めていたことに気づいて上げられなかったはボクの責任です!!」

「頭を上げてください!! 龍姫さん!! これは教祖であるわたしにも責任があるんです」

「その通りだよ!! これは僕たちにも責任はあるんだよ!!」

「そうだけ!! お姉ちゃん!! 今はねぷっちの手術の成功を祈るのが先だけ!!」

「そうやって、お姉ちゃんは一人でしよい込むんだから!!」

「ありがとう!! みんな、そうだよ、ネプテューヌの手術が無事成功することを祈るのが先だよ!!」

龍姫は土下座でイストワールにネプテューヌが思い詰めていたことに気づいて上げられなかったことを詫びたら、イストワールが頭を上げて欲しいと言われ、これはみんなに責任があると妹たちに言われてしまったのだ。

龍姫はみんなにお礼を言って手術の成功を只祈るのであった。

転院搬送

今龍姫達は病院に来ているのである。

その理由は突然吐血したネプテューヌの手術が行っているのである。

その一方を聞き付けたのか、

「龍姫!! ネプ子がいきなり口から血を吐いたって、本当なのね」

「あのネプテューヌさんが」

「信じられないわ、龍姫がそばにいたのにどうして気づいて上げれなかったのよ!!」

「お姉ちゃん!! 龍姫さんを責めても何も起こらないわよ!! 此処は落ち着いて!!」

「そうだけ、ノワールここは病院だ!! 静かにしろよ!!」

「そうね、龍姫、もしあの子に何かあったら只じゃ済まないんだからね!!」

「もう、ノワールたら素直にネプテューヌが心配だって言えばいいのですのに それにしても今になってネプテューヌだけ」

アイエフとほかの四ヶ国の女神がプラネテューヌの病院に駆けつけたのだ。

ノワールは龍姫を責めたのだが、ブランが静かにするように言い、ベールが今になってネプテューヌだけがこうなるのはおかしいと呟いていた。

しばらくして手術中のランプが消え、

「お姉ちゃん!! 先生!! お姉ちゃんは!! お姉ちゃんは大丈夫なんですか?」

「落ち着いてください!! 無事手術は成功しました。 ですがしばらくは入院をして頂くことになります、それと教祖様とネプギア様はあとでお話がありますのでこちらに来てください」

「わかりました!!」

何とか無事に手術は成功し、しばらくは入院を余儀なくされたのだが、ネプテューヌの手術に執刀した医師はネプギアとイストワールに

話があると言い、二人は医師の後をついて行った。

「取り敢えずはなんとかなったな!! お姉ちゃん!!」

「うん」

「取り敢えず、二人が戻って来るまで待つてないかね」

「そうだね!!」

手術の成功を見届けた龍姫達は緊張の糸が切れてしまい近くに会った長椅子に座り込んでしまったのである。

二人が戻って来るまで待つのであった。

「先生!! お姉ちゃんはもう・・・」

「言いにくいことですが、パープルハート様の体は現在マジエコンヌのシエアエナジー直接取り込んだことよって所々弱って来てるんです!!」

「それはつまりネプテューヌさんに女神を辞めろと仰ってるんですか!!」

「できればそうしていただきたいのは山々なんです、当の本人は辞めろつと言っても聞きやしないでしょう。ですからしばらくは入院をしていただいて安静にして休暇を取っていただくことをお勧めします」

「わかりました、お姉ちゃんには黙っておきます!! 失礼しました!!」

医師に話を聞き言っていたネプギアとイストワールは医師からネプテューヌの体は三年前のギョウカイ墓場での戦いの時に直接誤ってマジエコンヌのシエアエナジーを体に取り込んでしまっていた所為でネプテューヌの体が蝕んでるとネプテューヌのレントゲン写真を見せられたのだ。

二人はこのことを黙っておくことにしたのだが龍姫達には感づかれてしまったのだ。

後のメンバーは仕事の都合上それぞれの国帰ってしまったのである。

ベットで酸素マスクをつけられて麻酔で眠っていたネプテューヌは薄れ行く意識の中で

「ごめんね、ネプギア、お姉ちゃん もうダメみたい 約束守れなくて

「ごめん」

「ネプテューヌさん!! しつかりしてください!!」

「確か・・・ツクヨミ様・・・そうだよね、お迎えに来てくれたんだね」
「違います!!」

「ツクヨミ様!! どうして此処に!!」

「すいません、龍姫さん!! 貴女達にわたしが仕事を依頼したばかりに」

ツクヨミが目の前に姿を現したのだ。

たまたまその場に居合わせた龍姫達は驚きを隠せないでいた。

「ツクヨミ様!! お姉ちゃんをどうするんですか?」

「天界にある最先端治療が受けられる病院に転院搬送をします、もちろん先ほど担当の医師の方に転院搬送の許可をもらいましたので、今から転院搬送を行います!!」

「もうお姉ちゃんには会えないんですか(´A、´)グスン」

「何を仰ってるんですか、天界の病院で入院をして頂き治療を受けて頂くだけですので、転生とは違いますので安心してください」

「お姉ちゃんはどれくらい天界の病院で入院するんですか?」

「この程度なら一週間〜二週間ぐらいです、それと天界の病院でも保険が利きますので安心してください!! 教会にある転送装置から行けますので、それは失礼します」

「よかった、お姉ちゃんが女神を辞めなくて」

「プラネテューヌの女神はネプテューヌなんだから」

こっちの次元のゲームギョウ界のネプギアはツクヨミにネプテューヌをどうするのかと問いたしたらツクヨミは天界にある天界総合病院に転院搬送をすると答えた。

もちろんこの病院のネプテューヌを担当する医師には転院搬送の許可はもらっていると言う証拠に許可書を龍姫達に見せた。

ネプギアは泣きそうになりながらツクヨミに聞いたら、ツクヨミは転生ではなくあくまで天界の病院で治療をすることと一週間〜二週間は入院してもらおうと教えられたのである。

ツクヨミはネプテューヌを酸素マスクを着けたまま天界の病院に

転院搬送していった。だつた。

天界総合病院

天界の病院に転院搬送されたネプテューヌは病室で目を覚ましたのである。

「あれ？ 此処どこ？」

「お目覚めですか？ ネプテューヌさん」

「ちよつと聞いていいかな？ 此処はどこなの？」

「此処は天界総合病院ですけど、ネプテューヌさんは麻酔で寝ている間に此処に転院搬送されたんですよ」

「ねぶ〜!!Σ(。D。) うぐ!!」

「もう、安静になさってくださいね」

「はい、そうするよ」

目を覚ましたネプテューヌは近くにいた看護師に此処は何処と聞いたら、天界総合病院に麻酔で寝ている間に転院搬送されたと聞かされたのだ。

ネプテューヌは驚きを隠せないでいたのだが、手術の傷が疼いてしまつて安静にするよう看護師に言われてしまった。

ふとネプテューヌは自分の胸を見たのだが、

「この手術の傷が治らなかつたら、わたし女神出来ないよ!!」

なぜなら痛々しく手術でできてしまった糸で縫い合わされた傷痕を見て女神をやって行く自身が喪失仕掛けていたのだ。

しばらく嘆いていたら、

「ネプテューヌさん、お目覚めになったんですね、今日は明日の手術のことでお話がありました」

「ねぶ〜!!Σ(。D。) 手術!!Σ(。D。) やだ!! 手術って体にメス入れてこんな

傷痕を残すんだよね!!」

「明日の手術はメスを使わないバイオテクノロジー技術を駆使した「再生治療」です。つかうのはDNAを採取するための綿棒だけです」

「それってわたしのクローンを作るってこと!!Σ(。D。)」

「簡単に説明するとそういうことです」

「それだと違法にならないんですか!!」

「天界の法律上で認められているので大丈夫ですよ!! ただ肉体と魂が馴染むのに一週間〜二週間はかかりますもちろん女神の力も使えます、これは我々医師団がネプテューヌさんのカルテとレントゲン写真を見て話し合った結果この治療が適用されました」

「そうだよね、わたしだけ直接首を絞められて気絶させられたっけ、その時にマジエコノヌのシェアエナジーを体内に入れられたんだね」

「はいその通りです、それでは明日の手術はお受けになられるということでもよろしいですか?」

「お願いします!! 一刻も早くみんなの所に帰らなきゃいけないんで」

白衣を着たネプテューヌの天界総合病院の担当の医師がネプテューヌに明日の手術の説明をしに病室に入ってきたのだ。

ネプテューヌはまたメスを体に入れて傷痕が残ると思い込んでしまった。

怯えていたネプテューヌに担当医は明日の手術はクローン技術を代用した再生治療だと説明してネプテューヌを落ち着かせたのだ。

恐る恐るネプテューヌは違法にならないかと担当医に聞いたら、天界では法律で認められていると説明し、ネプテューヌは明日の手術を受けることにしたのであった。

天界の最先端医療

ネプテューヌが天界総合病院に転院搬送されて翌日、今日はネプテューヌの二回目の手術が行われようとしていた。

「ネプテューヌさん!! 手術の準備が出来ました よろしいですか?」

「大丈夫!! いつでも行けるよ!!」

「お姉ちゃん!!」

「大丈夫だよ!! ネプギア!!」

「でも、もしお姉ちゃんの手術が失敗したと思うと居て立ってもいられないんだよ!!」

「お姉ちゃんを信じて、それじゃあお願いしまーす!」

手術の手筈が整ったよう担当の看護師がネプテューヌを呼びに来て、病室の前に置いていたストレッチャーにネプテューヌを乗せて手術室までの道のりをネプギアが側に寄り添っていた。

もちろん龍姫達も一緒に来ていたのである。

ネプテューヌは手術室に入って行った。

「あとは任せてください、龍姫さん達は教会に戻って書類の整理をお願いしてもいいですか? 少しでもお姉ちゃんのを離れたくないのです」

「別に構わないよ!! ボクたちは教会で待ってるから」

ネプギアは龍姫達に教会に戻って書類の整理をして欲しいと頼んできたので龍姫達は承諾して教会に帰ろうとしたのだが、

「あれ、先生!! 手術は終わったんですか? お姉ちゃんは!! まさか」

「落ち着いてください!! マジエコンヌのシェアエナジーでやられていた臓器と神経細胞の手術は成功しました!! 今日執刀医はツクヨミ様直々でしたので早く終わりました。それと下界で手術した傷痕もきれいさっぱり無くなりますので安心してください、もちろん抜糸も終わらせておきました。後はネプテューヌさんの回復を待つだけです。しばらくは退院されても許可が出るまでは安静にして

ください」

「ありがとうございます!! 先生!! ツクヨミ様!!」

「それとマジエコンヌのシェアエナジーはわたしが何かに利用できると思うので預からせて頂いてよろしいですか?」

「はい、お願いします!!」

「では、失礼します!!」

「よかった!! 龍姫さん!! お姉ちゃん助かりました!! 龍姫さんのおかげです!!」

「ボクはあの時は無我夢中で治療術で応急手当を施していただけだよ!!」

「何言ってるんですか、その応急手当のおかげでお姉ちゃんは助かったんですから!!」

「そういうことしておくよ!! ボクたちは教会に戻って書類の整理をしないとね!!」

「はい!!」

物の数分後に手術中のランプが消えて中から麻酔で寝ているネプテューヌがストレッチャーに乗せられて執刀医とサブで入っていたツクヨミが一緒に出てきてたのである。

流星は天界の最先端医療の成せる技と見せつけられた龍姫達は呆然としていた。

ツクヨミがネプテューヌの体内にあったマジエコンヌのシェアエナジーをコアのような塊にして龍姫達に見せて預からせてもらうと告げた。

龍姫達は見届けて教会に戻るのであった。

紫の女神の復帰 黒の女神と黒衣の断罪者

天界の最先端医療の手術を受けたネプテューヌは無事に退院して自分の次元のゲームギョウ界のプラネテューヌ教会に戻ってきたのだ。

「ただいま!! アイちゃん!! コンパ!! いーすん!!」

「ネプ子!! 心配したじゃない!!」

「ねぶねぶく!!。。。。(ノ皿)あゝくん!! 死んじゃうかうと思っただすう!!」

「何言ってるのコンパ、こうして退院して帰ってきたんじゃない!!」

「お帰りなさい!! ネプテューヌさん ネプテューヌさんが入院している間の書類は龍姫さん達があつという間に終わらせてしまいましたので当分は安静にしてください」

「わかったよ、焦っても仕方ないよ、お医者様の許可が下りたら龍姫に特訓着けてもらわないとね!!」

「無理は禁物よ!!」

「わかってるよ!!」

ネプテューヌは教会でアイエフとコンパとイストワールに出迎えられる、コンパは泣き出してしまったのだが、ネプテューヌはあやしていた。

ネプテューヌがいない間、龍姫達が書類をやってくれたのだ。しばらくネプテューヌは自分の部屋で療養するのであった。

この後ノワールがテンプレのツンデレ交じりに泣いてないと連絡を寄越したのは言うまでもない。

一方その頃

「ツクヨミ様!! マジエコンヌのシエアエナジーの浄化が完了しました!!」

「ありがとうございます、席を外してもいいですよ」

「それでは失礼しました!!」

「流石に今の外史世界のゲームギョウ界には新たな紫の女神が必要ですよ!!」

どうやらツクヨミはネプテューヌの体内に入っていたマジエコンヌのシエアエナジーの浄化が完了したようで、プラネテューヌに新たな女神を誕生させる手筈を取っていたのである。

ネプテューヌが天界総合病院から退院して一週間が経とうしていた。

「もう、クエストに行かれてもいいですよ!! ただし無理はしないこと!! わかりましたか?」

「はい、ありがとうございます!! 先生!!」

「お大事に」

「お姉ちゃん、どうだったの?」

「もう、クエストやってもいいって!! 先生が言ってくれたよ!!」

「よかった!! 一時はどうなるかと思ったよ!! そうだ!! これ受け取って!!」

「この刀くれるの!!」

「ネプテューヌだったら自分に合わないのに大剣使ってたでしょう、だから武器屋でボクが買ってきたあげたんだよ!!」

「ありがとう!! 龍姫!! 大事にするね!!」

医師からクエストに行ってもいいと許可が下りたネプテューヌは喜びを隠せないでいた。

龍姫は快気祝いに武器屋で自分が使っている刀と同じ長さの刀をプレゼントしたのである。

龍姫達は教会に戻るのであった。

一方その頃

「キャ!!」

「もう終わりなの、ノワール」

「まだよ!! 勇龍!!」

「そう来なくちゃ!! 魔神剣!!」

「ヴェノムフェンサー!!」

「そんな技使ってるからマジエコンヌ四天王一人に負けるのよ!! 円閃襲落!!」

「キャ!!」

「これでわかったかしら、あなたは所詮自分に過信してたに過ぎなかったのよ!!」

「あなたなんか女神の事なんかわかるわけないのよ!!」

「いい加減しなさい!! そうね、わかりたくもないわ!!」

「!!」

「でもね!! これだけは覚えとくと良いわ!! 一人で戦い続けられ!!」

「いつか孤独に呑み込まれるわよ!!」

「ありがとう、勇龍」

「どういたしまして!! それじゃあ、特訓の続きをしましょうか?」

「そうね!! ネプギアに先を越されちゃったしね!!」

「どうやら勇龍が竹刀でノワールに剣術の稽古を着けていたのだが、ノワールは利き手じゃない左手をあまり使うのに慣れていないらしく片手で竹刀をフェンシングのように構えていた。

そのまま勇龍に向かって仕掛けたが逆に技を連携させられてしまったのである。

この時勇龍はちゃんとタイラントフィストを装着している左手で殴りながら技を連携していきノワールに格の違いを見せつけたのだ。

勇龍はノワールに向かって一人で戦い続ければ孤独に呑み込まれると諭したのだ。

「何度言えば覚えるのかしら、どうして左手を使わないの!! 獅子戦

吼!!」

「きや!! わかったわよ!! こうかしら!! 三散華!!」

「そうよ!! やれば出来るじゃない!!」

「ありがとう、けど勇龍がリアルオーブで共鳴してくれてるからできたけど」

「しばらくは特訓に付き合っただけよ!! もう得物を騎士剣から刀に変えた方がいいわ!!」

「そうね!! そうするわ!!」

こうして勇龍とノワールは時間が許す限り剣術の稽古に勤しむのであった。

この時ギョウカイ墓場で異変が起きてることに龍姫達は気づいて

い
な
か
っ
た。
。

外史世界の紫黒

ネプテューヌがプラネテューヌ教会に戻ってきて女神に復帰して三日が過ぎていた。

龍姫達はいつも様に書類を片付けていたのである。

龍姫達がこっちの次元のゲームギョウ界のプラネテューヌ教会に雇われてからネプテューヌがわがままも言わず、職務放棄もしなくなり、あつという間に

「ねぷつち!! この書類で最後だぜ!!」

「わかったよ!! うずめ!! 終わらせてやる!! 遠慮もしない!! 決めてやる!!」

「病み上がりなんだから「斬空刃無塵衝」しちやダメだよ!! (。D。)
ノベシ!!」

こんな感じで楽しく書類を片付けていったのである。

イストワールを除く九人でやっていたので午前中に片付いたのであった。

「ネプテューヌ!! 体の方は大丈夫?」

「なんかね〜入院する前より体が軽いんだよね!! 休憩したら武术の特訓するんだよね?」

「そのつもりだよ!! 実はさつき星龍から連絡があつてノワールも勇龍に武术を教えるって でね、この後一緒に特訓しないかって」

「ノワールと手合せて三年前にやったきりだったからね!! 楽しみだね!! 勇龍が教えるってことは左手の使い方も教えるんだよね、だってノワールったら右と脚しか使わないんだもん!! おまけに爪楊枝を長くした剣ばっか使うんだよね!!」

「けど星龍が刺突剣から打刀に得物を変えてみたらって提案したみたいだよ!!」

「等々、ノワールは己の正義に目覚めたんだね!!」

しばらく休憩をした後武术の稽古を星龍達と一緒にすることになったのである。

一方その頃

「この刀でいいんじゃない？」

「それにするわ!! これください!!」

「毎度!! また来てよ!!」

星龍達はノワールの新たな得物である刀を買いに来ていたのである。

勇龍が装飾がラステイションカラーの黒の刃渡り二尺三寸の無銘刀を進めてみたらノワールは即決して購入してプラネテューヌに向かったのであった。

「来てあげたわよ!! 病み上がりでも手加減は出来ないからそのつもりで!!」

「ノワールはそう来なくちゃ!!」

「へえノワールったら構え変えたんだね!!」

「まだ、前の手癖が残ってるけどちゃんと左で殴打技が出来るようになったわ!! ちゃんと剣帯まで買って左腰に鞘ごとさせるようにしたわよ!!」

「それじゃあ!! 始めようか!!」

しばらくしてプラネテューヌに星龍達が到着したのでバーチャルフォレストと一緒に武術の稽古をすることになったのだ。

ノワールは得物を刺突剣から龍姫達が好んで使っている刃渡り二尺三寸の黒い無銘刀を前に突き出すように構えていたのだが、勇龍と同じく右自然体に構えて肩に担ぐように構えて左手をいつでも殴打出来るように構えていた。

対するネプテューヌは体が真龍姫と龍愛翔と違いまだ小柄なため龍姫がくれた刀を真一文字に構えていた。

もちろん鞘は二人とも左腰に剣帯を装着しているのでそこに差していた。

但し模擬戦なので竹刀でやってもらうのである。

「手始め!! 魔神剣!!」

「ノワールもやっとな魔神剣覚えたんだ!! けどこっちは、魔神剣・双牙!!」

「もう!! 秘技が出来るの!! くうく!! だったら蒼破あ!!」

「何の!! 蒼破追蓮!!」

早速二人は修得した技を出し合っていたのである。

ノワールはネプテューヌがこの後、斬撃を六連射する奥義「魔神連牙斬」を繰り出してネプテューヌの勝利で模擬戦は終了したのである。

模擬戦に負けたノワールはネプテューヌに負けたことを悔しがっていたのは言うまでもない。

そのあと龍姫達も加わり楽しい武術の稽古が終わったのであった。

星龍達はラストেশョンに帰って行った。

龍姫達は教会に戻るのであった。

「ただいま!! いーすん!!」

「お帰りなさい!! みなさん!! 今日これで予定していたことは終了したので各自で好きにしてください!!」

「わかったよ!! いーすん!! 取り敢えず、お昼にしようよ!!」

「そうだね!!今日は星龍達と一緒に武術の稽古をしたからお腹がペコペコだもんね!! お昼ご飯作るの手伝って!!」

「わかった!!」

教会に戻ってきた龍姫達はイストワールから午後からは各自に好きな時間を過ごしてもいいということなので、龍姫達は台所に行き昼食をみんなと一緒に作ることにした。

「いただきます!!」

「美味しい!!」

「そりゃあ、みんなと一緒に作ったんだからね!!」

「龍姫のおかげであんなにも嫌いだったナスを食べれるようになったんだからね!!」

「そのためにお昼のメニューを「ナスのチーズ焼き」と「焼きビーフン」にしたんだね!!」

今日の昼食のメニューは「ナスのチーズ焼き」と「焼きビーフン」にしたようで、真龍姫と龍愛翔同様ネプテューヌも龍姫の手料理のおかげでナス嫌いを克服したのだ。

龍姫達は昼食を食べ終えたので食器を洗い、食器棚に片付けて各自

の部屋に戻るのであった。

この後アイエフとコンパがネプテユーンがナスをバクバク食べていてことを知って鳩が豆鉄砲を食ったようになったのは言うまでもない。

神託の神子

昼食を食べ終えた龍姫達は下宿している部屋に戻っていた。

龍姫は次元デバイス「イルミナル」を作動させて、

「イルミナル!! 咲耶達に連絡したんだけどいいかな?」

「マスター!! 大丈夫ですよ!! しばらくお待ちください!!」

自分が来た次元のゲームギョウ界にいる幼馴染みで今は自由聖騎士女神として龍姫の直属で働いているので、龍姫達がこっちにいる間は龍姫達に変わって国の業務をしているのである

閑話休題

「マスター!! 繋がりました!!」

「ありがとう!! イルミナル!!」

「龍姫!! 元気にしてる?」

「元気にしてるけど、そっちは大丈夫?」

「いーすんが仕事の邪魔さえしなければ問題ないわ!! もうほかの職員の人たちはわたししか刀夜が教祖になってくれて」

「こっちでもいーすんの所為で三年分の書類をやらされたよ(・ω・、)」

「そうだったの、そうだ!! 実は龍姫に教えておかなきゃいけないことがあったんだけ!!」

「何?」

あっちの次元のゲームギョウ界のプラネテューヌ教会にいる咲耶に繋がったので空中に大学ノート位のスクリーンが現れてそこに咲耶が映ったのだ。

どうやら、咲耶達はイストワールの邪魔さえなければいつも通りに執務を代行していると龍姫に明かした。

どうやらイストワールを教祖から外し、咲耶か刀夜に次期プラネテューヌ教会の教祖にすることをプラネテューヌ教会職員達の間で話があったことも龍姫に暴露していた。

龍姫も同意していた。

咲耶は龍姫に伝えたいことがあると言った。

「ベールが輝龍・飛龍だけじゃ心配だからって、ある程度の書類を片付けてチカと翔龍に代行を頼んでそっちに行っちゃただけど、会えた？」

「えええ!!Σ(。D)。(ベールがこっちのリーンボックスに来てるの!!Σ(。D)。(大丈夫かな(・ω・)後で輝龍に連絡とってみるよ、ありがとう、咲耶」

「どういたしまして、それじゃあ!! ちゃんと凛々の明星のように頑張らなさい!!」

なんと現在、龍姫達がいるこっちの次元のゲームギョウ界にあつちの次元のゲームギョウ界のベールが来ていることを咲耶から聞き驚きを隠せないでいた。

龍姫に頑張つてと言い咲耶は通信を切ったのである。

「さてと、輝龍達は今頃何してるのかな? ベールの偽名を聞かないと!!」

龍姫は輝龍達にあつちの次元のゲームギョウ界のベールが来ていることを聞くことにした。

とこころ変わって外史世界のリーンボックスのギルドでは

「お姉ちゃん!!会いたかったよ!! (T|T) /~~~~」

「わたくしもですわよ!!二人とも元気で何よりですわ!!そっちのわたくしとチカは相変わらずですの?」

「ゲームしながら書類を片付けてたりしてるよ!!もちろんボクたちが別次元のゲームギョウ界のリーンボックスの女神候補生であることはばれてないよ!!」

「それを聞いて安心しましたわ!!」

「そういえばお姉ちゃんは偽名は考えたの?」

「ええ、こっちの次元のゲームギョウ界ではあなた達の姉かぐらどうみこと「神楽堂神子龍」と名乗りますわ、そのために天界百貨店で買ったミニマイザーブラで象徴の豊満な胸をぺったんことは行きませんがTシャツを着てその上からツクヨミ様がくれたこの服を着ているのですわ!!」

「その服ってコレット・ブルーネル「神託の神子」のコスチュームだよ!!」

輝龍・飛龍はあつちの次元のゲームギョウ界のベールと再会していたのである。

今のベールこと神子龍はあの赤い二刀流の主人公の幼馴染みのベールと体型が違うが金髪碧眼の女の子の服を着ていたのだ。

もちろん靴がヒールではなく緑色のブーツを履いているのである。

あの大きくなった胸は天界百貨店で買った大きさを選ばなく大きい胸を小さく見えるブラ「ミニマイザーブラ」を着けていたのでぱっと見たら金髪碧眼の背の高いスレンダーな女の子に見えるのだ。

その上から白いTシャツを着ているのだ。

髪型はいつものお嬢様結びではなく二つ結びにしていた。

「それじゃあ教会にいきましようか!!」

「うん!!」

ベールこと神子龍と合流した輝龍・飛龍は下宿先のリーンボックス教会に向かうのであった。

神子と分史世界の緑

こっちの次元のゲームギョウ界にもう一人のベールこと神子龍が輝龍・飛龍と合流している頃、

「あ、龍姫ちゃんからだ!!」

「輝龍!! ベールと合流できた? できたら偽名教えてくれるかな?」

「あら!! 龍姫ではないですか!! 今のわたくしの名は神子龍ですわよ!!」

「神子龍だね、神子龍ちよつと聞いていいかな? その服確か「神託の神子」の服だよ、豊満な胸はどうしたの? いつもなら露出が多い服着てるのに」

「大丈夫ですわよ!! ちゃんとわたくしのダイナマイトボディは天界百貨店で購入した衣服で小さく見せてるだけですわよ!! 胸が揺れて擦れる心配がなくなりましたけど、早くドレスを着たいですわね!! 取り敢えずはこっちの次元のゲームギョウ界での仕事を終わらせることが先ですわ!!」

「どうもご丁寧にご説明ありがとうございます!!」

輝龍の次元デバイス「風神」に龍姫から連絡が来たので、輝龍が出ようとしたら神子龍が応答した。

龍姫は神子龍と名乗ってることを教えてもらって「神託の神子」の服を着ているのか尋ねたら、変装用にしていると教えられて、ちゃんとおの大きな胸を天界百貨店で買ったミニマイザーブラでぺったんこに見えるほど小さく見せているだけだと言い、通話を切った。

「さてと、此処が教会だよ!! お姉ちゃん!!」

「外史世界だけあって変わりませんわね!! こっちのわたくしとご対面しましょうか」

「そうだね!!」

輝龍・飛龍と合流したベールこと神子龍はこっちの次元のゲームギョウ界のリンボックス教会に入ることにした。

「お帰りなさい、その方は誰ですか? わたくしは此処リンボックスの女神グリーンハートですわ!! この姿ではベールですわ」

「わたくしは輝龍・飛龍の姉の神楽堂神子龍ですわ!!」

「どういうことですか!!。(。口。)」

「お姉さま落ち着いてください!!」

「何を驚いているのですの、別に二人にお姉ちゃんがいても何も問題ではないはずですよ!!確かにわたくしは神楽堂家に養子としてこの二人の姉になっていいるのですわ」

「そうでしたか(わたくしも養子に入って妹が欲しいですわ!!)」

姉である神子龍をこっちの次元のゲームギョウ界のベールに紹介するため教会の執務室に案内していた。

もちろんお互い自己紹介をしたのだが、神子龍を見るなりベールが輝龍・飛龍に姉がいることに驚きを隠せないでいた。

妹が欲しいと密かに言っていたことは言うまでもない。

一方その頃

「98・・・99・・・100!!ふうう素振りはこんな感じかな・・・」

「様になってるやんか!!龍琥!!」

「だって・・・たまには剣術・・・してないと・・・いざって時に・・・動けないと・・・困るから」

「そやたんやな、ごめんやで龍姫ちゃんと星龍ちゃんみたいに剣術出来んくて」

「武龍お姉ちゃんは・・・悪くないよ・・・」

「ありがとうな!!」

ルウイー教会の庭でロムこと「親善大使」の服の下に白のミニマイザーブラとTシャツを着ている龍琥は竹刀で素振りをしていたのだ。

そこに武龍がやって来たのであった。

「美龍飛ちゃん!!ウワアア——。(。・旦。)。——
——!!!」

「どうしたの!!ネプギアちゃん!!」

「覚醒した霸王の力に耐えられるプロフェツサーユニットがゲーム
ギョウ界の最先端技術を持ってしても作れないって」

「そうだったの、大丈夫だよ!!わたしが作ってあげるよ!!プロフェツ
サーユニットより軽くて丈夫なバリアジャケットを」

「バリアジャケットって何?」

「早速バリアジャケットの製作に取り掛かるから手伝って!!」

「わかったよ、美龍飛ちゃん!!」

美龍飛の下に着いたネプギアは泣きついた。

美龍飛はネプギアに訳を聞いたら、龍姫に話した内容を教えたの
だ。

それを聞いた美龍飛は以前龍姫が書いた企画書でバリアジャケッ
トを作ってあげると言い、早速取り掛かった。

作業はそれほど時間は掛からずバリアジャケットを完成させた。

早速、ネプギアは女神化して見たら、

「これがバリアジャケットかくプロフェツサーユニットより動きやす
い!!その上翼のプロフェツサーユニットが無い分軽いのか!!それで
も空を飛ぶことは可能なんだな!!」

もう一人のネプギアである美龍飛とお揃いのバリアジャケットに
なっていたのである。

閑話休題

「こんな胸じゃあお姉ちゃんと一緒に風呂に入れないよ!!それにユ
ニちゃんに嫌われちゃうよ!!」

「ネプギアちゃん!!どうしてお姉ちゃんのネプテューヌさんと一緒
にお風呂に入らないの?……ってその胸どうしたの!!Σ(。旦。)」

「美龍飛ちゃん……どうしよう胸が大きくなっちゃった……ウワアア
——。(。・旦。)。——!!!」

「落ち着いて!!別に気にしてないと思うよネプテューヌさんは(わた
しもお姉ちゃんより先に覚醒しちゃったからわかるんだけど)今日は

わたしと一緒にお風呂に入ろうよ!!」

「いいの!!ありがとう美龍飛ちゃん」

「この事は龍姫お姉ちゃんにはばれてると思うからネプテューヌさんにはわたし達の秘密にして後で驚かそうよ!!ねえ!!わたしのミニマイザーブラ一着あげるから」

「ありがとう美龍飛ちゃん!!」

どうやら胸も大きくなっていったのだその大きさは輝龍・飛龍並に大きくなっていったのを無理やりいつも着けてるブラの上からサラシを巻いて前の大きさまで潰していたのだ。

たまたま、美龍飛がネプギアがサラシを解いた所に来てしまったのだ。

ネプギアは美龍飛に泣きながら抱きついたので美龍飛は慰めた。

この事は感が鋭い龍姫にはとつくにばれていることを美龍飛はネプギアに教えてネプテューヌには二人だけの秘密にして言い訳をすることを約束して美龍飛は天界百貨店で買った大きな胸を小さく見せるブラ「ミニマイザーブラ」を一着ネプギアにあげることにして一緒にお風呂に入るのであった。

やはり・・・

美龍飛とネプギアは一緒にお風呂に入っているのだった。

「美龍飛ちゃんも大きい〜」

「何言ってるの、ネプギアちゃんも大きくなったでしょ」

「そうだけど、今思うとベールさんより大きいよね」

「言われてみればそうかもしれない」

「あのブラは大きくなった胸を小さく見せれるブラなんだね!! いいの貰っちゃって?」

「別にいいの、三着あるから大丈夫だよ!!」

「それじゃあ!! お言葉に甘えるね!!」

ネプギアは美龍飛のベールより大きな胸を見てさらに上がるところに驚きを隠せないでいた。

お風呂を堪能した二人はお風呂から上がるのであった。

脱衣所で早速もらった胸を小さく見せるブラ「ミニマイザーブラ」を着けてみることにしたネプギアは、

「このブラ、初めて着けてみたけど本当に胸が小さくなったみたいだよ!! これだったらお姉ちゃんとユニちゃんに嫌われなくて済むよ!! ありがとう美龍飛ちゃん!!」

「どういたしまして!!」

実際には大きさは変わっていないのだが小さく見えているのでネプギアのお気に入りなのセラワンピを着ても目立たないのである。

ネプギアは気に入ったのであった。

もちろんミニマイザーブラはかわいい子犬の絵柄が書かれたピンク色であった。

「ネプギアの馬鹿!! (T—T) (T—T) ウルウル」

「ごめんねお姉ちゃん、今度は一緒にお風呂に入ろうね!!」

「ええ!! 絶対だよ!!」

「約束するよ!!」

ネプテューヌはまだ拗ねていたのでネプギアは後日一緒にお風呂に入る約束をして謝罪した。

「お休み!!」

「お休みなさい龍姫さん、美龍飛ちゃん」

こうして龍姫達は各自自分の部屋に戻って就寝したのである。

翌日

「虎牙破斬!!」

「なんの!! 虎牙破斬!!」

いつも様に朝の空いた時間で武術の稽古をしているのである。

しばらくした後朝食を作るため教会に戻ることにした。

「今日は目玉焼きとベーコンとお豆腐のお味噌汁だよ!!」

「いただきます!!」

教会に戻ってきた龍姫達は朝食を作ったのである。

今日の朝食の献立は目玉焼きとベーコンと豆腐の味噌汁にした。

みなでおいしくいただいた。

「執務室に行こうか!!」

「龍姫がいーすんの代わりにやってくれお陰でわたしもなぜかお仕事
が捗るんだよね!!」

「イストワール様の事はほかの職員の人に聞いたら散々な言われよう
だったよ!!」

「それに関してはボクも同意してるよ(´・ω・´)」

「さてと、さっさと終わらせようぜ!!」

「応!!」

今日の書類を片付けるため龍姫達は執務室に向かう道中でほかの
教会職員がイストワールが教祖でいいのかと言うことを話していた
ことを龍姫達はネプテユールに教えて、龍音が同意したのであった。

執務室に龍姫達は入って行った。

分史世界の緑の女神の依頼

龍姫達は今日もいつも通り書類を片付けていたのであった。

今日は龍姫達がイストワールに変わってネプテユーンとネプギアのサポートをしているおかげで

「お姉ちゃん!!この書類で終わりだよ!!」

「わかった!!見切った〜!!必殺〜!!」

「龍虎滅牙斬もダメだよ。(。∩。)ノベシ!!」

あつという間に午前中の半分で片付けてしまった。

「ネプテユーン、今日は午後から四女神の会議があるからそれまでしっかり休んでね!!」

「ありがとう龍姫!!あくあ龍姫が教祖になってくれないかな〜」

「それは無理だよ!!ボクたちは雇われてる身分だからね」

「だって!!いーすんったら何をするにも人の30倍掛かるんだよ!!おまけにスケジュールを言い忘れてたりするんだよ!!」

「それにはボクも同意するよ(・ω・)」

ネプテユーンは龍姫が教祖になって欲しいと龍姫に向かってぶちまけていた。

龍姫はいずれ自分の住んでいるゲームギョウ界へ帰らないと行けないのでたぶらかした。

各々部屋に向かおうとしたら、

「こんにちは!!」

「ベール!!何しに来たの?」

「実は龍姫達とネプギアちゃんに用がありました」

「わたしに用ってなんですか?」

「実はわたくしがやっているオンラインゲームのイベントで特典のコードが無料配布されるのですが」

「開始時刻が会議と被ったんだね」

「はい、龍姫が言った通りですわ!!」

「神子龍達には頼んだだよね?」

「もちろんですわ!!神楽堂家には前日に依頼しましたから。それにし

て見ないうちにネプギアちゃんはわたくしより大きくなったんですの!!Σ(。D。)」

「実は美龍飛ちゃんトリリアルオーブで共鳴していたら美龍飛ちゃんが魔力をわたしに分けてくれていたらしく、それにわたしのシエアエナジーが共鳴したのが原因だってお医者様に言われまして」

「そうでしたの!!胸はそのままですよ」

「はい、大丈夫です(どうしようく本当は輝龍・飛龍ちゃん並に大きくなっちゃったんだけど)」

ベールが尋ねてきたのだ。

そのわけをネプテューヌが聞いたら、自分がやっているオンラインゲームのイベントに代わりに龍姫達とネプギアに欲しいと依頼してきたのである。

どうやら、四女神会議とイベント開始時刻が重なってしまったらしく、神楽堂家に一応依頼してあるが万が一あってはならないように龍姫達とネプギアに依頼してきたのだ。

ベールがリーンボックスにいる間にネプギアに身長を抜かされていることに驚きを隠せないでいた。

ネプギアは美龍飛とリアルオーブで共鳴したことによって自分の体内シエアエナジーが美龍飛が分けてくれた魔力が共鳴した影響で身長が伸びてしまったと説明して、ベールから胸は大きくなったのか聞かれたので、ネプギアは輝龍・飛龍並に大きくなったことをベールに伏せてごまかした。

「星龍と武龍達には依頼したんだよね?」

「何を仰っているのですの!!当たり前ですわよ!!あなたの幼馴染みたちに頼まないと言う選択肢はありませんですわ!!」

「流石、ベールだよ(。・ω・。)(どこに行ってもベールは娯楽関係は抜かりないだね(。・ω・。))」

龍姫は獅子神家と御子神家には依頼したのか尋ねたら、もう依頼したとベールがドヤ顔で返ってきて龍姫達は呆れて物が言えなかった。

イベント会場にて

プラネテューヌ教会にきたベールから午後から四女神会議とゲームのイベントが被ってるため代わりに行ってほしいと依頼された龍姫達は、

「夜空に瞬く凛々の明星の名に懸けてその依頼受けてあげるよ!!」

「ありがとうございますわ!!」

「もう、行った方がいいよね!!」

快く引き受けネプテューヌをベールに任せてイベント会場に向かったのであった。

「これが今日のイベントでもらう衣裳ですわ!!」

「わたしは自前があるからいいわ!!」

「勇龍は武術の稽古と料理の合間に趣味がコスプレだもんね」

「そうだったんですか!!Σ(。D。)」

「お姉ちゃん!!みんなの前でばらさないでよ!!」

「別にいいじゃない、いずればれるんだから!!」

「ではお願いしましたよ!!」

イベント会場に着いた龍姫達はベールがネプギア・ユニ・ロム・ラムにコスプレ衣裳を渡して龍姫達に渡そうとしたら、勇龍が自前を持っていてと答えで星龍がコスプレが趣味だとぼらした。

龍姫達はイベント会場に設けられている女子更衣室に向かった。

「このブラのおかげで助かった!!さっきユニちゃんに身長的事で僻んじやってから胸まで大きくなったことばれたらまた逆戻りにしちゃうもんね!!」

ネプギアは四女神オンラインと言われるゲームのロイヤルナイツの衣裳を着ることになった。

美龍飛がくれたミニマイザーブラのおかげでもとの大きさまで小さくできたので着ることができ、幸いにも肩が露出している以外露出がなかった。

「みなさん!!お待たせしました!!」

「龍音は客員剣士の服を着てるんだね!!」

「闇の炎に抱かれて消えろ!!なんてね!!お姉ちゃんはフェ○トのバリアジャケットの衣裳なんだねしかも長袖バージョンなんだね!!」

「おまもりひまりの緋鞠にしようかと思っただけ、あまりにもそのまんま感とライブの時にあずにやんのコスプレしてたし、一回だけメイドサムライ姿の緋鞠のコスプレやったことあるし、シャイニングブレイドのサクヤは着替えただけ感がありすぎたんだよ!!今日ぐらい猫称号から離れようかと」

「そういえば、ありましたね、その時アタシたち龍姫さんが女であることを始めて知っただけでしたっけ」

「そうだったね、龍華はTOXのジュードの医学生の時の衣裳にしたんだ!!なんでアルヴィンかTOIのルカにしなかったの?」

「この衣裳した理由は気にいったからです!!確かにその候補もありましたけどなんか地味だったのと、ロングコートを着なきゃいけないので動きずらいかなって思っただけですよ!!」

「そういえば、確かにルカの初期衣裳って地味だったよね、アルヴィンはロングコートかスーツだからね、星龍は高○な○はのバリアジャケットの衣裳にしたんだね!!」

「二応ウィッグで髪色は誤魔化しているから問題ないよ!!真龍姫ちゃんと龍愛翔ちゃんはカノンノのコスプレ衣裳にしたんだね!!かわいいよ!!」

「わたしがイアハートで、龍愛翔がグラスバレーの服だよ!!ホントは二刀流つながりでロイドかスパイダにしたかったんだけど違和感が半端なくてやめた!!」

「確かに、あの服は胸が大きな女の子が着るのは無理があるよね、武龍は八○は○てのバリアジャケットの衣裳にしたんだね!!」

「これが一番似合ってるコスプレ衣裳やで!!芽龍なんてプレセアの衣裳や!!」

「取り敢えず、着てみたけど何とかなかったわ!!」

「わたしと龍琥ちゃんは親善大使と四大精霊の主の露出がない衣裳にしたんだよね!!」

「俺は悪く・・・ねえ・・・」

「龍琥無理に台詞をまねなくても、うずめとプルルートはアスベルとソフィにしたんだね」

「これが一番しつくり来るからな」

「あたしはく未来のく系譜版のく衣裳にしたんだ」

「勇龍はユ○リ○の称号「心の聖騎士様」の衣裳にしたんだ!!」

「さっきの服でもよかったのだけど、流星にあのまま行くのは気が引けただけよ!!」

「もう勇龍ったら、輝龍・飛龍はT O Xのレイアの衣裳にしたんだ!!」

「だってジュデイスだと露出が多くて恥ずかしいんだよ!!それにお姉ちゃんはコ○ットだよ!!」

「もうこの服には慣れましたわ!!」

「確かに身長と胸の大きさが違うだけで、金髪碧眼と言う共通点はあつてるから似合ってるよ!!美龍飛はD O G D O Y Sのミ○ヒにしたんだね!!」

「本当は機械好き繋がりで護衛剣士の衣裳にしようと思ったんだけど、やっぱりこっちの方が似合ってたから、天龍ちゃんは?」

「ボクは高○ヴィ○のバリアジャケットにして見たんだよね!!」

「似合ってるよ!!」

「行こうか!!」

全員がコスプレ衣裳に着替えたのを確認して写真撮影をしながら会場の中に入って行った。

もちろんラピードは外でお留守番である。

イベント終了後の

龍姫達がイベント会場でコスプレしながらボールに依頼されたオンラインゲームの特典コードを入手している頃、

「龍姫と星龍と武龍と龍音はカッコイイね!!ネプギアはまだぎこちないけど」

「仕方ないわよ!!それにしても龍姫達はコスプレ衣裳がすごいわね!!それに真龍姫と龍愛翔の衣裳、かわいいわね!!」

「どうせ、着てみたい癖に!!」

「そんなじゃないわよ!!」

「いい加減にユニちゃんに暴露したら」

「そんなこと出来るわけじゃないじゃない!!」

「もうばれてると思うけど多分勇龍辺りがユニちゃんに告発してたりして」

「どうしよう!!勇龍の馬鹿!!」

「あちらさんは置いといて、美龍飛なんてイヌ耳まで付けちゃって!!」

「みなさんには後で写真を配りますわ!!」

四女神会議場でどういうわけか会場のホームページを見ていたのであった。

ノワールの趣味がコスプレだと勇龍がユニにばらしていたのは言うまでもない。

会場の外でお留守番をしていたラピードまで一緒に龍姫達と記念撮影していたの言うまでもない。

ゲームのイベントから数日後、

「今日はオーバーリミッツを教えるよ!!闘気を外に出すように、飛ばして行きますか!!」

「おお!!それがオーバーリミッツ!!確か四段階まであって、秘奥義はLV・3まで修得しなといけないんだっけ」

「そうだよ!!二人でLV・4を発動すると合体秘奥義が出来るんだよ!!」

「ネプギアはもう秘奥義修得しちやっただよね!!わたしも必ず修得

「して見せる!!飛ばして行きますか!!」

「お姉ちゃん!!もう、Lv. 3を発動できるようになったんだ!!」

いつも様に朝稽古をつけていた。

今日は戦闘術「オーバークリミッツ」の稽古をしていた。

龍姫がお手本でオーバークリミッツLv1を発動させて見せたら、

ネプテューヌは持ち前の天武の才でオーバークリミッツLv3を意図もたやすくやってのけてしまった。

秘奥義修得まで至ってない。

「きょうはこの辺にして朝ごはんにしようか?」

「そうだな、早いところ食って書類を片付けねえとな!!」

朝食を取るため龍姫達は教会に戻るのであった。

「さてと、作るのでしょうか!!」

「わたしも手伝う!!」

教会に戻ってきた龍姫達は台所に行き冷蔵庫から食材を出し、そこから出来るものを導き出して、調理を開始した。

ネプテューヌとネプギアは龍姫達に料理を教わってから龍姫達の手伝いを自ら進んで行うようになったのである。

「今日は焼き鯖と大根とにんじんのお味噌汁とたくあんだよ!!いただきます!!」

「いただきます!!」

今日の朝食は焼き鯖と大根とにんじんのお味噌汁と沢庵と言う和食メニューにしたようである。

「さてと、書類を片付けてゆっくりしよう!!」

「みんな!!腹括って!!行くよ!!」

全員「応!!」

朝食を食べ終え食器を片付けた龍姫達は書類を片付けるため執務室に入って行った。

龍姫達が書類を片付けるために執務室に入って数時間が経過した。

「この書類にハンコを押したら終わりだよ!!」

「わかった!!わたしに力を!!」

「明星式号装備してないのに天翔光翼剣!!。(。D。)ノベシ!!」

こうしてプラネテューヌの国家書類を片付けた。
龍姫達が来てから赤字になっていないのである。

「ふう〜!!」

「今日やった分で一週間〜二週間分終わらせたからね!!」

「これも龍姫達のおかげだよ!!わたしに教えてくれたんだから!!」

「武術以外何も教えてないけど?」

「何言いつてるのさ!!前にわたしが仕事場から逃げ出そうとした時に「そうやって現実に背を向けて何か変わったの」って言ってくれたじゃない!!そのあと龍姫たら休暇を返上してお仕事手伝ってくれたじゃない!!」

「そういえば、そんなことあったね!!ボクも傍から見ても、イストワール様が自分が出来ないことを棚に上げてネプテューヌに何でもかんでも押し付けてるように見えちゃったんだよ!!」

「そのあと龍姫がいーすんをお説教してくれたんだよね」

「ネプテューヌさん達が三年間ギョウカイ墓場に幽閉させられたのついでいーすんさんの所為だし」

「普通はそんな状態で敵の本拠地に行かせないけど」

「わたしも行かされて死を覚悟してたから!!けどツクヨミ様のおかげで此処に居ることが出来るんだから」

「そうだよね!!多分天界の上層部で話していたりして」

「まさか!!あり得そうだね!!」

今日一日掛けてやる書類を片付けてしまった龍姫達はリビングのソファアーに座つてくつろいでいた。

徐にネプテューヌが龍姫が以前自分が仕事場から逃げ出そうとした時、たまたま様子を見に来た龍姫に「そうやって現実に背を向けて何か変わったの」と諭し、龍姫は休暇だったにも関わらずネプテューヌと一緒にその日の分の書類と三日分の書類、計四日分を終わらせたのだ。

この後龍姫がイストワールにお説教をしたのであった。

とある海域の蛸退治

ゲームのイベントから数日が経ち一週間〜二週間分の書類を片付けた翌日、

いつも様に朝の武術の稽古を行っていた。

「爆炎剣!! 魔王炎撃波!! 鳳凰天駆!!」

「今日はここまで!!」

「流石お姉ちゃん!! もう鳳凰天駆修得したんだね!! 無理はしないでね!!」

「わかってるよ!! 早くご飯にしよう!! お腹減った〜(・ω・) ハラヘツタ〜」

キリがいいところで朝食を摂るため教会に戻るのであった。

ネプテューヌはあれから、地・水・火・風・闇・光を持ち前の天武の才であつという間に奥義まで修得してしまつた。

もちろん龍姫達から治癒術の手ほどきも受けていたのでレイズデッドまで修得してしまつた。

教会に戻つた龍姫達は足早に朝食を済ませ、台所で食器を片付けていたら、

「すいません、今大丈夫ですか? ちょっと龍姫さん達とネプギアさんに頼みたいことが」

「別に構わないけど」

「実はある海域でタコが大量発生してしま・・・」

「それをボクたちが片付けて欲しいと」

「はい!! 今日から三日間の休暇であるのはわかってるんですが」

「仕方ない!! わたしも行くよ!!」

「ネプテューヌは休んでて!!」

「そうだよ!! お姉ちゃん!! 龍姫さんの言う通りにしてないよ」

「そうだよね、また入院するのは嫌だもん!!」

イストワールが龍姫達にある海域でタコが大量発生したので駆除をいらしてきたので龍姫達は今日から三日間の休暇になっていたが快く引き受けた。

ネプテューヌはまた何かあったらいけないとまずいので教会で留守番をすることになった。

「あのく実は・・・」

「素手で片付けて欲しいんだよね!!」

「どうして、わかったんですか!!」

「だって、海に行くってことは環境保護区域に行くことくらい想定してない」と

「流石!! 天下の鳴流神家だね!!」

「取り敢えず、現場に向かおう!!」

タコを素手で片付けて欲しいとイストワールが言おうとしたら、龍姫に感づかれて言われてしまった。

ネプギアはどうしてわかったのか龍姫達に聞いたら、環境保護区域に行くことは想定していたと答えたのだ。

龍姫達はタコが大量発生している海域に向かったのである。

「海に入るってことは水着に着替えないとまずよね!! どうしよう!! (。D。) ノ胸が大きくなったことユニちゃんにばれたら嫌われちゃうよ!!」

「大丈夫だよ!! ネプギアちゃん!! わたしの次元デバイスのリライズ機能を使つて競泳水着に着替えれば問題ないよ!!」

「リライズ機能って何?」

「説明するより体験した方が早いよ!! お願い!! ショコラ!!」

「はい!! マスター!! この方の競泳水着のリライズを開始します!!」

現場の海域に到着した龍姫達は近くの更衣室で次元デバイスのリライズ機能で競泳水着に着替えていた。

ネプギアは胸が大きくなったことを胸にコンプレックスを抱いているこっちの次元のゲームギョウ界のユニにばれたら銃弾の雨霰を喰らうことを想像してしまっていたので、それを見かねた美龍飛は次元デバイス「ショコラ」をネプギアに向けてリライズ機能を作動させた。

光が収まるとそこにいたのは、

「これがリライズ機能なんだ、この競泳水着はどうしたの?」

「その競泳水着はトレーニング用に三着買ったものなんだよ、良かったらネプギアちゃんにあげるよ!!」

「いいの!!なんかもらってばかりで」

「気にしなくてもいいだよ!!息苦しくない?」

「大丈夫だよ!!美龍飛ちゃん!!それどころか胸が目立たなくなってるから」

「よかった!!それじゃあ!!お姉ちゃん達のところへ行こう!!」

「うん!!」

ワンピース型で太ももまで覆った薄紫色の競泳水着に着替えたネプギアがいたのである。

ネプギアが恐る恐る競泳水着の出所を聞いてみたら、美龍飛の四次元ポーチに入っている予備のフィットネス用を買った競泳水着であることを明かして記念にその競泳水着をあげることにしたのである。

大きくなった胸は競泳水着のおかげで小さく見せていたので目立たなくなっていた。

先に更衣室を出た龍姫達の下に向かうのであった。

蛸退治!! 開幕!!

緊急依頼でタコが大量発生した現場に到着した龍姫達は更衣室で露出が低いフィットネス用の競泳水着に着替えて向かった。

もちろんほかの三家も依頼されていたので、

「あら、龍姫ちゃん達も来てたんだ!!競泳水着にしたんだ!!」

「星龍達だつて一緒でしょ!!」

「なんや!!みんなもいてたんやな!!」

「武龍達は白のフィットネス用の競泳水着にしたんだね!!」

「わたしは白のビキニにしたかったけどタコが相手だったから」

「そんなことよりさつきと片付けますか!!」

各々が着ていた水着を見て思っていたことを言い、蛸に向かって行くのである。

もちろん得物を粒子化していても警報が鳴るようになってい場所なのでもちろん素手で蛸に向かって、

「喰らえ!! 魔神拳!!」

「双撞掌底破!!」

「鳳凰天駆!!」

「龍姫お姉ちゃんが・・・ライダーキック・・・で・・・火の鳥になっちゃった・・・」

「流石!!素手でもすごいわね!!龍姫は」

「そうですわね!!わたくし達も負けていられませんか!!」

天龍が拳を振り上げて衝撃波を放つ特技「魔神拳」を、プルルートが闘気を纏った拳で前進しながら二回殴打する奥義「双撞掌底破」を、龍姫は飛び上って、鳳凰の闘気を纏いながら素手での戦闘のためライダーキックに変更して特攻する奥義「鳳凰天駆」を一斉に繰り出した。龍姫の鳳凰天駆を見たロムは呆気にとられていた。

勇龍と神子龍は負けていられないと闘争心を露わにしていた。

もちろん神子龍はあの大きな胸は競泳水着でぺったんこに見せていた上に露出が少なくしていた。

そんなこんなで蛸退治を終わらせたのであった。

なぜかユニと龍華だけ蝟に襲われていたので龍姫達が助けたのは言うまでもない。

蝟退治を終えたのでそれぞれ自分の国に帰るのであった。

「ただいま!!」

「お帰り!!みんな!!大丈夫だった?」

「大丈夫だったよ!!」

「よかった、だって肝心の得物を持ち込めない環境保護区域に行くつて言うから心配したんだよ!!」

「何言ってるの!!体術も教えていたよね」

「そうだった!!ごめん忘れてたよ!!そうだよね!!龍姫達が戦闘中得物を失くした時のためにわたし達に体術を教えてくれたんだった」

「そうだよ!!ボクたちが教えているのは「古武術」って言われてるんだよ!!」

「古武術って何?」

「そうだったね!!簡単に説明すると体全体を使うことによって小さな力だけで相手を制する武術の事だよ!!」

「そういうば、前に下っ端を背負い投げで投げてませんでしたっけ?」

「確かに背負い投げで投げたけど、それがどうしたの?」

「綺麗に投げ飛ばしたのでわたしにも出来るかなって」

「出来るよ!!まずは受け身から覚えないとね!!」

「はい!!」

プラネテューヌ教会に戻ってきた龍姫達はネプテューヌが出迎えてきたのと、蝟にやられていないか心配していた。

龍姫達は大丈夫と答えたら、格闘術を教わったことを忘れていたネプテューヌに龍姫は教えていたのは古武術と呼ばれていることを教えたら、ネプテューヌが古武術は何なのか聞いて来たので龍姫が簡単に説明した。

ネプギアは以前ルウィーの世界中の迷宮で龍姫がアナゴ族もとい下っ端もといインカローズもといリンダを背負い投げで投げ飛ばしている事を思い出していた。

自分にもできるか龍姫に聞いたらまずは受け身を体に覚え差すの

が先と答えたのであった。

再びギョウカイ墓場へ

龍姫達が環境保護区域で素手でタコ退治を行い、休暇の三日間が過ぎいつも様に朝の稽古に勤しんでいた。

「三散華!! 閃空裂破!! 空破天裂陣!!」

「今日はここまで!! 中々の技の連携だったよ!!」

「龍姫にそう言ってくれるとなんだかやる気が出てきたよ!!」

「もう、お姉ちゃんたら」

ネプテューヌは自身が修得していた「ジャンピングアーツ」を龍姫達との武術で隙を小さくした三回無手で攻撃する特技「三散華」から、回転切りで舞い上がりながら斜め下に突きながら攻撃する秘技「閃空裂破」から、刀身に光を纏ませて前方に一回の突きで連続で攻撃する奥義「空破天裂陣」まで繋げて見せた。

稽古を終えて教会に戻ることにした龍姫達であった。

「ただいま!! いーすん!!」

「お帰りなさい!! 今日もお仕事を頑張ってくださいね!!」

「わかりました!!」

教会に戻ってきた龍姫達をイストワールが出迎えてきて、台所に向かうのであった。

台所でいつも様に龍姫達が朝食を作り、食べ終えて食器を片付けて書類を片付けようと執務室に向かおうとした矢先、

「ちよつと、ネプギアさん」

「ネプギア!! 先に執務室に行ってるから!!」

「わかったよ、お姉ちゃん!! いーすんさんどうしたんですか?」

「実はもう一回ギョウカイ墓場の調査をお願いしたいと思ひまして、今回ばかりは龍姫さん達「凛々の明星」には内緒で女神候補生と協力者のみなさんで向かってほしいんです!!」

「どうして、凛々の明星のみなさんに協力を求めないんですか?」

「龍姫さん達「凛々の明星」のみなさんのお手を煩わせるわけには行きませので」

「わかりました!! ギョウカイ墓場に行ってきます!!」

「お願いしましたよ!!ネプギアさんそして女神候補生のみなさん!!」
「これは一大事だよ!!みんなに知らせないと!!」

ネプギアだけイストワールに声を掛けられたので龍姫達は先に執務室に行くと言って執務室に向かって歩いて行った。

それを見届けたイストワールはネプギアを筆頭に女神候補生とアief達を連れてもう一回ギョウカイ墓場に行き調査をして欲しいと依頼されたのだ。

ネプギアはどうして龍姫達に依頼しないのか問いただしたら、龍姫達の手を借りるまでもないとイストワールはネプギアに言った。

それを聞いたネプギアは承諾し、転送装置に向かった。

「みんな!!」

「取り敢えず、揃ったわね!!」

「それじゃあ!!行くわよ!!」

ネプギア達はギョウカイ墓場に行くため転送装置に乗り、轉移した。

一方その頃

「ネプギアちゃん、遅いね!!」

「いーすんの頼み事でもいくらなんでも遅すぎるよ!!」

先に執務室に入って書類を片付けていたネプテューヌ達はネプギアが来ないことに違和感を感じていた。

その時だった、勢いよく扉が開いたのである。

そこにいたのは

「お姉ちゃん!!どうしたの!!そんなに慌てて」

「イストワール様がネプギア達をギョウカイ墓場に向かわせたんだよ!!」

「なんだって!!Σ(。D)ナンダッター!!」

「どうして、そんなことがわかったの?」

「実はネプギアとイストワール様が気になって戻ってみたらネプギア達だけでギョウカイ墓場に調査に行ってくれて話してる所に遭遇しちゃって、二人から見えないところで隠れて聞いてたんだ」

「こうしちゃ居られないね!!ネプテューヌさん!!戦闘は大丈夫ですか

？」

「もちろん!!万全だよ!!」

「話は聞かせてもらったわ!!」

「勇龍!!」

「何、ぼさつとしてるの!!行くわよ!!」

「応!!」

龍姫が血相を変えて執務室に入ってきたのだ。

そのわけはイストワールがネプギア達だけでギョウカイ墓場に調査に行かせたことを龍姫は二人に見えないように曲がり角に隠れて聞いていたことをネプテューヌ達に教えた。

それを聞いたネプテューヌ達は転送装置に向かおうとしたら星龍達と武龍達と輝龍達がたまたまプラネテューヌ教会に来ていたので。

そのまま合流して転送装置に向かったのであった。

「みなさん!!どうして此処に!!」

「話は後にしてくれるかな!!みんな!!行くよ!!」

「応!!」

転送装置の部屋に入ったらイストワールが龍姫達が入ってきたことに驚きを隠せないでいた。

龍姫達は転送装置に乗りギョウカイ墓場に向けて転移して向かったのであった。

マジック・ザ・ハード!!

龍姫達に極秘に一足先にギョウカイ墓場に到着したネプギア達は四女神達が幽閉されていた場所に向かつて歩いていたのである。

「ここだね!! いーすんさんが言っていた場所って」

「その通りよ!! ネプギア」

「なんでまたギョウカイ墓場に来るなって!!」

ネプギア達は依頼されていた場所になんだかんだ言いつつ到着したのだ。

その時だった、

「良く、ここまで来たな」

「まさか!! あの時の!!」

「そう、あの時お前の姉共々完膚なきまでにし、幽閉したマジエコンヌ四天王が一人、マジック・ザ・ハードだ!!」

「アンタがお姉ちゃん達をあんな目に会わせた張本人ってこと」

「いかにも、面白かったぞ、女神達が私の前にひれ伏したのは最高だったな!! ギャハハハ!! あの女神候補生がこんなにも成長しているとは夢にも思ってたぞ!!」

「それ以上お姉ちゃん達を侮辱するのは許しません!!」

赤み掛かった髪をノワールと同じくツインテールに結っていて、漆黒のプロフェツサーユニットを纏った、女神達が手も足も出なくて完膚なきまでに叩きのめされたあのマジエコンヌ四天王の一人、マジック・ザ・ハードが手に鎌を持ち、ネプギア達の前に姿を現したのだ。マジックは現れて早々、女神達のことを侮辱し始めたのだ。

それにネプギアの堪忍袋の緒が切れたのだ。

そして一斉に女神候補生は女神化して戦闘態勢に入ったのである。

「お姉ちゃん達のことを侮辱したおまえは許さない!! 虎牙破斬!!」

「ほう、あの時とは比べ物にならないほど強くなったものだ!!」

「ネプギアちゃんが覇王に・・・なっちゃった・・・」

「今思うとネプギアなのか信じがたいわ(´・ω´)けど、アンタは許さない!! マーシレスハント!!」

「わたし達はネプギアの援護よ!!」

霸王女神化したネプギアは斬り上げて、斬り下ろす特技「虎牙破斬」をマジックに繰り出していた。

それを鎌で受けたマジックは自分が纏っていたオーラが切り裂かれたことに驚きを隠せないでいた。

その光景を目の当たりしたロムは石化してしまった。

ユニはネプギアと同一人物なのか疑いながら前方に銃弾を三発放つ龍華とリアルオーブで共鳴して特訓で修得した特技「マーシレスハント」を放って、アイエフ達は援護に回った。

「飛ばして行くか!!」

ネプギアはオーバーリミッツLv3を発動させて、

「三散華!!」

回し蹴り↓左正拳突き↓踵落としの三連発にした特技「三散華」から入り、

「魔王炎撃波!!」

刀身に炎を纏わせて薙ぎ払う龍姫達から教わって修得した秘技「魔王炎撃波」に繋げ、

「獅吼爆炎陣!!」

獅子の鬨気を叩きつけて兜割りをしながら爆風を熾す龍姫達との特訓で修得した奥義「獅吼爆炎陣」さらに繋げて、

「巻き上がれ!! 旋風!! 光翔戦滅陣・旋迅!!」

風で巻き上げた後、そのまま追撃するバーストアーツ「光翔戦滅陣・旋迅」まで繋ぎ、

「心得よ!! 我が剣は女神の刃!! 六道の悪行を浄滅せん!! 關・魔神王剣!! 成敗!!」

刀で打ち上げて魔方陣で捉えて、大上段から一刀両断する霸王の秘奥義「關・魔神王剣」を繰り出したのだ。

「どうやら、わたしはおまえを侮っていたようだ、だが、そこにいるものはどうかな?」

「しまった!!ユニちゃん!!」

「うぐ!!」

マジックのプロフェッサーユニットを大破させたのだが、ネプギアを侮ったことに驚きを隠せないでいたマジックはあろうことか悪足掻きでユニを人質に取っていた。

マジックは人質にしたユニの左腕を掴みそしてボキッ!!と言う音と共にユニの左腕が

「ぎゃあああ!!ああああ!!」

「ユニちゃん・・・直してあげる・・・聖なる活力此処に!!　ファーストエイド!!」

「ユニちゃん!!許さない!!お姉ちゃん達でも飽き足らずユニちゃんまで手に掛けたことその命で償ってもらおう!!」

「何を言っている、この失態を招いたのはおまえの油断がそうしたのだ!!ギャハハハ!!死ね!!」

曲がってはいけない方向に曲がってしまった。

その上骨折した部分から骨が突き出して出血が見受けられていたのだすぐさまロムが武龍達に教わった治癒術「ファーストエイド」で応急手当を施した。

ネプギアはユニの左腕を破壊したマジックに怒りが爆発していたのだ。

マジックは得物であるデスサイズのような鎌でネプギア達に攻撃を仕掛けてきたのだ。

「ワン!!」

「ナイス!!ラピード!!」

「犬の分際で我に傷をつけたなく!!生かして返さん!!」

「させないよ!!　魔神剣!!」

「我の得物が!!」

「龍姫さん!!それにみなさんも!!」

「いい加減!!観念してくるかしら!!」

「どうやら、多勢に無勢の様だな!!次会うのが楽しみにしてるぞ!!」

「待て!!マジック!!」

マジックの攻撃がネプギア達に当たる寸前、マジックの死角からラピードが小太刀を口に銜えてすり抜ける特技「飛葉翻歩」で攻撃して

攻撃を中断させて、マジックの左頬に傷を付けた。

犬であるラピードに不意を突かれたマジックは怒りを露わにしたが、龍姫は斬撃を放つ特技「魔神剣」でマジックの得物である鎌を粉碎した。

駆けつけた龍姫達は得物をマジックに突き付けたのだが、マジックはテレポートして逃げてしまった。

「ごめんなさい・・・お姉ちゃん・・・わたしの所為でユニちゃんが泣いてる暇があるなら応急手当を手伝いなさい!!これは酷いわね!!折れた骨が皮膚を突き破って靱帯が切れてる可能性があるわ!!取り敢えず、命を育む女神の抱擁!! キュア!! わたし達が出るのはここまでね!!龍姫!!応急手当するから三角巾出してくれる!!それと添え木になるものも!!」

「わかった、三角巾と副木だね!!・・・これでいいかな?」

「ありがとう!!助かったわ!!・・・これで固定できたわね!!」

「わたしが運ぶ!!」

ネプギアは自分が油断した所為でユニがマジックに左腕をへし折られたことを悔やんでいたら、ネプテューヌは女神化した状態で泣いているなら応急手当を手伝えと怒鳴りつけてユニに治療術「キュア」を発動させて応急手当を施し、龍姫に三角巾と添え木になるものを要求した。

龍姫はポーチから三角巾とソフトシーネと呼ばれる副木を取り出して応急手当をしているネプテューヌに渡した。

ネプテューヌは龍姫達に教わった通りに骨折している患部を動かさずソフトシーネを持ってきたペットボトルに入ったミネラルウォーターで濡らして脱水して固定して、三角巾で腕を吊った。

ネプギアがユニを背負うことを志願した。

「取り敢えず、教会に帰ろう!!」

龍姫達は一旦教会に帰ることにした。

「」

後遺症

プラネテユーヌ教会に戻ってきた龍姫達はマジックに左腕をへし折られたユニをコンパが勤めている病院に搬送した。

病院に到着して早々外科医による緊急手術が行われていた。

もちろん姉のノワールも一緒にユニの手術が終わるのを待つのであった。

「わたしが・・・強かったら・・・ユニは腕をへし折れずに済んだのに!!。。。(。□。)。。。ワーン!! 絶対許さない!!」

「ノワール、落ち着いてよ!!」

「ごめんなさい!!」

「ノワールさん、わたしが油断さえしなければユニちゃんはこのことにならなかったんです!!」——?——●ごめんなさい!!」

「ネプギア!!あなたの所為じゃないわよ!!顔あげなさい!!そんなことじゃあユニに笑われるわよ!!」

「はい、わかりました!!」

手術が行われてる間、ノワールは自分の不甲斐なさに呆れて、マジックに怒りを表していたら、ネプテユーヌは落ち着くように言った。

ネプギアはノワールに土下座で謝罪していたら、ノワールはネプギアを励ました。

そして手術中のランプが消えて中からストレッチャーに乗せられて腕をギブスで固定されてアームスリングで腕を吊って麻酔で眠っているユニと執刀医と看護師が出てきた。

「先生!!ユニの腕は」

「落ち着いてください!!ブラックハート様!!手術は成功しました!!少しお話があるんですけどよろしいですか?」

「わかりました!!」

ノワールは執刀医にユニの手術は成功したのか聞いたら、執刀医は手術は成功しましたと答えたのだが、ノワールに話があると言い、ノワールは医師について行った。

「ボクたちができることはもうなさそうだね」

「取り敢えず、教会に戻っていーすんを問いたださないと!!」

「ネプギア!! 帰るよ!!」

「わかった・・・」

龍姫達はユニのことを星龍達に任せてプラネテューヌ教会に戻るのであった。

「お話しづらいのですが、腕を骨折させられた時に折れた骨で靭帯が切れていましたので」

「それってつまりユニはもう銃が使えないってことですか」

「はい、ユニ様には本当に残念ですが、そういう事になります、リハビリ行つて日常生活は送ることはできるんですが、我々が最善を尽くしたのですが」

「わかりました、ユニは内緒にします、失礼しました」

執刀医に連れられて診察室でレントゲン写真を見ながら説明を受けていたノワールは医師から折れた骨で靭帯が切れていたと宣告されていた。

それを聞いたノワールは医師にお礼を言い、部屋を後にした。

「ノワール、医師は何て?」

「折れた骨が靭帯を損傷してたつて」

「それってつまりユニは銃を使えないってことですか!!」

「その通りよ!!」

「どうするの? ユニに話すの?」

「今はその時じゃあないわ!!」

「そう、取り敢えず、ユニの病室に向かいましよう」

部屋から出てきたノワールに勇龍は医師と何を話していたのか聞いたら、医師からユニは左腕に軽い後遺症が残ると宣告されたことを星龍達に教えて、ユニの病室に向かったのであった。

それぞれの・・・

星龍達はマジックに左腕をへし折られてしまったユニの病室に来ているのである。

「お姉ちゃん・・・アタシ・・・」

「ユニ!! 目が覚めたのね!! 此処は病院よ!!」

「病院?」

「アンタはマジックに左腕をへし折られて気絶してロムと龍姫さん達が応急手当をして此処に搬送されたのよ!!」

「アタシはネプギアがマジックをやっつけたと思って油断して腕掴まれてそのままへし折られたんだった」

「そうよ!! けど、今はゆつくり休んで、怪我を治すことだけ考えなさい!!」

「わかった、お姉ちゃん・・・」

ユニが目を覚ましたので星龍達が此処に搬送された経緯を事細かに説明した。

ノワールはユニに療養に専念するように言った。

「お姉ちゃん、ネプギアに伝えといて欲しいことがあるんだけど」

「いいけど、何?」

「怪我したのはアンタの所為じゃないって伝えて欲しんだけど」

「わかったわ、今日は帰るけど、ちゃんと安静にすること、いいわね!!」

「うん」

ユニはノワールにネプギアに自己嫌悪にならないでと伝えて欲しいと言い、ノワールは承諾してユニに安静にするように釘を刺して病室を後にした。

一方その頃

「いーすん!! どうして!! わたし達に言わなかったの!!」

「それは龍姫さん達の手を煩わせるわけにはいかなかったの」

「それが理由なの?」

「はい、それと戦力を温存させるためでもあつたんです」

「なるほどわかったよ、けど次からはちゃんと教えてよね!!」

「すいませんでした!!」

プラネテューヌ教会に戻ってきた龍姫達はなぜネプギア達だけでギョウカイ墓場に行かせたのか問いただしたら、戦力の温存だと答えたので、龍姫達はわかったよと言いい、次からは必ず依頼して欲しいと言って執務室に向かって行った。

「お姉ちゃん・・・わたし・・・浮かれてたんだね」

「ネプギア、自分を責めないで!!」

「うん、わかったよ、お姉ちゃん・・・」

「気にすることはないよ、誰にだって出来ないことはたくさんあるんだから」

「龍姫さん達もですか?」

「うん、ボク達にも出来ないことはいっぱいあるんだから」

「そうですね、世の中簡単じゃないんですから」

「その通りだよ!!一緒に執務室に行こうか?」

「はい!!」

ネプギアは廊下で体育座りで壁にもたれて落ち込んでいたので、ネプテューヌはネプギアを励ました。

龍姫は誰にだって出来ないことはいっぱいあるとネプギアに言っ
て励まし、ネプギアは龍姫にも出来ないことはあるのか質問したら、
龍姫は笑みを浮かべながらその問いに答えた。

ネプギアは世の中がそう簡単じゃないと言いい龍姫達と一緒に執務
室に入って行った。

天狼滅牙!!

ネプギア達をギョウカイ墓場でマジックに襲われて龍姫達が助け出して二日が過ぎた。

今現在、龍姫達は朝の武術の稽古を行っているのである。

「龍姫!!今日はバーストアーツ教えてくれるんだよね!!」

「そうだよ!!もうネプテューヌはそのくらいに達してるからね!!まずは飛ばして行きますか!!」

「わかった!!飛ばして行きますか!!」

「オーバリーミッツを発動して!!どれでもいいから自分の好きな奥義を出すんだよ!!こうやって、蒼破牙王撃!! 腹括って!! 天狼滅牙!!」

「こうすんだね!! 魔神空牙衝!! 腹括って!! 天狼滅牙!!」

「流石!!お姉ちゃん!!手大丈夫?」

「だって!!ネプギアに先越されちゃったからね!!問題ないよ!!拳に闘気を纏ませて地面殴ってるからね!!」

「もつと本格的にやると、特技↓秘技↓奥義↓バーストアーツ↓秘奥義の順で出すことが出来るんだよ!!後は武能次第スキルでいろんな戦い方が出来るようになるよ!!」

「そうだったんですか!!そういうえば、勇龍がいつも右腕に着けてるブレズレットが気になってたんですけど?」

「ボレディブラステイア「武醒魔導器」って呼ばれてる物で武器に宿っている武能を修得したり、術技を修得するものなんだ!!もちろん勇龍もリアルオーブも使うよ!!」

「そんなことが出来る物だったんですか!!わたしには美龍飛ちゃんとリアルオーブで共鳴して覚えましたけど」

「取り敢えず、今日はこの辺して教会に帰ってご飯にしようか」

「うん!!」

今日はネプテューヌに戦闘術「バーストアーツ」を教えるため龍姫はオーバリーミッツLv1を発動させて、蒼破刃と牙狼撃の合体奥義「蒼破牙王撃」を繰り出して、地面を叩いた衝撃で怯ませて滅多斬りに

して切り抜けるバーストアーツ「天狼滅牙」を空振りして見せた。

それを見たネプテューヌはオーババリミッツLv1を発動して、魔神剣と瞬迅剣の合体奥義「魔神空牙衝」を繰り出して、龍姫と同様に地面を叩き衝撃で怯ませて滅多斬りにするバーストアーツ「天狼滅牙」を持ち前の天武の才で意図もたやすく修得して見せたのだ。

ネプギアは姉の飲み込みの速さに驚きを隠せないでいた。

ネプギアは龍姫に勇龍がいつも右腕に着けてるブレスレットのことを質問したら、武醒魔導器だと教えて、仕組みも龍姫が教えた。

龍姫達は朝食を取るため教会に戻るのであった。

「今日はハムとスクランブルエッグとお味噌汁だよ!!」

「いただきます!!」

教会に戻ってきた龍姫達はいつものように台所に行き、朝食を作ったのだ。

今日はスクランブルエッグとハムとお味噌汁にしたようである。

「ごちそうさま!!」

「今日も張り切って行こう!!」

朝食を食べ終えて、食器を片付けた龍姫達はいつものように執務室に入って行った。

龍姫達が執務室に入っていた頃病院では、

「ユニ、迎いに来たわよ!!」

「お姉ちゃん!!いつもだったら仕事で忙しいって言ってこない癖にどうしたの!!それに星龍さん達まで連れて」

「そんなことより、教会に帰って転送装置で天界の病院に行くわよ!!」

「どうして、天界に行かないといけないの?」

「ネプテューヌが天界の病院で入院してたのは覚えてるよね?」

「はい!!覚えてるますけど」

「そこでなら、あなたのその腕早く治せるかもしれないの」

「わかったわ!!お姉ちゃん!!アタシだって!!ネプギアに追い着きたいから!!」

「そうと決まれば教会に帰るよ!!」

星龍達が退院するユニを迎えに来ていたのだ。

ユニはいつもなら仕事があるので、星龍達が代わりにユニの介護に来ていたので、ノワールが来るのが珍しく思っていたのである。

ノワールは以前ネプテューヌがマジエコンヌのシェアエナジーで臓器をやられて引退を余儀なくされたが、以前より元気になったことを思い出してユニを天界総合病院の治療を受けさせることを明かした。

ユニはネプギアに追い付きたいと言い、教会に帰るのであった。

黒の診察

病院から帰ってきた星龍達はすぐさま教会の転送装置の上に乗リユニの左腕を治すために天界総合病院に向かった。

「此処が天界の病院なんだ」

「受付に行つてくるね!!」

病院に到着したので、星龍が受付に行き、残りのメンバーは病院の長椅子に座って待つことにした。

「取り敢えず、整形外科に行つてくださいだつて」

「わかったわ、ユニ、痛かったらちゃんと言うのよ」

「うん」

受付にいった星龍が受付の人から整形外科に向かうように言われたので、星龍達はユニを連れて行くのであった。

「ユニさん!!どうぞお入りください!!」

「それじゃ、行つてくるね、お姉ちゃん・・・」

「うん」

星龍達は整形外科の診察室に到着してしばらく側にあつた長椅子に座って待っていたら診察の順番が回ってきたのでユニは診察室に入つて行つた。

「うくん」

「先生!!アタシの腕、ちゃんと治るんですよね?」

「なるほど、これじゃあ、下界の医師たちが投げ出すのは無理ないですね」

「それつてつまり」

「単刀直入に申し上げますと、骨折した際、折れた骨で靭帯が切れていきます」

「そんなもうアタシは戦えないんですか・・・それともう銃を持つこともそんな折角、お姉ちゃんを助けだしたのに、(ㄟ ㄏグスン」

「これは下界の医療での話です、この程度の怪我は天界の医療技術では只の複雑骨折です、ですから泣かないでください」

「それじゃあ!!アタシの腕は動くんですか!!」

「はい!!」

「そういえば、アタシの知り合いが此処で手術を受けて治ったって
言っていました!!」

「それなら手術の日程を決め差してもらってもよろしいですか?」

「はい、よろしくお願いします!!」

「それでは、手術の日が決まりましたら、連絡しますので今日の所はお
帰りになって結構ですよ!! お大事に」

「ありがとうございます!!」

診察で医師がユニの左腕のレントゲン写真で術後の経過を診て、ユ
ニの左腕の靭帯が切れていたことをユニに教えたのだ。

それを聞いたユニは落胆したが、天界で手術を受ければ治るかもし
れないと医師が診断した。

ユニは手術を受けることを医師に告げた。

医師はユニに手術の日取りが決まったら連絡すると告げたのだ。

診察が終わったのでユニは診察室から出て行くのであった。

「ユニ、先生は何て」

「折れた骨が靭帯を切っちゃってるって、でもね先生がネプテューヌ
さんが受けた手術を受ければ治るって」

「よかつたくもしユニが左腕に障害が残るんじゃないかって心配した
わ」

「ごめんね、お姉ちゃん!!それに星龍さん達も」

「別に気にしなくてもいいよ!!」

「取り敢えず、教会に帰ろうか」

「うん!!」

星龍達は診察が終わったユニに診断結果を聞いたのだ。

ユニは診断結果の内容を事細かに星龍達に説明して、ネプテューヌ
が以前受けた手術を受ければ治ると言われたことを明かした。

それを聞いた星龍達は病院から連絡があるまで教会で待つことに
したので教会に帰るのであった。

黒の銃姫の復活

ユニが天界総合病院で診察を受けて、三日が過ぎたのである。ラスティション教会にユニの左腕の手術の日程が決まったと病院から連絡が入ったので星龍達はユニを連れて天界総合病院に向かうのであった。

手術の準備のためユニは星龍に患者服に着替えさせてもらい、待つことにした。

しばらくして看護師の人がユニを呼びに来たのでユニは看護師に手術室に連れられてもらうのであった。

そのままユニは手術室に入って行った。

「ネプテューヌから聞いたけどそれほど時間は掛からないって」

「そうなの!!それならしばらく待ちましょう」

ユニの左腕の手術が始まったので星龍はノワールに龍姫から以前ネプテューヌが手術がそんなに時間が掛からないこと聞いていたのでその事を教えた。

そしてしばらく待っていると、

「先生!!ユニは」

「落ち着いてください!!大丈夫ですよ!!後は三日間安静にしていれば治ります」

「ありがとうございます!!」

手術室からユニの左腕の手術を執刀した医師と看護師とストレッチャーに麻酔で眠っている左腕にギブスを巻いて三角巾で腕を吊ったユニが出てきた。

執刀した医師は三日間安静にするようにとノワールに告げた。

それから三日が過ぎたのであった。

「はい、終わりましたよ!!それでは軽く動かしてください!!」

「こうですか!!・・・本当に治ってる!!」

「もう心配はなさそうですね、もうクエストに行かれてもいいですよ!!でも無理はなさらないように!!」

「はい!!ありがとうございます!!」

「ユニ、どうやらもう前線に復帰しても良さそうね」

「うん、これで遅れた分を取り戻さないとね!!」

天界総合病院でユニのギブスが取れたのだ。

医師はもうクエストに行ってもいいと診断した。

ユニは医師にお礼を言い診察室を後にした。

ユニはネプギアに追い抜かれた分を取り戻すのに燃えていた。

星龍達は教会に帰るのであった。

ユニが全線に復帰して二日が経った。

「ユニちゃん!!。。。(□、)。。。ワーン!! 良かったよ!!もし左腕が動かなくなったらどうしようかと思っちゃよ!!」

「何言ってるのよ!!この前の怪我はアンタの所為じゃないわよ!!アタシが油断したのが原因なんだからいい加減泣き止みなさいよ!!もう大きくなっても変わらないんだから」

「うん、それを聞いて安心したよ!」

「そういえば、ネプテューヌさんは」

「お姉ちゃん達は午前中に今日の分の書類を片付けていたから、龍姫さん達とゲームしながら武術について教えてもらってるよ」

「そうなの!!」

「うん!!そうそう、この前ね、ノワールさんと勇龍さんと一緒に特訓したんだけど、お姉ちゃんとノワールさんは互角だって言ってたけど、勇龍さんは真龍姫さんと龍愛翔さんに子供の頃から何やっても勝てなかったって、そして余裕の顔でこう言うんだって!! 勇龍!!大丈夫?って」

「お姉ちゃんは兎も角、あのお姉ちゃんに武術の稽古をつけてる勇龍さんが真龍姫さんと龍愛翔さんに一度も勝ったことがないなんって!!」

プラネテューヌ教会にユニが星龍達の手伝いの合間に遊びに来たのでネプギアは泣きながら抱きついた。

ユニは泣き止むように言い、ネプテューヌが今何してるのか聞いたら、龍姫達が手伝っているおかげで、イストワールが監視もといアイエフを使って逃亡防止をしなくなったので、気楽に午前中に書類を片

付けていたので、ネプテューヌは部屋で龍姫達と一緒にゲームをしながら武術について教えてもらっていると教えた。

それを聞いたユニは目が鳩が豆鉄砲を食ったようになってしまった。

続けてネプギアは以前勇龍がノワールに武術の稽古をつけるついでに一緒に行った際、ノワールはネプテューヌと互角だと言い張ったが、勇龍は昔から何やっても真龍姫と龍愛翔に勝てなかったとネプギアにぶちまけたことをユニに教えたら、ユニは驚きを隠せないでいたのである。

四女神を持って成すの段

ユニの左腕が完治し、プラネテューヌ教会に女神候補生が遊びに来て、翌日

ネプギアを筆頭とする女神候補生と龍姫を筆頭とする凛々の明星のメンバーはプラネテューヌ教会の台所に来ていた。

その理由は遡ること一日前

「あのく龍姫さんちよつといいですか？」

「別にいいけど、何？」

「折り入ってお話があったことがあるんですけど、此処ではちよつと」

「なるほど、わかったよ」

「龍姫!!何してるの？」

「ちよつと、待ってて!!すぐ戻るから!!」

ネプギアは龍姫に個人的に話がしたいと言うので龍姫はネプギアに憑いて行くことにした。

ネプテューヌは龍姫が何してるのかと聞いたら、龍姫はすぐに戻ると答えた。

「で、話って何？」

「実はお姉ちゃん達にケーキを振舞おうと思っているんですけど、わたし達だけじゃ手が足りなくて」

「それでボクたちに手を貸して欲しいってことだね!!別に構わないけど」

「ありがとうございます!!それじゃわたし達でケーキの材料は用意するので龍姫さん達にケーキ作りを手伝ってほしいんです!!」

「わかったよ、これでもボクは甘党ほどじゃないけど甘いものは好きだから、それじゃ星龍達にも協力してもらおうように連絡してあげるよ」

こうして今に至るのである。

「こんだけ、出来たら十分だわ!!」

「さてと、わたし達はあれに着替えてきますか!!」

「わたしは龍姫さん達と一緒に着替えてくるね!!」

「早くしなさいよ!!」

十分な量のケーキが完成したので、全員があるものに着替えるため台所を後にした。

ネプギアは大きくなった胸をユニに見られてはまずいので龍姫達の部屋で着替えることにしたのである。

四女神達はと言うと、

「プラネテューヌ教会に行つて来いって言われたんだけど」

「ネプテューヌは何か知りませんか?」

「わたしも何も知らされてないよ!!」

「ネプテューヌに聞いても仕方ないわよ」

プラネテューヌ教会の執務室で待たされていた。

一方その頃

「これでよし!!ネプギアちゃん!!終わったよ!!」

「ありがとう!!美龍飛ちゃん!!ごめんねデバイスのリライズ機能でわたしまで着替えさせてくれて」

「別に構わないよ!!ユニちゃんにばれたら、それこそまた裏切りものにされちゃうよ」

「そうだね!!それにしても龍姫さんは流石、猫キャラのコスプレ差したら勇龍さんの次に似合ってますね」

「自分でも自覚してるよ(´・ω・´)」

「似合ってますわよ!!刀まで帯刀しちやってるんですから!!」

「神子龍は良くその胸がぺったんこに出来てるよね」

「当たり前ですわよ!!あのぺったんこ代表のブランを持って成すんですからこれぐらいのハンデは必要ですわよ!!」

「昔のわたしならその発言聞いたらブチ切れたが、それが今になってこんなだけデカくなっちゃったからな」

「お姉ちゃん・・・恥ずかしいから・・・やめて」

「龍琥の言う通りや!!ちゃんとしまっとかんと!!」

「ごめん!!つい出来心で・・・これでいいわ!!」

「どうやら、お姉ちゃん達が執務室に全員揃ったみたいなので」

「それじゃあ!!みんな腹括つて!!行きますか!!」

「けど、お姉ちゃんはオオトリだから合図があるまでは会議室の付近で待機していてよね!!」

「そうだった」

「それではみなさん行きますわよ!!」

「応!!」

龍姫達とネプギアは次元デバイスのリライズ機能を使ってメイド服に着替えていたのである。

コスプレが趣味のもう一人のノワールこと勇龍はノリノリで着替えていたのと言うまでもない。

もう一人のベールこと神子龍は自慢の大きな胸を封印して露出がないクラシックタイプのメイド服に着替えてぺったんこにした。

もう一人のブランこと芽龍は大きくなった胸を露出していたが、武龍に服に収めるように言われたので、胸を服の中に収めてぺったんこにした。

龍音はなぜか巫女服のような上着に、下は袴と言う俗に言う和風メイドの格好になっていた。

龍姫はと言うと、前にあつちのゲームギョウ界のリンボックスのホームパーティーで着たあの龍姫達が転生する前にいた地球のマンガに出てくる猫娘のメイド姿にコスプレしていた。

今回は髪型をツインテールにしているのであった。

もちろん、ミニスカートに胸が強調された上着が黒と白のアンティークタイプのメイド服に着替えて、頭に白猫耳のカチューシャと偽物の猫の尻尾を装備して、腰にベルトを巻きホルダーに刀を四振りごと差している状態で会議室の扉から見えないところで待機していた。

もちろん、剣術が出来るものは全員が刀を帯刀しているのである。

龍姫以外のメンバーは会議室に向かったのである。

ところ変わって執務室に集められていた四女神達を呼びがラピードが呼びに行った。

「ワン!!」

巨大ネズミ現る

凜々の明星と女神候補生の四女神お持て成し大作戦は猫耳メイド侍の龍姫の活躍より幕を閉じたのである。

それから三日が過ぎ、龍姫達はいつも通りに朝稽古に励んでいた。

「飛ばして行きますか!! 散沙雨!! 秋沙雨!! 驟雨双破斬!! 焼き尽くす!! 天狼滅牙・飛炎!!」

「今日はここまで!! 教会に帰ってご飯にするよ!!」

「わかった!! 早く帰らないと、いーすん達に怒られるからね!!」

ネプテユヌはオーバードリミッツLv1を発動して、連続で突きを繰り出す特技「散沙雨」から、同じく連続で突きを繰り出した後、龍姫達と同様に斬り上げる秘技「秋沙雨」に連携して、その散沙雨と虎牙破斬の合体奥義「驟雨双破斬」に繋げて、刀身に炎を纏ませて滅多斬りにするバーストアーツ「天狼滅牙・飛炎」まで連携した。

ちようどいい頃合だったので稽古を切り上げて教会に戻るのであつた。

「今日はお豆腐のお味噌汁と出し巻にして見たよ!!」

「それじゃあ!! いただきます!!」

教会に戻ってきた龍姫達は台所に行き朝食を作ったのである。

朝食を食べ終えて食器を片付けて執務室に向かおうとしたら、
「大変です!! ガベイン草原に巨大ネズミが出現して暴れまくっている
とリーンボックスから救援要請がありました!!」

「わかったよ!! 神子龍達を助けに行こう!!」

「応!! はい!!」

教会職員が血相を変えてきて、リーンボックスのガベイン草原で巨大ネズミが暴れていると緊急要請が入ったので龍姫達はガベイン草原に向かった。

「チュ〜!!」

「神子龍!! 輝龍・飛龍!! ベール!! 大丈夫?」

「何とかね!!」

「さっさと終わらせて帰るわよ!!」

「お姉ちゃん・・・お願いだから・・・抑えてよ!!」

「今の勇龍に何言っても無駄よ!!わたしだって久しぶりに本格的に戦闘だもん!!気持ちを抑えろってのが無理なんだから!!」

ガベイン草原に到着した龍姫達は先に来ていた星龍達と武龍達と神子龍達と合流したのだが勇龍がいつもの悪い癖が出てしまい得物である愛刀「ニバンボシ」を抜刀して構えていた。

同時に真龍姫と龍愛翔も得物をである二振りの刀を抜刀した。

全員が得物を構えて戦闘態勢に入った。

「ヂュー!!」

「遅いわ!! 蒼破追蓮!!」

「魔神連牙斬!!」

「覇道滅封!!」

「星影連波!!」

巨大化したワレチューに向かって、勇龍は蒼破刃を魔神剣・双牙同様に二回放つ秘技「蒼破追蓮」を、ネプテューヌは魔神剣を龍姫達同様に一発放つて、後から纏めて五連射する奥義「魔神連牙斬」を、美龍飛とネプギアは同時にあの霸王同様に刀身より闘気を圧縮して開放する奥義「覇道滅封」を、うずめは以前龍姫に教わった隕石の名を持つ主人公の三日月型の斬撃を三連射する秘技「星影連波」を一斉に繰り出した。

巨大ネズミことワレチューは、

「ヂュー!!」

「元の姿にもどった!!」

龍姫達の猛攻を受けて元の大きさに戻って気絶したのであった。

ゲームギョウ界の定められた正しい法&陽動作戦

ガベイン草原に突如現れた巨大ネズミことワレチューを気絶させた龍姫達一行はプラネテューヌ教会に集まっていた。

「どうやら、ギョウカイ墓場から犯罪神の力が漏れ出してるらしいんですが、今の段階では成す術がないので」

「そうだったんだ!!」

どうやらワレチューが巨大化したのはギョウカイ墓場から漏れ出した犯罪神の力の欠片の所為だとわかったのだ。

「これより、マジコンを所持及び販売したものは罰すると言う法を発表します!!」

「異論はないよ!!」

「珍しいわね、ネプテューヌが、いつもだったらなんで言うのに」
「わたしは龍姫達のおかげで死の淵から帰ってこれたんだからそして、今のゲームギョウ界には「人々が安心して生活するには、ゲームギョウ界の定めた正しい法が必要なんだよ!!」わたしは女神であることに生き甲斐が出来たんだよ!!」

「ネプテューヌ・・・ありがとう」

「ねねネプテューヌの口からそんないい言葉が出てくるんなんて!!」
（。口。）あなた、この後の後遺症が出てるんじゃないわよね?」

「もうノワールだったら幼馴染みなんだから、ノワールだって星龍達のおかげで自分に気づかされたでしょう?」

「そんなこと・・・ないわよ」

マジコンを撲滅するための法が此処に可決されたのである。

ネプテューヌが落ち着いていたのでノワールが不思議がっていたので聞いていたのだ。

するとネプテューヌは龍姫達に助けられたおかげで自分は生きていいると言いつつ、「人々が安心して生活するには、ゲームギョウ界の定めた正しい法が必要だ」とノワールをあの龍姫達が教えてくれた主人公「黒衣の断罪者」に見立てて言い放った。

ノワールは後遺症かと疑っていたが、ネプテューヌはそのままノ

ワールに星龍達と一緒にいて変わったのかと質問したら、いつものツンデレで返した。

「お姉ちゃん・・・」

「ごめんね、心配掛けちゃった?」

「ううん、今お姉ちゃんが龍姫さん達みたいに格好よかったから、つい見とれちゃった」

「これにて各自解散です!!」

「さてと、ボクたちはお昼にして休憩して、書類を片付けるとしましよ
うか!!」

「応!!」

ネプギアは以前の姉だったらあそこまで口でノワールを言い負かせてしまうなんてことはなかったのに言い負かしてしまったことに驚きを隠せないでいた。

法案成立したので各自解散になったので龍姫達は昼食を取って少し休憩を挟んだ後書類を片付けることにしたのである。

それから三日が過ぎた。

「どうやら、ラストেশヨンにマジコン製造工場が見つかったって連絡があったわ!!」

「わかりました!!」

「(さてと、ボクはちよつと美龍飛達と作戦会議だ!!)」

アイエフが珍しく諜報部らしい仕事をしていた、どうやら、ラストেশヨンにマジコン製造工場が見つかったと連絡が入ったらしいのだが、龍姫はそれが四ヶ国を巻き込んだ陽動作戦であることに逸早く気づいたのでラストেশヨンに向かうのメンバーの目を盗んで美龍飛達とある作戦の打ち合わせに向かった。

「ごめん、待った?」

「いいえ、今来たところですよ」

「手短に言うよ、多分アイに入った情報は此処プラネテューヌをがら空きにするための陽動作戦だよ」

「なるほど、流石!! 武龍お姉ちゃんの幼馴染み!!」

「けど、ボクはラストেশヨンに向かわなきゃいけないからこつちに

はいられないだよ」

「そんなことは百も承知だよお姉ちゃん!! 大丈夫行ってあげてボクたち六人が此処に残るんだから」

「それじゃあ!! 無茶はしないこと」

「はい!!」

龍姫は前もってプラネテューヌ教会の自分が下宿している部屋に美龍飛・龍華・龍琥・美礼・龍音・天龍を呼び寄せていた。

龍姫は手短にこれが四ヶ国を巻き込んだ陽動作戦であると明かした。

六人は口裏を合わせて龍姫の作戦に賛成して、龍姫をラストেশヨンの討伐隊に送り出した。

「さてと、作戦通り此処に待機しよう」

「そうね!! 多分此処に攻めてくるのはあいつしかいないから」

「マジック・ザ・ハードだね」

「今、英気を養つとかないとね!!」

「そうしよう」

美龍飛を筆頭とするプラネテューヌ防衛組は龍姫が下宿している部屋でしばらく体を休めることにしたのであった。

潜入!! マジコン製造工場!!

ラストイションにマジコン製造工場があると聞いてそれが四ヶ国を巻き込んだ陽動作戦であることを見抜いた龍姫は美龍飛達にプラネテューヌ教会でプラネテューヌに攻め込んだ時に防衛するようプラネテューヌ教会に味方にも悟られないように待機するように指示を出していた。

「龍姫さん!!美龍飛ちゃん達はどうしたんですか?」

「実は美龍飛達は別件の用があつてこつちに合流できないって連絡が着たんだ!!」

「ネプギア、仕方ないよ!!美龍飛達だつて都合つて物があるんだから」「そうだね」

ラストイションに到着した龍姫達は情報通りマジコン製造工場が存在したので潜入していた。

ネプギアは龍姫に美龍飛達がないことが気になってしまったので尋ねたら、龍姫は悟られないように誤魔化した。

マジコン製造工場には製造する機械が所狭しと並んでいた。ネプギアの親善大使の護衛剣士並の機械好きに拍車が掛かってしまい、

「此処がマジコン製造工場ですか(★)U(★)」

「何、アンタははしゃいでんのよ!!。(。D。)ノベシ!!」

ユニに止められたのであつた。

しばらく進んでいると、

「我々、もう少しでマジエコンヌの物だ!!気合い入れていけよ!!」

「応!!」

アナゴ族もといインカローズもとい下っ端もといリンダが部下に指示を出しながらマジコンを作っていたのだ。

おまけにアナゴ族もといインカローズもとい下っ端もといリンダは部下が言い返さないことをいい事に八つ当たりをしていたのである。

そして龍姫達は、

「ねえ、インカローズ」

「つて!!暴力黒髪ポニーテール侍ども!!」

「はしやぎすだよ」

「そろそろ」

「舞台から」

「降りてくれないかしら?」

「あのくみなさん目が怖いんですけど!!」

アナゴ族もといインカローズもとい下っ端もといリンダは得物を
持ってジト目で背後に立っていた。

「こうなったら、掛かってこい!!」

アナゴ族もといインカローズもとい下っ端もといリンダは龍姫達
が発する黒い何かに耐え切れず自棄になってしまった。

「喰らいやがれ!!」

「此処はくあたしにくらせてく!! 獅子戦吼!!」

「うぎやー!!」

「わかったよ、無理しないでよ!!プルルート」

アナゴ族もといインカローズもとい下っ端もといリンダは龍姫達
に鉄パイプを大上段に構えたまま攻撃してきたのだが、プルルートが
紫色の獅子の形の鬨気を叩き付ける秘技「獅子戦吼」を繰り出してア
ナゴ族もといインカローズもとい下っ端もといリンダを吹き飛ばし
て攻撃を中断させた。

「このアタイとサシでやろうてか!!笑わせてくれるぜ!!」

「アナゴちゃん相手だったら素手でく十分だよ」

「後悔するなら今の内だぜ!!」

アナゴ族もといインカローズもとい下っ端もといリンダはプル
ルートに一騎打ちを申し出てしまったのである。

この時、アナゴ族もといインカローズもとい下っ端もといリンダは
これが負けフラグであることを知る由もなかったのだった。

黒の正義!!

マジコン製造工場に潜入した龍姫達はやりたい放題に指揮を執っていたアナゴ族もといインカローズもとい下っ端もといリンダと遭遇した。

今、そのアナゴ族もといインカローズもとい下っ端もといリンダとプルルートが一騎打ちをしていたのである。

「喰らいな!!」

「遅い〜!! 双竜脚〜」

「ぎゃ〜!!」

「明らか、実力に差があるんですけど(・ω・)」

「仕方ないよ、だってあの龍姫が直々に武術を教えてるんだから」
「そうね」

リンダは得物である鉄パイプで攻撃してきたのをプルルートはあっさりかわして、自分と同じく紫色の髪をツインテールに結って花の名を持つ格闘少女の素早く左右に蹴り飛ばす特技「双竜脚」を叩き込んでいた。

あまりにも実力の差があったので、ユニは呆れて何も言えなかったのであった。

その時だった、

「リンダ!! 此処はもういい!! 後は俺に任せて先に行け!!」

「ありがとうございます!! ブレイブ・ザ・ハード様!!」

「やつとお出ましか!!」

マジエコンヌ四天王のブレイブ・ザ・ハードが現れたのである。

アナゴ族もといインカローズもとい下っ端もといリンダに此処は任せると言い、リンダは一目散に逃げていった。

そして勇龍が前に出て、

「世のためだろうが何だろうが、それで誰かを泣かせてたら世話ないわね!!」

「それがどうした、そういえば、おまえ達の名を聞くのを忘れていたな」

「そうね自己紹介がまだだったわね!!わたしは獅子神家の次女!! 獅子神勇龍よ!!またの名は「ユリー・ローウェル黒衣の断罪者」よ!!」

「・・・それ、ゲームの主人公の名前だよ(´・ω´)」

愛刀の「ニバンボシ」を抜刀しながらブレイブ・ザ・ハードに向かつて、あの「黒衣の断罪者」が反逆した騎士団長に向かつて行った台詞を一字一句間違えずに言い放った。

ブレイブはそれがどうしたと言って、勇龍に名を尋ねた。

勇龍は偽名とあの「黒衣の断罪者」の本名を名乗ったのである。

それを聞いた龍姫は呆れてしまっていた。

「ブレイブ!!勇龍さんの言う通りよ!!」

「ならば、此処で戦うまでだ!!」

「わかったわ!! アクセス!!」

ユニは勇龍の言ったことが正しいと言い張ったのだが、ブレイブは得物である両刃の大剣を構えた。

ユニは女神化したのだがプロフェツサーユニットが露出が多くなりいかにもそれで防御力があるのか心配なほど、とんでもないことになっていたのだが、当の本人はお構いなしに戦闘態勢に入ったのである。

龍姫達「凛々の明星」と女神達とマジエコンヌ四天王のブレイブ・ザ・ハードとの戦いの火蓋が切って落とされた。

ところ変わってプラネテューヌでは、

「此処には幼女教祖がいるんだったな!!」

マジエコンヌ四天王のトリックがイストワールを人質にとるとプラネテューヌの近くまでやってきたのである。

美龍飛達が待ち構えているのも知らずに。

マジコン製造工場では龍姫達とブレイブ・ザ・ハードとの激しい戦闘が繰り広げられていた。

「喰らいなさい!! アイสบレット!!」

「魔神剣!!」

「何のこれしき!! はああ!!」

「キャ!!」

「ユニ!! 治すね!! 聖なる活力、此処に、ファーストエイド!!」
「ユニ!! しっかりして!! 許さない!!」

ユニは氷の銃弾を発射して、ノワールは勇龍との特訓で修得した斬撃を放つ特技「魔神剣」を放ったがブレイブ・ザ・ハードは得物である大剣を横に振り抜き相殺してしまった。

その風圧でユニが吹き飛ばされて壁に背中から激突してしまい、そのまま気を失ってしまったのである。

すぐさま龍華が駆け寄り治療術「ファーストエイド」で回復を試みていた。

その光景を目の当たりにしたノワールは万全でないのに女神化してブレイブ・ザ・ハードに刀を向けて怒りを露わにしていた。

もちろん、

「魔皇刃!!」

「霸道滅封!!」

「古に伝わりし浄化の炎!! 落ちよ!! エンシエントノヴァ!!」

「グッ!! 流石は聖龍王に目覚めさせた者たちだな!!」

龍姫は一回横に薙ぎ払い刀を地面に叩き付けて斬撃を放つ魔神連牙斬よりは射程はないが威力がある奥義「魔皇刃」を、ネプギアは美龍飛に教わった以前に愛用していたビームマルチブラスターのように刀身より鬨気を解放する奥義「霸道滅封」を、ネプテューヌは以前、龍姫達との特訓で修得した古の炎を天空から落とす上級魔術「エンシエントノヴァ」を発動させた。

流石のブレイブ・ザ・ハードもこれには驚きを隠せないでいた。

この時、ユニにある変化が起きようとしていたのである。

魔王灼滅刃!!

ブレイブ・ザ・ハードの攻撃で気を失ったユニにある人物が語り掛けてきたのだ。

「おい・・・おい・・・起きろ!!」

「ううう、誰よ!!アタシに話しかけてきてるのは!!」

「やっと起きたか、今度はこんな小娘だったのか、俺の名はアスラだ!!」

「はあ?アスラ?確かアスラって龍華の二つ名だったわね」

「どうやら、時間がないみたいだな、手短に言うぞ!!さっさと俺を呼べ!!」

「はあ!!なんでよ!!ってアタシの中で何、やってるのよ!!この変態!!」
「今の状態で何が出るのだ!! ゲームギョウ界を救いたいならさっさと呼べ!!馬鹿もん!!」

「わかったわよ!!お願い!!アタシに力を貸して!!アスラ!!」

なんと、あの黒い甲冑を着た戦神「アスラ」がユニに語り掛けてきたのである。

アスラはユニに自分を呼べと命令したのだ。

ユニは言う通りにアスラの名を呼んだのだ、すると、

「何?この炎!!」

「ユニ!!今助けるから!! って離しなさい!!ユニが!!ユニが!!」

「あなたが落ち着なさい!!ユニは大丈夫よ!!」

ユニをネプギア同様に黒い炎が包み込んでしまったのである。

それを見たノワールはユニが覚醒しているのがわからず駆け寄り寄るとしたら、勇龍が立ちはだかつて止めたのである。

「何か知らないが、行かせてもらおうぞ!!」

「やらせるかよ!! 光破刃!!」

ブレイブ・ザ・ハードはお構いなしに大剣でユニに斬りかかったのだが、うずめが蒼破刃の光属性版の特技「光破刃」を放って攻撃を阻止した。

しばらくしてユニを包んでいた黒い炎が消えそこにいたのは、

う秘技「魔王炎撃波」で向かい打つたのだ。

どうやらユニが繰り出した魔王炎撃波が勝ったのかブレイブ・ザ・ハードの得物である大剣が真つ二つに折れていたのだ。

すかさずユニは星龍達に教わった戦闘術「オーバリーミッツ」を行い、オーバリーミッツLv3を発動させて、

「裂空斬!!」

大剣で垂直にあらうことか縦回転斬りで斬りつける特技「裂空斬」から入り、

「火炎裂空!!」

そのまま炎を纏いながら垂直回転斬りで斬りつける秘技「火炎裂空」に繋げ、

「散なさい!! 烈風月華衝!!」

裂空斬と弧月閃の合体奥義「烈風月華衝」に繋げ、

「腹括りなさい!! 天狼滅牙!!」

地面を叩いて怯ませて滅多斬りにするバーストアーツ「天狼滅牙」まで繋ぎ、

「天を統べる覇者の証よ!! 魔王灼滅刃!!」

「さらばだ、ユニ」

大剣で兜割りをした後、大剣で特攻して切り返してまた特攻する秘奥義「魔王灼滅刃」を繰り出した。

ブレイブ・ザ・ハードはユニにゲームギョウ界の未来を託し光になつて消えつて逝つた。

「アンタの思い、確かに受け取ったわ!!」

ユニは決め台詞を言つて女神化を解いたのであった。

闇の炎

マジコン製造工場でブレイブ・ザ・ハードとの戦いはユニが覚醒したことによって幕を閉じたのであった。

ブレイブ・ザ・ハードが戦いに敗れていた頃プラネテューヌでは、

「幼女!! バンザイ!!」

「魔神剣!!」

「誰だ!! 人が楽しんでる時に攻撃してくる奴は?」

トリックがイストワールを人質に取ろうとしていたが、どつからともなく斬撃を放つ特技「魔神剣」が飛んできてトリックに命中させたのだ。

トリックは不意を突かれたことにキレていた。

「はしやぎすぎましたね」

「トリック・・・」

「そろそろ」

「舞台から」

「降りて」

「くれないかな?」

「どうして熟女のお前らが此処に居るのだ!! 女神どもと一緒にブレイブ・ザ・ハードの所に行ったはず、まさか!!」

美龍飛達が物陰から出てきて各々に得物を構えて、「はしやぎすぎ、トリック、そろそろ舞台から降りてくれない」とあのセリフを六人で分けてトリックに言い放った。

トリックは龍姫達と一緒に行ったと思い込んでいた。

「こうなった以上!! まとめて相手をしてやる!!」

「行くよ!! みんな!!」

「わかった!!」

美龍飛達の待ち伏せにより作戦が台無しになったトリックは自棄になり、長い舌で攻撃を仕掛けてきたのだ。

美龍飛達はあっさりとかわし、戦闘態勢に入った。

「おまえらは許さん!!」

「アンタに許される筋合いはないわよ!! 魔神剣!!」

「裁きの十字、敵を討て!! ブラッディクロス!!」

「鳳凰天駆!!」

「ぎゃ〜!!」

トリックは美龍飛達に怒りを露わにしていたので、動きにキレがなかった。美龍飛達はいつものようにかわし、龍華は斬馬刀で斬撃を放つ特技「魔神剣」を、龍音が闇の十字架で攻撃する中級魔術「ブラッディクロス」を、天龍は上空から鳳凰の闘気を纏って特攻する奥義「鳳凰天駆」で攻撃した。

トリックは喚き声を上げていた。

「ありえん!!マジエコンのシェアエナジーのオーラが通用しないはずは・・・」

「いい加減しなさいよね!! 天光満ところに我はあり、黄泉の門開くとき汝あり、出でよ!! 神の雷!! インディグンネイション!!」
「ぎよえええ!!」

「さてと、さつさと終わらせてお姉ちゃん達に合流しないとね!! 飛ばして行きますか!!」

「援護するわ!! 龍音!!」

美礼は神の雷を落とす上級魔術「インディグンネイション」をトリックの頭上に落とした。

それをまともに喰らったトリックは悲鳴を上げていた。

龍音がオーバリーミッツLv3を発動させたのだ。

残りのメンバーは援護に入った。

「べろーん!!」

「汚い!! 虎牙破斬!!」

「俺のじだがが」

トリックは舌で攻撃してきたのだが龍音が斬り上げて、斬り下ろす特技「虎牙破斬」で切断した。

トリックは呂律が回らなくなっていた。

「月閃光!!」

三日月の軌道を描きながら斬りつける特技「月閃光」を繰り出し、

「月閃虚崩!!」

そのまま斬り下ろす秘技「月閃虚崩」に繋げ、

「崩龍斬光剣!!」

zを描くように斬りつける奥義「崩龍斬光剣」に更に繋げて、

「焼き尽くす!! 光翔戦滅陣・獅炎!!」

爆風で周囲を攻撃した後、左手で逆手に小太刀を持ったまま獅子の闘気で攻撃するバーストアーツ「光翔戦滅陣・獅炎」に繋げて、

「邪魔だよ!! 塵も残さない!! 行くよ!! 浄破滅焼闇!! 闇の炎に抱かれて消えて!!」

「俺は、ロムちゃんかラムちゃんにやられたかった」

左に逆手に持っていた小太刀を一瞬で順手に回転させて、交差させて、闇の炎を纏った二刀で

葬り去る秘奥義「浄破滅焼闇」を繰り出した。

それを喰らったトリックはロムかラムに葬って欲しかったらしく、光なつて消えて逝った。

「勝てると思った?」

龍音は決め台詞を言っていたのである。

「お姉ちゃん達、今頃どうしてるんだろう?」

「多分あつちも終わってるんじゃない?」

「そうだね!!」

美龍飛達は一休みをしてから龍姫達に連絡することにしたのであった。

逆手に利用

マジエコンヌの陽動作戦を逆手に取った美龍飛達はトリツクの部下達が逃げていくのを見届けていたら、

「これって、スマホだよ!!」

「どうする?」

「流石に勝手にフォルダを見るのはダメだよ!!」

「取り敢えず、後でおまわりさんにでも届けたらいいよね」

「そうしよう!!」

どうやら部下の一人がスマホを落として逃げて行ってしまったので、龍音が拾って四次元ポーチにしまって、後で交番に届けることにしたのである。

一方その頃

「あれ?ベール、鳴ってるよ!!」

「あら、チカからですわ!!・・・えええ!!Σ(。D。)」

「どうしたのよ!! ベール!!」

「リーンボックスで犯罪組織が大暴れしていると連絡が入りましたわ!!

Σ(。D。)」

「急ぐわよ!!」

「此処は黙ってついて行こう!!」

マジコン製造工場でブレイブ・ザ・ハードを倒した龍姫達にチカからリーンボックスで犯罪組織が大暴れしていると連絡が入ったので、一行はリーンボックスに向かったのである。

「ギャハハハ!!」

「魔神拳!!」

「ぎゃく!! おい戦闘イベントだろうが!! まあいい、おまえらすぐかるぞ!!」

「待ちなさい!! 逃げ足だけは早いんだから」

「取り敢えず、チカに会いに行きましょう」

「そうね」

リーンボックスの繁華街で暴れていたアナゴ族もといインカロー

ズもとい下っ端もといリンダに龍姫は拳を振り上げて衝撃波を放つ特技「魔神拳」を命中させたら、リンダは部下と共にどっかに行ってしまうのでチカに会いに行くことにした。

「チカ!! 大丈夫ですよ!!」

「お姉さま!! 実はこれはマジエコンの陽動作戦ですわ!!」

「それじゃあ、これは仕組まれていたことだったの!! Σ(。D。)」

リーンボックス教会に着いた龍姫達はチカからこれはマジエコンの陽動作戦であることを知らされて今になって気が付いたのである。

もちろん、龍姫以外が驚きを隠せないでいた。

一方その頃

「さてと、トリック様に報告だ!!」

アナゴ族もといインカローズもとい下っ端もといリンダは龍姫に陽動作戦を逆に利用されてマジックが待ち伏せしていた美龍飛達の手によって闇の炎に抱かれて消えているとは知らずトリックに連絡するため携帯電話を取り出してトリックについて行った構成員に連絡したのである。

しかしながらそれが龍音が拾ったスマホだったことに気づいていなかったのだから。

そのスマホを拾った龍音は、

「誰だろう? ザギから!!」

「あいつ多分プラネテューヌが制圧してると思ってるんじゃない」

「龍音さん、電話に出てくれませんか?」

「そうだね、もしもし、こちらプラネテューヌ教会ですけど?」

アナゴ族もといインカローズもとい下っ端もといリンダから着信が着いたので、イストワールは龍音に電話に出るように指示を出し、龍音は言われるがまま電話に出たのだ。

もちろん、

「まさか!! 暴力侍の妹たち!! なんでそっちに居やがるんだ!! トリック様はどうした!!」

「どうしたも、こうしたも、はしやぎすぎてたから、舞台から降りても

らっただけだよ(^^♪うふふふ!!」

「どういうことだ!! まさか!! アタイたちの陽動作戦を」

「その通りだよ!! お姉ちゃんが逆に利用したんだよ!!」

「クソッ!! あの黒髪ポニーテール暴力侍め!! 今度会った時は許さねえ!! マジック様に報告だ!!」

「切っちゃったけど、これからどうしようか?」

「取り敢えず、わたしが無事なので、此処で待機していてください、それにしても良く陽動作戦であることに気づきましたね」

「実はお姉ちゃんが前もってマジエコンヌが何か仕掛けてくるなら、陽動かプラネテューヌに攻め込むかの二択だと言ってってくれてたんです」

「流石はプラネテューヌ女神武術指南役の最高責任者ですね」

アナゴ族もといインカローズもとい下っ端もといリンダは美龍飛達がプラネテューヌにすることに驚きを隠せないでいた。

おまけに龍姫に陽動作戦を逆手に取られたことに苦虫を噛み潰したように悔しがっていた。

そのまま通話を切った。

イストワールは陽動作戦であるとわかったのか龍音に質問した、発展国のプラネテューヌが狙われることを前もって龍姫が気づいていたと答えた。

それを聞いたイストワールは流石龍姫だと言っていた。

美龍飛達は姉の帰りをプラネテューヌ教会で待つことにしたのである。

敵を欺くにはまず味方から

マジエコノヌの陽動作戦が美龍飛達によって失敗に終わってることを知らない女神達はと言うと、

「プラネテューヌをがら空きにするために仕組まれていたんです」

「どうしよう!! いーすんさんが」

「落ち着きなさい!! アンタ達が騒いでもしようがないんだから」

「自分の国は自分で取り返してほしいですけど、今それどころではないですわね」

龍姫達以外のメンバーが慌てふためいたのである。

その時だった、龍姫の次元デバイス「イルミナル」に龍音から着信がきたのだ。

「そっちは大丈夫?」

「大丈夫だよ!! そっちは大丈夫みたいだね」

「龍姫、ちよつといいかしら」

「どうしたの? みんなして、怖いよ!!」

「これはどういうことですよ!! 説明してほしいですわ!!」

「なるほど、龍姫はこれが陽動作戦だって気づいてたのね」

「その通りだよ!! 勇龍!!」

「アイちゃんの面子が丸つぶれだね」

「龍姫の裏切者!!」

「敵を欺くなら味方からってね!!」

「流石は鳴流神家当主 鳴流神龍姫だね、呆れて物が言えないわ」

龍姫に陽動作戦を利用するため利用されたことに初めて気づいた女神達は龍姫に納得のいく説明を求めていたのだが、勇龍が助け船を出して事なきを得たのである。

諜報部のプライドがズタズタになったアイエフは龍姫に吼えていた。

「ベール!! 転送装置借りるわよ!! ユニ!! 天界総合病院で検査してもらいなさい!!」

「なんでよ!! アタシは何処も悪くないわよ!!」

「何言ってるのよ!! あなたブレイブ・ザ・ハードの攻撃を受けて壁に激突して気絶してたのよ!! その上、いきなり黒い炎に包まれたと思ったら、成長して、大剣でブレイブ・ザ・ハードを倒したのよ!」
「わかったわよ、病院で脳波の検査を受けたらいいんでしょ!!」

ノワールはユニが魔王に覚醒したのが、ブレイブ・ザ・ハードの攻撃で壁にぶつかって気絶した時に誤って頭をぶつけて脳出血を起こしていると勘違いし出したので、ユニは大丈夫と言い張ったが、泣く泣く、リーンボックスの転送装置で天界総合病院に向かった。

スキット：敵を欺くにはまず味方から

アイ「龍姫の裏切者!!」

龍姫「アイ、教えなかったのは謝るから、機嫌治して」

ネプ「しかし、龍姫、どうしてこれが陽動作戦だってわかったの?」

龍姫「マジエコンヌのこれまでの行動を考えたらわかると思うけど」

神子龍「そうですね、四ヶ国すべてにおいて、下っ端がいましたわね」

輝龍「それに、ルウィーにトリックが来て」

飛龍「ラステイションにブレイブが来た」

星龍「つまり相手はこっちに探りを入れてきてるね」

龍姫「そういう事、相手が落とそうとするなら」

真龍姫「発展国のプラネテューヌだね」

芽龍「そこまで、計算で来てたのね!! 流石、龍姫だわ」

分史世界の新たな紫の女神

天界総合病院で検査を受けているユニが戻って来るまでプラネテューヌ教会に戻ってきた龍姫達は昼食にしていたのである。

「もう、呑気にご飯食べてる場合なの!!」

「ノワール、落ち着なさい!! 確かにこうしてる間にもマジエコノヌ四天王 マジック・ザ・ハードが待ち構えてるのは重々承知よ!!」

「そうだよ!! 食べれるときに食べとかないと」

「そうね、わかったわ」

「ただいま!! お姉ちゃん、みなさん」

「ユニ!! 検査の結果はどうだったの?」

「検査の結果は異常ないって!!」

「そんなはずないじゃない!!」

「それを言うならネプギアもだけど」

ノワールは呑気に昼食を食べる場合だと激怒していたが、勇龍が落ち着くように促した。

ネプテューヌは食べれるとき食べとかなないと持たないとノワールを諭した。

暫くしてユニが天界総合病院から帰ってきたのでノワールはユニに検査結果を尋ねたら、どこも異常が見当たらないと診断された。

しかしノワールは納得いっていなかった。

龍姫達が昼食を取っている頃、天界のツクヨミの部署で動きがあったのである。

「ねぷく? 誰? そして、此処どこ? わたしは...誰なの? 名前...わからない」

「ごめんなさい、あなたには今すぐにやって欲しいことがあるんです」「何するの?」

「あなたは、この次元のゲームギョウ界のもう一人の紫の女神として下界に舞い降りて欲しいのです」

「だって、わたし名前がないよ!! これから先どうすればいいのかわからないよ。。。(p≡□≡)g)。。ウワン!!!!」

「大丈夫です、向こうにはあなたのお姉ちゃんと妹がいます、これを被って、それとこの「ライフボトル」を持って、女神化して行ってください」

「うん、わかった!! 括目せよ!! 変身完了!! それじゃあ、行ってきます」

「気を付けて行ってください、ふうく、間に合ってください」

あのネプテューヌに帰省していたマジエコノヌのシェアエナジーを浄化して新たな紫の女神が此処に誕生したのだ。

その容姿は、身長が真龍姫と龍愛翔と同じく164cmで、胸も同じく大きく、髪も薄紫の横に跳ねているくせ毛のロングヘアーで頭に二つの十字キーの髪飾りを左右対称につけた女の子が誕生した。

しかし当然言葉が理解できる以外が赤子同然だったのだが、ツクヨミは大丈夫と勇気づけて、あの異世界の蘇生薬である「ライフボトル」を最大数の十五本を持たせて、ヘルメットのような口元が開いている紫色の仮面を被らせて、女神化して下界に降りるように言った。

生まれたばかりの紫の女神はその仮面を被って女神化して、四次元ポーチに渡された蘇生薬「ライフボトル」を入れて、今、龍姫達がいるゲームギョウ界のプラネテューヌに向かって舞い降りて行った。

それをつクヨミが見届けていたのである。

この時、ネプテューヌに災難が降りかかろうとは誰も知る由もなかった。

マジック・ザ・ハード、再び

プラネテューヌ教会で昼食を食べ終えた龍姫達はマジック・ザ・ハードとの決戦準備に入っていた。

スキット：グローブ

ギア「気になったんですけど、勇龍さんって左だけしかグローブしてないんですか？」

勇龍「なんだその事、只、わたしの戦闘スタイルに合ってるからよ!! それ以外は理由はないわ」

ギア「そうだったんですか!!」

勇龍「あなたは両手にオープンフィンガーグローブをしているのね」

ギア「前までは、何もつけてなかったんですけど、素手で殴ったりすことを考慮した結果、龍姫さんお古をもらうことになりました」

勇龍「そうだったの、大事にしなさいよ!!」

ギア「はい!!」

「さてと、マジック女史の所に行きますか!!」
「応!!」

龍姫達はマジック・ザ・ハードが待ち構えているプラネテューヌのある平原に向かった。

ところ変わってプラネテューヌの平原では、

「マジック様!! 奴らに嵌められました!!」

「何!! どういうことだ!! 説明しろ!!」

「我々の陽動作戦が暴力侍どもに逆に利用されて、トリック様とブレイブ様がやられました!!」

「あの黒髪の一団か、下がって良いぞ!!」

「はい、失礼しました!!」

「この傷の落とし前は着けてもらうぞ!!」

アナゴ族もといインカローズもとい下っ端もといリンダが龍姫に陽動作戦を逆に利用されてブレイブ・ザ・ハードとトリック・ザ・ハードがやられたことをマジック・ザ・ハードに報告していた。

報告を聞いたマジック・ザ・ハードはリンダに下がっていいと指示を出した。

リンダは一目散に立ち去った。

マジック・ザ・ハードはラピードに付けられた左頬の傷に手を当てていた。

その場所に龍姫達がやってきたのである。

「待ちくたびれたぞ!! 我に傷を付けた代償は高く付くぞ」

「命をもらおうかしら」

「何を言っている、三年前、我に完膚なきまで叩きのめされたのはどこのだといった」

「確かにこいつらは三年前にアンタに負けたよ、けどよ、今は俺達がいるんだからな!!」

「その通りだよ!! マジック!! あなたの言い分を認める人なんて此処にはいないよ!!」

「ならば、我が作りだし新世界の生贄にしてくれよう!!」

「来るよ!!」

龍姫達は一斉に自分たちの得物を構えて、マジック・ザ・ハードと再び会い見えあえたのだ。

ノワールはいきなりマジック・ザ・ハードに宣戦布告を言いだして、マジックに否定されしまった。

それに反論するかのようにうずめが愛刀「鬼丸国綱」をマジック・ザ・ハードに剣先を向けて啖呵を切った。

龍姫もマジック・ザ・ハードに啖呵を切ったのである。

マジック・ザ・ハードは新世界の生け贄して龍姫達に戦闘を仕掛けて来たのだ。

マジック・ザ・ハードとの因縁の戦いの火蓋が切って落とされた。

マーテル

龍姫達は今、プラネテューヌの平原でマジエコンヌ四天王の最後の一人マジック・ザ・ハードと激しい戦いを行ったいた。

「何故、我らマジエコンヌの統治を否定するのだ」

「そんなの、こっちから願ひ下げだ!! 虎牙破斬!!」

「あの時の左腕の落とし前はしてもらおう!! 魔王炎撃波!!」

「うぐく!! なぜ私の攻撃が通用せんのだ!!」

「そんなの、簡単だよ!! マジック!! 幻狼斬!!」

「ワンううう!!」

「小癩な!! これで喰らえ!! アポカリプスノヴァ!!」

ネプギアとユニはそれぞれ霸王女神化と魔王女神化状態になって、ネプギアは斬り上げて斬り下ろす特技「虎牙破斬」を、ユニは刀身に炎を纏わせて薙ぎ払う秘技「魔王炎撃波」を繰り出してマジック・ザ・ハードを圧倒していた。

マジック・ザ・ハードはなぜ龍姫達にまで攻撃が効くのかわからず自棄になっていたのだ。

龍姫は擦れ違い様に一閃し更に振り向きざまに一閃する特技「幻狼斬」を繰り出してマジック・ザ・ハードを圧倒していた。

マジック・ザ・ハードはエグゼドラライブ「アポカリプスノヴァ」で龍姫達に攻撃を仕掛けて来たのだが、

「何故、おまえらは無傷なのだ!!」

「ラピードが教えてくれたのよ!! 一定時間だけ無敵になる特技「疾風犬」を」

「ワン!!」

「あなたは龍姫達にあった時点で終わっていたのよ」

「ふぎけるのも、今の内だ!!」

「此処はわたしが行くわ!! 飛ばして行くわよ!!」

龍姫達はラピードが一定時間だけ敵の攻撃を無効にする特技「疾風犬」を龍姫達に伝授していたのである。

マジック・ザ・ハードは驚きを隠せないでいた。

ネプテューヌは女神化してオーバーリミッツLv3を発動させたのである。

「あのまま、大人しく死んでいたらよかった物を」

「生憎、わたしは死ににくい体質なのよ!! 虎牙破斬!!」

マジック・ザ・ハードは以前ネプテューヌに時限式のマジエコンヌのシェアエナジーで殺そうとしていたのだが、天界総合病院の最先端医療のおかげでネプテューヌは完全復活したことをまだ受け入れていなかった。

ネプテューヌは斬り上げて、斬り下ろす特技「虎牙破斬」から入り、「断空剣!!」

風を纏いながら回転斬りで上昇する秘技「断空剣」に繋いで、

「爪竜連牙斬!!」

龍の如く舞いながら切り刻む奥義「爪竜連牙斬」に繋いで、

「焼き尽くす!! 天狼滅牙・飛炎!!」

刀身に炎を纏わせて滅多斬りにするバーストアーツ「天狼滅牙・飛炎」を繰り出して、

「ネプテューンブレイクで決めるわ!! はあああ!! 止め!!」

縦横無尽に空中で切り刻むエグゼドライブ「ネプテューンブレイク」を繰り出したのだが、

「これで終わったと、思ったか!! ふん!!」

「どうして、ネプテューンブレイクは効かなかったの!!」

マジック・ザ・ハードに龍姫が教えてくれた技は効いていたのに、自分の編み出したエグゼドライブ「ネプテューンブレイク」は全然効いていなかったのだ。

「ならばこいつはどうだ!! ふん!!」

「しまった!! ネプギア!!」

マジック・ザ・ハードは得物である鎌を大上段に構えて攻撃対象をネプギアに変更してそのまま斬りかかったのだ。

それを見たネプテューヌは一目散にネプギアの方へ向かった。

そして、

「お姉ちゃん・・・!!」

「よかった・・・あなたが無事で・・・ゴフツ!!」

「ワハハハハ!! いい気味だ!! 我らに逆らった罪だ ワハハハ!!」

「お姉ちゃん!! そんな・・・折角・・・また一緒に・・・なれたのに・・・許さない!! お前を、絶対に許さない!! マジック!!」

「何を言っているのだ、死んだのはおまえが油断したからだ!! ワハハ!!」

「ボクも堪忍袋の緒が切れたよ!!」

マジック・ザ・ハードの鎌がネプギアに当たる寸前、ネプテューヌが間に入り庇ったのだ。

それで鎌がネプテューヌの心臓に突き刺さってしまったってネプテューヌが息絶えたのだ。

とうとう、龍姫達も怒りを露わにしていたのだ。

その時だった

「退きなさい!!」

「誰だ!!お前は?」

空から紫色の仮面を被った女神が降ってきたのである。

そのまま息絶えたネプテューヌに駆け寄り、

「これを使えってことか? わかった!!」

ポーチから異世界の蘇生薬「ライフボトル」を取り出してネプギアに渡したのだ。

ライフボトルを渡されたネプギアは何の躊躇もなくボトルの栓を開けてネプテューヌの口を指でこじ開けて飲ませたのだ。

薄れ行く意識の中でネプテューヌに語り掛けてきた人物がいた

「ネプテューヌさん!! 起きてください!!」

「うぐ、どうやらお迎えが来たようね」

「違います、わたしは異世界の精霊、マーテルと言います」

「マーテル、けどわたしは死んだのよ!!」

「何を言ってるんです、時間がありません、今からあなたを生き返らせます!! これを受け取ってください」

「これは、暖かい・・・」

「それは魔力です、龍姫さん達が分けてくれたはずです、それと今のネ

プテューヌさんではマジック・ザ・ハードは倒せませんが、ネプギアさんのように」

「覚醒できるのね!! ありがとう、マーテル」

「それと、シエアエナジーで変身が出来なくなります」

「それはつまりわたしに女神を辞めろってこと」

「いいえ、もうあなたはシエアの輪廻から解放されたんです、なのでプラネテューヌのシエアが枯渇しても死ねない体になるだけですから、もちろん、寿命では死ぬこともできません、ご武運を」

「あ、待って、行っちゃったわね、早いことみんなところに帰らないと」
異世界の精霊のマーテルがネプテューヌを生き返らせるため魔力を分け与えたのである。

これによりネプテューヌはシエアの輪廻から解放されてしまったことによりプラネテューヌのシエアが枯渇しても龍姫達、転生者同様に影響されなくなっていた。

寿命で死ねないのは変わりなかった。

ネプテューヌは現実世界に戻って行ったのだ。

そして、

「お姉ちゃん・・・」

「ネプ子!!」

「ネプテューヌ!!」

「何故だ!! 確かに心臓を貫いたはず」

「危うくご期待に沿えるところだったわ!!」

ネプテューヌは息を吹き返したのである。

この時ネプテューヌの体に変化が現れようとしていた。

天翔蒼破斬!!

ネプテューヌが生き返り龍姫達は驚きを隠せないでいたがそのままネプテューヌを光が包み込んだのだ。

「何、この光は」

「まさか!! 覚醒!!」

「大人しく死んでいればよかった物を!!」

「もう、死なせない!! 魔神連牙斬!!」

「ぐッ!!」

ネプテューヌは覚醒しようとしていた所にマジック・ザ・ハードが攻撃を仕掛けてきたので龍姫は一発先に斬撃放って、後でまとめて五連射する奥義「魔神連牙斬」を繰り出して攻撃を阻止した。

そしてネプテューヌを包み込んでいた光が収まるとそこにいたのは、

「これが、わたし、あれ何で二刀流になってるのかしら?」

「お姉ちゃん!! 大きくなってる」

今のネプテューヌは、身長が175cmで、胸がベールよりも遥かに大きくなり、髪型は紫色の三つ編みを二本であることは変わっていないが、プロフェッサーユニットが露出を全くなくし、大きくなった胸の部分に胴丸が装備されてぺったんこにして邪魔にならないようになっており、左腰に二本差し出来るように剣帯が装着しており、なぜか両手に同じ長さの打刀が握られていた。

「殺してくれた分はキツチリ返してもらおうわ!! 飛ばして行くわよ!!」

「また同じことを」

「援護するよ!! ネプテューヌ」

覚醒したネプテューヌはオーババリミッツLv3をもう一回発動させたのだ。

龍姫達は援護に入ったのである。

「はっあああ!!」

「ネプギアを泣かせた罪 償ってもらおうわ!! 散沙雨!!」

「私の鎌が!! 砕け散ったのだと!!」

ネプテューヌは二刀で滅多刺しにする特技「散沙雨」でマジック・ザ・ハードの鎌を破壊した。

そのままネプテューヌは

「飛燕連脚!!」

二連撃の蹴りの浴びせてそのまま突きを繰り出す特技「飛燕連脚」から入り、

「秋沙雨!!」

滅多刺しにして最後に斬り上げる秘技「秋沙雨」に繋げ、

「時空蒼破斬!!」

次元斬で攻撃した後、虚空蒼破斬で追撃する奥義「時空蒼破斬」に繋げ、

「焼き尽くすわ!! 天狼滅牙・飛炎!!」

地面を叩いて相手を怯ませて刀身に炎を纏わせて滅多斬りにするバーストアーツ「天狼滅牙・飛炎」に繋げて、

「見せてあげるわ!! 喰らえ!! 天翔蒼破斬!!」

「なんだと!!」

持っていた二刀を一刀の刀にして足元に魔方陣を展開して、上空に飛び上ってそのまま叩き付けるあの赤い二刀流の秘奥義「天翔蒼破斬」を喰らわせたのである。

「ゲームギョウ界はわたし達のやり方で守って見せるわ!!」

ネプテューヌは決め台詞を言って刀を納刀して女神化を解いた。

「本当にお姉ちゃんなんだね、お化けじゃないんだな、影もあるんだな?」

「痛い!! ネプギア!! 女神化解いてよ!!」

「あ、ごめんすっかり忘れていた、ごめんお姉ちゃん!!」

ネプギアは女神化したまんまネプテューヌに抱きついてしまった。

ネプテューヌはネプギアに女神化を解くように言い、ネプギアは女神化を解いたのであった。

まさかの・・・

突如、空から舞い降りた紫の女神から受け取った異世界の蘇生薬「ライフボトル」で死の淵から蘇ったネプテューヌによってマジック・ザ・ハードが敗れ去ったのだ。

だがマジック・ザ・ハードは不敵に笑っていたのである。

「ワハハハハ!!」

「何が可笑しい!!」

「なぜなら、我を倒しても犯罪神様の封印が解かれるのだから!!」

「ワハハハハ!!」

「そんなことって」

「誰もいないとこで、やって欲しいわ!! 聞いてて恥ずかしくなるわ!!」

なんとマジック・ザ・ハードの口から自分を倒しても犯罪神の封印が解かれると言いだして、勇龍が「誰もいないとこで、やって欲しい、聞いてて恥ずかしくなると」マジック・ザ・ハードに向けて言った。

「絶望的な死が来る、誰にも逃れられん!! はーははは!!」

「いい加減、黙りなさい!!」

「勇龍!!」

「ぐふ!!」

マジック・ザ・ハードは高笑いをし始め、そして勇龍が愛刀の「ニバンボシ」でマジック・ザ・ハードを斬り捨てた。

「最も愚かな・・・道化、それが貴様らだ・・・」

そう言い残しマジック・ザ・ハードは光になって消えて逝った。

「ろくでもない物を残しやがって!!」

「それより、ねぷねぷですよね!! お化けじゃないんですね!! ちやんと影ありますですよね!!」

「コンパ!! 痛いよ!!」

「ネプ子の馬鹿!! 今度こそ本当に死んだかと思っただじやない!!」

「ごめんね、みんな、心配かけちゃって、もう大丈夫だから」

「何言ってるの!! お姉ちゃんわたしを庇って心臓を貫かれたんだ

から!!」

「取り敢えず、病院に行こう!! ボクが油断してたせいで」

「龍姫達の所為じゃないよ!! 自分でも、気が付いたら、ネプギアを庇ってたんだよ!!」

コンパは死の淵から蘇ったネプテューヌに思わずネプギアと一緒に抱きついたのだ。

アイエフは目から涙を流して、龍姫は自分が油断して招いたことだとネプテューヌに謝罪して、病院に行くように言った。

ネプテューヌは龍姫達の失態でないと励まして、自分でも体が先に動いてネプギアを庇っていたと言って、龍姫を励ましたのである。

ノワールはテンプレのツンデレ交じりに泣いていたの言うまでもない。

龍姫達は一旦、解散して、龍姫達はプラネテューヌ教会の転送装置で天界総合病院にネプテューヌを搬送した。

「また、入院!!」

「はい、あくまで検査入院ですので、しばらくは此処で入院してもらいます、入院って言っても、一週間です」

「そうみたい、だからあの子こと頼んだよ!!」

「わかったよ、お姉ちゃん!!」

ネプテューヌは念のため天界総合病院に一週間の検査入院をすることになり、空から舞い降りた紫色の龍の仮面を被った女神のことを龍姫達に任せたのである。

そんなこんなでプラネテューヌ教会に帰ってきた龍姫達だった。

仮面女神、またの名は

ネプテューヌは天界総合病院で検査入院を余儀なくされて、マジック・ザ・ハードにネプテューヌが心臓を貫かれて死んだ時に、突如、空から舞い降りた紫の龍の仮面を被った女神を保護した龍姫達は今現在、プラネテューヌ教会に戻っていた。

「アンタは、何者、それと名前は」

「。。。 (>μ<;)。。。 ヒイツ」

「もう!! アイ、怖がってるよ!!」

「だって、いきなり現れて、ポーチから謎の瓶をネプギアに渡してそれをネプ子に使ったら、ネプ子が光り出したと思ったら、成長して、二刀流になってたのよ!! それにそのベール様より遥かに大きい胸だし」

「最後は嫉妬しかしゃべってないよ (´・ω・´) アキレタ」

「龍姫達に言われたくないわよ!! いいわよね、胸が大きくて。(*´▽`*) ブウ。!!」

「アイちゃん、とうとう、僻んじやったよ (´・ω・´) アキレタ」

アイエフがいつも様に尋問してしまい、保護した仮面女神は龍姫達の背後に隠れてしまった。

アイエフは仮面女神が渡したあの異世界の蘇生薬「ライフボトル」をネプギアがネプテューヌに飲ませたら、生き返りそのまま光り出して、成長して、二刀流になり、胸がベールより遥かに大きくなった胸を目の当たりしたショックで僻んでしまった。

もちろん仮面女神もベールより遥かに大きい胸だったので余計アイエフは僻んでしまい、龍姫達は呆れて何も言えなかったのである。「あの、お願いがあるんだけど? その仮面取って欲しんだけど、いいかな?」

「うん」

龍姫は仮面女神に被っている龍を象った仮面を取って欲しいとお願いしたら、仮面女神は首を縦に振り、承諾して、仮面を取ってくれたのだ。

欲しいと頼んできたので、龍姫は仮面女神に「龍空翔」と名付けたのだ。

コンパは龍姫に思わず突っ込んでしまい、同じ男性名の龍音と龍愛翔は呆れて何も言えなかつたのである。

その名を気に入ったらしく仮面女神は龍空翔と名乗ることになった。

一方その頃

「わたし、成長してるのかな？ 少し背が高くなった感じがするし、胸も少し大きくなった感じがするよ」

天界総合病院で検査入院してるネプテューヌは自分の体の異変に薄々感じていたのであった。

分史世界の双子の紫の女神の再会

龍空翔がプラネテューヌの新たな紫の女神として一週間が経った
龍姫達は龍空翔と一緒に天界総合病院に行くのであった。

その理由はネプテューヌが退院が決まったのである。

「ネプテューヌ!! 迎えに来たよ!!」

「龍姫!! ありがとうね!! ごめんね、服とか買いに行ってくれて」

「別に気にしなくてもいいよ、連絡くれたから、ほかのみんなに気づかれなかったんだし」

「そうだね、ほかのみんなはプラネテューヌと違って忙しいからね」

「龍姫さんがいーすんさんに毎日怒ってたから、最近いーすんさん、少し元気なかつたような」

「仕方ないよ!! イストワール様が職員に頼まれた仕事をやるのに三十倍掛かっているから、とうとう、職員の人たちがストライキ仕掛けたんだから」

「そういえば、そんなことあったね(・ω・)」

龍姫達はネプテューヌが入院している病室に迎えに聞いたのである。

密かにネプテューヌはアイエフ達にばれないように龍姫達に天界百貨店に行ってもらい、衣服などを買いに行ってもらっていたのだ。

なぜなら、身長が真龍姫と龍愛翔と同じ164cmまで伸び、髪が腰の辺りまで伸び、胸も真龍姫と龍愛翔と同じくらいまで大きくなっていった。

龍姫達と同じサイズのジャージワンピースを着ているのである。

もちろん、この事は龍姫達以外は知らないのである。

「胸だつてベールより大きくなったもんね!! もうぺったんこつて言わせないよ!!」

「帰ったらバリアジャケット作ったあるからね!!」

「もう、バリアジャケット作ってくれたんだ!!」

「帰って、龍空翔に会いに行こう!!」

「ツクヨミ様がわたしがもしもの時のためにわたしのDNAと浄化し

たマジエコノヌのシエアエナジーで産まれたわたしの双子の妹なんだよね」

「そうだよ、今、教会のネプテューヌ達の部屋で読書してると思うよ!!」

「早く会いたいな〜」

「それじゃあ、帰りますか!!」

病院からの帰り道をネプテューヌは本来なら転倒防止で松葉杖を使わないといけないのだが、天界総合病院の最先端医療のおかげで普通に徒歩で歩いているのである。

ネプテューヌは龍空翔に会いたいと思う気持ちを抑え切れなかったのである。

天界の転送装置の上に立ちプラネテューヌ教会に戻るのであった。

「ただいま!! いーすん!! アイちゃん!! コンパ!!」

「あの〜どちらさままででしょう?」

「まさか!! ネプ子!! Σ(。D。)」

「そうだよ!! プラネテューヌの女神パープルハートことネプテューヌだよ!!」

「ネプテューヌ!! 会いたかったよ!!。：。((p (≡□≡) q))。。

。ウワーン!!」

「ごめんね、龍空翔」

「うん」

プラネテューヌ教会に戻ってきた龍姫達とネプテューヌはいつものようにかえってきたのだが、イストワールはネプテューヌの変貌ぶりに勢い余って名前を尋ねてしまった。

アイエフはしばらくしてネプテューヌだと気づいたのであった。

龍空翔はネプテューヌに泣きながら抱きついたのである。

もちろん、お揃いのジャージワンプを着て、女神化を解いてである。

「そういうえば、ユニちゃんも魔王に覚醒したんだっけ!!」

「うん、実は一回だけユニちゃんが成長してない時に遊びに行った時にユニちゃんって覚醒する前って胸が小さくなることを教えてあげたら、気にしてただけど、しばらくして遊びに行ったら、龍華と同

じくらしいに大きくなってたんだよ!!」

「それってつまり、ノワールはユニちゃんより小さいってことだね!!」
「おまけに胸も大きくなって、女神化しても胸が小さくならないで逆に大きくなって、髪型がツインドリルにならなくなって、サラサラヘアのツーサイドアップのロングタイプになってたんだよ!! ユニちゃん大喜びだったよ!!」

「そうなんだ!!」

ネプテューヌはユニが魔王に覚醒したことを思い出したのでネプギアに尋ねたら、ユニが女神化をすると逆に身長と胸が小さくなることをコンプレックスになっていたのだが、魔王に覚醒したおかげで、龍華と同じ身長163cmまで伸び、胸もベール並に大きくなって大喜びしていたとネプギアが説明してくれた。

もちろん、女神化したら逆に成長することも教えてくれたのである。

「さてと、ネプテューヌが戻ってきたし、明日からは二刀流の稽古だよ!!」

「やつと、わたしも龍姫達みたいに二刀流が出来るんだ!!」

龍姫は明日からネプテューヌに二刀流の稽古に入ることを伝えて、ネプテューヌは二刀流の稽古が出来ることに胸躍らせていたのであった。

二刀流

ネプテユーンが退院して、龍空翔がネプテユーンの双子の妹になって、翌日、今日はネプテユーンが待ちに待った二刀流の稽古である。ちょうどその二刀流の稽古に真つ最中である。

「ネプテユーン!! 龍空翔!! また左が遊んでるよ!!」

「こうかな 虎牙破斬!!」

「そうそう!! やれば出来るじゃない!!」

「お姉ちゃんと龍空翔お姉ちゃんすごいもう二刀流の基本戦術マスターしたんだ!!」

ネプテユーンと龍空翔は今日初めて二刀流の稽古をしたので、利き手でない左を使うのに慣れていなかったが、龍姫に指摘された瞬間に二人とも二刀流ならではの右で斬り上げて、左で斬り下ろす特技「虎牙破斬」が出来てしまった。

それを見たネプギアは双子の姉の天武の才にまた驚かされていた。

「今日はここまで!!」

「龍姫!! ご飯〜」

「はいはい、教会に帰るよ!!」

龍姫達は稽古を切り上げて教会に戻るのであった。

「今日はフレンチトーストとコーンスープだよ!!」

「いただきます!!」

「美味しい!! 龍空翔も料理できるんだ!!」

「ツクヨミ様がポーチに料理の本を持たせてくれたから」

「そうなんだ!!」

今日は龍空翔も龍姫達の手伝いをして料理が出来るようになった。

一方その頃

「どうして、ネプテユーンにまた妹ができたのですの!!。。。。(p (≡□≡) q)。。。。ウワン!!」

「べール!! 落ち着くのですわ!!」

「神子龍には双子の妹がいるからそんなことが言えるのですわ。。。。

((p (≡□≡) q)。。。。ウワン!!!!」

「どうしよう!!Σ。(。D。)」

こつちの次元のゲームギョウ界のベールはネプテューヌに双子の妹ができたと知らされて拗ねていたのである。

神子龍が落ち着くように言ったが、ベールは反論してきたのである。

そのプラネテューヌでは、

「ネプテューヌなの!!Σ。(。D。)」

「ネプテューヌさんも成長したんですね!!」

「ユニちゃん、後で二人だけで話したいことがあるんだけどいいかな?」

「別にいいけど」

「それじゃあ!! 部屋で待ってるね!!」

たまたまプラネテューヌ教会に手合せと遊びに来ていた星龍達は、ノワールはネプテューヌが自分より大きくなっていたことに驚きを隠せないでいた。

これに慣れてる星龍達はいつものように流したのである。

ネプギアはユニに二人だけで話したいことがあると言ったら、ユニは構わないと返したので、ネプギアは自分の部屋で待っていると言いつつ、残しその場を後にした。

そして手合せを開始したのである。

もちろん竹刀で行ってもらおうのである。

霸王と魔王

今、龍姫達はネプテューヌとノワールの手合せの立会人をしているのである。

手合せと言うことで二人とも竹刀を使ってもらっているのである。

「魔神剣!!」

「蒼破あ!!」

ネプテューヌは斬撃を放つ特技「魔神剣」を放って牽制した。

それをノワールは同じ動作で疾風の衝撃波を放つ特技「蒼破刃」を放って、ちょうど二人の中間地点でぶつかって消滅した。

「身長差がある上に二刀流か」

「身長つてノワールとわたしつて5cmしか変わらないよ!! 獅子戦吼!!」

「その5cmが大きいのよ!! おまけに二刀流なんだから!! 戦迅狼破!!」

「二人ともそのくらいにしたら」
「そうね」

龍姫は二人の身長差などを考慮して二人を分析していたのである。

ネプテューヌは紫の女神らしく紫色の獅子の鬨気を叩き付ける秘技「獅子戦吼」を繰り出して、ノワールは勇龍から伝授してもらった狼の鬨気を叩き付ける秘技「戦迅狼破」で向かい打ったのである。

龍姫達は二人にその辺にするように言い、プラネテューヌ教会に戻ってきたのである。

その日の夜、約束通りネプギアとユニが二人つきりで部屋で話していた。

「ユニちゃん・・・実はね」

「何よ、まさか!! アタシのこと愛してるとか言うんじゃないわよね!!」

「そんなんじゃないよ!! 今ならユニちゃんに明かせるから」

「ちよつと!!Σ(。D。)(何服脱いでんのよ!!Σ(。D。)(」

「だって、今まで隠してきたんだよ!! お願いわたしの胸ちゃんと見

て!!」

「ネプギア・・・アンタ・・・どうしたのよ!!Σ（。D。）」 その胸は!!Σ（。D。）」

「ユニちゃんだって大きくなったんだし、もうユニちゃんに隠す必要がなくなったから」

「ネプギア、もしかしてアタシが覚醒するまでその胸、そのブラで小さく見せてたのね」

「だって、ユニちゃん覚醒するまで、女神化したら小さくなるから気にしてたから、ユニちゃんにばれたら顔向けできないって」

「呆れた、アタシは確かに胸と背が小さくなることを気にしてたけど、それは自分が無意識に躊躇してたのが原因だって龍華とアスラが教えてくれたのよ!! それにネプギアも一緒でしょ!!」

「そういえばそうだったね」

「取り敢えず、その胸隠しなさいよね!!」

「ありがとう、ユニちゃん!!」

ユニはネプギアが自分のことを異性として考えていると思いついてしまったのだが、ネプギアが訂正して、服を脱いで胸が大きくなったことを明かしたのだ。

ユニは一瞬驚いたが、気にしてないとネプギアに言った。

その日はプラネテューヌ教会と一緒に過ごしたのであった。

征禍星影双牙刃!!

ネプギアがユニに胸が輝龍・飛龍並に大きくなった事を打ち明けて、三日が経ったのである。

龍姫達は全員が犯罪神を倒しべくプラネテューヌ教会に集結していたのだ。

「ネプギアとユニだけずるい!! わたしもバリアジャケット着たい!!」

「わたしも・・・」

「我がまま言わないの!!」

「みんな!! 気合い入れて行くよ!!」

「おう!!」

「お気を付けて!!」

転送装置の前でロムとラムがネプテューヌとネプギアとユニが覚醒したことによってプロフェッサーユニットが霸王と魔王の力によつて耐え切れなくなり、二人のために龍姫達がバリアジャケットを作製して、それを女神化してプロフェッサーユニットの代わりに着ていることに文句を言っていた。

芽龍が二人を注意した。

龍姫達は転送装置で三度目のギョウカイ墓場に四天王の魂で復活した犯罪神を倒しに行くのであった。

ネプテューヌと龍空翔のバリアジャケットは色違いのお揃いを着ているのである。

今回はジャツジ・ザ・ハードを倒した場所から更に奥に向かうのである。

そしてついにその場所に龍姫達は辿り着いたのである。

「ぐおおお!!」

「こいつが犯罪神なんだね、どう見ても人じゃないね・・・」

「マスター!! 来ます!!」

「みんな!! 準備は良いですか!!」

「いつでも行けるわよ!!」

「ワフ!!」

「あいつを倒してゲームギョウ界のハッピーエンドを見よう!!」
「応!!」

とうとう、龍姫達は見た目があの龍姫達が転生する前に遊んでいたゲームの隠れボス「スパイラルドラコ」の色違いの犯罪神、名前があつちの次元のゲームギョウ界の人物と一緒にいるのであるが、姿形が違うマジコンヌとご対面したのだ。

龍姫達は一斉に得物を構えて戦闘態勢に入ったのである。

ついに犯罪神との戦いの火蓋が切って落とされた。

「ぐおおお!!」

「こつちだよ!! 幻狼斬!!」

「同じく!! 幻龍斬!!」

犯罪神の攻撃パターンは長い4本の腕と巨体での攻撃の二パターンしかなかったのだ。

龍姫はすり違い様に一閃して振り向きざまに一閃する特技「幻狼斬」を繰り出しながら立ち回り、ネプギアは突き抜けて振り向いて二連撃を叩き込む特技「幻龍斬」をお見舞いしていた。

「ぐおおお!!」

「キャ!!」

「みんな!! 白き天の使い達よ、その微笑みを我らに!! ナース!!」

「ありがとう、ネプテューヌ」

それでも犯罪神は自らの巨体を生かして攻撃してきたのだが、龍姫達はかわせたが、覚醒していない女神達と、アイエフ達は直撃は避けられたものの、喰らってしまったのである。

すぐさま女神化していたネプテューヌが龍姫達に手解きしてもらった治療術の内の一つ白衣を着た看護師が現れて戦場を駆け抜けていき傷を癒す「ナース」を詠唱して発動させた。

ノワールはツンデレ交じりにお礼を言って戦闘に戻って行った。

「全て・・・滅ぼす!!」

犯罪神がいきなり口を開けて毒ガスを吐いて来たのである。

「ふぐ!!」

「みんな!! 今治すね!! 不浄を退ける力となれ!! リキュペレート!!」

「ありがとう、龍姫!!」

「まだ、終わってないよ!!」

龍姫達はリリアルオーブと武醒魔導器で覚えていたスキル「ライオンハート」で異常状態になりにくくなっていたので助かったが、やはりアイエフ達が毒に侵されてしまったので、龍姫が詠唱を短縮するスキル「スピードスペル」を前もって修得していたので詠唱するだけで範囲の味方の状態異常を回復する治癒術「リキュペレート」を発動させて解毒し、体制を立て直したのである。

「此処は一気に行くわよ!! 龍空翔!!」

「そうね!!」

ネプテューヌ&龍空翔「飛ばして行くわよ!!」

「決めろ!! ネプテューヌ!! 龍空翔!!」

「決めなかったら、タダじゃ済まないわよ!!」

「ぐおおお!! すべて死ね!!」

ネプテューヌと龍空翔は二人同時にオーバーリミッツLv4を発動させて、犯罪神に攻撃を仕掛けに行った。

犯罪神は迎撃の態勢を取ったのだが、今の二人は覚醒したことでよってプロフェッサーユニットより軽くて、翼のプロフェッサーユニットがないので小回りが利き、両足に以前ネプギアが得物していたビームソードのような紫色の刃が付いた魔装脚ジェットブーツのおかげで更に速く飛び回ることが出来るため犯罪神は二人の動きに追いつくことが出来なかったのだ。

「お姉ちゃん達の邪魔はさせるか!! 霸道滅封!!」

「本当はアタシが止めを刺したかったんだけど、此処は目上を立てないかね!! スナイプフォース!!」

「ぐおおお!! 全て・滅ぼす!!」

「これは責任重大ね!! 龍空翔!!」

「そうね!! ネプテューヌ!!」

ネプギアは刀身より闘気を解放する奥義「霸道滅封」を繰り出して、ユニは右に斬馬刀を持ったまま左でライフルを持ち、そのライフルで前方に銃弾を放って闇の波動を熾す奥義「スナイプフォース」で犯罪神を足止めして、ネプテューヌと龍空翔の活路を開いたのである。

犯罪神までたどり着いた二人は、

「喰らいなさい!! 鳳凰天駆!!」

「守護方陣!!」

「ぐおおお!」

ネプテューヌは上空に舞い上がり鳳凰の闘気を纏い特攻する奥義「鳳凰天駆」で攻撃し、龍空翔は二刀流ではあるが左で持っている刀を地面に突き刺して傷を癒しながら攻撃する奥義「守護方陣」を繰り出した。

そして、

「行くわよ!! 龍空翔!! 一気に決めましょう!!」

「任せて!! ネプテューヌ!!」

「よし!! 行けるわ!! はあああ!! せい!!」

「ていや!! 征禍!!」

「星影!!」

ネプテューヌ&龍空翔「双牙刃!!」

龍空翔が犯罪神を打ち上げて切り刻み、それをネプテューヌが追従しながら「ネプテューンブレイク」のように縦横無尽に飛び回りながら連撃をお見舞いして、止めは上下から挟撃する合体秘奥義「征禍星影双牙刃」を繰り出したのだ。

犯罪神を倒したかと思いきや、

「そんな!!」

「犯罪神を倒したと思ったのに!!」

「つまりわたしたちは犯罪神の器を倒したに過ぎなかった」

「喰らえ!! 魔神剣!! あれ?」

「龍姫達の技まで聞かないって言うの!!」

「此処は一旦、逃げるわよ!!」

なんと犯罪神はまだ生きていたのである。

龍姫が斬撃を放つ特技「魔神剣」を繰り出したのだがすり抜けてしまい、それを見た一行は逃げるしかなかったのだ。

犯罪神は四人の無念に死んでしまった人間の女の子の魂に新たな肉体を与えてゲームギョウ界の四か所に向かわせたのである。

但しこの四人の女の子はマジエコンヌ四天王ではなかったのであつた。

強くなるために!!

龍姫達はギョウカイ墓場から命からがら帰還していたのだが、犯罪神は以前ギョウカイ墓場で息を潜んでいるのであった。

スキット：犯罪神

ネプ「ごめん、みんな」

龍空翔「何言って・・・いいかわからないよ」

龍姫「二人だけの責任じゃあないんだから」

ギア「そうだよ、お姉ちゃん達は何も悪くないよ!!」

勇龍「後悔は過去にしか繋がらないけど、反省は次に繋がるのよ!!
するなら反省よ!!」

ネプ「ありがとう、勇龍!!」

勇龍「どういたしまして!!」

「これからどうしよう!!」

「実は闘技場の改装工事が終了したんです」

「それで覚醒していない女神様にはそこで模擬戦を行って、強くなつて欲しいんです!!」

「なるほど、けど犯罪神は術技が通用しなかったんだけど」

「確かに龍姫さんの言う通りなんですけど、ほかのみなさんはまだネプテューヌさんように覚醒していません!! ですから覚醒したネプテューヌさん達と龍姫さん達を含めた19人とほかの女神様で模擬戦を行ってほしいんですけど」

「あれ？数が合わないよ!!」

「そうですわよ!! こっちは五人ですわ!!」

「それでしたら、19人の中から指名して模擬戦をしようと言うのはどうでしょうか？」

「そうね、一回、龍姫とは戦ってみたかったのよね!!」

「わたくしは神子龍!! あなたを指名しますわ!!」

「わたしは芽龍、あなたよ!!」

「わたしは・・・龍琥ちゃん」

「美礼!! アンタよ!!」

教会に戻ってきた龍姫達に教祖たちから今さつき闘技場の改装工事が終了して明日にもそこが使えると言うのでそこで覚醒していない女神達の能力を高めるため指名形式で模擬戦を行うことになったのである。

ノワールは星龍ではなく龍姫を指名して、ペールは神子龍を指名して、ブランは芽龍を指名して、ロムが龍琥を指名して、ラムが美礼を指名したのである。

指名された者たちは、

「別に構わないよ!!」

「いいですわよ!! わたくしが直々にお相手して差し上げますわ!!」

「わたしも構わないわ!!」

「わたしも・・・」

「いいわよ!! 受けて立とうじゃない!!」

とノリノリで承諾したのであった。

龍姫はネプテューヌと龍空翔の得物を見せて欲しいと言ったのだが、

「わかった!! ねぶ!! Σ(。D。)」

「わたし達の刀が」

「折れちゃってる!!」

「多分、二人の合体秘奥義に耐えられなかったんだね」

なんと実体化して二刀とも抜刀した瞬間、ちょうど真ん中辺りでポッキリと折れていたのである。

「取り敢えず、明日、武器屋に行ってから闘技場に向かうことにしよう」

「そうですね!!」

「わかったわ、明日、闘技場で会いましょう!!」

仕方なく龍姫達は明日武器屋に寄ってから闘技場に向かうことをノワール達に約束して解散したのである。

そして次の日

龍姫達はプラネテューヌの武器屋にネプテューヌと龍空翔の刀を買いに来たのだ、

「この刀がいいんじゃない!!」

「それにする!!」

取り敢えず、二尺三寸の無銘刀を二振り購入して二人と粒子化して店を出て外で待っていた龍姫達と合流して、闘技場に向かうであった。

黒の女神VS紫龍

龍姫達は約束通りにプラネテューヌの闘技場に到着したのである。

「それじゃあ、行ってくるね!!」

「お姉ちゃん、無茶しちゃダメだよ!!」

「わかってる!!」

闘技場に到着した龍姫はノワールとの模擬戦のため一階にある控え室に向かった。

控え室に到着した龍姫は瑠璃色のパーカワンプの着替えた後、下に長ズボンの上に紺の裾の長いジャケットにリライズ機能で着替えて、ノワールが待つアリーナへ向かった。

「龍姫もそんな服着るのね!!」

「まあね、これでも女だよ!!」

「そうだったわね!!」 けど、本気で行かせてもらおうわ!! アクセス!!」
「ご期待に沿えるよう頑張るよ!!(流星にまだ、女神であることは伏せとかないとね)」

アリーナに到着した龍姫はノワールからいつも着ている男物のジャケットに長ズボンではなく、ネプテューヌが着ているパーカワンプに長ズボンの出で立ちを褒められた。

龍姫は自分が女であることは猫耳メイド侍になった時にばらしてある。

ノワールは刀は抜刀して女神化した。

得物である刀は以前ように巨大化せず刀身が真っ黒になっており、勇龍と同じ構えである。

それに答えるため龍姫も刀の柄に手を掛けて抜刀術の構えを取った。

闘技場の無殺傷システムの準備が完了して、試合開始のランプが点灯したのである。

「行くわよ!!」 トルネードソード!!」

「甘いよ!!」

「やるわね!!」 女神化したわたしの一撃をこうも容易く受け止めるな

んで、流石、星龍が勝てないわけね!! 気になったんだけど、その大きな胸は何処にしまってるのかしら?」

「それでも、簡単に負けるほど弱くないつもりだよ!! それと胸は着痩せして小さく見えるだけよ!!」

先に仕掛けたのはノワールだった、刀を右から左に薙ぎ払う自身が編み出した「トルネードソード」をあっさり龍姫に刀で受け止められてしまった。

「こつちから行くよ!! 魔神剣!!」

「それなら、こつちも!! 魔神剣!!」

「スゴいわ!! 女神化したお姉ちゃんとやり合うなんて!!」

「龍姫ちゃんだもん!! そんなに簡単に負けるわけないよ!!」

龍姫は斬撃を放つ特技「魔神剣」を繰り出したので、ノワールもそれに答える形で斬撃を放つ特技「魔神剣」で向かい打った。

ユニは龍姫が女神化した姉とやり合ってるのを見て驚きを隠せないでいた。

そして二人は、

「そろそろ、行かせてもらおうわ!!」

「ボクも行かせてもらおうよ!! 飛ばして行きますか!!」

同時にオーバリーリミッツLv3を発動させたのだ。

「喰らいなさい!! 嗚烈襲!!」

「だったら、霧沙雨!!」

ノワールは勇龍から教わった左正拳突きを連続で繰り出す奥義「嗚烈襲」を、龍姫は散沙雨と秋沙雨の合体奥義「霧沙雨」で応戦して、

「焼き尽くす!! 天狼滅牙・飛炎!!」

「しまった!! 龍姫達にはバーストアーツがあるんだったんだ!! 忘れてたΣ(。D。)」

「あれ程、バーストアーツを覚えろって言ってあげたのにね、ラピード」

「ワフ・・・」

ノワールはバーストアーツを修得するのを忘れていたので、龍姫に衝撃波で怯まされて、そのまま刀身に炎を纏わせて滅多斬りにする

バーストアーツ「天狼滅牙・飛炎」につなげられてしまったので、「お終いにしようよ!! 閃け!! 鮮烈なる刃!! 無辺の闇を鋭く切り裂き、仇名す者を微塵に砕く!! 決まった!! 漸毅狼影陣!!」

あの敵を軸にして狼の如く四方八方から切り刻み最後は背後から一閃する秘奥義「漸毅狼影陣」でめた。

「華麗なる勝利!!」

龍姫は高らかと決め台詞を言っていた。

漸毅狼影陣を喰らったノワールはと言うと、

「龍姫ちゃん!! やりすぎだよ!! 今すぐ、ノワールちゃんを医務室に連れて行きなさい!!」

「なんでこうなるの(´・ω・´)」

着ていたプロフェツサーユニットが木端微塵に吹き飛んでおり、女神化を解いた状態になっていたのだが、着ていたクリアドレスが大事なところ以外隠れておらず、ほぼ全裸に近かったのである。

幸いにも無殺傷状態での模擬戦だったので胸などに掠り傷があったくらいで命に別状はなかったが、当の本人は気絶してしまったのであった。

仕方なく龍姫は着ていたジャケットをノワールに着せて闘技場の医務室に運ぶのであった。

緑の女神VS審判を超えし者

ノワールとの模擬戦を終えた龍姫は気絶したノワールをお姫様抱っこで医務室に行ってる頃

「わたくしの番ですわ!!」

「模擬戦とは言え、手加減はしませんわよ」

闘技場ではベールVS神子龍の模擬戦が行われようとしていた。

試合開始の合図のアラームとランプが点灯して、

「行きますわよ!! リーンボックスの女神の力、見せて差し上げますわ!!」

「こちらにも本気で行かせてもらいますわ(まだ、正体を明かすわけには行きませんわね)」

ベールは開始早々、女神化を行って槍を構えた。

神子龍は自分が別次元のベールであることを伏せて、そのまま槍を右手で持ち戦闘態勢に入った。

「こちらから行かせてもらいますわ!! ダージリンローデ!!」

「甘いですわよ!! ベール!! 天月旋!!」

「ふぐ!! やりますわね!! 神子龍!!」

「褒めてくれて、うれしいですけど、そんなことでは犯罪神に通用しませんわよ!! 如月!!」

「まだまだですわ!!」

先に動いたのはベールだった。

槍で連続で攻撃する自身で修得した技を神子龍に仕掛けたのだが、神子龍はあっさりとかわし、サマーソルトを叩き込む特技「天月旋」で向かい打った。

それを受けたベールは体制を立て直し、攻撃を仕掛けようと構えたら、神子龍がその隙を逃すわけがなく、回転しながら蹴り上げて、槍で切り刻む特技「如月」を繰り出した。

それをベールは槍で直撃を防ぎ、受け流した。

「そろそろ、本気で行きますわ!!」

「こちらにも本気で行かせてもらいますわ!!」

二人ともオーバーリミッツLv3を発動させ、勝負に出たのだ。

「シレットスピアー!!」

「あれ程、わたくし達と特訓していればいいのですのに、それでは、負けて当然ですわ!! 雷神月詠華!!」

ベールは魔方阵から槍を飛ばす「シレットスピアー」を繰り出したのだが、神子龍はこれもあっさりかわして、両足で蹴りを叩き込んだ後、逆立ちして更に蹴り上げて、雷を落として追撃する奥義「雷神月詠華」を叩き込んで、

「覚悟はできてますの? 封塵衝月華!!」

「これがバーストアーツですのΣ(。□。)!」

敵を光の球体に閉じ込めて爆発させるバーストアーツ「封塵衝月華」を決めて、

「あなたには此処で果てていただきますわ!! はああああ!! 継牙!!

双針乱舞!!」

敵に光の槍をホーリーランスの要領で叩き込んだ後、槍で滅多斬りにし、最後は切り抜ける「審判を超えし者」の秘奥義「継牙・双針乱舞」で勝負を決めたのだ。

「わたくしに会ったのが運の尽きですわ!!」

と決め台詞を言ったのである。

神子龍の秘奥義「継牙・双針乱舞」を受けたベールはと言うと、

「神子龍!! やりすだよ!! 早く!! 医務室に連れてきなよ!!」

「あらま、わたくしとしましたことが少々お痛が過ぎましたわ!!」

ノワール同様に元々露出が多い服を着ていたベールが相手だったので、着ていたプリンセスドレスが大事なところ以外木端微塵になっており、ほぼ全裸になって、気絶していた。

「これはわたくしの責任ですわ、お願いしますわ!! 水光姫」

「はい!! 我が主!!」

神子龍は流石に自分の着ている上着を脱ぐわけには行かなかったので、ツクヨミが次元探偵になった時に支給してくれた次元デバイス「水光姫」を起動させて、リライズ機能で自分が着ていたジャージワンピースをベールに着せて、お姫様抱っこして医務室に搬送するのであつ

た。

医務室にて

龍姫は模擬戦で龍姫に負けて気絶したノワールを闘技場の医務室に運んだのである。

「すいません〜誰かいませんか？」

「あら、さつきブラックハート様と模擬戦をやっていた方ですか？
それにしても派手にやらかしましたね」

「自分でも申し訳ないのは、自覚しています!!」

「では、こちらのベットに寝かせてください!!」

「わかりました!!」

闘技場の医務室に到着した龍姫は女性の医師の指示通りに備え付けられたベットにお姫様抱っこで運んできたノワールを寝かせた。

龍姫は医師にノワールを任せて医務室から出ようとしたら医師に止められた。

「ブラックハートは掠り傷ですね、それとあなた様の左手の傷の手当をさせていただきます」

「別にいいですよ!! 自分で回復魔法が使えますから!! 聖なる活力、此処へ ファーストエイド!!」

「そうだったんですか!!」

どうやら、ノワールとの模擬戦で気づかないうちに左手の甲に擦り傷が出来ていたらしく、龍姫は自分で治せると言って治療術「ファーストエイド」を詠唱して傷を治した。

それを見た医師は驚きを隠せないでいた。

医師はノワールの胸などに傷薬などを塗って治療を行った。

その間、龍姫は近くにあったパイプいすを持って離れて後ろを向いて座っていた。

「はい、これでブラックハートの治療を終了しました」

「それじゃあ、頼みました」

龍姫はノワールの治療が終わったのを見届けて真龍姫達の所へ戻って行った。

「うくん・・・あれ、此処どこ、確か、わたし龍姫に」

「目が覚めたんですね!! ブラックハート様!! 此処は闘技場の医務室ですよ!!」

「そっか、わたし龍姫に負けたんだった、ってなんでわたし龍姫のジャケット着てるの!!」

「落ち着いてください!! ブラックハート様!! さっきその龍姫と言う方が、そのジャケットをブラックハートに着せて、お姫様抱っここで此処に運んでくれたんですよ!!」

「そうだったの!!Σ(。∩。) あとでお礼しなきゃ」

龍姫が医務室から出て数分後に気絶していたノワールが目をしたのである。

ノワールは龍姫にジャケットを着させてもらっっておまけにお姫様抱っここで医務室に搬送されたと医師から聞かされて、赤面していた。

「お姉ちゃん!! 大丈夫?」

「ユニ!! それに星龍達まで、一体どうしたの?」

「何じゃない!! 折角、星龍さん達のデバイスのリライズ機能で着替えさせてあげようと思ったのに」

「これじゃ、どっちが妹かわからないわね!!」

「そうだね、だって知らない人がこの状況を見たらユニちゃんがノワールさんに、見るもん」

「ありがとう、ユニ、星龍お願いしてもいいかしら、いつまでも龍姫のジャケットを着てる訳にはいかないから」

「わかったよ、ノワールちゃん!! お願い!! アスタリア!!」

「かしこまりました!! マスター!!」

「何!!」

「この方のお着替え、終了しました!!」

「ありがとう、アスタリア」

「これで教会に帰れるわ!! ありがとうみんな!!」

しばらくして星龍達が医務室に駆けつけて、星龍が次元デバイス「アスタリア」でノワールのクリアドレスをリライズした。

ノワールは龍姫のジャケットを着たままクリアドレスを着せてもらって星龍にお礼を言っつて、医務室を後にしたのである。

「ノワール!! もう大丈夫そうだね!!」

「ありがとう、龍姫!! これ返すわ、今度は絶対負けないんだから!!」

「それでもボクは負けてあげないから」

「さてと、客席に行こう!!」

ちようど、龍姫が自動販売機でペットボトルのお茶を購入していたのでノワールは借りていたジャケットを返し、龍姫に宣戦布告をし、一緒に観覧席に戻るのであった。

白の女神と白獅子

医務室から身体中絆創膏だらけのノワールを連れて龍姫達が戻ってきた頃、ちょうど芽龍とブランの模擬戦が始まるうとしていた。

「それじゃあ、始めようぜ!! 芽龍!!」

「そうね、来い!! グランヴェール!!」

「呼んだか?」

「まさか、その斧しやべるのかよ!!Σ(。∩。)」

「あなたにも聞こえるのね、けどこっちも全力で行かせてもらうぜ!! (流石に女神であることは伏せねえとな)」

ブランは女神化して、得物である斧を実体化させて構えて、芽龍は魔戦斧グランヴェールを呼び出した。

なんと龍姫達以外でグランヴェールの声が聞こえるとブランが芽龍に言ってきたのである。

そうこうしている間に試合開始のアラーム音とランプが点灯した。

「こっちから行かせてもらうぜ!! シュトウルムヴィント!!」

「効かねえなっとな!! こっちも行くぜ!! 弧月閃!!」

ブランが速攻で斧を振り上げて氷柱で攻撃する「シュトウルムヴィント」を繰り出してきた。

それを右に素早くかわしてブランに接近して、月を描くように振り上げる特技「弧月閃」で応戦した。

「流石だぜ!! 惜しいな、おまえが女神だったらよかったのにな!!」

「ゲッターラヴィーネ!!」

「すまねえな、女神じゃなくてよ!! (本当は別次元のおまえなんだから) 爆碎斬!!」

ブランは斧を大上段から振り落とし攻撃する「ゲッターラヴィーネ」を繰り出してきた。

芽龍はそれを斧を叩きつけて石つぶてを飛ばす特技「爆碎斬」を放つことで軽減した。

「行くぜ!! 飛ばして行きますか!!」

「飛ばして行きますか!!」

二人とも同時にオーババリミッツLV3を発動した。

「喰らえ!! アインアシユラーク!!」

「余裕♪ こっちも行くぜ!! 連牙爆碎迅!!」

ブランは龍姫達が修得している絶空裂氷撃のように氷柱で攻撃する「アインアシユラーク」を繰り出してきた。

芽龍は斧で石つぶてを飛ばして、更に斧を振り回し、石つぶてをもう一回飛ばす奥義「連牙爆碎迅」で向かい打った。

そして、

「腹括れよ!! 天狼滅牙!!」

「しまった!! バーストアーツ出せるの忘れてたΣ(。D。)」

ブランがノワールとベール同様油断して叩いた衝撃で怯ませて滅多斬りにするバーストアーツ「天狼滅牙」に繋がられて、

「これで終わりだ!! 塵になりやがれ!! 緋焰滅焦陣!!」

「うわあああ!!」

闘気を纏った斧を叩きつけ、その勢いで斧共に上空に飛び上り斧を叩き付け衝撃波で纏めて攻撃する秘奥義「緋焰滅焦陣」を繰り出した。

「ぎつとこんなもんだ!!」

芽龍は意気揚々と決め台詞を言っていた。

先ほどと同じように、

「芽龍!! やりすぎや!! 早くブランちゃんを医務室につれてかんか!!」

「しまった!! 勢い余って秘奥義出しちゃった!!Σ(。D。)」
結局、ブランも大事なところ以外残してほぼ全裸であった。

「仕方ないわね・・・これで良し!!」

芽龍は着ていた白のロングコートでブランに着せてお姫様抱っこで医務室に搬送したのであった。

白の女神候補生VS親善大使

芽龍が模擬戦で負けて気絶したブランを医務室にお姫様抱っこで搬送している頃

「お手柔らかに……」

「此処は穏便に……」

「大丈夫かな(´・ω・｀)」

龍琥VSロムの模擬戦が始まろうとしていた。

そして、試合開始のアラームが鳴り響き、

「行くよ……揺らめく焰、猛追!!」 ファイヤールール!!」

「遅いよ……魔神拳!!」

「誰か、この二人に早くしゃべれるように特訓してくれないかな(´・ω・｀)」

ロムは早速、女神化して龍琥目掛けて火炎弾を最大十発発射する初級魔術「ファイヤールール」を発動させたのだ。

それを容易くかわした龍琥は得物を持つ右ではなく、左拳を振り上げて衝撃波を放つ特技「魔神拳」で応戦した。

天龍は二人が動きは早い、しゃべるのが遅すぎるので違和感を感じていた。

「フォトン!!」

「飛燕……瞬連……斬!!」

ロムは光の粒子で小規模の爆発を熾す初級魔術「フォトン」を発動させて龍琥に攻撃を仕掛けた。

発動までに時間が掛かる初級魔術であること知っていた龍琥はロムの背後に回り込んで蹴り上げながら斬り上げる奥義「飛燕瞬連斬」を繰り出した。

「キャ!! 流石、龍琥ちゃんだね、でも、本気にさせちゃった!!」

「わたしも本気で……行くよ!!」

勝負を決めるため二人ともオーババリミッツLv3を発動した。

「行くよ!! アイスコフィン!!」

「牙連崩襲顎!!」

ロムは氷の攻撃魔術で攻撃をしてきたのだ。

龍琥はそれを崩襲脚と双牙斬の合体奥義「牙連崩襲顎」で向かい打ち、

「ノーザンクロス!!」

「これで決めるよ!! 響け!! 集いて!! 全てを滅する!! 刃になつて!! ロスト・フォン・ドライブ!!」

ロムは自身が修得したエグゼドライブ「ノーザンクロス」を繰り出し、龍琥は得物である刀を天に掲げて周囲をオーラで巻き上げて攻撃した後、正面の敵を滅多斬りにして、大上段から振り下ろしそこからビームを放つ親善大使の秘奥義「ロスト・フォン・ドライブ」を繰り出して向かい打った。

双方の大技が炸裂して物凄い砂煙が舞い、立っていたのは、
「喧嘩する相手は選んだ方がいいよ!!」

意気揚々と龍琥が決め台詞言いながら立っていた。

ロムはと言うと、

「龍琥ちゃん!! やりすぎだよ!! 早く医務室に連れてくか、その場で治療術で治しなさい!!」

「やりすぎちゃった・・・聖なる活力、ここへ、ファーストエイド・・・」

「わたし、龍琥ちゃんに・・・負けちゃった」

「ロムちゃん、立てる? はい」

「ありがとう」

一応衣服が木端微塵にならなかったのも、龍琥はその場で治療術「ファーストエイド」で傷を癒して、ロムを立ち上がらせて、入場口から退場して、観客席に戻った。

白の女神候補生VS気高き精霊の王

ロムと龍琥の試合が終わり、残るはラムと美礼の模擬戦だけとなった。

医務室に搬送されたボールとブランも何とか間に合ったのである。
スキット：模擬戦の戦績

ノワ「まさか、わたし達女神が全員が負けるなんて!!」

ネプ「どうせ、いつもの、そんな技覚えなくても、わたしは強いんだからとか言って、星龍達との稽古サボってたんでしょ」

ノワ「悔しい!! あのネプテューヌに言い返せないなんて!!」

ボール「仕方ありませんわ、これを機に武術の稽古を積みめばいいですわ!!」

ブラン「そうね」

「お姉ちゃんとロムちゃんの敵!!」

「わたしは死んでないから・・・」

「それじゃあ、行くわよ!!」

美礼とラムはそれぞれ得物を構えたのだ。

そして、試合開始のアラームが鳴った。

「行くわよ!! ウィンドカッター!!」

「遅いわよ!! 魔神剣!!」

ラムは女神化して、美礼に教わった鎌鼬で攻撃する初級魔術「ウィンドカッター」を美礼に向かって仕掛けてきたのだが、美礼は慣れた様子でかわして、斬撃を放つ特技「魔神剣」で応戦した。

「やるわね!! けど、わたしは甘くないわよ!! 派手に行くわよ!!」

「そう来なくちゃ!! わたしも、飛ばして行くわ!!」

二人ともオーバリーリミッツLv3を発動させて、

「サイクロン!!」

「こつちも、タイダルウェーブ!!」

ラムはオーバリーリミッツのおかげで詠唱を破棄して竜巻を起こす上級魔術「サイクロン」を、美礼は同じく洗濯機の別名を持つ上級魔術「タイダルウェーブ」で向かい打った。

「アブソリユートゼロ!!」

「万象を成しえる根源たる力……太古に刻まれしその記憶、我が呼び声に応え!! 今!! 此処に蘇れ!! エンシエントカタストロファイ!!
これがわたしの魔法の成果よ!!」

ラムはインブレスエンドのように氷の檻で攻撃するエグゼドライブ「アブソリユートゼロ」を繰り出し、美礼は敢て得物である刀を納刀して、狙い鋭き魔術蜂の称号を持つ天才魔導士の四色の術式を展開して、周囲の敵を纏めて攻撃する秘奥義「エンシエントカタストロファイ」で向かい打つたのである。

「1%の勝率も与えない!!」
「またもや、すごい砂煙が巻き上がり、それが収まり立っていたのは、

美礼が高らかと決め台詞を言って立っていた。

もちろんラムは気絶してしまった。

「ちよつとやりすぎちゃった!! (*^_^*) えへ!!」

「えへじゃねえよ!!」

「わかってるわよ!! 聖なる活力、此処へ、ファーストエイド!!」

「ロムちゃんく負けちゃった。。。(p(≡□≡)q)。。ウ
ワン!!!!」

美礼はラムに治癒術「ファーストエイド」を発動させて傷を治し、起き上がらせたのだが、ラムが泣き出したのであった。

美礼は「狙い鋭き魔術蜂」の称号を修得した。

我ら、女神に裁きを与える者なり

全ての模擬戦が終了したのだが、全戦全勝で龍姫達の勝利で幕を閉じたのであった。

「次は絶対勝つからね!!」

「わたくしも勝負事には負けず嫌いですわよ!! 覚悟してなさい!!
神子龍!!」

「わたしも、負けっぱなしはいやんでね!!」

「いつでも相手になってあげるよ!!」

「楽しみにしていますわ!!」

「いつでも来な!!」

「どうやら、余程悔しかったのか、三女神は宣戦布告をしていたのであった。

そんな時だった、いきなり闘技場の上空にフードが付いた四人のローブを纏った者たちが現れたのだ。

「こんにちは、ゲームギョウ界の女神様」

「誰? 貴女達は?」

「我は女神の争いによって」

「無念に散り、そして」

「何を言ってるの」

「貴様ら女神に裁きを与える者成り!!」

「わたく達に裁きを与えるですって!!」

「そうだ!! 黒の女神、ブラックハート」

なんと、現れたのは昔の女神達の争いで無念に死に、此処に生き返り、四女神に裁きを与えると宣戦布告をしてきたのである。

「確かに、わたくし達の先代の女神達はシエアを巡って争ってきたのは事実ですけど、今は関係はないですわ!!」

「関係ないか・・・ならば、明日、指定した場所に来い!!」

「来なければ、四ヶ国の民の命はないと思え!!」

「待ちなさい!!」

「どうやら、^{マシエコンヌ}犯罪神は次の手を打ってきたんだ!!」

「クソ!! 取り敢えず、その紙に書かれてる場所に、明日向かわねえとな!!」

「そうだね、それじゃあ、見るね!!」

ベールは先代女神達が争ってきたことに今の自分が関係していることを否定したのだが、聞き入れてもらえなかった。

その上、果し状のような封筒を残し、来なければ国民の命をもらおうと脅してきたのだ。

四人の女神に裁きを与える者たちは何処かへ消えてしまい、仕方なく龍姫達は残された封筒の封を切り中を見るのであった。

「えくと、紫の女神、レッゴウアイランドに来い」

「どっちが行けばいいのかわからないよ!!」

「鳴流神家と一緒に行けばいいんじゃない!!」

「そうだね、龍空翔お姉ちゃんの言う通りだよ」

紫の女神の決闘の場所はプラネテューヌ領のレッゴウアイランドを指定されたので、龍姫達は取り敢えずプラネテューヌ組で乗り込むことにした。

「それと、黒の女神、サプライ道に来たれし」

「ありがとう、明日はサプライ道に乗り込むわよ!!」

黒の女神の決闘場所はサプライ道を指定されたので、星龍達はラステイション組で乗り込むことにした。

「緑の女神、トリニティ湿原で待つ」

「わかりましたわ!!」

緑の女神の決闘場所はトリニティ湿原を指定してきたので神子龍達はリーンボックス組で乗り込むことにした。

「最後は、白の女神、パナンジャングルに来い!!」

「応、それじゃあ、明日、気合い入れて行くぞ!!」

「応!!」

白の女神の決闘場所はパナンジャングルを指定してきたので、武龍達はルウィー組で乗り込むことにした。

「そうだ!! 龍空翔、今、ライフボトル持ってる?」

「持つてるけど、なるほど、みんなに渡せばいいんだね!!」

「確か、ネプテューヌを生き返らせたものよね、ありがとう、大事に使わせてもらうわ」

龍姫は龍空翔にライフボトルを三人に渡すように言い、龍空翔は三人に一本ずつライフボトルを渡した。

それぞれ、明日の健闘を祈って、その場で解散となった。

決闘の日

女神に裁きを与える者達から果し状を受け取った龍姫達は各担当の国に戻り、休息をとることにして、決闘の日を迎えた。

「みなさん!! 無事に帰って来て下さいね!!」

「わかったわ、みんな行くわよ!!」

「応!!」

各自で果し状に書かれていた場所に向かった。

そしてプラネテューヌ組の龍姫達は果し状に指定されていたレッツゴウアイランドに到着した。

「待っていたぞ、紫の女神」

「戦う前に一つ聞いていいかしら? どうしてわたし達女神を恨んでるの?」

「いいだろう・・・見た方が早いよ!!」

「口調が変わった・・・」

「あなた!! その体!!」

「その通り、わたしは先代の女神に見放され、あまりにも短い生涯に幕を閉じたことに無念を感じていたら、犯罪神様によって生き返った、風花です」

「酷い!! 犯罪神は人の命を物だとしか考えていないの!!」

「あなた達に言われる筋合いはないよ!!」

龍姫達の目の前に姿を現したのは、髪は青のショートカットに両腕をあのマジック・ザ・ハードにされ、心臓部に赤いランプが点灯した犯罪神によって生き返ったサイボーグの少女が姿を現したのだ。

おまけに手には刀を握っているのである。

「もう、戦うしかないのね!! お願い、龍姫達は、手を出さないで!!」

「わかった!! けど、絶対勝って!!」

「何、当たり前のこと言ってるの、勝つのはわたしよ!!」

「そう言ってるじゃないですか、パープルハートいや、シエアエナジーから見放された女神様!!」

「お姉ちゃん!! どういう事なの!! 説明してよ!!」

「ごめん、説明は後にしてあげるから」

「始めましょう、紫の女神様!!」

もう風花はネプテューヌしか見ておらず、龍姫達は刀の柄に手を掛けようとしたらネプテューヌがタイムマンをやらせてくれと言いだして龍姫達は刀を粒子化して、立会人を引き受けた。

風花は何処で知ったのかネプテューヌが一度死んだ所為で龍姫達同様に転生者になった事をネプギアの前で暴露したのだ。

それを聞いたネプギアはネプテューヌに納得できる説明を求めたのであったが、ネプテューヌが説明は後にして欲しいと言い、左腰のホルダーから二刀とも抜刀した。

ネプテューヌとサイボーグにされた風花の戦いの火蓋が切つて落とされた。

一方その頃

「来たか、黒の女神」

「当たり前よ!! わたしの国を落とされるわけには行かないからね」

「そうか、それを聞いて安心した」

「それと一つ聞いていいかな? いったい誰なの?」

「説明するより・・・見た方が早いよ!!」

「あれ? キャラが違うんですけど」

「その体、まさか!!」

「わたしは雷華ラストেশヨンのとある工場付近で暮らしの〜けど、先代の女神様の争いによってその工場を爆破されての〜」

「それとノワールと関係あるのかしら?」

「あるよ、だって先代の女神様はそこに住んでいた人をいなかったことにしたんだから〜それに目をつぶっていたんだからね〜」

「それ、逆恨みだよ!!」

「何言ってるのかわからなくブラックハートは何もしてくれなかった、だから!! その命で払ってもらおう〜それと、どっちかが死なないところから出られないから」

「犯罪神は命をなんだと思ってるの!!」

星龍達は果し状に書かれてたサプライ道の奥地に到着したら、早

速、フードを被った女神に裁きを与える者の一人が現れたのだ。

その女神に裁きを与える者がローブを脱ぎ棄てたのだ。

星龍達の目の前に現れたのは首から下が心臓以外がブレイブ・ザ・ハードのような機械にされた茶髪のセミロングの少女が姿を現したのだ。

星龍達は自分達の視覚を疑ってしまった。

サイボーグ少女こと、雷華は死ぬ前はラスティションの工場の近くに住む一般人で、皮肉なものにその付近でノワールの前の代の女神の争いでその工場を爆破され、家族ともども

命尽きたのだが、マジエコンヌ四天王による犯罪神信仰活動のおかげで、犯罪神によってサイボーグとして生き返ったと語った。

その手には二尺三寸の刀が握られていた。

おまけにノワールと雷華がいる場所にどちらかが命尽きるまで破ることが出来ない結界を張られてしまったのだ。

星龍達はノワールに助太刀が出来ないようにされてしまった。

そして、ノワールは刀を抜刀して、雷華と戦うことを決意した。

分子世界の黒衣の断罪者

龍姫達はレツゴウアイランドでネプテューヌと風花の果し合いが行われようとしていた。

「行きます!! 虎牙破斬!!」

「そんな!! この技は龍姫達しか教えられないはず!!」

先に動いたのは風花だったのだが、なんと龍姫達しか教えられない斬り上げて、斬り下ろす特技「虎牙破斬」を仕掛けて来たのだ。

ネプテューヌは風花の虎牙破斬を難なくかわしたのだ。

ところ変わってサプライド道ではノワールと雷華のデスマッチが行われようとしていた。

「行きます〜 蒼破あ!!」

「この技!! 星龍達しか教えられないはずよ!!」

「何言ってるのかわからずわたしにこの技を教えてくださいましたのは、犯罪神様ですから」

「つまり、僕たちの剣技を全て修得してるってこと」

「そうだよ〜」

先に動いたのは雷華だったが、疾風の斬撃を放つ特技「蒼破刃」を何も躊躇無く繰り出してきたのだ。

ノワールはかわしたが驚きを隠せないでいた。

雷華が言うには犯罪神に教えてもらったと明かしてきたのだ。

「どうする、わたしに殺されますか、ブラックハート様」

「嫌よ!! こうなったらやるしかないようね!! アクセス!!」

「そう来なくちゃ!!」

雷華の挑発のまんまと乗せれてしまったノワールは女神化して得物である刀を構えた。

「これはどうです? 時練爆鐘!!」

「そんな出鱈目に振り回して何したいのなのかしら?」

「ノワール!! 離れなさい!! その技は!!」

「もう、遅いです!!」

「何!! この術式は!! キャアアア!!」

「お姉ちゃん!!」

「うふふふ!! どうです、足が動かない感じは」

「お願い、動いてわたしの両足・・・動きなさい!!」

雷華はノワールに一定時間で爆発する魔方陣を張り付ける特技「時練爆鐘」を繰り出してきた。

ノワールはそうと知らず雷華に特攻を仕掛けてしまい、まんまと喰らってしまった、女神化してプロフェッサーユニットを着ていたと言え、それさえも破壊して、ノワールは両脚に大やけどを負ってしまったのだ。

ノワールが治癒術を使えないことを知ったうえである。

「さようなら、ブラックハート様!!」

「わたしは此処で終わるの・・・」

雷華がノワールに止めを刺そうと刀を振り上げて、ノワールが死を覚悟したのだ。

その時、ノワールの脳裏にある男が映ったのだ。

「此処どこ? あの何するつもり・・・まさか!!」

「法で裁けない悪党お前ならどう裁く?」

「何よ、そんなこと無理よ」

自分と同じ黒の長髪に、黒の服を身に纏った剣を紐でぶら下げた青年が映ったのだ。

そのままノワールは事の成り行きを見ることにした。

そして、

「法が評議会がお前を許してもオレはお前を許さねえ!!」

「何やってるのよ!!」

ノワールが見たのはその青年が法で裁けない者を裁いたところだった。

それはまだ続き、

「はしやぎすぎたな、キュモール、そろそろ舞台から降りてくんねえかな?」

「それ以上はやめて!!」

砂漠の街でまた法で裁けない者を裁いたのだ。

そして、

「だからって言って、個人の感覚で善悪を決め人が人を裁いていいはずがない!! 法が間違っているなら法を正すこと大切だ!!」

「おまえは、助かった命に、いつか法を正すから今は我慢して死ねって言うのか!!」

「そんなこと言えないわよ・・・」

その黒髪の青年が幼馴染みの金髪碧眼の青年と言い争っている場面が映り、

あの龍姫達が選択を迫られていつも言うあの、

「選ぶんじゃねえ!! もう選んだんだよ!!」

「なるほど、いつも龍姫達がいていた言葉ってこの人が言っていたことだったのね、そうね、此処であきらめるわけには行かないのよ!!」
言葉を言い放ったのだ。

それを見たノワールは最後の力を振り絞り、

「あり得ない!! どうして、確かに骨と靱帯ごと爆破したのに」

「ごめんなさい、わたしはまだ倒れるわけには行かなくなったの!!
飛ばして行くわ!!」

「お姉ちゃん!! もうやめて!! そんなことしたら、お姉ちゃんの足が」

「ユニ、わたしはね、選ぶんじゃなくて、もう選んだのよ!!」

「ノワールちゃん!! その言葉!!」

立ち上がりそのままオーバードリミッツLv3を発動させたのだ。

ユニはやめてと叫んだが、ノワールは脳裏に映ったあの「選ぶんじゃねえ!! もう選んだんだよ!!」と言い放ったのだ。

「その足で何ができるのですか」

「どうやら、奥義と秘奥義を出すのが精いっぱい見たいなのよ!! だから、これで終わりにしましょう!! 爪竜連牙斬!!」

雷華は驚きを隠せないでいた。

ノワールはあの青年が使う斬撃の間に蹴りを入れる型の奥義「爪竜連牙斬」を叩き込んで、そしてあの

「お終いにしましょう!! 閃け!! 鮮烈なる刃!! 無辺の闇を鋭く切

り裂き、仇名す者を微塵に砕く!! 決まったわ!! 漸毅狼影陣!!」
「お姉ちゃん!!」

狼が得物を襲うように陣を描きながら四方八方から滅多斬りにして最後は背後から一閃する「黒衣の断罪者」の秘奥義「漸毅狼影陣」を雷華に叩き込んだ。

「道閉ざす敵は何だって斬り捨てるのみよ!!」

ノワールはあの足で決め台詞を言っただけだったのであった。

分子世界の真実の探求者

ノワールは雷華の時練爆鐘を受けて足をやれたものにも関わらず、漸穀狼影陣を繰り出して、命からがら勝利したのだ。

「わたし、負けちゃったんだ、わたし、サイボーグなのに、泣いてるの？」

「何言ってるの、あなたは、泣けるのよ」

デスマッチに負けた雷華は唯一の生身である目から涙を流しながら、光になって消えていくのであった。

そして、雷華が負けたことによって星龍達との間の結界が崩壊して、

「お姉ちゃん!! 確か、龍空翔さんからもらったライフボトルを使えば」

「ありがとう、ユニ」

「流石に、ライフボトルを使ったとはいえ、病院に運んだ方がよい」「わかりました」

「取り敢えず、戦利品として、この刀は貰って行くよ」

星龍達は両足から夥しい出血と酷い火傷を負ったノワールに近付き前日に龍空翔から渡されたライフボトルをノワールに飲ませたら、痛みが限界だったらしく、ノワールは気を失ってしまった。

ユニはノワールをお姫様抱っこで病院へ向かうことにしたのだ。

星龍は雷華が残して行った刃渡り二尺三寸の刀を拾って粒子化してしまった。

ノワールが決着を付けている頃

「お待ちしてました、グリーンハート様」

「わたくしも、自分の国を守るためですから!! それといい加減、顔を見せて欲しいのですわ」

「それは失礼しました!! わたしの名はランです」

「!!」

「そんな、その体」

「これは、犯罪神様によって新たに与えられた体ですよ!!」

「やはり、犯罪神は人を道具としてしか見てないんだ」

「そんなことはどうでもいい、あなたはわたしの母の形見であるこの「蜻蛉切」の餌食になってもらいます」

「失礼ですけど、あなたのお母様とは認識はないですわ」

「そうだろうな、なぜなら、わたしの母は、わたしが幼き頃に、先代女神に殺されたからな!!」

「それ、どう言うこと?」

「どうやら、話過ぎたようだ、それと、わたしか、あなた様がどちらか一方が命尽きるまでここから出れられませんから」

「しまった!! これじゃあ、ベールを助けられませんわ!!」

「さあ、始めましょう、グリーンハート様」

「どうやら、戦うしかないようですね」

トリニティ湿原に到着した神子龍は指定された場所に待ち構えていたのは髪が赤いぼさぼさ頭に両腕が義肢のサイボーグ少女ランが待ち構えていた。

ランは母がベールの先代の女神に母を殺されたと言い、ベールと同じ長さの三大名槍の一本「蜻蛉切」を構えた。

おまけに神子龍達が助太刀出ないようにベールと自分だけ結界の中に閉じ込めて、デスマッチを仕掛けて来たのだ。

戦うしか道が無くなってしまったので、ベールは女神化して槍を構えた。

そして、

「行きますよ!! 瞬迅槍!!」

「この技は!! 神子龍達しか教えられないはず」

「何を言ってるのですか、グリーンハート様、犯罪神様が女神を殺すためわたしに授けてくださったんですから!! 旋風槍!!」

「くっ!! やりますわね、こちらからも行きますわよ!! 轟破槍!!」

なんとランは神子龍達しか教えられないはずの槍術を使いこなしてきたのだ。

ベールは一瞬、呆気にとられたが、かわしたのだが、空かさずランは槍を薙ぎ払って鎌鼬で攻撃する特技「旋風槍」で追撃してきたが、

ベールは槍で受け流して、槍を地面に突き刺して岩の槍で攻撃する特技「轟破槍」で反撃した。

「一気に決めさしてもらいます!!」

「あれはオーバーリミッツ!!」

「行きます!! 雷神旋風槍!!」

「キヤアアア!!」

「ベール!!」

ランは戦闘術「オーバーリミッツ」まで修得していたのだ。

オーバーリミッツLv3を発動したランは槍で敵を突き上げて雷と竜巻を熾す奥義「雷神旋風槍」をベールに仕掛けて来たのだ。

ベールはランの雷神旋風槍をまともに喰らってしまったのだ。

そして、

「ふっ!! てやつ!! はっ!! せい!! うおりややあああ!! うおお

おお!! マターデストライト!!」

「きやああああ!!」

「ベールうううう!!」

ランは虚空から無数の槍を生み出し、それを敵に目掛けて投げつけて、最後は渾身の一突きで貫く秘奥義「マターデストライト」をベールに叩き込んだのだ。

それをまともに喰らってしまったベールはある部分が無くなっていた。

「わたくしの胸が!!」

「いけませんね、そんなに脂肪を付けては、わたしが削り取らせてもらいました」

「あのままでは、ベールが失血死してしまいますわ(ですが、ここで正体を明かすわけには)」

ランは秘奥義でベールの豊満な胸をプロフェッサーユニットごと削ぎ取っていたのだ。

そこから、夥しい血が流れてしまっているベールは血を流しすぎた所為で気を失ってしまった。

神子龍達は只見守るしか打つ手がなかったように思われていたの

だが、ベールの脳裏にある光景が映ったのだ。

「・・・わたしの道だから」

「あの方は、髪が青いですけど、わたくしに似ていますわ」

青い髪の長身でベールのような肉体を持った槍使いがあるものを壊して仲間に別れを言つてどこかへ去つて行く光景だった。

それは場所を変え、

「強行な手段は許さないものを生む、わかるわよね？」

「確かにそうですね・・・」

とある建物で、すべてを壊そうとした騎士団長に向かって言い放つた台詞が聞こえてきたのだ。

そして、

「馬鹿な!! あれ程、血を流してるのに、まだ立つと言いうのか!!」

「これでも、わたくしは往生際が悪いんですわよ!! 本気で行かせてもらいますわ!!」

「ベール!! 今のあなたがそんなことした」

「・・・わたしの道ですわ!!」

ランは驚きを隠せないでいた。

なぜなら、ベールが意識を取り戻し、立ち上がってきたうえに、オーバリーミッツLv3を発動させたのだ。

「どうやら、奥義と秘奥義を出すのが精一杯の様ですわ!! 喰らいなさい!! 翔舞蒼月閃!!」

「うわわわああ!!」

ベールは最後の力を振り絞つて飛び上り、そこから槍を叩き付ける奥義「翔舞蒼月閃」を繰り出して、

「あなたには此処で果てていただきますわ!! 来たれ雷!! 裁きを受けなさい!! 煌華月衝閃!! いかがです?」

「どうやら、わたしが間違っていたようです、グリーンハート様」

青い髪の長身の女槍使いの槍に雷を纏わせて一閃する秘奥義「煌華月衝閃」で勝負を決めたのだ。

「わたくしに会ったのが運の尽きですわ!!」

ベールは血を流しながら決め台詞を言って結果が消え、倒れそうになったのだが、

「しっかりしなさい!! ベール!! これを飲みなさい!!」

「どうしてでしょうか、あなた達が女神に見えるんですわ・・・あとは頼みましたわよみんな・・・」

「ふう、どうやら、気を失った見たいですわね、ライフボトルで止血したとはいえ、流石に、血を流しすぎてますわ、輝龍・飛龍はその槍を回収して、わたくしと一緒に病院にベールを搬送しますわよ!!」

「わかったよ!! お姉ちゃん!!」

神子龍がベールを受け止め、龍空翔からもらったライフボトルをベールの口に流し込み何とか一命を取り止めたのだが、流石に、此処では本格的な手当てが出来なかつたので、神子龍達はランの置き土産の「蜻蛉切」を回収してベールを近くの病院に搬送するのであった。

分子世界の寡黙な斧使い

ベールが槍使いランに勝利して、神子龍が病院に搬送している頃
「来てやったぜ!! 出て来いよ!!」

「やつとお出ましですか、わたしはユイです」

「おい!! おまえ・・・」

「わたしは、先代の白の女神に一族を殺され、わたしも巻き込まれて死んだ、けど犯罪神様はこの肉体を与えてくれた」

「人の命をなんやと思ってるんや!!」

「始めましょう、それと、そこにいる方々にはそこから観戦してもらいましよう」

「ブラン!!」

「お姉ちゃん!!」

「大丈夫だ、心配いらねえ!!」

パナンジャングルに到着した武龍達は指定された地点に辿りつたら、髪は灰色のセミロングに、またも両腕が大きな義手を付けて、心臓部の赤いランプが付いたサイボーグ少女ユイが待構えていた。

手には斧が握られていた。

ユイはブランにデスマッチを仕掛けて、武龍達は手も足も出ない状態にされてしまった。

ブランは女神化して戦闘態勢に入った。

「行きますよ、爆碎斬!!」

「なんで!! お前が、武龍達の技を使えるんだよ!!」

「だって、犯罪神様が教えてくれたから」

「なんやて」

先に動いたのはユイだった、斧を叩き付け石つぶてを飛ばす特技「爆碎斬」をブランに仕掛けて来たのだ。

それをブランはなんとかかわした。

「今度は、こっちから行くぜ!! 弧月閃!!」

「流石、ホワイトハート、ですが、わたしも本気で行かせてもらいます」

「まさか!! オーバーリミッツ!!?」

ブランは月を描くように攻撃する特技「弧月閃」をユニ仕掛けたのだ。

ユイはブランの弧月閃を斧で受け流して、オーバーリミッツLv3を発動したのだ。

「喰らえく 空破特攻弾!!」

「あぶねえーじゃねえかよ!!」

ユイは錐もみ状態で体当たりする奥義「空破特攻弾」をブラン目掛けて繰り出してきた。

何とかかわしたブランだったが、

「我が道突き進むく スパイラルドライバー!!」

「うわあああ!!」

「ブラン!!」

「お姉ちゃん!!」

「大丈夫だ、しかし、次喰らったらまずいな」

「そんなくこれで決まったと思ったのに」

ユイはまた錐もみ状態で特攻する秘奥義「スパイラルドライバー」を繰り出した。

ブランはなんとか立ち上がったが、满身創痕であるのは変わりなかった。

そんな時だったブランの脳裏にある光景が映ったのだ。

「・・・自分の心を偽るのは良くないと思います」

「こいつ、わたしと同じくらいだな、おまけに得物まで一緒かよ」

ピンク色の髪をツインテールに結っていて、斧を得物にしている少女が映った。

そして場所が変わり、

「・・・さん、あなたは優しい人です!! でも、優しさに惑わされて判断を誤るなら・・・甘い人です」

「あの赤い奴、ネプテューヌと一緒に二刀流かよ!! まさか、あの野郎、あいつを先に行かせるために、こうしちやいらねえな!! 飛ばして行きますか!!」

ピンク色の髪の少女が龍姫達と同じく赤い服を着て二刀を両腰に差した少年を先に

行かせるために自分を犠牲にして言い放った。

そしてブランはオーバリーミッツLv3を発動させたのだ。

「いい加減く諦めてっ下さいよ」

「悪いが、わたしは優しきで判断を誤る訳にはいかねんだよ!! 芽龍直伝!! 獅吼滅龍閃!!」

「キヤア!!」

ユイはブランにいい加減にして欲しいと言ったのだが、ブランはお構いなしに、芽龍から教わった、斧を振り回して、獅子の鬨気を叩き付ける奥義「獅吼滅龍閃」をお見舞いして、

「これで終わりだ!! 塵に成りやがれ!! 緋焰滅焦陣!! 時は戻らねえ」

「そん・・な」

芽龍に以前、模擬戦でブランに止めをした鬨気を纏った斧を叩き付けて反動で上空に飛び上り、そのまま斧を叩き付ける秘奥義「緋焰滅焦陣」で勝負を決めたのだ。

「お姉ちゃん!!」

「大丈夫だ、…ふぐ!!」

「ほら、見せてみい!! あちやく、こりや、あばらの一く二本は逝つてるで」

「大丈夫だ、痛テテテ!!」

「ほら、しかないわね、聖なる恩恵を、キユア!!」

「ありがとうな、芽龍」

「さてと、治療術で応急手当したけど、念のため病院行くで」

「決めるよ…ネプテユース」

ユイは斧ごと光になつて消えていき、武龍達は結界が消えたのを確認してブランに駆け寄ったのだが、どうやらさっきのユイのスパイラルドライブを受けた時にあばらを一く二本折れていたのだった。

芽龍はブランに治療術「キユア」を掛けて応急手当を施して、ブランをお姫様抱つこで病院に搬送するのであった。

天覇極光斬!!

三女神が勝負に勝っている頃、レッツゴウアイランドではネプテューヌと風花の激しい剣戟が行われていた。

「どうしたんですか〜行きますよ〜 魔神剣!!」

「魔神剣!!」

「お姉ちゃん!!」

風花は一刀流とはいえ、斬撃を放つ特技「魔神剣」を放ってきたので、ネプテューヌは同じく斬撃を放つ特技「魔神剣」で相殺した。

「行きます〜飛ばして行きますか!!」

「まさか!! オーバーリミッツ!!」

風花は勝負を決めるためオーバーリミッツLv3を発動したのだ。

「牙連蒼破刃〜」

「甘いわ!!」

風花は連続で斬り込んだ後、蒼破刃を放つ奥義「牙連蒼破刃」をネプテューヌに仕掛けてきたのだが、ネプテューヌは見切ってかわしたのだが、

「それで済むと思いますか〜 裂衝蒼破塵!!」

「キヤア!!」

「お姉ちゃん!!」

「大丈夫よ、ネプギア（困ったわね、刀が一本折れちゃったけど、元々は一刀流だったから何とかするわ）」

風花は袈裟斬りをした後、風を纏った刀を斬り上げて衝撃波を放つ特技「裂衝蒼破塵」をネプテューヌに繰り出したのだが、ネプテューヌは龍姫達との特訓の成果でスキル「パリイ」を修得したおかげで、ほぼ無傷だったのだが、左で持っていた刀が真つ二つに折れてしまった。

「まさか、二刀流じゃないと、勝てないとか言いませんよね?」

「こう見えて、わたしは元々は一刀流から剣術をやっていたのよ」

風花がネプテューヌに挑発してきたのだが、ネプテューヌは聞き流して、刀を構えた。

そしてある光景がネプテューヌの脳裏に映ったのだ。

「人が変わるんだ!! 違う何かを知ろうとすることが人を変えるんだ!! 人が変われば世界だって変わる!!」

「そうよね!! 人は変わることが出来るわ」

紅い短髪に剣を持ち、以前のネプテューヌのように悠悠自適に暮らしてきていきなり世界の危機に巻き込まれた青年がある人物に言い放った場面が映ったのだ。

そして場面が変わり、

「誰だって生まれたその瞬間から生きる権利がある、皆自分であることだけで生きる価値があるだろう!!」

「この子、わたしと同じ二刀流だわ!! それにしてもいいこと言うわね」

自分と同じ二刀流で赤い服を着た少年が誰かに言い放った場面が映ったのだ。

また場面が変わり、

「未来は作りだすもんだろう!! 選んだ道を信じて創り出すもんだ!!」

「あの人、ノワールと勇龍に似てるわ、良いこと言うわね、口は悪いけど」

ノワールと同じく黒の胸元が開いた服に身を包み、左利きだろうか、左に刀を握って銀髪の男性に啖呵を切った場面が映った。

ネプテューヌはそのまま、

「飛ばして行くわよ!!」

「まだやるんですか」

「お姉ちゃん!! 絶対に勝って!!」

オーバリーリミッツLv3を発動したのだ。

「喰らいなさい!! 散沙雨!!」

「うぎゃ!!」

ネプテューヌは連続で突く特技「散沙雨」を繰り返し出し、

「秋沙雨!!」

更に滅多刺しにして斬り上げる秘技「秋沙雨」に繋げ、

「驟雨双破斬!!」

更に散沙雨と虎牙破斬の合体奥義「驟雨双破斬」に繋げ、

「腹括りなさい!! 天狼滅牙!!」

叩いた衝撃で怯ませて滅多斬りにするバーストアーツ「天狼滅牙」に繋ぎ、

「全力全壊よ!! 我が力を知り、己の無力を知りなさい!! 天覇極光斬!!」

「このくわたしがく!!」

光のオーラで巻き上げた後、滅多斬りにして、最後はぶつ飛ばす秘奥義「天覇極光斬」で勝負を決めたのだ。

「さようなら!!」

ネプテューヌは堂々と決め台詞を言うのであった。

「お姉ちゃん、さつき、あの子が言ってたこと・・・」

「ごめんなさい、教会に帰ったらゆっくり話してあげる」

「わかったよ」

風花の得物である刀を置き土産にして光になって消えて言った。

ネプギアはネプテューヌに風花が言い放ったあのことを問いただそうとしたら、ネプテューヌは教会に帰ったら話すと言って女神化を解いた。

「この刀、名が付いてある、フツノミタマ布津御魂、この刀」

「龍姫!! その刀がどうかしたの?」

「実はね、この刀は乱れた国を正すために、神様が人に与えた刀だって言われてる、由緒ある名刀だよ!!」

「なんで!! 風花が持ってたの!!」

「そんなのわからないよ!! けど、この刀はネプテューヌに相応しい刀だと思うよ」

「そうだね、わたしはいつかみんな仲良く暮らしたいもん!! この刀は有りがたく使わせてもらおうよ!!」

龍姫は風花が残していった刀に名が刻んであったので読んで見たら、あの神々が乱れた国を正すために人に与えたと言い伝えられる名刀「布津御魂」だったのだ。

龍姫はこの刀はネプテユーンに相應しいと渡したのであった。
一行は教会に戻るのであった。

真実を・・・

犯罪神放った四人の刺客を退けた龍姫達はプラネテューヌ教会に戻ってきたのだ。

「よかった!! ネプテューヌさんは、怪我はなかったみたいですね」

「いーすん!! その言い方だと」

「はい、ネプテューヌさん以外のノワールさんとベールさんは病院で緊急手術を受けておられます、幸いにもブランさんは肋骨が一本折れた程度だったので、医師に全治一週間と診断されたそうです」

「それってつまり、今、女神で動けるのって」

「ネプテューヌだけ」

戻ってきた龍姫達をイストワールが出迎えてくれて、ほかの女神達はブラン以外が意識不明の重体だと告げてきたのである。

この現状で動ける女神がネプテューヌだけとなってしまった。

そして、

「お姉ちゃん・・・もう・・・話してくれるよね」

「そうだね、いずれみんなに話さなきゃいけないと思ってたんだ、実はわたしは・・・」

「もう、シエアに左右されなくなっただんじやないの」

「流石、龍姫にはもうばれてたんだ、そう、あの時わたしは死んだことよって、女神でありながら、シエアエナジーを使わず、女神化が出来るようになっちゃったんだ、だから、もう、プラネテューヌの」

「もう、女神を辞めるとか言うんじやないよね、どうして!! わたしに相談してくれなかったの!! 妹のわたしに!! プラネテューヌの女神パールハートの妹であるわたしに!!」

「本当は、ボクたちに嫌われると思ったから」

「うん・・・」

「そんなこと気にしないよ、だって、シエアエナジーを感じられることが出来なくても、ネプテューヌはネプテューヌでしょ!!」

「わたしがプラネテューヌの女神でいいの?」

「何言ってるの、例え、シエアを使えなくても、わたしのお姉ちゃんな

んだよ!!」

「。。。 (ノノ)。。。 うわああああん ネプギア!!」

「お姉ちゃん!!」

「よかったな、丸く収まって」

「そうだね (いつかはボクたちの正体を明かす時が来るんだろうか)」

ネプテューヌはネプギアを庇って死んだことを明かして、生き返った時のもうシエアエナジーを補給しなくても、女神化を行えることを龍姫達に明かそうとしたら、龍姫に気づかれていた。

ネプギアはネプテューヌになんで相談しなかったのか、叱咤した。

ネプテューヌは涙ながらネプギアにプラネテューヌの女神で有りつづけて良いのか聞いたら、ネプギアはネプテューヌにプラネテューヌの女神でいて欲しいと答えた。

二人は泣きながら抱き合ったのである。

一方その頃

「そんな!! もうお姉ちゃんは」

「残念ですが、両足の靭帯及び骨がもう、ですが、切断は免れました、ではこれで」

「ありがとうございます」

「どうする、このことノワールちゃんに教えた方が・・・」

「これはアタシが直々にお姉ちゃんに伝えますので」

「そう、けど、天界総合病院なら治せると思うわ」

「そうですね、お姉ちゃんのお退院が決まったら、お姉ちゃんを天界総合病院に連れて行きます!!」

「わかったよ、ボクたちは先に戻るね」

「はい、此処はアタシに任せてください」

ちようどノワールの負傷した両足の緊急手術が終わったのだが、ユニは執刀医からノワールの足はもう動かないと宣告されていた。

幸い、龍空翔からもらっていたライフボトルのおかげで切断は免れた。

ユニはこのことは自分が話すと答えて、ノワールが退院出来次第、自分の左腕の治療を行った天界総合病院に連れて行くことを星龍達

に伝えて、星龍達に先に教会に戻るように言ったのだった。

三女神のその後の経過

ノワールの緊急手術が終わった頃ベールの緊急手術が終わったのである。

「お姉さま!! 先生!! お姉さまは、お姉さまは」

「落ち着てください!! チカ様、幸いにも、応急手当が早かったので、峠は越えました、後は、意識が戻るのを待つだけです、ですが、グリーンハート様には残念ですが、もう、○房は損傷が酷かったので、全摘出しました」

「つまり、お姉さまの胸は、」

「はい、こうするしかグリーンハート様を助けることが出来ない判断を下しました、ではこれにて失礼します」

「ありがとうございます」

ベールの緊急手術の執刀医にチカがベールの容態を血相を変えて訊ねたら、幸いにも応急手当が早かったので、一命を取りとめたのだが、ベールのあの豊満な胸は壊死が始まっていたらしく、全摘出したと医師から告げられたのだ。

「わたしは、なんとお姉さまに言えばいいのですの」

「そういえば、天界総合病院に連れて行けば何とかなるんじゃないかな?」

「そうですね!! わたくしとしたことがすっかり忘れてましたわ!!

ありがとうございます、輝龍」

「どういたしまして」

「あとはわたくしに任せて、教会に戻っててください」
「頼みましたよ、チカ」

余りの宣告にチカがベールに顔向けできないと、嘆いていたら、輝龍が天界総合病院に連れて行けば治るんじゃないかと言ったら、そうやらチカは忘れていたらしく、輝龍にお礼を言った。

チカは此処は任せてほしいと神子龍達に伝え、神子龍達は一足先に教会に戻るのであった。

一方その頃

「お姉ちゃん・・・」

「すまねえな、心配かけちゃまった、痛てて!!」

「もう、肺に刺さってなかったとはいえ、あばらが行ってもうてんねん!! しばらくは大人しいせいや!!」

「流石のわたしでも、これはすぐに動けねえことぐらいわかってるよ

!! イテテテテ」

「もう、しゃべるだけで、傷が疼くんだから、ほらよ」

「すまん、芽龍」

「別に構わないわよ」

「さあ、教会に帰るで!!」

ブランは病院で治療を受けていた。

幸いにもあばらが肺に刺さってなくて、一本だけ折れていただけなので、そのまま教会で療養を余儀なくされて、芽龍におんぶされて、教会に帰るのであった。

それから一週間が過ぎた。

「お姉ちゃん・・・あのね」

「ユニ、わかってるわ、もうわたしの両足が動かないことは、あの時から気づいてたから」

「ごめん、そうだ!! 天界総合病院に行こう!!」

「ユニ、あなた、けど、わたしが長くここを開けるわけには」

「何言ってるの、ボクたちが、代わりにできることはやっておくよ!!」

「そうよ、安心しなさい、あなたがいない間は、わたし達が代わりにやっておくから」

「わかったわよ、ユニ、行きましょう、天界総合病院に」

「うん!! お姉ちゃん」

ノワールが病院から退院して両足に痛々しくギブスが巻かれていた状態で電動車椅子に乗せられて教会に戻ってきたのだが、ユニが真実を話そうとしたら、ノワールからあの時すでに足に感覚が無くなったと告げられたので、ユニは天界総合病院で治療を受ければ治せると言った。

ノワールは自分がラストেশションを開けるわけには行かないと

言ったが、星龍達が代わりにできることはしておくとなワールに伝えた。

ノワールは安心してユニに連れられて転送装置から天界総合病院にいくのであった。

ところ変わってベールはと言うと、

「もう、わたくしの胸はないのですのね・・・」

「お姉さま・・・」

「ベール、今すぐに天界総合病院に行くのですわ!!」

「ですが」

「行きましょう!!お姉さま!!天界総合病院に!!」

「チカ、わかりましたわ!!行きましょう!!天界総合病院に、ブランには「偽乳」呼ばわれされますけど、背に腹は代えられないですわ!!」

退院して教会に戻ってきたのだが、自分の部屋の姿見鏡の前で胸に巻かれていた包帯を外していたら、後ろから神子龍達が来ていたので、今の自分の胸がブラン以上にぺったんこになっていた上に、大きな手術痕が残っていたのである。

今着てる服はジャージワンプにロングスカートの出で立ちである。

自分の胸が無くなったことに一瞬、愕然としていたが、神子龍が今すぐに天界総合病院で治療を受けるように諭した。

その事を聞いたベールはチカと共に天界総合病院に転送装置に乗って向かったのだった。

黒と緑の再生治療

ノワールとベールは今天界総合病院に来ていたのだった。

「あら、ベールじゃない!! どうしたのそんな服着て」

「ノワールこそ、電動車椅子に乗ってるじゃないですか」

「まさか、ベールさんも怪我を治しに来たんですか?」

「その通りですわ、ユニちゃん、わたくしもユニちゃんの気持ちかわかりましたわ」

「まさか、この前の戦いで胸を」

「はい、その通りですわ、ですが、此処でなら、本物そっくりに治せると思っています」

「そうだったのね、わたしは一刻も早くネプテューヌに追い付きたいだけだからね」

「もう、いい加減諦めたら、お姉ちゃんは武術関係は何やってもネプテューヌさんには勝てないって言えばいいのに」

「ユニ!! あなたって子は!!」

「此処は病院ですわよ!! 静かにしないと」

「ちようど受付が終わり、呼ばれるまで二人は話込んでいたのだった。」

二人とも呼ばれたので専門外来に向かったのだった。

「では、一旦、切断した後、新たにノワールさんのDNAで両足を再生する方法が適用されますが、よろしいですか?」

「はい、その再生治療をお願いします」

「では、今すぐに手術の準備を行います、では、こちらで、患者衣に着替えてください」

「ありがとうございます、ユニ、着替えさせてくれるかしら?」

「わかったわ、お姉ちゃん!!」

ノワールは医師に一旦、今の足を切断して、自分のDNAで新たに両足を再生する治療方法を選択した。

ノワールは手術を受けるため、患者衣にユニに着替えさせてもらって、ストレッチャーに乗って手術室に入って行った。

ところ変わってベールはと言うと、

「これですと、DNAで、○房を再生する方法が適切かと、よろしいですか?」

「その方法でお願いしますわ、あのく本物そっくりになるんですの?」
「何を言ってるんですか、大丈夫です、整形手術と違い、偽物ではないのですよ、ちゃんとクーパー靱帯まで再生しますので、安心してください」

「ありがとうございますわ」

「では、これから手術の準備を行いますので、あちらで患者衣に着替えてください」

「わかりましたわ、失礼しました」

医師に自分のDNAで○房を再生する方法を選択して、ベールは医師に本物そっくりになるのかを聞いたら、医師から本物そっくりに治ると言われたので、手術を受けるため、患者衣に着替えて、ストレッチャーに乗って手術室に入って行った。

二人が天界総合病院で手術を受けて、五日が経った。

「それでは、動かしてみてください!!」

「はい、動いたわ!!」

「よかったです、もうお仕事をなさってもいいですよ、では、お大事に」

「ありがとうございます」

「お姉ちゃん!! もう歩けるようになったの!!」

「うん、少し違和感があるけど、治ったことには変わりないわ!!」

「お姉ちゃん!! 教会に帰ろ!!」

「そうね!! 急いで帰るわよ!!」

どうやらノワールは無事に両足が再生治療のおかげで治ったのである。

その間、ネプテューヌにギブスを落書きされたのは言うまでもない。

「先生!! ありがとうございますわ、本当にわたくしの胸が戻ってきましたんですね!!」

「はい、以前より張りが増していますが、今まで通り、ブラを着けてい

れば大丈夫です」

「では、失礼しました」

「お姉さま!! 胸が元に戻ったんですね!! 以前より張りがあるような」

「どうやら、再生治療の副作用で胸に張りが出てしまったのですわ!!」

「ブラをちゃんと付けていれば問題ないと言われましたわよ!!」

「では、教会に戻りましょう」

「ベールも再生治療のおかげで以前より胸に張りが出てきて、大きさも少し大きくなったのだった。」

ウラヌスと龍の女神達

三女神の怪我が完治したことにより龍姫達は全員プラネテューヌ教会に集まっていた。

「あのくよろしいですか？」

「どうしたんだ、ミナ？」

「みなさんは、ウラヌスと言う女神様はご存知でしょうか？」

「知らないけど」

突然、ルウィーの教祖チカがウラヌスと言う女神を知っているかと今集まっている全員に聞いて来たのだった。

ミナはそのまま続けて、

「実はプラネテューヌにはウラヌスと言う女神が存在したんですが、犯罪神との戦いで肉体を失くして、魂だけが、ギャザリング城に今も存在してると言われてるんです」

「なるほど、ギャザリング城に行つて、ウラヌスに会いに行けばいいんだね!!」

「はい、その通りです」

「行こう!! ウラヌスに会いに」

「応!!」

ウラヌスと言う女神は犯罪神との戦いで肉体を失くし、今も魂だけがギャザリング城に生き続けているとミナが龍姫達に教えてくれたので、龍姫達はギャザリング城に向かったのだった。

ギャザリング城に到着した龍姫達は、ウラヌスと言う女神は地下にいますと言うので魔物を倒しながら進んでいった。

そして、

「ウラヌスくいるの〜」

「ほう、女神が・・・八人や二十四人も女神が来るとはな!!」

「ちよつと待って!! 女神が二十四人? おかしいわね、此処に居る女神は九人のはずよ!!」

「何を言っているのだ、黒の女神、ほう、なるほど、ツクヨミは別次元のお前さんたちを送りつけたようじゃな、紫龍の女神よ!!」

「龍姫さんが女神!!?Σ(。D。)」

「へえ〜お見通しつて訳なんだ〜ごめんね今まで教えなくて、セツトアツプ!!」

「ただ龍姫なのΣ(。D。)」

「そう、わたしが、別次元のプラネテューヌの紫龍の女神、パールドラゴンハートにして、パールハートの姉です、お見知りおきを」

「カツコイイ〜」

ウラヌスは肉体は存在しなかったが魂だけは存在したので、龍姫達はウラヌスと話すことに成功したので、話をしようとしたら、ウラヌスは女神の人数を数えて、二十四人と答えたのだ。

それを聞いたノワールは九人だと訂正を求めたのだが、ウラヌスはツクヨミの事を知っていたのだった。

ウラヌスは龍姫達の正体を見破り、龍姫の女神での通り名を龍姫に向かって言い放った。

そして、龍姫はもう正体を隠す必要がなくなったので、みんなの前で女神化したのだった。

龍姫の女神姿に候補生達は見惚れていたのだった。

「龍姫、パールハートのお姉ちゃんて言ったけど、別次元のネプテューヌは引退したのかしら?」

「いや、わたしは姉であるだけで、最高責任者はネプテューヌに任せてる、わたしは仕事上は女神秘書だから」

「そうだったんですう!!Σ(。D。)」

「一応、わたしの次元のコンパも女神になっているが、シエアエナジーを使わず女神化できる」

「そうなの!!Σ(。D。)」 龍姫、いい加減、変身解いたら」

「そうだな、ふう〜疲れたよ〜もちろんボクも女神化するときにはシエアエナジーを使わずに、魔力で変身出来るんだ」

「そうだったんですか、あれ、龍姫さんってなんで女神化したら目がオッドアイになってるんですか?」

「その事、実は、女神になった時、ネプテューヌとノワールの女神化した姿を思い浮かべて、女神デバイスを使ったら、なぜか、リボンでツ

インテールに結って、髪が淡い紫色に前髪だけ黒のメツシユになって、おまけに身長と胸まで大きくなっただけど、ボクが好きなアニメのキャラみたいには、バリアジャケットを着た状態で女神になっちゃったんだ、だから翼のプロフェッサーユニットがないんだよ!!」

「ドテツ!! ミ(ノ) | (ノ) || 3 ドテツ それってつまり、わたしとネプテューヌを足して、あなたが好きなアニメのキャラを足したってこと!! Σ(。D。)」

「そういうこと」

「流石、龍姫さんだね」

こっちの次元のノワールは龍姫にそっちの次元のネプテューヌは引退したのか聞いたしたら、最高責任者はネプテューヌのまま、自分はいくまで女神で秘書だと答えた。

ネプテューヌは龍姫に変身を解くように言い、龍姫は元の姿に戻り、自分がシエアエナジーを使わず魔力で女神化でできることを明かした。

ネプギアは龍姫が女神化すると目が右碧左翠になっていることを聞いたら、龍姫はパールハートとブラックハートを足して、そこに自分が好きなアニメのキャラのバリアジャケットを思い浮かべながら女神になったことを明かしたら、ノワールはその場でずけていたのだった。

復活!! 四天王!!

ギャザリング城でウルスラがツクヨミが別次元の四女神と四龍の女神達を送りつけたことを知っていた上に、龍姫達が女神であることを見破り、正体を隠す必要がなくなった龍姫はその場で女神化して正体を明かした。

「なんで、龍姫さんは女神になろうとしたんですか？」

「それは・・・」

「おまえさん、いや、お前さん達、龍の女神は全員が転生者なんだからな」

「龍姫達は、一回死んでるの!!Σ(。D。)」

「ごめん、それと、女神になった理由はボクたちがこの次元に来る前のゲームギョウ界で、マジエコンヌって言う人の罠に、三女神が捕まったんだ、それで転生した時にもらった女神デバイスで、紫龍の女神になったんだ」

「あれ？ 三女神？」

「実は、お姉ちゃんは、その時、左腕を骨折して、リーンボックス教会で龍姫さん達の帰りを待っていたんです」

「何よ!! それ!! 別次元のわたしは骨折してばっかじゃない!!」

「その時にわたしは霸王女神になったんです」

「そうだったの!!」

ネプギアは龍姫に何故女神になったのか質問したら、マジエコンヌと言う人物に罠に嵌められて、助けるために転生するときにもらった女神デバイスで紫龍の女神になったことを明かした。

「そんな話をしに来たのではないのだろう」

「はい、実はウラヌス様なら犯罪神を何とかできると思ってた」

「そんなことか、犯罪神対抗する方法は、正しき思いだ!!」

「つまり、強い意志と言うこと」

「そういうことだ!! さらばだ!!」

「ウルスラ様!! ありがとうございます」

「取り敢えず、教会に帰ろうか」

ネプギアがウルスラに犯罪神に対抗する方法を聞いたなら、ウルスラは強い心だと言いい残して、去って行った。

龍姫達は一旦、教会に戻ることにした。

「お帰りなさい、どうでした、ウラヌス様に会えましたか？」

「はい、会えました!!」

「そうですか」

龍姫達は教会に帰った来て、ウラヌスに会えたのか聞かれたので、会えたと答えたのだったのだが、

「大変よ!! マジエコンヌ四天王が各地に復活したって」

「そんな、またお姉ちゃんが」

「ネプギア、大丈夫!! もうボクたちが本気で行かせてもらおうから!!」

「そうだよ!! ネプギア!! 龍の女神達が付いてるんだから!!」

「龍の女神？」

「実は、凛々の明星の皆さんは全員が別次元の女神達なんです!!」

「それは、本当かい？」

「ケイ、こんな格好してるけど、わたしは別次元のブラックハートで、ノワールよ!! 勇龍はこっちのわたし達に近付くための偽名よ!!」

「なんで、わたしより身長があるのよ!!」

「そんなこと、簡単よ!! わたしも、覚醒したおかげでシエアエナジーを使わずに魔力で女神化できるうえに、身長と胸が大きくなったんだから」

「そんな、こと話してる場合、どうやら、十日の猶予を与えて来たわ!!」

「十日、そんだけあれば、十分だ!!」

「そうですね、こんだけの人数が居るんですから!!」

アイエフの携帯に諜報部員らしき人物からマジエコンヌ四天王が各地で復活したと連絡が入った。

それを聞いたネプギアはまたネプテューヌが死ぬ描写が浮かんでしまったのだが、龍姫達はもう正体を隠す必要がなくなったので、本格的に戦うと答えた。

復活したマジエコンヌ四天王から十日の猶予を与えられたので、龍姫達はそれぞれに担当してる、マジエコンヌ四天王を倒しに行くので

あつた。

分子世界のスケベ大魔王

マジエコンヌ四天王が各地に復活したことを知った龍姫達はマジエコンヌ四天王から十日の猶予を与えられたことを聞いた教祖たちが龍姫達凛々の明星にお礼としてある提案をしてきたのである。

「あのう、凛々の明星と女神様達にはこれまで疲れを癒して貰いたいと思い、プラネテューヌの温泉を貸切にしました、ですからゆっくりしてください」

「ありがとうございます!!」

教祖たちはプラネテューヌの温泉を貸切にしてくれたので、そこで龍姫達のこれまでの疲れを癒して欲しいと言うので龍姫達は早速、温泉に向かった。

龍姫達は教祖たちが貸切にしてくれた温泉旅館に到着して、脱衣場で服を脱ぎ温泉に入ることにしたのだが、

「おい!! 別次元のわたし、いい胸持ぶきってんな!! それ寄越しやがれ

!! (???) ゴルア!!」

「ふん!! 悔しかったら、覚醒しやがれ!!」

「この二人が同一人物なのが不思議だよ (・ω・)」

こっちのゲームギョウ界のブランが別次元の自分、芽龍に笑顔でマジ切れしていた。

芽龍は軽くあしらい、ネプテューヌは同一人物であることが不思議に思っていたのであった。

「龍華も胸、大きいわね!!」

「ユニこそ、大きくなったじゃない!!」

「わたしも覚醒したい!!」

「覚醒したら、コスプレ衣裳を新調しないとね」

「そうだったΣ (。D。)」

ユニと龍華は二人で胸を見せ合いっこをしていた。

ノワールも覚醒して大きくなりたいと思っていたが、勇龍が覚醒したらコスプレ衣裳を新調することを教えたら、ノワールは落ち込んでしまった。

「ベール様!! お背中、お流しします!! それにしても、戦いでもその象徴だった胸を全摘出したって聞いた時は、引退かと思いましたよ、でも、良く、ここまで後ろから見ても大きいのがわかるぐらい、完治したんですね!!」

「確かに、あの時は絶望しましたがけど、神子龍がとある病院を紹介してくれた、おかげですわ、それにしても、神子龍はわたくしより大きいですわね!!Σ(。D。)」

「ここまで大きいと、戦いに支障が出てくるので、女神化の時は態と胸を露出せずに、下にアンダーウェアを着て、その上から白と緑の戦乙女の鎧をモデルにしたバリアジャケットを着てるんですわよ!!」

「そうだったんですね」

「なんだ、その、偽乳がなんか落ち込んでるぜ!! ギャハハ!!」

「誰が!! 偽乳ですって!! いいですわ!! レントゲン写真を撮って来て差し上げあげますわ!!」

5pb. がベールの背中を流してベールの胸を見て、感想を述べていて、ベールは神子龍が自分より大きな胸を見て、その大きさを戦えていたことに驚きを隠せないでいた。

神子龍は女神化して戦う時は輝龍・飛龍がプレゼントしてくれたとあるゲームに出てくる戦乙女の鎧を参考に作ってくれたバリアジャケットを装着して戦うと教えた。

「ブランは小っちゃいままなんだね!! (*^▽^*)」

「クソくネプテューヌがあのままだったら、言い返せたのに」

「ネプ子と龍空翔とネプギアの裏切り者ムキ——o(・皿・)o——」

「いい加減、諦めたら、それにしても、龍姫達は遅いね」

「ごめん!! 髪解くの時間に掛かっちゃった!! (^——)」

ネプテューヌはブランが成長していないことをからかっていた。

自分が言い返せないので、ブランは悔しがっていた。

アイエフはネプテューヌ達姉妹が成長して胸がベールより大きくなったことを目の当たりにして、夜空に向かって吠えた後、体育座りをして僻んでしまった。

龍空翔は龍姫達がまだ来ていないことに気づいていたら、入り口から龍姫を戦闘に龍の女神達が露天風呂に入ってきたのだが、

「龍姫、一つ聞いていいかしら」

「どうしたの？ ノワール？」

「なんで」

プラネテューヌ組と凜々の明星以外「全員が全裸で入って来てるの!!Σ(。D。)

「ボクが死ぬ前にいた、「地球」の「日本」は基本、全裸だよ!!」

「呆れて、何も言えないわ(´・ω・、)

「龍姫って元々、大きいのに、女神化すると、大きくなるんだね!!」

「ネプテューヌ達だってそうでしょ!!」

「そうだったね!! それじゃあ、突撃だ!!」

「結局、こうなるんだ(´・ω・、)

龍姫は女湯であることを認識していたので、いつものように手ぬぐいだけ持って、露天風呂に全裸で、大きな胸を見せつけながらはいつてきた。

ネプテューヌ達と凜々の明星以外は呆れて何も言えなかったのだった。

ネプテューヌは龍姫に一目散に突撃していたのだった。

ベールは「偽乳」の称号を取得しました。

墜ちた正義

マジエコンヌ四天王が各地に復活したと知らされた龍姫達は、鳴流神家と紫の女神組がマジック・ザ・ハードを、獅子神家と黒の女神組がブレイブ・ザ・ハードを、御子神家と白の女神組がトリック・ザ・ハードを、神楽堂家とベールとアイエフ達は、ジャツジ・ザ・ハードをそれぞれ担当することになったのだった。

「最終目標は、みんなが此処に戻って来ること!!」

「応!!」

「頼みましたよ!!」

龍姫達は担当するマジエコンヌ四天王のいる場所に向かったのだった。

「来てあげたわよ!! ブレイブ・ザ・ハード!!」

「来たか、待っていたぞ、では、始めようか!!」

「もう、遠慮はいらないわね!! アクセス!!」

「ワフ!!」

星龍&天龍「セットアップ!!」

「まさか!!」

復活したマジエコンヌ四天王のブレイブ・ザ・ハードが待ち構えている場所、無限回廊に星龍達が到着して、ブレイブ・ザ・ハードはいきなり得物である大剣を構えた。

戦う意志を確認した星龍達は一斉に女神化して、各々の得物を構えた。

「やっぱり、戦うしかないの!! ブレイブ!!」

「残念だったな、その本人は此処にはいない!! ブレイブソード!!」

「余裕(^^)♪ わたしは手加減できないのよ!! 円閃牙!!」

「全力でお手合わせ頂いて光栄だ!! 黒衣の断罪者!!」

「わたし達もいること忘れてない? 絶空魔神撃!!」

「鳳凰天駆!!」

「わたしって空気じゃない!!」

ユニは戦うしか道がないのかとブレイブ・ザ・ハードに語りかけた。

しかしブレイブ・ザ・ハードは効く耳を持たなく、そのまま、大剣に炎を纏ませて、「魔王炎撃波」のまがい物のブレイブソードで攻撃してきたが、勇龍が女神化してるがそのままの長さの愛刀の「ニバンボシ」で防いで、斬りつけて、反動でキャッチして逆回転させる特技「円閃牙」を繰り出した。

星龍は二度抜刀する型で魔神剣と真空破斬の合体奥義「絶空魔神撃」をブレイブ・ザ・ハードに繰り出し、天龍が上空から鳳凰の闘気を身に纏い特攻する奥義「鳳凰天駆」で攻撃したのだった。

完全に出遅れたノワールドだった。

「お願い!! 龍華!! 力を貸して!!」

「いいわよ!!」

龍華&ユニ「飛ばして行くわよ!!」

「まさか!! 二人同時だと!!」

ユニは勝負を決めるため、もう一人の自分、龍華に力を貸してほしいと言い、二人同時にオーバードリミッツLv4を発動させたのだ。

「来い!! アスラ!! ユニ!!」

「ブレイブ!! 幻魔斬翔剣!!」

「崩龍無影剣!!」

二人の心意気に応えるべくブレイブ・ザ・ハードは迎え撃つ体制を取ったが、そのわずかな隙を突き、ユニは斬馬刀で薙ぎ払った後、龍華が教えてくれた絶翔斬を合わせた奥義「幻魔斬翔剣」を繰り出して、それに合わせて、龍華が冷気を纏いながら特攻して、切り返してまた特攻する奥義「崩龍無影剣」を繰り出した。

そして、

「やっちゃいましたようか!! ユニ、お先に失礼!! んで、仕上げは……よろしくお願いね!!」

「わかったわ!!」

龍華&ユニ「バレット・クルシフィクション!!」

「散り際は美しくないよね!!♡」

龍華が斬馬刀で特攻して、それをユニがライフルで追撃した後、最後は二人で銃弾を放って、花火を打ち上げる秘奥義「バレット・クル

シフィクシヨン」を決めた。

龍華&ユニ「わたし達のやり方でゲームギョウ界を守って見せるわ!!」

二人で決め台詞を言って、めた。

「ユニ!!」

「アタシ・・・」

「わたしがやるわ・・・」

「勇龍さん!!」


ブレイブ・ザ・ハードに止めを刺すことに躊躇していたユニに変わって、もう一人のノワールこと勇龍がブレイブ・ザ・ハードを介錯したのだった。

「さらば、ユニ・・・」

「ブレイブ、アンタの意志は受け継いだわ!!」

「損な、役割だね、勇龍」

「そんなこと、言ってる場合、お姉ちゃん!! さっさと帰るわよ!!」

「わたしって何しに来たんだろう・・・|> 幽体離脱」

「お姉ちゃん!! 体からなんか出てるわよ!! Σ(。Д。)」

ブレイブは光になって消えて逝った。

星龍は勇龍に声を掛けたのだが、勇龍は照れ隠しをして教会に戻ることにした。

出番がなかったノワールは幽体離脱をしまい、ユニがノワールの魂を追いかけていたのだった。

虎牙破斬・罅!!

星龍達が復活したブレイブ・ザ・ハードとの因縁にケリがついた頃、武龍達は復活したマジエコンヌ四天王のトリック・ザ・ハードの待つ、アイシクルフオールにやってきたのだった。

「ロムちゃんく、ラムちゃんく」

「アンタなんか!! 消し炭にしてやるんだから!! 行くよ!! ラムちゃん!!」

「わかった・・・ラムちゃん!!」

「御子神家も、行くで!!」

「応!! お姉ちゃん!! 来い!! グランヴェール!! そして、バリアジャケット装着完了!!」

「おまえら!! 女神だったのかΣ(。□。)」

「恨みがないが、おまえをほつたらかすとやばいんでな!!」

「ライオンさん・・・」

合って早々、ロムとラムの名前を大声で叫び出したので、武龍達は一斉に女神化したのだった。

もう一人のブランこと芽龍はあの獅子王のバリアジャケットを着たのである。

それを見たロムは芽龍にライオンの耳と尻尾が生えていたことに、驚きを隠せないでいた。

「べろくん!!」

「キヤ!!」

「ロム!! ラム!! 大丈夫か?」

「大丈夫・・・」

「おまえら!! 下がってる!! 魔神拳!!」

「ぎよええ!!」

トリック・ザ・ハードは長い舌で攻撃を仕掛けて来た。

ロムとラムはなんとか直撃は避けたものの、吹っ飛ばされてしまった。
た。

芽龍はブラン達の前に立ち、得物を持っていない左拳を振り上げて

衝撃波を放つ特技「魔神拳」を繰り出した。

トリック・ザ・ハードに命中したのだった。

そしてロムとラムとブランが急に白い光に包まれ出したのだ。

「どうやら、わたし達姉妹は覚醒できるみたいだな!!」

「そうだね、お姉ちゃん!!」

それとロムとラムの脳裏にある光景が映ったのだった。

「奪われるだけの過去もない。それでも俺は俺であると決めたんだ。おまえがどう思ったとしても俺はここにいる。それがおまえの言う強さに繋がるなら、俺は負けない!!」

「龍琥ちゃんと・・・同じ服・・・でも利き手が違う」

聖なる焰の光の名を持つ赤い髪に、左利きだろうか、左手に剣を持ち、自分と同じ顔の剣士に向かって言い放った光景がロムの脳裏に映ったのだった。

「カッコ悪い、生き方は見せられんな!!」

「誰よ!! あいつ、おまけに、胸が大きいし」

地・水・火・風の精霊を使役出来る、気高き精霊の王が一人の少年に言い放った光景がラムの脳裏に映った。

そして、光が収まるとそこにいたのは、

「そんなくロムちゃんくラムちゃん!! なんで 成長するのく」

「あれ、お姉ちゃん、胸が大きくなってるよ!!」

「わたしもく」

「これで、わたしは、巨乳を手に入れたんだな!! ギャハハ!! (*^_^

*)」

「どうやら、無事に覚醒できたみたいやな、気取り直して、行くで!!」

三人はと言うと、

ブランが身長が165cmに伸びており、胸がボール並に大きくなり、プロフェッサーユニットは完全に露出を失くしてあった。

ロムは身長が160cm、胸がチカ並に大きくなって、両足に白のロングブーツを履き、得物が杖から二尺三寸の水色の宝玉が鐙の辺りに付いた刀になっていた。

もちろん右利きのままであった。

ラムはロムと瓜二つなのは変わらないが、左利きから右利きになり、二尺三寸の桃色の宝玉が付いた刀を握っていた。

「行くぞ!!」

「もう!! こうなったら、自棄だ!!」

「行くわよ!! ロムちゃん!!」

「わかったよ、ラムちゃん!!」

「覚醒したおかげでロムが早口でしゃべるようになったのか」

ロム&ラム「飛ばして行くよ（わ）!!」

トリック・ザ・ハードは好きだったロムとラムが成長した事実を受け入れなくて、自棄になり、ロムとラムは二人同時にオーバードリミッツLv4を発動させたのだ。

「龍琥ちゃん直伝!! 飛燕瞬連斬!!」

「ゴルドガッツ!!」

「ぎよえええ!!」

ロムはすり抜けて、相手の背後に回り込み蹴りを入れながら斬りつける奥義「飛燕瞬連斬」をトリックに叩き込み、ラムは魔術で招き猫を召喚する攻撃魔術「ゴルドガッツ」をトリックにお見舞いして、

「ラムちゃん!! 飛んで!!」

「任せて!! ロムちゃん!!」

「輝け!!」

「極光!!」

「込めるよ!!」

ロム&ラム「虎牙破斬・罅!!」

「幼女バンザイ!!」

ロムは敢て刀を納刀して、トリックを空中に打ち上げて、ラムが空中に飛びあがり追撃して、二人で挟撃する合体秘奥義「虎牙破斬・罅」でとどめを刺した。

「喧嘩する相手を選んでね!!」

「これが女神の力よ!!」

二人は決め台詞を言っただけだったのであった。

天光神雷空裂衝!!

ブラン達が覚醒してトリックを倒していた頃、ジャツジ・ザ・ハードが待ち構えているジункボックスにやってきた神子龍達は魔物を倒しながら奥へと進んで行った。

「さあく始めようぜく最高の戦いを!! 本気で来い!! 出ないと、いけねええええだろぅがあああ!!」

「どうやら、手遅れの様ですわね!!」

「そうだね、もう、手加減抜きで!!」

「行かせてもらうよ!! セットアップ!!」

「アタシたちは空気みたいよ、コンパ(・ω・)」

「それでも、みなさんのサポートはしなきゃですう!!」

奥地で待ち構えていたジャツジ・ザ・ハードはもうあの異端の暗殺者並に明後日の方向に逝かれてしまっていたので神子龍達は一齐に女神化をして、得物を構えなのである。

アイエフ達は完全に出遅れてしまった。

「行くぞ!!」

「甘いわよ!! 弧月閃!!」

「こつちですわよ!! 月光!!」

ジャツジ・ザ・ハードは神子龍達に向かってハルバードで攻撃してきたが、あまりにも攻撃速度が遅く、大振りだったので、神子龍達はあっさりかわして、輝龍は槍で満月を描く特技「弧月閃」で攻撃して、神子龍はジャツジ・ザ・ハードの真上に縮地で回り込みそこから槍を投げつけた槍は瞬時に手元に戻る奥義「月光」で攻撃した。

そんな時だった

「ちよこまかと!!」

「槍が!!」

ジャツジ・ザ・ハードは闇雲にハルバードを振り回し始め出して、不意を突かれてしまったボールは得物である槍を真つ二つにされてしまった。

一瞬神子龍達の間を風が吹いたと思っただらそこにいたのは、

「お姉さまに指一本でも触れて見なさい!!」

「その声!! チカですの!! (。D。ノ)」

「まさか!! わたくしたちの次元のチカお姉ちゃんですの!!」

「いいえ、あなた様の次元の箱崎チカではございませんわ!! そんなことより、マジエコンヌ四天王を片付けるのが先ですわよ!!」

「そうですね!! ベール!! 受け取りなさい!!」

「この槍は、「蜻蛉切」!! 有りがたく使わせていただきますわ!!」

ベールと瓜二つのプロフェッサーユニットをモデルにした露出が全くないバリアジャケットを着て、身長が169cmで胸がベール並の女神化した、こっちの次元のチカがジャツジ・ザ・ハードの攻撃を受け止めていた。

神子龍はランが残して行つた笹穂の刀身で、長さはベールの槍と同じくらいの三大名槍の一本「蜻蛉切」をベールの側に向かって投げて、それを受けつ取つたベールは体制を整えた。

「そうだ!! 俺は、これを待ってたんだああ!! 出ないと、いけえええねだろうが!!」

「ベール!! チカ!!」

「行きますわよ!! チカ!!」

「はい!! お姉さま!!」

ベール&チカ「本気で行くわよ!!」

ジャツジ・ザ・ハードは絶叫していたが、お構いなしに神子龍は、ベールとチカに合図を送り、二人は同時にオーバリーリミッツLv4を発動させた。

「喰らいなさい!! 月華天翔刃!!」

「落爪月!!」

ベールは槍で特攻して天月旋に繋げる奥義「月華天翔刃」を繰り出し、チカは槍を振りかぶって叩き付ける奥義「落爪月」を繰り出した。

そして、

「お姉さまと共同作業ですわね!!」

「チカ、お願いしましたわよ!!」

「行ってください!! お姉さま!!」

「あなたには此処で果てていただきますわ!! 雷撃を喰らいなさい!!」

ベール&チカ「天光神雷空裂衝!!」

「決まりましたわ!!」

「どうでしょうか!!」

「うぎゃつあやゝああ!!」

ベールが打ち上げて、チカがベールの槍に魔術で雷を纏わせて、槍を投げつける合体秘奥義「天雷神雷空裂衝」をジャツジ・ザ・ハードに叩き込み、止め刺して、ジャツジ・ザ・ハードは光になって消えて逝ったのだった。

「チカ、あなた、どうして女神になってるのですの?」

「実は、わたくしも、輝龍達に頼んで魔力を分けてもらったんですわ!!

そしたら、今になって女神化が出来るようになりましたわ!!」

「そんなことでしたの!!」

「これでお姉さま達を手助け出来るんですね!!」

「ただし、無茶はしないことですわ!!」

「もちろんですわよ!! お姉さま!!」

ベールはチカがどうやって女神になったのか解いた出したら、輝龍達に無理を承知で魔力を分けて欲しいと頼み込んで分けてもらったら、今になって女神化が出来るようになったと説明した。

納得した一行は教会に戻るのだった。

麟凰天翔駆!!

復活したマジエコンヌ四天王の内、三体を倒し、残るはマジック・ザ・ハードになったのだった。

龍姫達はマジック・ザ・ハードが待ち構えているガベイン草原に着して魔物を倒しながら奥に進んでいった。

するとそこにいたのは、

「マジック様!!」

「おまえなど知らん!!」

「何言ってるチュー!! このマジックは別人でチュー!! 逃げるでチュー!!」

アナゴ族もといインカローズもとい下っ端もといリンダとワレチューが復活したマジック・ザ・ハードが同一人物だと思い込んでいたのだが、ワレチューが別人であることを見破り、逃げ出していた。

「マジック!!」

「ほう、よく来たな!! 褒めてやるぞ!!」

「褒めてもらって光栄にでも思った? ふざけないでね!! ガラクタの価値もわからないなら、あなたはガラクタ以下だ!!」

「そうだな、だが、おまえ達には消えてもらおうぞ!!」

「行くよ!! みんな!! 全力全壊!!」

龍姫達は復活したマジック・ザ・ハードとご対面を果たしたのだが、合つて早々に龍姫はマジック・ザ・ハードに向かって啖呵を切り、一斉に女神化をして、得物を構えたのである。

「喰らええ!! 虎牙破斬!!」

「おまえ達も女神だったのか!! これはこれで楽しめそうだな」

「おまえに褒められてうれしくないな!! 月閃光!!」

「その通りだニャー!! 絶風刃!!」

「くっ!! ありえん!! なぜ!! おまえたちはシェアエナジーを用いないのか!! そんなはずあるか!!」

「悪いけど、わたしは覚醒したおかげで、シェアエナジーを使わずに術技を使えるのよ!! 魔神剣!!」

龍姫は斬り上げて斬り下ろす特技「虎牙破斬」を繰り出した。
マジック・ザ・ハードは龍姫達が女神であることに驚きを隠せない
でいた。

龍音は月を描きながら斬り上げる特技「月閃光」を繰り出し、うず
めは素早く十文字に振りその軌跡に沿って鎌鼬を放つ奥義「絶風刃」
を繰り出した。

マジック・ザ・ハードは龍姫達がシエアエナジーを使わずに術技を
放っていることが信じられなくなっていた。

真龍姫は斬撃を放つ特技「魔神剣」を繰り出して攻撃した。

「ネプギア!! 行くわよ!!」

「わかった!! お姉ちゃん!!」

ネプテューヌ&ネプギア「飛ばして行くわ!! (ぞ)」

ネプテューヌとネプギアは二人同時にオーバードリミッツLv4を
発動させたのだ。

「来い!! 女神ども!!」

「喰らいなさい!! 閃空双破斬!!」

「沈め!! 皇光破斬!!」

待ち構えていたマジック・ザ・ハードにネプテューヌは閃空裂破と
虎牙連斬の合体奥義「閃空双破斬」を繰り出し、ネプギアは刀を叩き
つけて光の斬撃を放つ秘技「皇光破斬」を繰り出して攻撃した。

そして、

「行くわよ!! ネプギア!!」

「任せてくれ!! お姉ちゃん!!」

ネプテューヌ&ネプギア「せーの!!」

「これで決めるわ!!」

「行くぞ!!」

「麟!!」

「凰!!」

ネプテューヌ&ネプギア「天翔駆!!」

「馬鹿なく」

ネプテューヌがネプテューンブレイクのように縦横無尽に飛び回

りながら滅多斬りにして行き、ネプギアは刀身に炎を纏わせて滅多斬りにしながら体術を組み合わせて連撃を叩き込み、メに打ち上げて同時に鳳凰天駆を二人でお見舞いする隕石の名を持つ剣士と宝石の名の持つ少女の信頼の証である合体秘奥義「麟凰天翔駆」をマジック・ザ・ハードに決めたのだ。

ネプテューヌ&ネプギア「わたし達のやり方でゲームギョウ界を守って見せる!!」

ネプテューヌ&ネプギアは姉妹で決め台詞を言って刀を納刀した。

「取り敢えず、教会に帰ろう!!」

マジック様光なって消えてくのを見届けた龍姫達は教会に戻るのだった。

決戦前夜!!

復活したマジエコンヌ四天王を全て倒した龍姫達はプラネテューヌ教会に集まっていたのである。

「みなさん!! お疲れさまでした!!」

「あとは犯罪神だけだな!!」

「そうね!! いよいよ!! わたしが本気を見せるのね!!」

「流石に、今日は疲れたから、明日、乗り込むことにしよう!!」

「当たり前だよ!!」

残るは犯罪神だけとなったのだが、流石に今乗り込むと返り討ちに遭う可能性が出るので今日は体を休めて明日ギョウカイ墓場に乗り込むことにした。

龍姫達以外は興奮状態で眠れないと言い出したので、ネプテューヌとネプギアの部屋でみんなと一緒にゲームをすることにしたのだが、三女神が言い争いをし出して一項に決まりそうになかった。

それに比べて候補生一同は仲良く雑談をしながら遊んでいた。

龍姫はと言うと、

「ふうくやっぱり、こうやって星を見るのが落ち着くなく」

「龍姫!!」

「ネプテューヌどうしたの?」

「どうしたも越したもないよ!!」

「ネプテューヌ以外は自分の国のハードに自身があるから揉めてるんでしょ!!」

「流石!! 龍姫だね!! ねえ、隣座ってもいい?」

「ラピードがいるけど、別にいいよ」

プラネタワーの展望デッキで座って夜空に輝く星を眺めていたら、のけ者にされたネプテューヌがやって来たので、ラピードと一緒に座って星を見ることにした。

「いよいよだね」

「そうだね、そう思うと寝れないな」

「龍姫でもそんなことあるんだね」

「いくらボクが女神だからって、それはヒドイよ!!」

「そうだね、選択、龍姫はいつも自分の選択をしてたよね」

「どうせ選ぶなら、自分で方がいいって思っているだけで、それが正かつたどうかなんて終わって見ないとわからないけどね!!」

「でも… すごいよ選択することって大変なんだから」

「ネプテューヌだつてちゃんと選んできたでしょ!!」

龍姫とネプテューヌと雑談をしながら語り合っていた。

「短い間だったけど、鳴流神家と一緒にいてわかった気がするよ、「生きるってことは選択するってことなんだ、そして選択する覚悟をするってこと」ってね!!」

「大げさだよ!!」

「わたしはずつと女神っていう与えられた役割を演じてただけなんだよ!! 仕事して、戦つて、でもシエアが通じない相手に叩きのめされて、一回死んで女神なのにシエアエナジーを使わずに変身したり、術技を使つたり、その時々々に振り回されて」

「今はどうなの?」

「本当は… よくわからないよ!! でもここにいるのはわたしが選んだから」

、わたしが望んだからなんでつて思うよ!! わたし、龍姫達と出会えてよかつたと思つてるよ」

「ボクもだよ!! まあ、ネプギアを庇つて心臓貫かれて死んじゃつた時はボクが女神化してたらこんなことにならなかつたんだから!!」

「龍姫は悪くないよ!! わたし達がマジックに敵わなかつたら奥の手なんだから!! それにわたしに双子の妹が出来たんだから!!」

「そうだったね!! ボクも女神になってフリーの次元探偵になれて、いろんな世界や人に出会えたんだから!! 全然飽きないんだよ!!」

「これでも別次元のプラネテューヌの紫龍の女神だから妹の面倒を見ないよね!!」

「そして、別次元でも困ってる人を助けるんだね!!」

「もしかしたら、どつかで自由気ままに生きてる女神様がいたりして」
「もう!! 龍姫つたら意地悪!!」

龍姫は軽く笑い飛ばしていた。

「不思議だね!! ちっともシエアエナジーを使わずに女神でいられることにむしろ新しい自分に出会えたんだな〜って!!」

「そうだね!! ボクたちは犯罪神なんかで終わらない、その先を生きるんだから!!」

「けど、龍姫達は元の次元に帰っちゃんだよね?」

「そうだね、ボクたちは犯罪神を倒したら、天界で依頼された次元探偵の仕事が終わって、ツクヨミ様の力でもと居たゲームギョウ界に帰らないと、いつまでも咲耶達に押し付けられないから」

「そうだよね、でも今を大切に生きていけばいいんだね!!」

「そうだよ!!」

龍姫とネプテューヌはしばらく語り合って、それぞれの部屋に戻って寝ることにした。

閃覇瞬連刃!!

今日龍姫達は犯罪神を倒すべく転送装置の前にやってきたのだ
た。

「そうだ!! ネプギアちゃん!! これ渡しておくね!!」

「この刀何?」

「明星弐号って言うんだけど、本当は両刃の片手剣なんだけど、ギャザ
リング城に言った時に魔剣ゲババーンを刀に鍛えなおしたおかげで
女神に命を使わずに攻撃力が上がるようになったんだ!!」

「ええ!! あの女神殺しの魔剣を刀に鍛えたら、女神の命を使わないで
元の攻撃力になったの!!。(。D。)ノ」

「うん!! それと柄に明星壱号で使っていたコアを取りつけといたか
ら」

「ありがとう!! 別次元のわたし!!」

「美龍飛だよ!!」

「そうだね!! さて、腹括って!! 行きますか!!」

「オー!!」

美龍飛はネプギアにあの異世界の危機を救った本来は両刃片手剣
なのだが、ギャザリング城にウルスラに会いに行った際、見つけた女
神殺しの異名を持つ魔剣ゲババーンを刀に鍛えなおしたら、女神の命
を使わずに元の攻撃力に戻ってしまったため、日本刀のように作り上
げて柄に明星壱号のコアを取りつけてネプギアに渡した。

そして龍姫達はギョウカイ墓場に乗り込んだのだった。

しばらく道なりに進んでいると、

「待ちな!!」

「懲りないんだね、インカローズ!!」

「いい加減に名前を覚えやがれ!! まあいい、マジック様の敵を討た
せてもらうぜ!!」

「龍姫ちゃん!! 此処はボクに任せて!!」

「星龍、わかったよ」

「オメエ、一人かよ!! まあいい!! 来い!!」

「相手の誠意には答えないとね!! セットアップ!!」

「おまえ!! 女神だったのかよ。(。D。)ノ!!」

「始めよう、真剣勝負を」

アナゴ族もといインカローズもとい下っ端もといリンダとワレチューが龍姫達の前に立ちはだかつたのだった。

星龍が一人で相手をすると言って女神化して龍姫からもらった天下五剣の一振り妖刀「大典太光世」を抜刀して構えた。

リンダとワレチューは鳩が豆鉄砲を食ったようになっていた。

「ちよつと、頭冷やそうか・・・魔神剣!!」

「あのお星龍さん、女神化すると、別の意味で怖いんですけど(。ω。ノ)ノ」

「現実を見た方がいいよ・・・ユニちゃん(。ω。ノ)ノ」

「誰か!! 助けてよ!!」

星龍の女神化状態を見たユニとネプギアはあまりの変わりように石化して声が出なかった。

「飛ばして行くよ!!」

星龍は問答無用にオーバーリミッツLv3を発動させたのだ。

「もうこうなったら、喰らえ!!」

「虎牙破斬!!」

「アタイの鉄パイプが!! いとも簡単に真つ二つ!!。(。D。)ノ」

リンダは鉄パイプで殴りかかったが、星龍が斬り上げて、斬り下ろす特技「虎牙破斬」で一刀両断にした。

「秋沙雨!!」

刀で滅多刺しにしてメに斬り上げる秘技「秋沙雨」に連携して、

「絶破十字衝!!」

リンダ達の足元に十文字の衝撃波を放つ奥義「絶破十字衝」を叩き込み、

「舞い上がれ!! 光翔戦滅陣!!」

地面から発せられる魔法で攻撃した後、斬撃を放つバーストアーツ

「光翔戦滅陣」を叩き込み、

「神速の斬り!! 見切れるかな!! 閃覇瞬連刃!! 勝てない勝負はす

るもんじやないよ!!」

「ぎやああ!!」

「ぢゆうく!!」

一旦、刀を納刀して、抜刀して連続で斬撃を放ち、最後は納刀する秘奥義「閃覇瞬連刃」を叩き込み勝負を決めたのだ。

「さてと、行かしてもらおうよ!!」

「もう、アタイらにおまえを襲う体力はねえよ!!」

リンダとワレチューとの勝負に決着を着けた龍姫達は犯罪神が待ち構えている場所に向かったのだった。

未来へ託す、永劫の剣!! 斬・空・天・翔・剣!!

犯罪神との戦いの前にアナゴ族もといインカローズもとい下つ端もといリンダとワレチューとの勝負にケリを着けた龍姫達は魔物を倒しながら道なりに進んでいった。

そしてついに犯罪神との最後の戦いの火蓋が切って落とされようとしていた。

「ぐおおお!! 全て滅ぼす!!」

「さてと、みんな!! 行くよ!! 括目してください!! 変身!! バリアジャケット!! 装着完了!!」

龍姫達は犯罪神との戦いに挑むため一斉に女神化をして、各々に得物を構えたのだった。

「ぐおおお!!」

「魔神剣!!」

「霸道滅封!!」

「宙を放浪せし無数の粉塵、驟雨となりて大地を礼賛す!! メテオスウオーム!!」

「ぐおおお!!」

犯罪神が攻撃してきたが、龍姫は斬撃を放つ特技「魔神剣」を繰り出し、ネプギアは譲り受けた「明星式号」から闘気を解放してビームを発射する奥義「霸道滅封」を繰り出し、真龍姫は流星群を落とす上級魔術「メテオスウオーム」を発動させた。

「飛ばして行くか!!」

ネプギアがオーバーリミッツLv3を発動させたのだ。

「喰らえ!! 霸王天衝剣!!」

刀身に闘気を纏わせて、思いつきり突き刺す奥義「霸王天衝剣」を叩き込み、あの「黒衣の断罪者」が世界の危機を救ったあの

「わたしに力を!! 瞬け!! ゲームギョウ界の光!! はああああ!!

喰らえええ!! 天翔!! 光翼剣!!」

龍姫達「いっけー!!」

明星式号の力を解放して巨大な翼のような剣で一刀両断する秘奥義

「天翔光翼剣」を叩き込んだのだが、犯罪神がいた場所から黒い霧のよ
うな物が集まり出してそれが収まると狐のような仮面を被り、手に双
刃を握った人の形になった犯罪神が現れたのだ!!

「余程死に急ぎたいと見える!! 慌てずとも、遠からずこの世界ごと、
滅びゆくと言うのに!!」

「何!! この揺れは」

「まさか!! 犯罪神がギョウカイ墓場ごと取り込もうとしてるの!!」

「だが、わたしは負けるわけには行かないのだ!!」

「ネプギア!! ボクたちの魔力を受け取って!!」

「ありがとう!! みんな!! さあ!! 始めよう!! ゲームギョウ界を
救うために!!」

犯罪神がギョウカイ墓場ごと吸収し始めたのだ。

ネプギアが犯罪神との一騎打ちを仕掛けたので、龍姫達は魔力をネ
プギアに分け与えて避難を余儀なくされた。

そして犯罪神とネプギアの一騎打ちが幕を開けた。

「ふん!!」

「遅い!! 虎牙破斬!!」

「ありえん!! 我の攻撃が当たらんのだ!!」

「わたしはもう、シエアエナジーを使わずに女神になってるのだから
な!! 虎牙連斬!!」

犯罪神が双刃でネプギアに斬りかかってきたが、ネプギアは斬り上
げて斬り下ろす特技「虎牙破斬」で応戦して、双刃の片方を一刀両断
にした。

犯罪神は得物である双刃がいとも簡単に一刀両断にされたことに
驚きを隠せないでいたがネプギアがそのまま斬り上げ↓左右に薙ぎ
払い↓斬り下ろす秘技「虎牙連斬」で追撃した。

「これでも喰らえ!!」

「甘いわ!!」

犯罪神が斬りかかって来たのをネプギアは刀で防いだ。

そして、

「飛ばして行くか!!」

「まだ足掻くか!!」

ネプギアはオーババリミッツLv3を発動したのだ。

「海連刃!!」

ネプギアは薙ぎ払って真空波で攻撃する特技「海連刃」を叩き込み、

「魔王炎撃波!!」

刀身に炎を纏わせて薙ぎ払う秘技「魔王炎撃波」で追撃して、

「殺劇!! 舞荒剣!!」

炎を纏いながら、斬る、殴る、蹴るの怒涛の連続攻撃を叩き込み、

「焼き尽くす炎!! 光翔戦滅陣・獅炎!!」

周囲を薙ぎ払った後、前方に獅子の闘気を放つバーストアーツ「光

翔戦滅陣・獅炎」を叩き込み、

「これで終わりだ!! こいつは・・・未来へ託す永劫の剣だ!! 斬!!」

紫色の刀身に変化している明星式号に光を集め、袈裟斬りから入

り、

「空!!」

更に左下段から斬り上げて、

「天!!」

また更に右下段から斬り上げて、

「翔!!」

回転斬りで打ち上げて、

「剣—————!!」

最後は天高く飛び上りながら斬り上げる「太陽の意志を継ぐ者」と、

その息子「疾風の英雄志願者」の二代へ受け継がれる秘奥義「斬空天

翔剣」を叩き込んだのだ。

「この・・・我が・・・」

「観念しろ!! 犯罪神!!」

犯罪神が光となつて消えてくのを見届けたネプギアは決め台詞を

言つて、女神化を解いたのだが、

「あれ、体が動かない・・・もういいよね・・・お姉ちゃん!!」

どうやらネプギアの身体中が悲鳴を上げてしまいそのまま気を失ってしまった。

脳裏にある光景が映ったのだった。

「諦めるな!! 信じることに、信じ続けることに、それが強さだ!!」

「そうだよ、諦めたらだめだよ!!」

金髪で鎧を身に纏った剣士が言い放った光景が映ったのだった。

「ネプギア!!」

「たく、手が掛かるんだから!!」

「お姉ちゃん!! 龍姫さん!! どうして!!」

「話は後だよ!!」

「わかりました!!」

ネプテューヌと龍姫がネプギアの肩を持ち担ぎ上げて、転送装置まで走り、ギョウカイ墓場から脱出したのだった。

それから二日後

「もう、会えないの、龍姫」

「どうだろうね、こればかりはボクでもわからないよ!!」

「わかったよ、さよならは言わない!!」

「転送を開始します!!」

龍姫達のもと居た次元のゲームギョウ界に帰還するためプラネタワアの展望台に来ていた。

ネプギアは両手足の疲労骨折のため電動車椅子に乗って龍姫達のお見送りに病院を抜け出して駆けつけたのだ。

そして龍姫達のもと居た次元のゲームギョウ界に帰還していった。

それから一週間が過ぎたのだ。

龍姫達はいつもの通りに書類などを片付けていたら、

「何!! 今の音は!!」

「プラネタワアの屋上からだよ!!」

「行ってみよう」

「そうだね」

いきなりドーンと言う音がプラネタワアの屋上から聞こえてきたので龍姫達はそこに向かったのだった。

そしてそこにいたのは、

「龍姫!! いや、お姉ちゃん!!」

「ネプテューヌ!! それに龍空翔に、ネプギアまで、ネプギア、まだ怪我治ってないよね、それと、お姉ちゃんって」

「すいません!! 龍姫さん!!」

「あのくツクヨミ様これはどういうことですか? それとあつちのプラネテューヌは?」

「実は龍姫さん達の活躍によりあつちの次元のゲームギョウ界のプラネテューヌは我々の天界の神々の次元対策課の支部を置くことになり、それによりあつちの次元のゲームギョウ界のプラネテューヌはわたしの同僚でミネルヴァが此処に居るネプテューヌさん達に変わって統治することが決まりましたので、ネプテューヌさん達姉妹は本日付で鳴流神家に養子縁組を行いたいと思ひまして、それとあつちの次元のゲームギョウ界のプラネテューヌ教会教祖のイストワールは解雇処分が近いうちに言い渡されるとの事です」

「つまり、またボクに妹が増えるの!! (。D。)ノ」

「ワイー!! また妹が出来るんだ!!」

「お姉ちゃん!! 名前頂戴!!」

「そうだね!! ネプテューヌ改め「光龍」^{ひかり}でネプギア改め「姫龍紗」^{アリス}でどうか?」

「ありがとう!! お姉ちゃん!! 今日からわたしはネプテューヌ改め

「光龍」だ!!」

「わたしはネプギア改め「姫龍紗」だね!! ふぐ!!」

「もう、姫龍紗は両手足がギブスでグルグル巻きになってるんだよ!!

しばらく安静しないと、麻痺が出るよ!!」

「わかったよ、光龍お姉ちゃん」

「さてと、再会して早々だけど、お仕事手伝って!!」

「待ってください!! 龍姫さんこれを受け取ってください!!」

「何この光は?」

「龍姫さんの新たな女神の力とバリアジャケットと人間時の戦闘服です!!」

なんと犯罪神との戦いが終わりあつちの次元のゲームギョウ界のプラネテューヌのネプテューヌが姉妹揃って龍姫達の次元のゲーム

ギョウ界のプラネテューヌ教会になんと天界次元対策本部があつちの次元のゲームギョウ界のプラネテューヌの教会を改築して支部を設けることになったことによりあつちの次元のゲームギョウ界のネプテューヌ達がこつちの次元に引っ越して鳴流神家の養子縁組をしていたので龍姫はネプテューヌに光龍と名付け、ネプギアに姫龍紗と名付けたのだった。

どうやら、ネプギアはベットで療養していたのか電動車椅子に乗っていない、ゆっくりと着地した。

姫龍紗は龍姫達の姉妹になれたことに怪我が完治していないのはしゃいでもしまっていた。

龍姫達が仕事場に戻ろうとしたら、ツクヨミが龍姫に新たな女神の力とバリアジャケットと 人間時の戦闘服を報酬として授けた。

「お姉ちゃん!! 猫耳が生えてるよ!! 尻尾も!!」

「どういうこと!! わたしなんで猫又になってるの!! おまけにこれって「アメノウタヒメ」だよ!!」

「ワイー!! これも本物だよね!! 触らせて!! (*^_^*)」
「痛いってば!!」

今の龍姫はと言うと、身長が175cmで胸はいつものパープルドラゴンハート時と同じ大きさで、胸には武士の紫色の胴丸が装着されて、ペったんこに見せていて、バリアジャケットが和をモチーフにした龍姫がやったことのあるゲームのコスチューム「アメノウタヒメ」をモデルに作られたバリアジャケットを装着していたが、露出は無く、したのは紫色のアンダーウェアを着こみ、裾が少し長めになっている、両腕には武士の籠手が装着されて、両足には脛当てをモデルにしたレガースが装着されて、頭から白黒猫耳が生えて、尾骶骨のあたりから尻尾が生えていて、声はパープルドラゴンハートのままだったが、髪は黒紫のツインテールになっていた。

ちゃんと左腰にホルダーが付いているので二本差しが可能になっていた。

小太刀も後腰に十文字になるように帯刀してあった。

「これってゴッドイーター2のブラッド隊とフェンリル初代の女物の

制服だよ!!」

「これ人数分あるよ!!」

「これ早く着たいな〜」

「ちゃんと成長しても自動的に服のサイズを合わせてくれるようになっていきますので成長しても大丈夫です!! これで失礼します!!」

「ありがとうございます!! さてと服も受け取ったしお仕事しようか」

「うん!!」

「でも、わたしは・・・」

「姫龍紗は部屋で療養してね!!」

「取り敢えず、運べねえとな!! よっこいしょ!!」

「ありがとう!! うずめお姉ちゃん!!」

「気にすんなって!! 姉妹なんだからな!!」

ツクヨミは龍姫にクエスト用に人間時の戦闘服で龍姫がやったことのある荒神を討伐する部隊の制服を報酬として鳴流神家全員に配られた上に制服には体が成長してもいいように自動的に服のサイズを合わせ機能が備え付けられていたのだ。

龍姫達は仕事場に戻ることにして、うずめは怪我で動けない姫龍紗をお姫様抱っこして自室に向かったのであった。

次元開通編

聖龍皇、病院に行く

光龍と龍空翔と姫龍紗が鳴流神家の家族に向かい入れて一週間が過ぎようとしていた。

「それじゃあ!! 姫龍紗を病院に連れ行ってくるね!!」

「それじゃあ!! 頼んだよ!! 龍空翔!!」

「行つてきます!!」

今日は龍空翔が電動車椅子に姫龍紗を乗せて怪我の経過を医師に報告するためコンパの勤務先の病院に連れてくのであった。

今の姫龍紗の服装は両手足がギブスが巻かれているので、以前、今いる次元のゲームギョウ界が統合前に出張した時に出会ったノワールこと龍菜が着ていたラ・ヴィクトワールを今の姫龍紗の体に合わせて龍姫が持ち前の家事スキルで作り上げたものを着ているのだった。

もちろん、胸が揺れないようにしっかりと固定して、白と紫色と青の三色になっていた。

そんなこんなでコンパの勤務先の病院に到着したのだった。

「姫龍紗ちゃんに龍空翔ちゃん!! 今日診察ですか?」

「うん、コンパはもうお仕事は終わったの?」

「はいです!! 今から龍姫ちゃん達に会いに行くです!! 教会で待つてるです!!」

病院に入り口でちょうどコンパが仕事上がりだったようで、鉢合わせになり、今から龍姫達所に顔を出すと行って、別れたのだった。

もちろん、神癒の女神のコンパで、二人は一週間前に自己紹介をしたのであった。

あっちの次元のゲームギョウ界のコンパは向こうで気ままに看護師の仕事をしていると二人から龍姫達に教えてある。

それとほかの三カ国はあっちの次元のゲームギョウ界の女神達は向こうでいつもの通りに女神の仕事をしているのだが、あっちの次元

のゲームギョウ界のユニだけあの雷華が残して逝ったあの刀こと土方歳三の愛刀と言われている名刀「和泉守兼定」と自分の愛用している銃とブレイブ・ザ・ハードが残して逝った大剣から斬馬刀に作り上げたものを持ってこっち引越してきたので、獅子神家に養子に向かい入れられて、ユニ改め「獅子神優華龍」として龍華ことユニの双子の妹として統合したラスティション教会で姉妹で和気あいあいとやっているのであった。

和泉守兼定は天龍の新しい愛刀になったのだった。

その雷華はあっちの次元のゲームギョウ界でノワールのDNAで新たな体を手に入れて、ノワールの双子の妹としてあっちの次元のゲームギョウ界の女神候補生を勤めているのであった。

もちろん四ヶ国を回り挨拶を済ましてあるのである。

閑話休題

「早く、普通のお洋服着たいなくこれ自分でも恥ずかしいよ〜」

「仕方ないよ、両手足がギブスでぐるぐる巻きにされてるから、袖がある服が入らないんだから、今は我慢しないと、今日先生の診察次第でギブスが取れるんだから!!」

病院の受付で診察の手続きを終えたので病院の備え付けられている長椅子に座って待っていたら、名前を呼ばれたので診察室に入り医師の診察を受けたら、今日でギブスが取れると医師から言われたので、姫龍紗は治療室に運ばれてしばらくして、

「龍空翔お姉ちゃん!!」

「もう普通に歩けるの!!」

「うん!! 天界の病院で治療のおかげで、普通は筋肉が弱ってるから歩くのに松葉杖がいるのが、こうして、何事もなかったように歩けるんだよ!! でも、まだ一週間はクエストと一緒に行けないんだよ!!」

「ごめんね」
「気にすることないよ!! それにやっとお姉ちゃんのお古とか着れるんだからね!!」

「そうだね!! やつとこの恥ずかしいお腹が出た服からお姉ちゃん達に着ているジャージワンプとパーカワンプを着れるんだ!!」

「それじゃ、教会に帰ろうか!!」

「そうだね!!」

　　姫龍紗は普通に徒歩であることが出来るのだが、まだクエストには行けないことを伝えて、二人は教会に帰るのであった。

平穩の一コマ

病院でギブスが取れた姫龍紗は一目散に自分の部屋に戻って、念願だった、姉達のお揃いのパーカワンプピに着替えていた。

「やつと!! お腹出さなくて良くなったから、人の目を気にしなくて済むね!! さてと、お姉ちゃん達を手伝いに行こう!!」

自室で光龍とお揃いのパーカワンプピに着替えたので、書類整理をしている龍姫達の元へ向かったのだった。

もちろん、統合してるので、教会とプラネタワーが二つになっているので部屋はまだ空きがあるのであった。

光龍と龍空翔と相部屋になっているのである。

龍姫と龍音は和室に改装して、畳になっているので、敷布団で寝ているのである。

閑話休題

「お姉ちゃん!! 手伝いに来たよ!!」

「もう、歩けるようになったんだね、松葉杖つかなくていいの?」

「うん、けど、まだ一緒に戦うのは当分先になりそうだけど」

「焦っても仕方ないよ、ちようど、この書類で最後だったから、お願いできるかな?」

「大丈夫だよ!!」

ちようど書類整理が終わりかけにやってきたので、龍姫は姫龍紗に書類を見て欲しいと頼んだら、二つ返事で承諾した。

そんなこんなでお昼までに今日で一週間分の書類を片付けて、新作の電化製品などのチェックも済ませたのだ。

龍姫達はお昼ご飯にすることにした。

「今日のお昼ご飯は、焼き飯だよ!!」

「いただきます!!」

「美味しい!!」

「流石に、十人になったからね、ラストイション組より早く終わってるらしいよ!!」

「どうせ、ノワールの過激スケジュールの所為だと思うけど、大丈夫か

な？ 星龍達？」

「星龍に聞いて見たけど、今は、ちゃんと休暇を取りながら、ノワールと龍菜が声優のオーディションに向けて、稽古に励んでるらしいよ!!」

「ノワールと龍菜なら、声優になれるよ!! 暖かく見守ってあげよう!!」

「そうだね、ノワールと龍菜が演じてるアニメのキャラから、なんとなく想像出来るんだけど」

「まあ、双子同然だからね、どっちか片方が受かる場合があるし」

「ちゃんと、優華龍ちゃんとユニちゃんと仲良くできてるって!! あれから星龍さんと天龍ちゃんのおかげで、ツンデレが治りつつあるんだって!! けどお姉ちゃん達にはまだ素直に、表に出せないって!!」

「なんだって〜」

焼き飯を食べながら雑談をしていたのだが、星龍から、前にノワールと龍菜がとあるアニメの声優のオーディションの一次選考に受かったらしく、その台本を見ながら二つになった教会の龍菜の部屋で二次選考合格に向けて稽古に励んでいることを龍姫が明かした。

星龍達のおかげか、妹達と龍姫にはツンデレが出なくなっただけだ、今だにネプテューヌ達にはツンデレが発症しているのだった。

インターバル

光龍と龍空翔と姫龍紗が鳴流神家の養子なって二週間が経った。

姫龍紗はもうクエストに行けるようになり、いつのように龍姫達のお手伝いをしていた。

もちろん、「明星式号」は健在である。

「そう言えば、ツクヨミ様が、真龍姫と龍愛翔と龍空翔に新しいバリアジャケットを報酬にくれたんだけど、着てるの?」

「当然だよ!! だったら、見せてあげるよ!! 括目せよ!!」

ちょうど今日から休暇の初日だったので、真龍姫達と一緒に部屋で休んでいたら龍姫は以前、犯罪神を倒した手助けをした追加報酬として真龍姫と龍愛翔と龍空翔に新しいバリアジャケットを受け取ったので、真龍姫と龍愛翔と龍空翔は女神化をした。

「これが、わたしの新しいバリアジャケットよ!!」

三人の新しいバリアジャケットはと言うと、龍音の閃光の剣士の片翼で、本来は黒の服でノワール達の方が似合ってるのだが、ツクヨミが色合いの違う紫色に染め上げて、背中に剣帯を着けずに、左腰にホルダーが装着して、そこに二刀の刀が差してあるのだった。

もちろん淡い紫色の胴丸が装着されて、大きな胸を固定して、揺れない仕様になっており、ぺったんこに見せていた。

スキット：紫の二刀流

龍姫「へえ〜S A O IIのキリトのG G Oの服をモデルにしたんだね!!」

真龍姫「そうなの!! 確か、二刀流の剣士だったわよね!!」

龍音「そして、この閃光の剣士の片翼なのよ!!」

美龍飛「龍音はその女神化したら、口調が丁寧になるんだよね」
龍空翔「それにしても、このバリアジャケット、動きやすくていいわね!! 別に前のバリアジャケットも気にいってるわ!!」

「それにしても、お姉ちゃんが猫女神に変身できるのは驚いたよ!!
泳げるの?」

「大丈夫だよ!! あの女神化をしても、ちゃんと泳げるよ!!」

「それを聞いて安心したよ!! あの女神化でメイド服着たら、プラネテューヌの秘剣!! 参上だもんね!!」

「まだ、その異名覚えていたんだ〜」

真龍姫は龍姫が猫女神に変身できるようになって、カナヅチになつたか心配されてしまい、龍姫は泳げると答えた。

猫女神でメイド服を着たら、猫耳メイド侍にコスプレ出来ると言い出したのだった。

龍姫は「プラネテューヌの秘剣」の称号を修得した。

「それにしても、こうして十人姉妹になるなんて夢にもなかつたよ!!」

「確かに、また、別次元に行ってお仕事をしないとね!!」

「そう言えば、そうだったね!!」

「さてと、町に出かけてみようか?」

「賛成!!」

真龍姫は十人姉妹になったことが夢みたいと言い、龍姫は気晴らしに町に出かけないかと提案して、一行は町に出かけるのだった。

浮遊大陸

犯罪神を討伐して、光龍と龍空翔と姫龍紗が鳴流神家に養子に入つて、姫龍紗の怪我が完治して、二週間が過ぎた。

また、龍姫達の所に次元探偵の依頼が来たのだが、

「流石に、全員で行くのはまずいから、ボクと龍音と光龍と龍空翔と姫龍紗とうずめで行ってくるね、もちろん、向こうで、星龍達と合流するけどね」

「わかったよ、お姉ちゃん、いつてらっしやい!!」

「うん、行ってきます!!」

今回は此処とは別のゲームギョウ界で起きた事件を解決するため、真龍姫・美龍飛・プルルート・ピーシーエがお留守番を買って出るので、後のメンバーで分子世界に行くのであった。

そして、いつもの通りに転送装置でその次元へ向かったのだった。そんなでもっていつもの通りに

「ホギャ!!」

「ドン!!」

「ゴン!!」

「ねぷ〜!!」

「痛!!」

と上空から落下するのだった。

「取り敢えず、到着したみたいだけど、大丈夫?」

「何とか、大丈夫〜」

どうやら、全員が怪我もなく無事だったので、辺りを見渡した。

「どっかの森みたいだね、あっちが街に行く道みたいだね」

「取り敢えず、行ってみよう!!」

森のようだったので、近くに街道を見つけたので、龍姫達は街道を道なりに進んでいった。

しばらくして、街を見つけたので、行ってみることにした。
すると、

「あれ、わたしだよ」

「どうやら、ボクたちの今回の依頼はこの次元で起きている事件の解決だったから、此処は別の次元のゲームギョウ界だね」

「なんとなく、プラネテューヌの街だね!!」

「取り敢えず、あのねぷっちについて行こうぜ!!」

「そうだね!!」

龍姫達は今回の依頼は別次元のゲームギョウ界で起きている異変の解決であることを確認して、こっちの次元のゲームギョウ界のネプテューヌ達の後を追うことにした。

付いて行くとどうやら、教会に入って行ったので、出て来るまで待つことにしたのだ。

しばらくして教会から出てきたので、龍姫が代表して中に入ることにした。

どうやらほかの国行くには教会で手続きをしてから、大陸を繋いでいる橋で国境を超えるのだった。

なので龍姫は全員の名前を書いて手続きを済ませて、ラステイションに行くことにした。

「あれ、大陸が浮いてるんだね、だから、教会で手続きが必要だったんだ!!」

「仕方ないよ、教会の人に聞いたら、女神様でも手続きをしないで国境を越えたら不法入国になるらしいよ」

「よかった、女神化して行くところだったよ!!」

「それじゃあ!!ラステイションに行きますか!!」

「オウ!!」

こうして龍姫達の新しい旅が始まったのであった。

アヴニール再戦

龍姫達は四つの浮遊大陸のゲームギョウ界のラスティションのホテルで部屋を取って、星龍達と合流していたのだった。

星龍達は、龍菜・優華龍・天龍の四人で、龍菜はあの「黒衣の断罪者」の服を身に纏い、髪をロングヘアーにして、右に武醒魔導器を装備しているのである。

優華龍は医学者の格好に髪型をロングヘアーにしていたのだった。

もちろん、ラピードも一緒に来ているのであった。

「どうやら、この次元のラスティション教会がアヴニールが裏で牛耳っているらしいのよ」

「流石に、アヴニールに探りを入れるのはまずいよね」

「さつき、あつちのわたしがアヴニールを探るために、パッセと言うところの依頼を受けていたんだよね」

「なるほど、取り敢えず、今は様子を見た方がいいわ!!」

「ワン!!」

龍姫達の今回の依頼はこの次元で起こっている謎を解明することだったのだが、今回は鳴流神家と獅子神家だけでこなすことになっているのであった。

しばらくアヴニールとこっちの次元のネプテューヌ達を監視しながら、三日が経ったのだった。

もちろん、ギルドで路銀を稼ぎなら依頼をこなしているのだった。

「どうやら、今回はアヴニールの依頼を受けたみたいだよ」

「つまり、アヴニールはパッセをキラーマシンで襲うんじゃないかな」

「そうだね、パッセに向かうよ!!」

こっちの次元のネプテューヌ達はアヴニールの依頼を受けたらしく、それがシアンが社長を務めているパッセをキラーマシンで襲う口実を作るために仕込まれた陽動作戦だと気づいた龍姫達は急いでパッセに向かったのだった。

「此処だね!!」

「流石に、女神化はまずいから、ガナツシユがキラーマシンでパッセに攻撃して来たら、いつでも戦える準備をしてね」

まだ、パッセにアヴニールのガナツシユは来てなかったので、近くの電子柱に隠れてやり過ごしていたのだった。

するとそこにキラーマシンを連れたアヴニールの社長秘書のガナツシユがやってきたのであった。

「やってしまいなさい!! キラーマシン!!」

「させるかよ!! 魔神剣!!」

「誰ですか!! まあいいでしょ、やってしまいなさい!!」

「ギィィい!!」

「行くよ!!」

「オウ!!」

うずめは斬撃を放つ特技「魔神剣」でキラーマシンの攻撃を止めたのである。

ガナツシユがおかまいなしに攻撃をキラーマシンでしてきたので龍姫達は一斉に得物を構えたのだった。

「さてと、ボクに任せて、いい気にならないで!!」

「なんですか!! あなた達は」

「答える筋合いはないよ!!」

龍音はオーバリーミッツLv3を発動させて、ガナツシユが怯えていたが、龍姫達はおかまいなしにキラーマシンを攻撃していた。

「月閃光!!」

月を描きながら斬り上げる特技「月閃光」を繰り返して、

「双連衝破!!」

前進しながら切り刻む秘技「双連衝破」に繋げて、

「崩龍斬光剣!!」

Zを描くように斬りつける奥義「崩龍斬光剣」に繋いで、

「舞い上がれ!! 光翔戦滅陣!!」

無属性の魔法で攻撃した後、魔神剣のような斬撃で追撃するバーストアーツ「光翔戦滅陣」に繋いでお約束の、

「塵も残さない!! 行くよ!! 浄破滅焼闇!! 闇の炎に抱かれて消え

て!!」

「あれ？ガナツシユがない」

「どうやら、ボクたちがキラーマシンと戦っている間に逃げたんだね」

左に握っている小太刀を回転させて順手に持ち替えて、二刀に闇の炎を纏わせて十文字に切り捨てる秘奥義「浄破滅焼闇」でキラーマシンを破壊したのだが、どうやら、龍姫達がキラーマシンと戦っている間にガナツシユが逃げてしまったのだった。

浮遊大陸のリーンボックス

アヴニールのキラーマシンパッセ襲撃事件は龍姫達のおかげで事なきを得たのだが、もちろんこつちの次元のネプテューヌ達に鉢合わせをしてしまったのだった。

それと、こつちのノワールはパーティーから離脱したので、代わりに龍姫達が同行することになったのだった。

あらかじめ自己紹介を終わらせてあるのである。

龍姫達はプラネテューヌに戻ることにしたのだった。

「龍姫!! リーンボックスに行くよ!!」

「なんで? リーンボックスに?」

「だって、アイちゃんがグリーンハート様はゲイマーじやないって言うから、それを確かめに行くの!!」

「わかったよ、一緒に行つてあげるよ」

龍姫の次元デバイスにネプテューヌ達から通信が着たので、出てみると、グリーンハートに事の真相を聞くべく龍姫達に同行をお願いしてきたのだった。

何故、ネプテューヌがベールではなく、グリーンハート様と言うのは、プラネテューヌの森で、頭から地面に突き刺さっていたのをコンパが引っこ抜いて部屋で介抱して、ネプテューヌはどうやら頭を強く打った所為で記憶喪失になってしまったらしく、別次元の自分である光龍に自分を知っているかと聞いていた。

もちろん知らないと答えたのである。

龍姫達は仕方なく浮遊大陸のリーンボックスに向かったのだった。

「すいません!! グリーンハート様に会いたいですけど?」

「おまえさん達は恐ろしく運がなかったの、もう謁見の時間は過ぎてしまったから、また明日来てくれ」

「わかりました」

浮遊大陸のリーンボックスに到着した龍姫達は早速リーンボックス教会を訪ねたのだが、係の人から、謁見の時間が終わってしまったと告げられてしまったのだった。

仕方なく龍姫達は時間を潰すため、アイエフが進めてきた喫茶店に行こうとしたのだが、馬車の運行時間がとつくに終わってしまったので、仕方なく龍姫達はエムエス山岳を通ることにしたのだが、山頂に到着したところで、龍姫達は魔物に襲われたのである。

「さてと行きますか!! 括目せよ!!」

「アイ!! コンパ!! さがって!! 魔神剣!!」

「あなた達は後ろに下がってなさい!! 幻狼斬!!」

「そうさせてもらうわ」

「虎牙破斬!!」

ネプテューヌは早速女神化したのだが、龍姫が斬撃を放つ特技「魔神剣」を放ち、アイエフ達を下がるように指示を出して、龍菜が擦れ違い様に一閃して振り返りながら一閃する特技「幻狼斬」を繰り出して、龍音が左の小太刀で斬り上げて、右の刀で斬り下ろす特技「虎牙破斬」を繰り出して、魔物達を葬ってしまったのだった。

毒殺

エムエス山岳の山頂で魔物に襲われたが、何とか切り抜けた龍姫達はリーンボックス教会に戻ってきたのであった。

アイエフだけイヴォールと言う人に呼び止められたので、龍姫達は外でしばらく待つことにしたのであった。

一応、ノワールから、自分が女神であることを明かされているので、ネプテューヌは女神であることを認識しているのであった。

しばらくして、アイエフが戻ってきたのであった。

どうやら、今晚、龍姫達を晩餐会に招待すると言うのだが、龍姫達はあまりにも出来すぎていたので、ネプテューヌ達と別れて、先にホテルに戻ったのだった。

「しかし、遅いね」

「そうだね、いくらなんでも、遅すぎるよ!!」

「嫌な予感がするんだけど、教会に行ってみよう」

「そうだね」

ネプテューヌ達と別れて、あれから三時間が過ぎたのだが、嫌な予感がしたので、龍姫達はもう一回、リーンボックス教会に向かったのだった。

「龍姫!! 大変よ!! ネプ子が毒殺されかけたのよ!!」

「ええ!! ボクに診せてくれる、これでも一応、回復魔法出来るから」

「その必要は有りませんわ!! あ、申し遅れましたわ!! わたくし、リーンボックスの女神グリーンハートこと、ベールですわ、ベールで構いませんわ、これから、解毒剤の材料を調達しに行くところだったのでわ」

「そうだったんだ!! ボクたちも一緒に行くよ!!」

「頼もしいですわ!!」

なんとネプテューヌが食事に毒を盛られてしまったらしく、龍姫が治癒術ができることを明かしたら、こっちの次元のベールが必要ないと言い、これから解毒剤の材料を取りに行くと言うので、龍姫達は一緒に行くことにしたのであった。

「あの魔物ですわ!!」

「(あれ、どう見てもクジラにしか見えないよ、此処って森の中だよね)」

マルバコ森林に解毒剤の材料を取りに来た龍姫達は森クジラと言う、魔物を倒すため、一斉に得物を構えたのだった。

もちろん龍姫達の相手になるはずもなく、

「円閃牙!!」

「襲爪雷斬!!」

「耐えられるかしら? デモンズランスレイン!!」

「閃空裂破!!」

「虎牙連斬!!」

「わたくしたちの出番がありませんわ(・ω・)」

龍菜は斬りつけた反動でキャッチして刀を逆回転させる特技「円閃牙」を繰り出して、光龍は二刀流ならではの、右で斬り上げて雷を落とし、左で斬り下ろして、更に雷を落とす秘技「襲爪雷斬」を繰り出して、優華龍は魔術で闇の槍を作り出して、それを投げつけた後、曲がりながら飛ぶ四本の槍を続けて投げける上級魔術「デモンズランスレイン」を繰り出して、龍姫は回転斬りで上昇した後、突きを繰り出しながら、追撃する秘技「閃空裂破」を繰り出して、龍空翔も二刀流で、巧みに、斬り上げて↓左右に薙ぎ払い↓斬り下ろす秘技「虎牙連斬」をお見舞いしたのだった。

森クジラを倒した龍姫達は解毒剤の材料を手に入れたので、リーンボックス教会に戻るのであった。

浮遊大陸のマジエコンヌ

龍姫達は毒に侵されたネプテューヌを治すために、ネプテューヌを匿っている浮遊大陸のリーンボックスのベールの部屋にやってきたのだった。

コンパが解毒剤をプリン材料与混ぜて、ネプテューヌに食べさせたのである。

そして、

「ネプテューヌ!!復活!!」

と解毒剤が速攻で効いたらしく、もう戦列に復帰できるのであった。

「実は、あなた達にお願いがあるんですわ、実は・・・」

「何者かに、神力を根こそぎ奪われたから、取り返すのに手を貸して欲しいんじゃないの」

「どうしてわかったのです!!」

「だって、さっき解毒剤の材料を取りに行った時に、女神化してなかったから」

「お察しの通り、わたくしはイベントの帰りに襲われてしまい、女神の力を奪われてしまったのです、その犯人をいまらんらんが捕まったら連絡してくれましたのです」

「わかったよ、早速向かうよ!!」

ベールはイベントの帰りに何者かに襲われてしまい、神力を奪われてしまったらしく、このままだと、急速に老化が来るといっているので、今、らんらんからその犯人を足止めしたと言う、連絡が入ったので、龍姫達はその場所に向かったのだった。

「ダメ〜!!」

「え〜い!!どけ!!」

「ああ!!プラネテューヌ出会ったおばさんだ!!」

「誰が!!おばさんだ!!」

「ベール様の力を返しなさい!!」

龍姫達「最初はグー!!じゃんけん、ポン!!」

「龍姫ちゃん達はじゃんけんしてますう」

「はあく」

「今回はわたしが決めさしてもらおうわ!!」

「こうなったら、おまえの力を使うまでだ!!」

「覚醒する前の神子龍だよ(´・ω・｀)」

その場所である、ヘイロー山岳の山頂であるマジエコンヌがらんに羽交い締めに使われていたのだが、ネプテューヌは合って早々、おばさん扱いし出した上に、龍姫達は誰が秘奥義を繰り出すかじゃんけん大会を開催して、龍菜が秘奥義を決めることになった。

マジエコンヌは早速奪ったボールの力で女神化した。

龍姫達は一斉に得物を構えたのだった。

「喰らえ!!」

「ネプテューヌ達は下がっていいよ!! 虎牙破斬!!」

「ふぐ!! 何故だ!! おまえらの攻撃が・・・」

「龍姫!! あなたの技借りるわ!! 魔神剣!!」

「その技、龍姫ちゃん達の技ですう!!」

グリーンハートに変身したマジエコンヌは攻撃してきたが、龍姫が斬り上げて、斬り下ろす特技「虎牙破斬」をお見舞いしたら、マジエコンヌは龍姫達との格の違いを見せられたのである。

ネプテューヌは龍姫の剣技を見様見真似で斬撃を放つ特技「魔神剣」を繰り出してマジエコンヌに命中させたのだった。

「飛ばして行くわよ!!」

「何?あのオーラは」

「オーバリーミッツって言って、攻撃をしたり、受けたりして、溜まった闘気を放出してオーラを纏って、時限式強化出来るんだよ!!」

「そうなの!!」

龍菜はオーバリーミッツLv3を発動させて、マジエコンヌ目掛けて突っ込んで行った。

ネプテューヌは龍姫にオーバリーミッツの説明を聞いた瞬間にオーバリーミッツを修得してしまった。

「円閃牙!!」

斬りつけて反動でキャッチして逆回転させる特技「円閃牙」を繰り出して、

「円閃襲落!!」

また刀を逆回転させて、最後は兜割りする秘技「円閃襲落」を決め、
「峻円華斬!!」

爪竜連牙斬と円閃牙の合体奥義「峻円華斬」を続けて繰り出して、
「焼き尽くすわ!!」 天狼滅牙・飛炎!!」

叩いた衝撃波で怯ませて刀身に炎を纏ませて滅多斬りにするバー
ストアーツ「天狼滅牙・飛炎」を立てつづけて繰り出して、

「お終いにしましよ!!閃け!!鮮烈なる刃!!無辺の闇を鋭く切り裂き、
仇名す者を微塵に砕く!!決まったわ!! 漸毅狼影陣!!」

「なんだ・・・と」

「何!!あの技は」

「あれは秘奥義って言うんだよ!!」

「秘奥義・・・閃いたわ!!」

龍菜は陣を描きながら狼の如く、四方八方から滅多斬りにする、「黒衣の断罪者」の秘奥義「漸毅狼影陣」をお見舞いして、マジエコンヌを戦闘不能にして、奪われたボールの神力を取り戻して、ボールの体内に帰って行った。

「道閉ざす敵は何だって斬り捨てるのみよ!!」

龍菜は高らかと決め台詞を言って、決めていた。

ネプテューヌは龍菜の「漸毅狼影陣」を見て何か閃いたのだった。

一行はリーンボックス教会にらんと一緒に戻るのであった。

浮遊大陸のブラン

マジエコノヌに奪われた神力を取り戻した龍姫達はプラネテューヌに戻ってきたのであった。

ベールも龍姫達に恩返しをしたいらしく、同行しているのであった。

「龍姫!! 今日大丈夫?一緒にルウイーについてきてほしいんだけど?」

「別にいいけど」

「それじゃあ、接岸場で待ってるから」

「次は浮遊大陸のルウイーに同行してだつて」

「まあ、ルウイー教会に行ってみよう」

龍姫の次元デバイスにネプテューヌからルウイーについてきてほしいとお願いされたので龍姫達は浮遊大陸のルウイーに向かったのだった。

「さすが、一年中、雪が降ってるだけはあるね」

「取り敢えず、教会に行きましょう!」

浮遊大陸のルウイーに到着した龍姫達はルウイーの街並みを堪能しながら教会に向かったのだった。

ルウイー教会に到着した龍姫達はさっそく教会の中に入ることにしたのであった。

「ブラン様、謁見のお方をお連れしました」

「あなた達のことば聞いているわ、魔王ユミニテスの使いとしてね」

「どうやら、マジエコノヌのおばさんだったりして」

「逃げるわよ!!」

「結局こうなるんだ(´・ω・｀)」

浮遊大陸のブランにあったのだが、マジエコノヌが変身したブランだったことに龍姫達はあった瞬間に気づいていたが、アイエフが窓を突き破っていったので、龍姫達も窓を突き破って逃走するのであった。

近くの雪原に逃げ込んだのだが、どうやら先回りをされてしまった

らしく、

「エンシエントドラゴン!!君に決めた!!」

「はあくなんでエンシエントドラゴンと縁があるんだろう」

ルウィー教会の兵士があのでイスクを掲げて、エンシエントドラゴンを呼び出したので、龍姫達は一斉に得物を構えたのだった。

「ウハー!!」

「龍姫直伝!! 虎牙破斬!!」

「鳳凰天駆!!」

「砕氷刃!!」

「翔破裂光閃!!」

「ワオオオ!!」

ネプテューヌは女神化して龍姫から教わった斬り上げて斬り下ろす特技「虎牙破斬」を繰り出して、天龍はバク宙して、そこから鳳凰の鬨気を纏って特攻する奥義「鳳凰天駆」を繰り出して、龍姫は刀身に冷気を纏わせて十文字に斬り捨てる特技「砕氷刃」をお見舞いして、姫龍紗は回転斬りで斬り上げて、目にも止まらぬ閃光で攻撃する奥義「翔破裂光閃」を叩き込んで、ラピードは斬撃を放つ特技「魔神犬」を繰り出したのだった。

「燃え尽きた・・・ぜえ・・・」

「この隙に逃げるわよ!!」

エンシエントドラゴンを倒した龍姫達は一目散に町に逃げ込んだのであった。

龍姫達は何とか町に辿り着いたのだった。

刃よ吼えろ!!

魔王ユミニテスの使いの嫌疑をかけられた龍姫達はルウィーのある町であつちの次元と同じ名前のフィナンシエに遭遇して、その町の教会に案内されたのだった。

もちろんそこにいたのは、浮遊大陸の本物のブランだったのである。

龍姫達は話を聞くと、どうやら、マジエコンヌがブランの力をコピーして、ブランに変身して、ルウィーで暗躍していると言っていた。

なぜ龍姫達も一緒にいるかと言うと、ネプテユーナから鍵のかけらを集めるのを手伝ってほしいと依頼されたので、龍姫達のほっとけない病が災いして、今に至るのだった。

閑話休題

「キラーマシン、行きなさい!!」

「ふぎけんじゃねえ!!、(∴、〔口〕、)ノミコラーツ」

「ボクたちも、行くよ!!」

マジエコンヌが変身したブランがキラーマシンを引き連れてきたので、ブランはマジ切れして女神化したので、龍姫達は一齐に得物を構えたのだった。

「風雷神剣!!」

「爆砕陣!!」

「邪霊一閃!!」

姫龍紗は風を刀身に纏わせながら、雷を落とす刺突を繰り出す奥義「風雷神剣」を繰り出して、龍菜は前方宙返りをして、愛刀のニバンボシを叩き付けて爆風で範囲を攻撃する特技「爆砕陣」を繰り出して、うずめは兜割りから、そのまま右に斬り抜ける奥義「邪霊一閃」を繰り出した。

「飛ばしていきますか!!」

「なんだ、あれは」

「ブランは初めてだったわね、あれは龍姫達が修得している戦闘術

「オーバリーミッツ」って言う、時限式のパワーアップよ」

うずめはオーバリーミッツLv3を女神化しないで発動させて、キラマシンの向かって行った。

浮遊大陸のブランはオーバリーミッツを見て驚きを隠せないでいた。

「ギイイ!!」

「虎牙破斬!!」

斬り上げ、斬り下ろす特技「虎牙破斬」から入り、

「魔王炎撃波!!」

刀身に炎を纏わせて薙ぎ払う秘技「魔王炎撃波」で追撃して、

「驟雨双破斬!!」

散沙雨と虎牙破斬の合体奥義「驟雨双破斬」で追撃して、

「喰らえ!! 大地の牙!! 天狼滅牙・碎覇!!」

体術と剣術で地割れを発生させて、攻撃するバーストアーツ「天狼滅牙・碎覇」で追撃した後、

「終わらしてやる!! 刃よ吼えろ!! 斬り裂け!! 雷迅双豹牙!!」

連続で斬りつけた後、天高く飛び上がりながら斬り上げる天族と育った導士の秘奥義「雷迅双豹牙」をキラマシンにお見舞いした。

うずめの雷迅双豹牙を叩き込まれたキラマシンは木端微塵になつて、ただの鉄くずになつた。

「この刃の前に敵はないぜ!!」

うずめは妖刀「鬼丸国綱」を納刀しながら決め台詞を言っていたのだった。

マジエコンヌが変身したブランは一目散に逃げてしまったのである。

キラマシンを倒した龍姫達はブランがレジスタンスを結成して、どうやら、ある取引の情報を手に入れたので、聞きに行くことにしたのであった。

「おくべール様に、コンパさんですね、それと龍姫さんに龍音さん、うずめさん、光龍さん、龍空翔さん、姫龍紗さん、星龍さん、龍菜さん、優華龍さん、天龍さんだね!!」

「すいません、実はこの二人は胸が大きい人にしか興味がないんです」
「ネプ子・龍姫達・星龍達の裏切り者!!ム——」
「○：◇・○」
「カ」

「なんでボクたちの胸が大きいことわかったんだろう?」

「いいわよね、胸が大きい人は……i i——l i——●i i——l i」

「どうやら、胸が大きい人にしか興味がない兄弟だったので、アイエフが絶叫した後、僻んでしまった。」

「浮遊大陸のブランは笑顔でマジ切れしていたのは言うまでもなかった。」

「仕方なく兄弟から話を聞くと、どうやらラストイションでキラーマシンの取引があると言うのだが、それを聞いた龍姫達は、ルウイーに残るつといたので、鳴流神家と獅子神家のメンバーはルウイーに残ることにしたのであった。」

「念のため龍空翔をネプテューヌ達の護衛に行ってもらったのであった。」

立ちふさがるなら容赦しない

ラストイションで取引があると言う情報を聞いたネプテューヌ達に龍空翔を護衛に充てて、龍姫達はルウイーに残って、マジエコンヌの陽動作戦を逆手に取ることにしたのだった。

そしたら、まんまとマジエコンヌがやってきたのだった。

「わははあは!!きき貴様達は!!」

「はしやぎすたわね・・・」

「マジエコンヌ・・・」

「そろそろ・・・」

「舞台から・・・」

「降りて・・・」

「くれないかな・・・」

「いいだろう、このホワイトハートとグリーンハートの二つの力を合わせた女神化で相手になってやる」

龍姫達は黒い何かを纏いながら、マジエコンヌに迫って行ったら、マジエコンヌがホワイトハートに変身して龍姫達に挑んできたのだった。

「喰らえ!!」

「遅いよ!! 幻龍斬!!」

「双牙斬!!」

「蒼牙刃!!」

「ふぐ!!」

ホワイトハートに変身したマジエコンヌが攻撃してきたのだが、あまりにも遅かったの上ので、龍姫達はかわして、龍姫は突き抜けて、振り向いて斬りつける特技「幻龍斬」を繰り出して、龍音は斬りつけて、斬り上げながら飛び上がる特技「双牙斬」を繰り出して、龍菜は刀を振りかぶって叩き付けて攻撃する奥義「蒼牙刃」を叩き込んだ。

「今回はボクがやるね、飛ばして行きますか!!」

「決めなさいよ!!龍姫!!」

龍姫はオーバリーミッツLv3を発動させて、ホワイトハートに変

身しているマジエコンヌに向かって行った。

今回は打刀二刀流である。

「散沙雨!!」

二刀で滅多刺しにする特技「散沙雨」を繰り出して、

「閃空裂破!!」

回転斬りで巻き上げて突きを繰り出しながら追撃する秘技「閃空裂破」を繋げ、

「翔雨裂空撃!!」

秋沙雨と裂空斬の合体奥義「翔雨裂空撃」を繋げて、

「腹括って!! 天狼滅牙!!」

足で踏んだ衝撃で怯ませて、滅多斬りにするバーストアーツ「天狼滅牙」をお見舞いして、

「立ちふさがるなら、容赦しない・・・決める!! 修羅閻獄殺!!」

「なん・・・だと!!」

二刀の刀で滅多斬りにして、最後は×の字に斬り捨てる紫の輝石の名を持つ守護機士の秘奥義「修羅閻獄殺」をお見舞いしたのだった。

「華麗なる勝利だね!!」

龍姫は納刀しながら決め台詞を言っていたのだった。

「覚えてろく」

「あれ、もう片付いたの?」

「なるほど、取引はわたし達をレジスタンスから離すためのオトリだったのね」

「ふん、してやられたようだな、申し遅れた、わたしはMAGES.だ!!」

「よろしく、MAGES.!!」

マジエコンヌは悪役のベターな捨て台詞を言って逃げて行ったのだった。

そこに陽動に引っかかっていたメンバーと合流してプラネテューヌに戻るのであった。

密入国

無事ルウィーを奪還に成功した龍姫達はプラネテューヌを拠点にしてギルドで路銀を稼ぎながら依頼を行っていた。

ネプテューヌ達が探していた鍵の欠片はブランがフィナンシエから預かってネプテューヌ達に渡していたのである。

閑話休題

「龍姫!! 今大丈夫?」

「大丈夫だけど、どうしたの?」

「今からラスティションに行くんだけど、コンパのアパートの前に来てくる?」

「いいけど」

「それじゃあ、待つてるから」

「お姉ちゃん、ネプテューヌさんは何だつて?」

「ラスティションに付いて来て欲しんだけど、コンパのアパートまで来てくれだつて」

「どうしてだろう、取り敢えず話を聞きに行こう」

また、いつもの通りに龍姫の次元デバイスにネプテューヌがアイエフを通して連絡してきたので、話を聞くと、なぜか、コンパのアパートまで来てくれと言うので、龍姫達はコンパのアパートの玄関まで向かったのだった。

「実は、教会で手続きをしたら・・・」

「あれでしょ、この前の偽の取引で大暴れしたから、向こう側が許可しないんですよ」

「うん、だから接岸場から、わたし達が女神化して運ぶことになったんだ」

「仕方ない、ボクたちも」

「腹を決めるわ」

どうやら、この前のアヴニールのキラーマシンを破壊した所為で、アヴニールの牛耳っているラスティション教会の許可が下りなかったので、龍姫達はプラネテューヌのラスティション側の接岸場に向

かったのだった。

「どうするんですう？この人数？」

「大丈夫だよ!! だって、わたし達も女神だから!!」

「あなた、本当に龍姫なの!!Σ(。D。)」

「それにしても、翼がないですわ!!」

「これは女神用のバリアジャケットだから」

「取り敢えず、ラストেশションに向かうぞ!!みなさん!!」

「龍音の女神化の口調は変わりすぎね(〃ω〃)ノ」

コンパがどうやって龍姫達を含んだメンバーをラストেশションへ一度で密航するのか考えていたら、龍姫達は一斉に女神化して、ほかのメンバーをお姫様抱っこして、ラストেশションに密航するのであった。

そんなこんなでラストেশションの街に到着した龍姫達は一旦、探索する為、自由行動をすることにしたのだった。

ネプテューヌは別次元の自分である、光龍と龍空翔と一緒にラストেশションを回っていたら、

「ノワール!!」

「あれあなた達、来てたのね」

「取り敢えず、ホテルに行こうよ!!」

「そうね、此処で立ち話もなんだし」

伊達眼鏡で変装したノワールを発見したので、龍姫・龍音が待っているホテルに連れて帰るのであった。

舞い飛べ!!

伊達眼鏡で変装していた浮遊大陸のノワールを見つけた龍姫達は、ネプテューヌ達とは別の部屋でくつろいでいたら、ネプテューヌ達がシアンの依頼でソノレサク洞窟に行くことになったので、龍姫・星龍・龍音・天龍・龍空翔が同行することにしたのだった。

後のメンバーはホテルでお留守番をすることにしたのだった。

ソノレサク洞窟に入った龍姫達はそこで鍵の欠片の台座を発見したのだった。

しばらく奥に進んでいったら、目的の物を落とすクリスタルゴーレムを見つけたので、龍姫達は一斉に得物を構えたのだった。

「燃えろ!! 爆炎剣!!」

「虎牙破斬」

「ネガティブゲイト!!」

「烈・魔神剣!!」

「雷神剣!!」

星龍が上段から振り下ろして爆風を熾す特技「爆炎剣」を繰り出して、ネプテューヌが斬り上げて、斬り下ろす特技「虎牙破斬」を繰り出して、龍音が闇の歪みを発生する中級魔術「ネガティブゲイト」を発動させて、龍姫は薙ぎ払って、斬撃を放つ秘技「烈・魔神剣」を繰り出して、龍空翔が雷を落とす突きを繰り出す秘技「雷神剣」を繰り出して、クリスタルゴーレムを葬ったのだった。

「どうやら、わたしの見せ場がなかったわね」

「そうね、わたしも剣士だったらよかったのに」

「仕方ありませんわ、目的の物も手に入ったのですから、帰りましょう」

結局、浮遊大陸の三女神は傍観者になっていたのだった。

街に戻った龍姫達はネプテューヌ達と別れて、先にホテルに戻って、部屋でくつろいでいたら、どうやら三日後に行われるラストイションの品評会に同行してくれと言うので、承諾したのだった。

そして三日が過ぎて、品評会当日

「へえ〜いろんな人がいるね」

「龍空翔はこういうのまだ慣れてないからね、逸れないでね」

「うん」

「ワイイ!! 機械がいつぱいある!! (^^♪イエ〜イ!!」

「姫龍紗!! 遠くに行っちゃダメだよ」

姫龍紗はやはり某親善大使の護衛剣士並の機械好きが発症して、興奮状態に陥って、あっちの世界に行ってしまったのだった。

しばらくして、品評会が始まったんだが、アヴニールが勝手にパンツァーとネプテューヌ達の女神化を封じて状態で戦わせ出したので、
「行くよ!!」

「今日も派手にやるわよ!!」

そんなこんなで龍姫達は一斉に得物を構えて、ネプテューヌ達の助太刀に入ったのだった。

もちろん龍姫達はシェアエナジーではなく魔力で女神化できるので、意図的に女神化を封じることが出来ないのである。

「龍姫!!」

「助けに来てあげたよ!! 魔神剣!!」

「覚悟はできた? デモンズランス・ゼロ!!」

「あの〜わたしの見せ場が〜」

「あるわけないでしょう!! 守護方陣!!」

「襲爪雷斬!!」

龍姫は斬撃を放つ特技「魔神剣」で攻撃して、龍音は闇の槍を魔術で創り出して、敵に向かってぶん投げて、その槍に壱式発の追尾する槍を繰り出す上級魔術「デモンズランス・ゼロ」を発動させて、龍菜が刀を地面に突き刺し傷を癒す魔方陣を展開する奥義「守護方陣」を繰り出して、うずめが斬り上げて、雷を落とし、斬り下ろしてまた雷を落とす秘技「襲爪雷斬」を繰り出した。

「さてと、飛ばして行きますか!!」

「龍空翔!! 決めなさい!!」

龍空翔はオーバードリミッツLv3を発動させて、パンツァーに攻撃を仕掛けたのだった。

もちろん二刀流で、女神化をしていないのである。

「ギイイ！」

「散沙雨!!」

二刀で滅多刺しにする特技「散沙雨」を繰り返して、

「迅雷閃!!」

貫通する雷を放つ秘技「迅雷閃」で追撃して、

「驟雨双破斬!!」

散沙雨と虎牙破斬の複合奥義「驟雨双破斬」で更に追撃して、

「焼き尽くす!! 天狼滅牙・飛炎!!」

本来ならば拳で叩くのだが、二刀流のため、足で踏み鳴らして、その衝撃で怯ませて、刀身に炎を纏わせて滅多斬りにするバーストアーツ「天狼滅牙・飛炎」で更に追撃して、

「行くよ〜!! 舞い飛べ!! 閃覇嵐星塵!!」

刀を魔力で飛ばして、器用に操り、上空から落として、衝撃波で攻撃する秘奥義「閃覇嵐星塵」をお見舞いしたのだった。

閃覇嵐星塵を喰らったパンツァーは鉄の塊になった。

「安らかに眠ってね!!」

堂々と龍空翔は決め台詞を決めていたのであった。

思いの翼

アヴニールのパンツァーを龍空翔の活躍により木端微塵にしたのだが、続けてアヴニールのハードブレイカーと戦闘をすることになった。

「虎牙破斬!!」

「獅子戦吼!!」

龍姫が斬り上げて、斬り下ろす特技「虎牙破斬」を繰り返して、姫龍紗が獅子の鬨気を叩き付けてダウンさせる秘技「獅子戦吼」を繰り返した。

これで終わったかと思ったら、マジエコンヌがハードブレイカーを一世代昔のテレビのように叩きだしたら、暴走してしまった。

「マベちゃん参上!!」

「誰!!」

颯爽と白いカッターシャツを着て、龍姫達と同様に刀を左腰に二本差しにしたマベちゃんことマーベラスAQLが現れて、ハードブレイカーの頭部に内蔵されている、女神化封印装置を破壊したのである。「さてと、行くよ!!」

龍姫達は一斉に得物を構えたのだった。

「サツと吹いて、サツと斬ってウインドカッター!!」

「天光満所に我はあり、黄泉の門開くところに汝あり!! 出でよ!!」

神の雷!! インディグネーション!!」

「スゴイですわ!!」

「これじゃあわたしの立場が〜」

龍音が鎌鼬で攻撃する下級魔術「ウインドカッター」を発動させて、ネプテューヌがいつの間にか龍姫達の上空から大きな雷を落とす上級魔術「インディグネーション」を発動させて、ハードブレイカーを追い込んでいった。

「飛ばして行くわよ!!」

「決めなさい!!ネプテューヌ!!」

ネプテューヌがオーババリミッツLV3を発動させて、ハードブレ

イカーに仕掛けたのである。

「!!」

「喰らえ!! 爆炎剣!!」

龍姫達の剣技を見よう見まねで「ブレイズブレイク」を昇華させて刀身に炎を纏ませて斬りつけて爆風を熾す特技「爆炎剣」を繰り出して、

「雷神剣!!」

雷を落として突きで攻撃する秘技「雷神剣」で追撃して、

「破邪十字星!!」

十字星に斬り捨てる奥義「破邪十字星」で更に追撃して、

「腹括りなさい!! 天狼滅牙!!」

叩いた衝撃で相手を怯ませて、滅多斬りにするバーストアーツ「天狼滅牙」で更に追撃して、

「思いの翼よ舞い上がりなさい・・・!! 受けて見なさい!! ティあ!! はあ!! ティあ!! 甘いわ!! 奥義!! 遥翔天鳳斬!!」

ハードブレイカーを刀で打ち上げて、縦横無尽にネプテューンブレイクのように飛び回りながら切り刻み、最後は強烈な一閃を叩き込む秘奥義「遥翔天鳳斬」をお見舞いしたのだった。

ハードブレイカーを鉄屑に変えてしまったのだった。

「リベンジなら受けて立つわ!!」

ネプテューヌは堂々と決め台詞を言っていたのだった。

「おまえの力もらうことにするか」

「させないよ!! 魔神剣!!」

「うぐ!! く、覚えてろよ!!」

「ありがとう・・・」

マジエコンヌが満身創痍のノワールの女神の力をコピーしようとしたのを龍姫が斬撃を放つ特技「魔神剣」を繰り出して阻止したのだった。

偽女神

ラストイシヨンの大騒動から二日が経ったのである。

最後の鍵の欠片はアヴニールのハードブレイカーの中から出てきたらしく、これで封印されたイストワールを探しに行くのだった。

龍姫達と言うと浮遊大陸のプラネテューヌの魔窟と呼ばれる場所に向かっていた。

その理由はネプテューヌ達が龍姫達に連絡しないでイストワールを探しに魔窟に向かったのだが、嫌な予感がした龍姫達はネプテューヌ達を助けるために向かったのだった。

しばらく奥へと進んでいったら、

「此処から風が吹いてる」

「立体映像!!」

なんと壁の一部が立体映像で隠されていたので龍姫達はそのまま進んでいったら、

「ギャハハ!!」

「あ!!アジャコンヌ!!」

「いい加減に覚えろ!!」

なんとあのマジエコンヌが待ち構えていたのである。

「龍姫!!来ちやダメ!!」

「まさか、ネプテューヌ達は女神化できないの!!」

「ついでに言わせてもらおうと、こいつの女神の力はわたしがもらった!!ワハハ!!」

「何あれ(犯罪神だよ)」

「キラーマシンまでいるよ」

ネプテューヌはみんなの命と女神の力を天秤に掛けられてしまい、ほっとけない病が災いしてマジエコンヌに女神の力を渡してしまっただった。

おまけに以前戦ったことのある犯罪神にそっくりの魔物がいたのだった。

「龍菜、魔術って出来る?」

「二応、地・水・火・風・闇・光の下・中・上級魔術と治癒術は一通り修得してるわよ、なるほどね、わかったわ、時間よ止まりなさい、お代は見てのお帰り。ストツプフロウ!!」

「今のうちに早く!!」

龍姫は龍菜に魔術を修得しているか質問したら、出来るかと返って来て、龍菜は少しの間時間を止める補助魔術「ストツプフロウ」を詠唱して発動させて、マジエコンヌ達の動きを止めたのだ。

その際にネプテユーン達は街に帰還したのだった。

龍姫達はネプテユーン達をコンパのアパートまで送り届けたのだが、

「龍姫!! 大変だよ!!」

「どうしたのネプテユーン?」

「ラストイション以外で女神の偽物が現れたんだよ!! 狙いは英雄が残した武器だって」

「わかったよ、取り敢えずどこから行くの?」

「ルウイーから行こうかと」

「わかった、ルウイーに行こう」

なんと女神達に偽の女神達が出現したと言うのだった。

幸いにも龍姫の活躍でマジエコンヌがノワールの力をコピーしてなかったのですが、ラストイションでは偽ノワールは出現してなかったのだが、マジエコンヌには英雄が残した武器じゃないと言うのだが、龍姫達は関係ないのである。

龍姫達は浮遊大陸のルウイーに向かったのだった。

エクスパシオン!!

偽女神の一人が現れたルウイーに到着した龍姫達は街でブランが二人いたのだが、片方が偽ブランだったのだが、フィナンシエが見分けが付かなかったので、本人しか知らないことをクイズ形式で質問したところ、キレ出したブランを見たルウイー国民が偽ブランを見破ったので、偽ブランはMフロンティア洞窟に逃げ込んだので龍姫達は後を追ったのである。

それほど時間も掛からないで見つけたので、龍姫達は一斉に得物を構えたのだった。

「観念しやがれ!!」

「虎牙破斬!!」

「臥竜閃!!」

「哭空裂空撃!!」

「空牙昇竜脚!!」

ネプテューヌは斬り上げて斬り下ろす特技「虎牙破斬」を繰り出して、それに合わせて龍音は二刀を交差して斬りつける特技「臥竜閃」を繰り出して、落ちてきたところを龍菜が拳で打ち上げて、お得意の蹴りを入れ、薙ぎ払う奥義「哭空裂空撃」を繰り出して、天龍が炎を纏いながら回転蹴りを繰り出す秘技「空牙昇竜脚」に繋がった。

「飛ばして行くわ!!」

優華龍がオーバーリミッツLv3を発動させて偽ブランに攻撃を仕掛けたのだ。

「絶氷刃」

斬馬刀に冷気を纏わせて斬りつける特技「絶氷刃」を叩き込み、

「ヴァリアヴルトリガー!!」

刀と銃と盾を一体化した武器「神機」をライフルに変形して銃弾を放つ秘技「ヴァリアヴルトリガー」を決めて、

「凍牙衝裂破!!」

斬馬刀を叩きつけてVの字の氷柱で攻撃する奥義「凍牙衝裂破」で追撃して、

「腹括りなさい!! 天狼滅牙!!」

地面を叩いて衝撃波で怯ませて滅多斬りにするバーストアーツ「天狼滅牙」で追撃して、

「覚悟を決めなさい!! 全力全壊で!! 行かせてもらおうわ!! これを持っていきなさい!! エクスパシオン!!」

「うぐ!!」

斬馬刀と神機で滅多斬りにした後、斬馬刀で串刺しにして、そこから神機を変形して連射する眼鏡が印象の少佐の秘奥義「エクスパシオン」を叩き込んで偽ブランを倒したのである。

「ぎゅっ!! こんなもんよ!!」

優華龍は高らと決め台詞を決めていたのだった。

どうやらルウィーに残された英雄の武器は槍からハンマーにされたらしく、その上価値が売値が1クレジットだと言っていたのだった。

此処でブランと別れて、リンボックスに向かったのだった。

そんなこんなで龍姫達はリンボックス教会に到着したので部屋にいるボールを尋ねたら、教会に保存されていたのだが、

「なにこれ」

「完全に原型を成してないよ」

「どうやら、湿気でボロボロになっていたようですの」

「らんらん、ラストイションにいた頃にやっていた技術を使えば直せるところだと思うだから材料を取って来てほしい」

「わかったよ、行ってくるね!!」

龍姫達は英雄の武器を直す為材料を取りに向かったのだった。

染められし刃は!!

リーンボックスの英雄の武器を直す為龍姫達は材料を探しにツイーゲ森林に到着したのだった。

しばらく進んでいると偽ベールを発見したのだが、そこにあの胸が大きな人にしか興味がない兄弟が偽ベールをエスコートしていたのだが、そんなことおかまいなしに龍姫達は一斉に得物を構えたのだった。

そしたらそこに鉄拳と言う女格闘家が現れて、偽ベールの槍を裁きだしたのである。

「喰らえ!! 魔神剣!!」

「ネガティブゲイト!!」

「怒れ!! 吼えろ!! 螺旋の將軍!! ハヴオックゲイル!!」

「戦迅狼破!!」

龍姫は斬撃を放つ特技「魔神剣」を繰り出して、うずめが闇の歪みを発生させる中級魔術「ネガティブゲイト」を発動させて、龍音が大竜巻を発生させる上級魔術「ハヴオックゲイル」を発動させて、龍菜が刀を持っていない左拳を叩きつけて狼の闘気を叩き付ける秘技「戦迅狼破」を繰り出して加勢したのだ。

「飛ばして行くよ!!」

「決めなさい!! 天龍!!」

天龍はオーバードリミッツLv3を発動して偽ベールに攻撃を仕掛けたのだった。

「虎牙破斬!!」

斬り上げて斬り下ろす特技「虎牙破斬」を繰り出して

「断空剣!!」

風を纏いながら回転斬りで巻き上げる秘技「断空剣」で追撃して、

「翔凰烈火!!」

回転斬りで打ち上げて鳳凰の闘気を放つ奥義「翔凰烈火」で更に追撃して

「舞い降りろ!! 光翔戦滅陣!!」

魔法で攻撃した後、斬撃を放つバーストアーツ「光翔戦滅陣」でまた更に追撃して、

「龍の刃!! その身に焼き付けろ!! 緋に染められし刃は 緋王電楼刃!!」

天龍はノワール改め勇龍と龍菜の「トルネードチェイン」を天龍が改良して、雷神剣を繰り出して、断空剣で巻き上げて、そこから特撮ヒーローよろしくのライダーキックでめる、風の国王の秘奥義「緋王電楼刃」を繰り出して、偽ベールを撃退したのだった。

「執事喫茶〜」

「これがボクたちの力だ!!」

偽ベールは何を思ったのか執事喫茶と言い残して光になって消えて逝ったのだった。

天龍は決め台詞を決めていたのだった。

あの兄弟はベールに捕まってお仕置き部屋こと乙女ゲーム部屋に放り込まれて、ベールから全てやり終わるまで閉じ込められたのだった。

手に入れた材料をらんらんに渡した龍姫達はベールと鉄拳と別れてプラネテューヌに戻ることにしたのだった。

浮遊大陸のラスティションは龍姫達のおかげでマジエコンヌにノワールの力をコピーされずに済んだので偽ノワールは現れなかったのだが、見つけた英雄の武器で、二丁拳銃が時間の流れには勝てず、錆びてしまったので、パッセが総動員で修復作業に取りかかったのである。

閑話休題

龍姫達はプラネテューヌに現れたと言う偽ネプテューヌを搜索することにしたのだった。

炎よ!! 我が刃に宿れ!!

龍姫達は浮遊大陸のプラネテューヌに出たと言う偽物のパープルハートを追ってネオ・ジオフロントにやってきたのであった。

しばらくしてファルコムと合流して偽パープルハートを見つけたのだが、どうやらマジエコンヌは三体も偽パープルハートを作ったらしいのだが、龍姫達には造作もないので、

「アイ!! 下がっていいよ!! 虎牙破斬!!」

「そうしなさい!! 蒼破牙王撃!!」

「月閃光!!」

「わたしの立場が〜」

龍姫は斬り上げて斬り下ろす特技「虎牙破斬」を繰り返して、龍菜が蒼破刃と牙狼撃の複合奥義「蒼破牙王撃」を叩き込み、龍音が得意の月を描きながら斬り上げる特技「月閃光」を繰り返して、

「ボツサつとしない!! 先に進むよ!!」

「うん!!」

「アイちゃんも」

「わたしは何してんだろう?」

片付いたので龍姫達は最深部を目指して進むことにしたのであった。

しばらく道なりに進んでいたらMAGES.とマーベラスAQLが偽パープルハートと戦闘していたので龍姫達は助太刀に入ったのである。

「待っていたぞ!! 大きい助手!!」

「ふざけてる場合!! 守護方陣!!」

「この技、回復も兼ねてるんだ!!」

「崩龍斬光剣!!」

「わたしより、早い!!」

「龍姫直伝!! 魔王炎撃波!!」

「ワウウウ!!」

MAGES. が別次元とはいええノワールと言う名を捨てている龍

業に助手扱いし出したのだが当の本人は聞き流して、勇龍とお揃いだが、鞆に結んでいる下緒を以前着ていたラ・ヴィクトワールと同じ青と黒と白にしている愛刀のニバンボシを地面に突き刺し魔法陣を展開して範囲に入っている味方の傷を癒す奥義「守護方陣」を繰り出して、回復させて、

龍音がZ字を描きながら切り刻む奥義「崩龍斬光剣」を繰り出して、マーベラスAQLを驚かせたのである。

ネプテューヌは龍姫の剣技を見たのが良かったのか刀身に炎を纏わせて薙ぎ払う秘技「魔王炎撃波」を繰り出していたのであった。

ラピードも口に銜えている小太刀で火炎弾を放つ奥義「紅蓮犬」をお見舞いしていた。

「ボクの本気、見せてあげるようか」

「いっけー!! 星龍!!」

星龍はオーババリミツツLv3を発動して偽パープルハートに向かって行ったのだ。

「!!」

「遅いよ!! 弧月閃!!」

二回、満月を描きながら斬りつける特技「弧月閃」で攻撃して

「秋沙雨!!」

連続で滅多刺しにして最後は斬り上げる秘技「秋沙雨」で追撃して

「月華斬光閃!!」

弧月閃と真空破斬の複合奥義「月華斬光閃」を繰り出して更に追撃して

「壮麗なる流れ!! 光翔戦滅陣・蒼弾!!」

自分の足元に渦を発生させてその後水玉を発生させて攻撃するバーストアーツ「光翔戦滅陣・蒼弾」を繰り出して更に追撃して

「炎よ!! 我が刃に宿れ!! 炎覇鳳翼翔!!」

刀身に炎を纏わせてそのまま魔王炎撃波を連続で行った後、鳳凰の闘気を飛ばす秘奥義「炎覇鳳翼翔」をお見舞いして偽パープルハートを倒したのであった。

「ボクの技に見惚れてたの?」

星龍は余裕の笑みをしながら決め台詞を言っていたのであった。

辺りを手当たり次第に英雄の武器を探したが、何処にも見当たらない、途方に暮れていたら、教会職員がやって来て、教会で保管していると言うのだが、ネプテューヌが女神化できないので、今は無理だと言われて、コンパのアパートに戻るのであった。

覚醒せよ!!

龍姫達はコンパのアパートで英雄の武器のお披露目会に参加していたのだが、どういうわけか、三カ国とも原型を留めていなかったのだった。

その時だった外でマジエコンヌがイストワールで作り出した想像の魔王ユニミテスでプラネテューヌの街にやって来て、勝手にネプテューヌを亡き者にしていたのである。

「ほう、おまえは、あの時の剣士だな、ブラックハートの力を奪い損ねた報いはさせてもらうぞ、行け!! ユニミテス!!」

「好き勝手になんかさせないよ!!」

「そうだね」

マジエコンヌは以前龍姫の斬撃を喰らって、ノワールの女神の力を奪えなかったことを根に持っていたようで、ユニミテスを嗾けきたので、龍姫達は一斉に得物を構えたのであった。

「ぐおお!!」

「聖なる槍よ!! 貫け!! ホーリーランス!!」

「光翔翼!!」

「魔神剣・双牙!!」

龍姫は光の槍を魔術で発射する上級魔術「ホーリーランス」を繰り出して、姫龍紗が斬りつけて、上から光線を浴びせる特技「光翔翼」をお見舞いして、ネプテューヌは斬撃を一発放ってから、標的の両側から斬撃が襲う秘技「魔神剣・双牙」を繰り出していたのだったのである。

「フハハ!! ユニミテスは何度でも蘇る。なぜなら、人の負の感情でできているのだからな」

「それがどうしたの?」

「此処には、女神が、いや、龍の女神がいるのだから」

「何!! おまえたちも女神だったのか!! いいだろう後でおまえらの力を奪ってやる」

「龍姫、どうすればいいの?!! わからないよ!!」

「大丈夫、わたしの手を握って」

「これ何、暖かい」

「ねぷねぷ、光ってるですう!!」

「よーし! プラネテューヌのみんな!! 今から変身するよ!! 括目せよ!! 変身完了!! って 胸が大きくなりすぎよ!! これじゃあ剣が振るえないじゃない」

「ごめん、これ装備させるの忘れてた、これわたしの持っている胴丸の中で一番防御力が低いんだ」

「ありがとう、これで戦えるわ!!」

やはり一筋縄では逝かないようでもたユニミテスが復活してしまったのだが、龍姫達が一斉に女神化して、龍姫はネプテューヌの手を握って魔力を少しだけ分けてあげたら、ネプテューヌの体が光り出したので、ネプテューヌが女神化したのである。

身長が175cmで胸が満月のように真ん丸に、二回りも大きくなってしまい、刀の柄に手が届かなかったので、慌てて龍姫が呼びの白銀の胴丸を装備してあげて、ぺったんこに大きくなった胸の隆起を抑え込んだのである。

もちろん龍姫がバリアジャケットと二刀の刀とホルダーもあげたのである。

「ネプテューヌだけずるわよ!!」

「しかないね、ノワール、わたしの手を握って」

「暖かいわ!! ありがとう星龍!! アクセス!! キャ!! 胸が!!」

「もう、誰が変身しろって言ったのよ!! もうこれわたしの予備の下級のバリアジャケットなのよ、今装備させたあげるわ!!」

「ありがとう、それと刀と籠手までくれるのね」

「どういたしまして、行くわよ!!」

ノワールはネプテューヌが覚醒して成長したのを見て駄々をこねたので、星龍が少しだけ魔力を分けてあげたまでは良かったのだが、プロフェッサーユニットがそれに合わせるわけがなく、元々胸元が開いていたので、両端から大きくなった胸が零れ落ちてしまったので、慌てて両手で隠して、座り込んでしまったので、龍菜が訓練用の

黒のバリアジジャケットをノワールにあげて、刀と籠手まで装備させてあげたのである。

身長は女神化した龍菜と同じ175cmで、胸が満月のように真ん丸に大きくなり、その隆起を抑えるために白銀の胴丸とバリアジジャケットを装備させて、左腰にホルダーと刀を装備させたのだった。

貫け!!

龍姫に魔力を少しだけ分けてもらったおかげで、女神に戻れることが出来たネプテューヌと、星龍に魔力を少しだけ分けてもらったノワールは、二人ともベール以上の大きさの胸を手に入れて、身長も二人とも175cmに伸びて、得物を日本刀に変え、覚醒したのであった。「胸は形ですわよ!!」

「デカ乳になりやがって!!」

ベールとブランは、揃いも揃って拗ねていたのだった。

「これはスゴイです、女神は、肉体が成長することが出来なくなるんです」

「わたし達の魔力は、女神の力に反応して、成長させる。だが、今ここに居る龍の女神一同は、別次元のプラネテューヌとラストイシヨンの女神だからな、その二人には悪いがな」

「それと、魔力を受け取った女神はシエアを用いないで女神化でいるようになり、シエアの有無もなくなりますから、それでも、国を統治することは可能ですから」

「ありがとう、龍姫」

「星龍、ありがとう」

こつちのイストワールは二人の姿を見てゲームギョウ界の歴史にないことだったので、呆然としていたのであった。

女神化している所為で口が悪いくなっているが龍音が簡単に説明して、天龍が続けて説明したのであった。

二人は、龍姫達にお礼を言っ、ネプテューヌは龍姫からもらった、同じ長さの無銘刀を二振りとも抜刀して、ノワールは星龍からもらった日本刀を抜刀して、龍菜と同じく右肩に担ぐように構えて、黒い龍の牙がモチーフにした手甲「ドラゴンキラー」を嵌めた左手を中段突きの構えにしていたのであった。

「いいだろう、このユミニテスが相手だ!!」

「さてと、行くわよ!! ノワール!!」

「ええ、いつでも準備出来てきてるわ!!」

「わたし達も行くのか、星龍」

「そうだね、龍姫ちゃんとのあの秘奥義で決めるんだからね」

「飛ばして行きますか!!」

「わたしの本気見てみる」

マジエコンヌはあの醜い魔物ユミニテスを龍姫達に喚びつけてきたので、龍姫達はケリを着けるために、同時にオーバーリミッツLv4を発動して、ユミニテスに攻撃を仕掛けに行ったのである。

「ぐおおお!!」

「襲爪千裂破!!」

「峻円華斬!!」

「紅蓮剣!!」

「光破旋衝陣!!」

ネプテユヌは斬り上げて雷を落として、斬り下ろして雷を落とし、滅多刺しにする奥義「襲爪千裂破」を叩き込んで、ノワールは、数回斬りつけて、その反動で戻ってきた刀をキャッチして、逆回転させて、斬りつける奥義「峻円華斬」を繰り出して、龍姫は斬り上げて、上空から炎の斬撃を放つ奥義「紅蓮剣」をお見舞いして、星龍は斬りつけて、魔方阵で攻撃する奥義「光破旋衝陣」を叩き込んだのだ。

「行くわよ!! ノワール!!」

「行くよ!! 星龍!!」

龍姫&星龍&ネプテユヌ&ノワール「はああああ!! 決めるよ(わよ)!! 見せてあげよう(あげましょう)!! 貫け!! 武神!! 双天波!!」

「グオオオオ!!」

本来は二人で繰り出すのだが、今回は二組で、守護方阵を繰り出して、斬り抜けて、飛びあがり、同時に斬撃を放つ黒衣の断罪者と正義の帝国騎士団隊長の合体秘奥義「武神双天波」を叩き込んで、見事ユミニテスを倒したのだった。

「信念燃え果てるまで!!」

「この正義、貫き通す!!」

龍姫&星龍&ネプテユヌ&ノワールは息ピッタリで決め台詞を

決めたのだった。

こっちでも

紫龍迅雷女神化した龍姫と、黒龍魔王女神化した星龍コンビと龍姫の手助けで、女神の力を更に覚醒して、マジエコンヌがイストワールの力を使って創造した魔王ユミニテスを、見事、合体秘奥義で倒したのであった。

「喰らいなさい!! そんな、龍姫がくれた刀が、砕けた!!」

「無駄だ」

「これならどうだ？」

「何、英雄が使っていた武器か、多勢に無勢か、覚えてろよ!!」

「待ちなさい!!」

今のマジエコンヌには英雄の武器しか通じなかつたので、龍姫があげた予備の二振りの刀が木端微塵に砕け散ってしまい、修復不能にされてしまったのだった。

ブランが改造した英雄の武器でマジエコンヌを脅したら、マジエコンヌは不利だと思って、一目散に逃げて行ってしまったのである。

「龍姫、ごめん、刀、折れちゃった」

「仕方ないよ、ボクも、魔力が使えるなら、普通の刀でも通じると思ってたからね」

ネプテューヌはもらったばかりの二刀の刀が砕けてしまったことを謝罪したら、龍姫は気にしてないと言ってネプテューヌを励ましたのである。

ネプテューヌ達が女神化を解除しようとしたら、

「ピキッ!!」

「キャアあ!!」

「ネプ子の裏切り者。(。D。)ノへ!!」

どうやら、二人そろって装備していた胴丸が木端微塵に砕けてしまったのである。

幸い、インナーウェアをお互い下に着こんでいたので、事なきを得たが、真ん丸に大きくなつた胸の形が浮かび上がってしまい、そのまま反射的に二人で抱き合ってしまったのであった。

それを見たプラネテューヌの住民は

「これでラストイションが陥落したのも同然だな!!」

「式はいつお挙げになされるのですか？ ぜび、ウエディングドレスをぎゅ用意させていただきます!!」

と好き勝手言っていたのであった。

流星に此処のままではまずいので、

「逃げるよ!!」

「後で、おまえらのデカ乳を・・・」

「コンパのアパートに行きましよう!!」

一目散にコンパのアパートに逃げ込むことにしたのである。

なんとかコンパのアパートに到着した龍姫達は女神化を解いたのだが、

「ねぶねぶとノワールさんが大きくなってますう。(。D。)ノ!!」

「これじゃ、外に出れないよ!!」

「星龍、この責任は取ってくれるわよね (*ゝゝ*) 怒!!」

「もちろん、お願い!!」

「マスター!! リライズを始めます!!」

案の定、魔力の副作用で体が成長してベールに引けを取らないほどのスタイルになってしまったネプテューヌとノワールの姿がそこにあり、元々着ていた衣服のサイズでは収まり切らなかったため、二人ともちんちくりんな格好だったのである。

ノワールは笑顔でキレていたので龍姫と星龍がインテリジェントデバイスで二人の服をリライズしたのは言うまでもなかった。

聖牙刀（笑）

龍姫達はマジエコンヌが作り出した魔王ユミニテスを倒したのも束の間、ネプテューヌとノワールの装備していた軽鎧（レザーガード）が戦闘に耐えきれず木端微塵に砕けて黒のインナーウェアを着ていたのだが、ベール以上に成長した胸の形が模られてプラネテューヌの民衆の前で二人が突発的に抱き合ってしまった、二人の胸が合わさったので、龍姫達は取りあえずコンパのアパートに逃げ込んだのだが、ネプテューヌとノワールが龍姫と星龍の魔力の影響で肉体が成長してしまい、着ていた服が入らなくなってしまったので、インテリジェントデバイスのリライズ機能で、ネプテューヌはお気に入りへのパークワンプの大人サイズにリライズし、サラシ型の下着をプレゼントし、ノワールは龍菜が着ている「黒衣の断罪者」の服にリライズして、下に着る、黒のインナーとサラシ型の下着をプレゼントしたのであった。

「今日は、こいつらのデカ乳の・・・」

「物騒なこと言わない!!」

「胸は形ですわよ!!」

「ネプ子の裏切り者!!」

「みなさん、いい加減にしてください!!」

ネプテューヌとノワールが成長したことでブランを筆頭に暴動が起きかけていたので、龍音が叱咤して収まったのであった。

ちょうど昼食の時間だったので、昼食を頂くことにしたのだが、唐揚げにレモンを駆けるか戦争が勃発したので、

「少し、頭冷やそうか・・・」

「星龍、そこらへんにしてあげたら」

「星龍さん、怖いです」

「まったく、美味しいだったらそれでいいじゃない」

「あれ、ノワール、キャラ違わない?」

「小さいことをいつまでも気にしてたら、キリがないの」

星龍が無表情で迫って無事に丸く収まったのだが、ノワールの性格

に鍛え直すのであった。

名は江雪左文字

英雄の武器だった剣が刀に生まれ変わってアイエフのぶっ飛んだネーミングセンスで「聖牙刀」と言う名に決まったのだがそれを聞いていた龍姫達はその場で抱腹絶倒して、アイエフをキレさして、聖牙刀で、龍姫の愛刀の神代三剣「天羽々斬」を斬りつけたら、聖牙刀の方が真っ二つに折れてしまったが、天羽々斬は傷一つなかったのであった。

どうやら、龍姫曰く、ちゃんとした日本刀の製法で作られていなかったなので、今、龍姫と星龍が鍛え直しているのであった。

閑話休題

「完成したね!!」

「反りよし!! 刃こぼれなし!!」

「おお!! スゴイ、あなた様は確か」

「通りすがりの女神です」

龍姫と星龍が打ったこともあつてそんなにも時間が掛からないで折れた聖牙刀は龍姫達の愛刀と同じ拵えになっていた。

聖牙刀を打った教会職員は龍姫と星龍の刀鍛冶の腕前を見て腰を抜かしており、龍姫と星龍は通りすがりの女神だと言って、打ちなおした刀を持つて鍛冶場を後にしたのである。

「龍姫ちゃん達が戻ってきたですう!!」

「はい、ちゃんと日本刀に打ち直しといたよ」

「ありがとう、龍姫、星龍、ねえ、龍姫が名前を付けてよ!!」

「いいよ、江雪左文字こうせつざもんじってどうかな?」

「やっぱり龍姫が付けてくれた方がいいね、けど、わたしって二刀流だよね?」

ネプテューヌ達が待っているコンパのアパートに戻ってきた龍姫と星龍は打ち直した、二尺三寸の青紫色の柄巻に金色の木瓜型の鏢くわに、龍姫が打ったことを証明する龍の刀身彫刻を施された刀身と、龍が描かれた藍色の鞆たもとの拵かまえに作り替えた日本刀をネプテューヌに渡し、ネプテューヌに名前を付けて欲しいと言われたので、龍姫は徐に

徳川家の愛刀の一振りのうちの一つ、「江雪左文字」と命名したのであった。

だが今のネプテューンは二刀流で戦うので後一振りが必要になるので

「だったら、これあげるよ、名前は「鬼神丸国重」って勝手に付けちゃったんだけど」

「お姉ちゃん、斎藤一の愛刀の名前だよね」

「ありがとう、龍姫!!」

「どうせ、龍姫達の方がネーミングセンスは良いもんね・・・」

龍姫はアイテムパックから二尺三寸の藍色の拵えの日本刀をネプテューヌにプレゼントしてあげたのであった。

「ノワール、あなたもこれあげる」

「いいの？　ありがとう」

「龍菜さんとお揃いですね」

「ニバンボシって言うの名前よ」

龍菜もノワールに自分とお揃いのニバンボシをアイテムパックから予備を取り出してあげたのである。

これでマジエコノヌとの最後の一戦を控えるだけになったのであった。

天空のマジエコンヌ

コンパのアパートで聖牙刀改め、江雪左文字と、鬼神丸国重を手に入れたネプテューヌと、龍菜から「黒衣の断罪者」の愛刀でもある二本バンボシと左手に装備するオープンフィンガーグローブ型の手甲（レザーアームズ）を貰い、早速装備していたら、外から

「わはははは!!」

と時代遅れの笑い声が聞こえてきたので、早速、外に出て見たのだが、誰もいなかったのだが、いきなり地響きが起こったのである。

「まさか、大陸をぶつける気じゃ!!」

「マスター!! 大変です!! 教会の転送装置は全部機能停止されました!! ですから英雄が使った場所を使ってください!! それと今の英雄の武器の形では道が開けないので、マスター達が持っている、二丁拳銃と弓と槍が必要です!!」

「ありがとう、行こう!!」

「龍姫!! ちょっと待って!!」

「どこ行くんですか!!」

「ついでに行けばいいだろうな、龍の女神達のボスに」

インテリジエントデバイス「イルミナル」がマジエコンヌが四ヶ国の転送装置を機能停止させたことを教えてくれて、過去に英雄が使ったとされる場所に行くように指示を出してきたのだが、マジエコンヌがいる場所には、英雄の武器が必要なのだが、どれも原型を留めていなかったなので、龍姫達がもらった武器で、二丁拳銃と弓と槍があったので龍姫はその場所に向かった。後メンバーも龍姫に憑いて行くことにしたのであった。

「此処は英雄が天界に行くために使った場所です」

「さてと、ボクには銃はいらなから、此処でさよならだね」

「弓も必要なんだよね、これでいいかな?」

「槍もですわね」

「剣は、ノワールのを使えば」

「入った」

そこは古い遺跡で四方の壁には英雄の武器の窪みがあったのだが今の原型では入らなかつたので龍姫は二丁拳銃を、星龍は弓を、ベールは槍を、ノワールが剣を嵌めたのである。

すると天に向かって虹の橋が掛かつたので、龍姫達は急いでマジエコンヌがいる場所に向かつたのであった。

道中、龍姫達が前衛を買って出て、魔物を倒しながら道なりに進んでいったら、

「よく来たな、っておまえらは誰だ!!」

「ネプテユーンと」

「黒衣の断罪者のノワール」

「凛々の明星だ!! (後で名前変えないと)」

案の定マジエコンヌが待ち構えていたのだが、肉体的に成長したネプテユーンとノワールを見て、腰を抜かしていたのであった。

イストワールが力を捨てろと説得しても意味がなく、マジエコンヌは禍々しい翼竜の姿になったのであった。

「恐れをなしたかあああ!!」

龍菜&ノワール「世のためだろうがなんだろうが、誰かを泣かせてたら世話ないね。あなたを倒す理由はこれで十分よ!!」

「なんか、ノワールがキャラが変わりすぎて、やりづらいですわ(〃。

ω。ノ」

「ふあはかか!!」

「龍菜お姉ちゃんも変わったのね」

「行くよみんな!!」

マジエコンヌは高笑いをしていたのだが、龍菜とノワールがニバンボシを抜刀しながら啖呵を切っていたら、あまりにも性格が変わってしまったノワールについていけないようでベールが石化してしまつたのだがほつたらかして一斉に女神化してこの次元とのマジエコンヌとの因縁に終止符を討つ戦いの火蓋が切つて落とされたのであった。

これから

この次元のマジエコンヌは禍々しい翼竜に姿を変えて龍姫達に戦いを挑んできたのである。

龍姫達は女神化し、迎え撃つことにしたのであった。

「覚悟はできたか・・・デモンズランス・ゼロ!!」

「我に仇名す敵を討て!! デイバインセイバー!!」

「飛燕瞬連斬!!」

「グっ!!」

「おい、わたし達、憑いていけないぞ」

龍音は魔術で闇の槍を作り出して飛びあがりマジエコンヌ向かって投げつけて十二発の追尾弾のおまけつきの上級魔術を放ち、光龍が魔術で雷の束で攻撃して、霸王女神になっている姫龍紗が一瞬でマジエコンヌの背後に回り込み蹴りを入れながら斬り上げる奥義を叩き込んでいたら、ブランとベールがついてこれてなかったのだった。

そして、マジエコンヌが蹲ったので安心したのも束の間、

「ネプテューヌ早く逃げないと」

「ごめん、龍姫、いや、お姉ちゃん、わたしのわがままを言うわ、お姉ちゃん達は逃げて」

「行くよ」

「ありがとう、お姉ちゃん」

なんとマジエコンヌが暴走してしまい今いる場所が危険な状態に陥ってしまい、避難することにしたのだが、ネプテューヌはたった一人残り、龍姫に向かって一言、「お姉ちゃん」と言っただけで龍姫達はほかのメンバー共に避難することになり、下界に戻ったのであった。

そして、龍姫達は元の次元のゲームギョウ界に戻るようになったのであった。

それから一週間が経った。

「ネプテューヌ、帰って来てね」

「大丈夫、だって龍姫の妹なのよ」

「そうだね、きてと、今日の依頼片付けないと!!」

龍姫達は元の次元のゲームギョウ界で寄せられていた依頼を片付けていたのであった。

龍姫は絶対にネプテューヌは生きて帰って来ることを信じて、今日も龍神として、また女神の姉として、友として超神次元のゲームギョウ界で生きることを選んだのであった。

自分がこの次元のゲームギョウ界のプラネテューヌに転生して、数か月、女神の共に成り、そして女神の姉となり、家族になった龍姫達にはもう何も怖くない。

「この世に悪があるならば、それは人の心」

「なに、その言葉、そうだよね、結局は心が悪にも、善にもあるもんね」

「わたし、お姉ちゃん達に会えて、それを教えてもらった」

「だから、未来は創り出すもんだよ、そして選んだ道を信じて創り出すもんだね」

「うん」

そうこの世に悪があるならばそれは人の心、そして未来は創り出すもので、選んだ道を信じて作り出すものでもあるのだから。

龍姫達のことはいこう言う、女神の依代纏い、弱きものを助けるべく龍の牙を持った侍、龍神であると